





伊藤忠遊全集

第五卷

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月十日發行

伊藤痴遊全集 第五卷

著者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎
東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川
東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社

平

凡

社

電話九段 三三一
六四六
四七六
七五四
番番番

(第八回配本)

本製堂慶昇

行印社會式株刷印同共

第五卷 乃木希典 目次

國	詰(一—五)	三
横	枕(一—六)	一七
玉	木文之進(一—七)	三
長	州征伐(一—八)	五
乃	木初陣(一—八)	七
參	謀乃木(一—七)	九
前	原の亂(一—七)	一七
涙	の別れ(一—二二)	三五
西	南戦争(一—五)	一七一
警	隊 旗(一—七)	一八四

城内の一夜(一一四).....	二〇五
軍旗の後日(一一一八).....	二二七
結婚の前(一一八).....	二六八
結婚の後(一一九).....	二九一
桂と反目(一一一四).....	三一九
日清戦争(一一九).....	三六一
日清戦後(一一一四).....	三八二
馬蹄銀事件(一一五).....	四一五
日露開戦(一一七).....	四二八
旅順攻圍軍(一一一六).....	四四五
明治天皇の崩御と乃木の死(一一一一).....	四八二
餘録.....	五一

乃木希典

國

詰

一

嘉永三年十一月十一日、麻布日ヶ窪の毛利邸内に於て、希典は呱呱の聲を擧げた。父が、長府毛利の素籍に屬して居たので、長州人として扱つて居るが、實は純粹の江戸ツ子である。

毛利家が、大江廣元から出て居る、といふ事は、餘りに廣く知られて居る事で、今更に承嗣しらべの必要もなからうが、毛利の家名は、元就の代になつて、その大をなした。

大内義隆が、陶晴賢に滅ぼされ、晴賢は、更に元就に討たれた。それから元就の武名は、漸く人に知られるやうになつて、尼子の一族を倒してからは、山陰山陽の兩道に跨り、大に威を揮ふやうになつた。元就が、全盛の時は、九ヶ國の領主で、二百萬石以上の收糧がある、といはれた位である。

勤王の志が厚かつた爲めか、それとも何等かの理由があつてか、その邊の事情は能く判らないが、兎に角、當時の朝廷へは、金穀の類を、しきりに献納して、京都へも、屢々使を送つて居る。之れが爲めに、毛利は、勤王大名として取扱はれ、中國探題といふ重い役にもなれば、菊桐の紋章を、拜用する事をさへ、許されるほどの、光榮に浴した。

元就が、死に臨んで、三人の子供を、枕頭へ呼付け、三本の矢を示して、訓戒を與へた事も、今では小學校の教科

書にまで掲げられてあるから、叙述は省略するが、その子供といふのは、隆元、隆景、元春の三人であつた。

隆元の子が輝元で、隆景は、小早川の姓を冒し、元春は、今の吉川家の祖先である。小早川は、養子の秀秋が潰し、吉川は、周防の岩國に残る。その外に、末家といふのがあつて、長府、徳山、清末の三家が、即ち其れである。

賣家と唐様に書く三代目、といふ名目がある。二代目までは、何うか斯うか續くが、三代目には、大概潰れるものだ。中には十數代續いて、今に榮えて居る名家もあるが、大概は左様つゞくものでない。少し奮發心のある奴は、二代目位で、爺が生きて居るうちから、潰しにかゝるものもある。

三代目の輝元は、決して愚人ではなかつたが、覇氣に充ちた我儘者で、伯父のいふことや、老臣の諫めを、聞く質の人でなく、殊には祖父の元就が、大きい領地を残してくれたのを、その儘相續したので、眞の苦勞を知らぬ坊ちやんの所もあつて、巧く石田三成に引出され、關ヶ原の役に出たが、三成は、脆くも打敗られて、豊臣の天下は、終に徳川の手に移つた。

於此、毛利家を、如何に處分す可きかの問題が起り、大部に黒い雲は懸つたけれど、元就は、家康と親交もあり、旁外への聞えも考へて、その孫の輝元を、三文の價値もなく、叩き潰せば、島津家も、其儘にして置けぬ、といふ事情も絡んで、終に滅地處分で、助ける事にした。

毛利の方では、家名斷絶を免れたので、家康への遠慮として、甲州の毛利秀元を、養子に迎へて、輝元は隠居したが、秀元は、更に輝元の子を養ふて、家を襲がせる事にして、毛利一族の間も、圓滿な運びがづいた譯で、秀元の家は長府に六萬石として、残る事になつた。

幕府から見る時は、一般の諸侯と違つて、その取扱ひには、格段の相異はあつても、毛利家の爲めには、最も大切な家柄であつた。

元祿年間の快學として、今も猶ほ人口に膾炙する、赤穂義士の復讐、本懐を遂げた四十餘人は、別れ／＼に諸家へ

預けられた。そのうちの武林唯七外數名は、毛利家へ預けとなつて、日ヶ窪の藩邸に居た。

いよく切腹する迄、數十日の間、朝に夕に、武林等に接近して居たものが、義烈の精神に感じ、また其風格から受けた感化は、藩中の士女に及んで、百年の後までも、唯一の教へ草となつた。

希典の父、十郎希次といふ人は、頗る物堅い侍で、文武二道の嗜みも深く、剛健な氣性は、平生の態度から、言語の上にも現はれて、苟も己れの心に充たねば、老臣や重役の申付けても、容易に従はず、たとへ藩命と雖も、異見のある時は、ドシ／＼論判する、といった風の人であつたから、その剛骨を賞るものと、上下の分を亂る不臣として、之を斥けるものとあつて、何時も物議の的になつたのである。

けれども、十郎の潔白は、誰も認むる所で、その剛骨も、敢て銜ふ風のない剛骨であるから、眞に心から憎むものはなく、只何となく邪魔者として、扱ふ丈けの事であつた。

一

十郎の妻は、名を壽子と謂ふて、長谷川姓であつた。生れは常陸の土浦で、父は、土屋相模守の家來であつた。乃木家へ來てから、しばらくの間、子供が無かつたので、十郎は、子供を得られぬものとして、すつかり斷念めて居た所へ、意外にも壽子は妊娠して、男の子を生んだ。十郎は、喜びの餘り、その子に無人といふ名をつけて、之を愛する事は、一と通りでなかつた。

子供をつくる事ばかりは、人の力のみでは至難しい、神の力も加はらねば、勝手につくる事は出來ぬ。男の子が欲しいと思つても、その通りにはならず、却つて女の子が生れる事もある。もう之丈あれば充分であるから、跡は要らない、といふても、出来る時は、ドシ／＼出来る。たつた一人でも可いから、是非欲しいと心懸けても、一生子を有たずに終る人もある。

もう出来ぬものと、斷念めて居た所へ生れたから、名づけて無人といふことにした。然るに、それから後は、續々生れて、眞人、集作の二兒を得、別に女の子も、二人まで生れた。乃木家の子實は、之れて澤山な譯だ。

十郎が、無人を愛する事は、可成り深いものではあつたが、一般の家庭に在つて、子供を可愛がるのとは、大分に違つて居た。赤穂義士の血に依つて、武士道の精華を偲ぶ藩士、殊に十郎の如き、剛直の侍は、一段の感化を受けて、之に劣らぬ義士になりすまして居た。子供の愛についても、單に可愛がるといふのでなく、その愛は、教訓を基礎としての愛であつた。三四歳になつて、少し物事の判るやうになつてからは、毎朝はやく起きて、

『さア、無人、泉岳寺へ行かうぞ』

と、いふては、無人を伴れ出し、往復ともに歩かせて、泉岳寺詣では、一日として怠らず、四十七士の墓の前にゆく

と、
『これが、大石内藏之助殿といふて、四十七義士の頭目ぢや、此處に列んで在る石碑は、みな義士の方々ぢや、よく拜んで置いて、汝へも、斯ういふ忠義の侍になるのぢや、可いか』

『ハイ』

『義士の方々が、殿様の御爲めに、忠義を勵んだ事は、また今晚もお話しをして使はすから、決して忘れてはならぬぞ』

『ハイ』

墓参りがすむと、藩邸へ歸つて来て、自分は、一日の勤めを終つて、晩食のすむや否、すぐ無人を呼んで、これから義士の苦心談に、夜を更かすが例であつた。

藩から受ける、食祿の少い爲めに、その生活も貧しくはあつたが、武具の備へは、二百石以上の侍も及ばぬほどに立派な物であつた。

その頃の侍は、多く武に偏して、文字の心懸けには薄かつたが、十郎は、文武ともに秀でて居た。殊に、槍術と馬術は、藩中に肩を列べるものも少く、誰も皆、十郎の腕前には、感服して居た。讀書の力も、藩の儒者でさへ、十郎丈は別者扱ひにして居たほどで、貧乏侍が何時の間に、あれほどの修業を積んだか、といふことは、いつも話題に上る位であつた。

一日、十郎は、勤めから退つて來ると、

「壽ツ、ちよつと參れ」

「ハイ」

夫の聲の平生にくらべて、一層はげしい調子であつたから、妻は、恐るゝ、十郎の前へ出た。

「國語の御沙汰があつた」

「えッ、御國語で御座いますか」

「うむ」

「そ、そ、それは何ういふ理由から……」

「藩の御都合や」

「餘りに急の御沙汰で驚き入りましたが、御出立は、何日頃に相成りませうか」

「早速との事であるから、まあ急いで支度にかゝらねばなるまい」

「斯ういふ事は前以て、何とか御内沙汰のあるやうに聞いて居りましたが、不意の御沙汰では困ります」

「困つても、困らんでも、御沙汰の出た上は、引上げる外はないのぢや」

「日延をお願ひ遊ばしては、如何で御座いませう」

「馬鹿なッ、假し日延をいたしても、行く可きものは行かねばならぬ、どうせ行くものならば、早い方がよからう」

人一倍の剛情、斯うと極めたら、楯杆でも動かぬ、といふ氣質は、平生から能く知つて居るので、此上何といふた所が、日延の願ひなぞをする人でない。妻も斷念らめて、これから移轉の支度にかゝつた。

二一

轉居の爲めに、どれほどの冗費が要かるか、といふ事は現に轉居を行ふたものでなければ、鳥渡解らない。昔の人の諺にも『轉居は半燒に同じ』とある。況して、遠隔の地へ轉居するとすれば、それ丈けに多く冗費も要かり、家財の處分もしなければならず、無價同様に賣拂つた道具は、移轉先きて、復た買入れる事になるから、その損失のみでも少くない。

現代の役人が、他の地方へ、轉任を命ぜられた場合には、相當の旅費と手當を支給されるが、それでも割に合はぬ位である。

昔の貧乏侍が、江戸から國語になつたり、國から江戸へ送られたりするのには、自分の體一つなら格別、家族を擧げての事になると、それは一と通りの苦勞でなく、どんな人でも、頬の瘦が見えるほどであつた。武家政治の昔、石未滿の侍が、家族を擧げての轉居命令は、一種の懲戒と見てよからう。

但し、重役の氣に叶ひ、出世の爲めの轉居なれば、旅費の上にも手心が加へられ、萬事に都合であるが、少しでも憎まれて、三百里も離れて居る所へ、轉居を命ぜられたら、それこそ一大事で、大概なものは其命令をうけたのみで、落膽する位であつた。

十郎の國語は、重役の取計らひで、殿様の意中から出たのではない事は、固より明かであるが、一説には、殿様へ強い諫言をして、その意に拵ふた爲めとあるが、恐らく其れは誤りであらう。といふものは、十郎の身分が、殿様と接近するには、餘りに低すぎる。重役との感情が良くなかつた、といふのが、當然であるやうに思はれる。

何しろ、三百里も離れて居る、長府へ行くのであるから、手廻りの荷物も、可成く少くして、身軽で行くやうにしたが、此時は、既う子供が三人もあつて、長男の無人は、漸く十二歳といふのであるから、次男の眞人は、頑是ない幼児で、外に乳離れのせぬ子供もある。兎に角、道中筋の難儀は、江戸を出る時からの覺悟であつた。

日本橋を振出しにして、東海道五十三驛、品川宿が、その關門になつて居る。荷物は、馬の背を借りて、その後から妻子と共に、五人の旅、どう強く育てたにもしろ、未だ十歳内外の子供を連れて、徒歩で通さうとするのでは、些と無理かも知れない。

丁度、鈴ヶ森の邊まで来ると、道の右側に、蓆賣張りの茶店があつたから、十郎は、それへはひり、腰掛けを指して、

『さア、少し休んで行く事にいたさう』

痛い足を引ずるやうにして、父の後からついて来た、子供二人は、さも嬉しうにして、それへ腰を下した。那の邊も、今は昔の面影なく、追々に人家も建込んで来たが、昔は海に沿ふた、一條の街道で、東は一面に、見送しの品川灣、海を隔て、安房上總の山々を眺め、その風景は、江戸ツ子の自慢であつた。

腰の曲つた婆アさんが、汲んで出した濫茶を、駈り乍ら、

『どうぢや、まことに良い景色ではないか』

『ほんに、江戸の邸住居ばかりで、斯ういふ所は、少しも存じませんでしたから、一段と好い心地で御座います』

『國元の長府は、之れと變つて一層よい所ぢやよ』

『家中の御方から伺ひましたが、瀬戸内の眺めは、またと二つあるまいなぞ仰しやつて、よく御自慢をなさいました』

『江戸の賑はひに引かへて、長府は寂しい所ぢやが、心の落付は、さういふ所が、却つてよいものぢや』

是れから十郎は、種々と長府の狀況を話して、國自慢をはじめ。夫婦の話が、興に入つて来るほど、子供には面

白くない。それに疲れも出たものか、痛い足をさすりながら、兄弟は居眠りをはじめた。旅をするには極く都合のよい、春の初めであるから、日當りの強い、掛茶屋に居ると、誰れにしても眠りは催して来る。

「オヤ、眞人は眠つてしまひました」

「成程、併し無人は、未だ起きて居るな」

十郎に頭を撫でられて、無人は眼を開いた。

「お父さま、お國は未だ遠う御座いますか」

「未だく、江戸を離れて半日餘りぢや、これからが遠いのぢや」

二人連れの雲助が、その前からはひつて来て、一行の様子を見て居たが、

「へツへ、ゝゝ、旦那ツ」

不意に聲をかけられて、十郎は振返つた。

「何ぢや」

「籠は如何で御座えやす」

「要らぬ」

雲助の眼が、ピカリと光つた。

四

東海道の名物になつて、往來の旅人を苦めて居た雲助、駕籠擔ぎ人足ではあるが、今の朦朧車夫と同じ型で、對手が弱いと見たら、すぐに附込んで、強請にかゝるのが例であつた。

手足纏ひの妻子を、連れて居たら、たとへ侍であつても構はない。何とか苦情をつけて、いくらかにしようとす

るのだ。駕籠に載つて貰はず、いくらかになれば、この方が結局よい、と考へて、取つてかゝられたら、しやうのないものだ。對手が悪いので、大概なものは其要求を容れて、いくらか出す事になる。

箱根山を始め、關所のある山を越えるには、多少の面倒があるから、其處へ附け込む奴もあり、たとへ關所はなくとも、鈴ヶ森といふやうな、因縁つきの場所には、必ず澤山の雲取が居て、旅人を苦しめるのであつた。

斯ういふ連中は、いつも捨身でかゝつて来るから、始末の悪いもので、下から出ても、上から押へてかゝつても、どちらにしてからが、いくらかになる迄は、附き纏ふて、根氣よく強請るので、女や子供連れのは、いくらか與る氣にもなるのだ。

十郎の氣性としては、たとへ其れが、何れほど五月蠅あらうと、筋の違つた金は、腕にかけても出さぬに極まつて居るが、雲助の方では、そんな手剛い人とも思はず、足弱の連れがあるのに、附け込んで、

『旦那、そんな事をいはねえて、どうか乗つておくんせえな』

『駕籠は要らぬ』

『さうでも御座えやせうが、是非乗つて貰ひてえのだ』

『何と申す』

『乗つてくれていふんだ』

『要らぬ、と申して居るのが判らぬか』

『そりやア判つて居るから、それで頼んでるんだ』

少し語が荒くなつて、厭な眼付をしては、チロリ／＼と、壽子や子供を睨む。十郎は、少し焦々して来て、

『五月蠅い』

『何だと、何が五月蠅んだ、駕籠に乗つてくれつていふのが、何で五月蠅のか、こつちは商賣だから頼むんだ、否な』

ら呑で、否といへばすむんだ、馬鹿にするねえ」

思はず床几を離れた十郎は、左の手を、大刀の線方へかけて、

『うぬツ、無禮者が、今一度申して見よ』

事馴れて居る雲助は、はやくも飛退いて、

『な、な、何だ、オヤ手前は抜くつもりだな、さア抜くなら抜いて見ろ』

と、腕を突ツ張り、口先は強いが、對手の身構へに存外しつかりした所があるので、可成く身を退いて、空威張をし

て居る丈の事で、進んで来る様子はなかつた。それを見ると、連れの雲助が、慌て、中間へはひつた。

『やい、何を間拔けな事をしやアがるのだ。旦那のやうな御武家様に、下手な事をして見ろ、それこそ笠臺は飛

んでしまはア、向不見も大概にしろ』

斯ういふ風に、威張つて居る雲助を叱りながら、十郎の方へ向つては、薄氣味の悪いほど、腰を低くして、

『へい、旦那、まことに相すみません。此奴ア生命知らずで、どんな御方にも向つてゆくので、本當に困ツちまひま

すんで、いつも私のやうに割の悪い、詫り役が飛び出さなけりやア、どうしても納まりがつかねえンですが、どう

か勘辨してやつておくんなせえ』

今まで、苦り切つて居た十郎は、軽く首肯しながら、

『此方で、事を好む次第でない。餘りの無禮に、拙者も、腹立たしく思ふたまでの事ぢや。其方の取做がなくなれば、飛

んだ事になつたであらう』

『へツへ、、、恐れ入りやした。旦那は、苦勞人て御座えやすから、それ見ねえ、此通りやさしく居らつしやる。

ヤイ、お詫をしねえか』

と、いはれて、前の雲助は、

『何とも相すみやせん。どうか、御勘辨なすつて下せえ』

『好しく、お前等の方さへ、それでよければ、此方は申分はない』

靜かに腰を下さうとした、十郎の隙を見て、詫にはひつた雲助が、不意に床几を倒しながら、十郎へ打つてかゝつた。油断のない十郎は、はやくも身を開いて『えいッ』と聲をかけるや、拔打に其奴の肩先へ斬りつけた。

『ヤッ、斬つたな』

と、叫びながら肩を押へて逃げ出した。

『ハッハ、、、弱い奴ぢや』

斬つた筈の刀には、血が附いて居ない。

五

今の騒ぎに、眞人は眼をさまして、母の壽子に、しつかり抱ついて居る。無人の方は、母の背後に立つておツと見つめて居た。

『あなた。あまり御手荒な事をなさいましたら、あとが面倒で御座りませう』

『心配するには及ばぬ。彼等は、常に旅人を脅迫ては、金子を強請る不届の奴ぢや。時には斯うして懲すも可からう、わたくしは、お斬り遊ばしたかと思つて、ハツといたしました』

『馬鹿なツ、犬を斬る刀は持つて居らぬ』

十郎は、刀を拭ふて、鞆におさめた。拔打に斬りつけた時、小手の働きて、背を返して打つたのである。

『どうせ、無人も草臥れて居るやうで御座いますから、駕籠へ載せてやり度う御座いました』

『そりやならぬ』

『不可ませぬか』

『何の爲めに足がある。歩くに用をなさぬ足なら、切捨てゝしまへ』

『でも、これから先が長い旅になりますから、少しは樂もさせてやり度う存じます』

『これから先が長いから、猶更歩かせるやうにせねばならぬ、いはゞ足馴らしぢや』

『さうで御座いますね』

『それに、今のやうな駕籠もあるから、イツそ乗らぬ方がよい』

無人は、此話を聞いて、何となく淋しさうにして居る。

『お前は、今を見て恐ろしかつたか』

『いゝえ』

『恐ろしくないとか』

『ハイ』

『偉いな』

『駕籠屋は逃げてゆきました』

『それは弱いからぢや』

『弱いものは逃げますか』

『強ければ向つて来る』

『斬られませう』

『斬られても向つて来る、それは強い人の事ぢや』

『今のは悪い人ですか』

『人に無理をいふものは、皆な悪者ぢやよ』

『お父様に叱られたのですね』

『さうぢや』

子供を對手の話は際限がないから、十郎は立ち上つた。

『さア、參らうか』

『それが宜しう御座います』

『今夜は、神奈川泊りのつもりであつたが、存外に時刻が移つたやうぢや。些と早いやうではあるが、川崎泊りに

たさうか』

『それなれば、子供も喜びませう』

茶店へは、相當の茶代を置いて、これから鈴ヶ森を離れて、大森から蒲田へかゝつた。時候はおくれたが、評判の梅園にも立寄り、六郷の渡舟を上げれば、もう川崎の宿である。

萬年屋は、古い家で、その名の示す通り、龜と蹄を同じうする。小唄にも『鶴と龜との萬年屋』とあり、それよりは新しい家ながら、向ひ合せの會津屋も、漸く賣出して、評判の家であつた。毎月廿一日の大師詣には、江戸ツ子の足が、必つと此二軒に向く。ノツペー汁が呼物であつた。さうした名物の家は、街道筋に多くあつたけれど、交通機關の整ふに従ひ、旅人を専門に扱ふた町は、ひどく寂れて、名物の家も、追々に跡を留めず、消えてゆくやうだ。宿屋へはひつても、陽は未だ高いから、十郎は妻子をつれて、大師へ參詣に出かけた。子供は、疲れを忘れて、喜び遊ぶ。平生は嚴格な十郎も、斯ういふ時には、極めてやさしい。はやく寢て、はやく出發のが、旅馴れた人のする事で、疲れも少く、気分もよいものだ。五十三驛といへば、可成り長い。道程にして百五十里はある。別に障りもなく、京都へ着いた。

三條大橋の伏見屋へ泊り、河原町の藩邸へも、一寸顔を出して、それから宮城の拜觀に出かけた。遠く離れて拜する宮城でも、此裡に主上のまします事を思へば、何となく有難くもなる。

『どうぢや、無人、一天萬乗の陛下のまします宮城、有難い事ぢや』

これから十郎は、しばらく立留まつて、皇室の尊嚴について語るのを、壽子は、首を垂れて、謹み聞く。無人は、仰いで宮城を拜す。諄々として皇統の謂はれを説いて居る、十郎の眞面目さは、普通の侍に、見る事の出来ぬ態である。

斯くて、猶ほ十數日を重ね、漸くして長府へ、着く事を得た。

横 枕

江戸から長府まで、二百五十里の旅路は、並大抵の事ではなかつた。殊に、足弱の妻子を連れて、交通機關の整つて居らぬ時代に、徒歩の旅行は、今の人が思ひ及ばぬ苦勞もあつて、『旅は曼いもの辛いもの』とさへ、いはれて、居る位だ。

大阪から先は、船の便があつて、大分樂にはなつたが、それでも現代の瀬戸通ひの汽船に比べたら、風や雨の惱みも一通りでなく、航海の日數も、相應に費かつたのであるから、足は疲れぬ代りに、心の勞れは、却つて甚かつたであらう。

長府の傍の外濱へ、船は着いて、乃木親子は、漸く上陸した。

『さ、那れに見ゆるのが、御城下ぢや』

と、遙に長府の方を指して、十郎は、砂の上に坐つた。十郎の爲めには、久し振りの歸省で、他の知らぬ樂しみはあつたらうが、壽子や無人には、初めての事で、夫や父の故郷と思へば、樂しくもあるが又た心配も伴ふ。

大概な物は、賣り拂つて、身輕になつては來たが、それでも多少の荷物是在る。それを砂の上に並べ、自分は、その側に坐つて、遙に城下の方へ向ひ、丁寧に頭を下げた。壽子も、無人も、それと同じやうに、慎んで頭を下げた。

『お前等は、此處で待つて居れ、私は、之から到着の御届をして、とに角、泊る所を定めて来る』

『お渡れも休めずに、恐れ入ります』

『御互の爲ちや、どうも致方がない』

十郎は、城下へ行く。跡には壽子が、子供の世話やら、荷物の締括りに、甲斐々々しく働いて居る。藩邸へ出頭した十郎は、それ／＼に届出の手續をすませた。江戸の方からは、すでに十郎の事は、申送つてあつたが、少しの好意も持たぬ、冷淡な通知であるから、十郎の爲めには、未だ何の事も極めてなかつた。従つて、すぐはひる可き家もなく、當分は、宿屋住ゐをする外はなかつた。

幸に江戸詰の時、懇意にした侍の二三が、いろ／＼と心配してくれたので、小串屋といふ宿へ、泊る事が出来るやうになつたから、先づ雨露の凌ぎはつくが、懷裡の都合を思ふと、人にはいはれぬ苦勞がある。

海岸の砂上に坐つて、遙に城下の方へ、禮をした事や、妻子を残して、先づ到着の届けに、藩邸へ出た事は、その頃の武士としては、何人も左様なればならぬ事であつたが、殊に、十郎は、さうした禮儀には、几帳面な人であつたから、小串屋へ、引上げる迄は、すべて作法通りに行つて、自分の都合なぞは、少しも構はなかつた。

元來が、重役に憎まれての國詰、江戸からの通知にも、碌な事はなかつた。従つて、宿屋住ひも、割合長引き、屋敷を買へるのは、何時の事か、少しも見當がつかぬ。それでも、十郎は黙つて、控へて居るばかり、更に催促がましい事は爲なかつた。

『あなた。未だ御沙汰は御座りませぬか』

壽子は、思ひに餘つて、斯ういひ出した。十郎は、苦い顔をして、

『そんな事は、決して口外するものではない』

『餘りに長くなりますので……』

『藩廳の御都合であらう』

『御催促は致して悪いものでせうか』

『善いか悪いか、それは何うでもよい。藩廳の方できまれば、すぐに沙汰はあらう。只謹んで待つて居れば、可いのぢや』

『それでも、餘り長くなりますと、いろ／＼差支も出來ますから……』

『此方の都合は左様であつても、藩廳の御都合は、未だきまらぬのぢやらう』

『困つた事になりました』

『どうも致し方がない』

如何に諦めのよい人でも、十郎ほどに堪忍し得るものはなからう。嚴格な性質は、持つて居るが、藩廳の仕向けに對しては、斯くの如く従順であつた。併し、それは自分の損得に關する、場合の事で、苟も軍役に、不正不徳の行爲があれば、寸毫も許さず、直言して争ふのが平生であつた。

約半月を、空しく宿屋に送つた。そのうちに藩廳から、呼び出しがあつたから、出頭して見ると、

『横枕へ、三百坪を下さる』

との事であつた。

地取は下げ渡されたが、屋敷は建てなかつた。貧乏人が、地取ばかり貰つて、實は自費で建てろ、といふのであるから、斯んな無理はないが、それでも十郎は、黙つて御請した。

一一

『まあ、あなた、何うなさいます』

『どうにかなるであらう』

『そんな呑気な事を仰しやつて、妾は心配でなりません』

『黙つて居れ、家さへ建てば可いのぢや』

『お見込みが御座りますか』

『別に見込と申してはないが、家の一軒位、出来ぬ事もあるまい』

『けれども、妾の手許には……』

『餘計な事はいふな、何も彼も、私が知つて居る』

叱りつけるやうにして、壽子の口を抑へた。その翌日から、何の用事か知らぬが、朝から出かけては、夜おそく歸つて来る。矢張り其事について、奔走して居るのであらう。

重役のする事が、あまりに冷酷な爲め、却つて藩士のうちには、十郎へ同情するものもあつて、彼是れと心配してくれるやうになつた。足輕の住んだ家、極酷いものではあるが、一軒空いて居たのを、殆ど無代同様にゆづりうけて、それを移して建てる事になつた。六疊に三疊の狭いものではあるが、とに角、今のうちには其れで堪へる、といふ事になつて、辛うじて横枕へ家を建て、家族は移したが、實に見る影もない、粗末なものであつた。

此陋屋のうちに、三人の子供と夫婦が、暮らして居るのだ。大概なものには堪へ得る事でないが、十郎は、少しも頓着なく、藩廳への勤めも怠らず、無人の教育にも、少しの油断なく、盡して居た。

乃木の家といへば、この頃の評判で、心なきものは嘲笑の的にして、十郎を輕蔑する事一通りでなかつた。昔も今も變らないのは、人が人を見るのに、その財産を目宛にして、貴賤の別を立てるが、此位の愚な事はない。財産の有無は、決して人間の賢愚に、關係のない事である。財産を有するものでも、随分愚な人があり、無産の人でも、偉い力を持つて居るものがある。親譲りの財産に、何の苦勞もなく、一足飛びの紳商があり、學問も智慧も、一代の師

表とす可きほど有りながら、却つて住宅難に苦んで居る人もある。たとへ住宅難に苦むほど、貧乏はして居ても、一代の師表に仰がれる人は偉い。どれほど財産があつても、親づりの苦勞知らずは、三文の價値もない奴だ。

重役や老臣が、先祖以來の君恩に依つて、衣食住に苦まず、天下泰平の世に、何の嗜みもなくして、滞りなく勤めるの出来るといふのは、階級政治のお蔭であつて、文武の二道に達し、侍の手本になるほどのものが、陋屋に苦んで居るのは、武門政治の悪い影と、見る可きである。

『乃木氏、お在宅かな』

と、いひながらはひつて來たのは、近頃になつて交際をはじめた一人で、十郎の餘り好いて居ない奴であつた。

『さ、どうぞ、これへお通り下さい』

ずつと通れば、すぐ裏口へ出てしまふ。狭い六疊の居間から、手を出すと、臺所の道具が取れる。その侍は、四邊を見廻しながら、

『あまりに酷いやうぢやが、少しはお手傳ひ申してもよい、御普請をなされては、如何で御座る』

『御厚志は有難く存するが、それには及びますまい』

『併し、人には分相應といふ事も御座れば、貴殿の御住家としては、酷すぎはしませんか』

對手は、懇意盡くからいふのであらうが、失禮な事を平氣でいふ。それを軽く受流して、さらに對手にしなかつた十郎は、やがて徐かに立上りて、刀掛けに在つた一腰を取つて、

『これを御覽下さい』

『お腰の物を、は、ア、拜見いたしませう』

何氣なく取つて見ると、實に立派なものだ。

『イヤ、これは有難い、久し振りで眼の正月、流石に立派な御嗜み、恐れ入りました』

十郎は、苦笑を漏しながら、
「序に、貴下のを拜見いたしたい」

「えツ、拙者の腰の物を……」

「左様、此方は御覽に入れました故、貴下も、御遠慮なく御見せ下さい」

「イヤ、拙者のは……」

「御遠慮なさるには及ばぬ」

「遠慮と申す次第では御座らぬが……」

「然らば、御見せ下さい」

「むーむ」

相手の侍は、頗る閉口の體であつた。

一一一

「治に居て亂を忘れず」とは、侍の心得可き、第一の要件である。天下泰平の時にも、武術の修業は怠らず、侍の持つべき道具は、何時でも役に立つやうに、整へて置くのが、侍の心得である。それであるから、食祿の少ないものでも、眞の侍は、生活費を削つても、腰の物には金をかける。その心懸けのないものは、いざ鎌倉といふ時に、役に立たぬ。

十郎は、衣食住に事は缺いても、武器や馬具には、出来る限りの備へをして在る。されば腰の物も、その裝飾は粗末であるが、刀身は素晴らしいもので、一見して其嗜みのほどが思はれる。餘りに立派なものを、見せられた丈けに自分のを見せる氣になれぬ。頻りに辭退して、十郎の迫るを遁れようとする。

『御見せ下さらぬか』

『イヤ、どうも、手前のは御眼にかけるほどのもので御座らぬ』

『拙者のは、おしらべになつても、足下のは御見せ下さらぬ、といはれるのか』

『さういふ次第ではないが、貴殿のは、貴殿が見ると仰せあつたから、一寸拜見いたしたので、手前の方から、強て申入れたのでは御座らぬ』

『併し、拙者のを御覽に相成つた上は、足下のも御見せ下さるが、當然て御座らう』

『どうか、手前のは御勘辨願ひ度い』

『斯く申上げて、御見せ下さらぬか』

『………』

十郎は、ずつと膝を進めて、その刀に手をかけた。

『ヤツ、それは………』

と、いふて拒まう、とするのを、はやくも取上げてしまった。

『拜見いたします』

事、此に至つては、もはや致し方がないから、十郎の爲すにまかせた。スラリと抜ければ、夏猶ほ寒き氷の刃といへるが、ガサリと音がしたら、鈍くら物に極まつて居る。所々に錆があつて、さらに手入が届いて居らぬ。また手入れをするほどの物でもないから、十郎は、すぐ鞘に收めて、

『御立派なもので御座る』

丁寧に挨拶をされて、却つて恐縮した。

『拙者は、食祿も薄く、家計も豊でないが、腰の物は、人並の用意を致してある。すべて侍といふものは、その心

懸けが肝要ぢや」

『御道理で御座る』

『此住家は、まことに粗末で御座るが、武具や馬具に心を入れると、住家の事にまでは、手が届きかねて、まことに御恥かしい次第で御座る』

『……………』

『今日は甚だ御無禮をいたしました』

『どう仕つて、手前こそ……………』

その侍は、之れを機會にして、忙しさに歸つてゆく。此事が在つてからは、たとへ蔭口にも、十郎の生活向を、彼れいふものはなくなつて、心あるものは、其嗜みの立派な事を嗜するやうになつた。

十郎が、侍としての修養は、敢て人に學ばず、自分から工夫して、この修養を積むやうにして居た。苦痛に堪へ、不自由を忍ぶ事は、平生の心がけから來るもので、それは自分で、自分を試みるに限る。忍ぶ事の出來ぬやうな事を、自分から仕向けて、それに忍ぶ事を工夫した。身代なを利用して、無理に使つて見た事もある。

人間は、幾日位絶食に堪へ得るか、といふ事を試みた。その試みがすむと、今度は、力業に従事しながら、絶食を試みた事もある。五晝夜の間、少しも休まずに、家の周圍を、駆け足てぐる／＼廻つて見たが、終に疲れ果て倒れた。一度に澤山食ふて、幾日も食はずに居る事も、幾たびか試みて、それについての自信も得た。

元來が、槍と馬に、深い修練のあつた人で、その試みは、一日として休んだ事がない。三間柄の長槍を取つて、之を揮ふのが、毎朝の行事になつて居た。苦しい生活のうちから、旅費を積んで置いて、京都へ上り、三十三間堂の通矢をやつて見た。同行した弓術の師範役が、その技と根氣には驚いた。

斯ういふ父の膝下で、朝に夕に、教へをうけて居る無人は、まことに幸福であるが、同時に辛いと思ふ事も、幾度

かあつには違ひない。

四

冬の日の寒い夕暮れであつた。無人は、父母と共に、食膳に向つて居た。長府は、海に近い所である丈、夏の風は涼しいが、冬の風は冷たい。ピューツと、吹き込んで来た風は、骨を刺されるやうに冷たかつた。

『オー、寒ッ』

無人は、首を縮めながら顫へた。十郎は、その状を、チロリと見て、

『今、何といふた』

その聲は凜として、無人の頭腦に響いたが、無人は平然して、

『寒い、と申しました』

『ふーむ、寒いか』

『ハイ』

食事が終はつて、一と息すると、

『無人ッ、これへまゐれ』

『ハイ』

父の前へ、無人は手をついて、頭を下げた。

『汝へは、寒いといふたな』

『ハイ』

『衣物を着て居るのに、それでも寒いか』

『ハイ』

『可し。今暖かにして遣はすから、待つて居れ』

と、いひながら十郎は、立ち上つた。無人の襟髪を、ぐツと掴んで、引き立てる。壽子は、それを見て居るが、何一言いはずに、控へて居た。恰て猫の子を提げるやうにして、十郎は、無人を門口へつれて來た。衣物を脱がせ素裸にして、軒下へ立たせた。凍えるやうに寒いが、無人は黙つて、父の爲す通りになつて居る。

『今、すぐ暖かにしてやる、其儘にして居れ』

勝手元へ廻つた十郎は、やがて冷水を手桶に一ぱい、提げて來た。

『さ、暖かになるぞ』

その一ぱいは、無人の頭から浴せられた。二はい三ぱいと、提げて來ては浴せる。無人の體は、もう米のやうになつて居た。

『今宵は、其處に立つて居れ、追々に暖かになる』

壽子は、堪へかねて口を出した。

『もう御赦し下さいませ、無人も、悪いと氣付きましたらうから……』

『相成らぬ。此儘に打捨て置け』

『でも、それは餘りに可哀さうで御座いますから、どうぞ御赦しを……』

『成らぬ』

兩戸をしめて、十郎は、壽子の取做しを肯かぬ。斯ういひ出したら、槓杆でも動かぬのが、十郎の氣質である事は、よく知つて居るので、壽子も斷念めてしまつた。

翌朝になつてから、壽子は、十郎に詫びて、漸く無人を、座敷へ入れた。

『汝へさんが悪かつたのぢや、お父さまへ御詫をなさい』

『ハイ、お父さま、御勘辨下さいませ』

十郎は、之を聞くと、辭を改めて、

『侍といふものは町人百姓と違つて、至難しい勤めを持つて居る。汝へは、侍が町人百姓と違ふのは、どういふ所が違ふのか、それを知つて居るか』

『存じませぬ』

『それぢやから不可ん。よく心得て居れ、今いふて聞かせる。侍は忍耐が第一ぢや。町人百姓の忍び得ぬ所を忍ぶ。其處に侍の値打はあるのぢや。寒いからといつて、それが何うなる。春夏秋冬、四時の序は、天の自然ではないか。衣物を着て、家の内に居て、それで寒いといふやうでは、いざ君家の御爲といふ時、何も出来まい。耐忍、耐忍、何事も耐忍ぢや。よいか、判つたか』

『ハイ、よく判りました』

『これから暑い寒いといふと、決して勘辨せぬぞ、よいか』

『ハイ』

十郎が、子供を教へる、その教育法は、すべて此調子であつた。無人が、後に陸軍の軍將となつてから、那の嚴格な態度で、生涯を押し通したのは、實に其氣性からばかりでなく、實は父の教へ方が、那アいふ骨の硬い人を、つくり上げたのである。

日清、日露の戦ひに、一度も寒い事をいはず、滿韓の野營に、嚴寒を冒して、外套をすら着なかつた、といふ耐忍は、子供の時に仕込まれたのが、習ひ性となつて、那のやうな剛骨な人物になつたのである。

十郎の事は、追々に人にも知られ、いつか殿様の知る所ともなつて、終に世子、總五郎殿の傳役に引上げられた。

五

世子の教育掛りになれば、食祿の上にも、多少の加増はある。その代り、今迄の身分と異つて、勤仕も日々の事になり、交際もはげしくなるから、加増された食祿位では、とても足りない。傳役になつた事は、藩士として無上の光榮たるには相違ないが、生活の上に加はつて来る困難は、ますますひどくなるばかりであつた。

人が、自分の子を教育するのさへ、實は容易なことでない。況して他の子を、教育する事の至難いのは、誰も皆な知る所で、今の學校で、一日のうち僅少の時間を、教育の切賣りをするのに對して、屢々起る非難の聲を聞いても、教育の難事たることは、充分に首肯される。

殿様の世子を預つて、教育の任に當るのは、一と通りの苦勞でなく、家來としての光榮ではあるが、大概なものはい實を設けて、辭退するのを當然としてある。十郎の平生に、何の陸日向もなく、性來の直情徑行は、ひろく人に知られても居る。江戸から國語になつたのは、重役の感情に觸れた爲めである事も、既に知らぬものはない。左様した事情の附纏つて居る人に、世子の教育を託した、長府侯の賢明は、ひとへに感服に値する。再三の辭退はしたが、強ひられて引受けた以上、懸命の奉公は、十郎の覺悟である。藩の習慣や、御殿の情實は、どうあらうと構はぬ。自分の信する所に依つて、思ふ通りに教へ導いてゆく考へであつたから、その勤め振は、謹嚴硬直を極めた。

時代は、嘉永安政の後をうけて、世は追々に險しくなつて来る。攘夷か、開港か、將佐幕か、勤王か、いづれの道を進むにしても、それは容易な事でない。毛利の本家は、初めから攘夷で、進んで居る。勤王は、元就からの事で、今にはじまつた事でない。幕府が、毛利を憎んで、何かにつけて意地悪く出るが、毛利の方では、明けても暮れても幕府を苦める事のみ考へて、いろ／＼と小刀細工をする。双方の立場は、全く氷炭容れず、犬と狼の噛合ひに日を送りつゝ、文久の歳には、その喧鬧も頂點に達した。

將軍の居城が、江戸に在つたので、地勢の關係から、東北の諸侯には、幕府の味方が多く、京都から西へ進むほど反幕府の氣勢は高かつた。中國の末端には、毛利が居て、遙かに離れた、九州の行詰りには、島津が腰をすゑて居たから、どうしても大勢は、反幕府の方へ傾いてゆく。

島津の態度が、どうかすると日和見になつて、曖昧な立場に居たから、毛利丈の突ツ張りでは、幕府も餘り恐ろしく思つて居なかつたらうが、島津の腰が切れて、毛利と手が繼がると、大勢は、幕府に不利となる。さうした場面を見ながら、日を送つて居るので、朝に夕に、天下の形勢は、クルリ／＼と變つてゆくのが、何ともいへぬ不安を感じさせる。

毛利の家來にしても、各自に意見は持つて居るから、薩藩をはじめ各藩の動靜によつて、毛利の立場の善くなる場合と、甚だ悪くなる場合とあるので、その都度、喜びもすれば愁ひもあるが、とに角、形勢の移り變りには、毛利の進退が、頗る重い關係を持つて居る事丈は、よく判るから、従つて、萬事についての注意は、仙藩の家來より深かつたのは、固より當然の事であつた。

斯る時代を、背後に控へて、世子の教育掛りになつた十郎は、人一倍の苦勞をした。どうかして總五郎殿を、立派な人物に育て上げよう、との心から、その勤め振りは、普通の傳役と、大に違つて居た。傳役となつてから始めて、世子に従いて、劍術の師範役を訪ふた。今迄は師範役を呼び上つて稽古したのを、十郎は、それを改めて、此方から道場へ行くやうにした。

多數の門人が、道場にズラリと列んで居る。師範役は、それ等の門人を差置いて、すぐ世子へ、稽古をつけようとした。

『先生、しばらくお待ち下さい』

十郎に聲をかけられて、師範役は、

『御用で御座るか』

と、いふて、十郎の方へ向つた。

『お稽古は、到着順と承知いたして居りましたが、さうでは御座らぬか』

『イヤ、到着順によつて稽古は致す事に、相成つて居ります』

『然らば、世子様は、未だくお稽古を願ふ番になつて居りませぬ』

『世子様を、長くお待たせ申すは、恐入ります故、願番を變へて、お稽古いたす考へて御座る』
之れを聞くと、十郎の眼は光つて、師範役の顔を、チロリと睨んだ。

六

寸毫も、曲つた事を許さぬは、十郎の氣質であつた。長上に對しての禮儀は、飽迄も厚くするがよい。けれども、媚び諂ふ事は、どこ迄も避けなければならぬ。況して、武藝の修業をする場合には、此別を判然させる事が肝要である。十郎は、常に斯ういふ事を考へ、また人に向つても、左様いふて居たのであるから、今師範役のする事は、甚だ不都合と思つたのであらう。

『武藝の稽古に、上下の別はない筈ぢや。一たび此道場へはひつた以上、藩中の青年と、世子様の別はない。均しく先生の門下では御座らぬか。然るに、到着の願番を變へて、世子様を先にいたす、といふ御趣意は、どういふ次第で御座るか』

『お、それは……』

『願番の變更は、強て辭退いたす。到着順によつて稽古を願ひ度い』

『ハッ』

師範役は、思はず頭を下げた。その容子が、何となく可笑しかつたので、符合せて居た、青年がクス／＼笑ひ出した。先生、頗るテレた容子で、多少は疳癩も起つたものか、此日の稽古は、頗る手荒であつた。それでも、十郎の眼には、稽古振りが手緩く見えたものか、それとなく諷刺をいふて、その日は引取つたが、一事が萬事で、十郎の傳役は、すべて此調子であつた。

ずつと後の事ではあるが、世に從いて、萩の城下へ出た事がある。之れは世子が、明倫館へ修業のために往かれた時の事であつた。毛利本家の世子は、長門守定廣といふて、支藩の徳山から、養子に來た人であるが、非常な遣り手であつた。明治になつてからの元徳が、則ち此人である。

その夫人は、長門から迎へたので、總五郎の姉に當る。つまり長門守は、總五郎の義兄といふ事になるのだ。其處で長門守は、總五郎を呼んで、晚餐を共にする事にした。十郎も傳役といふので、御供を許された。長門守夫婦と、總五郎は差向ひで、食事をはじめた。十郎は、遙に下席で、その終るを待つて居る。やがて、食事がすんだから、臈部係りが、總五郎の前へ進まう、とした。此時に十郎は、一と膝進めて、

『暫らく御待ち下さい』

と、聲をかけた。臈部の掛りは、何事かと思つて、跡へ退いた。

『世子様へお伺ひいたします』

『何ぢや』

『お膝下の飯粒は、如何遊ばします』

斯ういはれて氣がつくと、膝の下に、飲粒が落ちて居た。總五郎は、それを拾つて、臈の縁へつけた。十郎は、ちつと見て居たが、

『その飯粒を、如何遊ばす御考へか』

と、鋭い言葉でいふた。さア、斯うなると世子、頗る困つて、何とも答へが出来ない。長門守夫婦は、興味を持つてその始末を見て居られる。

『膳の縁につけた飯粒は、どうして出来たものでありませう』

總五郎は、黙つて考へて居るが、容易に答へない。

『御領地内の百姓が、春の植付けから、秋の收穫まで、一粒の米を得るについての苦勞は、實に一通りのものではありませぬ。粒々辛苦といふ諺は、即ち其れをいふたものでありますが、世子様は、それを御承知ありませぬか。いづれ一度は、長府六萬石を、御治定遊ばす御身柄でありながら、民百姓の苦勞を御察しなさらぬやうでは、とても名君にはなれませぬ。百姓の粒々辛苦を思ふたら、一粒の米といへど、粗末に相成らぬもので御座る。風につけ、雨につけ、苦勞した上の收穫は、先づ御領主へ捧げ、その残りを以て、一年の口に糊するのであります。それを世子様は、何と思召すか』

と、これから治世の大道を論じ、君臣同治の大切な事を説いた。

『さ、お解りに相成りましたら、その飯粒は召上がれ』

斯ういはれては拒みやうもなく、世子は、終に飯粒を、口に入れた。長門守は、之れを見聞して、非常に感心した。『總五郎殿ばかりでない、我等も、よい教訓をうけて幸福であつた』
當座の褒賞を戴いて、十郎は御前を退つた。

玉木文之進

一

十郎の爲人は、世子の傳役になつてから、一般に知れ渡つた。謹嚴剛直の侍として、將た文武二道に精通した武人として、殆んど知らぬものなきに至つた。

斯ういふ父のそばに居て、朝夕その教へをうけて居た子は、どれほど幸福であつたか知れない。けれども、子供には子供としての慾もあり、何となく不満足もある。いつか其れを充たし度い、といふ氣も出て、父にせがむやうになるのは、誰れにしても同じ事である。

萩の城下へゆけば、明倫館といふ大きい學校があつて、それ／＼に志のあるものは、父の許しをうけて入學する。徳山、長府、岩國と別れた支藩には、相當の學校もあつて、一と通りの修業をするには、少しも差支がないのだけれど、本藩の學校へ、修業に行き度い、といふ心は、少し家に餘裕があつて、修業慾のある青年は、皆な持つて居るから、萩へ向つて出てゆくものは、却々に多く居た。

今の地方の學校から、東京の帝大を見て、どうかしてそれにはひり度い、といふ希望を、持つものゝ多いのも、矢張り其れと同じで、青年の斯ういふ慾は、決して悪い事とはいへぬが、それには又た多少の弊も伴ふて居るのは、識者の憂へて居る一つである。

『父上に、お願ひ致し度い事がありません』

無人は、父の前に手をつけて、何か仔細ありさうに、斯ういふた。

『何事ぢや』

『私を、萩へ修業にやつて戴き度いのですが、お許し下さいませうか』

『えッ、萩へ……それは何ういふ事か』

『明倫館へ、はひり度いのであります』

『明倫館へはひり度い、と申すのか』

『ハイ』

『明倫館へはひつて、何を爲るつもりか』

『修業をいたしたいのです』

『何の修業を……』

『文武の二道を、修業いたしたいのであります』

『それは、拙者が教へて居るではないか』

『……』

『拙者の教へて居るのでは、お前の氣に容らぬのか』

『イエ、さうではありません』

『然らば、何の爲めにゆき度いのか』

理窟で取りつめられると、無人に答へは出来ない。父の教へが氣に容らぬ、といふ事はいへぬのみならず、その教

へに嘘はないのであるから、斯ういふ風にいはれたら、グーの音も出ない。

『名の爲めの修業は許さぬ。實の爲めの修業なら、今現に爲て居るのぢやから、教へゆく必要もあるまい。拙者の教へて居る武術に、不足があると申すのか、また拙者の講書には間違ひがある、といふのか。若し左様思ふ點があるなら、少しも遠慮は要らぬから、いふて見るがよい、どうぢや』

『……………』

『明倫館で教へる武術も、拙者の教へる武術も、それに二つはない筈ぢや。拙者が、今まで教へて居る儒道に、何か異見でもあるのか、それを判然いふて見なさい』

『それに不足は御座りません』

『然らば、明倫館へ行き度い、といふ心が判らぬではないか』

『皆が行きますから、私も行き度い、と思つて、お願ひいたしましたのであります』

『馬鹿ツ』

と、大喝を加へられて、無人は、一と縮みに縮み上つた。十郎は、無人をぢつと、睨んで居たが、

『お前は、何と馬鹿な事を申すのぢや。人が行くから、自分も行き度い、とは何事ぢや。今迄は、それほど馬鹿者と

も思はなかつたが、お前は、法外の馬鹿ぢや』

馬鹿といはれて口惜しかつたか、無人は、涙ぐんで居る。

『名の爲めの修業は、一切許さぬ。明日からは拙者も教へぬ。お前の勝手にして居れ』

『御勘辨を願ひます、私が悪う御座いました。もう斯様な事は申上げませぬから、相變らず御教授を願ひます』

『相成らぬ。拙者は教へぬ』

無人は、母に向つて、

『どうぞ、お詫びを願ひます』

壽子は、十郎を取做すつもりで、

「無人も、此様に申して居りますから、御勘辨下さいませ」

「相成らぬ」

十郎は「相成らぬ」の一言のみで、多くはいはぬが、よほど怒つて居るらしい。母の計ひで、この日は、ほどよくすませたが、十郎の機嫌は、頗る悪かつた。無人は、二三日考へつゞけて居たが、とう／＼夜逃げ、と覺悟を極めた。

二一

父の叱言を無理であるとは、思つて居ないが、萩へは行き度いのだ。父の教へに、不安の念は持つて居ないが、明倫館へはひり度い、といふ心が、どうしても抑へ切れなかつた。

一日、無人は、父母の許しを得ずに、長府を出奔して、萩へ向つた。

よほど時刻が過ぎて、無人の出奔は判つた。父へ宛た、一通の遺書があつたので、出奔の事情は、矢張り明倫館へはひる爲め、といふ事が知れた。

「まあ、大膽な事を、無人が……何といたしませう」

壽子は、有藥に弱い女氣から、その心配は一通りてなかつた。

「不孝な奴ぢや、捨てゝ置け」

「それでも、萬一の事がありましては……」

「何があらうと構はぬ。あれほどいふて聞かせて、それでも解らぬ馬鹿者ぢや。捨てゝ置く外はあるまい」

「何分にも子供の事でありますから、あなたの仰せが、よく解らなかつたのでありませうから、もう一度引戻して、よく申聞かせては、いかゞで御座いませう」

『その必要はない。父母の許しを得ず、出奔するやうな不心得の奴は、どうならうと宜しい』

『でも御座いませうか……』

『父母在ます時は遠く遊ばず、といふ事も、よく教へてある。それさへ思はずに出奔するやうなものは、永久の義絶ぢや』

何といふても、十郎は、壽子の託を容れぬので、その日は、壽子も強ひていはず、十郎には秘密で、無人の跡を逐はせて見たが、これも判らずに、追手は歸つて来た。

無人は、家出した時に、一文も持たずに行つた。父母の許しを得ず、修業の爲めに、萩へ向つたのであるが、金を一文も持たずに出たのは、後年の乃木將軍、さすがに子供の時から、偉い所があつた。長府から萩まで、可成りの道程があるのに、一文もなく出かけた無人は、つまり食はず飲まずに、行く事になる。

如何に學問修業といふやうな、善い目的の爲であつても、親の金を持出す事は、盜賊の所爲で宜しくない。無人は、父の意に背いて、出奔する場合にも、盜賊の所爲はなかつた。梅檀は二葉より薫し、といふ諺の通り、乃木將軍の正しい心は、無人の時代からであつた。

萩には、玉木文之進といふ人が居て、父の十郎と、深い交わりがあるのみならず、祖先の系統は、同じ佐々木から出て居るので、一般にいふ親友とは違つて、乃木家との因縁は、實に深いものがあつた。無人は、それを能く知つて居たので、玉木を目的に出かけたのであつた。十郎も、恐らく其れと想像はして居たらう、と思はれる。

萩の城下へ着いて、玉木の家を訪ふた時は、もう疲れ果て、へト／＼になつて居た。不意の來訪に、玉木も驚いて、

『誰も伴れはありませぬ』

『お父さまの御許しがあつての事か』

「否……。」

「否とは、お父さまに背いて来たのか」

「御許し下さいませぬから、黙つてまゐりました」

「そりや出奔ぢや」

「……………」

「何故さういふ事をいたす、不孝な奴が」

「お父さまに、詫まつて下さい」

「それは如何に詫まつても、御勘辨下さるまい。お前は、とんでもない事をいたしました。而て、何の爲に出奔したのぢや」

「明倫館へ、はひり度いのですが、お父さまが許さぬ、と仰しやるので、逃げて来ました」

「出奔したら許す、といはれたのか」

「無人は、トウ／＼泣き出した。」

よく聞いて見れば、修業をしたいといふ心からで、年頃からいへば、感心な所もあるが、まさか褒める事もならぬ

ので、

「とに角、お父さまへ申し送る。お父さまが何といはれるか、先づ其れまでは、謹慎して居れ」

「ハイ」

父に能く似て、厳格な人ではあるが、子供好きな所から、頗るやさしい所もあつて、無人は、存外に氣安く、目を送る事を得た。そのうちに、十郎から手紙が届いた。それには、七生までの義絶と書いてあつた。自分から父に背いて出奔したのであるから、此位の嚴責はうける、と思つて居た。只玉木が、何ういふ考へて居るか、今は其ればかり

が心配である。

二二

玉木は、非常にすぐれた人物であつたが、歴史の上には、碌に現はれて來ない。多く蔭の働きばかりして居て、表面に立たなかつたので、廣く知られて居ないが、その實、立派な人であつた。

長州藩が、倒幕運動に、目覺ましい働きをして、毛利は偉いといはれるまでには、可成りの歲月も経れば、その苦勞も一と通りでなかつた。藩主に、すぐれた御方が、打ちついでて出た、といふのは、大體に於て、藩の力を強くしたには違ひないが、家來のうちに傑出した人物が多く出た事も、決して見違す事の出來ぬ事實で、天保の前後から、慶應末年にかけて、文と武の二道に別れて、種々の人物が輩出して居る。

藩主にすぐれた御方があり、家來に偉いのが續出したので、非常な働きも出來たのであるから、それ等の事情も、一應は述べる必要があらう。

けれども、乃木將軍に、直接の關係なき人の事を、多く述べるのは、却つて煩雜に過ぎて、その割合に面白味が少ないから、之れは省略する事にするが、三四の人の事は、どうしても述べて置かねばならぬ。

殊に、玉木を主として、その周囲の人の事は、稍詳しくいふ事にしよう。時勢と人物の關係は、頗る深いもので、時勢が人物を生み出す事があり、また人物が時勢をつくる事もある。従つて、時勢と人物の關係は、最も注意しなければならぬ事である。

毛利家が、關ヶ原の一敗から、長防二州に押込められて、事毎に、幕府の制肘をうけ、極めて窮屈な日を送るやうになつてから、一時は藩の存立さへ危ぶまれるほどに、その立場は、至難しくなつて來たが、幸にして名君が、二三ついでて出たので、家運の盛返しがついたのである。

敬親といふ藩主も、頗るすぐれた御方であつたが、その家來にも、偉いのが多く出て來た。上下の力が一致して、よく時勢の潮流に乗じ、巧に押進んで行つた時の毛利の態度は、實に堂々たるもので、流石の幕府も、手の下しやうがなかつた。敬親の養子になつたのは、例の長門守定廣であるが、明治になつてからの元徳といふ御方で、これが又頗る遣手であつたから、毛利の力は、忽ちにして各藩の認むる所となつた。

家來のうちの傑物には、村田四郎右衛門といふ人があり、敬親の相談對手になつて、藩制の改革から、財政の整理、或は兵制の一新まで、見事にやつて退け、殊に藩中の士氣を、鼓舞する事には、最も努めたのであつた。外夷の渡來が、全國の人心に、非常な脅威を與へ、各藩の動搖は、どこも皆同じであつた。

敦島の 大和心を 人間はば 蒙古の使ひ 斬りし時宗

先づ此歌を示して、藩士の尻に、鞭を加へた。それから、もう一つの歌が、

西北に 風除けをして 幕を張れ 我が日の本の 櫻見る人

といふのであつた。

單純な武士教育をうけて、一種の型にはまつた、氣風の持主たる、當時の藩士は、此二つの歌に依つて、どれほど其氣魄を、引立てられたか知れない。村田は、別に清風と稱して、和歌を善くした。

來て見れば 聞く程になし 富士の山 釋迦も孔子も 斯くやあるらむ

と、いふ有名な歌を残した人である。同じ長州藩士でも、村田の流れを汲んだものには、剛直の士が多い。利口に立廻つて、狡い働きをするものは、此派の人には少かつた。

玉木は、村田の亞流で、眞に剛直の武士といふ可く、萬事に古武士の風があつた。學問も深く、武道にも精通して、青年を愛して、能く之れを指導したから、下の方の氣受けは、頗る善かつたが、その代り、思ふた事は、其儘にいつて退ける風があつて、上格の人でも構はずに、ミシ／＼やりつけるので、上の方の人には、甚だ氣受けがよくなかつ

た。兄は、杉百合之助であつた。杉の件を、寅次郎と謂ふて、吉田家へ養子に貰はれ、後に松陰と稱した。

されば、松陰は、玉木の甥に當り、幼少の頃から、玉木に附いて、厳格な教育をうけたのであつて、松陰の氣風は、玉木の教育から生れたものと見るのが、先づ當然であらう。

玉木、吉田、杉の三家は、斯ういふ關係になつて居るが、乃木家も、また祖先を同うして居るので、玉木と十郎の親交は、兄弟に均しきものがあり、十郎の次男眞人を養子にしたほどに、深い因縁を持つて居た。

四

松陰の人格は、すでに世の知る所であるが、玉木は、松陰を、那れまでの人物にすべく、之れを教育する上に於ては、頗る努めたものであつた。昔の教育は、今の教育と全然異つた、魂に向つての教育であつたから、師弟の關係は、恰も父子の如く、一たび門人として、引受けた上は、自分の子として、之れを指導したもので、只文字を教へさせれば、それでよいといふ遣り方ではなかつた。

親の方でも、一たん先生へ頼んだ上は、殺さうと生かさうと、それは先生の自由である、といつた考へで、子供の不平は、すべて取り上げぬ事にしてあつた。それであるから、師弟の關係は、實に密接なもので、親のいふ事を、聞かぬ子はあつても、師の叱言を、恐れぬ弟子はない。萬事が其通りで、三尺距つて師の影を履まず、といふ諺の心は、今の教育の何れに求めて、之れを見る事が出来やうか。

師は、講義の切賣りをする。弟子は、其れをノートへ書き込むだけの關係であつて、その間に、少しの温情といふものがない。只學問の詰め込みを主として、人間をつくる事には、何の考慮も置かれて居ない。コセ／＼した小取廻しの利くものは、多く出るが、どつしりした眞目のあるものは、薬にしたくもない、といふのが、今の學校教育の實際である。時代の變遷と、教育の推移とは、假し引放し得ぬものとしても、少しは人間の氣魄をつくる教育もするが

よい。今の有様では、我國民性の前途も、何ういふ事になるか、實は寒心に堪へぬ次第だ。

玉木が、松陰を仕込む遣口は、實に嚴峻を極めたもので、音讀を三度して、それを直ぐ松陰につゞかせる。若し引つかうつて、讀めない時は、机の上にある鞭を以て、松陰の頭を、ピシリと叩く。子供の事であるから「痛ッ」といつて、頭を抑へて泣くのを、つゞけて打つ。

『もう、今日は之れで止める。よく覚えて居れ』

と、いふて、また音讀三たびして、その日は歸つのであつた。之れが毎日つゞくので、終には松陰も、敵愾心を持つて、いくら打たれても泣かぬ。却つて、ピシリと打たれる時、玉木の顔をちつと見る。どういふ譯か、一つ打たれてゆるされるやうになつた。

痛いといふて泣くから、また打たれるのであつて、一つ打たれて痛いといはぬから、あとは打たずにすむのである、といふ事が、漸く解つた。斯ういふ方法で、松陰を教へたのであるから、剛健な氣性にもなつたのだ。私の寺小屋時代には、未だ此風があつて、私も、しばしば之れをやられた。耳や鼻を抓んで、廊下へ引摺られた事は、幾たびあつたか知れない。

今の學校で、こんな事をやつたら、すぐ保護者會といふやうな團體が、何だ彼だといつて騒ぎ出す。區會や市會の議員が、選舉民に媚びて相槌をうつから、とても斯んな事は出来ないが、昔は、平氣で、斯ういふ事をやつたものだ。松陰に對してのみ、斯ういふ嚴峻な態度を取るのではなく、誰に對しても、それと同じ通りであるから、玉木と差向ひになつて、思ふやうに談論するものは少なく、何となく煙たがられて居るので、眞の交友は、多く持つて居なかつた。重役や家臣も、玉木の嚴峻な態度には、屢々苦しんで、

『玉木は、貧しく暮して居るから、それで口やかましいのである。生活が氣樂になれば、自然と心もゆたかになつて口やかましいのも改まるだらうから、何か然る可き役をつけて、氣樂にしてやらうではないか』

と、いふ相談があつて、それから間もなく、郡奉行に擧げられた。此役は、公然と賄賂がはひるので、在外に儲かる。半歳位も、此役に居ると、三年位の生活費は出来る。誰にしても望む役ではあるが、収入の多い丈けに、普通のもの何れほど運動しても、容易に此役にはなれぬ。併し、廉潔を旨とする、玉木の爲めには、此役も左迄の有難味はなかつた。その貧乏は、此役になつてから一層ひどくなつた。

郡奉行は、一種の交際官であるから、却々出費が多い。然るに、玉木は、一切賄賂をうけつけないから、収入は定まつた外になく、出費は今迄より多いのだから、此役になつた爲め、玉木の苦しい事は、ますます甚だしく、今迄よりは口やかましくなつて來た。

此時代に、玉木は、乃木の次男を、養子に迎へたのである。

五

玉木は、常に子供の無いのを、ひどく寂しく思つて、十郎に、次男の眞人を貰ひ度い、といふ事を、幾たびか漏らしたが、かねて親交ある、玉木の頼みでも、之れには十郎も、容易に承諾を與へなかつた。併し、玉木の熱心は、終に十郎を動かして、眞人を貰ふ事になつた。それは、玉木が、郡奉行になつた時の事で、十郎が承諾すると、すぐに眞人を引取り、限りなき喜びを以て、之れを愛する事は、非常なものであつた。

『乃木十郎の次男を、貰ひ受けて養子といたしたについては、些か其の披露として、茶菓を呈し度いから、おいてを待ち受ける』

と、いふ書面が、友人の許へ届いた。何事にも無駄をせぬ玉木が、斯ういふ事をするのは、如何にも珍らしいので、どこへ行つても、その噂ばかりであつた。

長府第一のやかまし屋、乃木十郎の件が、萩で評判のやかまし屋、玉木文之進の養子になつた、といふので、人は

種々の批評をして居る。

兎に角、玉木の案内であるから、何ういう御馳走をしてくれるか、如何に茶菓といふても、家の相續人が、出来た祝ひであれば、相當の事はするであらう、と、下司張つた連中は、續々集まつて来た。

『今日は、當家の祝ひ事で、各位には御迷惑と存じたが、ほんの御披露の意味で、御入來を願ふた譯ぢや。此上とも、宜しく御目かけられて、御引廻しを願ふ』

と、一と通りの挨拶はあつたが、御馳走は、却々出さうもない。それからそれへ、話に花が咲いて、種々と面白い物語りはあるが、更に何の準備もないらしい。まさかに御馳走の催促も出來ず、少し手持不沙汰で、一同は、顔を見合せるばかりであつた。

やがて、玉木は、大きい茶碗を取出して、各自の前へ列べた。袋のうちから少しづつの麥粉を入れて、それに湯を注ぎ、箸を一本添へた。

『さア、何の用意もなく、甚だ失禮では御座るが、御遠慮なく召上れ』

一同は、益々驚いた。今日の御馳走が、麥粉一碗、何の事だ、馬鹿らしいと思つても、そんな苦情はいへず、麥粉を入れた口を、ムグ／＼させながら、尻をモチ／＼させるばかりで、いづれも狐に魅されたやうな、顔をして歸つた。一家の大事として、取扱はれて居た、養子の披露が、斯ういふ調子であるから、其他の事は、推して知る可きである。木戸孝允は、維新の三傑として、西郷大久保と並稱された位の人であるが、それでも玉木には、一目置いて居た。明治になつてからの事であるが、木戸は、久し振りに歸國して、各方面の人に、非常な歓迎をうけ、頗る得意で居たが、一日の事、友人を訪ねて、懷舊談に時を移して居ると、其處へ玉木が、不意にやつて來た。木戸は、玉木の姿を見るや、何の挨拶もせず、あわてふために、飛び出した。側に居た友人は、木戸が、どういふ譯で、そんなにあわてたのか、更に判らなかつた。玉木は、木戸の逃げ出した後姿を、チラリと見て、

『ハツハ、、、、柱の奴、逃げくさつたな』

と、いふて大笑ひした。木戸の前名は、桂小五郎といふので、玉木は、相變らず木戸を呼ぶのに、桂といつて居た。その後、此場に居合せた友人から、木戸は、此事について質問されたので、遂う／＼本音を吐いた。

『彼の老爺は、却々のやかまし屋で、うつかり捉まると、飛んでもない眼に逢ふから、何よりも逃げるが第一と考へて、各自には御無禮であつたが、不意に逃げ出したのぢやよ』

『何か弱い尻でも、捉まつて居るのか』

『イヤ、左様いふ次第でもないが、何しろ是れを着て居たので、大眼玉を食はされては堪まらぬからのう』

『ははア、さういふ譯であつたか』

果は、玉木の噂で持切り、その頑固振りを語り合ふて、大笑ひに笑つた。木戸の着て居たのは、羅紗の羽織であつた。今では珍しくもないが、その頃の事になると、管に珍しいばかりでなく、非常な贅澤品として取扱はれ、且は夷人のつくつた物だ、といふ所から、頑固な士族は、さういふ物を着る事は、ひどく嫌つて居たから、木戸は、玉木に大喝されるのが堪まらないので、逃げ出したのである。

六

無人の身柄については、十郎と玉木の間、再三の交渉はあつたが、それは書面の往復であるから、無人は、この成行きを少しも知らなかつたのは、固より當然の事で、飛脚や人傳に依つて、手紙の着いた時は、無人ばかりが、獨り胸を躁がせて居るに過ぎなかつた。

『無人ッ、一寸まゐれ』

『ハイ』

無人は、玉木の前に手をついて、心配さうにして坐つた。

『お父さまから、御返事が届いた。それを今知らせる』

『ハイ』

『お父さまは、一と通りならぬ御立腹で、とても御勘辨下さらぬ』

『……………』

『七生までの義絶ちやと、仰しやつておいてなさる』

『えッ、義絶て御座いますか』

『左様ぢや、お前は、それを何う思ふか』

『……………』

『親の命に背き、親を振捨て出奔したものは、皆な斯ういふ事になる。お父さまの御立腹は、決して御無理でない。お前が、悪いからの事で、身から出た錆は、致し方あるまい』

『ハイ』

『此上は、何とする覺悟か』

『伯父さまの御世話にはなれませぬか』

『馬鹿なッ……………』

一喝されて無人は、慄るへ上つた。

『お父さまが義絶なさる、といふて居るに、拙者が、お前の世話をする譯がない。拙者も御免ぢや』

斯ういはれては、取りつく島もなく、可哀さうに無人は、シクシク泣いて居る。

『さ、どりする覺悟ぢや』

「伯父さま」

「何ぢや」

「私は死にまする」

「何と、死ぬと申すのか」

「ハイ」

「ば、ば、馬鹿な奴が、死んで何うする」

「死んで御託をいたします」

「死ぬば猶不孝になる。此上に、不孝を重ねるつもりか」

「死んで、悪う御座いますか」

「悪い」

「どうしたら可いでせうか」

今度は玉木が困つた。何とも返答のしやうがないので、黙つて無人の容子を、見て居る。無人は、いつか泣き止んで、極めて平靜になつて居た。

「宜しい。拙者が世話してやる」

「はッ、伯父さまが、御世話して下さいますか」

「うむ、どうも致方がない」

「有難う存じます」

「併し、お父さまには相すまぬから、これは秘密ぢや。可いか」

「ハイ」

十郎からの手紙に依ると『表面は善絶として置いて、世話は何分頼む』といふのであつたが、本人に、其れといふと、氣の緩みが出るから、どこまでも善絶として、脅せる丈け脅して見たが、存外にしつかりして居て『死ぬ』といはれたので、玉木の方が、却つて困つてしまつた。

其處で、無人は、いよゝ玉木の膝下に於て、萬事の世話をうける事になつた。松陰に、仕込んだ遺方を、その儘持つてゆくので、教へられる時の苦しさは酷いが、修業の進みは速かつた。そのうちに、明倫館へ通ふやうになつた。無人の奮發は、實に驚く可きものがあつて、内外の評判になつた。

毛利の力を以て、明倫館は設けられたのであるから、萬事が整ふて、その當時の學校としては、先づ完全に近いものであつた。けれども、極端に階級制度が、尊重されて居る時代の事として、家門のよい子供は、どうしても特待されて、身分の低いものゝ子弟は、何となく疎んぜられる風はあつた。

無人は、明倫館から歸ると、すぐに玉木の前に出て、その復習をするのが例であつた。假し明倫館の教へても、玉木の意に違ふて居る事は、遠慮なく訂正するから、無人の輪講は衆にすぐれて、他の視廳をひくほどであつた。

玉木は、家の裏手に在る畑へ、自分で手入れをする。その手傳ひは、無人が爲る事になつて居るが、肥料の鹽梅から、鉄の入れやうまで、玉木が、一々教へてやらせるので、無人は、いつか農民のする、一と通りの事を覺えた。

後年に、那須野原へ引籠つて、眞の農民生活をした時、附近のものが『乃木將軍は、百姓の事を知つて居られる』といふて、感心したのは、全く青年時代に、玉木から仕込まれて居たからである。

七

『伯父さま、只今戻りました』

『おう、歸つたか』

『ハイ』

『さア、一と息入れたら、裏の畑へ廻つて、手傳ひをするのぢや』

『ハイ』

玉木は、裏手の空地へ、狭いながら畑をつくつて、汗の身や漬物は、それから取上げるやうに、してある。

無人ばかりが働くのでなく、玉木も共に、働いて居るのだ。口やかましく指圖しながら、頻りに畑を掘返して居ると、玉木は、突然叫んだ。

『あツ、何をやるか』

無人は、振返りながら答へた。

『草履を捨てました』

垣根の外へ、前鼻緒の切れた草履を、無人が、投げ捨てたのを見付けて、さも一大事なるかの如く、大きな聲で答へたのであつた。

『鼻緒が切れたら、繕ふたら何うぢや』

『前鼻の所が千切れて、形もない位になつて、繕ふことも出来ませぬ』

『それで捨てたのか』

『ハイ』

『何故捨てる。はやく拾つて来い』

『ハイ』

如何に恩師の申付けても、あまりに馬鹿らしく思つたが、否ともいへず、不性無性に、垣根の外へ出て、その草履を拾つて来た。

「捨てたのは之れで御座ります」

「可し。それを畑の中へ、履み込んで置け」

「ハイ」

玉木のいふ通りにして、草履は、畑の中へふみ込んだ。

「ちよつと、此處へまゐれ」

「ハイ」

「凡そ世の中のもので、苟も形ある以上、用をなさぬものはない筈ぢや。薬といふものは肥料になるから、那アしてふみ込んで置くと、作物の爲めになる。何事にも細かい注意はせねばならぬものぢや。解つたか」

「ハイ」

斯ういはれたので、初めて玉木の心が解つた。決して吝なのではなく、物事に無駄をさせぬ、といふ趣意から、一足の草履といへども、妄りに捨てさせぬのである、といふ事が、よく解つて、成程と感心した。

無人が、世間からは乃木大将として、深い尊敬を拂はれながら、少しも驕奢の生活に入らず、生涯を質素に終つたのは、少年の時代に、斯ういふ教育をうけた結果と、見る可きである。

其事がすむと、玉木は立ち上つて、

「さア、今日は槍術稽古ぢや」

長い眞槍を執つて、空地に立つた。玉木の前へ、無人は、短い木刀を持って向つた。玉木が、槍術の稽古をする時は、普通のタンボ槍でなく、常に眞槍を以てする。先づ槍を、ふせぐ事を教へて、それから更に、槍と槍とを合せる事を教へる。すべて眞剣でやるのであるから、何となく危険を感じる。それを馴らして、危ぶなく思はぬ程度まで、ふみ込んで教へるのだ。

長い自身の槍を、ちつとつけて進む。無人は、其前に立つて、短い木刀で對手になるのだから、一般の道場でするやうに、チャン／＼バラ／＼の面白い稽古とは違つて、本當に突かれる氣遣ひはない、としても、何となく危険は感ずる。玉木は、只だ槍をつけて、チーツと廻つてゆく、その呼吸を教へるのである。

『えいッ』

と、氣合がはひると、槍の先が、ピカリと光る。無人は、ぶるツと顛へて、一と足ひくから、玉木は、一と足すゝむ。槍先を拂つて、手元へ飛び込む、といふやうな事は、此場合に出来るものでない。チリチリチリと一步づゝ突詰められて、終には垣根に、ピタリと押付けられてしまふ。稽古は、それで一と切りになるのだが、無人の全身は、恰て水を浴たやうに、汗が流れて居る。

次ぎは、槍と槍を合せる稽古、之れは又一段とむづかしい。どちらも眞槍であるから、ちよいと觸れば、すぐ傷がつく。玉木の方で、上手に扱つてくれるから、それに釣られて、無人の槍も閃めくが、玉木の體には、更に觸れない。時にはタンポの稽古槍で、はげしい型は教へるが、多くは眞槍で、立ち合ふ事にしてある。眞劍勝負の呼吸から教へてかゝるので、木刀を持った時の呼吸が、丸で違つて居る。明倫館の道場で、他のものと仕合ひをすると、無人は此呼吸でかゝるから、誰れも持て餘すのが例であつた。

武術ばかりでなく、文事の方も、玉木の仕込み丈けあつて、いつも一頭地を抜いて居た。

長州征伐

一

元治元年から、慶應二年へかけて、有名な長州征伐が行はれた。

幕府が、大軍を送つて、毛利を、征伐する目的で、藝備の國境から、さかんに攻めつけて行つた。それを長州藩士は、巧に防いで、幕軍を撃ち破つた。

此戦ひは、やがて幕府の倒れる、有力な原因ともなり、また毛利の勢力復活ともなつて、頗る面白い舞臺の開けるのが、實は是れからなのであつた。のみならず、無人の初陣が此戦ひであつたから、征長軍の始末は、詳しくいふて置く必要がある。

文久三年の八月、京都に起つた政變。それに引つゞいて、元治元年の七月、宮城へ攻めかゝつた一戦。此二つの出來事が、その原因となつて、いよいよ長州征伐は始められた。

關ヶ原の敗戦から、毛利は、所領の八分通りを失ひ、僅に長防二州の領主として、昔の全盛に引かへ、一時は頗る不振の状態に在つた。

藩主を始め、家來一同の口惜さは、二百年の長い間、一日として忘れた事はなく、いつか一度は、徳川幕府に向つて、此恨みを酬いてやらう、と考へて居たが、容易に其機會は來ないので、空しく腕を撫すつて、時期の來るを待ち

うけた。

待てば海路の日利、といふ諺の如く、矢張り氣長に待ちし甲斐はあつた。嘉永の歳になつて、アメリカの黒船が、浦賀へ乗込んで来て、開國條約を迫つたのが機會となつて、開國鎖港の争ひが起り、朝廷と幕府の折合がつかぬ結果、幕府は止むなく、朝旨に背いて、條約の調印をしてしまつた。

於此、朝廷の逆鱗甚だしく、攘夷の密勅は、沿海の十一藩に下つた。幕府は、朝廷の武力なきに乘じて、非常な威壓を加へ、前例になき手段を用ひて、終に朝廷を抑付けた。

安政の疑獄は、即ち其一つであるが、その代り、四方の志士は、之れが爲めに奮起した。時に、井伊大老の遭難があり、幕府の威力は、全く地に落ち、各藩の主張も區々になつた。

此機會に乗じて、毛利は、京都へ手を入れた。桂小五郎の暗中飛躍は、此時の事であつた。

すべて天下の事は、一方に力の強いものが出ると、その反對に、之れを挫かう、とするものが現はれる。毛利の力が、朝廷の内部に延びて來ると、毛利を嫌つて居る一派が、密かに計畫して、毛利排斥をはじめた。

それが、文久の政變となつて、毛利は、京都から逐出された。三條實美等の七卿は、同時に罪を得て、長州へ落ち込んで來た。

幕府は、之れを機會に、毛利を抑付けよう、として、七卿の引渡をせまり、其他にも種々の手段を以て、毛利を虐めにかゝつた。

斯うなると、毛利の藩論も、硬軟の二つの分れて、ヤツさもツさの大騒ぎをはじめた。その間には、さまざまの曲折もあつて、硬派の主張は、實行される事になり、各自に武裝して、京都へ押出した。

表面の口實は、御勘氣御赦免の哀訴といふのであつたが、とに角、四百人以上も、武裝して押寄せたのであるから、それを無事に、入洛させる筈はない。どうせ戦争になるのは、知れて居る。

初めから其覺悟で、押寄せて來た事は、幕府の方でも、よく知つて居るから、其處で、戦ひは開かれた。それが元治元年の七月十九日であつた。

午前の戦ひは、長州勢に有利であつたが、午後になつてから幕軍の勝利になつた。市街は、殆ど七分通り焼かれて、一時は宮城も危かつた。

毛利の家來で討死したものは、來島又兵衛、寺島忠三郎、入江九市、久阪玄瑞等の傑物であつた。その他、久留米の眞木和泉が、之れに加はつて居て、事破れてから自殺した。國司、益田、福原の三家老は、生命からんぐて、長州へ引上げた。幕府は、之れを幸ひにして、毛利へ追つて來た。

『宮城へ、大砲をうち込み、それが爲め、玉座を移すに至つた。此一事は、容易ならぬ大逆で、其罪斷じて赦す事が出來ぬ』

と、いふのであつた。此一事は、流石に毛利の方でも困つたが、其外に、もう一つの罪狀とされたのは、下之關に於て、英米佛蘭の四國の商船に、砲撃を加へた事で、之は幕府が、條約に調印して居るにも不拘、毛利が、勝手に斯様な事をやつたのは、まことに不都合である、といふのである。

二一

文久三年五月十二日は、勅命に依る、攘夷の期限であつた。

海を控へて居る、大きい藩へは、すべて此勅命は、下つて居たのだが、そのうちでも、毛利は、下の關の海峡を、控へて居たので、その責任は、最も重く、沿海の防禦には、少からぬ金と人を使つて、今から見れば、甚だ不完全なものではあるが、とに角、砲臺も築けば、多くの藩士も置いて、充分の監視はして居たのである。

幕府との條約に依れば、沿海の通航は、固より自由なのであるから、外國の船艦は、平氣で往來して居る。それを

不都合なりとして、朝廷からは『二念なく撃拂へ』との御沙汰が出て居るのだから、毛利は、それを却つて好き機會として、夷國の船艦が、もし此海峡を通過したら、撃ち拂つてやらうと、待ち構へて居た。

其處へ、通りかゝつたのが、英米佛蘭四ヶ國の商船であつた。それと見るより、先づ前田の砲臺から、はげしく砲撃をはじめた。如何に勅令が、下つて居たにもせよ、無斷で、通りかゝりの商船を砲撃したのであるから、その亂暴は、いふ迄もない。その外の砲臺からも、同時に砲撃をはじめたので、四ヶ國の商船は、這々の體で、横濱へ引ツ返して來た。

此次第を、領事館へ報告したので、領事から公使へ申出る。公使は、幕府へ談判に及んだ。幕府の返答は、『毛利の致した事は、先づ毛利へ掛合つてくれ』との事であつた。於、茲、毛利へ掛合をはじめると、毛利の答へが、頗る振つて居る。

『朝廷からの勅命に依つて、砲撃を加へたのは、まさに事實であるが、これは我日本帝國の主權者が、斯くせよといふのであるから、止むを得ず行つた事であつて、我藩には、何等の責任もない。』

砲撃した事が、若し悪いといふのなら、それは朝廷へ、掛合ふのが正當である。併し、朝廷は、内外の政治を、徳川幕府へ、御一任なされて居るから、先づ幕府へ掛合つたら可からう。

朝廷へ、直接に掛合つても、恐らく朝廷からは、何等の御答へもあるまい』
斯ういふ答へをするから、公使は、更に幕府へ掛合ふと、幕府の答へは、矢張り同じ事だ、毛利に掛合へといふのである。

互に責任の塗り合せて、いつまで掛合つた所が、とても要領は得られぬ、と見て取つたから、公使は、此始末を、本國政府へ報告して、その命令を待つ事にした。

其處で、四ヶ國の政府は、だん／＼相談の末、いよ／＼毛利に、手詰の掛合をして、それに應ぜぬとなつたら、止

むを得ないから、一戦に及ばうとなつて、茲に聯合艦隊十九隻は、横濱へ集合して、毛利へ、最後の談判を開いた。けれども、結局は水掛論で、どうしても毛利は、責任を負はぬから、終に開戦といふ事になつた。

元治元年の八月、十九隻の軍艦は、下關海峡へ迫つて来た。毛利の方でも、豫めの覚悟はあつて、それ丈の準備は整ふて居たので、飽迄も戦ふ事に決した。

丁度、此時に、京都の戦争があつて、毛利の兵は、散々の失敗で、三家老を始め、續々引上げて来た。その跡から、談判の使節が、やつて来る、といふ事で、これも一つ間違へば戦争になるのであるから、流石の毛利も、之れには頗る弱つた。

下關へは、外國の軍艦が迫つて居る、といふ場合に、政府からは兵を率ゐて、談判の使節が、やつて来るのでは、とても堪まらない。いづれか一方を片づけてしまはぬと、如何に奮發しても、力の及ぶ筈はないので、之れには一と通りならぬ當惑した。

所へ、伊藤俊輔と井上聞多が、イギリスから歸つて来て、此和解の衝に當りたい、といふのであつた。

毛利親子には、その考へはあつても、藩士の多くが背かないから、伊藤と井上には氣の毒であるけれど、和解はせぬ事にして、いよく戦争の布告をした。

兩人は、イギリスに居て、此事を聞いたから、生命がけて歸つて来て、和解をさせようとしたのであるが、斯ういふ事になつては、自分の面目も立たないから、一時は身をかくして、更に時機の来るを、待つ事になつた。

聯合艦隊の方では、毛利が、和解を望まぬ、と聞いて、すぐに開戦した。近く寄つての斬合は別として、遠く離れて居て、砲戦をしたのでは比べ物にならぬ。毛利の兵は、滅茶々に敗られてしまつた。

戦ひに敗れて見ると、力の及ばざることも判つて、和解の道を取らなかつたのを悔いたが、今は遅い。併し、伊藤と井上を捜し出し、何とか適宜の處置を執らせよう、として、種々と苦心したけれど、兩人は、どこへ行つたか、更に判らなかつた。

所へ、幕府の使節は、きびしく迫つて来る。その跡から、兵士を繰出す支度をもして居ることが、漸く判つて来たから、どうしても、外國との關係を、はやく和ける必要がある。内外の事に、毛利侯の心配は、一層深くなつて来た。幸ひにして、杉徳輔が、兩人の居る所を、知つて居て、連れ戻したから、毛利侯は、井上を呼んで、和解の事を托した。

徳輔は、後ちの孫七郎であるが、井上とは、特に深く交つて居たので、そのかくれて居る所を、知つて居たのだ。けれども、伊藤は、身分が低くて、此時には拜謁し得ず、獨り井上が、御前へ出て、いろ／＼と相談をうけた。

『私共は、イギリスから態々歸つて来て、和解を御勧めいたしましたでしたが、それは御採用がなくて、開戦を遊ばしたのであるから、どうせ戦ふものなら、もう少し續けて見たら如何ですか』

と、皮肉な事もいふて見たが、毛利侯は、そんな事は、耳にも入れず、只管に頼む、といはれて見ると、その上に、拗ねる事もならないから、井上も、止むを得ないで、終に引受ける事にした。

その代り、伊藤を、談判の一員に加へる事は、藩に於て、公に認めるといふ事にした。且つ高杉晋作を、談判の正員にして、自分と伊藤は、周旋掛りといふ格になつて、これから敵艦へ出かけて、談判を聞いた。

高杉は、松陰門下の俊才で、辯と智と膽と、此三つのすぐれて居た事は、すでに衆人の認むる所であつた。緋緘の鎧に、烏帽子直垂といふ扮装で、敵艦へ乗込んだ時は、實に、威風堂々たるものであつたといふ。此談判は、美事に高杉の主張が通り、萬事は、幕府の責任といふ事になつて、伊藤は、顧問のやうな役々を引受け、イギリスの軍艦に乗り、横濱へ行く事に決した。

外夷との關係は、之れで一段落となつたが、幕府の談判は、ナカ／＼むづかしく、その條件を承知すれば、毛利は、半潰れになつてしまふから、容易な事でない。

於茲、藩論は、二つに別れた。國を擧げて戰ふ可し、といふ派と、條件は重くも、此際は幕命に従ふ可し、といふ派と、硬軟に立別れて、その争ひは非常なものであつた。

元治元年九月廿五日、山口の城内に於て、御前會議を開き、その何れにす可きかを、決する事になつた時、井上や高杉は、飽く迄も硬論を唱へて、トウ／＼軟論を説破り、開戦といふ事に定めた。

その歸途に、井上は、暗撃をされて倒れた。有名な袖付橋の遭難、斬つたものは屈強の壯士、兒玉七郎、木村新、周布藤吾、中井榮之丞の四人であつた。

高杉は、災の自分に及ぶ事を恐れて、一時身をかくす事にした。その跡で、井上の味方は、多く牢へ入れられたり、謹慎を命ぜられたり、硬派の連中は、すべて抑へつけられてしまつた。

毛利侯は、寺院へ押籠められて、幕府の方へは、改めて降伏を乞ふたが、此時には談判が破れて、幕府の大軍は、すでに國境へ迫り、總督の尾張大納言は、廣島まで來て居たから、生優しい事で、勘辦する譯はなく、その結局は、大部むづかしかつた。

時に、薩摩の西郷吉之助が現れて、まづ尾州侯を説きつけた。西郷は、尾州侯に、最も信用されて居たので、その言は、存外よく聞かれて、西郷の取扱ひにまかせた。

國司益田福原の三家老に切腹させて、京都の戦争に對する、責任は明かにさせた。毛利侯に對する事は、いづれ後からとして、謹慎を命じ、その他、中村九郎、周布政之助等も、責を負ふて切腹したから、之れで幕府の面目は、立つ事になつた。

三家老の首は、廣島の國泰寺の門前へ、三日間晒された。尾州侯は、之れで全軍を引上げたから、最初の長州征伐

は、一先づ終局を告げたのである。

然るに、博多へ逃げた高杉が、三家老の切腹と、藩侯の謹慎を聞いて、「これは容易ならぬ事になつた、此儘にして置いたら、毛利の家は潰される」と、大急ぎで歸國して、是れから同志の糾合にかゝり、奇兵隊を率ゐて居た。山縣狂介を説いて、その兵をくり出させる事にし、大荒れに荒れて、萩の城下へ攻め寄せ、鷲天動地の大活動をしたので、藩論は、再び硬派の主張に傾き、二度目の長州征伐が始まる、といふ段取りになつた。

四

奇兵隊の事績は、幕末の長州史に於て、頗る重要な關係を有つて居るのみならず、乃木將軍の生涯には、容易ならぬ因縁のある事を、深く知つて置く必要がある。

また、長州征伐の幕軍を、美事に打破つて、これが爲め、時勢の轉換に、一大影響を與へたものは、奇兵隊の活動が、その土臺になつたのであるから、奇兵隊の事は、詳しく述べて置かねばならぬ。

元治元年に、京都の戰爭で討死を遂げた久阪玄瑞が、或時、高杉に向つて、
『徳川の泰平が、二百餘年もつづいたので、武士の魂は、すっかり腐つてしまつたから、今後の活動には、從來の武士のみに依つて、大事を決する、といふ事は、頗る至難しい、と思ふ。どうしても、町人百姓のうちから、然る可き人物を見出して、それに武士の爲す可き事を教へて、いざといふ時の備へをして置く必要がある。殊に、我藩が、天下に率先して立つ以上は、當分孤立無援である事を覺悟し、とに角、大勢を造る間は、我藩の獨力を以てするのであるから、その準備としても、從來の武力の外に、新しい武力をつくつて置かねば、實際の活動は出来まい。それには武士を中堅として、町人百姓を多く集めた、一團の義勇兵を組織しようではないか』
と、いふ事を、頻りに説いたので、高杉も、それに同意はしたが、幾分の懸念があつて、

『お前の考へは頗る良い、と思ふが、老臣や重役が、果して之れを許すか、どうかといへば、必ず反對するに違ひない。而て見れば、考へとしては、良いが、實行は至難しいであらう。それについて、お前は、どういふ考へがあるか』

斯う答へた。

『お前は、幸ひ世子殿の御寵愛深く、御側に接近する事が出来るから、頑冥な老臣や重役を對手にせず、直接に世子殿へ願つて、その許しを得たら、すぐ出来る事だ、と思ふが何うだ』

『是非頼む』

『宜しい、引受けた』

相談は、忽ち決まつて、高杉から世子殿へ、直接に願ふ事となつて、久阪は、その返事を待つて居る。

高杉の父は、小忠太と謂ふて、長門守の傳役を、勤めて居た。その關係から高杉は、長門守の御側に出て、いつも御對手をして居たから、長門守も、高杉には、特別に眼をかけてゐた。

單に之れ丈の關係から、高杉を愛するといふのでなく、高杉の人物が、非常にすぐれてゐたので、賢明な長門守は、高杉を有爲の侍として、深い信頼の有つた、といふ事情もあるのだ。

高杉から、義勇兵の事を聞いて、流石の長門守も、急に許す心は起らなかつた。

『悪い考へとは思はぬが、それを許す事になると、必ず一般の藩士から、故障が起つて来るに違ひない。老臣や重役のうちにも、必ず苦情をいふものはあらう。それを押切つて迄、之れを許すのは何うであらうか、いづれ一度は、

左様いふものを必要とする時も来るであらうが、今の場合、すぐ許す、といふ事はいへぬ』

是れが、長門守の意見であつた。

高杉からは、之れに對して、種々の意見を述べて、頻りに願つて見たが、どうしても許されなかつた。於此、折角の考案も、實行が出来ず、久阪は、頻りに憤憤したけれど、終に如何ともする事が出来なかつた。

そのうちに、京都の事變が起つて、久阪は死んでしまつた。高杉は、その前に疝癪を起し、藩論に背いて、江戸へ出奔した。義勇兵の事はかりでなく、すべて老臣や重役の定める藩論には、新進氣鋭の連中が、服従し得なかつたのは事實で、殊更に、松陰門下の高杉や久阪になると、年こそ廿歳を越えただばかりでも、天下の事に關しては、一個の見識は持つて居たから、容易に藩命に従ふやうな事はなかつた。

高杉は、坊主になつて水戸に隠れて居たのを、終に抑へられて、國元へ送り返され、終に座敷牢へ入れられてしまつた。

義勇兵の事は、之れが爲めに、中止されて居たが、外國との戦ひについて、高杉は、入牢を赦され、談判の全權を委ねられて、その講和談判は、毛利に都合のよい結果となつた。

其處で、高杉は、長門守に迫つて、義勇兵の事を、また／＼願ひ出した。此時は、藩の事情も、大部變つて來たし、それに講和談判について、偉功はあり旁、終に高杉の願意を、聞き届ける事になつた。

五

義勇兵の組織は、終に許したけれど、その本陣を、萩と山口に置く事は、藩の兵士との衝突を恐れて、之を許さぬ事にした。

純な武士ばかりでなく、町人百姓を多く集めて、その中堅を、武士で固める、といふ組織のものであるから、藩中の身分ある武士は、無論之れに加はる筈はない。従つて、變體のものである丈、本格の武士ばかりから組織された、隊の方から見れば、之れを輕蔑する傾きがあり、それが爲めに、何時どういふ事で、衝突するか判らない。其處

で、本陣を厚狭郡の吉田村に置いて、分營を、下關に定めたのは、最も宜しきを得た處置であつた。

下關は、古い船着場で、貨物の集散地でもあり、本土と九州の聯絡をつける、咽喉といふ可き土地で、且つ四國へも近いから、四方の有志は、多く此地を通過する。殊に、土地の人氣からいふと、自由港の如き状態にある。斯様な地に住む人は、氣象も快活で、巧く煽れば、存外に利用も出来るし、物資の徴發をする場合にも、便利であるから高杉は、是等の事情に眼をつけて、此地へ分營を置く事にしたのである。

さて、いよく組織をはじめると、集まつて来るものには、町人百姓はいふまでもなく、その頃では、人間の扱ひをうけて居ない、穢多や非人までが、表面から其身分を名乗つて来るのではないけれど、追々に加はつて来た。たとへ数は少いにもせよ、高杉が、之れを知りながら黙つて居たのは、實に偉いと思ふ。

舊來の勢力に依らずして、茲に新しい勢力をつくらうとする以上、是れ位の覺悟がなければ、とても大きい仕事は出来るものでない。人間の上に、甚だしい階級を設けて、その權利にも、驚く可き程の等差をつくつて居た時代に、高杉は、此位に新しい考へを、持つて居たのだから、那のやうな大仕事も出来たのであらう。

藩士のみで組織された、本格的兵隊と違つて、萬事の行き方が新しいので、それ等の區別を、判然させる爲めに、その隊名を、選ぶ必要があるので、高杉は、之れを奇兵隊と名づけた。

正兵に對する奇兵、といふ意味であるが、昨今の著書には往々にして、之れを騎兵と誤つて居るのがある。馬に乗つて居る騎兵ではなく、正奇の奇であるから、これを取違へてはいけない。

最初の隊長は、赤根武人であつた。高杉が、非常な苦辛を以て、成立させたのである事は、萬人が皆認めて居るに拘らず、自分が隊長にならず、却つて大島郡の士民から、成り上つた、赤根を押し立て、之れを隊長にした所は、ます／＼高杉の偉い事を思はせる。

長州の奇兵隊といへば、今の若い人達は、すぐ山縣有朋を聯想するであらうが、山縣の隊長になつたのは、ずつと

後の事ことで、最初さいしゆは赤根あかねであつた。その次つぎが太田市おまたい之進のしんといふ順じゆんで、山縣やまがたが隊長たいちゆうになつた時は、丁度ちやうど維新いしんの際ときであつたから、頗すこぶる好運かううんの立場たちばなで、奇兵隊きへいたいの山縣やまがた狂介きやうけいとして、忽たちまちちに廣ひろくく知られたのみならず、破格はかくの位地ゐちを占ひむる事ことを得たのである。

高杉たかすぎが、博多はくたへ逃げた時は、野村のむら望東尼もちんといふ婦人ふじんの援たすけを得て、その庵室あんしつにかくまれて居た。福岡ふくおか城外ぐわい一里餘いちりよの田舎いなかに居たので、黒田藩くろだはんの干渉かんさふは受けなかつたが、國元くにもとの事情じじやうを聞いて、急に引返ひきかへさうとした時とき、此地方このちほうの同志どうしで、早川はやがわ勇月ゆうげつ形洗藏かたせんざうなどといふ人が、その危あやきを説といて、しきりに引留ひきどめようとしたけれど、高杉たかすぎは、どうしても歸國きこくするといふので、終つひに同志どうしも斷念だんねんめて、高杉たかすぎの歸國きこくを送おくつた。

その時とき、野村のむらは高杉たかすぎへ、旅行りょぎんの支度しだく一切いっけいをしてやつて、大おほいに激勵げきれいした、といふ事ことであるが、この外ほかにも、博多はくたの魚間屋いさまやで、石藏屋いしざう卯兵衛うべゑといふ俠客げいかくがあつて、之れも高杉たかすぎの爲ためめに、却々かへかへ盡つしてやつた。

野村のむらと卯兵衛うべゑは、明治めいしになつてから贈位さうゐされた。卯兵衛うべゑの方は、後のちに奇兵隊きへいたいへ加くわはりて、非常ひじょうに働はたらいて居たが、幕吏まくしの爲ためめに暗殺あんさつされた。野村のむらは、一たん黒田藩くろだはんに罪つみを得て、姫島ひめじまに流ながされたのを、高杉たかすぎが、救すくひ出して、之これは生涯しやうがいを、下の關せきで終つひつた。

高杉たかすぎが、博多はくたから引返ひきかへして、一ひとと旗擧はたあげようとしたのは、幕府ばくふへ對たいして、軟論なんろんを唱となへ、三家老さんかろうに切腹せつぷくさせたり、兩殿りやうでん様さまを、寺院じゆんへ押籠おしこめたりした、俗論派さくろんぱいの老臣らうしんや重役じゆうやくを逐拂おつづつて、藩はんの勢力せきりきを、自分等じぶんらうの手に收まめ、それから幕府ばくふに對たい抗かうして、仰おほるか反はんるかの一ひとと勝負しやうぶを試こみようとするのであつたから、先まづづ取敢とらず、萩はぎの城下じやうかへ押寄おしよせる必要ひつやうがあるので、それには山縣やまがたの監督かんとくして居ゐる、奇兵隊きへいたいを利用りようせねばならぬ事ことになつた。

六

高杉たかすぎは、博多はくたから來ると、長府ちやうふ三田尻さんたじりの方面ほうめんに出沒しゆつぷつし、到いたる處ところに、同志どうしを集あつめて、頻しばしばりに擧兵きよへいの準備じゆんびをした。

遊説の結果、大勢頗る可也、と見て、慇々擧兵に決したが、どうしても奇兵隊の力を要する所から、只だ一人で、下關へ乗込んで来た。

それは、山縣狂介を説いて、諾といはせる爲めであつた。奇兵隊は、高杉のつくつたものではあるが、現に山縣は、隊の監督をして居るので、之を利用して居よう、とするには、先づ山縣を、説きつける必要があるから、それで下關へやつて来たのである。

山縣は、藩の輕輩であつたが、自ら發奮して、文を學び、武を研いて、上格の武士も及ばぬ、修業を積み、有らゆる輕侮と嘲罵に堪へて、チリ／＼と自分の位地を進め、終に奇兵隊の監督にまで漕付けたのであつた。

槍を取つては、多く彼の向ふに立つものはなく、文章や歌に於ても、拔群の力を持つて居たので、同志の間には、すでに能く其人柄を、認められて居た。

高杉と同じやうに、松陰門下の一人ではあつたが、松陰に學んだ年月は、一番に少かつた。

慶應元年の正月三日、昨日からの大雪で、今日は一段と、ひどく降つて居る。殊に、風がはげしく吹いて、關門の海峡は、非常な荒れやうで、玄海から押寄せて来る波浪は、山の崩れ落つる如く、凄しい音を立て、ドツドツと押し来る。吹きすさぶ風は、雪を捲いて、咫尺を辨せぬほどであつた。

町の中は、全く人足が途絶えて、有繋に、稻荷新地の遊廓も、今日ばかりはピンともシャンともいはぬ。屋上の積雪は、尺に及び、街頭の吹雪は、行人を惱ますこと一通りでない。

奇兵隊の陣屋も、出入の人絶えて、當番の歩哨が、頻りに降る雪を拂つて居るのも、寧ろ可笑しい位である。

『鳥渡願ひます』

『何ぢや』

『山縣さまへ御手紙で御座います』

「ふーむ、どこから来たか」

「その御手紙に、詳しく書いてあるさうで御座います」

「お前は、どこから来たのか」

「ツイ、そこから頼まれてまゐりました」

「左様か、少し待つて居れ」

番兵は、門のうちへはひつた。使の男は、吹雪の中に、立つて居る。

昨夜から、泊り込んで居た、山縣は、隊士の取次ぐ手紙を、披いて見ると、これは又意外千萬、博多へ去つたと、聞いて居た、高杉の手紙であるから、早速読み下して、

「よし、承知したといふてやれ」

「ハツ」

隊士は、山縣の前を去つた。

稻荷新地の馴染の樓に、獨り黙然として、人待ち顔に控へて居る高杉、その平生から考へて、今日の高杉は、ひどく異つて居る。どういふ場合にも、酒と女に離れた事のない人が、今日は、其れに及ばぬ、といふて、獨り考へて居るらしいので、樓のものも不思議な事として、思ひ／＼の噂をしてゐるのであつた。

所へ、奇兵隊の山縣が、突然やつて來たので、一同は支關へ出迎へた。

「まア、隊長さま、ようおいでなさいました」

「どうして、此降りますのに……」

「すぐに、彼の方へ知らせませう」

樓婢は、口々に勝手なことをいふて、はやくも狎妓を迎ひにゆかう、とするから、山縣は、手を振つて、之を抑へ

ながら、

『高杉が、来て居るぢやらう』

『ハイ』

『その用事で参つたのぢや。今日は、遊んで居られまい。彼女に知らす事は、少し控へてくれ』

『まア、さうで御座いましたか、さア、どうぞ彼方へ……』

遊びに来て、眞面目な人が、殊更に、用事があつて来た時の澁面は、對手の女に、乗ずる機會を與へなかつた。殊に、道樂者の高杉が、今日に限つて、女も呼ばねば、酒も飲まず、獨り考へて居る不審さを思へば、何か仔細のあるに違ひない、と、平生から斯ういふ連中の扱ひに、馴れて居る女共は、決して悪勧めはしない。

座敷の襖が開いたので、高杉は、ちつと其方を見た。

『やア、よく歸つたのう』

『うむ、来たか』

兩個は、手を握つた儘、しばらくは無言であつた。

七

『お前が出奔した、といふので、俗論黨の奴は、大騒ぎをして探して居たが、終に分らぬので、よほど弱つたやうぢやつた』

『さうだらう、彼奴等に逐はれて、押へられるやうな已でもないが、行方の判らぬのでは、彼奴等も弱つたらう』

『して、その後は、何うして居つた』

『山口を遁れて、此處まで來ると、中村圓太に逢ふたのを幸ひ、博多通ひの船に載つて、彼地へ行き、魚問屋の卯兵

山縣の膝は進んだ。高杉は、稍聲を低くして、

「奇兵隊を借受け度いので、貴様の承諾を求めに來たのぢやよ」

「何ッ、奇兵隊を貸せ、といふのか」

「うむ」

「ど、ど、どういふ理由か」

「貴様は、今の状態を、何と見るか」

質問は突然で、山縣には、能く判らないらしい。

「三家老の切腹、君公の閉居、此事を、貴様は何と思ふ」

「……………」

「三家老は、何の爲めに切腹したのか、聞けば幕府の意を受けて致したのぢや、といふが、果して何うか。君公の御

閉居は、是れも幕命の結果と聞く。そんな弱腰で、此前途を何うする覺悟か。切腹したものは氣の毒ぢやが、それ

は過ぎ去つた事で、今は如何とも致しがたい。只君公の御身は何うなるか、それを思ふ時は、實に心も寒く肌

粟を生ずる。閉居の次の幕命は、必ず切腹か國替、極軽く見て、滅地處分ぢや。貴様等は、全體之れを何うするつ

もりか。我藩の運命が、斯く相成つたのも、つまりは、老臣や重役が、引ツ込思案からの災ひぢや。三家老の切腹

は、止むを得ずとするも、君公の御身の上は、我等の奮發に依つて救ひ得る、と思ふが、誰れ一人として、それに

考へを及ばさぬのは、藩士の骨も腐つたと見ゆる。貴様は、何う考へて居るか」

何事にも要慎深い、山縣は、壯い時分から其通りで、容易に意見をいはぬ。竹を割つたやうな、高杉の氣性とは、

全然違ふ。

「己れは、既う相當に同志の糾合も出來たし、それ／＼と手配りもしてしまつたから、此上は、奇兵隊の力を利用し

て、萩の城下へ攻め寄せ、一擧にして俗論黨の本據を、叩き潰した上、藩論を定めて、幕兵を國境に迎へやうと、覺悟を定めたのぢや。奇兵隊は、元己れのつくつたものであるが、今は貴様が監督してゐるから、一應は貴隊の承諾をうけねばならぬ、と考へて、此大雪を犯して來たのぢや。事は急を要する。すぐに返辭を聞き度い、どうぢや」

「まア、ちよつと待つてくれ。これを決するには、今夜考へるから明朝まで、待つて貰ひ度い」

「アツハ、、、、相變らずの悠長さ。併し、貴様としては無理もない。よし、今夜までは待たうが、朝までは待つてぬ」

山縣は、また考へに沈んだが、

「宜しい。夜半までに確答をしよう」

「それでは、待つて居るぞ」

かくて、山縣は去り、高杉は、女を呼んで、酒を飲みはじめた。

八

伊藤俊輔は、後の博文であるが、武に於ては、頗る弱虫のやうに、いはれて居たにも拘らず、高杉の遊説に對しては、第一番に力士隊を率ゐて、駆つけて居るのが、妙だ。

當時、高杉から、或人へ送つた手紙のうちにも、俊輔は、存外に強い所があつたけれど、狂介は、逡巡して容易に決し得なかつた、といふ意味の事が書いてある。

併し、此一事を以て、山縣は、伊藤よりも弱い、と斷ずるのは無理だ。伊藤は、樂な立場で、進退の自由を得て居たから、どうしても其決心が、はやく定まる譯で、山縣は、奇兵隊の監督といふ役を、背負つて居た丈けに、幾分か逡巡したのであらう。

山縣は、本陣へ引返して来て、千思萬考した結果、終に奇兵隊を率ゐて、起つ事に決めた。

高杉の要求は、單に奇兵隊を貸してくれ、といふのであつたが、隊士を貸して、自分は跡へ残る、といふやうな、馬鹿な事は出来ない。高杉が、奇兵隊を貸せ、といったのも、つまり山縣の出馬を促したのであつて、隊士のみを借りたいと、いふのではなかつた。

約東の時刻よりも早く、山縣は、高杉を訪ねて、共に起つ可き事を申込んだ。

「貴様が、一しよにやつてくれる、となれば、それで充分ぢや。跡は勢で押してゆく」

「併し、隊士は僅に四百餘り、是れ丈では仕やうがなからう」

「イヤ、それ丈があれば大丈夫だ」

「たつた四百人で、どうなるか」

「戦ひは勢で進む。敢て頭數の多きは望まぬが、萬事は、己れに任して置け」

「手配は考へてあるか」

「それは考へてある」

「どうする覺悟か」

「貴様の方から、百人丈に分けて貰つて、彼の海岸に在る、癸亥丸を借用して、海路を救へ出るから、貴様は、残る三百人を率ゐて、陸路を救へ攻め込んでくれ」

「えッ、癸亥丸を借用する、といふが、それは話合がついて居るのか」

「馬鹿なッ、そんな事相談して纏まる、と思ふか、無斷借用ぢや。ハッハ、、、」

癸亥丸は、藩船の一つで、英國から買った船で、その頃では自慢の軍艦であつた。

「船長が承知すればよいが、もし故障をいふと、困るぞ」

『無斷借用に、船長の承諾は要らぬ、彼是れいへば、打ち斬るまでの事ぢや』

高杉の意氣は、實に壯なもの、その一言一句は、懦夫をも立たしむる概がある。

『その覺悟は、まづ可いとして、兵糧その他の軍費は、何とするか』

『先づ此處の陣屋に、火を放ち、番士の狼狽に附け入つて、掠奪するのが第一ぢや』

『藩の陣屋を焼くのか』

『戦ひに勝てば、そんな事は何でもない』

『成程……』

すべて戦ひといふものは、勝つた方が正しく、負けた方は、理があつても正しくない事になる。

『勝てば官軍、負れば賊』といふ事は、戦ひの上の眞理とも見られる。高杉は、この呼称を心得て居て、どこまでも

一六勝負をする氣で、押強く進んでゆかう、とするのである。

『その勢ひで進めば、どうかなるでもあらうが、只勢にのみ囚はれて、輕はずみの事は出来ぬ。お前の調子は、實に

晴々しくも思はれるが、陸路を四百餘りて進むのは、些か無謀のやうにも思ふ。況して、海路を救へ向ふのは、萬

死に一生を期するの手段で、どうも安心は出来ぬ』

『ハツハ、ハ、ハ。また貴様の大事取りははじまつた。萬死に一生は、海も陸も一つ事ぢや。其處に、此戦ひの妙味

はある、と知らぬか。さ、無駄な問答に、時刻が移つた。取敢ず奇兵隊を繰出してくれ、己れも出かける』

『第一に何を』

『陣屋の焼打ちをするのぢや』

『その次ぎは……』

『癸亥丸を奪ふて、押出すのぢや』

「何と。すぐ押出すのか」

「うむ」

「此風雪を冒して……」

「うむ」

「如何に癸亥丸でも、彼の激浪は乗り越せまい」

「人間の勢ひに、風雪や激浪が、何の糞ツ」

「ふふーむ」

「所詮は、君公の御爲めに働くのぢや。うまく行つたら、毛利の天下、面白いぢやないか」

流石の山縣も、頭腦がフラ／＼となつた。

善いも悪いも、批評の餘地を與へぬ。高杉の遣り口は、いつも是れであつた。

九

下の關の陣屋に、奇兵隊が押しかけ、火を放つて、陣代を斬つた。多くの兵糧や武器は、すべて掠奪し去つた。

同じ時、海岸に風浪を避けて居た、癸亥丸へ乗込んで、先づ船長を斬り、船員を諭して、船を奪ふたものがある。

これは高杉が、自ら率ゐた、奇兵隊の一部であつた。

山縣は、陸路を萩へ、高杉は、海路を萩へ、ひとしく進んだ二人は、どちらも成功であつた。

高杉のいふた通り、戦ひは勢である。山縣の率ゐた四百餘は、途中から追々にかけた同志で、萩へ着いた頃は、

千人に近くなつて居た。繪堂其他では、可成の衝突もあつたが、すべて思ひの儘に行つた。

海路を取つた高杉は、風浪に惱まされた代りに、萩へ着いた時間は、豫期したより早く、山縣等の來るを、待ち受

ける間に、再三の小競合はあつたが、戦といふほどの事はなかつた。

城外には、家老の粟尾隼人が、三千餘の藩兵を率ゐて、高杉等の攻め寄せるのを、待ち受けて居た。

高杉は、山縣の着くと同時に、大がりの戦ひを闘いたが、互に一勝一敗、容易に終局の勝利を得る、見込はつか
なかつた。

長く對陣して居れば、高杉等の不利になること、固よりいふ迄もなく、少し位の無理は行つても、一氣にして勝を
制するの策を取らねば、當初の目的通りになるまい。山縣や伊藤とも、度々うち合せをして、いよ／＼最後の戦を、
試むる事に決した。

只一つ、不思議な事は、それ迄の戦ひに、猶う一と息といふ所て、味方の兵士が、何となく撓んで、思ふやうに攻
勢を取らぬは、どうい理由か、高杉にも解らなかつた。

一夜、高杉は、こつそりと陣中の見廻りを行つて視ると、始めて其理由を知る事が出来た。

『粟屋の本陣に、一引三ツ星の定紋を、染抜いた旗が、澤山に在る。それは毛利家の御紋である、といふ爲めに、攻
めかゝるものの心に怯れが出て、残念ながら浮足になるのである』

と、いふ事情が、すつかり判つたので、高杉は、その翌日、白い切れ地を取寄せて、澤山の旗をつくり、自分が筆を
執つて、一引三ツ星の定紋を書いて、それが出来ると、すぐに各隊の重立ちたるものを呼んだ。

『敵の陣中に在る旗は、みな偽物である。此方の掲げた旗は、毛利家の御定紋が、現れてある通り、正しい心を以て、
正しい目的の爲めに戦ふのであるから、此御紋印の下に死するは、眞に報國盡忠の至誠あるものに限り、

我等の目的は、君公を、御閉居の寺院から、御救ひ申して、元の如く藩公と仰いで、藩政の改革を謀る、といふの
であるから、此上の忠義はない。此心を以て、此旗印の下に只死を賭して、戦ふ覺悟をするが可い』

高杉は、斯ういふ訓示をして、大に激勵する所があつた。

此夜の一戦は、終に大勝利を得て、粟屋の首を取り、城兵のすべては降参した。高杉の激勵と、旗印の事が、非常に影響したのに違ひない。

毛利侯父子を、寺院から連出して、城内に入らしめた。井上聞多始め、罪を得て居た同志には、すべて赦免の御沙汰が下り、萩の藩政は、全く高杉の一派に依つて左右される事になつた。

此事は、幕府の方へ、はやくも知れたので、更に幕府から、使節を送つて、前に尾州總督へ誓つた、條件の實行を迫つた。

高杉等は、此使節を斬つて、幕府へ、逆捻の詰問状を發した。斯うなつては、幕府でも、手を束ねて居る事は出来ない。於此、第二の征長軍を送り、紀州侯を總督として、いよく藝州まで出馬となつた。

將軍の家定は、病を推して、大阪城へ入り、征長の軍議に臨んだ。世間では之れを、將軍の御親征と稱して、幕軍の意氣は、頗る盛であつた。

毛利は、いよく乾坤一擲の大勝負をなす可く、高杉を、海陸の總督に任じた。大村益二郎は參謀として、高杉の帷幕に参じた。

『ハツ、申上げます』

『何事か』

『玉木先生がおいてになりました』

『之れへお通し申せ』

松陰の伯父にして、且つ師匠であつた玉木は、高杉を、孫弟子として扱つて居た。高杉は、玉木を呼ぶに『大先生』といふて居た。

玉木の來たのは、乃木無人を、高杉へ頼む爲めて、高杉は、之れを知らずに、逢ふ事になつた。

乃木初陣

一

如何に、傲岸不屈の高杉も、玉木に會ふては、先づ席をゆづる。

玉木の清廉硬直は、誰れも知つて居るが、それを憚かる小人は『貧者の捻くれたのは、どうにも致方がない』といふて賤すが、物解りのした人は、却つて『彼アいふ人も居てくれねば、世に正しき事は、跡を絶つてあらう』といふて、玉木を尊敬するのであつた。

案内されて玉木は、高杉の前へ來た。

『やア先生、よくおいでなさいましたな』

先づ高杉は、席を立つて、軽く會釋しながら、斯ういふた。

『オー、相變らず元氣ぢやのう』

『まア是れへ……』

玉木は、遠慮なく床几にかゝつた。

『天下の形勢は、頗る有望になつて來居つた。どうぢや、大分面白うなつたではないか』

『左様』

『いよ／＼開戦ぢやさうなが、これは全く汝等の働きて、此處まで漕つけたのぢやから、此始末は、矢張り汝等がつけねばならぬ。左様ぢやないか』

『ハイ』

『何になつても、人の先に立つものは、骨の折れる事ぢや。まア、しつかりやつてくれ』

『ハイ』

玉木は、急に聲をひそめた。

『小倉征伐を行るさうぢやが、本當に左様なつたか』

『先生、すでに御承知で御座りますか』

『うむ、一寸聞き込んだ』

『外夷との戦ひが終つて、すぐ引きつゞいての幕府との戦ひ、藩の力も、存外に弱つては居りませうが、今更左様な事はいふて居られませぬ。斯ういふ場合に押詰められたのが、善いか悪いかは、後日の批判を、待つ事と致して、先づ行當るまで、此調子で進むつもりであります。先生の御高見は、いかがで御座りますか』

『その外に道はありますまい。只汝等の努力一つで、前途は、何うにでも開けてゆく。大きく觀れば、皇國の御爲、小さく取つても、我藩の死活。遮二無二進めば、道は自ら開けるものぢや』

『私も、其覺悟はいたして居りますが、幕府の大軍を、前に迎へて、背後から小倉藩に襲はれては、戦ひも一段と苦しく相成りますから、先づ幕軍の來らぬうち、小倉の兵力を削いで、再び起てぬやうにして置く必要がある、と存じまして、是れから小倉征伐を行らう、として専ら準備中で御座ります』

『それは良い考へぢや。全調、小倉藩が怪しからぬ。攘夷の勅命を、うけて置き乍ら、先般の時も、彈一つ放たなかつたので、我藩のみが獨り苦しんだのぢや。斯ういふ卑怯な奴は、思ひ切り唐めてやるがよい』

『確かに城下の盟ひは、させて御覽に入れます』

『汝なら、必と出来る。寅次郎が生て居たら、無喜ぶ事であらうが、人間の事は、扱て如意にならぬものぢや』
高杉の雄々しい姿を視て、その元氣の籠つた、一言を開くにつけても、思ひ出すのは松陰の事、玉木も、思はず涙ぐんだ。

『先生の御用は、何事で御座りますか』

『うむ、さうぢやツた。肝腎の用向もいはず、忙しいのに迷惑であつたらう。實は頼み入る一事があつて、來たのぢや』

『それは……』

『汝も、知つての通り、乃木の件を、私が引取つて、育て、居るが、歳は既う十七になつて、一と通りの事は仕込んである。どうか、汝の手に置いて、小倉征伐の用に立て、はくれぬか、どうぢやな』

『無人の事で御座りますか』

『左様ぢや』

『未だ早くはありますまいか』

『イヤ、早い事はあるまい。既に元服もすんで、一人前の壯者には、なつて居る』

高杉は、しばらく考へてゐたが、

『宜しい、お引受けいたしませう。併し、本人の力量次第、相當の取扱ひは致しますが、先生の御引受けはあつても、依估の沙汰はなりませんから、萬事は、私に御任せ下さるやう願ひます』

『それは、いふ迄もない。殺さうと生かさうと、汝の一存で決めて宜しいが、成可くは死心地のよい所へ、送つてやつてくれ』

『承知いたしました』

頼む人が玉木、頼まれる人が高杉、本人は乃木十郎の子、三拍子揃つての出陣は、その結果に不拘、無人の幸福であつた。

高杉の案内で、陣中の見廻りを一と通りすませて、玉木は、高杉が戦ひについての用意と、その智識に驚いた。斯ういふ男に、無人を頼んだのは、十郎に對しても、誇り得ると思つた。

一

無人は、今裏の畑へ出て、耕作の爲めの肥料に、手入れをして居る所であつた。

伯父の玉木は、早く出かけて、未だ歸つて來ないから、無人は、自分丈で畑の世話をしよう、とする所へ、玉木が歸つて來た。

『伯父さま、おかへりてしたか』

『うむ、今歸つた所ぢや』

『どちらへ、おいで遊ばしたのです』

『少し話す事があるから、此處へ來てくれ』

『ハイ』

手足の汚れを洗つて、無人は、玉木の前に坐つた。

嚴しくは育てゝ居たが、可愛がる事も、人一倍だつた。昨今に至つて、メツキリと大人びて來た容子を、今更の如く、熟々と觀ながら、

『汝も、大部に大きくなつたのう』

「だんくの御世話で、有難う存じます」

「元服がすんでからは、一段と大きく見える
無人は、顔を少し赤めて、

「元服がすめば、大きく見えますか」

「うむ、大きく見える」

「さうですか」

「今日は、汝へに喜ばせる事がある」

「何で御座いますか」

「高杉に逢つて来たのぢや」

「へー、高杉先生に……」

「汝の事を、頼みに行つて来た」

「私の事を頼みに……」

「高杉が、快く承知してくれたので、實に嬉しく思ふた」

「どういふ事で御座りますか」

「汝も、いよく戦さに行くのぢや」

「えッ、戦さに行けるのですか」

「うむ、行ける」

「へー」

「どうぢや、嬉しいか」

「ハイ、私は、到底行けぬものと、斷念めて居りましたが、どうして行けるやうになりました」

「それは、高杉に頼んだのぢや」

「高杉先生が、許して下さいましたか」

「初めはむづかしい顔をして居つたが、頼むのが已れてあつたから、ちよつと高杉も、斷り難い所もあつて、遂々承知し居つた」

「左様でしたか」

「戰爭の始まる事は、誰れも知つて居るが、隊へ加はつて、戦地へ行く事は、容易に許されない。人夫の取扱ひで、荷物の持運びなら、すぐ許されもしやうが、それでは、戦さに行く甲斐はなく、強て頼む必要もないのだ。玉木が、高杉へ頼み込む上は、一人前の侍としての取扱ひに違ひない。それを思ふと、無人は、限りなき喜びに入つて、有難う存じます。これも偏に、伯父さまの御蔭で御座います」

「イヤ、己れの御蔭ではない。皆な御父さまの御蔭ぢやよ」

「えツ、お父さまの……」

「汝は、これから戰場へ行くのぢやが、御父さまに逢ひ度うはないか」

「……」

「さア困つた。逢ひ度いといふて可いか、それとも逢ひ度うないといふて可いか、下手な返事をしたら、雷の落るやうな聲で、叱りつけられるに極まつて居る。無人は、何とも答へずに、じつと控へて居た。

「親の恩は、海よりも深く、山よりも高い、と、教草にある通り、實に有難いものぢや。お前は、四年前に、長府から逃げて來たので、彼れから御父さまへ、どうしたものかといふて照會すると、御父さまからの返書には、斯ういふ事が書いてあつたのぢや。」

親の意見に背いて、國を出奔したものは、永久の勘當ではあるが、お前の所へ、頼つて行つたのなら、お前の思ふ通りになつてくれ。金も少し位は、都合して送るが、本人へは、必ず漏してくれるな。

それが、御父さまの返事ぢや、勘當はしたが世話をしてくれ、金は送るが、本人へ黙まつて居てくれ、斯くいふて来た、御父さまの心は、長く忘れてはならぬぞ。親の恩の有難い事を、つくづく悟れ。四年の間、己れが世話したのも、實は之れが爲めぢや。お前は、良い父を持つて、幸福な奴ぢや。夢の間も忘れてはならぬぞ。親の恩は、有難いと思へ』

何時か、玉木の眼には、露が光つて居た。無人は、疊に額をつけて、泣いて居る。

『さ、此御恩を、何うして返す覺悟か』

『……………』

『お前の覺悟を聞かせてくれ。それを、御父さまへ書いて送る』

『伯父さま、私は死にまする』

『どうして死ぬか』

『戦場で死にまする』

『偉い、よくいふた。それでこそ、十郎の粹ぢや。伯父さまも嬉しいぞ』

二二

玉木は奥へはいつて、手文庫を持つて来た。それを開くと、一冊の帳面取出し、無人の前へ廣げた。

『これが、汝の爲めに使つた、費用の控へぢや。御父さまからは、好便に托して、汝の修業に要する金子を送つて来る。それを、己れが使ひ拂つては、一々記しておいたのが、此帳面ぢや。よく見なさい、詳しく書いてある』

斯んな事は、今まで一度も聞かされなかつたので、無人は、今更に、父の慈悲を感じると共に、玉木の親切を、思はずには居られなかつた。

『御父さまは、汝を勸當したが、それは、汝へが可愛いからで、決して憎い、と思つて致したのではない。その證據には此通り、勸當した汝に、修業の費用を、送つて居られたのぢや。汝は、之を有難い、と思はぬか』

『私は、初めて判りました』

『今迄、汝は、何う考へて居たか、勸當された時、ひどい父と思つて居たらうが、御父さまは、却つて汝の爲めに、此位心を入れて居られたのぢや。己れは、御父さまの此心に動かされて、汝に盡せる丈け盡したつもりぢやが、汝は其れを何う考へて居たか』

『有難う存じました』

無人は、只感涙に咽んで居る。

その容子を視ながら、玉木は、諄々として乃木家の祖先が、如何なる人かを、語つて聞かせ、名譽ある武門に生れたものは、非常な光榮である、と同時に、その責任も、また重いものである事を、繰返し、説く。

無人は、玉木のいふ所を聞き乍ら、疊に兩手をついて居たが、感激に充ちた眼を光らせて、玉木の顔をぢつと見上げた。

『私は、決して家名を汚すやうな事は致しません。海岳にも比すべき、御父さまや、伯父さまへの御恩報じには、必ず皇國の御爲に、献身の働きを致します』

『うむ、可し。その心を聞けば、己れは満足ぢや。さア、其帳面を見て置くがよい』

『もう見るには及びませぬ』

『まア見て置け、それから又いふ事がある』

強ていはれるから、見る氣はないが、無人は、帳面を繰はじめたが、實に丁寧なもので、一文か二文の端錢まで、細かに書き込んで、毎月の末には、差引をつけて、剩餘の金は、翌月へくり込み、年末の計算には、月々の出納について、更に心付いた事を、書き添へてある。

『汝を預かつてから、四年越しの計算は、それで悉皆判るやうになつて居るが、つまり今日までに、五兩餘りの金子が残つて居る。それは、汝の所有であるから、持つてゆくが可い』

『否、私は要りませぬ』

『汝の小使錢にせい、といふのではない。武士が、戰場へ臨むには、肌付の金子が要るので、それにせいといふのぢや』

『判りました。頂戴いたします』

『可しく』

『帳面は、伯父さまへ、御返し申します』

『イヤ、その帳面は、長く汝の記念として、持參する事にせい。御父さまの仰せに、不服のあつた時は、その帳面と相談するがよい』

『はッ、長く記念といたします』

その晩は、玉木から武士の心得を、くどくもいひ聞かされ、戰場に臨んでからの覺悟も、よく説かれた。

翌朝はやく無人を伴れて、玉木は、高杉を訪ねて來た。

奇兵隊は、一種の義勇兵であつて、藩の正兵ではないから、藩廳の取扱ひでは、他の諸隊と、自ら區別をされて、幾分は輕んぜられて居るが、俗論派の閉息と共に、高杉の名聲は、都鄙に喧傳され、その響きは、奇兵隊にも及んで、昨今の奇兵隊は、非常な勢力を得て、殆ど藩兵の中堅たるが如き、状況になつて居た。

幕兵を迎へる前に、先づ豊前へ渡つて、小倉征伐を試むるといふ、此一戦こそ、高杉の身に取つては、容易ならぬ責任を感じるのであつた。

巧く小倉藩を叩きつけければ、藩兵の士氣は、大に昂つて、幕軍と對戦する上にも、非常に力強く感ぜられるが、若し敗戦すれば、それで、萬事は休する事になるのだ。

『さア、無人を伴れて參つた。何分頼む』

『宜しい、御引受け申した』

無人を顧みて、

『まだ子供ぢや。よく／＼叱つてくれ、高杉先生に挨拶せんか』

玉木にはれて、無人は軽く頭を下げた。

高杉の手許に置かれ、三四日は、種々の用事を申付けられて、それから何なりと役をつけられるか、一兵卒として扱はれるか、いづれかに決するのである。

四

高杉は、松陰門下の俊才であつたのみならず、長州藩中の傑物であつた。海陸兩軍の總督として、毛利家の采配を預かり、幕軍を向ふへ廻して、一大快戦を試みた時、歳は二十七歳であつた。

けれども、人間の偉い、といふことは、一人立ちで偉いものではなく、衆と共に事に當つて、始めて偉い、といはれる事になるので、決して一人で偉くなれるものではない。

百人が視て、偉いと思ふものを、十人集めて、之れを使ひ廻す力量があれば、その人は、更に大なる偉い人となるのである。

要するに、衆と離れて絶對に、偉い人はなく、偉いといはれる人ほど、衆の擔ぐ所となり、衆の力を利用して、大きい仕事を、爲す事になる。

高杉が、如何に傑物でも、只だ一人の力は知れたもので、彼と共に事をなした、衆の力が、彼の志をなざしめたのである、といふ事を、深く思はなければならぬ。

伊藤俊輔、井上聞多、佐世八十郎、山縣狂介、山田市之丞、野村和作、品川彌二郎、白井小助、太田市之進、其他にも澤山の人物が居て、陰に陽に、能く働いて居る。

俊輔は、後の博文、聞多は、後の馨、山縣は有朋、佐世は、前原一誠の事である。山田は顯義、野村は靖、全く世に現はれずして、死んだ人もあり、働きはなしたけれど、名に於て、志を得ざるものもあつて、その調子は、千差萬別であるが、いづれも高杉と、道を同じくして、協同の働きをなしたものである。

高杉は、是等の人物の上に超然として、殊に、すぐれて居たことは、固よりいふ迄もないが、それにしても、是等の人物を、殆ど手足として、那の舞臺に活躍したのであるから、その得意は、思ふ可きである。

無人は、年も若く、何事に於ても、是等の人に就いて、指導をうけた事は勿論であるが、昨今の知己であり乍ら、高杉の無人を愛する事は、實に玉木の紹介といふばかりでなく、實は其將來に、囑望する所があつたに違ひない。

『乃木を、呼んで来い』

『ハイ』

高杉の申付けに、部下のものは無人を、迎ひに來た。同輩といつても、歳は一番若い無人は、頻りに劍術を試みて、玉木譲りの凄い所を、見せて居た。

高杉からの迎ひを得て、すぐ其前へ現れた。

『御用で御座いますか』

『うむ、呼んだ』

輕くいふ一言にも、高杉のは力が籠つて、嚴正に聞える。

『汝を、山砲一門の長にする』

『はッ』

『従つて、今迄と違ひ、萬事に注意して、輕々しい揮舞をしてはならぬぞ』

『ハイ』

『いづれ、部下のものに對する作法、その他の事については、よくいへ聞かす事もあるが、後刻にしよう』

『ハイ』

その時は、それ丈の事で、高杉の前は、退つて來たが、何となく責任の容易ならぬ事を思つて、無人は、控所に居ても、黙まつて考へて居た。

此事は、その晩のうちに、知れ渡つた。之れを聞いたもので、殆んど驚かぬものはなかつた。人物の如何は、しばらく措いて、歳が十七歳といふ丈けて、此大役を申付けられたといふ事が、忽ち問題になつたのである。

『オイ、どうだ、随分驚かされたな』

『馬鹿々々しいにも程度があるぢやないか』

『全體、誰れが其部下になるのだらう』

『誰だつて、従ふものはあるまい』

『併し、總督から申付けられたら、どうするつもりか』

『どうも斯うもない、辭退する丈の事だ』

『若し、我々に申付けられたら、すぐ御免蒙るまでの事だ』

『さうともく、眞面目で引受けられるものか』

どこの隊へ行つても、此噂で持切りだ。

今迄は無人に、好意を持つて居たものも、此事が起つてから、何となく疎んずるやうになつて、無人の立場は、頗る面倒になつて來た。

山砲一門の長となれば、少くとも五十人位の隊長になつた譯で、多くのものが不平をいふのも、全く無理のない事であつた。

そのうちに、部下のものが割當られたので、問題は愈面倒になつて來た。

一同うち揃つて、高杉の前へ出て、その故障をいはうとするのであつた。高杉ほどの人物に、その判らぬ筈はなく、何か考へて居る所があるのだらう。

五

高杉の容姿は、上着もあり肉附もよく、堂々たる風采の人であつたが、肺と梅毒を病んでから、著しく瘦て、その頃に撮つた寫眞が、今残つて居るので、高杉といへば、頬骨の高く現はれ、眼の凹んだ人のやうに、思つて居るものが多いけれど、實は風采の堂々として、骨格も整ひ、肉附の豊かな上に、擊劍が強かつたので、姿勢のよい人であつた。應接の間に、一種の魅力を有つて、談論には、極めて長じて居た。下ノ關に於て、外國と戦端を開いた結果、その談判の衝に當り、美事に成功を得て、毛利の負擔を輕からしめたのは、全く之れが爲めであつた。

無人が、隊長に推されて、不平を拖く連中は、高杉の前へ、ズラリと列んだ。

その用件を聞かぬうちに、はやくも其の事であると、悟つて居る高杉には、一同の態度を視て、可笑しくて堪まらない。

「ヤア、豪傑の顔揃ひで、何ぢやな」

稍や冷嘲の口調を帯びて、斯ういはれたので鳥渡ひるんだか、そのうちの一人が、

「實は、我々の隊長について、少し申述べ度い事があつて……」

「イヤ、それは心配に及ばぬ。もう決まつて居るから、只だ其指揮に従ふ丈けの事を心がけてくれたら、それで可いのぢや」

「其儀につきまして、我々の所存も、御聞取りを願ひたく、打揃ふて參つた次第であります」

「それは、能く判つて居る。善い隊長を得たい、との希望であらうが、隊長は、乃木無人を宛てる事にしたから、嘸満足であらう」

斯ういふ風に先手をうつて、頭から押へ付けられては、グーの音も出ない。が併し、此儘要領を得ずに引取つては、同輩にすまぬ事になるから、何とでもして、自分等の不平は、思ふ存分いはねばならぬ。

「貴下の御見込みについて、彼是れ申す次第ではありませぬが、我々は、他の隊へくりかへて欲しいのであります」

「それはどういふ理由で……」

「その理由を申しますると、貴下の御見込みに對して、彼是れ申す事に相成りますから、それは御聞き下さらずと、此儘に他の隊へくりかへて下さるやう、願ひたい」

「左様いふ勝手な事は許さぬ。隊伍の編制と、隊長の任免は、拙者の自由になる、他の口出しは背かぬ。併し、その主唱に、相當の理由があれば、必ず背かぬとも限らぬ。先づ其れをいふて見たら何うぢや」

「然らば申上げませう」

「どういふ事か」

「此度の隊長は、乃木無人でありますさうなが、歳も未だ十七歳で、私は今年四十二歳に相成ります。また其隊へ編

入されましたものうちで、一番に若いものは廿三歳であります。乃木は、どれほど偉いか存じませぬが、十七歳の隊長では、些と恐縮いたします」

『はア、歳のことか』

『ハイ』

『年少者を隊長にする事は、不服であると申すのぢやな』

『イエ、不服とは申しませぬが、他の隊へくりかへを願ひ度いと申すのであります』

『つまりは不服なのぢやな』

『ハツ』

『それでは、汝等に尋ねるが、己の歳は幾年か、知つて居るか』

『……………』

『己は廿七歳であるが、それに不服はないのか』

『……………』

『乃木が十七歳で、汝等の隊長たる事が不都合なら、己が廿七歳で、防長二州の總督たる事は、猶更不都合といふ事になる。それについても不服があるのか、どうぢや』

此理話には、流石に一同も困つた。

高杉は苦い顔をして、一同を睨んで居る。しばらくは双方とも無言であつたが、高杉は、静かに口を開いた。

『天下の事に當るものは、其人の力量を第一とする。年の老幼は、敢て問ふ所でない。汝等は、その力量に於て、隊長たるに不足であるが、乃木は、その力量に於て、隊長たるに充分である、と、己れが認めて、山砲一門の長に命じたのである。それに不服のものは、己れの命令に服せぬ、といふ事になるのぢやから、之れは容易の事でない。汝

等の答へに依つて、己にも相當の覺悟はある。それとも汝等は、乃木にすぐれて居る、といふ事を。飽迄もいひ張る丈の自信があるのか。さ、それを先づ答へろ』

六

高杉の聲は、漸々鋭くなつて来て、聞いて居るものゝ頭に、ピン／＼ひびいて来る。理詰に押付けゆく、その激しい論鋒は、五分の隙も興へず、右にも左にも避けやうがない。

一同が、ぐつと行詰つて、黙々として居る間に、高杉は、背後の隊士を顧みた。

『オイ、手槍を持つて參れ』

『はッ』

配下の隊士は、すぐに九尺柄の手槍を、持つて來た。高杉は、之れを二三度抜いて、右脇に抱たが、

『さア、此事に飽迄も故障がある、といふなら、前へ出る』

『………』

『片端から田樂串にしてくれる。さア前へ出る』

一同は驚いて、二三歩退ひた。

年長の山崎といふ男が、

『ま、ま、おまち下さい。決して貴下の命令を拒む、といふ次第ではありませぬが、只一通り所存を申述べた丈の事でありますから、貴下が、それはならぬと仰せある以上、飽迄も我意を通さう、といふのではありませぬ』

『己のいふ事が、解つたか』

『ハイ、よく解りました』

『此上このうへに故障こぼれはない、と申まをすか』

『ハイ』

『乃木のぎの命令めいれいする事は、己おれの命令めいれいする所ところであるから、毫末ごうまつも背そむく事を許ゆるさぬ。萬一まゐにも不都合ふつがふがあると、必ず軍令かみづらひに因よつて、嚴罰げんばつに處とどすから、その覺悟かくごを致いたして居をれ』

『ハイ』

一同いどうが、すつかり凹へこ垂たれたのを見みると、高杉たかすぎは、急きふに世話せわに碎くだけて、

『ハツハ、、、、初めはつめの勢いきほひは何なにうした。己おれが、汝等おなづなの爲ためめに、決つして不利ふりを謀はかるものでない位くらいの事ことが、今迄いままでに判わからなかつたのは、全く己おれの不徳ふとくの到いたす處ところぢや。今後こんごは、己おれも大おほいに氣きを付つける』

斯かういはれると、一同いどうも何なにとかいはねばならぬ。山崎やまざきは進すすんで、

『貴下あなたを信しんぜぬ、といふ次第しだいでは、毛頭もうとう御座いませぬが、自儘じきんの儀ぎを申出まをして、まことに相あひすまぬ事ことでありました』

『イヤ、左様さやううち解とけてくれると、己おれも氣持きもちがよい。今夜こんやは、軍用ぐんようがすんでから、大おほに飲のまうよ』

『はッ』

威嚇いかくされた跡あとで、また撫なでられるのだから、丸まるで玩弄おもちゃにされてるやうなものだ。けれども、斯かういはれると、悪い氣わるきはしない。いひ出した事ことは通とほらないでも、快よろこく引下ひがる事ことが出来る。

縦横じやうげの奇才さいがいで、活殺かつせつ自在じざいの取扱とりあつかひをするから、多おほくの人は、その命令めいれいの儘ままに動うごく。其處そこが、高杉たかすぎの最ちよとも長ながずる所ところであつた。

一切いっけいの陣容せいじやうは整ととのつて、いよ／＼小倉征伐こくらせいばつの軍令ぐんれいは、公けに發はつせられた。

『攘夷じやういの詔勅みわうを受け乍はなが、先般せんぱんの下關戰爭しものせきせんそうに、傍觀ぼうくわんの態度たいどを取とつて、參戰さんせんしなかつたのは不都合ふつがふである。

詔勅みわうをうけながら其旨そのじみに従したがはぬのは、違勅ちゐしやくの罪つみにも均つしい。今後こんごの事こともあるから、その罪つみは、飽迄あたまも糺ただして置おかね

ばならぬ』

と、いふのが、開戦の理由であつた。

此戦ひに、乃木は、田ノ浦口から、小倉の背面を衝くべく、各隊との聯絡を取つて進んだが、乃木の山砲隊は、實に目覺ましい働きをして、小倉軍を打破り打破り、無人の境をゆく如く進んで、小倉の背面を犯した。

高杉は、自ら本隊を率ゐて、門司へ渡り、大里の海岸を、眞一文字に進み、到る處に、小倉兵を撃破して、其城下に迫つた。

今も猶ほ、赤阪の延命寺内に、當時の戦死者を祀つた碑が、多く残つて居る。それを見ただけでも、當年の激戦が思はれる。

馬上に、槍を振り乍ら、俗謡を唄ひつゝ、大里の海岸を、破れて走る小倉兵の跡から、味方をはげましつゝ、進んで行く、高杉の雄姿は、眼に見えるやうだ。

小倉藩は、幕府の親藩、小笠原の居城であつたが、當時は、藩主の不在といふ事も、士氣の上に、多少の影響はあつたであらうが、兎に角、見苦しい敗北をしたのみならず、細川藩の仲裁を得て、詫證文まで差入れ、辛うじて城代が、面縛を免れたのであつた。

高杉は、戦ひの目的が、充分に立つて、悠然と引上げて來た。下之關は、祭禮のやうな騒ぎで、高杉の武名は、兒童も、走卒も、之れを唱へぬものはなかつた。

斯ういふ人に、見出された乃木は、極めて好運兒であつたが、その代り責任も重く、いつも陣頭に立つて、奮闘をつづけた。之れが爲めに、重傷を負ひ、擔架に載せられて、漸く引上げた位である。

小倉藩は、大里の海關を持つて居たので、頗る權威があつたのみならず、人に知られぬ物質上の收得があつて、これが爲めに、九州各藩の間に、一種の勢力を示して居た。

幕府の時代には、九州の諸侯が、江戸への往來に、必ず大里に於て、取調べを受くるの面倒を、免れる事が不能かつた。

大里の海關を、預かつて居たのが小倉藩で、その藩主は、幕府の親戚に當る小笠原家であつたから、一段と睨みは、利いた譯だ。取調べの手加減が、往來の諸侯に與へる、便不便は非常なもので、その便宜を得たい爲には、金も使へば物も贈る。それに依つて、藩士の懷裡は、いつもホカ／＼して居た。

單に、海關を警備する役人ばかりが、利益を得るのでなく、取調のすむまでは止むなく滞在するので、小倉城下の町人は、その旅客から絞り取る、不當の利得で、却々に繁昌を極めたものである。

明治になつてから小倉が、一時に寂れたのも、實は大里海關の特別事情が、無くなつた結果で、敢て不思議とするには足らぬ。

昔も今も變らないが、旅客の懷裡を目的に、不當の利得を、楽しんで居る、土地の人は、獨立の氣力に乏しく、産業に依つて、十年の計を立てるなぞいふ事は夢にもなく、只だ手を袖にして、氣樂に儲ける事ばかり考へて居る。

左様いふ土地の人は、猿智懸は有つても、深い事は考へず、目前の利益のみに囚はれて、物質欲の外には、何の念もないから、衆人の模範たる可き、士人でさへ何時か、それに引ずられて、町人根性になり、藩の士氣などは薬にたくも無い、といふ有様になつてしまふ。

高杉等が、攻め込んで行つた時、小倉藩士の戦ひ振なるものが、よく其れを證明して居る。また細川家の袖に縫つて、詮證文と同様の書付けを、毛利家へ、差出した事に視ても、當時の士風の一斑は判る。

高杉は、一たん下の關へ引上げて、之れから山口へ行かう、とする際、各隊の見廻りをすませ、死傷者も相當にあ

つたので、それ〴〵の手續きについて、爲す可き丈の事は終り、今、無人の居る所へ、見舞ひにやつて来た。

『どうぢや、疵は痛むか』

『否、少しも痛みません』

『左様か、それは何よりぢやが、未だ是れから先があるから、早く癒さなければ、不可ん』

『種々と御心配をかけました』

『たとへ、負傷は致しても、戦功は擧がつて居るから、恥辱にはならぬ』

『ハイ』

『那の位に行れたら、まア可いとせねばなるまい』

只だ其れ丈の事を、いふ爲めに來たのだらうが、負傷して居る者の身に取つては、どれほど嬉しいか判らぬ。全部の見廻りがすむと、すぐに乃木隊のものを、皆な呼び出した。

『此度は、非常な働きで、各隊のうちでも却々評判ぢや』

斯ういはれたので、一同はゾクゾクするほど嬉かつた。

『隊長の負傷は、可成り重いが、それでも生命には觸らぬやうぢや。今見舞つて來たが、本人も元來で居る』

『……………』

『汝等の負傷は、どうぢや。鳥渡その疵を見せろ』

負傷したものは無人の外に、一人もないのであるから、何と答へやうはない。それは高杉も、よく知つて居る筈なのに、斯ういふ質問をされては困る。

『負傷者はないのか』

『ハイ』

『一人もないのか』

高杉の聲は、少し激しかった。

『汝等は、疵一つないのに、隊長は、彼の重傷を負ふて居る。歳は十七歳でも、却々立派なものぢや』

最初の事が、未だ高杉の心に、残つて居たので、此皮肉な叱言が出るのだらう。

『爾來は、歳の老幼を以て、その爲人を評するものでない、といふ事を、確と心得て置け』

『はッ』

『乃木十郎を父とし、玉木文之進を師として、人となつた彼である。只其れ丈けて、充分の信用は置けるのぢや』

『はッ』

一同は、這々の體で、高杉の前を引下つたが、此事は、何時か各隊へ知れ渡つて、無人の評判は、却々高くなつて來た。

八

小倉藩との戦ひが終ると、幕府の大軍は、長防の國境へ迫つて來た。

いよく開戦となる迄には、種々の曲折もあつて、山縣半藏が、突戸備後之介と改名して、家老格となり、廣島へ乘込んで、老中の小笠原壹岐守と、談判を開いた事もある。その突戸が、人質に取られて、却つて之れが爲めに、毛利藩士を激憤せしめ、死物狂ひの働きをさせた。

石州口の戦ひには、井上聞多が、參謀となつて、幕府の目附、長谷川某を生擒にして、突戸と交換の談判を開き、終に突戸を取戻した、といふ事もあつた。

幕府の海軍は、流石に進歩して居たから、毛利の海軍が、如何に奮發しても及ばず、大島郡を占領されて、ギュー

ツといふ眼に逢はされたが、恰度、此時に土州藩の阪本龍馬と、中岡慎太郎が、薩長聯合の策を齎して、下之關へやつて来て、此戦況を視て居たが、

『長州藩が負ては、折角の計畫も、水泡に歸すから、何でも此際、長州藩に勝たせる必要がある』と考へて、

『海軍の方は、拙者が引受るから、任せて見ろ』

と、高杉へ申込み、それから二人の手に、海軍の戦ひは移つた。

阪本は、幕府の勝安房に學んで、海軍の事には精通して居たが、中岡も、非凡の人物であつたから、幕府の海軍は、散々に打惱まされた。二隻は撃沈され、一隻は捕獲されて、大島郡は長州兵の手に、取戻す事を得た。

此戦ひが、陸の方へも響ひて、それからといふものは、幕府の陸軍、連戦連敗の狀で、甚だ振はなかつた。

藝州藩は、幕府の味方であるが、その藩士のうちには、ひそかに長州藩へ、款を通ずるものがあり、それが原因となつて、幕軍へ、不利を來たせしことは幾度かあつて、長州藩は、存外に有利の立場を得た。

戦ひは歳を越えて、更に決せず、終局の勝利は、果して何うなるか、その見込みさへつかなくかつた。

然るに、幕府の内情は、各自に小さい權力の争ひをして、内訌の絶える暇なく、日一日と、其權威は薄くなるばかりであつた。

殊に、財政の窮迫は、日と共に甚だしく、軍費の支給も、意の如くならぬ。出征の各藩とても、同じ状態であるから、戦士の意氣は、頗る不振に陥り、終に休戦の止むなきに至つた。

幕府の此失態は、一層の不利を醸して、幕軍は、全く戰意なきの有様で、長州軍の意氣は、まさに天を衝くの慨があつた。

無人は、此戦ひについても、各所に轉戦して、到る處、その功を擧げ、常に高杉の激勵をうけて、同輩の間にも、追々重んぜられるやうになつた。

彼が、軍人として生涯を終る可く、處世の覺悟は、此時すでに決したのである。玉木の教へを、うけた人としては、その生涯を、軍人として終る可く決したのは、まことに當然の事であつて、その性格の上から見ても、さうなる可きが當然であつた。

然るに、長州征伐は、幕府に於て、俄に中止する事になつた。この原因は種々あるが、最も重き原因としては、將軍家茂の薨去に、歸せざるを得ない。

家茂は 幼少の時、紀州家から入つて、宗家の主人となり、家定將軍に亞いで、十四代の將軍にはなつたが、生來の病身に、時局の艱難は、彌が上にも難かしく、それが爲めに、痛心の餘り病を得、征長軍に親征と稱して、大阪城へ馬をすゝめたが、これ限り前進もならず、終に薨去するに至つた。

所が、孝明天皇の妹君、和宮を迎へて、夫人にはしたけれど、未だ子を擧ぐるに至らず、將軍は死して、相續人がないといふ仕儀、それに加へて、征長軍は振はず、幕府の内情は、殆んど形容する事の可能ぬ有様であつた。

辛うじて、後見職の一橋慶喜を、十五代の將軍に押立て、之れが勅許を得たので、先づ一と安心はしたが、征長軍の始末をつけるのが、先づ差當つての大問題、之れには慶喜が、中止の意見を持つて居たので、すでに其れと決して、中止の手續きにかゝらう、としたが、失敗の跡を掩ふて、上手に引上げをつけよう、とするには、容易な事でない。此大役を、引受け得るものは、また普通の人物では不可、何人か之れに當り得るものを、との考へが、江戸に閉門の身になつて居た勝を、引出す事になつて、急使は江戸へ走せ下つた。

此ゴタ／＼の間に、いつか薩長の聯合が運んで、阪本等の思ひ通りになつた。征長軍に敗れて、將軍を亡び、その後繼者を得た時も、すでに薩長の聯合は成立して居たのだから、幕府の倒れるも無理はなかつた。

參謀乃木

一

幕府が、いよく倒れて、明治へ移る經緯を、詳しくいへば長くもなるし、乃木傳に、縁も遠くなるから、それは略す事にするが、明治政府の創立については、少しく述べて置く、必要がある。

慶應三年十月、徳川慶喜が、將軍職を辭退して、政權を、朝廷へ返上したので、十二月九日に、王政復古の勅諭文が發表された。是れは、頗る大切なもので、誰れも皆な、知つて居らねばならぬ筈であるが、一向に知る人が少ないから、特に掲げる。

徳川内府、從前、御委任の大政を返上し、將軍職を辭退するの兩條、今般、斷然開召され候。抑、癸丑以來、未曾有の國難、先帝、頻年、宸襟を惱まされ候次第、衆庶の知る所に候。之に依り、叡慮を決せられ、王政復古、國威挽回の御基本立てさせられ候間、自今、攝關、幕府等廢絶、即今、總裁、議定、參與の三職を置かれ、萬機行はせらるべく、諸事、神武創業の始めに原き、縉紳、武弁、堂上、地下の別なく、至當の公議を竭し、天下と休戚を同じく遊ばざる可き、叡慮に付、各勉勵して、舊來、驕墮の汚習を一洗し、盡忠報國の誠を以て、奉行致す可く候事

現代の人から見たら、大した事でもない、と、思ふであらうが、當時の事としては、非常の英斷といふ可く、從來

に在つた、攝政關白の制度を廢して、新しく總裁を置き、その下に、議定と參與を設けて、一切の政治は、之れに依つて、生み出される事に、なつたのである。

殊に、參與のうちには、諸侯の家臣で、従來は、陪臣といはれて、非常に軽い身分のものが、多く加はつて來た。經紳、武弁、堂上、地下の別は、政治の上から、全く取除かれて、輕き陪臣でも、廟議に參列し得る、といふ例が、茲に始めて開かれたのであるから、眞に未曾有の大改革と、いふて可からう。

時勢の赴く所、斯うなる外は、なかつたであらうが、乍併、是れは偏に、明治天皇の御英斷に基いたもので、長く其御聖徳を忘れてはならぬ。それに亞いての御英斷は、遷都の一事であつた。一千年來の帝都を、西から東へ移すといふ事が、容易の業でない位の事は、誰でも判るであらう。

江戸へ帝都を移すの議は、天保の昔、佐藤信淵に依つて唱へられ、その後は、ずつと下つて、慶應の末年に、前島密と、神田孝平に依つて、再び唱へられたが、これは物にならなかつた。大久保利通が、聖駕を、浪華へ進むの議は、既に御採用になつて、陛下は、大阪城へ、成らせられて居るが、世間では、之れを誤り傳へて、遷都は、大久保の議であるが如く、思つて居るけれど、それは、大なる誤りである。最後に、江藤新平が、その建議をした。これは議論としても、よほど進んだもので、よく情理を盡して、遷都の急務を述べてある。

之れが採用されて、いよいよ遷都は、實行の運びになつた。明治元年十月十三日、陛下は江戸城へ御着になつて、此時に、江戸を東京と、改稱する事になつた。

我國が、開けて以來、關東へ行幸の事は、之が始めてあつた。此一事は、關東奥羽の人民へ、よほど刺戟を與へて、その結果の良かつた事は、固よりいふ迄もない。

遷都の事が行はれたから、政府も、東京へ移される事になつた。奥羽の亂は、會津長岡の二藩が、力盡きて治まり僅に榎本釜次郎の率ゐた、軍艦が、函館へ去つて、五稜廓で、多少の戦ひはあつても、天下は泰平と、いふて可い。

於此、政府は、着々、内政の整理をして、各省の受持を定め、先づ大藏省を置いて、財政の基礎を堅うし、軍事教育、産業、それらに、順を逐ふて、實際の政治に着手した。

何しろ、兵力に依つて、幕府を倒した、といふので、武功ある連中の、鼻息は荒く、却て王政復古の文勳あるものは、軽く取扱はれる傾きがあつて、内訌の端は、此時すでに、芽ぐまれて居たのである。

軍事の方では、兵部省を置き、海陸の別はあつても、一隻の軍艦を有せざる、海軍の事であるから、すべて陸軍と共に、兵部省が一括して、之れを處理する事になつた。當時の兵部大輔は、大村益二郎が、之れに任じて、軍制の大體は、此人の手に依つて、新たにつくられた。

その後、海陸兩省に別れ、陸軍は、全國に五鎮臺を設け、東京、仙臺、名古屋、廣島、熊本に分ち、名古屋鎮臺へ、赴任を命ぜられた一人は、乃木であつたが、少佐に上つて、參謀を勤める事になつた。

一一

名古屋といふ所は、俗に中京と謂はれて、東京と京大阪の、中央に位し、背面は、遠く北越に通じて、まことに良い地勢を、占めて居る。

今では、一般の人氣も、非常に、變つて來たが、それでも、土着の名古屋人には、一種の氣風があつて、新聞代を一ヶ月について、一錢まける、といふやうなものが未だ多い。

利には敏いが、氣風は因循の方で、金を得れば、少しも出さぬ算段をして、之れを失ふまいとして、吝な生活に、日を送る、といつた、調子であつたが、時勢の刺戟は、終に其れも、許さず、昨今では、人氣も變つて、昔の名古屋でなく、殊に、事業の關係から、他國の人が、多く入込み、さかんに押廻すので、追々に此の氣風も崩れてゆくやうである。

加藤清正の築いたといふ、名古屋城は、天守の上に、金の鯨が、上つて居る。しみつたれの名古屋人を、高い所から、此鯨が逆立になつて、睨んで居るなぞは、皮肉の頂上である。

鎮臺を、此城に置いて、澤山の軍人が、乗込んで来た。維新の變亂に、血を流して、武功に誇る、田舎武士が、何事にも姑息して、一文吝みをする人の中へ、不意に、飛び込んで来たのであるから、その取合せは、實に面白いものであつた。

乃木のやうな、氣風の人が、斯うした土地へ来たので、初めのうちは何となく、不快にも感じたであらうが、しばらく居るうちに、それにも、馴れて来た。

殊に、市中の下宿住まひで、獨身者の氣散じには、時に酒樓に登つて、一夜の快を、貪る事もあつた。

乃木といへば、誰でも、堅いものと極めて、石部金吉鐵兜、叩けばガン／＼音のするやうな人とのみ思つて居るが、それは、晩年の事で、初めは、盛に、酒も飲み、どうかすると、仇な女に親しんだ事もあるのだ。

年も廿五六、男の盛りであるから、それは、無理もない事で、左様あるのが當然であらう。酒を飲み、女に親しんだから、この人は、遊治郎である、とはいへぬ。すべては、分量から割出して、いふ事で、苟も不具者か、病人でない限り、そののなかつたものは、あるまい。

血氣盛りの壯者、而かも、荒ツばい軍人である以上、酒も飲めば、女にも近づくと、それに、何の不思議もない。

新橋藝妓に、不見轉なるものが出来たのは、維新の風雲に乗じた、猛者連が、さかんに入込んで、女漁りに、荒れ廻つた結果である。

その惡風は、全國の都會に及んで、一般の品行を、墮落せしめた事は、随分ひどいものであつた。

名古屋は、元來が、女の名物、淫風は、最もさかんな土地である。深窓に育つた、良家の處女でさへ、親もすゝめれば、自らも進んで、その道に、走るものが多く、一時は、名古屋に處女なし、とさへ、いはれた事もある。

従つて遊廓の盛んにして、藝妓の發展は、頗る物凄しい位であつた。併し、そのうちには、此風儀に反抗して自ら高うして居たものもあり、藝妓のうちにも、多少の氣概あるものは、類りに技藝を上げ、堅く身を慎んで、存外に話せるものもあつた、と聞く。

ニヤケた男と、氣障な風俗には、もう厭き果て、居た所へ、鎮臺が設けられて、何となく齒切れのよい、動作の活潑な、軍人肌合に接したので、さア堪まらない。右からも、左からも、好きな人を、引つ張り合ひ、軍人でなくば、人でないやうな騒ぎ、どんな堅造も、之れには兜を脱いて、グニヤ／＼になつた。

そのうちでも、乃木は、一段とはげしく、攻めつけられて、逃げるにも逃げられず、據なしの酒浸り、虹のやうな氣を吐いて、怒鳴つたり暴れたり、氣の弱い女は、傍へ寄りつくことも出来なかつた。

左様いつた調子が、更に、女の心を喰つて、一流どこの目標は、乃木と極まつた。けれども、誰れ一人として、乃木の、暖かい頬に、觸れたものはなかつた。

その頃、第一流の藝妓で、兩人の競争者が、現れた。一人は、お文といひ、他の一人は、お武といふた。但し此名は、假りに斯うして置くのであつて、實名は、預かつて置く。

乃木といへば、固より有性の男子、生れて女嫌ひ、といふ譯でもなかつた。玉木先生の教へと、父十郎の血を、受けた人としては、鳥渡くづしかねた氣品の、それが物をいふて、容易にやさしい心が、頭を上げて、來なかつたのである。

今日も同様と一しよで、某樓に、酒盃を傾けて居た。いつか興を生じて、箸拳からチャンケンに、盃の数は重なり大部に酔ふて來た所へ、『今晚は……』と現れたのは、例のお文であつた。

氣の荒い、軍人の集合で、殊に、既う酒は、充分に廻つて居るし、この騒ぎ方は、非常なものであつた。二人や三人の、藝妓は居ても、それを、上手に扱つて行くのは、容易でない。其處へ、お文が、はひつて來ると、はやくもこれを見た、一人は、

『やア、お文か』

と、岡拔けに、大きい聲を出したので、外のものも氣がついて、騒ぎ出す。此連中に、人氣者のお文は、殆ど引ツ張り風の狀であつた。乃木は、そんな事に頓着なく頻りに飲んで居る。

『まア、乃木さん、あなた、大層すまして居ますね』

お文は、外のものには眼もかけずに、先づ乃木の、傍へ寄つた。

『うむ、お文か』

といつて、手酌で飲まう、とする。お文は、その徳利を奪ふやうにして、

『何ですね、あなたは、獨身ものでもあるやうに、お酌のしたいものが、此處に一人居るぢやありませんか』

『うむ、さうぢやつたね』

『さア、お酌をいたします』

『注いでくれ』

漉々と注いだ。コツプの酒は、一と息に飲み乾して、コツプは、お文の手へ渡した。

『今度は、己れが注いでやる』

『恐れ入ります』

お文も、一と息に飲んで、乃木へ返した。斯うした事が、二三度くり返されたので、外のものは幾何か、岡麓の氣味で、

『オイ、乃木ツ、大概にして此方へも廻さんか』

『お文も大概にしる、乃木ばかりが、客ではないぞ』

極めつけたつもりで、いふたのだが、お文には、蚊の刺したほどにも感じない。こんな事は、どこの酒席にも有りがちで、さうした事には、馴れて居るから、お文は笑ひながら、

『どうも、すみませんでした。妾の好きな人ですから、つい人前も憚らず、こんな所を、御覽に入れまして、オホ、

、、、、、』

ピンと、刎ね返した。

『これは驚いた。猛烈な逆襲ぢや』

『オイ、乃木ツ、貴様も、何とかいはんか』

『大に奢つても、よいぞ』

『全體、お文は、男嫌ひといふ噂があるのに、それでは、噂も根ツから、信用出来んものう』

四方から、面白半分、まくし立てるが、コツブの酒の勢ひか、お文は、更に負けて居ない。

『噂は、何うか知りませんが、妾は、男が大好きです』

『ふふーむ、男が好きぢや』

『はア、大好きです』

『男嫌ひは、嘘か』

『そりやア、世間の人さんが、勝手にいつて居るので、妾は、男嫌ひぢやないのです』

『さうか、それは、頼もしい奴ぢや』

『けれども……』

「けれどもは、少し可笑しいぞ。けれども、何うした」

「乃木さんのやうな、御方が好きなので、外の男は大嫌ひですわ、ホ、、、」

「えッ、乃木が好きで、外のものは嫌ひぢや」

「はア、さうですわ」

「こりや、いよゝゝ驚いた」

「怪しからん事を、吐かし居る」

「オイ、乃木ッ、何とかいはぬか」

乃木は、それを聞いたか、聞かぬか、相變らず飲んで居る。むづかしい顔はして居るが、時々、ニヤリと笑ふ。その笑顔には、何ともいへぬ、やさしい所があつた。お文は、ますゝ面白くなつて、一同を對手に、好きな款を吹いて居た。

乃木の四方から、取圍んだ連中は、さかんにコツプを蹴しつける。乃木も、斯うなつては、跡へ退かぬ、剛性の癖が出て、いくらでも、引受けては、蹴り返す。

酒戦は、終に乃木の勝利になつた。一同は、ヒヨロ／＼になつて歸るが、乃木は、獨り残り残つて、お文を對手に、また飲みはじめた。外の藝妓は、居ても何の役をせず、お文が、一人で座敷は、うけ持つた。

いくら強い、といふても、いつか乃木は、酔ひつぶれてしまつた。お文も、その傍へ、同じやうに倒れた。ぐツすり眠つて、不圖、眼がさめたら、いつか座敷は變つて、狭い一室に、お文を擁して、乃木は、寢て居るのであつた。

「やッ、しまツた」

と、思はず叫んだが、もう駄目だ。お文と、乃木の間は、日を逐ふて深くなつた。同時に、お武と、乃木の關係も、普通でない、といふ噂が、さかんに起つて來た。

四

お文と、深間になる前、すでにお武も、乃木と情交が、あつたのである。當時の花柳界に遊ぶものとして、此兩妓を、知らぬものはないほど、二妓の名はひろく知られて居たのだ。

容貌も良いし、藝も充分に有る。不見轉を禁物として、どちらも評判の男嫌ひ、負ぬ氣の、しつかり者であつた。

乃木は、維新の擾亂が静まつてから、大村益二郎に就て、佛蘭西式の兵學を修め、一度は、長府へ引戻されて、鹽浦藩の書物役に、なつた事がある。

廢藩置縣になつて、更に政府へ呼上げられ、練兵教官から、一躍して少佐になつた。少尉も、中尉も、また大尉も、勤めた事はない。

鎮臺制になつて、先づ仙臺へ、赴任した。東京鎮臺第二分營詰と、いふのであつたが、後に仙臺も獨立して、第二鎮臺となつた。仙臺へ行つたのは、明治四年の十一月廿三日で、翌五年の十二月廿二日迄居た。名古屋へは、仙臺から轉任して、辭令からいふと東京鎮臺第三分營大貳心得と、いふのであつた。

未だ年は廿四、下宿住まひの獨身者であるから、藝妓に馴染む位の事は、止むを得ないとしても、同時に、兩妓は些とはげしかつた。それが毎夜、代る代る、下宿屋へ、押かけて来る。

豫め日の打合せはないので、兩妓は、競争するやうにして、泊りに来るので、一と足さきへ来たものが、優先權を持つ事になつて、一と足後れたものは、門口から、空しく歸る事になるのだ。

斯ういふ風になると、女の情熱は、ます／＼騰りつめて、百度以上になる。互に意地と張りで、通つて来るやうになつた。

乃木も、それを良い事にして、代る／＼引張り込んで居た。乃木の昔に、斯うした事であつたのを、誰一人として

語るものがない。

乃木の最期が、悲愴を極めたのと、その晩年の人格と、中年以來の品行とを、見て、乃木は、妻君の外に、女を知らぬものとして、乃木と女の事をいふものがないのだ。

けれども、乃木を批評するものが、此點に觸れてゆかぬのは、却て宜しくない、と思ふ。乃木のやうな、正しい人の事は、矢張り隠れて居る、品行上の事にまで、立ち入つて、詳しくいふ方が、乃木の本當の爲人を知る上に於て、正しい理解を、得る事になる。

何んな人でも、若い時分には、多少の過失はある。晩年に偉くなつたから、といふて、その過失をかくして、美しい半面のみ傳へるのは、却て人を誤る事にならう。

要するに、その過失が、どれほど深くあつたか、また何うして、その過失を切抜けたか、といふ事について、ふみ込んで研究するのは、最も大切な事であり、また、興味の深いものである。

毎晩のやうに、兩妓は、争ふて通つて來たが、一夜のこと、乃木は、机に倚れて、頻りに何か、考へて居ると、俄に人の叫び争ふ聲が聞えた。ちつと落ちついて、よく聞いて居ると、其れを支へて居るやうな、聲も聞えた。

叫び争ふて居るのは女らしく、それを支へて居るのは、男の聲であるから、乃木は、不思議に思ふて、窓を開いて、そつと、覗いて見た。

兩妓は、此夜も、例の如く、通つて來た。いつもは都合よく、どちらか先へ、はひつて居るので、おかれて來たものは、口惜いけれど、空しく引退るから、何の争ひもなく、濟んだが、此夜は、折悪く兩妓は、門口で、同時に落ち合つたのである。

『昨夜も、お前さんは、先きくゞりをしたね。今夜は、妾の番だから、お前さんは、歸つたら可からう』
『いえ、冗談いつちやいけません。妾の方が、一と足はやかつたのですから、お前さんの方で、歸るのが當然で

すよ』

『へん、馬鹿にしちやアいけないよ、一と足さきへ来たものが、何て妾と、一しよに立つて居るの、斯うなつたら生
命にかけても、妾は歸りません』

『妾だつて、同じ事ですよ』

口先きの争ひから、終に手を出して、突き退けよう、とする。

その争ひが、ひどくなつて来たので、下宿の主人が、見かねて飛出し、今、仲裁にはひつたのだが、斯ういふ場合
になると、女は、男より激しいもので、容易に引取らぬ。争ひは、いよ／＼ひどくなるばかりであるから、仲裁人は、
頗る困つて居る所であつた。

乃木は、此状態を、見て居るうちに、顔の色が變つた。頭から水をかけられたやうに、身内はジーツとして、肌
粟を生ずるほどであつた。

窓の戸を閉めて、布團を被つて横になつたが、どうしても、眠る事が出来なかつた。

五

如何に、慎みのよい人でも、血氣の時代には、不圖した動機から、魔道へ落込む事がある。

右様した身になつたものが、自分から悟つて、魔道を、脱け出す事は、頗る至難しいもので悪い／＼と思ひつゝも
何時か知らず、深淵へ、はまつて行く、恰も泥田へ、足をふみ入れて、跪けば跪くほど、動けなくなるのと、同じ
事だ。

殊に、男女の關係には、情合が付き纏ふから、一段とむづかしい。初めは、單に肉慾のみの關係であつても、逢瀬
の重なるに伴れ、戀しいといふ情が、起つて来る。その情が、少しでも起つたら、犬猫でない限り、どう跪いた所で

或機會の來るまでは、如何ともする事は、出來ないのである。

花柳の巷に居て、朝から晩まで、戀の色のといふて、育つたものは、容易に人に惚れない代りに、若し惚れたら、酷い。口先で、惚れたとか、何とかいつて騒ぐのは、始終の事で、眞に心から惚れ込む、といふ事は、滅多にないのであるが、若し左様いふ的に、はまる人が在つた時は、生命がけになるから、恐ろしい。

お文も、お武も、左様した戀は、乃木が、始めてあつた丈けに、その逆上やうも、一と通りでなかつた。

女が、男の家へ、通ふ事は、別に珍らしくはないが、門口で、兩妓が落合つて、はげしい争ひをする、といつたやうな事が、普通の惚れ方では、先づ無いものと、見てよからう。

その晩は、下宿の主人が、巧な仲裁で、どちらも、家へは遣入らずに、其儘、歸る事になつた。

『さ、左様話が纏まつたら、私が、送つて上げよう』

『イエ、それには及びません、妾達は、一人で歸ります』

『まあ、今夜は、私の爲る通りにして、おくが可い。とに角、夜遅くなつての事だから、送る事にしよう』

『夜遅く歸るのは、馴れて居ますから……』

『そりやア、平生の御座敷歸り、斯んな事で、遅く歸るのは始めてだらう。それに、少し話もあるから、一しよに行かうよ』

斯ういはれては、兩妓も、強て辭退は出來ず、不性無性に承知したから、下宿の主人は、兩妓の間に挟まつて、ぶら／＼出かけた。

『私のいふ事を、悪く取つては困るが、私は、三人の身を、思ふからいふのだ。彼の人々が、普通の身分でなく、重い役目の軍人さんだけに、私は、心配するのだが、又、お前さん達にしても、同じ事だ。斯んな事が、二度とつゞいたら、どうせ世間の人に、彼是れいはれて、それこそ、身の詰りになる。惚れたのが悪い、とはいはないが、もう

少し加減を、爲てくれないと、彼の人の身分に、障りがあるだらう、と思ふのだ。本當に惚れて居るのなら、今夜のやうな事は、憤んだ方が、よからうぜ』

眞面目になつて、斯ういはれては、兩人も、今更に面目が悪い。

『どうも、すみません』

『これからは、慎みます』

『や、それで、私の顔も立つ。どうか、悪く思つて下さるな』

『いろ／＼お世話をかけてまして、何とも相済みません』

『併し、お前さん達は、偉い人に目をつけたもので、私は、未だ昨今の知り合だが、實に偉い人だ、と思つて居る』

『あら、厭な、油をかけちや、困りますよ』

『冗談いつちやいけないぜ、此上油をかけたら、何を始めるか判りやしない。本當に左様、思つて居るのだ』

『左様ですかね』

『お前さん達が、斯んなに夢中になつて居るのに、御本人は、彼の通り眞面目なだから驚く。差向ひの時は、どんな事をいふかね』

『オホ、、、』

『笑つちやいけない。眞面目に聞くのだ』

『兩人を、その家へ送りつけて、下宿の主人は、歸つて來た。密と、二階の状況を窺つたら、寂として居るから、その儘、自分の寢床へはひつた。』

乃木は、布団の上へ、横にはなつて居るが、どうしても眠れなかつた。さまざまの事を考へて、終に一睡も、なし

得なかつたのは、髓に良心が、閃いたに違ひない。

昨夜の醜體を思へば、氣恥かしくて、主人に、合はず顔がない。
 『まことに、悪い事をした。己れは、疾く醒めなければならぬ』
 と、覺悟の躰が、堅まつた。

六

夜が明けて、階下へ、顔を洗ひにゆくと、主人が、例日のやうに愛想よく、
 『もう、お目覺めて御座いますか、昨夜は騒々しくつて、御迷惑でしたらう』
 と、いふたのも、乃木の身には、針で刺されるやうな、痛い感じがした。

食膳に對してからも、何となく氣が晴れないので、食事は、うまくなかつた。病氣缺勤の届けを出さうか、とは思つたが、それも止めて、矢張り出る事にした。

營所へ行く途中も、此事ばかり考へて、
 『嗚呼、己れは、一生の失敗をやつた。何といふ馬鹿な事をしたものか。我乍ら實に恥かしい。若し之れが、世間の批評に上り、同僚の問題にでもなつたら、父祖を辱める事にもなる。殊に、國家の干城を以て、任ずる身は、一層、その恥辱を痛感する。此上は、女々しい場合に囚はれず、眞に男子らしい處置を、取る外はない』
 と、いよく堅い覺悟は、決つた。

軍人が、藝妓に關係するのは、左迄に不思議な事でもなく、乃木が、煩悶するほどの罪惡でもない。一般の風習からいへば、すべての階級に有り勝ちの事で、敢て奇とするに足らぬ。

多くの軍人、政治家、紳士の階級に屬するもので、現に藝妓を妻に、引直して居るものがある。藝妓と馴染む事が、果して善くないとするならば、それを、引直して、妻にする事は、一層よくない、といふ事になる。

世間は、それほど窮屈なものでなく、割合に寛大な所もある。一概に醜業婦として、之を擯けるものもあるが、却て良家の夫人に、まさつたものが、そのうちから出て来る。例を擧ぐるまでもなく、賢夫人として、新聞や雑誌の上によく、見る名前の夫人には、その前身の怪しいのが、幾何もあるではないか。

何んな不見轉でも、嬖子さんの所爲に賛成といつて、手を擧げたものはあるまい。有夫の女が、先づ間男をつくつて置いてから、是れが純眞の戀である、と高唱し、それに相和する、學者や紳士もあつた。けれども、醜業婦といはれて居るものに、それを道理ある事として、嬖子に同情したものは、一人もなかつた。

藝妓であらうと、また素人であらうと、その憤みは、本人の心次第で、境遇の相異のみに依つて、その人柄を見るのは、多く誤りに落ちるものである。

併し、これは世間の一般から見たのであつて、乃木の場合は、それと一つにならぬ。乃木は、藝妓に馴染むのを、正しくない事である、と考へて居た人であらう。それが、不圖した迷ひから、お武に親しむやうになり、引つゞいて酒の爲めに、お文とも、親しむやうになつた。悪い事をした、と考へたのは、それから後の事であるが、今更ら何うする事もならず、情交の重なるにつれて、人間の弱味が出て、何となく捨て難い、といふ情も、起つて来たに違ひない。然るに、例の一條から、いよく自分のして居た事は、不善である、と考へて見れば、一刻も安き心はなく、どうかして、此苦しみから脱け度い、とは思ふが、また決してかねて、終に終夜の煩悶をつゞけたのであつた。

營所からの歸途、かねて飲みつけの料亭へ、はひつた。

『まあ、能うおいでなさいました。さア、何うぞ那方へ……』

『一時間ばかりで歸るのぢやから、都合のよい所へ、通してくれ』

『ハイ、よろしう御座います』

仲居は、すぐに帳場へ行つた。外の仲居が、坐布団や煙草盆の用意をして、先に立つてゆく。

奥の離れた一室、前の仲居が、出て来て、

『お知らせいたしませうか』

『うむ』

『すぐに使ひを、出しませうか』

『其處は然る可く、それに今日は、お文と、お武と、兩妓を呼んでくれ』

『えッ、一しよで御座いますか』

『うむ』

『だつて、可笑しいぢや御座いませんか、兩妓一しよなんて、そんな事をなすツたら、大騒ぎになりませうが、よろしう御座いますか』

『そんな事は構はぬ、とに角、一しよに呼んでくれ』

『あなたは宜しい、と仰しやつても、私の方で困りますわ。それでなくても、何だか變な事であつた、といふ噂も、

聞いて居りますから……』

『お前等に、迷惑はかけぬから、呼んでくれ』

平日から、面眞目な人ではあるが、今日は、一層むづかしい顔を、爲て居るから、仲居は、帳場と相談して、兩妓へ、使を走らせた。

七

兩妓は、乃木から呼ばれたので、支度も勿々にして、やつて來た。自分丈けが、呼ばれたものとして、喜んで來て見ると、意外千萬、呼ばれたのは、自分丈けでなく、兩妓が、同時である、と聞いて、少し變に思つた。

ど、ちらの頭腦にも、前日の事があるから、口先では、調子のよい事を、いふて居るが、互の胸には、嫉妬の炎が、燃えて居る。

乃木の態度は、いつもと變つた所がなく、輕薄な御世辭はいはぬが、優しい調子で、應對する。けれども、兩妓の詞には、どことなく、針を含んで、チヨイ〜當こすりを、いふて居るので、その都度、乃木は、苦い顔をするが、兩妓には、それが判らないらしい。

急に、乃木は、膝を正して、

『オイ、少し話がある』

といふたら、兩妓も、俄に更まつて、膝を進めた。

乃木は、やがて、席を離れ、厭がる兩妓を、無理に、上席に直して、自分との間に、劍を置いた。

『さて、話といふのは、外の事でもないが、己れは、生涯の失策を、やつて居た事を、昨日、はじめて氣が付いたのぢや。ア、悪かつた、と、悟つて見ると、一日も、其儘に悪い事を、つゞけて居るのは、己れの心が許さぬ。

實は、お前等が、己れの事を、彼是いふてくれるのを、良い事として、お前等を、汚して居たのぢやが、昨夜、不圖した事から、其れの悪い事を悟り、急に良心に責められて、一睡もせぬ位であつた。

殊に、己れの腰には、此の劍が、下つて居る。それすら、己れは、忘れて居たのぢや。一たび悪い、と、氣が付いて、腰に劍の下つて居る事を、思ひ出した上は、一日も、今迄の行ひを、つゞけて居る事は、己れの心が、許さぬのぢやから、今日限り、お前等との情縁を、絶ち度い、と思ふ。

左様する方が、お前等の身の上にも、却て可いし、また、己れの軍人としての、面目も立つ事になるのぢやから、どうぞ、今迄の事は、夢とあきらめて、水に流してくれ。

その代り、今後は友人として、長く交際を、つゞけようぢやないか。酒席には相變らず、お前等を呼ぼうし、お前

等も、遠慮なく己れの下宿へ、話に来てくれ。また、お前等の思案に、餘る事があつたら、相談にも應じやうではないか。

突然に、斯ういふ事を、いひ出したら、お前等に不服もあらうが、此通り劍を、投出して頼むのぢやから、是非、承知して貰ひ度い。どうぢや」

酒席に侍して、むづかしい人の取扱ひには、馴れて居るが、斯うした眞面目な話になると、存外に、ひるむ風のあるは、是等の人の常である。

惚れたとか、戀しいとか、いふ事も、普通の遊冶郎を、對手にして居るのと違つて、幾分は尊敬の念を、持つて居る丈に、萬事が、遠慮勝ちで、怖いやうな氣もするが、併し、戀しいといふ心もある。それ丈に、此答へは一寸むづかしい。況して、兩妓が、列んで居ての事だから、一層困る事にもなる。

兩妓は、顔の色も悪く、涙ぐんで居る。どちらか一人、口切りをしたら話も進まうが、それは、むづかしく思はれる。

『お前等が、どうしても、承知出来ぬ、といふなら、どうも致し方がない。自分で、つくつた罪は、自分で制裁を、加へる外はないのぢや。己れは、此劍で、腹を切るまでぢや』

『えッ、何と、おツしやる』

『此儘にして置いては、己れの面目が立たぬから、腹を切ると、いふのぢや』

於是、兩妓の覺悟は、どうしても、乃木の、いふ事を容れる外はない、と決した。

どちらか、一人が残されて、乃木の世話を、するといふのでは、残されるものに故障もあるが、兩妓が、一時に切れる、といふのでは、斷念もつく譯だ。

『あなたの御心は、よく判りましたから、妾は、宜しう御座います』

と、先づお武が口を切つたので、お文も、負けては居ない。

『今日限り、思ひ切ります』

之れを聞いて、乃木は喜んだ。

『さう解つてくれると、私も喜ばしい。これからは、話相手になるから、何でも相談してくれ』

『有難う存じます』

遂に兩妓は、聲を揚げて、泣き出した。

乃木は、種々と、兩妓を慰めて、その日の事はすませたが、随分、苦しい事であつたらう。

お文は、此時、すでに乃木の子を、孕んで居て、別れてから女子を生んだ。幸にして其子は、一年の後に、死んで

くれた。

兩妓のうち一人は、名古屋に居て、相當に暮らして居る、が、もう一人の方は、神戸の實業家に嫁して、氣樂に暮らして居る、と聞いた。

前原の亂

一

明治九年に、前原一誠が、長州の萩と山口で、兵を擧げた。それが、乃木の身に取つて、容易ならぬ關係を、持つのであるから、先づ其事情から、説く事にする。

尼子晴久の家來に、米原平内といふ、武士があつた。尼子が、毛利に滅ぼされてから、長い間の浪人、世を憚つて姓を佐世と改めたが、いつか知らず、毛利の家來になつて、一誠に及んだのである。されば、一誠も、維新前までは、佐世八十郎と、謂ふて居た。松陰門下の一人であつたが、松陰の死後は、玉木文之進の指導を、受ける事深く、玉木との關係は、最も親密であつた。

玉木には、實子が、一人在つて、彦造といふたが、維新の際に、越後の戦ひで死んだ。その以前に、乃木の弟、眞人を養子にした事は、前回到述べた通りである。實子を、亡ふた後は、一段と、眞人を愛して、家の相談人とした。兄の無人は、預り子ではあつたが、これも、實子と同じやうに、取扱つて、名を文造と改め、自分の手許に、置いた間は、文造と、呼んで居た。無人の乃木は、はやく玉木の手を離れて、討幕派に加はり、維新の後は、新政府に入つて、軍人になつてしまつたが、弟の眞人は、玉木の相談人として、國に残り、玉木の左右を、離れなかつた。

玉木と、前原の關係から、眞人も、前原と、深く交はつた。従つて、前原の一派とは、切つても切れぬ因縁を、持

つて居た。

前原は、維新の變亂に際會して、その風雲に乗じ、東西に奔走して居たので、長州の志士として、相當人にも知られ、實力も、充分に在つたから、北越の戦いには、參謀となり、その平定と、同時に、越後府の知事になつた。今といへば、新潟縣知事と、同じ格で、軍人から文官に、早變りをした事になる。

明治三年になつて、大村益二郎が暗殺された。大村は、兵部大輔の顯職に在つて、その盛威は、内外を壓した。兵部省が、その後、海陸の兩省に、分割されたのであるから、當時の兵部大輔は、今の海陸大臣を、兼任して居たのと、同じ事になる。大村の殺されたに就ては、種々の事情もあるが、先づ徵兵實施の爲めである、と、見るのが正當であらう。徵兵令は、山縣の名で公にされたが、その發案者は、大村であつた。

大村といふ人が、非常な傑物であつた上に、兵部大輔が、頗る權勢ある役目だけに、その後任を希望するものも、却々に多くあつて、人選は、甚だ面倒であつた。然るに、前原は、衆の推す所となつて、終に兵部大輔の重職を、襲ぐ事になつた。單に、此事にのみ依つて見るも、前原が、一塵の人物であつた事が、思はれる。

けれども、前原の性質は、時に偏狹と思はれるほど、嚴正な所があつて、人の言ふ事を、容れぬ癖があつた。それが爲めに、同じ長州人の間にも、多少の敵は、持つて居た。陸軍大輔の山縣有朋と、何分にも折合が悪く、幾たびか衝突した事もある。また、參議の木戸孝允とは、最も善くなかつた。是れといふて、争ふた事はなかつたが、互に睨み合つて居た。斯うした調子であつたから、大藏少輔の井上馨とは、極めて仲が悪く、事毎に、衝突して居た。獨り參議の廣澤兵介とのみは、左様いつた事もなく、打解けて相談もすれば、親しく往來もして居た。

その廣澤が、木戸や井上と、常に意見が違つて、動もすれば相争ふ、といふ關係に、なつて居ただから、同じ長州人であり乍ら、自然と、二派に分れて、勢力を張合ふ形ちに、なつて居たのである。

恰度、その頃、萩と山口に、ひどい動亂が起つた。大樂源太郎、古松簡二等を始め、木戸井上等に、反對の連中が、

維新の際の、論功行賞を口實にして、不平士族を、煽動したのであつたが、これにつゞいて、各藩の間にも、同様の事が、起りさうになつた。其處で、木戸等は、責任を感ずる事ふかく、自ら其鎮撫に行かう、といひ出した時、前原は、之れを遮つた。

『大樂等は、我輩とも、深く交はつて居たものであるから、是れは、我輩が行つて、よく大義名分のある所を説き、必ず鎮撫して見せるから。我輩を遣つてくれ』

と、いふたのを、木戸は、強ひて抑へつけて、自分が、行く事にした。是は、大樂等を、前原に抑へさせると、ます前原との、關係が深くなつて、後日の面倒が起る、と見たからであるが、それ丈けに、前原の身に取つては、木戸に行かれる事は、不快に感じたに、違ひない。

一一

大樂といふ人は、非常な才物で、學もあれば、武術にも長じて居たが、餘りに其才智を恃んで、事を輕々しくする風があり、其れが爲めに、却て重きを爲さず、一部の人には、ひどく嫌はれて居た。

併し、俗人の信用を、得る事が巧で、大樂の味方も、相當に有つた。維新の際に、はやく中央へ乗出したものは、功を遂げ、名も成して居るが、之れに反して、國元へ残つたものは、功も、名も、均しく成す事を、得なかつたので、明治になつてから、何の位地も得ず、論功行賞に於ても、甚だ輕きに失した、といふので、その不平は、一と通りでなかつた。是れは、何處の藩にも、あつた事であるが、殊に、多くの功臣を出して、明治政府の中堅となつた、薩長の二藩には、此不平が多くあつたので、その鎮撫には、先輩も、容易ならぬ苦心をした。

萩と山口に、非常な騒ぎが起つた、といふ事は、長州出身の先輩として、政府の、大きい役人を、爲て居るものは、重い責任がある。木戸が、自ら其鎮撫に出かけよう、としたのも、一つは其責任からの考へて、前原の行くを妨

げる、意味ばかりでは、なかつた。けれども、前原の方から見れば、全く自分が、行くのを妨げて、木戸が、專横を働くものと、考へてしまつたのである。

木戸は、萩へ着いてから、一時は、包圍のうちに陥つて、頗る危い眼に逢つたが、幸ひにして事件は、軽く済み、大樂等は、行方を晦ましてしまつた。事變鎮撫の功を、鼻の先きにかける、木戸の一派、それに反感を持つ前原、此脱み合は、容易に融ける時は、あるまい。前原が、兵部大輔といふ、顯職に居乍ら、不平を持つて居る事は、木戸派の爲めには、甚だ都合が悪いので、どうかして、之れを罷めさせよう、とするが、前原は、容易に動きさうも、なかつた。

一日、井上が、突然訪ねて来て、種々の雑話が、あつた末、

『先般、歸國の節、藩公に拜謁した時、斯ういふ事を、承はつて來たが、君は、何う考へるか』
と、いふ冒頭で、

『大樂の起した事變は、先づ片附いたとしても、猶ほ多くの、不平を拘くものがあつて、何時、どういふ事變が起らぬとも限らぬ。斯様な、事の類發するは、朝廷へ對しても、甚だ相濟まぬ事であるが、舊藩の時代とは異つて、余の説諭も、昔の如くは行はれず、それに就て思ふに、前原は、不平士族から最も尊重をうけて居るものであるから是非とも、前原を歸國せしめて、此鎮撫に當らせ度いものである、と、斯ういふ仰せを、うけたので、我輩は、之れに御答へして、それは、今日の場合、至極の名案とは存じますが、前原は、現に兵部大輔の顯職に在るものゆゑ、それが爲めに、歸國せしむる事は、ちと困難と存じます。若し、前原が、その職を辭する、とすれば、鎮撫に就ては、此上もなき、適任者とは思ひますが、是れは、政府の爲めにも、容易ならぬ事で、殊に、前原に、其心の起らぬ以上は、如何とも致し難い事で御座ります、と申述べたら、藩公も、左様かと仰せられて、この話は、其れ切りであつたが、君の耳にも、一度は、入れて置く方が可い、と考へて、斯くは打明けた次第である。君は、之れを何

う思ふか』

例日の井上に似合はず、極めて慇懃な話振りで、前原も、襟を正して聞いた。しばらくして、前原は、

『君の話は、只一通り、藩公との問答を、我輩に、聞かせて置く、といふのであるか、それとも、我輩に、辭職する心が在るか、どうかといふので、あるか』

急所を、キューと、刺し込まれて、流石の井上も、辭せはしく狼狽しながら、

『イヤ、左様いふ風に、聞かれては困る。決して、君に、辭職を促すなぞ、といふ次第ではない。只藩公の仰せと、我輩の答へとを、念の爲めに、打明けたまでの事ぢやから、悪く取らぬやうにして貰ひたい』

『別に、君のいふ事を、悪くは思はないが、總て左様いふ話は、右か左かの答へを、聞く可きもので、單に話す丈の事なら、聞いて置く必要もないではないか』

『さう、窮屈に話込まれては、甚だ迷惑を感じるが、若し疝癢に觸つたら、聞き流しにして、置いてくれ』

『取消す、といふのか』

『否、さうではない』

『然らば、何ういふのか』

『今日は、之れで止めよう。いづれ近日のうちに來て、よく話さう』

平生は剛情で、人に降らぬ井上も、此日は、汗を拭き、歸つて行つた。

二二

正直な人は、疝癢が強い。理義の正しきを欲するものは、卑劣な術策を容れぬ。前原の如き、古武士の型に、はまつた人は、既う容れられぬ時世に、なつて居た。

木戸との折合も、甚だ善くなかつたが、井上等の爲るやうな、露骨な排斥は、有弊に、木戸は憤んで居た。山縣と木戸の一派は、これも餘り、善くなかつたけれど、山縣は、前原を、嫌つた爲に、井上と結んだ。山縣と木戸が、善くなかつた證據は、三浦梧樓が、終に山縣の死ぬまで、楯を衝き通した、一事に見ても、明かである。三浦が、木戸系の人であつた事は、すでに能く知れ渡つて居る。

前原は、終に職を辭した。廣澤參議が、それを知つて、すぐに、前原を訪ねた。

『ヤア、どうして、那アいふ事を致したのか』

廣澤は、席に着かぬうちに、先づ斯ういつて、それから、靜かに坐りかけた。

『もう、黙々厭になつた』

『どうしてか』

『どうも斯うもない。濁つた汚い泥水の中には、住んで居るのが厭になつた、といふのぢや』

『お前が、左様思ふのも無理はないが、それにしても、我輩には、一應の相談が、あつても可からう』

『相談すれば、引留られるから、誰にもいはす、一存で決行したのぢや』

『その覺悟を、必ずしも悪い、とはいはぬが、併し、どこへ行つても、大概は同じやうなものぢや。お前は、どこに安息の地を求めるともりか』

廣澤は、頗る落付いて、徐かに説きはじめたが、前原の覺悟を決めた時、廣澤から、此位の勸告はあるものと、承知の上であるから、前原は、廣澤の熱心な割合に、氣乗りをして居らぬ、容子であつた。

『濁つた汚い泥水には、耐や鱈の外、好んで住むものもあるまいが、どこへ行つても、同じやうな泥水だ、としたら、

自分の力で拓いた、泥田の方が、却つて住み可からう』

『猶う一と辛棒して、汚い物の掃除を爲てやつたら、何うぢや』

『それが、五月蠅くなつて、國へ逃げ込まう、といふのぢやよ』

『未だ其れほどの、歳ではなからう』

『さういはれては、一言もないが、まあ、我輩の思ふ通りに、爲せてくれ』

『お前の胸中は、己れも、能く知つて居るが、今度の決心は、何ういふ事からか、己れに打明けて、貰ひ度い』

『……………』

『いづれ一度は、斯ういふ事にもならうか、と思つて居たが、あまりに突然で、己れも驚いたのぢや。何か仔細があらう、それを、聞かせてくれ』

廣澤から問詰られて、前原も、止むを得ず、井上から、聞いた事を、すつかり打明けてしまつた。之れを聞いて、廣澤の驚いた事は、一と通りでない。井上等の奸策が、此に及ぶ以上は、木戸を責めて、何とか此處置をつけねばならぬ、とあつて、厭がる前原を、無理に誘つて、木戸を訪ね、激しい押問答の末、とう／＼廣澤が怒つて、半喧嘩腰になつたのを、今度は前原が、仲裁する、といつた調子で、木戸を、訪問した結果は、却て良くなかつた。

斯うした事情から、前原は、辭職が聞き届けられる、と、すぐに萩へ、引上げてしまつた。その跡で、廣澤は、九段坂上の妾宅に於て、何者かに暗殺された。

前原が、東京から大阪へ出て、天保山の邊りで、船に乗らうとした時、狙撃されて、僅かに死を免れた事があり、更に山口へ歸つて、一夜、再び狙撃されて、また免れた、といふ、不思議な事もあつた。殊に、山口で、狙撃された翌朝、東京から、電報が來て、廣澤の殺られた事を知つた。前原の感じは、それからそれへ、恰て夢を辿るやうに、移つてゆく。

猶更、不思議に堪へなかつたのは、前原が、下關へ着いた時、井上は、既に山口へ、來て居た事である。東京を出る時、井上が、歸國する、なぞといふ事は、噂にも聞かなかつた。従來からの行掛りを考へ、今度の事件を思ふと、

どうしても、疑惑は深くなるばかりで、従つて、井上等に對する反感は、ます／＼酷くなつた。

松陰の教をうけて、人格は正しく、或時は嚴格にすぎで、偏狭のやうにも思はれたが、その代り、昔堅氣の士族は、多く前原に、心服して居た。奥平謙輔、白井林藏、佐世一清、横山俊彦、馬來奎、冷泉増太郎、玉木眞人等は、皆前原派の人として、ひろく知られて居た。眞人は、乃木の弟で、文之進の養子に、なつたのであるが、その關係から、文之進も、前原に同情して居る、一人であつた。

四

木戸は、未だ桂小五郎といふ頃、安政の昔であるが、齋藤彌九郎の門弟として、擊劍に於ては、屈指の達人であつた。同門のうちには、幕臣も多く居て、桂の稽古を、うけたものが、少からずあつた。利害の立場は、全く異つて居ても、桂が、親切に教へてやるので、存外に、幕臣の間に、人氣があり、それが爲めに、桂に、師の禮を執るものもあれば、兄事するものもあつて、後の中野梧一などは、關口隆吉と共に、桂を崇敬して居た、幕臣の一人であつた。

中野と、藤田傳三郎の關係は、桂から、井上へ紹介され、井上から、更に藤田へ廻された、といふ因縁があつて、例の價札事件の疑獄には、藤田と、一しよに囚はれとなり、出獄の後、中野の自殺に依つて、永久に、此事件の真相を、葬つてしまつた。

山口縣令として、中野が、威張つて居る所へ、前原は、辭職して來たのであるが、何しろ、前原の一派が、萩や山口には、澤山に居て、木戸や井上に、反感を持ち、我儘の仕放題で、政府に、抵抗して居るのだから、縣令のいふことなどは、蚊の泣くほどにも思はず、動もすれば縣廳へ、ふみ込んで、暴れ散らし、どうにも斯うにも、手のつけやうが、なかつた。

未だ、中野が、縣令の時は、それほどでもなかつたが、井上との關係上、中野を罷めさせて、關口隆吉が、代ら

せられてからは、ます／＼甚太しくなつて、縣令の訓示や説諭は、何一つとして、行はれなくなつた。

關口が、中野に代つて赴任すると、同時に、先づ前原を訪ねて、

『頭固士族の横行には、實に困る。強て抑へつけよう、とすれば、亂になる恐れもあり、放任して置けば、御承知の通りの次第であるが、何とかして、鎮撫の方法はないものでせうか』

と、先づ相談をかけて、前原の意中を、忖度にかゝつた。

『鎮撫の任は、君に在る。我輩の關する所ではない』

『來縣して、未だ日も淺く、充分に土地の事情も知らず、士族等の不平は、果して何に原因して居るか、それも判らぬやうな場合、如何とも手を下し得ず、自分としては、此位困つた事はないが、偏に先生の御教示を、仰ぎ度い』

『その威力なるものは、用ゐ度くないのです』

『然らば、徳を以て、引付けたら何うぢや』

『先生の仰せられる、徳とは……』

『それは、木戸や井上に聞いて、見るが可い』

『間答も、これまで押付けければ、もう行詰りである。』

兩人は、しばらく黙つて、睨み合つて居たが、關口が、前原を訪ねた本意は、何とかして、前原を動かさし、その力に依つて、不平士族を鎮撫させるか、又は動搖の原因が、全く前原の煽動からであるか、どちらかを突留めたい、といふのに、あつたのだから、此儘歸つては、折角訪ねて來た、甲斐もない事になる。其處で、もう一と押し、押して見る必要はあるのだ。

『その原因や事情は、先づ差措いて、兎に角、自分が赴任してから、彼等の動搖が、一しほ烈しくなつた、とあつて

は、大政府へ對して、役目の手前、申譯もない仕儀であるから、是非とも、此際は、先生に、一と肌腹いて貰ひ度い、と思つて、斯く御訪ねいたした次第で御座るが、何とか御分別下さる事は、出来ませうまいか」

荷も縣令ともあらうものが、辭を卑くうして、飽迄も前原に、力を貸してくれ、といふのであるから、斯うなると、前原も、幾分か同情する氣になつたが、關口を援けるのは、政府の爲めに、働く事にもなるのだ、といふ點へ、思ひが及ぶと、また引受けるのが、厭にもなつて、

「つまりは、大政府から我輩へ、此事をたのむといふのであるか、それとも、君の一存から、苦し紛れの御依頼か、全體、どちらなのであるか」

如何にも、皮肉な答へであるから、此に於て、關口も、少し憤然として、

「まさか、大政府が、左様に弱い音も吐けまい。それは、我輩の一存からと、御承知を願ひ度い。要が、不平士族の動搖、いざとなつたら方法もあらう。萬事は、穩便を主としての、御依頼で御座る」

「然らば、斷じて御引受け出来ぬ」

「どうも、止むを得ない」

別れ際は、甚だ悪かつた。關口が、縣廳へ、引取つて間もなく、百人餘りの士族が、各自に、柄物を携へて、ワイワイひ乍ら、押寄せて來た。

五

縣廳の役人は、殆ど其全部が、長州人であつた。是れは、何處の縣でも、皆同じ事で、他縣人を多く入れたら、一日も無事に、治めてゆく事は、出来なかつた。

押寄せた士族も、受附の役人も、皆同じ長州人で、數年前までは、同藩士として、仲よくして居た間柄ではあつた

が、今では政府に、勤めて居るものを、恰て仇敵の如く見て、何事につけても、辛く當る。役人の方でも、何の浮浪の士族が、といった風に、軽く見てかゝるから、この折合も、頗る悪かつた。

「縣令は、居るか」

「隠し立てをすると、許さぬぞ」

「さア、はやく執次げ」

「何を逡巡して居るか」

一人づつ別にいへば、よく判るのを、斯ういふ風に、我れ勝ちに怒鳴るから、聞いて居るものは、恐怖の念が先になつて、只狼狽するばかりで、すぐ執次ぎさうもない。さうなると、猶ほ騒ぎは酷くなるから、忽ち其事が、四方へ大きく、傳へられる。追々に、集まつて来るものは、何の事か、能くは判らないが、皆士族に加勢して、その騒ぎは一層、ひどくなつて來た。氣の逸い奴が二三人、土足の儘で、ドカ／＼と、駈け入らうとしたから、流石に役人も堪らへかねて、之れを拒まうとした。

「貴様ツ、生意氣な事をし居ると、ぶち斬るぞ」

ピカリと、光つた。それに促されて、十二三人が、一時に抜いた。役人は、之れを見ると、我れ先きに、奥へ逃げ込む。跡から續いて、山崩を打つて押込んだのが、彼是れ百人餘りも居たらう。

どうして、斯んな騒ぎを始めたのか、それは、最初に押寄せたものには、よく判つて居ても、跡から來た連中には、誰一人として、判つたものはない。是れが、世に謂ふ、附和雷同といふので、何だか判らずに、騒ぎ出すのだから、どうにも、手のつけやうは、ないのだ。

前原から聞いて、關口縣令のいふた『頑固士族の一言が、疍續に觸つたので、その理由を糺さう、と、いふのであつた。謂はゞ根も葉もない事からの、憤慨ではあるが、その奥には『今の政府が、何となく癩に觸る』と、いふ事

も、あつたのである。

此騒ぎに、縣令の關口は、元が齋藤門下の劍客であるから、追々の報告を聞いて、室の一隅に在つた、刀を執り、事、此に及んでは、致し方がないから、理不盡に、ふみ込んで来る士族を、片端から、斬り拂ふ外はない、と覺悟した。それと見て、部下の役人は、

「御立腹は、御尤で御座いますが、左様いふ事をなされては、ますく彼等の怒りも強く、どういふ騒動に、ならうも知れませぬから、此場は、一時通れて、さらに鎮撫の方法を、御考へ遊ばしては、如何で御座いますか」

と、いふて引留める。關口も、よく考へて見れば、自分は、縣令なのであるから、まさか、輕卒な事も出来ず、屬僚の言ふ所にも、一應は、道理の點があるので、兎に角、此場は通れて、善後策を、講ずる事にした。

前原は、冷笑的に、關口のいふ事は、二三の士族に話した迄の事で、斯んな騒ぎが、起る事は、豫期して居なかつた。折柄、訪ねて來たのは、奥平謙輔と、横山俊彦の二人であつた。

「ヤア、豪い事に、なりましたぞ」

「縣廳へ押かけた、さうぢやな」

「今、其押合で、大騒ぎをやつて居る」

「一時の騒ぎで、大した事もなからう」

「イヤ、却々さうらしく、ないぞ」

「ふふーむ」

奥平も、横山も、ともに政府に對して、大なる不平を、持つて居る。政府といふよりは、寧ろ木戸等に、對する不平で、前原の辭職以來は、殊に、其不平は嵩じて來て、事毎に、政府の爲る事が、疇積に觸つてならぬ。要するに、不平の原因は、是れといふて、具體的に、いふ事は出来ないが、何となく不平である、と、いふ事に歸着する。

政府に、出て居るものは、追々に、世界の大勢も、判つて来るし、文明國の状態も、醜氣ながら知れて来たので、自然と、其れに従ふてゆかう、と爲る。殊に、木戸等は洋行して、直接に歐米の状況を、見て来たから、是ではならぬ、と、百般の施設に、新しい西洋風を、加へて行く。これを、見て居る連中で、未だ舊式の思想に、囚はれて居るものは、如何にも、其爲る事が、夷人臭く思はれて、腹立たしくなつて来る。

さうした、思想の相違から、木戸等に、對する不平は、知らず識らず、高まつてゆくのであつた。關口が、頭から『頑固土族』と嘲るのも、取て當らぬ譯でもなかつた。

六

奥平は、蔭を進めながら、聲をひそめた。

『政府に、若し誠意があるなら、相當の人物を遣はして、不平土族の鎮撫を爲す可きであるのに、關口の如き輩を使役して、先生を籠絡し、濡手で粟を擲むやうな、奇功を挙げよう、とするのは、實に奇怪千萬である。土族等が縣廳へ押寄せたのも、畢竟は、政府の不誠意に基いたのであるから、先生は、宜しく傍觀して、その成行に、一任しただけでせう』

之れを聞いた、前原は、軽く首肯したのみで、何も言はなかつた。

『此騒ぎを利用して、政府の改革を促し、全國の同志を激勵して、一舉に、本来の目的を果したら、どうでせう』
區長の横山は、單刀直入、かねての計畫に、觸れて来た。此時に始めて、前原は、眠りから覺めた人のやうに、顔を上げて、兩人を、ちつと見詰めた。

『横山のいふやうに、さう急な事にもゆくまいが、時機の熟した事は、認められる。いづれかに、御分別を、なさらなければ、徒に疑惑の人となつて、虻蜂取らずに、終るでせう』

と、奥平は、横山のいふ所に、賛成か反対か、鳥渡解りかねる事を、言ふた。それでも、前原は、黙つて居るので、横山は、もう堪まらなくなつて、

『先生、どうなさる』

此時、前原は、始めて口を開いた。

『天下に志しを同じうするものは、決して少くない、と思ふから、先づ其等の同志にも、よく聯絡を取つて、徐ろ

に事を起すも、遅くはあるまい』

併し、今の騒ぎは、何うなさる』

『それは、政府の責任ぢや。我等が、關係す可き事でない』

『若し、先生が、打ちすて置かれたら大事にならう、と思ふが、それでも構はぬ、といはれるか』

『さア、その點は、考へる必要がある。今、起つた騒ぎは、根も葉もない事で、いはど一時の勢であるから、大概に

して收まる、とは思ふが、斯んな事で、政府に、何等かの口實を、與へるのも遺憾であるから、何とか爲ねばなる

まい』

『先生、自ら鎮撫の任に當る、といふのですか』

『左様いたしても、可い』

『萬一にも、收まらぬ時は、何と爲さるゝつもりか』

『その時は、また別に、考へる迄の事ぢや』

是れで、兩人は、猶ほ突ツ込んで、いふ可き事を控へ、前原の爲すに任せた。前原が、縣廳へ、やつて來た時は、

すでに關口縣令は居なかつた。亂暴士族の、包圍を遭れて、夜を幸に、山口へ、去つた時であつた。

跡で考へると、何でもない事であるが、斯ういふ場合には、双方に、誤解の起るもので、關口の方では、此騒ぎの

起つたのを、全く前原の教唆であると、見て居る。前原の方では、縣令の處置が良くないから、斯ういふ事になつたものと、主張する。その感情は、時間の經つに従つて、漸次、悪くなるばかりであるから、どうせ、無事の解決は、望み得られないのである。殊に、關口が、辛うじて萩から、山口へ來たら、此處にも騒ぎがあつて、再び土族の包圍に陥つた。

すべての狀況が、斯ういふ次第であるから、關口は、もはや鎮撫の見込みなきものとして、その旨を、中央政府へ、報告した。於此、政府は、廣島鎮臺へ、命令を下して、その兵を進める事にした。此時の司令官は、三浦梧樓であつた。

舊藩の傑物は、多く政府へ入つて、長防に残つて居るものは、舊弊土族で、十年前の武家政治を、未だ夢に、見て居るものが多い。世間の人は、遠慮なく進んでゆくのに、彼等は、又遠慮なく、舊弊に安んじて居る。その距離は、日と共に、遠くなつてゆくから、双方の了解は、容易に得られなくなつて、終には意外な衝突を、引起す事になる。

當時は、維新の騒亂があつてから、まだ間もないので、政府に居る大官には、血腥い風に、吹かれて來たものが、多く居て、舊藩地に、残つて居るものにも、左様した人が、多く居たのである。それが、互に反感を有つて、睨み合つて居るのだから、ちよつとした、事行違ひにも、すぐ腕をまくり、刀に手をかける、といった風があり、今の政界の事に比べると、その調子は、頗る違つてゐる。

長州人の騒ぐのは、長州人のうちで、治めるのが當然で、何も、兵力を用ゐるには、及ばなかつたのだ。而も、長州出身の軍將が、その指揮官である、といふのでは、不平土族の疍癩玉が、破裂するのも無理はない。斯うした事情から、前原の亂なるものは、起つたのである。

會津の士族に、永岡久茂と、いふものがあつた。一時は、斗南藩の大參事にもなつて、明治政府の祿を、食んだ事もあるが、維新の際には、越後口の戦ひに、參謀となり、官軍を惱まして、それから、函館へ赴き、榎本や大鳥と共に、最後まで戦ひ、力盡きて、官軍に降り、入牢の、苦しみを嘗めて、後赦されてから、黒田清隆の躰煎で、政府に事へるやうになつた。

けれども、元來が薩長人に對して、深い反感は、持つて居るので、長く政府に、事へる氣はなく、廢藩置縣を機會に、職を辭すると同時に、東京へ、出て来て、それからといふものは、全く浪人生活で、花柳界にのみ、出沒してゐた。今では、新橋が、第一の繁昌で、藝妓といへば新橋を、すぐ思ふ位になつて、大層な勢であるが、昔は、柳橋を以て、第一に數へたものである。永岡が多く遊んだのは、その柳橋であつた。近頃まで永岡を、能く知つて居た、婆アさんも居たが、昨今では、古い妓は、大概死んでしまつて、既う永岡を、知つて居る女は、ないやうだ。

花柳の巷に、明けても、暮ても、姿を現はしては、恰も遊治郎の如き行ひを、人に見せつけてゐるが、永岡の志は、ひそかに、他の方面に、動いて居たのである。酒と女に、名を借りて、集まるものは總て、政府に叛意を持つものと、薩長人の跳梁に、不平を有するものばかりであつた。

一柳務、山本保之、高橋彌太郎、野口新次郎、能見鐵次、高久慎一、中原重業、松本正直、滿木繁清、木村新次、中根半七、高崎政八郎。

是等の人を、種々の關係から引付けて來た、永岡の苦心は、並大抵の事てなかつた。千葉、茨城の縣聽を襲ひ、監獄を破壞して、徳川の舊時を慕ふ幕臣や各藩の士族に、檄を傳へて、關東の到る處に、小さい騒動を起させ、政府の奴等が、右や左に、氣を取られ、遠くへ心を配る暇のないやうにして、熊本や萩の同志に、充分の活動をさせやう、と、謀つたのである。

永岡は、曾て長州へ出かけ、前原を訪ねて、深く約する所あり、東西相應じて、兵を起す事にして置いた。熊本の

神風連とは、直接に因縁はなかつたが、前原を通じて、是れも、聯絡は取つて居たのである。神風連は、更に秋月の宮崎車之助一派と、堅い約束があつて、一たび事を起せば、三方から一時に應ずる、といふ仕掛けになつて居たのであるから、若し是れが、うまく行つたら、それこそ一大事であるが、先づ永岡の計畫が破れて、熊本も、秋月も、みな蹉跌してしまつた。獨り萩に於ける、前原の擧兵のみが、思ひ通りに、行く筈はない。

首領は、前原であつても、實際の計畫は、奥平や横山が立てたのである。いよ／＼擧兵の一段になつて、すぐ差支るのは軍器であるが、殊に、小銃の無いのは一番に困る。

「人數も、漸く見込み丈は揃つたが、小銃に就ては、とても手に入る當なく、兵營のうちから持ち出させる、つもりであつたが、それも、至難しさうぢや。これには、實に弱つたよ」

と、平生は、剛情を見得のやうにして、頑固で、押通して來た、連中も、此一事については、誰も困つて居た。今日は、思案に餘つて、横山が、斯ういひ出して、前原の考へを聞かう、と、するのであつた。

「可し、よい事がある。玉木を、呼んで來い」と、山田が、突然いひ出したので、奥平は、

「玉木を呼んで、どうするつもりか」
 「彼れは、乃木の弟ぢやから、すぐ小倉へ、遣つて見よう。乃木の手から、小銃の千挺位は、受取れるぢやらう」

「小倉には、そんなに澤山在るのか」
 「千挺位は、兵營の倉庫に容れてある」

「併し、乃木が、應ずるか何うか」
 「それは、大丈夫ぢや。乃木は、涙のある奴ぢやから、實弟に責られたら、必と應ずる」

「萬一、應ぜぬ時は、それから禍を引くやうに、なるぢやらう」

『己れは、乃木を、眞の男子と視て居る。假し、玉木の需めには應ぜずとも、秘密を漏らすやうなものではない』
 『左様か。それでは、玉木を迎ひにやらう』

『どうか、左様してくれ、己れから話をして見よう』

相談は決つて、玉木へ、使ひを走らせた。

山田は、名を頼太郎といふて、前原の實弟であるが、夙く陸軍に入つて、少佐に進み、小倉分營に、聯隊長を勤めて居た。それが、前原の不平に伴れて、辭職した跡へ、乃木が、赴任する事になつたのである。

維新秘話に在る、前原一誠の亂を、參照して欲しい。前原は、萩へ退へてから、明倫館へ入り、之れを擴張して、自分は官長となつて、子弟に教を布いて居たが、その間に、兵器彈藥は、可成り蓄へたのである。それ丈けては、とても、足らぬので、斯うした事も、考へられたのであるが、事變が起つてから同志と思つた士族のうちに、政府黨が居て、多くの彈藥を、校庭内の池へ、投込まれた上に、三浦の砲撃に逢ふて、彈藥庫を焼かれたのみならず、本據にして居た、明倫館が、火にあつた爲に、事は、全く破れたのであつた。

涙の別れ

一

玉木家へ、養子に貰はれた、乃木の弟眞人は、極めて純白の性質で、美しい人格の持主であつた。幼ない時から、文之進の教へをうけて、古武士の風格を備へ、長じて前原の門に入り、同輩の間にも、頗る尊敬されて居た。

前原が、眞人を愛することは、同門生のいづれもが、羨むほどであつた。兄の乃木は、政府に奉職して、陸軍の人にはなつたが、自分は、政府へ、出る心もなく、すてに妻を迎へて、養父に孝行をしながら、前原の教へを、うけて居たのである。

乃木は、疾くから戦ひに臨み、政府との因縁を生じて、陸軍の人と、なつてしまつたが、純真な心に於ては、眞人と、異なる所はなかつた。木戸、井上、伊藤には、餘り接近せず、獨り山縣とは、職務の上からの關係はあつたが、その乾兒には、ならなかつた。兄弟の間には、何の疎隔もなく、互の情合は、幼い時と、更に變りはないけれど、境遇の相違は、自然と、兄弟相見の、機會を失はせたのである。

文之進や前原から、常に聞かせられる、時代に對しての、不平論は、すべて其れに、敬服して居る、といふ次第ではないが、眞人の頭腦にも、政府の施設や政治に就て、大きい不満はあつた。

萩や山口に居る、士族が、頻りに喧しくいふて、縣令と衝突する事は、眞人も、餘り賛成はして居ないが、つまり

は、前原の爲に漏す、不平の結果が、左様いふ事になるのである、と思へば、幾分か快くもあつた。

前原から、迎ひが来たので、眞人は、すぐにやつて来た。前原ばかりと、思つて来たたら、左右には、奥平、横山、白井、山田なぞいふ、前原一味の重立たるものが、ズラリと列んで居たから、眞人も、是れは、尋常の用事ではない、と感じた。

『やア、玉木君』

と、先づ横山が、聲をかけた。前原は、ニヤリと笑つて、軽く首肯いたばかり、山田が、膝を進めて、

『玉木君、些と頼みの次第がある』

『先生の御使ひに依つて参りましたが、御用といふのは、何てありますか』

『小倉へ、行つて貰ひたいのぢや』

『えッ！ 小倉へ……』

『うむ、大切な用件が、出来たのぢや』

『どういふ事ですか』

山田は、聲をひそめて、

『昨今の状勢を、君は、何う視るか。政府は、鎮臺兵を、此方面へ、送る事に決めたさうぢやが、天下泰平の時、先づ政府から、兵を動かす、といふのは、甚だ其意を得ぬ。察するに、政府は、我々を以て、不逞の徒と、視たに違ひない。然る以上は、我々に於ても、また相當の備へを、爲して置く必要がある。我々は、敢て事を好むものではないが、政府から、左様いふ風に仕向けられては、武士の意地としても、多少の武は、用ゐる度くなる。けれども、第一に要する、兵器に苦しむのぢや。其處で、君に、小倉へ行つて、乃木を説いて貰つたら、二千や三千の小銃は得られる、と思つて、實は、兄とも相談の上、君を迎へたのぢやが、是非引受けて呉れ』

之れを聞いて居るうちに、眞人の満身は、火のやうに熱くなつた。山田は、何の雑作もなく、いふて居るが、此事は、明かに擧兵の準備である。自分は、前原の門人として、先生の不平には同感であるし、その境遇にも、同情して居る。けれども、未だ謀叛にまで、與する考へは、持つて居なかつたのである。

於此、眞人の頭腦は、千々に亂れて來た。是れほどの大事を、無雑作に、うち明けてくれるのは、自分を、深く信じて居るからであるが、一たび之れに與すれば、謀叛の罪は遁れぬ。玉木の家に、さうした疵は、附けたくないのみならず、兄にまで、此累を及ぼす事は、甚だ痛心に堪へないけれども、前原から受けた、教育の恩は、決して等閑にならぬ。いづれにしても、眞人の心は、一つしかないから、それを二つにして、心の使ひ分けをする外、どちらへも都合のよい、といふ、仕向けのしやうは、ないのであるから、前原に従いて、自分の一生を捨てるのは勿論、養家の名を傷つけるのも、事、茲に至つては、止むを得ない、と、覺悟は極めたが、それでも、小倉へ行く事は、何とかして免れよう、と、山田への答へは爲すに、じつと、考へに沈んで居た。

「オイ、玉木、今、山田から話した事は、我輩からも頼む」

前原は、斯ういふて、更に沈痛な辭で、
 「君の心は、深く察するが、我輩等の立場にも、同情してくれ」
 嗚呼、眞人は、終に此一言で、乃木を説いて、銃器を、手に入れる事を、引受けた。

一一

前原が、鹿兒島に、西郷を訪ねた歸途に、小倉へ立寄つて、山田の家に、泊つた。兄が、弟を訪ねたのであるから、別に不思議もないが、前原が萩へ歸る時、山田も、共に歸つて、その儘、山田は、小倉の土を、ふまなかつた。
 聯隊へは、何の通知もなく、陸軍の本省へ、一片の辭職届けを出したのみで、山田の出立した翌日、その荷物は、

萩へ送られたので、聯隊の人々は、皆な驚き且つ呆れた。聯隊長が、その職を去るのに、斯ういふ手續きを取つたものは、山田の外にあるまい。然るに、陸軍省は、その爲すに任かせて、何等の叱責もなく、山田の辭職は、すぐ聞届けられた。

前原の一派が、政府に對する態度は、すべて斯うした調子であつたが、政府の方では、恰て腫物へ觸るやうにして、何の制肘も加へず、思ひ通りに、振舞はせて居たのは、政府も、前原の一派に對しては、全く匙を投げて居たのであらう。

その跡へ、誰か送らなければならぬ。熊本鎮臺の分營ではあるが、とに角、聯隊長といふのであるから、その人選は至難かしい。殊に、山田頼太郎が、傑物であつた丈け、後任者にも、注意を要する。と、いふて、薩人を遣る事は出来ぬ。長州に、不穩の空氣が、充ちて居る時に、此邊の聯隊長として、薩人を送つたら、それこそ愈、不平を増長させて、何を爲れるか判らない。

其處で、乃木は、聯隊長心得として、小倉へ、赴任を命ぜられた。それ迄は、陸軍卿の傳令使を、勤めて居たが、當時の陸軍卿は、山縣有朋であつた。

何ういふ役目を、申し附けられても、それに、不平を抱いた事のない人だが、此時ばかりは何となく、氣が進まなかつたといふ事だ。

未だ獨身であるから、任地へ行く事は、まことに簡單であつた。従僕を、一人連れて、その外に、馬が一头あれば、すぐ赴任は出来るのであつた。

その頃の官舎は、今の衛戍監獄の在る所で、周圍は廣かつたが、建家は、餘り大きくなかつた。それにしても、聯隊長の官舎であるから、相當の間敷は在つた。

どれほど、狭い家にしても、主従二人の寢起には、少しも差支のあるものでない。況して、相當の家であれば、廣

すぎる位であつた。

何事にも、簡單を旨とする、乃木は、從僕と共に、庭の掃除もすれば、馬の手當もする。夜に入ると、燈火は、太い大根を、スツバリと切つて、先の尖つた、竹を突差し、それへ蠟燭を挿して、これがランプの、代用であつた。

初めて、此官舎へ入つた時、多くの將校が、やつて来て、種々の話に、時刻を過ぎさせた。酒も飲めば、食事もしよにして、さア、寝るといふ段になつて、例の老僕が、布團を敷きにかゝつた。二三の將校は、乃木と共に、未だ話込んで居た。

『君等も、差支が無かつたら、泊つてゆきなさい』

『ハイ』

『未だ種々、聞いて見たい事もある。とに角、泊る事にしたら、何うぢや』

夫人が居ると、遠慮勝ちにして、居なければならぬから、泊るのは迷惑だが、乃木は、獨身である丈、書生部屋のやうな感じがあつて、獨身の將校は、泊つてゆく氣になり、話は、其れから其れへ、と移つて、却々賑やかであつた。

『布團が、敷けました』

從僕が、次の間から、聲をかけると、

『うむ、可し』

と、いつて、乃木は、寢室の方を、透して視た。

『オイ、東は、何方になるか』

突如の質問に、一人の將校は、

『この方角が、東に當ります』

『左様か』

乃木は、從僕を招いて、

『那の布團は、反對に敷直せ』

『ハイ』

『東の方へ、裾を向けてはならぬ』

『ハイ』

之を聞いて居た、將校は、思はず膝を正した。昔の正しい武士は、決して藩主の居らるゝ城へ、足を向けて寝たものでない。此心が、忠義の根底に、なつたのである。

小倉から東は、即ち東京に當る。東京は、皇城の在る所だ。乃木の平生は、斯ういふ風であつたから、部下の將校は、何時も、緊張した心を、持つて居た。

一一一

前の山田は、齒切れのよい人で、昔の武士を其儘の、生一本の軍人であつたが、今度の乃木も、山田に能く似た、嚴格な聯隊長として、評判は悪くなかつた。布團の位置を、變へさせた一條が、それからそれへと、傳へられたので、いよゝ乃木に對する、畏敬の念は深くなり、殊に、恬淡な獨身生活は、存外に、部下の氣受けがよく、頻りに訪ねて來ては、談論に、花を咲かせる。乃木も喜んで、壯い將校を引寄せては、古今の英雄を論じ、東西の歴史談に、夜を更かす事が、多かつた。

馬を、大切に取扱ふ事は、人並でなく、傳家の寶物でも、那れほどには出來まい、と思はれる位であつた。營所への往きか復へりには、必ず自分は徒歩して、馬を休ませるのが、その常例であつた。今日も、朝はやく邸を出て、營

所へ、やつて来たが、其時も、馬に乗らず、徒歩であつた。

恰度、晝飯の際、二三の將校が、頻りに話込んでゐるのが、不圖、耳にはいつた。

『馬に敬禮をするとは、馬鹿らしい奴だ。何事でも、極端に走ると左様なるから、平生の訓戒が、肝要ぢやよ』

『その歩哨は、どうしたかな』

『週番士官に咎められて、今、叱られてゐるさうぢや』

『馬に敬禮した上叱られては割に合はぬ事ぢや。これが本當に、うまらぬ話、とてもいふかな』

『ハツハ、、、、、、、それも洒落のうちか』

乃木は、すつと立上つて、

『オイ、そりや、何の話か』

と、訊ねたので、何か不都合な事でもあつて、咎められた時のやうな態度で、話合つて居た連中は、一齊に立つた。

『今話して居た、馬に敬禮した、といふのは、どういふ事か』

一人の將校は、恐るゝ進んで、

『極めて詰らん事でありまして、御訊で恐れ入りますが、實は、歩哨の兵士が、聯隊長の馬に、捧銃の禮をしたので、

週番の士官に、今、叱責されてゐる所なのであります。その事を話して居たのであります、別に大した事ではありませぬ』

『ふふーむ、歩哨が、馬に敬禮をした、といふのか』

『ハイ』

乃木は、しばらく考へて居たが、

『その士官と兵士を、ちよつと呼んでくれ』

『ハイ』

何ういふ理由で、呼んで来い、といふのか、乃木の眞意は解らないが、命令であるから、直ぐ呼びにやつた。やがて、二人は、乃木の前に立つた。

『お前が、馬に敬禮したのか』

『ハイ』

『それを、お前が咎めたのか』

『ハイ』

『お前は、どういふ考へで、敬禮したのか』

『聯隊長の御乗馬でありますから、敬禮いたしました』

『それを、良い事と、思つて居るか』

『ハイ』

『お前が、それを咎めたのは、どういふ考へからか』

『聯隊長には、敬意を表す可きものでありますが、馬に敬禮するのは、失當の事と考へまして、叱責いたしました』

『馬に敬禮しては、悪いといふのか』

『ハイ』

『如何なる理由で……』

『苟も、國家の干城たる兵士が、畜類に敬禮するのは、失當であります』

『それを失當として、どう處分をするつもりか』

『叱責いたしました』

『叱責されたお前は、どう考へるか』

『當然と思ふて、致した事でありませぬから、叱責されましても悪いとは、思つて居りませぬ』

『將來も、改めぬといふのか』

『否、將來は致しませぬ』

『當然と思ひながら、將來は致さぬ、といふのか』

『ハイ』

『そりや、どういふ理由か』

『上官の命令でありますから、將來は致しませぬ』

此押問答を、外の將校は、極めて興味を持ちながら、聞いて居た。聯隊長が、此始末を何うつけるか、それに興味

を、持つてゐるのだ。

『お前の叱責したのは、當然の處置だが、併し、馬に敬禮した、兵士の心も、大に賞す可きである。士官の名は、何

といふか』

『谷口と申します』

『お前の名は……』

『三木傳吉と申します』

四

乃木は、態度を改めて、更に二人に向つた。變な顔をして、二人は、乃木を見詰めて居る。どちらが悪い、といふなら、解つて居るが、どちらも悪くない、といふのでは、意見の本旨が、那邊に在るのか解らぬから、二人の迷ふ

のも、無理がない。

『馬は、軍隊に於て、主要なる物の一つで、陸軍の馬は、海軍の艦と、同じ事である。それを、大切に思ふ心は、決して悪い事でない。上官の乗馬ぢや、といふ爲めに、一段の敬意を持つ事も、軍隊の一人としては、其心が無ければならぬ。併し乍ら、馬に、捧げ銃の禮をする事は、餘りに極端であらう。將來は、其心を以て、馬を可愛がつてやるが可い。解つたか』

『ハイ』

『解つたら、それで宜しい』

今度は、士官の方へ向つて、

『谷口、お前の咎めたのは、當然の處置ぢや。要するに、馬は畜類ぢやから、之を愛するのは當然としても、敬禮する事は、無用ぢや。三木の心は、兵士の龜鑑とす可きであるが、其行爲は、失當であつたに、違ひない。お前が、之を咎めたのは、當然の處置である。今後、斯ういふ事に、深い注意を拂つてくれ』

『ハイ』

それから、二人に、椅子を與へて、種々の話を聞かせた。二人は、乃木の温かい仕向けに、深い感激を持つたらし、之を傍て、見聞して居たものは、

『此聯隊長は、普通の軍人ではない』

と、いふ感じを、持つに至つた。數日の後、三木は、從卒に引上げられて、乃木の身邊に、働くやうになつた。

その頃、乃木の酒量は、却々強く、大抵なものは、對手が出来ぬ位であつた。晩年には、夕食の膳に、二合位ですませたが、若い時分は、さかんに飲んだものである。殊に、熊本旅團長を、勤めた頃は、最も多く飲んで、酒の逸話は、那の邊に、今でも残つて居る。小倉の時代は、玄關の次室に、大きい瓢箪が在つて、それに酒が、一ぱい入れて

あり、その傍には、二合位もはひらう、といふ、盃が備へてあつて、誰でも乃木を訪ねるものは、先づ一ぱい飲つてから、座敷へ通るのを、例としてあつた。

『オイ、一ぱい飲つて来たか』

何んなものでも、乃木に逢ふと、先づ之れを訊かれる。將校と兵卒の別はなく、皆一ぱい飲つてから、座敷へ通るのでないと、どうしても許さぬ。

『私は、下戸であります』

『何ッ、下戸ぢや。軍人の癖に、酒を飲み切らんで、何の働きが出来るか』

『性來、飲み得ないのです』

『それは、無理にも飲む位でなくては、とても、話對手にはならぬ』

『然らば、飲みます』

『飲め、大に飲んで来い。その位の元氣がなくては、い、い、かん』

斯ういふ風にして、無理にも酒をすゝめるので、下戸の奴は、恐れ入つて速退くが、飲み手の將卒は、喜んで出入する。

小倉から、少し離れて、赤阪といふ所がある。其處に、小笠原家の菩提寺があつて、延命寺の名は、遠近に聞こえて居る。剣道の達人、宮本武蔵の碑が在るので、一層その名を知られて居る。

昔は、樹木の鬱蒼とした間に、一字の堂が在り、脚下に、玄海の波を控へ、遙に六連島を眺め、その風光は、頗る美しく、文人墨客の足を、曳いたものであつたが、今でも、全く俗化して、流行の別荘地となつた。坂路も修理されて、歩きよくなつたが、大きな樹木は、殆ど影を留めず、幽邃とか閑雅とか、いふ事は、藥にしたくもない。名物の焼き餅も、味が悪くなつたやうに、思はれる。只變りのないのは、玄海の眺めと、六連島の位置のみである。

延命寺の住職は、田中芝玉と謂ふて、元は、萩の東光禪寺に居たが、元治の昔、奇兵隊の小倉征伐に、大里の街道で、討死した勇士を、延命寺内へ祀り、記念の碑が、建つて在る。芝玉和尚は、高杉晋作等と交りがあつたので、晋作が病死してから、勇士の跡を、申う可く、自分から好んで、延命寺へ移り、當時の住職、放牛和尚に従いて、その志しを果した。斯くて、芝玉は、放牛に代つて、終に延命寺の住職となり、奇兵隊士の墳墓は、すつかり修理されて、武藏の碑と共に、土地の誇りの一つとなつた。

乃木は、少壯の頃、晋作の愛護をうけ、奇兵隊士との、交りも深くあつたので、延命寺には、屢足を運ぶ所から、芝玉との交際も浅からず、佛書の上に、多少の知識を得たのは、實に此時代からであつた。

五

小倉へ、赴任して来た時代と、小倉から、東京の聯隊へ代る時代と、その間、僅に二年の差であつたが、乃木の性格は、全く一變して、恰も別人なるかの感がある。初は、全くの書生流で、玉木仕込みの、嚴正な所もあつたが、若い軍人に有勝ちの、元氣のよい遊びもやつたもので、遊廓に、押出した事もあつた。現に、乃木と、深交のあつた人の手に『金を持つて迎へに来い』と、いつたやうな事を書いてある、手紙が残つてゐる位で、相當に發展した事もあるらしい。

今日は、休暇を利用して、延命寺へ、やつて来た。例の芝玉和尚を對手に、一日の清談を、試みんが爲めであつた。『乃木さん、此頃は、殊に御精勤のやうで、評判も大に宜しい。拙僧も、蔭ながら喜んで居るよ』

『貴僧の耳にも、我々の噂さが聞えますか』

『うむ、少しは聞える』

『頼まれもせぬのに、餘計な事をいふものがあるで、俗社會は五月蠅です』

『その五月蠅のを、平気で送つてゆく、人間の生涯も、思ひやうに依つては、存外に面白いものぢやよ』
 『萬事を抛つて、功名や榮達の上に、超然となり得れば、それこそ面白くもありませうが、斯ういふ職務を、持つて居ては、とても超然たり得ないのが、まことに困るです』

『否、それは、心の持ちやう一つで、どうにも、なるものぢや』

『成程』

『專念、工夫を積めば、何でもなし』

それから話は、追々に進んでゆく。芝玉和尚の一言一句は、すべて教化を含んだ、有益の事はかりであつた。

『ちよつと、乃木さまへ申上げます』

小坊主が、次の間から聲をかけた。

『おう、御用かな』

『只今、お使ひが見えまして、之を差上げて、お返事を承はつてくれ、と、申して居ります』

一通の封書を出したから、乃木が、受取つて見ると、意外千萬、弟の玉木眞人からの書面であつたが、文意に依れば、

『久し振りで、御訪ね致した。別に大した用事でもないが、しばらく御目にかゝらないので、急に逢ひ度くもなつたし、旁、やつて来たが、御都合で其方へ參つてもよい、御返事を待つ』

と、いふのであつた。

『よし、今直に歸るから、待つて居てくれ、と、書面の人に傳へてくれるやうに答へて下さい』

『ハイ』

小坊主は去つた。跡で、乃木は、

『甚だ失禮ですが、私は、之れで御免蒙る』

『珍客でも、見えましたかな』

『玉木へ遣はしました、眞人が参りましたので、ちよつと歸る事に、いたしませう』

『うむ、彼の弟御が見えましたか。それは、結構な事ぢや』

『昨今では、前原先生の御世話に、なつて居るやうですが、眞人も、一癖ある奴で、どうも、彼れの前途が、心配で
なりませぬ』

有樂に、兄弟の情合、乃木は、眞人の身については、不斷の注意を、拂つて居たのだ。

『前原先生も、一個の傑物ではあるが、那アいふ風に、こぢられてしまつては困る。もう少し、ゆつたりした所がない
と、末は自分から、死を急ぐ事になる。まことに惜しい人物ぢやが、どうも致方がない』

和尚は、獨り承知して、獨り私語く。之れを聞いた、乃木は、

『其處に、私の心配もあるのです。眞人が、前原先生に、引ずられてゆくやうな、氣がしてならぬのです』

『それは、御心配な事ぢや』

『前原先生は、何故那のやうに焦れるのでせう』

『さ、それは、拙僧にも、能く判らないが、つまりは、自我の念が、勝つて居るのぢやらう。那れほどの人物でも、
自分で、自分の心を、抑へる事が出来ない、と見える』

『周囲の人も、多く不平士族で、それ等の人に、誤られる點もあるでせう』

『そりや、無論の事ぢや。拙僧も、昔から那の人は、知つて居るが、どうも、陽明學の影響も、あるやうぢや』

乃木は、急に立ちかけて、

『とに角、私は歸ります』

『や、失禮をいたしました』

『御免下さい』

和尚は、乃木を送つて、玄關まで出て来たが、背後姿を見詰めて、何か知らぬが、しきりに考へて居た。

六

延命寺から、歸途にも、乃木は、種々に考へて見た。どうも、眞人が、突然の來訪は、何か仔細があるらしく、芝玉和尚のいふたやうに、眞人も、前原一派の人に引ずられて、何時か身を誤ることはあるまいか、と心配すれば、それからそれと、不安な事ばかりが、頭腦を侵して来る。

官邸へ歸ると、眞人は乃木を出迎へて、

『やア、兄さん、久し振でした』

『おう、眞人か』

『何日も、御壯健で……』

『お前も、相變らずで何よりぢや』

兩人は、ひとしく座についた。

『時に、玉木先生は、別に御變りもないか』

『いつも、御達者です』

『そりや、何よりの事、前原先生は、何うぢや』

『前原先生も、ますく御壯健であります』

『さうか、それは結構ぢや』

『兄さんは、此頃、頻りに延命寺へ、御出かけのやうですな』

『うむ、どうして、知つて居る』

『今、聞いたのです』

『ハツハ、、、、そりや判る譯ぢや。番人の報告では、何も彼も判るのが、當然ぢや。此方へ来てからは、之が第一の楽しみでな、芝玉和尚の教示を、うけて居るぢや』

『さうですか、それは御樂みてせう』

『まア、久し振りぢや。ゆつくりして行け』

『ハイ、今晚は、泊めて貰ひます』

『相變らずの獨身生活で、萬事が思ふやうにはゆかぬが、その代り、氣苦勞は少しもないから、却て結構ぢや』

『兄さんは、何故、女取らないのです』

『未だ、早い』

『兄さんが早ければ、私は何うしたものです』

『うむ、さうぢやツたな。お前は、既に妻帯して居るのぢやから、己れのは早いのでなく、或は遅いのかも知れんよ、

ハツハ、、、、』

『養父も、よく其事をいふて居ります』

『さうか、而て、お前は、子供が出来たといふではないか』

『未だ生れないのです』

『何時、生れるのか』

『二た月ほど間が、あります』

『もう、直さちやな』

『ハイ』

『そりや、樂しみの事ぢや。生れたら知らせてくれ、己れも、何か祝うてやる』

『ハイ、すぐ知らせます』

『玉木先生も、樂んで居られるぢやらう』

『睦じく兩人が、話込んで居るうちに、從僕は、酒肴の用意をして、それへ運びはじめた。』

『さア、一ぱい、何うぢや』

乃木は、先づ眞人へ、盃を獻した。

『頂戴いたします』

『時に、前原先生は、昨今、どういふ御容子かな』

『相變らず門人を集めて、御指導に餘念もなく、今では全く世事に遠ざかつて居られます』

『左様か、それは、此上もない事ぢやが、己の耳へは、悪い事ばかり、聞えて来る』

『そりや、何ういふ事ですか』

『この頃も、萩や山口に、士族の騒ぎがあつて、その背後には、前原先生が居る、との事で、どうも困つたものぢや、と思つて居たが、漸く騒ぎも鎮まつた、と聞いて、安心はしたやうなもの、さて此跡が、何ういふ風になるか、それを思ふと、何分にも心配でならぬ』

『兄さんは、前原先生を、どう思ふて居られますか』

『偉い御方と、思ふて居る』

『政府では、何故、先生を容れないのでせう』

『そんな事は、已れには判らぬが、先生の方から、遠ざかるのではあるまいか』

『否、政府が、先生を遠ざけるやうに、するのでせう』

『さうでは、あるまい』

『兄さんは、その事情を、御承知ありますまいが、先生が、政府を退いたのは、木戸や井上の奸策からであります』

『ふふーむ、それは、何ういふ事か』

『國の士族が、何となく不平を、抱いて居るやうだから、それを、鎮める爲めに、辭職して國へ歸れ、といふたのが、先生の政府を退いた原因であります』

『どういふ理由で、さうなつたのか』

『つまり、先生が居ては、邪魔になるのでせう』

『馬鹿な、そんな事があつて、堪まるか』

『全くさうです』

『それにしても、先生が、退くには及ぶまい』

眞人は、膝を進めて、話振りは、眞剣になつて來た。

七

『兄さんは、今の政府が、行つて居る事を、どう御考へになるか知りませんが、實に怪しからぬ事ばかりであります。全體、明治維新の大精神は、封建制度を破つて、王政復古の實を擧げる。と、いふのでありますが、昨今に至つては、殆ど左様いふ容子はなく、三四の奸臣が、權を専らにし、政治を私して、純眞な道理は、一つも行はず、すべて情實に依り、私曲を行ひ、忠良の人は斥けられて、阿臽諂佞の輩のみが、時を得顔に振舞ひ、封建の

昔よりは、却て悪くなつて居る。されば、夷人に對して、その腰の弱さは、只見て居るのさへ、齒痒い位で、此儘にして置いたら、折角の御國體も、終には瓦解の虞あるべし、と、心あるものは、皆憂慮して居る有様で、私のやうなものでさへ……』

『まア、お待ち』

『併し、兄さん……』

『まア、お待ちなさい』

年の壯い所爲でもあらうが、眞人のいふ所は、政府を痛罵し、當路者を、呪うが如き口調で、恐ろしい事をいひ出すから、乃木は、とりあへず押へつけて、

『己れは軍人ぢやから、政治に涉る議論は、止さう』

『たとへ、軍人でも話をするには、敢て差支へはありますまい』

『差支へはないか、あるか、それを、いふのでない。己れは、聞き度くない、といふのぢや』

『……』

『お前も、あまり左様いふ事に觸れて、彼是れいふのは宜しくない』

『併し、兄さん、國家を想ふ至誠は、誰にしても同じ事であります。私のやうな壯いものでも、政治を論じて悪い、といふ事は、ありませんまい』

『敢て悪いとはいはぬが、まア、可成くは觸れない方が、お前の爲めぢや、といふたのである』

『悪いと仰しやるなら、もう、申しませぬ』

『さア、一ばい注がう』

乃木は、徳利を持つて、眞人の盃へ、酒を注ぐ、それから、頻りに飲んで、夜は、大分に更けて來た。兩人は、

列べて敷いた、布團の上へ、横になつて、又一しきり話込んで居るうちに、ぐツすり眠に入つた。

夜半に、不圖、眼のさめた乃木は、じつと、眞人の寝顔を、視て居るうちに、思はず涙が出て來た。それは、何の爲めの涙か、自分にも、能くは判らぬが、何となく哀愁を催して來て、どう堪へやうとしても、涙は止まらなかつた。

『兄さん』

不意に聲をかけて、眞人は、起き上つた。乃木は驚いて、

『お前、眠つて居たのではないか』

『よく眠つて居ましたが、今覺めた所です』

『左様か』

『私は、折入つて御願ひがあります』

『えッ、今頃になつて、何ぢや』

『實は、その爲めに來たのですが、機會が無くて、申遅れましたのです』

『ふふーむ、何ういふ事か』

『小銃を、少しばかり拜借したいのです』

乃木は、思はず膝を正した。その顔は蒼白くなつて、眞人を、見詰めた眼には、凄い光りを、有つて居る。

『兄さんの手許に、小銃が、千挺ほど在るさうですが、それを是非、貸して貰ひ度いのです』

『……………』

『若し全部の拜借が出来なければ、五百挺でも宜しい。是れは、私の死を以て、願ふ所です。どうか、御承知を、願ひ度い』

『それは、朝廷から御預りしてあるもので、自分の物ではない』

『それは、承知の上です』

『お前は、已れに向つて、朝廷に背け、といふのか』

『左様では、ありません』

『併し、朝廷から御預かりして在る物を、妄りに人へ貸す。而かも、銃器を貸す、といふ事は、朝廷へ、背く事にな

らう、お前は、それを、已れに迫つて、不忠の臣になれ、といふのか』

『決して不忠の臣になれ、とは申しませぬ』

『けれども、お前に、銃器を貸せば、さういふ事になる。已れは、朝廷から御預かりした銃器を、謀叛人に、貸す事

は出来ぬ』

『謀叛人とは……』

『お前等は、即ち謀叛人でないか』

『イヤ、謀叛人ではありません』

『然らば、銃器を、何に使ふつもりか』

乃木の聲は激しかったが、眞人は、存外に、落ちついて居た。

八

謀叛人と謂はれたのが、眞人の頭腦には、頗る強く響いた。殊に、朝廷に、弓矢を曳く、といったやうな口氣で、叱りつけられたのが、酷く口惜かった。

『私は、朝廷に背くといふやうな、考へは、毛頭御座いませぬ』

『小銃は、何の爲めに、入用か』

『政府は、吾人の直言を斥けて、妄りに兵力を以て、壓し付けよう、とするから、それに對して備へよう、といふのです』

『それが、謀叛ぢや』

『謀叛とは、いへますまい。只政府の暴威に、備へる丈の事です』

『政府は、天子の政府ぢや。それに背けば、即ち謀叛でないか』

『天子の心は、一視同仁であります。たとへ、政府の大官でも、その大御心に背けば、却て夫れが謀叛に、均しい罪であります。さういふ政府と争ふても、決して謀叛とはいへますまい』

乃木は思はず眞人の手を、かたく握りながら、

『何故、お前は、さういふ考へになつた。實に情ない奴ぢや』

と、いふたが、兩眼に、涙が溢れて居る。眞人は、手を握られた儘、しばらくは、黙つて居た。

『政府と争ふには、自ら道がある。暴力を以て争ふては、叛亂の罪は免れぬ。お前は、何の爲めに學問をしたか。

是れ位の事の判らぬ、お前ではなかつたが、ア、己れは、實に悲しい。お前は、夙く玉木家へ貰はれて、別れ／＼には育つたが、産みの親も同じで、養父の玉木先生は、己れの恩師ぢや。お前に、斯ういふ間違つた道へ、ふみ込まれては、どちらの親に對しても、己れが、相すまぬ事になる。どうか、魂を入れ替へて、正しい道に立戻つてくれ。オイ、己れの頼みぢや、どうか、考へ直してくれ』

一言一泣、情熱の人たる、乃木は、身を顛はして、眞人を説くのであつた。

『兄さん、私は、既う拔差のならぬ身で、行く所まで、行かねばならないのです。兄さんと、私とは、立場が違つて居りますから、その考へも一様にはなりません。私は、前原先生と、同じ道を進む外、今は、何も考へて居りませぬ』

『而して、玉木先生も、御承知か』

『未だ御承知はありますまいが、つまりは、同じ御考へてせう』

『ふーむ』

『勢の此處まで、押詰つて来たのは、前原先生が、悪いのではなく、政府の仕向けが、良くなかつたのであります。もはや、今日に至つては、如何とも致方はありません』

『左様聞いては、已れも、此上いふ事はない。お前の心の儘に、爲するが可い』

『小銃は、貸して貰へますまいか』

『それは、ならぬ』

『私は、只だ、それ丈けの、用事で来たのですが、兄さんから斷わられては、如何にも私の力が弱かつたやうで、同志へも、面目は無いが、私は、此儘に山口へ歸ります』

『どうも、仕方がない』

夜は、いよく更けて、四邊は、寂として居る。その寂寞を、破つて聞えるものは、從僕の鼾聲ばかりであつた。

『兄さんに、御願ひがあります』

『何ぢや』

『私と、兄弟の縁を切つて下さい』

『何と、兄弟の縁を切れ……』

『ハイ』

『そ、そ、そりや、何ういふ理由か』

『私は、前原先生の使命を果さずして、却て同志の秘密を、兄さんへ、明かしたのですから、寧ろ、兄さんの立場を

「氣安くする爲めに、兄弟の縁を切り度い、と思ふのです」

「馬鹿な事をいふな。それは、それとして、兄弟の縁は、明ぢや」

「兄さんは、私から聞いた秘密を、どうなさる覺悟ですか」

「えッ」

「さ、それですから、兄弟の縁を、切り度いのです。さうなつた方が、兄さんの立場は、樂になります」

「已れは樂になつても、お前は、いよく苦しまねばならぬ。已れには、縁を切る心が起らぬ」

「それでは、此秘密は何うなませう」

「まア、それは、已れに任せて置け」

「縁を切つてしまつた方が、兄さんの立場も樂になるし、私の働きも自由になつて、双方の利益であります、御承

知下さらぬか」

「それは、不可ん」

東の天が、少し明るくなつて来て、塀の處には、早出の人の、足音が聞える、兩人は、無言で、布團を被つた。

九

從僕は起きて、食事の用意は出来たが、兩人は、未だ寢床を離れなかつた。此聯隊へ来てから、一度も、休んだ事はなく、嚴かに時間を守つて、出勤にも、退勤にも、五分と異つた事のない人が、今朝に限つて、容易に起て来る様子もない。不思議な事とは思つても、遠慮して起しにゆかず、乃木の起きて来るのを、空しく待つてゐると、門前を通りかゝる將卒は、そつとはいつて来て、從僕を招ぎ、

「既う御出勤に、なつたかな」

と尋ねる、

『否、未だです』

『今朝は、大分ごゆつくりぢやのう』

『珍しい事には、まだ起きておいてが、ないのです』

『そりや、不思議ぢや。どうかなされたのでは、ないか』

『山口から、弟御さんが、おいでになつたので、昨晚は、大分おそくなつたやうですから、それで未だ、御休みになつて居られるのでせう』

『はア、左様か』

立寄るものが、いふことは、みな同じで、従僕の答へも、同じ事を、くり返して居る。

裏の井戸端で、水を汲む音が、聞えたから、従僕は、急いで行つて見ると、乃木は、下禪一つになつて、冷水磨擦を、行つて居る。

『オヤ、お眼覚めて御座いましたか』

『うむ、今起きた』

『ごゆつくりで御座りましたな』

『少し眠すごしたやうぢや』

『未だ時間が御座ります』

『左様か』

『お客様は、未だ寢て居るから、自分で起きるまで、捨て置き』

『ハイ』

乃木は、手早く支度をして、食事も勿々にすませて、營所へ出て行つた。その跡で、眞人は、漸く寢床を離れたが何か知らぬが、頻りに考へ込んで居る。従僕は、恐る／＼進んで、

『未だ早う御座いますから、もう一と眠入り遊ばしては、如何て御座います』

『イヤ、もう起きる』

『それでは、お顔を洗う用意を、いたしませう』

『兄さんは、もう出勤せられたか』

『ハイ、只今急いでお出かけになりました』

『歸りは、午後ぢやな』

『イエ、今日は、半引けて御座います』

『さうか』

眞人は、臺所へ来て、顔を洗つた。そのうちに、座敷の掃除も終り、食事の用意が、出来て居る。設けの席について、眞人は、食膳に向つた。

不圖、氣がついて視ると、二つ膳が、ちやんと、支度して列べてあつた。別に人が、居るやうな状況もないが、膳の前には、座布団が敷いてあるから、誰か居るに違ひない。

『何誰か、お客さんか』

その膳を、指さして尋ねると、従僕は、首を振りながら、

『どなたも、お居てなさらないのですが、それは三度／＼、斯うして置くので御座います』

『ふむ、どういふ理由か』

『御両親さまの分だ、と、おっしゃつて、御自分は外出なすつても、之れ丈は、私が申付けられて、いつも斯うし

て、御両親さまへ、差上げるので御座います」

これをして、聞いて居るうちに、眞人は、いつか胸がせまり、涙が留度もなく、出て来るので、果は、袂を以て、顔を掩うた。

『何しろ、偉い御方で御座います。私なぞは、親の前でさへ、横着ばかりやつて來まして、今更恥かしくてなりません。此方へ、おいてになりました時、寢床を敷くのに、東の方へ、足を向けてはすまぬ、といふて、態々敷いてあるのを、東枕に改める、とおつしやつて、布団を敷き變へた事も御座います』

『東の方は……』

『天子さまのおいでなさる、東京の方角が、丁度東に當るさうで御座います』

『さういふ事が、あつたのか』

『ハイ、親孝行ばかりでなく、天子さまにも、斯ういふ風に、忠義な御方で御座いまして、隊の皆さんも、その噂ばかり、なすつて居ります』

『此膳は、そちらへ、引いてくれ』

『未だ御飯が、すみませんのに……』

『何だか、気分が悪いので、食事をするのが、厭になつた』

『左様で御座いますか、それでは、御気分が直りましてから、また差上げる事に、いたしませう』
從僕が、膳を引いて、行つた跡で、眞人は、もう堪まらなくなつて、獨り涙に咽んでゐた。

一〇

乃木は、營所へ出て、昨夜からの事が氣になつて、頻りに考へてばかり居た。何日もは、人が歸つてから、自分

は、一番おかれて、歸るやうにして居たが、今日は、正午に、なるのを待ちかねて、大急ぎで歸つて來た。

『お歸りて、御座いますか』

從僕が、丁寧に、頭を下げながら、斯ういふて出迎へた。

『おう、今歸つた』

『弟御さまは、只今、御出立になりました』

『えッ、眞人が出立したと』

『ハイ』

『山口へ、歸つたのか』

『お眼にかゝつて、歸る可きだが、お話は充分にいたしたから、もう残り惜しい事はない。少し山口の方に、急ぐ用事があるから、お歸りにならぬうちに、出立する、といつて、只今お出かけになつた所で御座います』

之れを聞いた、乃木は、頗る失望の態で、

『一寸知らせてくれる、と可かつたにな』

『私も、さう思ひましたが、それには及ばぬと、おツしやつて、よほどおいそぎの御容子でしたから、ツイお迎ひに、まゐりませんでした』

乃木は、それを聞流しにして、奥の座敷へはひつた。從僕は、何となく不行届きて、あつたやうに感じて、乃木の跡から、附いて來た。

『未だ、大里へ近づいた位の時間ですから、少し急いだら、逐ひつけませう。私が、これから一と走りして、お連れ申ませうか』

『イヤ、それには及ばぬ』

『それでも……』

『まア、よい、捨て、置け』

『ハイ』

從僕は、面目悪さうにして、臺所の方へ退いた。しばらく、考へて居た、乃木は、何か思ひ出したやうに、大急ぎで、衣物を着替へた。例日の簡便主義で、玄關から、一人で出かけよう、とした。從僕は、はやくも、其姿を見つけて、

『お出かけて、御座いますか』

『うむ、ちよツと、行つて来る』

『どちらへ……』

『ぢきに、歸る』

『お車は、宜しう御座いますか』

常には、車に乗らぬ人であるが、何か急がしさうにして居るから、從僕が、氣を利かして尋ねると、

『さうぢや、傳で行かう』

從僕は、恰で飛ぶやうにして、俥屋へ、かけつけた。その跡から、乃木も、急ぎ足で、やつて来る。俥が来たから、すぐに飛乗つて、急がせた。行く先は、大里の海岸を、門司へ指して、眞人の跡を、逐ふのであつた。俥は、門司へ着いたが、眞人の姿は、見付け得ず、すぐ渡船に乗つて、下關へ向つた。

眞人は、兄の歸りを待たずに、大急ぎで、小倉を離れたが、二人曳きの俥で、門司へ着く、と同時に、下關へ渡つたから、乃木は、追付かなかつたのである。豊前田の、小さい料理店へ上つて、手輕に食事をすませ、門口へ出た時、丁度、通り會はせたのは、兄の乃木であつたから、驚いて一と足、跡へ退いた。

『やツ、眞人か』

『兄さんですか』

『まあ可かつた。もう逢へぬか、と思つて、大に失望したが、神の引き合せぢや』
と、いひながら、額の汗を、頻りに拭いて居る。

『何か、御用ですか』

『うむ、少し話がある』

『それでは、此家へ、もう一度上りませう』

『それが、可からう』

兩人は、二階へ上つた。

『兄さん、何ですか』

『別に、これといふて話はないのぢやが、己れは、營所から歸つて來ると、お前が居らぬので、從僕に聞いて見たら、もう出立した、といふから、何となく名残りが惜しまれて、すぐに、跡を逐ふたけれど、お前の姿は見えぬ、よほど門司から引返さう、とは思つたが、まあ下關へ渡つて見ろ、事に依つたら逢へやうか、と、やつて來たら、斯うして逢へたのぢや』

『さうでしたか』

註文した、酒肴が運ばれたので、兩人は、無言で、献酬をはじめた。

『もう、己れは何もいほぬ。お前の心任せに、するが可い』

『兄さん、お許し下さい』

『これは、御互の運命ぢや』

兩人は、手を取つて、泣いた。
斯くて、乃木は、小倉へ歸り、眞人は、山口へ歸る。これが、永久の別れであつた。

一 一

熊本の不平士族は、敬神黨と稱し、事を起した時には、神風連といはれた。太田黒伴雄、加屋齊堅、上野堅吾の三人を首領として、四百餘名の壯士が、鎮臺に攻め寄せたのである。

夜は寒くなりまさるなり唐衣。うつに心のいそかゝるかな

是れは、いよく、鎮臺に攻め込む時、太田黒の詠んだのであるが、一統の精神は、此歌の心で、よく解る。太田黒は、別に横地鐵平とも謂ふた。

小具足に、身を堅め、槍や薙刀を持って、攻めかゝつたのであるから、全く舊式の戦さであつた。首領の三人は、鎧や兜を着けて、元龜天正の古へに於けるやうな、戦さ支度をして居るのである。

鎮臺の司令長官は、陸軍少將種田政明であつた。縣令は、安岡良亮といふ人で、どちらも殺されてしまつた。種田の妾が、手傷を負ひつゝ、此難を免れて、東京の親元へ、うつた電報が、

『ダンナワイケナイワタシハテキズ』

といふのであつた。併し、夜が明けてから、鎮臺兵が、盛返し戦ひをして、終に神風連の敗北となつたが、明治九年の九月下旬の事であつた。それと相應じて、秋月にも、騒亂は起つたが、只一日の事で、鎮臺に歸した。

東京では、永岡久茂の一派が、千葉縣廳を、襲ふ目的で、日本橋の小網町川岸から、寒川行の船に乗り込む所を、巡查に見付けられて、それから、斬合ひになつた。急報を得て、警鐘を亂打し、非常召集をやつて、ひどい騒ぎになつた。永岡の方には、中根半七といふ、七十歳の老人が居て、芝居で見るやうな奮闘をつゞけ、濱町川岸で、腹を切

つた。双方に、死傷者があつて、夜明け頃に鎮まつた。永岡等は、終に捕へられて、監獄へ送られた。これが有名な、思案橋事件なるものである。

(維新秘話を對照されたし)

之れ等の騒亂は、すべて前原と、氣脈を通じて居るのだが、通信の行違ひや、準備の都合から、東西、一時に起る、打合せは破れて、各所に、分け／＼の働きになつたから、思ふ目的は、達し得られなかつた。

眞人は、乃木に別れて、山口へ、歸つて來ると、既う叛亂の状態に、なつて居て、同志の士族は、それ／＼結束して、今にも事を起す迄に、なつて居た。萩と山口と、同時に、事を起すのであるが、山口の方に、根據を置く事になつて、横山や奥平は、さかんに活躍して居る。

山田は、此連中の唯一の軍將、前に小倉の聯隊長であつた、といふ事が、少からず一同に、畏敬される原因で、一切の軍略は、山田の方寸に、任せてあつた。前原は、眞人から、乃木の事を聞いて、折角に見込んだ、銃器の手に、入らぬ事を、甚だ残念に思つたが、今は致し方なく、此成行で、兵を起す事に決めた。

眞人の妻は、すでに妊娠して、今は臨月である。養父の文之進は、昔堅氣の武士で、前原と、深い交りがある。初めは、文之進が、前原に教へ、後には眞人を、前原に托して、教へをうけさせた。

斯ういふ關係から、眞人が、前原の企てに加はるのは、實は止むを得ぬ筋に、なつて居たのだ。

『おう、眞人か、何時歸つた』

『最前歸りまして、二三の人に逢ふて居りましたので、歸宅がおくれました』

『小倉へ、參つたさうぢやな』

『ハイ、兄からも宜しく、申して居りました』

『相變らず壯健で、勤めて居るか』

「ハイ」

「父上、私は、前原先生の擧兵に加はりました」

「えッ、さては愈々事を起すのか」

「ハイ」

「どうも致方がない。いづれは左様なるであらう、と、思つて居た」

「長い間の御養育に對して、何の御報恩も致さず、此儘御別れいたしますのは、不孝の至りでありますがお許しを願ひます」

「止むを得ぬ」

「妻の事は、妊娠中でもありますし、何分お願ひ申上げます」

「心配いたすな」

これから、身支度を整へて、前原の許へ、かけつけた。

廣島鎮臺の兵が、押出して来て、大戦さになつたが、萩は、疾く破れて、眞人は、終に討死した。山口の方も、大した事ではなかつた。

文之進は、眞人の死を聞くと、すぐに祖先の墓前に行つて、美事に、切腹してしまつた。

一一一

すべてが不用意であつて、兵を擧ぐる、といふほどの支度がなく、だら／＼急にはじめたので、鎮臺兵が、わつと押寄せたら、一と堪まりもなく破れてしまつた。熊本や、秋月の方が、はるかに優つて居たのだから、前原は、無残念に思つたらう。前の兵部大輔とも、あらう人が、僅に二日位で、見苦しい敗北を遂ぐるやうな、眼前の見えない戦

さをしたのは、如何にも情ないやうな氣がする。奥平、横山、白井、山田、その他のものを連れて、山陰道へ連れ、終に捕はれて、斬に處せられたのであるから、前原の末路は、實に悲惨なものであつた。

却説、乃木は、小倉に在つて、快々として樂します、前原が、いよく兵を擧げた、と聞いて、すぐに思ひ起すのは、眞人の身の上であつた。若し、此騒ぎが大きくなつて、日の長引くやうな事があれば、小倉聯隊も、必ず出動を命ぜられるに、極まつて居るから、その痛心は一通りてなかつた。幸にして、早く片付けば、前原始め、眞人の生命は、同時に亡くなる。それを思へば、一層の哀愁を感じるのであつて、いづれにしても、乃木は、身を切られるほどの辛さで、その日を送つて居た。

山口に居る、親しい友人から、はやくも知らせがあつて、眞人の死を聞き、前原その他の亡命を知つた時、人には、其れといはれず、獨り涙に、袖を絞つた。引つゞき來る通信によれば、玉木文之進も死んだ、とある。文之進の死は、果して何の爲めであるか、どうしても、知る事を得なかつた。文之進が、此騒亂に與するやうな事のない、といふ事は深く信じて居るのみならず、眞人の話に依つても、それと想像のつく事情もあつたのに、先生は、どうして死なれたか、これだけは、如何にしても、信ぜられなかつた。

そのうちに、詳しい音信があつて、文之進の死んだ理由は、眞人の、叛亂に與した責任を分かち、その討死を聞く、と同時に、杉家の墓所で、深く切腹して、相果てたのだ、といふ事が判つた。眞人の死も悲しいが、先生の死は、更に悲しい。自分の今日あるは、多く先生の教養を、受けた結果であるから、哀悼の情は、實の父を亡ふたにも、まさる。況して、それと同時に、眞人も亡ふたのであるから、騒亂の平定は、國家の家ために喜ばしいが、一個の愛情からいへば、泣くまいと思ふても、涙は、自然に溢れて來る。

乃木は、例の芝玉和尚を訪ねて、延命寺へ、やつて來た。

「乃木さん、大分お久し振りぢやツタ」

『いろ／＼の事がありまして、勤務の時間も、長くなりました上に、僅少の道程ではありますが、聯隊の所在地を、ちよいと離れ難い事情がありまして、思ひながらも御無沙汰をいたしました』

『嗚、御心痛の事が御座つたらう』

『生れて、始めての苦しみてした』

『左様であらう。それは、誰にしても同じ事ぢや。恩師の玉木さん、先輩の前原先生、實弟の眞人どの、此三人が、一時に逝つたのぢやから、お察しをいたす』

『今日は、三人を始め、知る人の爲めに、法要を願ひ度くて、まゐりました』

『それは、良い御心がけぢや』

『逝つたものも、極樂往生が出来て、私も満足のゆくやう、充分に願ひ度い』

『可し、有難い經文を、あげてやる』

『當分は、毎日まゐりますから、その都度、御迷惑ながら願ひます』

『あなたは來ずとも、拙僧は、怠らず勤めよう、皆知つたものばかりぢや。頼みはなくとも拙僧は、さう思つて居た所ぢやから、一層心を入れて、回向をしよう』

『どうぞ、お願ひいたす』

『いつぞや、弟御が、見えな時、拙僧のいふた通りぢや。前原先生も、つひに一生を誤られたが、玉木さんも、實に惜しい事を、いたしました。併し、どうしても、斯うならねばならぬ、初めからの約束事ぢや。泣くだけ泣いて、諦める外はない。あんたも、思ふさま泣くがよい。拙僧も、一しよに泣く』

『有難う』

乃木は、聲を惜まず泣いた。和尚も、ともに泣いた。兩人は、泣く丈け泣いて、それから讀經がはじまり、線香を

手向けて、夜おそく歸つて來た。當分のうちは、延命寺へ通つて、日をくらすやうにして居た。鬼のやうに、強い人でも、此優さしい心はあつたのである。

西南戦争

一

乃木が、小倉へ赴任してからの、二つの大難とも、いふ可きは、前原の亂に、眞人が、關係した事と、もう一つは、翌十年に起つた、西南戦争であるが、前の時は、人情の堪へ難きを忍んで、實弟や先輩の死を、ちツと眺めて居ながら、如何ともする事の出来なかつた、といふ、人間の最大悲哀に、出會ふた事で、その顛末は、すでに述べた通りである。

後の、西南戦争には、大切な聯隊旗を、敵の爲めに奪られて、軍將としての恥辱を、三十餘年の長い間、人知れず、堪らへて居たのであるから、實をいふと、萩の事件よりも、或は此方が、乃木の身に取つては、一層の苦痛であつたかも知れぬ。殊に、死の間際に、書遺した文書のうちにも、特に、此事が記されてあつた位だから、どうしても、此事件を明確にしなければ、乃木の死が、何の爲めか、といふ事も判らず、その人格の、如何にすぐれて居たか、といふ事も、判らないのである。

従つて、此事件は、乃木の全人格を、知る上に於ても、見通す可からざる物語であつて、徒に、形式の上の殉死と、のみ思ふて、見當違ひの尊敬を、拂つて居る、人達の爲めにも、相當に詳しく、述べて置く必要がある、と思ふ。

先づ、西南戦争の性質から、私は、説いて置くのが、物語りの順序である、と信ずるから、その點について、是か

ら述べる事にするが、猶ほ詳しい事を、知り度い人は、南洲傳を、參照して欲しい。

絶代の偉人、西郷隆盛は、明治六年に内閣を退くと共に、鹿兒島へ歸つてしまつた。後には、大久保利通と、木戸孝允が居る。その外に、三條實美と岩倉具視が居たから、政府の施政については、少しも差支はなかつたが何しろ、一世の人望を、背負つて居る、西郷の辭職は、政府の權威の上には、一大脅威を、感じたには違ひない。

西郷は、鹿兒島へ歸ると、間もなく、私學校をつくつた。薩南の健兒は、一時にどつと、集まつて来て、頗る盛なものになつた。私學校といふても、一つの大きな學校があつて、それに皆、集まつて居たのではなく、鹿兒島の城山の下に、その本校があつて、分校が、郡市に跨つて、十一も在つたので、それに集つたものは、殆ど縣下の壯士の總てと、見て可からう。

篠原國幹、桐野利秋、村田新八、別府晋介、邊見十郎太、池上四郎、貴島清、村田三介、中島健彦、その他、西郷と共に辭職した、薩人の全部、少尉以上の資格あるもの、百五十幾名は、皆學校の關係者であつた。

初めから、政府へ出ずに、國元で、威張つて居た、人達は、猶更、西郷の歸國を喜び、陰に、陽に、學校の後援を、爲て居るので、私學校の名は、政府の大官の耳には、どれほど恐ろしく、響いたか知れない。大久保の如き人でさへ、之れに對しては、非常に、心を痛めた位である。

勤王倒幕の運動に成功して、明治の新天地をつくり、上げた人は、各藩に互つて、その數も多く、傑物を以て、目されたものも少からずあつたが、薩摩の西郷と大久保、長州の木戸、此三人を以て、殊に、すぐれた人物として、一般からは「維新の三傑」と、呼んで居た。

西郷と大久保は、鹿兒島の城下に、流れて居る、甲突川の東河岸、加治屋町といふ所で、同じ時代に生れた、二歳違ひの友達であつた。大久保の家は、普通の士格であつたが、西郷の家は、最下級の士分で、父の吉兵衛は、島津家の一門や老臣の許に、日雇の執事の如き事をして、藩主から受ける、手當の外に、幾分の稼ぎをしなければ、その日

を、送る事の出来ない、實に心細き生活を、爲て居たものである。

家格や食祿に、ひどい相違はあつても、子供同士の二人は、極めて仲が善かつた。西郷は兄、大久保は弟として、傍の見る目に、羨ましく思はれるほど、その交情は深くあつた。

嘉永二年の島津家騒動、齊彬と久光の、相續争ひに、大久保の父、治右衛門は、罪を得て、遠島の處分をうけた。

西郷の父は、あまりに身分が、卑かつた爲めに、此渦中に入らず、従つて、何等の處分も受けなかつたが、その代り家老の赤山製負が、切腹を申付けられたので、間接に、西郷の父も、響きをうけて、生活の上に、容易ならぬ關係を及ぼした。赤山は、西郷家の生活を、助けて居たばかりでなく、吉之助を愛して、非常に力を入れて居たのだ。

されば、赤山が、切腹した時の肌着は、血の沁みた儘、吉之助へ、記念として與へた。それは、赤山の遺言であつて、吉之助の魂に、深く打込まれた教訓は、即ち之れであつた。

一一

齊彬と久光が、相續争ひをした、といふても、本人同志が、行つたのではなく、久光に、従いて居るものが、久光の母と、企んでした事で、久光が、自から進んで、齊彬を押し退けよう、としたのではない。

齊彬は、正妻の腹に、産れた長男で、久光は、妾腹から出た次男であるから、その間に、争ふ可き餘地はなかつた。久光の母は、江戸の三田で生れた、大工の娘で、容姿の美しい爲めに、齊彬の妾となつたのであるが、自身の子は、二萬石餘りの重富へ、養子に行つて、齊彬は、七十萬石の主人になるのを見て、如何にも妬ましく、思つた末、齊彬を押し退けて、久光を相續人に、しようとしたのが、騒動の始めであつた。

その顛末は、南洲傳と、大久保傳を参照すれば、詳く判る。

此騒動から、種々の事が生れて、西郷や大久保のやうな、人物が出たのも、つまりは、其賜物といふてよからう。

兩人の背後には、有馬一郎といふ偉人が居て、よく指導して居た。兩人は、血氣の勇にまかせて、久光派の首領を、襲ふ計畫を立てたのを、一郎が、説諭を加へて、さうした小さい事、蝸牛角上の争ひをするのは、愚の至りであるといふ事を悟らせ、兩人をして、大なる志を抱くやうに、導いてやつた。

若し、一郎の如き人が居ないで、兩人が、思ふ通りの事をやつたら、恐らく兩人の生命は、その時に、失ふて居たかも知れぬ。それを、一郎が異見して、過ちをさせなかつたから、兩人は、維新の舞臺に、立つ事が出来た。殊に、西郷は、赤山から譲られた、血染の肌着が、一生の教訓となつて、那アした人物に、なり得たのである。

乃木將軍の、死に絡んで、いろ／＼の事が起つたうちに、桃山の御陵に近く、乃木神社の建てられた事は、何人も知る所であらうが、その縁起を、深く知つて居るものは、極めて少からう。村野山人といふ、年れた富豪が、私財を投じて、建てたものである位の事は、多少知つて居るものもあるだらうが、それ以上の事は、知るまい。村野が、乃木の死に接して、何故さうした、考へを起したか、といふに、その起因は、矢張り島津家の騒動に、根ざして居るのだから、實に意外千萬ではないか。

此騒動に依つて、齊彬派の人が、切腹して居る外に、多くの藩士が、嚴罰に處せられた。そのうちの一人に、村野傳之丞と、いふものが居た。いよく切腹といふ時に、その妻を呼んで、

『今日は、いよく切腹いたすが、お前は、次の間から、私の切腹する状を、子供に見せて置くのぢや。よいか、それ丈は、必ず忘れるな』

と、いふた。妻は、良人の最期と聞いて、もう胸も潰れる、思ひをして居るのに、頑はない子供に、切腹の状を見せて置く、といはれたのだから、容易に承知しなかつた。けれども、傳之丞は、飽迄も、其れを主張して、果は、妻を叱りつけた。

『もし、お前が、私の申付けに背いたら、お前は、私に背く事になるが、それでも、いふ事には従へぬ、と、いふ

のか」

『仰せに従ひます』

『それでは、確と申付けたぞ』

『ハイ』

斯くて、傳之丞の最期には、次の間から、その妻は、子供を抱いて、見て居たのである。此時の子供といふのが、後の村野山人であつた。極小さい時に、父の死を見せられ、追々成人するにつれて、當時を思ひ出すと、一種の感慨に、うたるゝのであつた。

山人は、幾多の苦辛を重ね、實業家として成功した。神戸の村野さん、といへば、廣く人にも知られて、その富も、數十萬に上つた。晩年に及んで、之れを譲るべき實子もなく、甚だ寂しく暮らして居た。折柄、乃木將軍の死に接したので、人一倍の衝動をうけた。幼い時の、父の死を追想しては、一層の哀愁を感じるものであつた。於此、數十萬の富と、老後の幾年を、乃木神社の事に、傾け盡して、俗社會との關係を、絶つてしまつた。

此事實を發見したのは、著者一人であつて、それを公にした時は、本人の村野も驚いて、著者に會見を求めた位である。

村野は、大正十年の頃に死んだが、乃木神社は、永久の記念として、残された。乃木の死の壮烈にして、深い意義のあつた事は、今更に、いふ迄もないが、その死に感激して、乃木神社を、獨力で建てた、村野の事は、また永久に、傳ふ可き美談である。

傳之丞は、切腹の命を、うけて居らぬが、事件の進展して、同志の多くが、引續き切腹して、自分の身にも、嚴罰の及ぶのを知つて、切腹したのである、と聞いて居る。

此一事は、山人も、私から聞いて、否定しなかつたから、事實として傳へる事にした。

西郷と大久保は、同じ町内から生れて、同じやうに育つて、同じ舞臺で、働いて来て、同じやうに出世して。どちらも、偉い人として、萬人の尊敬を、うけるやうになつたが、その最期は、ともに悲惨であつたばかりでなく、初めの交情に引かへて、双方から、悪い感情を持つて、全く睨み合ひの形で、死んでしまつた。

兩人の性格が、始めから異つて居たのと、時勢の移り變りは、兩人を、一つ舞臺に、立たせなかつた。大久保は、理性の勝つた人で、どこかに、冷たい所があり、西郷は、情の人で、何となく温かい所があつた。大久保は、政治家の質に富んで居て、畢竟は、疊の上の人であるが、西郷は、幕末のやうな、險しい場面に、最も必要な人で、泰平の世には、餘り用事のない人である。維新の鴻業を建て、これから猶う一つ、征韓の目的を果して、潔く退隱しよう、としたのを、大久保に妨げられたのは、西郷の身に取つては、頗る痛手であつた。

大久保は洋行して、世界の文明に、觸れて來たので、内治の改良を急として、征韓の事の如きは、無用の戦ひである、といふ、意見を以て、反對した。其處で、兩人の性格の相異が、全く現はれて來たのであつて、昔からの長い交情も、之れて縁切れに、なつた譯だ。

乍併、西郷は、單に是れ丈けの事情から、叛旗を繖すやうな、人ではなかつた。もう少し、奥は深いのであつたが何分にも、多くの配下が、政府に不平があり、大久保の行爲に、反感を持つて居るので、終に那アいふ戦争をはじめてしまつたのである。その間の道筋を、詳しく述べて居ると、容易な事でないから、それは省略して、すぐ旗擧げの方に、物語を移す事にしよう。

西郷は、日向山の温泉へ、村田新八を連れて、しばらく滞在して居た。鹿兒島に居ると、いろ／＼な事を聞かされたり、厭な事を見たり、爲なければならぬから、それを避けて、此處へ、來て居たのであるが、後に思へば、それが

却て悪かつたのである。西郷の不在中に、若い元氣な連中が、或は火薬倉庫を占領したり、或は銃器の掠奪をしたり、さまざまの事を、はじめた。

それには、政府の方から、幾分は誘ひをかけた、疑ひもある。格別の用事もないのに、警視廳の警部を、多く歸省させたり、急に銃器や火薬を、中央へ引上げにかゝつたり、疑ひの眼を以てすれば、いくらでも、疑惑の起る、事を、引つゞき始めたから、思慮に淺い、元氣の壯な、私學校の生徒が、先づ厥起して、取返しのかぬ騒ぎを、始めてしまった。その背後には然る可き人物も、附いて居て、頻りに煽りつけるから、とう／＼騒ぎは、本物になつてしまつた。

警部が多く歸省したのは、西郷先生を、暗殺の爲めである、といふ風説が、東京方面から、傳へられて來た。それが動機で、警部は皆な縛られた。縛る役の警部が、縛る權利のない、壯士に縛られて、拷問にかゝつたりした。その調書に依ると、明かに政府の内意をうけて、西郷暗殺の爲め、歸省したのである、と答へて居る。縛られた警部は、中原尙雄、園田長輝、高崎親章、安樂兼道、その他、十數名であるが、是等の人の語る所では、決して左様いふ事はない、といふて居る。此一事は、永久の疑問として、明白になる時はなからう。

明治十年二月上旬、いよ／＼騒ぎは酷くなつて、西郷が、急報に接して、鹿児島へ、駆けつけた時は、すでに、叛亂の状態で、如何ともしやうがなかつた。すべての町家は、店を閉ちて、往來するものは、武装した壯士ばかりだ。政府の出、張官吏は、皆な縛られて、造船所をはじめ、兵器火薬の製造所は、一切占領されてしまつた。私學校には、幾百の壯士が集まり、相當の人物が、之を指揮して、さかんに、擧兵の準備を、爲て居るのであつた。

事態が、斯うしい状態になつては、西郷の力でも、ふせぎ得るものではない。桐野や、篠原も、すでに覺悟してしまつた。縣令の大山綱良も、表面は、鎮撫と見せかけて、その實は、金や米の徴發を、はじめた。村田が、西郷に向つて、

『先生、此状態ですが、どうなさる』

と、いふたら、西郷は、

『何事も、天である』

と答へて、此に萬事は、決したのである。集まつて来るものは、西郷が招いたのでなく、すべて自發的であつた。二月十五日に、鹿兒島を發する時、千人位であつたのが、三太郎の嶮を越えて、熊本城へ、迫つた時は、一萬二千人になつて居た。實に盛なりといふべく、西郷の徳は、偉いものであつた。

四

熊本鎮臺の司令長官は、陸軍少將谷干城であつた。樺山資紀が、當時は陸軍中佐で、參謀長をして居た。兒玉源太郎は、未だ少佐で、その次席であつた。

徵兵令が實施されて、未だ戰爭には、町人百姓の力が、どれほど堪へられるか、といふ事が、試験されて居ないから、幾分の不安もあり、殊に、九州に於ける、西郷の人望が、恰に神様にも均しいので、うツかり城を出て、西郷の顔を見せたら、鎮臺兵の大半は、すぐ叛いてしまふかも知れぬ。假りに左様いふ事は、ないとしても、何しろ、薩南の健兒が、胸揃ひて乗出して來たのだから、下手な事をする、と、熊本城を、乗取られる恐れがある。萬一にも、そんな事になつたら、九州一圓が、西郷の手に歸するやも、計り難い。兎に角、これは城外へ出て、西郷を對手にするのは、危険此上なしであるから、先づ籠城して、官軍の本隊が、乗込んで來るまで、薩軍の東上を、支へて居るのが最上の策である、と決して、籠城の準備にかゝつた。

そのうちに、薩軍は、潮の如く、寄せて來た。城外に、鎮臺兵の出で來るのを待つて、一と戦さする覺悟で、遠くから包圍して居る。西郷は、市外の春日村まで來て、此處を本陣とした。四方から追々に、走せ集まる壯士は、ど

れほどに、なるか知れない。

乃木は小倉の聯隊長心得として、谷將軍からの命令を、待つて居た。

『取敢ず、鎭臺へ來い』

との電報であつたから、吉松大隊長と共に、三百餘の兵を率ゐて、小倉を出發した。博多まで來ると、更に電報が來た。

『はやく來い』

との催促であつた。其處で、兵を二隊に分つて、枝隊は、吉松少佐に託し、自分は、残る二百餘の兵を率ゐて、道を急ぐ事になつた。

薩軍は、全軍を、六大隊に分ち、第四大隊は、元の少佐、村田三介が率ゐて、すでに熊本の背面へ、出て居た。偵察や間諜は、さかんに双方で、使つて居たから、時々刻々に、その報告はある。村田の手にはひつた、報告によると、乃木の兵が、熊本へ向つて、すでに途中まで、來て居る、との事であるから、先づ之れに備ふる、必要が起つた。

『オイ、協同隊へ行つて、高田を、呼んで來い』

『ハツ』

傳令使は、すぐ熊本協同隊の屯所へ、やつて來た。高田露に逢ふて、此命令を傳へたので、高田は、すぐ支度して村田の隊へ、急いで來た。

『御用ですか』

『うむ、よく早く來てくれた』

『急ぎといふ事ですから、すぐにやつて來ました』

『乃木少佐が、小倉の兵を率ゐて、すでに途中へ、來て居る、といふ報告があつた。彼れを、鎭臺へ入れてはなら

ぬ。君は、これから、すぐ部下を率ゐて、之れを食ひ留るのぢや。夜明過には、此方から、援兵をやるに依つて、今夜丈、敵兵を防いでくれ』

『ハイ、承知しました』

『乃木は、却々戦さも上手であるし、それに、人物も良いから、よほど巧くやらぬと、破られるぞ』

『我輩も、乃木の事は、よく知つて居るから、大いに注意してやります』

『確に頼んだぞ』

『御引受けいたしました』

『今夜は、植木へ着くぢやらうから、そのつもりで、急いでくれ』

『ハイ』

高田は、此命令を受けると、協同隊の本陣へ、歸つて來て、連れてゆく壯士の、選抜にかゝつた。

『オイ、高田、うまくやつたな』

『どうして……』

『これが、第一の手合せだぞ。勝敗は、暫く措いて、武運の強い奴ぢや』

『羨ましいか』

『どうせ始めるなら、先頭第一の戦ひに、出たいぢやないか』

『村田どんは、人を見るの眼がある。流石に、偉いぞ』

『皆んな聞いたか、高田の威張る事、實に恐ろしいほどぢや』

『ハツハ、ハ、ハ、ハ』

『貴様は嬉しからうが、己どん等は、癪に觸るぞ』

「怒るなく、跡始末は、オハン等に頼む」
 「あぎやん事、いひ居る。糞ッ」

人に羨やまれるほど、高田の身に取ると、名譽ではあるが、責任は重い。充分に人選みをして、いよく出かける事に、なつた。

五

此場合に、先づ協同隊の事から説明して、高田の身上に及ぶ、必要がある。

熊本士の族が、西郷を崇拝する事は、實に深いものがあつた。老朽の輩は、しばらく措いて、年壯にして志高きものは、大概、西郷信者であつた。池邊吉十郎の率ゆる、士族の一團は、はやく準備を整へて、薩軍に投じてしまつた。之れを熊本隊と稱して、薩軍の先鋒隊となり、眞つ先に、鎮臺へ、攻めかゝつた。

曾て、細川の若殿に従いて、佛蘭西へ行つた位で、池邊は、世界の事情にも通じ、洋書も、讀める人であつたら、存外に新知識であつた。一と頃、評判の新聞記者であつた、池邊吉太郎は、その長子である。

頑固な連中が多く、國家とか、政治とか、いふ問題については、可成り舊式の考へを、持つて居たので、新しい議論をする、士族との折合は、甚だよくなかつた。其處で、熊本隊に入らずして、別に一隊をつくり、池邊等に拮抗ながら、西郷を援ける連中があつた。之れを熊本協同隊と、稱したのである。

熊本隊に、池邊といふ首領のある如く、協同隊には、首領がなかつた。その重立たるものは、平川唯一、有馬源内、野滿長太郎、田中賢道、宮崎八郎、高田露等の人々で、此うちの宮崎と高田が評判の人気者であつた。隊の中堅は士族であつたが、多くは町人や百姓から出た志士であつた。純粹の士族ばかりで組織された、熊本隊よりは、協同隊の方が、却て覇氣もあり、魂も確である、といはれた位で、人數こそ少かつたが、人氣は、協同隊へ、集まつて居た。

宮崎は、高瀬街道の、荒尾村に生れ、家は、代々の富豪であつた。彌藏、民藏、寅藏といふ、三人の弟があつた。兄弟は、皆、天下國家で憂身を憂すものばかりで、彌藏は、孫逸仙の、最初の參謀であつたが、明治卅九年の旗擧に敗れ、横濱へ、引上げて来て、終に病死した。民藏は、土地共有論を唱へて、政府から逐はれ、これも、今は故人になつた。寅藏は、號を滔天と稱し、長く孫逸仙に附いて、支那の第一革命までは、相當に名を成したが、晩年は、小石川の高田豊川町に居た。その伴が、例の柳原燐子を、擡ぎ出した、龍介である。

長兄の八郎は、夙に佛蘭西學を修め、非常な傑物であつたが、此戰ひで討死した。西郷も、八郎には、惚れ込んで重く用ゐたが、借しい最期を、遂げてしまつた。

八郎と、人氣を競ふたのが、高田露であつた。身長は低かつたが、非常な美男子で、女に好かれた點に於ても、八郎と、同じやうであつた。高田は、非常な俊才で、學ばずして、戰爭の、骨法を心得、其道の人さへ、感心するほどであつた。明治七年の臺灣征伐に際し、平川や有馬と、義勇兵を率ゐて、西郷従道に、附いて出征し、蠻人を對手に巧い戦ひをしたので、従道が、頗る感心して、「此戰役中、特に大尉の待遇を與ふ」といふ、辭令を與へたほどであつた。

その後、教導團へはひつたが、議論が合はないので、終に退出して、熊本へ歸り、それから、山田武甫について、自由民權を唱へ、政黨員として、生涯を終つた。政友會の代議士として、三度も、議場へ出たけれど、一度も演説を爲す、誰も知らないうちに、大隈内閣の時、議會解散で、選挙競争中、腦充血で死んだ。その跡へ、候補者となつて當選したが、東京府知事を勤めた、宗像政であつた。此人も、昔は協同隊の一人として、さかんに戦ひをしたのである。協同隊と、高田の事は、此位にして置いて、さて、乃木との戦ひは、どうなつたか、といふ段にうつる。

植木から、熊本へ向ふ道に、迎ふ坂といふ所があつて、峻しい坂ではあるが、一般にいふ、峠といふほどのものではない。高田は、その坂下まで、やつて来た。

『一同、列ベツ』

従いて来たものは、一列になつた。

『今晚、小倉聯隊の乃木少佐が、此坂を越ゆる、といふ事であるから、我々は、之れを防いで、越えさせぬやうに、するのである。諸君は、大に奮發して、乃木の隊を、防いでくれ、己どんは一人て、此峠に昇つて居るから、諸君は、此處に控へて、己どんの號令があるまでは、たとへ敵兵が、眼前に迫つても、動く事はならぬ。よろしいか』

『ハツ』

『それでは、此敷の中へ、はひつて居れ』

ハツ

一同は、命令の通り、敷の中へはひり、高田は、たつた一人て、迎坂の上へ、ぶらり／＼と、昇つてゆく。

聯 隊 旗

一

植木警察署を、一時の司令部として、乃木の隊は、二月廿一日に着いて、夜に入るを待ち、迎坂を越えよう、とするのであつた。その夜半に、此處を出かけると、多少の障害は、うけるとしても、天明には、熊本へはひる事が、出来る。行軍は、夜中の方が、却て宜しい、との考へから、疲れを休める必要もあり、旁、しばらく休息して居たのである。夜の十一時も過ぎて、はや十二時に、近い頃、乃木は、命令を下して、先づ一半の兵を、進める事にした。

左迄の嶮坂でもないが、爪先上りの急坂であるから、昇るものゝ爲には、一寸苦しいのである。
高田は、絹の衣物を着て、裾からげもせず、草鞋穿きで、そのくせ腰には、二尺一寸餘りの刀を、帯して居る。その頃流行つた、革命帽子といふのを冠り、ぶらり／＼と、坂を昇つてゆく。その風體の可怪しさに、部下の壯士も之を見送つて、失笑を禁じ得なかつた。

革命帽子といふのは、今の鳥打帽の、後部に、庇のあるもので、つまり、前後に庇があつて、左右から、耳を掩ふ垂れが、附いて居る。變な形のものであつた。佛蘭西革命の時に、非常に流行つて、革命黨のものは、皆之を冠つたとかいふので、自由民権を、唱へる連中は、いづれも、之を愛用したのであつた。

坂を昇り切ると、頂上が、平地になつて居る。其處に、立木を切倒した儘、道のなぞへに、横にしてあるから、

それへ、腰を下して、提げて来た。煙草入れを、取り出した。火の用心と、赤漆で、書いてあつて、煙草も差込みになり、形は悪いが、頗る重寶なものである。鈍豆形の煙管へ、煙草を詰めると、火打石の、はひつて居る、袋を出した。

此時代には、もう新選社のマツチが、さかんに賣出されて、熊本にも、疾くに廻つて居たのであるが、大概のものは、未だ舊式の火打石を、用ひて居た。高田等は、士族のうちでも、極進んで居たのだが、それでも、マツチを嫌つて、斯ういふのを、用ひて居たのだから、實に面白い。

全體、熊本の人は、昔から反對した、二つの性質を、持つて居た。一方には、非常に進歩した、性格を持ち乍ら、他の一方には、頗る保守的の氣質を、持つて居て、それが爲めに、いつも議論倒れになつて、時代に立ち後れる、といふ風があつた。大正の末年までも、國權派なぞといふ、古い、微臭い名稱を、維持して居た位に、舊弊な所であるから、恐れ入る外はない。その反面には、徳富蘇峰のやうな人も、出て居る。

却説、高田は、坂の上に、煙草を呑み乍ら、暗い植木の町を、ぢつと、見下して居る。西郷が、熊本へ、攻め寄せ、官軍が、之れを邀へ撃つ、といふ事、それが、種々の説になつて、傳へられ、多くの想像が更に想像を生んで、大きくなつて傳へられるから、附近の人は、非常に驚いて、要領深い人は、遠くへ立退いて居る位で、植木の町も、大概な人は、立退いてしまつたから、森閑として、恰で無人の郷にひとしく、暗い夜の天には、一つ二つの、星の光が際立つて輝いて居るが、町には一つの、燈火も見えぬ。

そのうちに、時間が進んで、十二時近くなると、暗い坂下から、一團の人影が圓くなつて、昇つて来る。高田は、それを見ながら、ぢつと、睨んで居るうちにも、足並揃へて、正しく昇つて来る、その容子が、確に兵隊らしい。靴の音が、漸く聞えて来ると、暗いうちにも、鐵砲を、擔いで居る影が、うつすり、見えて来た。その近づくのを待つが如く、高田は、平氣で、煙草を、吹かして居た。

先方でも、高田の影を認めたらしく、足音は止まつて、やがて、隊伍が直つた。鐵砲を構へて、靜に進んで来る。時刻は可し、と見て、高田は、すつくと、立ち上つた。腰の一刀を抜くと、同時に、例の藪の方へ、向いて、

『一同、かゝれツ』

と、聲をかけながら、手早く衣物の裾をからげ、兩肌を脱いだ。これは又、意外千萬、衣物の下には、緋縮緬の長襦袢を、着て居た。それが暗いうちにも、ひらく／＼として見える。疾風の如く、兵隊の正面から、斬り込んだ。その鋭く且つ速い事は、眼にも止まらぬほどであつた。

高田を、討たせてはならじと、部下の一同も、斬つ先揃へて、どつとかゝる。何しろ、其元氣は、素晴らしいものだ。見る／＼うちに、兵隊は、しどろもどろになつて浮足立つ。それを追撃に、はげしく斬りまくる。高田の策戦は、岡星に中つて、官兵は、終に坂下へ、退去した。

一一

二度も三度も、同じ策戦で、官兵は、逐捲くられて、どうしても、坂を昇り得なかつた。その情報は、乃木へも知れた。

『さて、不思議な戦振りである。昔の戦法を、其儘に用ひて、巧に之まで防ぐのは、實に感服の外はない。兎に角何者が、指揮して居るのか、現場を見て來よう』

と、乃木は、一種の好奇心にも駆られて、自ら出かける氣になつた。傍には、聯隊旗手の、河原林少尉が、軍旗を擁して居る。

『オイ、河原林ツ』

『はツ』

「私は、前線の戦況を、見て来る。君は、大切に軍旗を、守護して居れ、よいか」
「ハイ」

乃木は、すぐに馬を走らせて、迎坂の方へ、急ぎ駆けつけた。その跡で、河原林は、しばらく考へて居たが、やがて、左右の兵士を顧みて、

「己れは、これから、戦況を見にゆくから、お前等は、之れを大切に、持つて居れ」

と、いひつゝ軍旗を、竿から引放して、腹へ巻付け、竿丈けを、兵士に渡した。何も知らぬ兵士は、少尉の命令に従ひ、その竿を、大切に守つて居る。軍旗が、附いて居ればこそ、竿にも有難味はあるが、軍旗を引放してしまつたら、三文の値打もない。苟も、少尉になつて居るほどのものが、軍旗の大切なる事を、知らぬ筈はないのに、何といふ不都合の事か、實に言語道斷の振舞である。

迎坂から、少し左へ離れて、鉦塚といふ所があつて、一面の茶畑に、なつて居る。この茶畑の中にかくれ、茶の木の上へ、半身を出して、暗い中から、戦争の模様を、窺つて居た。一しきり起る銃聲、それからつゞいて、呐喊の聲が聞える。それを察しさに、河原林は、耳を傾けて、聞いて居るのであつた。

所へ、一發の銃丸が、ピユーツと、飛んで來た。河原林の頭部を貫いた。急所の痛手に、河原林は、
「あツ」と、叫んで倒れたが、誰一人として、之れを知るものがないので、河原林は、茶畑の中へ倒れて、間もなく息は絶えてしまつた。

乃木は、すつかり戦況を視察して、とに角、一同へ、退却の命を下して、司令部へ、引返して來た。

此時、間道から進んだ、吉松大隊長の兵は、敵の強襲に逢ふて、散々の敗北を遂げ、吉松少佐は、數ヶ所の重傷を負ひ、兵士に扶けられて、辛うじて、引上げて來た。従いて行つた、兵士の大半は、或は傷つき、或は斃れて、見るも無慘の體で、吉松は、息も喘ぎ／＼、引上げたのであつた。

『吉松、どうした』

『ぞ、ぞ、残念ぢや』

『まあ少し落着いて、手當をせい』

乃木は、自分から指圖して、吉松を、警察署の内へ擔ぎ込ませ、すぐに手當を、加へるやう申付けて、また、門前へ、出て来た。不圖見れば、河原林の姿が見えないから、不密に思つて、

『河原林は、どうしたか』
と、尋ねた。

『只今、戦況を見にゆく、といふて、おいでになりました』

『えッ、出かけたか』

『ハイ』

『而て、軍旗は、どうしたか』

『腹へ巻付けて、おいでになりました』

『軍旗を腹巻にして、河原林は出かけたのか』

『ハイ』

乃木は、思はず鞍の、前壺を打つて、

『失敗つた』

と叫んだ。

その聲が、餘りに大きかつたので、副官の渡邊大尉が、乃木の顔を見上げると、恰て鬼のやうな、恐ろしい容子をして居る。

『オイ、渡邊ッ』

『ハイ』

『河原林が、馬鹿な眞似を、爲居つたよ』

『怪しからぬ事です。之れは相當の處置を、取る外ありませんまい』

『まア、待て、どうせ壯い奴ぢや。此元氣があるから、戦さも出来る。叱言はいふても、程度にして置け』

『どういたしませう』

『兎に角、搜して来てくれ』

『ハイ』

『軍旗に、間違ひがあると困る』

『すぐに連れて、まゐります』

渡邊大尉は、三四人の兵士を連れて、迎坂へ引返した。此人は、名を彰と謂ふて、後に名古屋の師團長になり、晩年は休職中將で、氣樂に、世を送り、まことに評判のよい、軍將であつた。

一一一

全然、見當違ひの所で死んだ、河原林の屍骸は、渡邊大尉の苦心も空しく、終に搜し出す事が、出来なかつた。

彼是れするうちに、夜が明けかかつて来たから、もう進む事は出来ぬ。殊に、吉松少佐が、重傷を負ふて居る爲め、乃木は、前進する事を斷念めて、一時は、退却の外なかつた。事情の上からすれば、乃木に、何等の過失はない。全く河原林の失策から、起つた事ではあるが、責任感の強い、乃木は、一切を、自分の過失として、殊には、河原林が死んだ、と聞いて後は、此事に關して、何の申譯もせず『全く私が悪かつた』と、いふて居るのみで、その事情を語

る事は、避けるやうにして居た。

若し、進んで申譯をすれば、河原林の不都合を、いはねばならず、その本人は、既に死んで居るので、それは、いひ度くなし、何でも、自分が悪かつた、とすれば、河原林の事は、いはずとすむものとした、此心は、實に尊重す可き心で、乃木にあらざれば出来ぬ覺悟であつた。

夜が明けてから、植木の町の人々が、戦ひの跡を、見物に出かけて來た。例の茶畑の中を、ウロ／＼して居るうちに、見付け出したのが、河原林の屍骸で、あつた。

『やア、誰か死んで居るたい。』

と、一人の男が叫ぶと、外のもは皆、逃げ足になつたが、前に叫んだ男は、恐る／＼引返して、そつと、見て居たが、

『皆な恐るゝ事はなか、官軍の將校ぢや』

と、いはれて、外のものも徐々、引つ返して來た。倒れて居る將校の、横腹の所から、紫の帛れが、出かゝつて居るので、その先きに、附いて居るふさを、そつと、引張つて見たら、する／＼と、出て來るので、一同は、斯うなると、面白半分で、引ツ張る。屍骸を、少し持ち上げる奴が、あつたので、その帛れを手繰出して、之れを擴げて見たが、軍旗といふ事を、知るものはなかつた。

『やア、之れは、美しい旗ぢや』

『何ぢやらうか、そぎやな、旗知らんのう』

『それは、唐人の旗ぢや』

『さうかのう』

軍旗は、終に唐人の旗と、いふ事になつて、或一人が、之れを首へ巻付けて、植木の町へ、引上げて來た。それを、

高田の連れて来た、協同隊のものが、見付けた。

「貴様等は、そぎヤンもの持つて、怪しからん」

（「はア」

「はアとは、何か、己どんに渡せ」

「へー」

壯士に威嚇されて、旗は奪られた。之れを奪つたものも、軍旗といふ事を知らず、隊へ、引上げて来て、ワイ／＼いふて、居る所へ、高田が、見廻りに来て、之を見付けたのである。高田は「之は軍旗である」といふ事を知つて、すぐに竿へつけ、大切にして、村田三介の許へ、届けた。村田も、之れには驚いて、高田と、同道の上、春日村へ、来て居る、西郷の前へ、持出した。

「こりや、大したもの、手にはひつた」

と、いふて、西郷も、頗る喜んだ。

「小倉聯隊の軍旗ですな」

「さうぢや。それに、違ひない」

「實に目出度い事ぢや。未だ戦ひに入らぬうちから、軍旗が、手に入るとは、何といふ幸先のよい事か」

「先生、此戦さは、大勝利でせう」

「うむ、まことに、良い前兆ぢや」

平生は、妄りに喜怒を、色に現はさぬ、西郷も、此時ばかりは、餘程嬉しかつたものか、頻りに目出度い、といふ事を、くり返した。此事が、それからそれと傳はると、薩軍の歡喜は、頂上に達した。高田は、偶然の功名に、意外の面目を施して、多くの人から、羨まれたほどである。

乃木は、河原林の死を知り、軍旗の敵手に、渡つた事を聞くと、その煩悶は、一と通りでなかつた。

一度は、死して申譯を、とは思つたが、とに角、此大失態については、相當の處分を、うけるに極つて居るから、その後に自決するのが、武士の本領に、叶ふて居る。今死んでは何の爲めの死か判らぬ事になつて、後世の誤解を招くも、残念である。先づ心靜かに、總督宮の御沙汰を、待つ事にしよう、と考へ直して、一時は、死を思ひ止まつたが、矢張り、人としての感情はあるので、それからの乃木は、頗る自暴自棄の體があつて、悪戦苦闘を、つゞけるやうになつた。

好んで、危い所へ、ふみ込み、亂暴な戦闘をして、幾たびか、生命も危かつたが、どうしても、死所を得ず、田原坂方面の激闘に、數ヶ所の重傷を負ふたが、それでも、死ぬ事は免れた。

四

熊本城は、長い間、薩軍の爲めに包圍されて、城内の將卒は、非常な苦辛を経て、二ヶ月間の籠城を、美事にやり遂げたのは、有鑒に、偉いものであつた。城内に、一疋の鼠も無くなつた、といふ一事で、その他の事は、想像がつくであらう。官軍の本隊が、もし城外の薩軍を、もう十日間、破り得なかつたら、城内の將卒は、餓死か、討死の外は、なかつた。

谷將軍の電命に依つて、疾く鎗臺へ入る可くして、途中に支へられて、進み得ず、迎坂の一戦に、軍旗を失ふた、乃木は、全く捨身になつて、よく闘ふた。田原坂の格闘には、十數名を對手に、全身が、打撲傷の爲めに、斑になるほどの事もあつて、漸く部下の兵士に、救ひ出されたが、その剛情にして、我慢強いには、敵も、味方も、驚いたほどである。

全體、田原坂の白兵戦は、世に有名なものであるが、坂其物は、極めて平凡で、敢て奇と、するに足らぬ、小さい

坂の奪取戰に、過ぎなかつた。唯、これを守るものが、薩南の健兒で、拔刀隊の精銳であつたから、官軍の方でも、特に拔刀隊を編制して、攻めかゝつて見たが、とても、實力に於ては、及ばなかつたらしく、一日のうち、十幾度か取りつ返しつ、して争つた。今では、その記念碑が、戦ひの跡へ建てられて、當時の激戦の狀が、眼に視る如く、記されてあるが、兎に角、近年の戰爭と異つて、一人々々が、拔刀を揮つての奮闘であるから、實に目覺ましいもので、あつたらう。

一晝夜の激闘をつゞけて、つまりは、官軍の勝利に歸した。それから後は、チリ／＼押しに、熊本へ押寄せ、終に四月上旬、薩軍を、大に破つて、城を、包圍から救ひ得た。今は、故人になつた、大山巖の未亡人、捨松の兄、大佐山川浩が、第一に入城して、引つゞき乃木も、はひつた。

熊本の包圍が解けて、薩軍は、川尻の方面へ退却し、それから日向へ、はひつたのであるが、熊本城を、守り得たのは、官軍の爲めに、最も有利であつた。同時に、薩軍の爲めには、此上もない不利であつた。此戰爭の大局は、之れで決した、といふても、可い。

籠城の間、一番に苦しんだのは、食物の缺乏であつた。一尾の鯉を得て、三十幾人んで、食ふた事もあり、鼠から壁土まで食ふた、といふ事が、傳へられてある位だ。その次ぎに苦しんだのは、聯隊旗の爲めであつた。それは、何ういふ事情か、といふに、城の北方に當つて、花岡山といふのがあつて、之れに身と、城内が、眼下に見える。薩軍の壯士は、聯隊旗を、長い竿に括りつけて、吶喊の聲を上げながら、花岡山の頂上で、之れを振り舞はして、城内へ見せつけるのであつた。左なきだに、西郷の徳を慕ひ、薩軍の強さに、恐れて居る、城内の兵士は、それを視て、いよいよ士氣が沮喪する。今から、聯隊旗を奪られるやうでは、此戦ひは、到底勝てるものでない、と思つて、花岡山の吶喊の聲を、聞く毎に、すつかり、力を落してしまふ。

此事については、谷將軍を始め、多くの將校は、皆苦心して、士氣の引立に努力したが、どうしても、駄目であ

つた。

戦争の始まる前に、太政官の大書記官であつた、品川彌二郎が、肥薩の方面に、不穩の形勢がある、といふので、その内狀を、偵察の爲めに、やつて来て、その儘、籠城の一人となり、多くの將卒と共に、苦勞を同じくして居た。品川は、吉田松陰の門人で、頗る霸氣に、富んだ人で、一種の負じ魂は、時に脱線の弊もあつたが、とも角、武人肌の文官であつた。兒玉は、同藩の關係で、古い友人であり、維新前後にも、俱に死生の巷を出入して、よく其長所は知つて居た。

『オイ、品川、何とか考へてくれぬか。この状態では、何うにもしようが、ないぞ』

『うむ、よし、己れが引受た』

『何分頼む』

伏見鳥羽の戦ひに『宮さんく』の歌をつくつて、大に士氣を鼓舞した経験があるので、品川は、それに倣つて、また俗語をつくりはじめた。

將校の妻も、皆な籠城して居たが、その多くは泥水を呑んで居た女で、三味線を弾く事は、何よりも上手であつた。肥後の國々、四方八方、海山かけて、ドンく響くは、何ちやいな、アレは、名高い、鹿兒島賊徒を、征伐する

のぢや、知らないか、トコトンヤレく』

皆さんく、濠の木蔭に、チラく見ゆるは、何ちやいな、アレは、己が大事の、おみやの彈丸よけ天幕ちや

知らないか、トコトンヤレく』

皆さんく、向ふの畔道、チラくゆくのは、何ちやいな、アレは、賊徒が、段山うたれて、敗走するのぢや

知らないか、トコトンヤレく』

春の闇夜に、天守の上で、キラく光るは、何ちやいな、アレは、熊本籠城のすさびに、咲かせる花火ちや、知

らないか トコトンヤレ〜」

新しくつくつた俗謡を、三味線に合はせて、水を飲みながら、浮かれ出した。兵卒にも教へて、節面白く唄ふ間に、兵卒が盛んに踊り廻る。それで漸く士氣を引立てる事が出来た。

或夫人の爲めに、品川は、斯ういふ歌をつくつた。

妾も女丈夫 ぬしもろともに 城を枕に春の闇

五

籠城に、骨の折れた事を、聞かされる毎に、乃木は、胸の痛くなるほど、辛かつた。はやく入城して、その苦しみを、共にす可き筈の、自分は、途中に失敗して、聯隊旗を失ふたのみならず、遅れて着いた、本隊と前後して、入城し得たのは、如何にも、耻かしい氣がして、それを思ふと、名状しがたい、苦痛を感じるのであつた。

今日は、谷將軍の前へ出て、小倉を出發してからの、事情を報告せねばならぬ。恐らく、乃木の生涯に於て、此時ほど、苦しい事は、なかつたであらう。谷將軍の左右には、兒玉を初め、川上操六や、其他の僚友が居て、谷と俱に、乃木の報告を、聞いて居るのでだ。

『過ぐる、二月廿一日の夜半、迎坂の一戦に於て、小官が、策戦の法、宜しきを得ざりしが爲め、終に軍旗を、敵手に奪はれたのは、何とも恐懼の至りに堪へませぬ。此儀については、すでに總督府へ、詳細の事情を認めて、差出しありますが、御沙汰を待つて、自分は、充分に責任を負う、覺悟であります』

と、軍人一流の、簡潔な語調を以て、報告し終つた。視れば、乃木の顔色は、眞ッ青になつて、手先は、ブル〜顫へて居る。

『御苦勞ぢやツた、癩疲れたらうから、充分に休養するが、可い』

谷は、極めて短い詞のうちに、情味の籠もつた事をいふた。左右に、聞いて居るものは、乃木が、河原林少尉の事には、一言も觸れずして、すべてを、自分の責任として、此報告を終つたのは、如何にも、男らしい態度である、と思つて、頗る感心して居た。乃木は、悄然として、谷の前を退き、自分の隊へ、引取つた。

『オイ、兒玉ッ』

突然、聲をかけられて、兒玉は、谷の方へ向いた。

『ハイ』

『こりや、困つた事が出来た。乃木は、死ぬかも知れんぞ』

『左やう、彼の平生から推測しますと、或は死ぬかも知れませぬが、此事の爲めに死にまするは、彼としても、めでありませうし、また、吾人と致しましても、之れが爲めに、死なし度くない、と思ひますが、何とか救ふ可き道は、ありますまいか』

『どうも、至難しい。彼の容子では、死ぬと極めて居るらしいから、人の知らぬ間に、死ぬかも知れぬ』

『小官は、同藩の關係や、同郷の友人と、いふ點からでなく、彼の如き軍將は、多く得難い、と思ひまして、どうか、此事で殺さず、生かして置いて、もう少し、大切な場合に、死なしてやり度く存じます。只だ、總督府の御沙汰が、どうありますか、それに依つては、彼も、又思ひ直すてありませう』

『イヤ、それは駄目ぢや。御沙汰の輕重に關係なく、死ぬに違ひない』

『困りましたな』

『うむ、困つた』

兩人は、丸て自分の事のやうに思つて、しきりに心配して居る。

『斯うしよう』

『ハイ』

『君に、夜間丈け預けやう』

『えッ、夜間丈け、預かるのでありますか』

『晝間は、此方から、充分に注意して、さういふ事の、ないやうにするが、夜間は、君が、預つてくれ』

『ハイ』

『そのうちに、總督府の御沙汰が、あるぢやらうから、その上で、また、何とか考へて見よう』

『それでは、夜間だけ預かりませう』

『よほど、注意せぬと、取返しのかぬ事に、なるぞ』

『御引受け、いたします』

『よし、それでは、頼む』

兒玉は、乃木の體ばかりでなく、生命までも、預かつてしまつた。城内の一室に、乃木の寝る所と、少し離れては居るが、同じ部屋で、中間に在つた仕切りは、取拂つてしまつたから、見通しになつて居る。其處に、兒玉は、寝る事にした。

乃木は、鬱々として樂まず。獨り考へてばかり居る。兒玉から、何か話しかけても、その應對は、頗る怪しい。平生の乃木とは、全く別人の如くなつて、假りに自殺はせぬ、としても、或は病を得て、死にはしまいか、と、思はれるほど、沈鬱性な人になつて、何となく、蔭が薄くなつたやうだ。兒玉は、谷へ、受合つてあるし、同郷の親みもあるし、その苦心は、一と通りでなかつた。

一日の事、乃木の姿が、不圖、見えなくなつたので、先づ兒玉が、不思議に思つた。兩人の寢室の隣に居たのは、中尉の西島助義であつた。兒玉から頼まれて、それとなく、捜して見たか、どうしても判らない。夜をかけて捜したけれど、終に捜し出す事が、出来なかつた。止むを得ず、谷將軍へも、此旨を報告した。

『そりや、困つたのう。併し、城外へ出る事は、絶対に出来ぬのぢやから、いづれ、那邊かへ、はひつて居るに違ひない。引續き探して見たら、どうぢや』

『無論、探しては見ますが、何しろ一兵卒と違つて、部下のものに、申付けるにしても、一寸困るですが……』
『それは、左様であるが、何とでも、いひやうはある。とに角、急いで探さぬと、那アいふ氣風の男ぢやから、何を
するか、判らんからな』

『小官も、それで、心配して居るのです』

『西島中尉にも、頼んだのか』

『左様です』

『可し。それでは、西島を主任として、之を命ずる事に、爲ようぢやないか』

『それが、可いでせう』

『西島を、呼んでくれ』

『ハイ』

兒玉は、すぐ西島中尉を、迎ひにやつた。

昨夜は一睡もせず、夢中になつて、探し歩いた、西島が、疲れ果て、今、詰所へ、歸つて來た所へ、兒玉からの迎ひであるから、すぐに、やつて來て見ると、谷將軍も居て、頻りに相談して居る容子である。

『御用ですか』

『うむ、少し用事がある。まあ、其れへかけてくれ』

西島は、黙禮しながら、椅子にかゝつた。兒玉は、西島に向つて、

『疲れたぢやらう』

『眠らなかつた丈けですから、大して疲れもしませぬが、どうしても判らないので困りました』

『今、その事で、谷閣下とも、話合つて居る所ぢやツた。閣下は、とに角、君を呼べ、と仰しやるから、迎ひを出し

たのぢや』

兒玉の詞の、切れるを待つて、谷は、

『御苦勞ぢやツた。もう一と息、やつて貰ひ度いが、どうぢや』

『ハイ、承知いたしました』

『何しろ、那アいふ男ぢやから、はやく捜し出さぬ、と、飛んでもない事にならう、と思ふから、迷惑でもあらうが、

やつてくれ』

『必ず捜し出します』

『どうか、頼む』

兒玉も、同時に、頭を下げながら、

『何分、頼む』

と、いふた。

『部下のもの二三入で、捜したのですが、此通り廣いものでありますから、思ふやうにならぬので、困りました』

『捜索隊を、つくる譯にもならぬが、そのつもりで、人數をふやしたら、可からう』

『閣下が、御認め下さるなら、人數をふやして、やつて見たいです』

『可し。その方法については、君に任すから、思ひ通りに、やつてくれ。要するに、一時もはやく、捜し出すのが、目的ぢや』

此命令に、力を得て、西島は、立ち上つた。

『それでは、是れからすぐ、はじめませう』

『休養もせずに、氣の毒ぢや』

『どういたしまして、これは當然の勉めであります』

是れから、西島は、部下の兵士を、それ／＼手分けして、搜索をはじめた。

加藤清正の繩張りに成つた銀杏城、その宏大なる規模は、實に驚くべきものである。城内を、自動車でかけぬけても十分以上は、要かるほどで、之を一周する事になると、足の弱いものは、三時間以上を要する、城門の石崖を見て斯んな大きい石を、那の時代に、どうして、運んで來たか、と思へば、人間の力も、存外に、強いといふ感じが起る。

西島が、自ら指揮して、二十人餘りの兵士を、山王山の、林の中へ入れた。

『中尉殿ツ』

『何ぢや』

『あれに、人影が見えます』

『何ツ、人影が見えると』

兵士の指さす方を、西島が、透し見ると、随かに人が居る。

『はやく、行けツ』

と、いはれて、兵士は駈足になつた。西島も、劍を抱へて走るのだが、林の中をかけるので、思ふやうに、足が運ばぬ。それに、氣が焦るから、頭ばかり前へ出て、足は、遅れ勝ちであつた。

七

乃木は、軍旗を失ふた時、すでに死の覺悟はしたが、身は、軍職に在る以上、相當の制裁を、うけてから、自分の覺悟通りに、す可きである、と考へ直して、入城する迄の辛抱はしたが、上級のものや、僚友の顔を、見る毎に、何となく氣が咎めて、生耻を晒して居る如く思はれ、居ても立つても、堪へ切れぬので、山王山の森林へ走つて、三日の間、絶食の儘で、坐つて居たのである。

『やア、乃木少佐ですか』

恰で、石像の如くなつて、腕を組み、眼を閉ぢた切り、乃木は、何とも答へぬ。

『オイ、貴様等は、遠くへ離れて居れ』

西島は、兵士を遠ざけて、乃木の前に坐つた。

『兒玉少佐も、非常に心配して居られる。小官も、一昨夜から、殆ど眠らずに、探して居たのです。實は、谷閣下からも、特に命令があつて、小官は、之れにか、り切りであつたが、漸く授し得て、斯んな嬉しい事はない。兎に角、一しよに歸つて下さい』

聞えたのか、聞えないのか、乃木は、西島の顔も見ず、黙つて居るばかりだ。

『さ、行きませう』

と、乃木の手を取つて、引き立てやうとした。その手を、乃木は、拂ひ退けるやうにして、

『己れは、行かぬ』

と、いふ儘、不動の姿勢だ

『何故ですか』

『……………』

『何故ですか』

『……………』

『少佐の覺悟は、よく判つて居りますが、それは、悪い覺悟です』

『何ッ、悪い覺悟ぢやと』

『斯うして居るのも、詰所に居るのも、同じ事でせう。隠れるやうにして居て、それが、何うなりますか』

『己れは、絶食して居る』

『どういふ理由で、絶食して居るのですか』

『喰ひ度くないから、喰はぬ迄の事ぢや』

『長く絶食して居れば、身體が疲れる』

『構はぬ』

『絶食をつゞけたら、結局は、死にませう』

『それでも、可い』

『死ぬ覺悟ですか』

『それは、判らぬ』

『谷閣下や、兒玉少佐の親切を、無視するのですか』

『……………』

『小官も、斯うして苦勞して居るのですから、是非、一度は歸つて下さい』

『……………』

『さア、まゐりませう』

『君は、先に歸れ』

『イヤ、一しよてなければ、行きませぬ』

『跡から、行く』

『どうせ歸るものなら、一しよに、歸つて下さい』

『君は、先に行け』

『どうしても、一しよに歸りませぬか』

『動かぬ』

『よろしい。それでは力づくでも、連れて行きますぞ』

『動かぬ』

此に至つて、西島も、普通の手段では、とても、駄目と視たから、背後を振返つて、手を擧げた。

之れを、合圖と視て、兵士は、すぐに、駈けて來た。

『貴様等は、乃木少佐を、守つてゆくのぢや』

『ハイ』

西島は、乃木の手を取つて、引立てやうとした。乃木は、また其手を拂ひ退ける。それを、西島は、強て引立てやうとした。

『貴様ツ、何をするか』

『谷關下の命令ぢや』

此一言に、乃木も、少し疑んだ。

『オイ、貴様等は、已れのする通り、乃木少佐を、連れてゆくのぢや』

『ハイ』

兵士は、此狀を視て、何が何だか、少しも判らないから、ウロ／＼して居る。

『乃木少佐の手を引け』

『ハッ』

『貴様は、背後へ廻つて、少佐を押すのぢや』

『ハッ』

兵士一同は、ひとしく乃木の體へ、手をかけて、引立てるやうにする。西島は、前から手を取つて、引ツ張る。

三日も、絶食して居たので、疲れ切つて居る、乃木は、ずる／＼と引ずられて、立上つたから、最う大丈夫と、西島は、ますます力を入れて引く。兵士は、背後から押す。斯ういふ風にして、西島は、とう／＼、乃木を、連れて歸つた。

城内の一夜

一
乃木から差出した、聯隊旗について、待罪書には、一切を、自分の責任として、河原林の事は、少しもいふてなかつた。

彼是れと、女々しい事の、書いてなかつたのは、却て之れを知るものが、同情する所以で、死者に鞭を加へぬのは、洗石である、といふて、感心するものも多く、總督府では、平生の人格も、よく判つて居るしするから、どの方面へ行つても、乃木に、同情するものばかりであつた。それが爲めのみでなく、軍旗を、奪られた事情が、詳しく判つて居たので、乃木の待罪書に對しては、『其儀に不及』といふ、御沙汰があつて、乃木は、處罰されずに、すむ事になつたのだ。

絶食の疲れも、漸く回復が出来て、兒玉からも、種々と慰められ、西島も、共に口を添へたので、乃木の心も、大部落ち付いた。

今日は、谷將軍から、迎ひが来て、乃木は、將軍の前へ出た。

『兒玉からも、種々聞いて居るが、さう獨りて焦立つても、致方のない事ぢやから、まあ、我々に任かせて置くがよい』

『段々の御配慮で、まことに感謝に堪へませぬが、どうも、御上に對しても相すまず、軍人としての面目も立ちませぬので、恐縮いたして居る次第であります』

『そりや、君としては、左様思ふのが當然ぢや。併し、我々にも、考へのある事ぢやから、輕々しく自決せぬやうに、爲て貰ひ度い』

『ハイ』

此時に、谷將軍は、一層その容姿を正して、乃木に向つた。

『只今、待罪書に對する、御沙汰が下つたから、之れを渡す』

と、いつて、總督廳よりの御沙汰書を渡した。乃木は、謹んで之れを受けて、視ると、

『其儀に不及』

と、書いてあつた。此寛大な、御沙汰に對しては、唯だ涙の外に、辭も出ないほどであつた。

『有難く、拜誦したか』

『ハイ』

『さういふ次第ぢやから、獨りて焦心するのみでなく、よほど慎重に考へなければ、不可よ』

『……………』

『軍旗の事も、之れで一段落ついて、君には、何の御咎めもないのぢやから、謂はば晴天白日の身に、なつたのぢや』

『まことに、有難い事であります』

『其處で、君には今日から、重大な役目を、託さなければならぬ』

『えッ』

『榊山中佐が、負傷して入院中ぢやから、君に其代りを命ずる、可いか』

乃木の驚きは、一と通りでなく、參謀長の代りとは、意外千萬であつた。たとへ「其儀に不及」の御沙汰は、下つたにもせよ、今迄は、之れが爲めに、謹慎して居た、身の上である。寛大な御沙汰を受ける、と同時に、參謀長に、引上げられるのは、恐縮に堪へぬ次第で、すぐ「諾」といつて、受ける氣には、なれなかつた。

「どういふ御都合か存じませぬが、小官には、餘りに重大な役目でありますから、之れは、御辭退申し度く存じまする」

「左様いふ譯にはならぬ。此方の都合で命するのであるから、之は是非、引受ける事に、爲るが可い」
兒玉も、その傍から、口を添へて、

「閣下の命令では、止むを得まい。強て辭退するのは、我儘になる。御受けを致したら、可からう」

「どうも、小官には、御受けが致しかねる」

谷將軍は、ずつと立上つて、

「乃木少佐ツ」

「ハイ」

「熊本鎮臺詰、參謀長を命ずる」

「はツ」

斯ういはれては、上司の命令で、今は如何とも致しがたい。

「有難く、御受けいたします」

「よし」

此に於て、乃木は、自分の詰め所へ、引取つた。

樺山中佐といふのは、後の海軍大將、資紀の事であるが、此時には、參謀長として、谷や兒玉と、簡城した一人で

あつた。第一日の戦ひで、重傷を負つた爲め、病院へ下つて、その跡は、兒玉が、代理をして居たのである。従つて、順序からいへば、兒玉が、その後任となる可きであるのに、却て乃木に、此役を授けたのは、どうしても、死ねないやうにとの苦心から、谷と兒玉が、考へた事らしく、思はれる。それにしても、不思議なのは、樺山が、入院して居ても、矢張り參謀長は、其儘になつて居たのであるから、思へば、變な事である。

一一

參謀長がないから、その代りに、參謀長を命ずる、といふのならば、世間並の事であるが、參謀長は、依然として、樺山が、なつて居るのに、その下へ、また參謀長を置く、といふのでは、參謀長の重複であつて、どう考へても、正則の遣方ではない。

所が、もう一つ其れと、同じやうな事があつた。

小倉聯隊には、植木の戦ひから、軍旗が、無い事になつて居る。漸々、戦ひは、進んでゆくのに、此聯隊丈けに、軍旗のない、といふ事は、他の聯隊との、釣合も取れず、また、小倉聯隊の權威にも、關する事であるから、何とかせずばなるまい、といつた、問題が起つて、終に大元帥陛下へ、願つて出たので、別に改めて、軍旗を、下し賜はる事に、なつた。つまり、小倉聯隊には、二つの軍旗が、下つた譯になる。薩軍の方へ奪られても、それは、何時か取返せぬ限りもない。その時に、軍旗が、二つ有る事になるのだ。

長官の命令では、如何とも致方がないので、乃木も、參謀長たる事は承知したが、併し、心のうちに、甚だ安らかでない。

兒玉は、毎夜の事であるから、乃木の見張りにも、疲れが出て、ぐツすり、寢込んでしまつた。廣い部屋が、二間つゞきになつて居る。その間の、仕切りを取外し、兩人は、一室づゝ占領して、別に寢て居るのであるが、瓦斯や電

燈もなく、舊式の常夜燈を用ひて、薄ぼんやりした、燈火で、透かして視るやうに、なつて居る。

乃木が、全く寢入つてしまふまでは、兒玉の方でも、狸寝を、きめ込んで、容易に眠らない。それが、幾夜もく、續いたので、兒玉にも、疲れが出て、何時か知らず、寢込んだのであるが、寢返りをうつた時、枕を外して、頭が落ちたので、不圖、眼がさめた。無心に、眠つて居る時は、全く別であるが、眼さへ覺めて居れば、乃木の事が、氣になる。そつと、透かし視た、兒玉は、夢ではないか、と思ふほど、驚いた。

乃木は、兒玉の方へ、背を向けて、軍服の儘、坐つて居るのだが、右の手には、サアベルを抜いて、左の手に、下腹を撫でつゝ、今や切腹をしよう、とする、刹那であつた。

『何を、爲るかッ』

と、叫びながら、飛びついた。

兒玉が、熟睡したのを視て、乃木は、初めからの覺悟通り、切腹して相果やう、としたのであつた。不意に、聲をかけられて『はッ』と思ふた時は、既に兒玉が、背後から組付いて、右の手首を、しつかり抑へ、左の手を、咽喉に捲いて、自分から倒れ乍ら、その勢ひで、力任せに乃木を共に、引倒した。刎ね起きやうとして、足掻くと、兒玉は兩足を以て、乃木の下腹を、挟みつけて居る。

『放せッ』

『馬鹿な眞似をするな』

『放せッ』

『放して堪まるか』

『放せッ』

『放さぬ』

乃木は、強て引放さうとする。兒玉は、一生懸命、抱付いて居る。ドクンパンタン、やつて居るうちに、乃木の死力は、動もすると、兒玉の手を、引放しかける。洗石の兒玉も、今は堪へ切れなくなつた。と、いふて、豈夫に、人を呼ぶ事も出来ず、兒玉の苦しさは一と通りでない。

『まア、待てツ』

『放してくれ』

『まア、待てツ』

『どうしても、放さぬか』

『放す事はならぬ』

『可し、田樂刺ちや』

組まれた儘に、乃木は、劍を、腹へ突き立てよう、とするから、兒玉も、斯うなつては堪まらないが『人殺し』ともいへぬ。その隣室に、寝て居たのが、西島助義であつた。あまりに、争ひが酷かつたので、西島は、眼をさまして、不圖、氣がついたから、すぐ起き上つて、廊下へ出たが、燈火がないので、徐々、やつて来て視ると、兩人は、組みうちを、爲て居る。

『やツ、何をするのですか』

西島の聲を聞いて、兒玉は大喜びであつた。

『西島、加勢してくれ』

『喧嘩ですか』

『馬鹿ツ、誰が喧嘩する。はやく乃木の劍を、奪つてくれ』
之れを聞いて、西島の眼は、本當にさめた。

『はやく、はやく』
 兒玉の叫びは、腸を絞つて出る聲だ。

二二

乃木の手に在る劍は、薄闇のうちに、光つて居る。山王山の一件に、關係のあつた西島は、はやくも其れと悟つて、乃木の前から組付いて、右の手を、しツかり押へた。

力一ぱいに、握りつめて居る、乃木の指を、一本々々引放して、劍は奪つたが、乃木は、猶ほ其れを其還さう、とするので、西島は、背後の廊下へ投げると、劍は、板縁へぶすりと、刺さつた。

之れを視て、兒玉は、抑へた手を放し、息を喘ませながら、乃木を見詰めて居る。西島が、劍を奪はずみに、乃木の揮つた拳は、西島の横髪を、厭といふほど張りつけたので、西島は、頭を抑へて、顔をしかめた。

『西島、どうした』

『一つ、ぐわんと……』

『打たれたか』

『はア』

『はずみで當つたのぢや。勘辯しろ』

『ハア』

兒玉は、乃木に向つて、

『オイ、貴様は、何うするつもりか』

『……』

乃木の答はなく、熱い涙が、頬の邊りを、流れて居る。

「貴様は、どうしても、死ぬか」

「それより外に、御詫のしようは、あるまい」

「それぢやから、切腹するのさ」

「軍人の面目も立たぬ。腹を切る外はない」

「併し、貴様の待罪書に對しては、其儀に不及と、いふ御沙汰が下つて居る。それでも、死ぬのか」

「あれは、御上の御仁恵ぢや。己れは、それを幸に、罪を免れる事は出来ぬ」

「可し、よく解つた。それでは、死ぬ」

「うむ、死なしてくれるか」

「立派に、やれ」

「左様か、有難い」

「就ては、その前に、一應聞いて置き度い事がある」

「何か」

「貴様が、腹を切つたら、失ふた軍旗が、出て来るのか」

「えッ」

「假りに、軍旗は、出て来る、として、その過失の責任は、それで済む、と思つて居るのか」

「理詰の一言に、乃木は、ぐツと、つまつてしまった。兒玉は、猶ほ言をつづける。

「貴様と、己れは、同じ明倫館で修業して、學んだ武士道に、二つはない筈ぢや。武士が過失をして、腹さへ切れば、それで、責任が解除される、といふ事は、己れは、教へられて居らぬが、貴様は、さういふ武士道を教へられたの

か。それについて、貴様の考へを、聞いて置かう』

『……………』

『オイ、乃木、答へは、どうした』

『……………』

『貴様の一本調子は、己れも、能く知つて居るが、併し、斯ういふ時には、もう少し、考へて見ろ。貴様の爲めには、谷閣下を始め、己れのやうなものまでが、これほど、心配して居るのが、貴様の眼には見えないのか、自分の思つた通りにさへ爲れば、人の事は何うでもよい、といふのか。どうせ、死ぬと決めたら、死ぬやうにして死んだら、何うぢや。過失を償ふ丈けの働きをして、それから死んでも、遅くはあるまい。死を急ぐばかりが、武士の見榮てはなからう。それでも構はぬから死ぬ、といふなら、もう止め立てはせぬ。貴様の勝手にするが、よい。只だ、己れは、貴様に、もう少し考へて、貫ひ度のぢや』

友人の情合をつくし、筋道を正した、意見をす。兒玉の眞情は、一言一句、乃木の肺腑を衝く。黙つて、聞いて居る、乃木は、溢れて来る、涙を抑へながら、身をふるはして居た。

『オイ、西島、貴様も、何とかいふてくれ』

兩人の間に、じつと、聞いて居た、西島も、茲に於て、口を開く機會を得た。

『兒玉參謀の、いはれる事は、一々御尤もであります。乃木少佐の御考へは、少し違つて居るやうに思ふ。今少し慎重に、考へて見たら、如何です』

『西島も、矢張り、俺と同じ意見らしい。オイ、何とかいはぬか』

斯うなつては、洗石に、剛情な乃木も、死ぬとはいへない。兒玉のいふ所にも、充分の道理はある。

『己れは、死ぬにも死なれないのか』

『うむ、只だ死ぬのは、大死ぢや』
 是れて、三人は、また黙つてしまつた。夜は、追々に更けてゆく。廣い部屋のうちに、三人は鼎座して、互に睨み合の形で、夜の寂しさは、増すばかりであつた。

四

無理にも死なう、とする乃木を、兒玉が、種々にして助けよう、とする。その情誼の、厚い事は、乃木にも、能く判つて居るが、一本氣の乃木は、それを押破つても、死なうとして、焦るのであつた。併し、筋道の立つた、意見には、どれほど、剛情な人でも、無外に、反抗は出来ぬ。兒玉のいふ所には、十分の道理が有つて、流石の、乃木も之には服従するの外、なかつた。

『私が悪かつた。兒玉ツ、己れは、死なぬ事にする』

『左様か、死ぬ事は、止めるか』

『今は死なぬが、併し、一度は死ぬ、此事の爲めに、必ず死ぬから、その時は、許してくれ』

『可し、解つた。それは、良い覺悟ぢや。けれども、貴様が、勝手に死ぬ事は許さぬぞ。その際には、必ず己れに告げてくれ、己れは、立會人になる。よいか、それさへ承知なら宜しい』

『それは、必ず知らせる』

『獨りて、勝手に、死ぬ事は、不可ぜ』

『宜しい』

『その時の来る迄は、貴様の生命を、己れが、預つて置く』
 と、念を押して、さらに西島に向つて、

『オイ、西島ツ』

『ハイ』

『君は、保證人ぢや』

『慥かに、保證します』

『今夜の事は、三人の間に、留めて置かう、一切、秘密ぢや』

是れて、乃木の自殺は、先づ抑へる事が、出来た。

熊本城内の一夜、斯うした事の在つたのを、爾來三十餘年間、誰も知らなかつた。尤も、秘密にして置いたから、知れぬのが本當ではあるが、よく其秘密は、保たれたものだ。

明治天皇の御大葬に際して、西島は、休職の陸軍中將として、長崎から上京した。青山の葬場殿に参列して居ると、突如として、乃木の死が傳へられたので、その驚きは、殊に深かつた。大葬の式が終ると、乃木の邸へ、駈けつけたが、その時は、既に人の出入を禁じて、隣家の木戸邸が、見舞の人を、受付ける所になつて居た。集まつて來るもの、うちで、最も乃木に、縁故の深い人達が、今は亡き人の、在りし昔を追憶して、いろ／＼の話が、はじめつた。

此時に、西島は、初めて、此秘密の顛末を、物語つた。『兒玉は、疾く逝り、乃木は、また斯くの如くなつた。此上は敢て秘密を守る必要もないから、その時の事を打明けよう』と、いつて、西島は、涙ながらに、詳しく話したので、一座の人もみな、袖を絞つた、といふ事である。

聯隊旗行方の傳説は、却々混入つて居て、容易に、其眞偽を、知り難いが、一旦高田の手に渡つた。それが村田三介から、西郷へ届られたといふのは、疑ふ可き、餘地がない。乃木が死んで、此事が問題になると、いろ／＼の事をいふものが出て來て、そのうちには、随分怪しからぬ事を、傳へたものもあるが、いづれにしても、筋道の通つた説

てなければ、絶対に信用し得るものでない。

その事實は、いづれに決する、としても、茲に乃木の心事について、實に敬服す可き事は、三十餘年の間、此事に關して、一言の辯解もせず、一切を、世の批評に任せて、自分は、之れについて、すべての責任が、あるものと決め、偏に恐縮して居た、一事である。當時の事情を、知る人は、澤山に在つたのであるから、何とでも辯解は出来るのであつたが、それに、觸れる事を避けたのは、洗石に倅い。

當の本人たる、河原林は、既に死んでしまつたのであるから、どういふ風に辯解しても、決して其れを、反駁し得るものはない。大概なものならば、之を幸に、自分に都合のよい辯解を、爲るのであるが、乃木は、一たびも、之れが辯解に努めず、世評の儘にして置いたのは、普通の忍耐では出来ぬ。

自殺に先立ち、遺書を認める際にも、單に軍旗を失ふて相濟まぬから、當時の覺悟通り、今死ぬ、とのみ書いてある。更に辯解がましい事を、書いてない所が、實に立派である、と思ふ。

兎に角、乃木の心事は、普通の軍人と、大いに違つた所があつた。

軍旗の後日

一
 聯隊旗を奪られた、前後の事情は、詳しく述べれば、未だ相當に材料もあるが、先づ此位にして置いて、これから、後日の物語りに、移る事にしよう。

乃木が、自分の不運と、諦めて、一切の責任を引受け、曾て河原林の事をいはずに、三十餘年の長き月日を、終に堪らへ通したのは、實に立派な覺悟であつた。併し、乃木も、人間の事であるから、或は、心ひそかに、河原林を恨んで、居るやうな事が、無かつたであらうか、萬一にも、其れが在つた、とすれば、折角の忍耐も、單なる意地に過ぎなかつたものとなつて、左迄に感心するほどではない、といふ事になる。

けれども、乃木には、さうした、厭な心がなかつたので、その人格は、優れて立派であるといへるのだ。然らば、どうして、左様いふ想像が出来るか、其れについては、一條の物語りがあるから、之を述べて、乃木の人格の、高潔なる所以を、廣く傳へて見たい、と思ふ。

明治四十四年の大演習は、九州に於いて行はれた。久留米を大本營として、筑前筑後の二國に跨つて、實戦にも等しいさかんな演習があつた。その時に、乃木は、陸軍大將として、御供の列に加はり、御前近く、仕へて居た。

一日の事、演習も、大體終つたので、一同の軍將は、御暇が出て、一日の静養を、爲る事になつた。近い所に家の

在るものは、一夜泊りて歸るものもあり、また、好きな酒に、酔ひを、求むるものもあつた。

乃木は、獨り飄然として、豊前の小倉へ、やつて來た。小倉は、自分が、聯隊長を、勤めて居た所で、思ひ出の多い土地である。此時は、馬喰町に三木傳吉といふものを、ひそかに、訪ねて來たのであつた。

三木は、西南戦争の時、乃木の從卒をして居て、非常に可愛がられて居たので、長く其恩を忘れず、年始狀と、寒暑の見舞には、必ず音信を怠らなかつた。普通に可愛がられた、といふ丈では、さう長く忘れずに、音信を爲る筈はない。乃木の人格の、どこかに觸れて、深く感激した所が、あつての事ではあらうが、乃木の身に取つては、頗る嬉しく、感じて居たのである。

『オイ、三木ッ』

門口で、聲をかけるものがあるから、傳吉は、之に應じて、

『誰だい、人を呼捨てにして……』

『オイ〜』

『誰だ、といつて居るぢやないか、誰だい』

『己れだよ』

『えッ、己れだつて……己れとは、誰の事だ』

『鳥渡出て呉れ』

『五月鯉いな、姓名も、いはないで……』

口小言をいひながら、傳吉は、さつと、障子を開いた。その外に、粗末ではあるが、格子戸が嵌まつて居る。格子を透して見ると、軍服を着た人が、立つて居るから、

『どなたですか』

「やア、久しかつたのう」

「えッ」

傳吉が、不審と驚きに打たれて居る間に、格子を少し開けて、乃木は、ニヤリと笑つた。

「ヤツ、閣下でしたか」

傳吉は、狭い土間へ飛下り、ガラリと、格子を開けると、其儘軒下へ坐つた。

「お久しう御座いました」

「やア、久し振りぢやツた」

「何時も御機嫌よく、追々の御昇進で、斯んな目出たい事は、御座いません」

「まア、兎に角、話して行く事にしよう」

「御冗談を、仰しやつてはいけません。斯んな汚ない家へ……」

「己れは、お前の家を、見に来たのではない。お前に、逢ひに来たのぢや」

「それでは恐れ入ります。私の方から、どこへでも参ります。御沙汰の御座います所へ参りますから、どうか、左様

願ひます」

「己れは、お前の所へ来たのぢや。とに角、入れて呉れ」

「それは、困ります」

「人が尋ねて来たのに、断るのは失禮ぢやらう」

「へイ」

「さア一緒に、はひらう」

乃木は、三木の手を取つた。

『それでは、却て恐れ入ります』

『左様いふ事を、いふて居ないで、一緒にはひつたら、どうぢや』

『へい』

傳吉も、斯うなつては仕様がなから、

『それでは、御免下さいませ』

一と足先にはひると、後から乃木も、はひつて来た。

一一

狭くて、汚ない座敷へ、平氣で坐つて居る乃木。その前に、兩手をついた、傳吉は、

『その後は、長い事、御無沙汰をいたしましたして、何時も、書面は差上げますが、御訪ねいたしますには、其日穢きの

悲しさに、思ふやうにまゐりませんので、ツイ／＼書面丈で、御免を蒙つて居りました』

『お前が、絶えず手紙を寄越してくれるのは、已れも嬉しく思つて居る。實は、其都度に、返事を出す可き筈ぢやが、

動もすれば缺禮勝になつて居た。何分にも忙しいので、思ひながらも、御無沙汰に過ぎたのぢや。今日は、良い機会を得て、

久し振で、逢ふても見度く、且は無沙汰の詫を、かねてぢや。今後も、缺禮勝ちに、なるかも知れぬが

それは恕してくれ』

『飛んでもない事で、私は、御返事を戴き度いと、思つて、御音信を、申上げるのでは御座いません。那の節に、

一と通りならぬ御鼻根を、うけましたので、その御恩を忘れぬ爲めに書面丈は、差上げて居りましたので、それ

をすれば、私の氣がすみますので御座いますから、今後も、度々さし上げますが、決して御返事には及びません』

『左様いはれると、一層恐縮するが、まあ、互に忘れずに居れば、それが、何よりぢやよ』

たとへ、御世辭にもせよ、長上の人から、斯ういはれると、誰にしても、嬉しいものだ。況して、乃木のやうに、態々、やつて来て、心からの挨拶をされたら、之れを聞いて居るものゝ、身に取つて、どんなに嬉しいか、判らない。

『今日は、どちらへおいでになりましたのですか』

『お前は、不思議な事をいふのう。お前の家に、来て居れば、お前の家へ来たのではないか』

『へへー、私の家へ、わざ／＼おいで下さいましたのですか』

『左様ぢやよ』

傳吉は、涙を拭きながら、

『あ、あ、ありがたう存じます』

『その後は、何うぢやつた』

『何時も／＼、貧乏暮して、まことに不甲斐ない事で、御座います』

『人間は、貧しく暮しても、悪い事をしなければ、よいものぢや。貧富は、その人の運不運にも依る、不義の富貴は却て避ける方が正しい。世間を憚りながら、巨萬の富を、有して居ても、生甲斐はないよ』

『有難う存じます。さう仰しやつて戴きますと、貧乏が光るやうに、思ひます』

『誇る可き事でもなく、また恥可き事でもない』

『へい』

『お前には、子供があるか』

『武雄と申しまして、一人御座います』

『そりや、結構ぢや』

『今日は、妻が居りませんので、まことに残念で御座います』

『子供も、居らぬのか』

『へい』

『それは残念ぢや、歸つたら宜しういふてくれ』

『申聞けます』

乃木は、話をして居るうちに、家の状態から察して、三木の窮迫を知つた。其處で、豫て用意して來た、紙包を、懷裡から出すと、

『これは、土産ぢや』

と、いつて、傳吉の前へ置いた。

『さういふ物を戴きましたは、却て恐れ入りますから、これは御辭退申します』

『お前の好きなものと思つたが、何分にも、長い間の事で、お前の好き嫌ひが判らない。金を包んで出しては、まことに失禮ではあるが、どうか、好きなものを買ふてくれ』

『それは、困ります』

『まア、出したものぢやから、取つておいてくれ』

『左様ですか、それでは、御思召に従つて、頂戴いたします』

『さ、どうか、取つてくれ』

『有難う存じます』

傳吉は、紙包を戴いて、すぐ佛壇に供へた。其容子を見て居て、乃木も、ニコ／＼して居る。

それから、暫くは、別れて後の話に、花が咲いた。乃木は、思ひ出したやうに、

『那の時の河原林の妻は、未だ達者で居るか』

『ヘイ、御達者で御座います』

『今日は、尋ねて行きたいから、案内をして貰ひ度い』

『宜しう御座います。囈喜ばれる事とせう』

『それぢや、行かうか』

『ヘイ』

乃木は、傳吉の家を出た。

一一一

河原林の妻は、名を徳子と謂ふて、未だ歳も若かつたが、長い間、寂しい孤閨を守りつゝ、たゞた一人の男兒を、育て上げ、良人が、犬死同様の、最期を遂げたのを、深く慨いて、その男兒を、軍籍に入れて、再び戰場に立たせよう、と、堅い決心をした。

その志を遂げるまでには、幾多の苦勞もあつたが、遂に目的を達して、明治四十三年には、その子が、陸軍少佐に昇進して、小倉の師團に、勤める迄に、なつた。併し、此事は、深く秘して、乃木には知らせなかつた。年月の經つて従つて、當時の事は、全く世間から忘れられ、聯隊旗の事は、誰一人として、之れを語るものはなかつた。

小倉の師團に、河原林少佐の在る事は、能く知つて居る人でも、その亡父の事を、詳しく知るものは、なかつた。乃木は、傳吉の案内で、今、河原林の邸前まで來た。

『この御邸が、河原林様で御座います』

『可し。もう判つたから、お前は歸れ』

『私から、奥様へ申上げませう』

『イヤ、お前が居ては悪い。己れが、一人で逢ふから、お前は、歸れ』

『左様ですか、それでは失禮いたしますが、久留米の方へお歸りは、何時の汽車に、なりますか』

『用事の都合で、何時になるか判らない』

『いづれ、今晚の汽車で御座いませう』

『それを聞いて、何うするのか』

『停車場まで、御送り申し度く存じますので……』

『その必要はない』

『それでも……』

『送迎される事は、己れが嫌ひだ、といふ事、お前は、知つて居る筈ぢや』

『ハイ』

『決して送る事は、ならぬぞ』

『ハイ』

『さ、はやく行け』

『それでは、これで失禮いたします』

『うむ、いろ／＼お世話ぢやつた』

傳吉は、止むを得ず、乃木に別れて、振り返りつゝ、歸つてゆく。後に残つた、乃木は、只一人、しばらくは、河原林の門札を、ぢツと見つめて居たが、すツと入つて、玄關の前へ立つた。

『たのむ、たのむ』

『ハイ』

小間使の女が、出て来て、

「入らツしやいまし」

「河原林さんは、當家ぢやのう」

「ハイ」

「昔の奥様は、お居てなさるか」

「……………」

その女には、乃木のいふ事が、よく解らなかつたらしい。

「や、これは、私が悪かつた。昔の奥様では、解るまい。私のいふのは、御當主の若奥様でなく、亡くなられた御先代の奥様の事ぢや」

「御隠居様の事で御座いますか」

「さうぢやよ」

「それならば御居てなさいますが、あなた様は……………」

「乃木といふ、老爺が来た、といふて下さい。御承知の筈ぢや」

「ハイ」

小間使は、眼を圓くして、いそがはしく奥へ、かけ込んだ。

「奥様々々」

徳子は、今頻りに、古い衣物を引出して、彼れ是れと、振り分けて居る所で、あつた。

「何ですね。大きい聲を出して、もつと静かになさい」

「ハイ」

「お人が見えたやうだが、どなたでした」

「乃木大將様が、お見えになりました」

「えッ、乃木様が……」

「昔の奥様に、逢ひ度いと、仰しやつて、おいてなさいますが、どういたしませう」

「妾に……」

「ハイ」

「それは、まあ、お珍しい」

と、いつて、立上がらうとしたが、急に顔の色が變つて、胸を抑へた。元の席へ、その儘着いて、しばらく、考へに沈んだ。

如何に、歳の若い時分でも、一生を托した夫が、どうして死んだか、といふ事は、知つて居る。その夫の過失の爲めに、長く迷惑をかけて居た、乃木が、来てくれたのであるから、すぐにも逢ひ度いと、思つたが、昔の事を思ひ出すと、急に逢ふ氣にも、なれなかつた。

が、併し、今更に、逃げる事も、出来ぬ。やがて、心を取り直して、しづかに立上つた。

四

徳子は、支關の敷臺へ、兩手をついた。

「おいて遊ばせ」

乃木が、

「奥様ぢやつたか」

「段々の御出世は、蔭ながら承知は、いたして居りましたが、御無沙汰に打過ぎまして、申譯も御座りませぬ」

「イヤ、それは御互の事で、私も、無沙汰に過ぎて、相すまぬ」

「あなた様が、東京へ、御轉任なされてから後も、那の事につきましては、一日も、忘れた事は御座りませぬ。河原林の不都合から、あなた様に、強い御迷惑をかけまして、まことに相すまぬ事と……」

「迎坂の一條を、徳子は、語り出した。乃木は、之れを抑へるやうにして、

「奥様、その話は、止さうてはないか。私は、その辨疏を、聞きに來たのでない。久し振て、訪ねて來たのぢやから、互に面白い事を物語つて、昔を偲ばう、と思ふ」

と、いはれて、徳子も、口を噤んだ。

「今日は、會ま一日の御暇が出たので、此方へ、やつて來て、奥様も、知つて居られるぢやらうが、三木傳吉を訪ねて、三木の案内で、實は御訪ねいたしたのぢや。那の時分の知人も、半ば故人になつて、親しくして居たものも、大分に減つては居るが、それでも、何となく小倉は、私の身に取つて、忘れられぬ所ぢやよ」

「此頃では、御酒の方は、いかゞで御座いますか」

「晚餐の時、一本と極めてある」

「昔は、大層飲し上つたやうに、承知いたして居りますが、昨今は、御節酒で御座いますか」

「イヤ、節酒といふ次第でもないが、歳と共に、量も減じて來たのぢや。那の頃は、未だ元氣もあつて、人に負まいの一心から、幾分か無理に、飲んだ事も、あるのぢや。それから、飲んだ勢ひで、暗い場所へも、行つた事がある。今から其れを思ふと、恥かしい氣がする位ぢや。ハツハ、、、、」

「いろ／＼、伺つて居ります」

「さうか、そりや、困つたのう」

話は、それからそれへ、と移つて、小倉在勤の昔を語つて、頗る楽しさうであつたが、乃木は、不圖、思ひついたりやうに、

『那の時分に、可愛い御兒さんのあつた事を、私は、未だ覚えて居るが、今、何うなされたか』

『……………』

子供の手を聞かれると、急に徳子は、俯向いてしまつた。

『那の御兒さんは、何うなされた』

『……………』

『何故、黙まつて居られるのか』

『……………』

『いくら黙つて居られても、私は、よく知つて居る』

『えッ』

『あんたは、なぜ隠しなされる。どう隠しても、知れる事ではないか』

『隠し立てを、いたしました、相すみません』

五

可愛い一人兒を、軍人にした事は、飽迄も、乃木に、隠して居たが、斯う知られてしまつては、もう隠しても、無駄である。

『今までは、隠し立てをいたしました、が、實は、師團の方へ、出て居ります』

『奥様が、私に、隠す心のうちは、私に、能く解つて居る。けれども、私は、却つてそれを、嬉しく思はぬ。何故、

「はやく打明けては下さらぬ」

『まことに、すみません』

「私が、それを知つたのは、三、四年前の事ぢやツた。同僚の一人が、九州の巡視を終り、東京へ歸つて來てから、私への話で、初めて知つたのぢや。河原林の遺子が、小倉の師團に、出て居る。而も、少佐に進んで、現に勤めて居る、と聞かされた時には、私も、一時は、意外に思つた。それと同時に、何故、奥様が、其事を、私へ、知らせてくれなかつたのか、と思つて、實は不満の感じも起したが、よく考へて見ると、奥様の心が、私にも解つて、それからといふものは、何となく涙が出て來て、その日は、泣いてくらしした。

女子が、三十年の貞操を守る丈でも、想應に辛い事は、あつたらう。その上、亡夫が、那アした無慘な最期を遂げて見れば、とても、一人の遺子を、軍人にする心の起るものでない。それにも拘らず、河原林の奥様は、此二つの辛い事を忍んで、終に押通したのは、偉いものぢや、と、斯ういふ事を、私は、くり返しく思ふて、一日を、泣いて送つたが、私しよりは、河原林が、さぞ墓の下で、喜び泣きに、泣いて居るぢやらう、と、其れを察すると、私は、今でも涙が出て來るのぢや。

奥様、あなたは、實に偉い人ぢや。よく斯ういふ覺悟を、持つてくれた。私は、實に嬉しい。』

眞情から、絞り出す涙に、聲も顫へて、乃木は、頻りに徳子を激賞する。徳子も、今は堪へかねて、泣き伏した。自分、長い間に味はふた苦勞を、今になつて、乃木から賞められ、それが嬉しくて、泣くのであつた。

『有難う存じます。あなた様に、さう仰しやられますと、妾は、嬉しくて涙が止まりませぬ。今迄、隠し立を、いたしました事は、どうぞ御恕下さいませ』

『あゝ、私は、既に怨まぬ。奥様が、之れを隠して居たのは、却て美しい心からであつた、といふ事も、よく解つて居る。只私は、奥様の心が、如何にも雄々しいのに、感心して泣くのぢや』

「ハイ、有難い御辭を戴きまして、妾の身は、もう何うなりましても、此世に、思ひ置く事は、更に御座いませぬ」
「それは不可、今から左様いふ弱い事を、いふては不可、これから未だ、奥様の役目はある。若主人の働きを見ぬ間は、もつと強い心を、持つて居て下さい」

「恐れ入りました」

秋の日は、既う寂しく落ちて来た。乃木は、時計を見て、

「おう、大分時間もすぎた。私は、明日の勤務もあるから、はやく歸らねばならぬ。是れて、失禮をしよう」

「只今、つまらぬ物では御座いますが、一口、さし上げ度う存じますから、しばらく御待ちを願ひます」

「それは、折角の事であるが、堅く辭退します。時間の都合さへよければ、此方から所望もするが、今は、其餘裕がないから、御免蒙る」

「さういふ御都合では、強て申上げるのも、失禮で御座いますから、差控へる事に、いたしませう」

「どうか、左様して下さい。今度は、急いで居る爲めに、若い主人には、御面會して行けぬが、只一言、傳へて貰ひ度い」

「どういふ事で御座いますか」

「既に少佐に、なつて居らるゝ人に、くどい事は申さぬが、若い主人は、外の人と違つて、御上への忠義も、國家への奉公も、すべて二人振り、勤めなければならんのぢや。亡き父のと、自分のと、一つの體で、二人振り勤めるのぢやから、骨も折れやうが、しつかり働いてくれと、斯ういふて下さい」

「確に申聞けまする」

「これで、私も、すつかり雲の晴れたやうな、心になつた。や、これは失禮した」

と、乃木は、立上がつた。後から送る、徳子も、晴れやかな顔をして、支關で別れた。

乃木は、其晩のうちに、久留米へ歸つて、翌日からは、御前勤めに忙しい。乃木の人格は、よく此一事に依つて、窺ふことが出来る。徳子の心の立派であつた事も、廣く人に傳へる値打がある。只惜い事には、河原林少佐は、その後、死んでしまつた。

六

聯隊旗を、奪られた事情でさへ、今になると、種々の浮説があるやうに、之れを取戻した事に就ては、いよく誤りが多く傳へられて居る。

現に、その誤傳として、最も甚だしいものは、野津鎮雄が、薩軍の群がる中へ乗込み、十數名の壯士を斬つて、奪ひ返したものと、傳へられた事である。之れは其頃、官軍のうつた電報として新聞にも掲載され、繪双紙屋の店先には、一枚繪になつて、飾られたほどで、野津將軍の勇名は、兒童走卒も、之れが爲めに、殆ど知らぬものがない、といふほどになつた。

けれども、之れは、全く誤傳であつて、官軍の電報として、どういふ理由で、斯かる誤りを傳へたものか、實に不審の至りであるが、當時の東京日日新聞には、その電報が掲げてあり、之れを取扱ふたものは、條野探菊といふ記者で、末松謙澄も、それを掲載するには、關係のあつた一人である。

『去四日、午後の戦争は、官軍、高瀬より二手に分れ、一手は、河内通りを進撃し、大に賊軍を破り、勝に乗じて、高橋に至り、此軍に、少佐聯隊旗を、賊に奪はれけるを、野津は遙に之を見て、馬に鞭を加へ、藪地に、敵中に馳入り、遮る敵六人を、斬つて落し、難なく旗を取り返し、徐々と、味方の陣へ、引返したる態は、實に日覺しき働きなり、一手は進んで、植木を取る。山鹿口の戦ひは、勝敗未だ決せず』
是れが、其全文である。

電報の文章としては、餘りに小説染みて居るが、これは取扱つた人が、條野であるから、文飾したものと見て、差支あるまい。それにしても、靜かに考へると、疑ふ可き事はある、その電文にある『去四日』といふのは、三月四日の事で、河原林が、聯隊旗を奪られたのは、二月二十一日の夜半であるから、日に相違がある。

殊に、二月二十一日頃には、官軍の本隊は、未だ戦地へ着いて居らないから、三月四日の頃は、例の田原坂の戦ひで、迎坂の戦ひとは、關係がなかつた。

また、單に野津が奮戦した、とあつても、兄弟のうち、何れかも明かでない。當時の本隊は、第一旅團長は、三好重臣少將であつて、最も早く、戦地へ着いたのであるが、第二旅團長は、野津鎮雄少將で、その弟の、野津大作は參謀長であつた。大作は、後の元帥、道貫の事で、兄弟ともに、強い人ではあつたが、どちらも、迎坂の戦ひが、すんでのち着いたのであるから、乃木の聯隊旗には、全く關係のないものと、見るのが、至當であらう、と思ふ。

野津の奮戦して、取返した旗といふのは、第二旅團中の、或聯隊が、敵に敗られて、旗を奪られやうとしたのを、野津が見て、奮闘の上、取戻したのではあるまいか。さういふ風に、想像して見れば、此戦ひは、田原坂の方であつたといふ事になる。錦繪にまで描かれて、立派に世間から、認められた事ではあるが、その外に、官軍の記録にもないのを以て、之れを判断すれば、野津に對する傳説は、全く二つの事實を混同して、取扱はれた結果と、見る可きである。

然らば、乃木の聯隊旗は、どういふ事に、なつたのであらうか、といふ疑ひが、起つて来る。其處で、私は、之から其真相に觸れて、遠慮のない、素ツ破抜きを、やつて見たのである。

たつた一人の西郷を、日本の陸軍が、總がかりで攻めつけ、而も、其の戦ひは、二月から九月迄の長いものであつた。陸軍の武器が、今のやうなもので、なかつたのは、固よりいふ迄もないが、それは、西郷の方でも、同じ事である。

舊式の大炮と、漸く習ひ覺えた、兵士の小銃としては、薩軍を威嚇するに、餘りに力の弱かつたものか、薩軍の壯士はいつも、砲煙の下を、潜つて來ては、官軍の手元へ斬込んで、しきりに蠻勇を揮つたものだ。

此拔刀隊の働きには、官軍の惱まされる事が、一と通りでなく、とても、小銃をうつ事を、覺えたばかりの農兵に之れを防げる筈がない。庭の築山にひとしい、田原坂の奪取戦に、數日を費した事も、實は、其れが爲めであつた。苟も、第二旅團の參謀長たる、野津大作でさへ、此戦ひには、重傷を負ふた位で、參謀長が、眞ツ先に飛び出す、といつたやうな、苦しい戦ひは、つまり、敵に拔刀隊のあるが爲め、之れに對抗す可き、有力な拔刀隊を、官軍に於ても、編制しなければならぬ、といふ事になつて、警視廳が、之れを引受ける事になつた。當時、有名なものゝ一つであつたが、之れを徵募巡査と稱したのである。

七

徵募巡査は、多く奥羽舊藩の、士族であつた。明治維新の際、薩藩の爲めに、征服された怨みは、骨に沁みるほどであつた。政府は、それを利用して、拔刀隊編制の必要上、巡査の募集を、爲たのである。

薩藩の兵が、奥羽十一州を蹂躪した、といふても、單に薩藩丈けが、それに當つた譯でなく、長州藩も、多く加はつて居た。その他の藩からも、皆出兵して居たのである。獨り薩藩のみを怨むのは、些と可笑しいが、併し那の時の戦ひは、薩藩が、主腦になつて居たのであるから、どうしても、薩藩へ、その怨みは、集まつてゆく傾きがあつて、いよゝ西郷が、旗上げをした、と聞くと、自ら進んで、戦地行きの巡査を、志願したものとさへあつた。

斯うした事情で、徵募巡査なるものは、忽ち滿員の盛況で、思ひ通りの拔刀隊は、その編制を終り、戦地へ向つてくり出して行く。

兵庫縣の加西郡北條と、いふ所に、赤木義彦と、いふ人があつて、劍術が、頗る上手であつた。此時分に、東京へ

出て居たので、屢々、警視廳へも、やつて来て、巡查を對手に、仕合をするが、誰一人として、赤木に、勝てるものがなかつた。師範役をして居る人には、及ばぬとしても、それ以下のものは、赤木の技倆に、及ぶものがなく、その事は、廳内でも評判であつた。

當時の大警視は、例の川路利良であつた。此人は、元來、西郷の爲めに、引立てられたのであるが、却て大久保利通の手に屬して、重く用ひられた關係から、後には、全く大久保派の人に、なつてしまつた。殊に、征韓論の一條から、西郷派の人々は、多く辭職して、薩摩へ歸つたにも不拘、川路は、政府へ残つたので、ひどく辭職連から睨まれて、人非人の如く、いはれた。けれども、川路は、自分の所信に依つて、征韓論に反對し、従つて、政府にも残つたのであるから、國元の人が、何といはうと、それに頓着なく、相變らず大警視として、警察事務の改善には、よく努力して居た。

その頃の大警視といふのが、今の警視總監であつて、つまり、川路は、最初の總監であつた譯だ。警視廳の傍に、その銅像は、建てられてあるから、恐らく此人を、知らぬものはあるまい。

西郷に背いたものは、獨り川路ばかりでなく、實勇の從道も、その一人であつた。黒田清隆、川村純義、大山巖、高島鞆之助、樺山資紀、野津銅雄、同道貫、その他にも多く居るが、川路が憎まれたほど、憎まれたものは、なかつた。

私學校の壯士が、一時に蜂起した原因は、外にも、いろ／＼あるが、その口火を爲したものは、川路であつた。

明治九年の暮から、翌年の春へかけて、警視廳の警部が、十數名といふもの、歸國して居る。

安樂兼道、高崎親章、園田長輝、中原尙雄、川上親晴、末弘直方、菅井誠美その他のものが、種々の名義で、鹿児島へ、歸つて行つた。

西南の雲行が、甚だ險しくなつて來たので、その内狀を、搜る爲めの歸省であつたが、一時に多くの警部が、歸つ

て來たのは、少し變だ、といふ疑ひを、私學校の壯士が抱いて、それから、手を分けて、警部連の舉動を、搜りはじめた。

その間に、感情の衝突もあつて、追々に、双方の關係が、面倒になつて來た。左様いふ事になると、警部の眼には何を見ても、疑はしくなる。壯士の方でも、警部等の舉動が、ますます怪しい、とあつて、終に中原尙雄が、眞先に縛られた。

鹿兒島附近の警察署には、西郷派の人ばかりで、出て居て、月給は、政府から、貰つて居るが、心は、西郷の爲めに、盡して居るのだ。それであるから、警部連を、縛るやうな事にも、なつたので、縛る役の人が、却て縛られたのだから、妙ではないか。

訊問の結果は『西郷を、暗殺の爲めに、歸國したのである』といふ事になつて、それを申付けたのは、『大久保と、川路の二人である』と、決めてしまつた。乃て血氣の壯士が、承知しない。怪しからんのは、政府の奴等であるから、此上は、政府を倒してしまへ、とあつて、此に恐る可き、暴擧は起されたのである。

斯うした事情から考へると、川路の取つた手段が、甚だ良くなかつた、ともいへる。兎に角、川路が、此事件について、全く責任がない、といふ事は、出来ぬ。

従つて、戦争になつてからは、澤山の巡查隊を送つて、陸軍の手助けも、爲て居る譯で、殊に、拔刀隊の編制については、容易ならぬ骨折りであつたが、拔刀隊の巡查も、實に能く働いた、といふ事である。

八

警視廳に、劍術の師範を勤めて居た人は、多く在つたけれど、上田右馬之助といふ先生が、一番に強かつた、と聞く。

此人は、維新前に、銀座の松田で、天童の織田の家臣を三人、一刀づつで斬倒した、といふほどの達人である。松田も潰れてしまつて、酒造火災保險會社になつて、居たが、昔は評判の料理店、松田の跡であつたが、それも、大正の震災の時、すべて焼いてしまつた。銀座の本店は倒れても、淺草雷門の支店は、相當に榮えて居たが、これも先頃、銀行に早替りしてしまつて、名物の一つは、無くなつた譯だ。

田舎から、東京見物に、出かけた人が、銀座の松田へ行くのは、此上もない、楽しみになつて居た位、松田の名は地方へ、強く響いて居たものだが、それは、當だ料理が安くて、家が大きかつた、といふばかりでなく、上田の三人斬りから、評判が高くなつた、爲めである。

一日、川路は、上田を呼びにやつて、

『どうぢや、戦地へ行つてくれる事は、出来ぬか』

と、相談をかけた。

『どういふ、御用ですか』

『徵募巡查を、抜刀隊に編制して、送る事になつたが、その指揮をするものがないので、君に依頼したいのぢや』

『私は、御免蒙り度い』

『何分にも賊軍には、抜刀で斬り込む一隊があつて、之にはしばし官軍が、惱まされる所から、新たに巡查の抜刀隊をつくつて、差向ける事になつたのぢや。皆一流に達した武藝者であるから、之を指揮するものも、その道の達人でなければ、容易に抑へてゆく事は出来ぬ。其處で、君ならば適任である、といふのが、誰の見る所も同じで己どんも、左様思ふたから、相談に及んだのぢや。これは是非、引受けて、貰ひ度い』

『どうも、私には、此御請はいたしかねまする』

『そりや、何ういふ理由か』

『外の戦ならば、私から進んでも、遣つて戴きますが、西郷先生を、對手の戦さでは、行く氣になれませぬ』

『ふふーむ』

『私は、御一新前に、諸國を修業して廻りましたが、鹿児島へ、まゐりまして、西郷先生には、一通りならぬ御世話になつて居りますので、どうしても、先生に、手向ひはいたしかねます』

『西郷先生には、己どもも、世話になつて居る。己どもの外にも、政府に、残つて居るものに、同じ關係のものは、澤山にある。併し、それは私事であつて、先生は、今や叛逆人、といふ事に、なつて居るのぢやから、平生の事はしばらく忘れて、國家の爲めに、先生を、討つやうな事になつたので、之れは止むを得ぬ事である』

『それは、あなたの御考へで、私の考へとは、少し違つて居ります。私は、一たん御世話になつた以上、どうしても先生に向つて、腕立てする事は、出来ませぬ』

『國家が重いか、それとも、西郷先生が重いか、よく考へて貰ひ度い』

『私も、國家の重い事は、よく知つて居りますが、併し、私人の恩も、感ぜずには居られませぬ』

『それでは、どうしても行かぬといふのか』

『ハイ』

上田の決心は、却々に堅い。川路が、いかに論しても肯ぬから、

『若し、政府が命令したら、君は、何とするか』

『たとへ、政府の命令でも、参りませぬ』

『叛逆人と、同じ取扱ひをうけても、宜しいといふのか』

『………』

『君は、一切の私情を忘れて、ぜひ行く事にしてくれ』

『宜しい、それでは参りませう』

『うむ、行つてくれるか』

『その代り、西郷先生の御顔が、見えました時は、すぐ叛くかも知れませぬから、それだけは豫め御承知を願ひます』
 是れには、流石の川路も、驚いた。そんな事をされては、堪まらないから、上田を遣はす事は止めたが、それに代る可き、人を得たいので、

『君の志は、能く解つたから、此上は、強て勧めぬが、君に代る可きものを、選んでくれ』

『宜しい、それは、御引受けいたします』

『急ぐのぢやが、心當りはあらうか』

『赤木義彦といふものが居ります。胸前は大丈夫ですから、之れを御世話いたませう』

『うむ、那れならば可からう』

『御承知ですか』

『鳥渡知つて居る』

『早速、本人へ話して、御返事申上げませう』

上田の紹介で、赤木は、川路に呼ばれて、此任を引受ける事になつた。

九

赤木は、劍術の達人で、あつたばかりでなく、戦も上手であつたから、綿貫警視には、非常に眼をかけられた。大浦兼武も、未だ中警部位で、中尉の待遇をうけて、戦地に出て居た。赤木と同じやうに、巡査を率ゐて、各地に轉戦して居たが、位地は、上級であつた。

初め、赤木は、小隊長として出征し、大口方面の戦ひに負傷して、一時は、東京へ引上げて、来たが、更に自ら請ふて、今度は、大浦中隊長の下に、小隊長として、鹿兒島へ向つた。赤木が、二度目に出かけた、際は、薩軍も力盡きて、日向から鹿兒島へ引返して、城山の岩崎谷へ、立籠つて居る時であつた。

其處で、例の聯隊旗は、どういふ事になつて居たかと、いふに、高田露の手から、村田三介の許へ送り、村田は、之れを西郷に届けたのであるが、西郷は、熊本城の包圍が敗れて、日向方面へ退却する事にした。然るに、村田は、川尻から鍋田へ、退く時の戦ひに、重傷を負ふて、それが爲めに、斃れた。絶命の前、部下のものに遺言して、旗は、鹿兒島の自宅へ送らせ、妻の佐和子に、その保管を托した。此事は、すべて秘密のうちに、取扱はれたので、多くのものは、旗の行方を、知らなかつた。

只一人の、西郷の爲めに、二月以來の悪戦苦闘をつゞけた、薩南の健兒は、最後の勇を奮つて、鹿兒島に戦つた。官軍は、今度こそ、西郷を逃がしてはならぬと、強い覺悟で、全軍を以て、鹿兒島を包圍した。日向の永井村へ、薩軍を追ひ込み、西郷の首は取つたものと、早くも安心して居たのを、薩軍に敗られて、可愛嶽を堅めてゐた、近衛兵は、散々に打破られ、とうとう西郷を遁してしまつたのであるから、今度こそはと、力むのは無理はなかつた。それにしても、疲れ果た、薩軍の敗殘兵、僅に四百か五百を、廿日餘りも持て餘したのであるから、薩軍の強いのは偉いが、官軍の弱さは、寧ろ馬鹿々々しいほどであつた。

乍併、如何に強い、といふても、その力には限りがある。疲勞、困憊、その上に、彈藥も、缺乏を告げ、食料さへ、意の如くならぬ。傷つたものは、其儘、戦線に立ち、病めるものも銃を杖にして戦ふ、といふ有様で、今に、只空しく戦ふて、空しく死を待つのみで、前途には、何等の光りも見得ぬ。全く意地と我慢を以て、日を送るにすぎなかつた。

九月廿四日、西郷は、流彈に當つて、終に斃れたので、殘黨は、互に相擁して、勇ましい自刃を遂げてしまつた。

兵を擧げたのが、二月の中旬、いよ終焉を告げたのは、九月の下旬であるから、其間二百餘日の、長きに及んだ。多くの人を殺傷し、少からぬ國費を失ふて、漸く勝ち得たが、それでも、國民の、西郷に對する感情は、頗る善かつたのであるから、甚だ不思議である。

西郷の死に依つて、戦争は終局になつたが、失ふた聯隊旗はどういふ事に、なつたか。それを知るものがなく、戦ひに勝つても、陸軍の惱みは、此一事に有つた。

官兵は、それづくに、日割を定めて、引上げる事になつた。徵募巡查も、同じやうに、東京へ引上げる、日が近つた。赤木警部は、綿貫警視を、訪ねて來た。

「オー、赤木警部か、今度は、酷く骨を折らせたが、まア、是れで一切は片付いたといふものぢや」

「戦争は、片付いても、未だ爲す可き事が一つ残つて居ります」

「それは、何ぢや」

「聯隊旗の行方が、さらに判らないではありませんか」

「是れまでに、手を盡して、それでも判らないのぢやから、どうも、止むを得ぬ」

「その判らぬうちは、容易に引上げる事もありません」

「聯隊旗の行方が判らぬ、といふて、まさか軍隊を、引上げぬ譯にもなるまい」

「併し、失ふた聯隊旗が、どうなつたか、といふ事を、確めずに引上げては、官軍の威信が立ちますまい」

「それも、左様ぢや」

「燒き捨てたとか、失ふてしまふたとか、何とか結末を、知つてからでなければ、報告も出來ますまい」

「……………」

「若し又、敵の何人か、之を保存して居る、とすれば、取戻して歸るのが、當然である、と存じますが、御考へは、

「如何で御座いますか」

「我輩も、之には困つて居るのぢや」

綿貫は、赤木に、チリ／＼問詰められると、斯う答へる外、何ともいへぬのであつた。

一〇

綿貫が、窮するのを見て、赤木は、ぐつと膝を進めた。

「私を、鹿兒島へ、残して戴き度いが、如何で御座いませう」

「都合に依つては、残しても可いが、その用件は、どういふ事か」

「聯隊旗を、搜出す爲めに残り度いのであります」

「ふふーむ。それは、見込みがあつて、さういふ希望を、申出たのか」

「否、今の場合、何の見込みもないのであります。旗は確に在ると、思ひますから、是非、残り度いのであります」

「併し、少しは見込みがないと、その目的は、達し得まい。在ると思ふから、搜して見度い、といふのでは、丸で雲を

掴むやうなものぢやから、どうも、感心が出来ぬ」

「仰せであります。今までに、本式の、搜索は行つて居りませぬ。只、旗は無いか、といふて、尋ねて歩いて、

それは、徒勞な事でありませうから、私は本式にかゝつて、見度いのであります。殊に、戦争が止めば、人の心も、

幾分か違つて來ますし、搜索の上にも、大いに便宜はあると、思ひます」

「成程」

「旗は、確かに相當の人の手に在るものと、私は、睨んで居ります」

「君が、それほどの熱心を以て、搜索して見度い、といふのなら、或は許しても可いが、それに就て、何か希望でも

「あるか」

赤木の熱心は偉いもので、遂に綿貫の心を動かした。赤木は、此處ぞと思つて、

「場所は、どこでも、宜しう御座いますから、警察署長になり度い、と思ひますが、御都合に依りましては、署長でなくとも、捜索に就て、十分の権力ある役なれば、何でも、宜しいのであります」

「可し、考へて置かう」

「御返事は、何時、伺へませうか」

「明後日の朝、来て見たら、可からう」

「何分、宜しく」

是れて、赤木は歸つた。綿貫は、初め、赤木のいふ所に、多少の危険を感じたのは、つまり、何の當りも、附いて居ないのを、雲を掴むような、捜索をしようといふのであつたから、好い返事をしなかつたのであるが、終に赤木の熱心に感服して、之を許す氣になつたのである。けれども、これは、一應、陸軍側の了解を、得て置く必要があるので、その交渉に、一日を費して、漸く決定したのであつた。赤木を、呼びにやると、すぐやつて來た。

「折角の希望であるから、君のいふ如く、署長として、下方切の警察署へ、残す事にする。巡查は二百人、留める事になつて、居るから、その半を、君の手に、屬せしむる事にした」

「ハイ」

「果して、捜し出す事が、出来るか否かは、今から、保証も出来まいが、まあ、熱心にやつて、見るが可い」

「有難う存じます」

「萬一にも、君の見込みの通り、捜し出す事を得たら、それこそ、大した功名であるが、失敗すると笑ひ草になるから、その覺悟で、着手するが可い」

『ハイ』

綿貫は、赤木を残して、東京へ、引上げた。後へ残されたのは、獨り赤木ばかりでなく、戦後の人心は、動もすると、激し易いから、その沈着きを見るまでは、警察力を、要する事が多いので、澤山の警部や、巡査が残された。

特別の役目を持つてゐる赤木は、是から、搜索の方針を、決めた。第一には、植木方面の鬪ひに、最初から關係した、薩軍の隊長を、調べる事。第二には、その人が明かになつたら、部下に、何ういふものが、附いて居たか、而して、其れ等の生死は、どうなつたか、家族の關係は、どういふ事に、なつて居るか、といふ事を、調べさせる事にした。第三には、乃木の兵と、眞ッ先きに衝突したのは、何者であるかを知り、それに依つて、旗の行方を、尋ねる事。凡そ斯ういふ風に、方針を立て、それから毎戸訪問を、巡査にやらせて、一々報告を取る事にした。

十數日経つと、村田三介の未亡人、佐和子が、村田の母と共に、その管内に、居る事が、判つた。村田は、既に討死して居たが、植木方面へ、最初に、乗出した人だ、といふ事が、明かになつて、一度は、聯隊旗を持つて居た、といふ情報を得たので、赤木は『さてこそ』と、手を拍つて喜んだ。此上は、村田の家宅搜索をして見れば、必ず旗は出て来るものと、堅く信じて、十數名の巡査へ、二名の警部を、附けて出した。その後から、自分は平服で、ブラリと出て行つた。

一 一

戦争に負つても、薩人の多數は、政府に、服して居らぬ。殊に、西郷の爲めに、戦ふた人の心は、どこまでも、政府と争ふ覺悟を、有つて居る。戰場へ臨まぬ、家人までが、その心で居るから、戦後の薩摩は、一層の注意を、要するのであつた。良夫を亡なひ、兄弟に死なれ、老て子に離れたもので、政府に對しては、深い怨みを持つて居るから、悲惨な生活に、日を送つて居ても、何となく、危険な空氣が、漂つて居る。従軍した壯士は、鹿兒島に、多く

戦死した。勇士の家族も、大概は、鹿兒島に居る。戦さは治まっても、後の始末は、容易でない。當分のうちは、東の間も、油断のならぬといふ、状態であるから、警察官の苦心は、戦時よりも甚だしいものがあつた。戸口調査を、厳しく行ふて居るのは、全く之が爲であつた。戦後に捕はれたものが、割合に多く在つたのは、調査が厳しかつた、結果である。

村田の未亡人、佐和子は、老母と二人で、寂しく暮して居た。良人の世にある時は、近衛の陸軍少佐で、多くの人から、尊敬もうけて居たが、今は、日蔭の身の悲しさに、良人の在りし、昨日を偲びては、老母と相擁して、涙に流れる夜が多く、知る人の大概は、すでに戦死して、良人と、同じ旅路に在る、取残された家人と、互に相訪ねては、心の寂しさを、慰めて居るに、過ぎなかつた。

門口に、誰か来たやうであつたが、案内も受けずに、履み込んで来た、巡査は、警部に連れられて十數名、家の前には、未だ澤山に、居るやうであつた。

『村田佐和子とは、あなたの事か』

不作法に、ふみ込んで来たが、警部の言には、何となく優しい所があつた。

『ハイ』

『少し取調べ度い事があつて、警察署へ、呼び出すのも、失禮と考へたから、斯く出張をしたのです』

『それは、御苦勞様で御座いました』

『あなたの良人は、村田三介といはれた方ですな』

『ハイ』

『元の陸軍少佐でしたか』

『ハイ』

『御家族は……』

『村田の母と、妾の二人暮して、御座います』

『召使のものは、ありませんか』

『御座いませぬ』

『良人は、どうなさいました』

『日向の鍋田で、戦死いたしました』

『戦死された事は、すぐに判りましたか』

『ハイ』

『どうして、判りました』

『戦地のものから、傳へてくれたので、おきに判りました』

『その傳へてくれた、といふのは、どういふ人で、ありますか』

『村田の配下の人ではありますが、姓名は、確と存じませぬ』

『それは、可怪しいですな。苟も村田少佐の死を、傳へてくるほどのものなら、あなたの知らぬ、といふのは疑はし

い。隠さずにいふて下さい』

『顔を見れば、覚えて居りますが、姓名は知りませぬ』

『どうしても、御承知ない、といはれるか』

『ハイ』

『その時に、何か持つて來たてせう』

『否え、何も持つてはまゐりませぬ』

『記念の物か、何かを持つて来たてせう』

『否、何も持つては、参りませぬ』

『よく考へて下さい。何か持つて来た筈ぢや』

『何と、御調べが有りましたも、それは覚えが、ありません』

『たとへ、持つて来た、といふても、別に咎めは、ないので』

『覚えのない事は、申上げられませぬ』

『どうしても……』

『ハイ』

流石に、村田の妻丈けあつて、取調べをうけて居る間、少しの恐れ氣もなく、はつきり答へる調子は、實に落ちついたものだ。警部は、村田の母に向つて、

『御老母』

『ハイ』

『あなたに尋ねるが、何か受取つた覚えはありませんか』

『嫁の申しました通り、わたくしも、覚えは御座いませぬ』

『隠すと利益になりませぬぞ』

『存じませぬ』

種々に尋ねてみたが、二人の答へは、同じ事であつた。

「捜索をしたたら、何うちや」

「左様ませうか」

「どうしても、いはぬとしたら、その外に方法はあるまい」

「それでは、すぐはじめませう」

是れから警部は、巡査に命令した。署を出る時から、捜索についての手順は、豫め定めてあつたから、それ／＼に、着手した。先づ座敷の戸棚から始めて、疊を上げると、床下へ潜り込むものがある、恰て引越しをするやうな、騒ぎで、斯うした事に、馴れぬ老母は、只驚きの眼を以て、巡査の行動を、見て居た。

赤木は、ちつと、老母の顔を見詰めて、眼玉の動きにばかり、注意して居た。村田の母は、若い時分から、評判の女丈夫であつたが、何しろ、歳も老いて、氣性に緩みも、出て来たから、心にも弱い所があつて、天井の一隅を、そつと見上げて、左も心配さうな、眼付をする。それを見て取つた、赤木は、警部に、耳打をしたので、はやくも、一人の巡査は、北隅の天井板を外した。此時に、佐和子の顔色が、さつと變つて、膝について居る手が、微に顫へた。赤木が、之れを見て、ニヤリと笑つたのは、目的の達せられたのを、獨り喜んだのである。

天井裏へ、上つた巡査は、細長い箱を、油紙で包み、嚴重に麻繩で、括つたものを持つて、下りて来た。赤木は、之れを受取ると、

「これは、何ですか」

と、佐和子に尋ねた。平服ではあるが、その態度から言語までが、嚴として、兩女の耳には、強く響いた。

『恐れ入りました』

是れは、老母の聲であつた。佐和子は、黙つて俯向いて、居るばかりである。

此於、赤木は、巡查に引上げを命じて、自分は、その包物を持つて、暑へ歸つて來た。開いてみれば、紛れもなき聯隊旗であつたから、之れを竿につけて、飾らせた。佐和子は、流石に覺悟して、何事もいはなかつたが、眼には涙を湛へて居た。

『あなたは何故、はやく之を出さなかつたのです』

隠した事が露見しても、赤木の調べやうは、まことにやさしかつた。

『まことに、相済みません』

『どういふ理由で、匿して置いたのか』

『亡き良人が死に臨んで、わざ／＼送つて寄越しましたものですから、大切に思つて、隠しました』

『之れは、何ういふ旗か、御承知ですか』

『聯隊旗と心得て居ります』

『戦争が濟んでも、隠して置く、といふ心が解らない。どういふ考へて、あつたか』

『別に、之れといふ考へは、なかつたので、御座います』

『之れを隠して置いた所で、致し方があるまい』

『只、良人の記念と思ひまして』

『あなたは、今度の戦争を、どう考へて居るか』

『……………』

『善い事と思つて居るか、それとも、悪い事と思つて居るか』

『……………』

『村田少佐が、此戦争に加はつた事は、善いと思つて居るか』

『ハイ』

『負けて口惜しい、と思ふか』

『ハイ』

『何故、口惜しいか』

『戦争に負ければ、口惜しう御座ります』

『併し、此戦争は謀叛ぢや、謀叛を善い事と、思つて居ますか』

『叛謀とは、思つて居りませぬ』

『然らば、何う思つて居るか』

『政府が悪いと、思つて居ります』

『どういふ、理由で……………』

『西郷先生を、殺さうとしましたから、皆が怒つたので、あります』

『左様か』

佐和子は、少しも偽らない。思つた通りを、いふたのであるが、戦争に關係した人の家族は、みな左様思つてゐるのであつた。斯ういふ事を、聞いて置くのは、後日の警戒にも、必要であつた。赤木は、その誤れるを諭して、佐和子は、放免してやつた。

鹿兒島の守備隊として、猶ほ戦後の人心を、取締る可く、一個大隊の兵士は、残される事になり、その隊長には、大尉の川村景明が、任ぜられた。

赤木は、聯隊旗の出た以上、之れを、川村へ渡すのが、相當である、と考へた。其處で、川村の、隊へやつて来て、面會を求めた。

『軍旗の所在が、判りました』

と、聞いた時は、川村が、驚いた。

『えッ、軍旗が判つたとか』

『ハイ』

『而て、どこに在つたか』

『今ま、警察署へ持つて参りまして、大切に保管してあります』

『左様か、どこから搜し出した』

『村田少佐の未亡人が、隠して居りました』

『佐和子さんが』

『ハイ』

『ふむーむ、左様であつたか』

川村は、感慨に堪へぬ、といふ調子で、

『それは、元來が、女丈夫であつたから、その位の事は、爲るぢやらう』

『最初は、種々抗辯しましたが、家宅搜索の結果、天井裏に隠して、在るのを發見して、佐和子も、共に連れて参りました』

『佐和子は、どうしたか』

『一應の説諭で、放免してやりました』

『それは、良かった』

『兎に角、聯隊旗は、御渡し申し度く存じますが、どういふ手續きに、いたしませうか』

『假りに、旗手を定めて、後から受取りに行くから、その都合にして置いて、貰い度い』

『宜しい。それでは、直ぐに用意を、いたして置きます』

『どうか、左様してくれ』

是れで、相談は済んで、赤木は、一と足さきに、署へ歸り、川村はすぐに、準備にかゝつた。やがて、川村は、自ら兵を率ゐて、軍旗を受取りに來た。見れば、正に其れであるから、悲常に喜んで、

『君の盡力で、聯隊旗を、取戻し得た事は、實に喜ばしい』

『よく御改めを願ひます』

赤木の手から、川村の手へ渡された。川村は、軍旗を手にすると、謹嚴な態度で、之を押戴きながら、旗手へ渡した。

『我輩は、長く此事は記念する。君の功は、頗る大きいが、我輩の力では、どうする事も出来ぬ。いづれ本省の方へ

此顛末は、執り次ぐ事にしよう』

『私は、功名心の爲めでなく、我陸軍の名譽の爲めに長く聯隊旗を、汚がして置くに忍びず、漸くにして授し出したのでありますから、敢て恩賞を受けよう、とは、思つて居りませぬ』

『イヤ、實に立派な心懸けぢや。武人は、斯くあらねばならぬ』

赤木の態度は、どこまでも武士的であつた。之には川村も、少からず感心した。聯隊旗を、授し出せば、赤木の目

的は、達した譯で、外に之といふ用事はない。署長として、鹿兒島に居るのも、その本意でないから、辭職の手續きを終つて、東京へ引上げたのは、明治十一年の春であつた。

綿貫は、赤木に逢つて、

「君の熱心には驚いた、よく捜し出したものだ。戦争に勝つたのも、大きい功名ではあるが、此目的を遂げた、といふ事は、更に大きい功名である。殊に、陸軍で失ふたものを、警察側で、探し出したのは、一段の功名と、いふ可きぢや」

「御辭で、恐れ入ります」

「其處で、君に相談がある」

「ハイ」

「實は、此事を、君の功名として、公に表彰するのが、當然の事ではあるが、左様なると、陸軍側の不面目にもなるから、之れ丈は堪へて、何事も、沈黙して居てくれる事は、出来まいか」

「宜しう御座いますとも、私は、元來が、陸軍の面目を立て度い、と思つて、初めから、着手つた事でありませうから、私が、沈黙して居て、それで、陸軍側の面目が立つ、といふのなら、一切、貴下に、御任せいたします」

「左様いふ風に、淡泊に出られれば、陸軍側でも、敬意を持つてあらうし、我輩も、大いに考へがあるに依つて、君の前途は、我輩に、任かせてくれ」

「ハイ」

赤木は、綿貫の言に従つて、これほどの功名を、陸軍側に譲り、全く沈黙を、守つて居た。それから間もなく、赤木は、越後高田の警察署長を、拜命して赴任する事になつた。

一四

歲月は、流水に似て、はやくも、三十餘年を過ぎた。明治四十五年の七月になつて、茲に六千萬の國民が、絶代の英主たる、明治天皇の御崩御に逢ふて、痛哭悲嘆、御大葬の當日までは、恰で、火の消えたやうな狀になつた。

涙のうちに、九月三十日は來て、盛んなる御大葬は、濕り勝ちに行はれた。満都の市民は、多く業を廢し、戸を鎖して、管絃の音は絶え、道行く人も、稀であつた。宮城前から、青山の式場迄は、人の山を築き、集まるもの幾萬といふ、數を知らず、されど閑寂として、人なきが如く、莊嚴なる葬列は、悲哀の眼を以て送られ、夜半に及んで、涙のうちに、式は全く終つた。

その時に始めて、驚くべき事が、それからそれへと、傳へられた。

『乃木大將は、靈輦の宮城を離るゝ時、一發の號砲と共に、深く自刃せられた』
と、いふ事件であつた。多くの人は、容易に、之れを信じ得なかつた。然るに、間もなく、夫人の靜子は、將軍の後を逐ふて、悲愴な最期を遂げた、といふ事が、傳へられるに及んで、茲に其事の、眞實なるを知り、民衆の愕きは、一と通りでなかつた。

翌日の新聞は、殆ど其記事を以て充たされ、引續き毎日の新聞は、夫妻の逸話と、死の眞相に就て、或は報じ、或は論じ、朝野を擧げて、一時は、狂するばかりの狀で、あつた。將軍の履歴は、眞偽を別つの暇なく、しきりに傳唱されて、報道は益々繁く、議論も、思ふさま鬨はされたが、只一つ、疑問として残されたものは、聯隊旗の事であつた。

その遺言書には、立派に「聯隊旗を失ふた、責任の爲に死する」旨が、記されてあるけれど、死の形式は、まさに殉死と、同じであつたから、其處に、いろいろの誤解も生ずれば、無理解な議論も、起つて來たのである。殊に、失

はれた旗の始末は、果して何うなつたか、といふ事を、究めようとすればする程、不可解になつてゆく。當時の錦繪として、野津少將の、勇敢なる働きが、概を取戻した、といふ事さへ、眞しやかに傳へられた。

單に、其ればかりでなく、旗を失ふた時の事情さへ、臆測と、虚偽とを綱へ交せて、傳へられた位であるから、旗の行方、どうなつたか、といふ事の、曖昧に葬られたのも、決して無理も、ない事である。

けれども、その次第は、前回にも述べた通り、極めて明白な事であつて、その間に、寸分の疑ひを挟さむ、餘地はないのだ。今迄に、其れが明白に、なつて居なかつたから、將軍の死後に、斯うした、大切な問題で、人が互に争ふやうな事にもなり、結局は、有耶無耶のうちに、葬られてしまふたのは、如何にも、残念な次第である、と、例の赤木が憤慨して岡山から、東京へ、出かけて來た。

その後の赤木は、高田の警察署長として、相當に腕も現し、在任中の出來事としては、赤井景韶の大臣暗殺事件について、其一味を捕へて、頸城自由黨に、大打撃を與へた事である。當時、赤井と共に捕へられた一人で、井上平三郎といふ人は、今も尙ほ、東京に生存して居る。

各地轉任の役人生活に、漸く倦んで來た、赤木は、兵庫縣の郡長に轉任してから、終に職を辭して、岡山へ移つてから、習ひ覺えた、擊劍の教授をして、その日を送つて居た。老る歳と共に、それも物憂くなつて來て、終には一切の仕事を廢し、少しばかりの貯へのあるに任せて、ぶら／＼遊んで居るうちに、乃木の死について、職隊旗の事が、いろ／＼に傳へられ、果は、自分の取扱つた事までが、甚だしい誤りを以て、世間から見られるやうになつたので、今迄は、綿貫との約束を守り、一切黙つて居たが、斯うなつては、既う沈黙も守り切れぬ、とあつて、東京へ、出て來たのであつた。

茲に訝かしいのは、陸軍側の態度であつた。當時の關係者は、よく其事情を、知つて居る筈であるのに、世間が何ういはうと、己れの關する所でない、といつた調子で、何時もの秘密主義を其儘に、すまし返つて居た。假りに、之

れを、明白にした所で、それが、陸軍の恥辱になる、といふ次第でもなからうが、軍旗の事には、何等の釋明も與へず、すべてを秘密に、葬り去らう、としたのは、實に驚き入つた事である。

左様した場合に、赤木が、出かけて来て、三十餘年前の事を、しきりに言ひ立てた所で、そんな事に動かされるほど、陸軍の人々は、人間味を、持つて居なかつたから、赤木が、しきりに焦つて、當時の事情を明白にしよう、とすれば、するほど、陸軍側は、冷然として、赤木のいふ所には、耳を傾けなかつた。

一五

乃木に、最も親交のあつたものは、寺内正毅であつた。赤木は、それに眼をつけて、寺内を訪ねた。赤木が、寺内を訪ねた心は、寺内が、時の陸軍大臣であつて、而も、乃木の親友である、といふ點から、軍旗の問題を、明白にする上に於て、此上もない對手だ、と思つた爲である。

『私が、赤木義彦であります』

『わしは、寺内ぢや』

『乃木將軍の事について、ちと申上げ度い事があつて、御伺ひいたしました』

何時の場合にも、寺内は、キチンと、行儀よくして、細い眼を光らせながら、對手の顔を、チロリ／＼と、見て居る癖がある。窓の硝子戸を開けるのに、寸法を、極めて置くほどに、几帳面な人であつた。

『乃木將軍が、聯隊旗を失はれた時の事は、私の關係のない事ではありますが、それを取戻したのは、私でありました』
之を聞いて、寺内は、意外な感にうたれた答子であつた。

『ふふーむ、それは、不思議な事を聞く』

といふた。赤木は、微笑を含んで、

『それは御存じないのが、或は當然であるかも知れませんが、少しは御聞込みの事も、ありませう』

『イヤ、わしは、全然、知らぬ事ぢや』

『左様ですか、それでは、顛末を申し上げます』

赤木は、之れから旗を取戻した始末を、詳細に物語つた。

『之は、珍しい事を、聞いた』

『今日迄は、私も、黙つて居りましたが、乃木將軍の死に依つて、いろ／＼と、誤つた説が傳へられますので、此際

に、私の關係した事丈でも、明白にして置き度い、と存じまして、御多用の御邪魔を、いたした次第であります』
寺内は、しばらく、考へて居たが、

『君は、それを明かにして、どうしよう、といふのですか』

『只明かにして、置き度いのです』

『年月も、經つて居るし、假りに夫れを事實としても、戦功とは認め難いし、別に賞典の方法も、ないのぢやが……』

『それは、私の希望ではありません。三十年も過ぎた、今日になつて、どうして貰ひ度い、といふやうな、さういふ汚い事を考へて、申上げるものではありません』

『然らば、どうしよう、といふのか』

『只明白に、いたし度いのです』

『ふふーむ、明白にしたい』

寺内には、赤木のいふ事がよく、理解し得なかつたやうで、しきりに考へ込む。

『行賞して頂き度い、考へがありますなら、その際に、申上げたのでありますが、私には、左様な考へは、少しもなかつたのであります。今も猶ほ、その點については、純白なものでありますから、その御懸念なく、旗の成行き

だけは、公表して戴き度い」

「公表といふと、陸軍省の名で、世間へ公にしる、とても、いはるゝのか」

「さういふ手續きは取らずとも、いくらでも、方法はありませう。つまり疑問として、此問題を葬つてしまふのが、遺憾でありますから、公にしたいのであります」

「左様か、まあ、考へて見る事にしよう」

「少く少し解つたらしいが、寺内の様子は、極めて冷然であるから、赤木は、甚だ不快に感じた。

「これは、御無理に願ふても、御迷惑でありませうから、若し、陸軍省の方でどうしても、公表はせぬといはれるなら、私の名を以て、公にいたす丈けの事で、さうなりましては、却て面白くない、と思ひますから、閣下の宏量を以て、何とか御取扱ひを、願ひ度いのであります」

「宏量といふた所で、別に方法もないのぢやから、とに角、當時の關係者に、一應は尋ねて見て、その上で、考へる事に致さう」

「宜しく御願ひいたします」

「わしは、那の時に、さういふ事を、聞いて居らなかつたので、どうも眞偽を、知り難いのぢやが、川村に聞けば判る、といふのぢやな」

「ハイ、川村大將は、現に當時の受取人として、守備隊の隊長をして、居られたのでありますから、よく御記憶の筈であります」

「よし、川村に、聞いて見よう」

其日の會見は、之れで終つたが、結局は、赤木の思つたほどに、要領を得たものでは、なかつた。數日の後、寺内を訪ねたが、來客の旨で、面會を斷られた。それから、二三度訪ねたが、いつも同じ理由で、面會は出来なかつた。

手紙を出したが、何の返事もない。其處で、赤木は、少し變に思ひはじめた。

一六

どうしても、逢つてくれないから、赤木は、一日の事、強い決心を以て、寺内を訪れると、例の通り面會を、拒絶された。

「幾たび伺ふても、御面會を御許し下さらぬ、といふのは、甚だ遺憾に思ひます。此上は、御都合のよい迄此處で、御待ち申す事に、いたします」

玄關の入口に立つて、赤木は、どうしても立去らう、とせぬ。

「君は、強情な人だ。閣下の御都合があつて、面會出来ぬ、といふに、飽迄も立去らぬ、といふのは、穩かでない」

「無論、穩かではありませんが、豫ての約束を忘れて、御面會下さらぬ、といふ以上、斯うして御都合のよい迄、おまちする外は、ないのです」

「何時まで、待つて居ても、甲斐のない事であるから、寧ろ歸つた方が、よいでせう」

「それは、私の都合に依る事で、御指圖を受けませぬ」

「頭然として赤木は、玄關に見張つて居る。斯うなると、執次のものや、玄關番は困つて、いろ／＼に、宥めて見たが、どうしても、駄目であつた。所へ、副官らしい軍人が、出て来て、

「漸く御手透になつたから、御面會しても可いさうで、此方へ通せ、と云ふ事であるから、お通り下さい」

「それは、御手敷をかけました」

洗石の寺内も、赤木の強情には、終に凹垂れてしまつた。案内につれて、赤木は、應接室へ通つた。

「度々、お氣の毒ぢやつた」

『どういたしまして、御多用中、却て恐れ入りました』

『あの事は、どうも困つたよ』

『へー、困つたといふのは、何ういふ次第でありますか』

『川村は、少しも覚えがない、と、いふのぢや』

『えッ、覚えがない』

『うむ、軍旗を受けに行つた、といふやうな事はない、といふのぢやつた』

『それや、怪しからん。現に私が、それを報告に行つて、それから、旗手までも定めて、自ら受取りに來られたので、あります』

『……………』

『私に向つて、非常に感謝せられて、陸軍の面目が立つた、とまでいはれた。それを、知らぬとは驚き入りました』

『さ、斯うなると、わしも困る。どちらが、本當か判らないのぢやから、いかんとも、取扱やうがない』

『私は、當時の日誌を、御参考の爲め、持つてまゐりました』

と、いひながら、赤木は、夙くから書いて居た日誌、三十年間のものであるから、相當に冊數もある。十年の時の、一冊を取つて、之れを、寺内の前へ出した。

『此通り、搜索の状況から、當時の川村大尉に、手渡した顛末が、書いてあります。私が、如何に氣樂な人間でも、まさか三十年間の日誌を、之れが爲めに、偽造する筈は、ありません。閣下、よく御覽を、願ひ度い』

寺内は、手に取らうともせず、空嘯ぶいて、對手にせぬ。

『それは、君の書いたもので、大した證據にはならぬ』

『此日誌を認めぬ、といはれるのですか』

『つまり、日誌ぢやからな』

『よろしい。それでは、此話は打切りに、致します』

『君の自由ぢや』

赤木は、怒氣を含んで、立上つた。

『失禮いたしました』

寺内も、同時に立つた。

『やア……』

頭の割れるほど、疝癢は起つたが、どうも致方がない。赤木は、空しく引取つた。その後、赤木の友人、中野常太郎といふ人が、寺内と面識のある所から、頻りに力を入れて、寺内を説いたけれど、寺内の答へは、赤木に對する時と、同じ事で、終に仲裁の甲斐はなかつた。

斯ういふ事情で、軍旗の取戻しは、今も猶ほ、公にされて居らぬが、事實は、赤木のいふ通りで、同人の盡力から、陸軍の手に、戻つたものである。此顛末を、公にした所で、陸軍の眞價に、どれほどの影響も、ないのであるが、何事にも、秘密主義の陸軍は、こんな事にさへ、秘密を守つて、赤木の要求を、容れないのみならず、却て其事實を否認しよう、とするのであるから、實に馬鹿らしい事だ。

赤木は、間もなく中氣になつて、フラクとして居たが、何時も、此事を、くり返しては泣いて居た。その赤木も、今は、故人になつてしまつた。

一七

軍旗の事に、直接の關係はないけれど、要するに、軍旗を、失ふた時の従卒であり、乃木の極めて愛した男で、そ

の者も、深く乃木の人格に、服して居た、といふ點から、後日譚の一つとして、傳へて、置き度い者がある。

前回に述べて置いた、小倉の三木傳吉に、一人の件が在つて、名を武雄といふた。幼少の頃、眼疾にかゝつて、失明したので、京都の盲啞院へ入れて、盲人としての教育は、うけさせて居るが、學資の乏しい爲めに、永く續きさうもなく、何分にも、貧しく暮らして居るので、それが思ふに任せず、親の身としては、どれほど、辛いか判らない。傳吉は、何時も、此事に、惱んで居たのである。

乃木と、同郷の生れて、三島熊太郎と、いふ人があつて、乃木とも、親しくして居るが、傳吉とは、極深い交はりか、あつた。

『三木さん、武雄さんには、困るだらうね』

『實に弱りました。私は、貧乏を覺悟して居るが、子供にまで、其苦しみをさせ度くない、と思つて居るが、何しろ、那の盲目では、どうにも仕やうがない。京都の盲啞院が、大層よいと聞いて、それへ入れてあるが、毎月の費用が幾何と定まつて、それを送らねばならない、となつて見ると、とても、今の所では、私の力には及ばず之れ丈は、實に弱つて居ますよ』

『どうだ、乃木大將に、頼んで見ようか』

傳吉は慌て、之れを遮つた。

『君は、飛んでもない事をいふ。私は、幾たびか御世話にも、なつて居るし、此上に、件の事まで、御厄介をかける心は、ありません』

『併し、君が、御世話になる、といふのではなく、つまり、武雄さんを救つてくれ、といふのだから、よいではないか』

『イヤ、私には、そんな事は頼めない。かねて話をする通り、明治十年の頃から、閣下を、知つて居て、那の時分に

も、一と通りならぬ御世話になつて居るのだから、そんな事は、いへない」

「君には、頼めないとしても、私が、頼んで見よう、といふのだ」

「それも、控へて貰ひ度い」

「何故か」

「私が頼まないでも、君が頼めば、同じ事になる、私は、それを、君に頼む事は、出来ぬ」

「何も、飲み食ひする爲めの、金を貸してくれ、といふのではなし、盲目の子供に、修業をさせ度い、といふのだから、別に遠慮するには及ばぬ。兎に角、私から、頼んで見よう」

「どうか、それは止めてくれ」

「それでは、武雄さんを、何うする覺悟か」

「さ、それには、困る」

「それ見なさい。いくら瘦我慢をしても、矢ツ張り、困るのぢやないか」

「閣下の爲めに、困つて居るのぢやない、自分の勝手に、困つて居るのだから、どうも、致し方がない」

「ハツハ、、、、君は、實に物堅い所がある。それで、乃木大將の愛顧を、うけたのでもあらうが、まあ、武雄

さんの事は、私に、任せて置くがよい」

「君には、頼む」

「可し、僕が、引受けた」

俠氣のある三島は、立派に引受けたが、これも、三木に、まさる生活はして居ても、人の子を引受けて、修業させてやる丈の、餘裕は持つて居ないから、いろ／＼考へた末、たとへ三木は、拒んで居ても、自分の一存で、乃木に頼んで見よう、といふ氣になつた。併し、可成くは、三木にも、同意させてからにしたい、と、三島も、ひそかに、

其機會を待つて居るうちに、三木は、不圖した病氣が原因で、終に死んでしまった。父親が居てさへ、思ふやうにならぬのであるから、母のみになつては、猶更、動きが取れぬ。家計は、日増に苦しくなるばかりであるから、武雄を修業させる事なぞは、とても、望み得られぬ事に、なつた。

於此、三島は、事の顛末を認めて、乃木の許へ、武雄への力添へを頼んで来た。

『静ッ』

『ハイ』

『三木の死んだ後が、大層困るさうぢや』

『まことに御氣の毒で御座いますが、御見舞でも上げませうか』

『壯健で居るものは、自分で働くがよい。けれども、武雄は、盲目ぢやから、此先困るぢやらう。三島から、手紙が来て、その事が、書いてある。もつと、詳しい事を聞いて、何とかしてやる、つもりぢや』

『それは、結構な事で御座います』

『返事を見上上で、お前に頼むから、面倒を見てやつてくれ』

『ハイ』

翌日、乃木は、三島へ、手紙を出した。

一八

乃木から、三島へ送つた、照會の手紙は、明治四十四年の春であつた。

貴翰拜讀、愈々御多祥大慶存じ候、然らば、三木傳吉遺子の儀、御同感に存じ候、就ては、最初就學は、京都盲啞學校にて、修業候様爲致度、右學費は、月々幾何に可有之や、乍御手數、御取調の上、御一報被下度、右は小生の

名義めいぎを用もちず、願ねがはくは何卒たゞ、尊堂たいてうよりとの事に、御取計おとけひ願度ねが、極めて御迷惑ごめいわくには候まをへども、他人たにんの名なを用もちひ度、此儀このぎを御含おまみにて、前件まへけん御取調おとけじゆ被下度、御答おんこたへ願度、如此候かこのごとく。勿な々不宣なげ。

三月六日

三島賢臺しみらいだいてんか尊下

此書面このしよめんを見ると、乃木のぎの性格せいかくの一端たんが、窺うかがはれる。三島しみまは、之れに對たいして、詳しい返辭へんじを出だした。

「静しづッ、ちよツと、來てくれ」

「ハイ、御用ごようで御座ごすいますか」

「うむ、三島しみまから、返辭へんじが届とどいた」

「左様さやうで、ございますか」

「之れを見て、返事へんじを出だしてやつてくれ」

「ハイ」

「金かねも送おくる事ことにして、三島しみまや武雄たけおの迷惑めいわくせぬやうにして、やつてくれ」

「承知そうちいたしました」

「送金そうきんが遅おそれても、先方せんぽうでは、催促きせつの仕難しないものぢやから、それのないやうに、注意ちゆういして貰もらひ度たい」

「先様さきさまの御迷惑ごめいわくに、なりませぬやう、取計とりはからひます」

「どうか頼たのむ」

哀あはれな武雄たけおは、いよ／＼救すはれる事ことになつた。夫人ふじんの静しづ子こから、三島しみまへ送おくつた手紙てがみは、

御芳書ごほうしょ拜見はいけん仕つかり候まう、御來旨ごらいしの件けんに付つき、乃木のぎより、御返事ごへんじ申候まを苦くの處ところ、御承知ごしょうちの通とほり、公務こうむ多忙たはうの事こととて、不取敢とりあへず

私わたしより御挨拶ごあいさつ申上まを候まう。三木傳吉しみでんきち遺子いし學費がくひの儀ぎ、一先いっづ金きん一いっ百圓ひゃくえん也なり、御送おおくり申上まを候まう間ま、貴所きしよより、月々つきづ、宜よろく御お

取計らひ被成下度、御願ひ申上候。當方も、月々御送り申上候方、なか／＼好都合に、御座候へ共、何分無人の上
に、日々繁忙に取込居候故、或は取紛れ、失念政すやの恐れも、有之候へば、不如意の處、差繰纏めて、御依頼申
上候次第、右御承引被成下度候。先づは御挨拶かた／＼、送金の御通知申上げ候。草々可祝

三月三十日

乃木 靜子

三島熊太郎殿

筆跡も、文辭も、殆ど男性的で、更に今迄の、女らしい所がない。

此二つの手紙を對照して、よく考へて見ると、乃木夫婦の美しい心が、誰にも會得され得る、と思ふ。之れが爲に
武雄は、救はれる事になつたが、それも、僅の束の間であつた。翌年の九月十三日には、乃木夫婦の死と共に、武雄
の學費は、再び其助けを受ける事は、出来なくなつた。乃木の美事善行で、世にかくれたものは、澤山に在るが、之
も其うちの一つであつて、乃木の死後、家に餘財のなかつたのも、主に斯ういふ事が因になつて居る。

今から、十餘年前に、著者は、佐々木照山の爲めに、下關へ、演説に行つた事がある。その時に、一人の盲人が、
やつて来て、私に逢ひたい、との事であるから、その人に逢ふて見ると、歳は二十位の、色の青い瘦せ形の、盲人で
見るからに、哀れな風であつた。

『私は、三木傳吉の件、武雄と申すものであります』

と、いはれて、著者は驚いた。今迄に、乃木の傳記を講演する場合、いつも引合ひに出る、その本人が來たのである
から、著者も、不審に思つて、

『どういふ御用件で、おたづね下されたのか』

と、著者の尋ねたのが始まりで、二人の間に、斯ういふ問答があつた。

『私の亡父の事や、私の身について、先生の講演を聞いた、といふて、私を哀んで下さる御方が、澤山にありますの

で、いつか一度は、御目にかゝつて、御禮を申述べ度い、と思つて居りました處、今度は、佐々木先生と、御一しよに演説をなさる、との事を、聞き込みましたので、早速おたづねいたしました次第であります」

『それは、よくおたづね下すツた』

『私も、不幸がつゞきましたが、お蔭を以ちまして、只今では、此下關の盲啞院に、救はれて居ります』

『京都は、どうしたのですか』

『乃木大將のおかくなすつた爲めに、私の學費が、續きませんので、終に退學いたしました』

『さうでしたか。まア、折角御勉強なさい』

『有難う存じます』

猶う少し、聞いて見たい、とは思つたが、時間の都合で、それは出来なかつた。武雄は、今何處に居るか、可哀想な、盲人であつた。

結 婚 の 前

一

明治九年から、翌十年へかけては、乃木の生涯に、忘れ難い歳であつた。九年には、弟の眞人が、前原の亂に與して、討死を遂げたばかりでなく、自分の爲には恩師、眞人の爲めには、養父であつた、玉木文之進も、腹を切つて居る。此悲痛な、出来事を觀ながら、ちつと、忍んでゐた苦しきは、實に堪へ難い事であつたらう。十年には、聯隊旗の問題で、一層の苦心をした上に、父の希次を亡なつた。此二年は、乃木の厄歳ともいふべく、従つて、小倉は、忘れ難い、記念の地となつた譯である。

禍福は、糾へる繩の如く、人間萬事塞翁が馬といふ、諺がある。乃木の身にも、幸運の春は来た。

意外にも、十一年になつて、東京の第一聯隊長に、榮轉した。此任命は、全く突然の事で、本人は、少しも知らなかつたのである。聯隊長といへば、どここの聯隊長も、同じ事で、上下の別の、あるべき理由はないが、それにしても東京の第一聯隊長となれば、先づ日本一の聯隊長と、世間からは見られて居る。

小倉に居る時は、聯隊長心得であつたから、未だ本格の位地ではなかつた。而も、大切な聯隊旗を失つて、軍人としての面目は失墜したのであつたが、それ等の過失については、強い咎めも受けず、却て其翌年には、東京の第一聯隊へ、榮轉させられた、といふのであるから、乃木の身に取つて、此上の光榮は、あるまい。

河原林少尉に死なれたので、乃木は、正直に男らしく、一切の責任を引受けた、といふ事が、同僚や上官の同情を引起したのであらう。また、その後の奮闘が、多くの人の注意を、呼び起すほどに、はげしいものであつた事が、十年の四月に、中佐に任ぜられた所以でもあり、今度の榮轉の原因にも、なつて居るであらうが、いづれにしても、前年の災厄は、一時に憤ひ得て、光輝ある歳は、めぐり來つたのである。

乃木は、どうかすると、人から毛嫌いされ、同じ長州人の間にも、何となく疎外される、傾きはあつた。その性質が、餘りに嚴格に過ぎた、結果ともいへやう。一日、陸軍卿の山縣有朋が、馬車を走らせて、聯隊の衛門をはひらうとした。これを見て、歩哨の一人は、

『待てッ』

と、聲をかけた。馭者は、之れを尻眼にかけて、馬に鞭を加へ、威勢よく、駈け込まうとした。

『こらッ、待たんか』

と、いひながら、今度は、銃剣を、馬の鼻先へ、突出した。馬は驚いて、その足を停めた。

『オイ、何をするのだ』

『待て、といふのに、何故、待たぬか』

『陸軍卿が、乗つておいでなさるのだぞ』

『たとへ、陸軍卿でも、無斷乗入れは、許しませぬ』

此押問答のうちに、山縣は、馬車から降りて、徒歩で入つたが、さア、之れが問題になつて、陸軍省の方では、やかましい交渉をはじめた。乃木は、歩哨の爲した所を、適法の處置として、却て賞讃した位であつたから、陸軍省から、どういふ事を、いふて來ても、更に取合はなかつた。

『陸軍卿と知らずして、之れを咎めた事は、先づ赦すとしても、すぐに、陸軍卿である事を、告げられてからも、猶

ほ頑強に拒んだのは、不穩當である。聯隊長が、之れに關して、相當の警告を與へず、却て歩哨を賞讃した、といふのは、甚だ宜しくない。」

と、いふのが、陸軍省の主張であつた。乃木は、之れに對して、

『苟も、陸軍卿が、此の位の事を知らない、といふのが、怪しからぬ事である。いづれの衙門でも、無斷乗入れはならぬ、となつてゐるのだから、それを咎めたのは、當然の處置であつて、少しも差支がない。陸軍卿が、馬車を降りて徒歩したのは、歩哨が命じたのでなく、陸軍卿が、自ら行つた事であるから、それは、問題にならぬ』と、答へて居た。併し、陸軍省としては、之を問題にした丈けに、その儘には濟まされぬ、とあつて、終に、乃木へ、謹慎を命じた。左様なると、乃木も、之を拒む事は出来ない。不得止、その命令に服したが、心の不平は、抑へ切れなかつた。

謹慎中も、平氣で、外出もしたり、友人を迎へたりして、しきりに氣を吐いて居た。その身は、長州軍閥の一人であるべき、立場になつて居ながら、何時も、反抗的氣分を、持つやうになつたのは、之れも、一つの原因と見るべく、元來が、負氣の乃木は、壓しつけて來られると、頭を下げる事が、出来なかつた。

一一

其當時、乃木が、未だ無妻であつた、といふ事は、友人の間でも、常に問題になつて居た。歳は三十一で、日本の聯隊長になつて居るものが、どうして、無妻であつたか。誰が考へても、其處に、何等かの事情があるのではないかと、疑ふものがあつたのは、無理のない事だ。

之れは、母の孿子に、原因して居た事を、著者は、遠慮なく、いひ度いのである。其事情に立入つて、充分の説明をするには家庭の内容を、一と通り述べる必要がある。

父の十郎は、夙く妻を迎へて、二人の男兒を生ませたが、いづれも病死して、終には妻までが、世を逝つたので、しばらくは獨身であつたのを、媒妁する人があつて、壽子を迎ふる事になつたのである。常陸の土浦で、土屋相模守の家來に、長谷川金太夫と、いふ人があつて、長女が壽子であつた。長男は、仙太郎と稱して、その子が勝太郎、乃木の妹稻子が、それに嫁いで、其間に生れたのが、有名な彫刻家、長谷川榮作である。

十郎が、四十六歳の時、壽子は二十歳で、結婚したのであるから、歳の上からすれば、二十六の差があつた、間もなく生れたのが、乃木であつた、併し、先妻に、二人の子があつたので、戸籍の上では、三男となつて居る。江戸から、長府へ歸つたのは、十郎が、五十五歳の時で、壽子は、二十九歳であつた。どうして、長府へ歸つたか、といふ事情は、前回に述べてある。

長府へ移つてから、殆ど十四年、明治五年になつて、漸く東京へ、歸る事を得た。その間に於ける、壽子の苦勞は並大抵の事では、なかつた。子供は殖えても、藩から受ける手當は、少しも増さぬので、家計の不如意は、實に酷いものであつた。殊に、十郎は、藩主の世子に、傳役として、附添ふ事になつてからは、多く不在勝で、子供や家計の上には、少しも關係しないので、すべては壽子の手一つで、裁きをつけてゆかねばならぬ。

長男の無人は、萩の玉木家へ、修業の爲めに行つて、後には、二人の子供が、残つて居る。それを世話しながら、苦しい家計を、立て、ゆくのであるから、一通りの働きでは、とても、其日が送れない。さりとて、武士の妻が、人の眼につくやうな、内職も出来ず、これには、壽子の苦心も深く、先づ縫張りの賃仕事からはじめて、果は、鹽煎餅をつくつて、町の商人と、約束の下に、一日に幾枚と、極めて送るやうにした。歳は、親子ほどに違つて、而も、嚴格な十郎に事へ、多くの子供を抱へて、此苦勞をしたのであるから、負ぬ氣の男らしい、時には、女と思へぬやうな、強い人になつてしまつた。

十郎には、早く逝かれても、伴の無人は、陸軍へ出てから、追々の出世で、中將に昇つた頃には、もう樂隱居で、暮

らせる身でありながら、昔の氣性は、その儘に、やかましい老母であつた。日清戦争がすんでから、乃木は、臺灣總督になつて、いよゝ赴任する事になつた。今では、内地と、大して變らぬ位に、立派な土地になつたけれど、この頃の臺灣は、全くの蠻地で、少し位の日本人が居ても、何時どんな騒ぎが起るか判らない。臺北のやうな都會にさへ、生蠻の襲ふて來た事は、幾度もあつて、實は、危ない時代であつた。

『あなたは、お歳を老つて居られるのでありますから、今度は、東京の邸で、お留守番を、願ひ度いが、いかゞて御座いますか』

『妾は、お前と一しよにゆきます』

『生蠻と申しまして、恐ろしい野蠻人も居りますゆゑ、東京へ、お残り下さい』

『たとへ、鬼が居ても、かまひませぬ』

『殊には、チブスとか、マラリヤとか悪い病氣も、流行る土地でありますから……』

『病氣は、どこにもあります。それに罹る事を、恐れて居たら、一日も、生きては居られません』

『どうしても、お出でになりますか』

『ハイ』

『それでは、どうも、致方が御座いませぬ。お伴れ申しませう』

『お前は乃木家の當主でありますが、その當主でさへ、行く土地へ、蔭のものが、行けぬ、といふ筈はありません。

殊には、静子も行くのですから、妾も行きます。静子も女なら、妾も女でありますぞ』

『斯ういはれては、どうする事も出来ぬ。乃木は、恐れ入つて、壽子を、伴れてゆく事にした。

晩年の壽子でも、猶ほ此氣性を、有つて居た。況して明治十年頃の壽子は、一だんと、體も丈夫で、氣性も男らしくつた。それ等の事を考へて見ると、乃木の妻帯は、鳥渡むづかしいのであつた。

嫁にゆく女は、世間に多くあるけれど、妻の本務を、果し得るものは少い。芝居や呉服店と、首ツ引をして、朝から化粧三昧に、一日を送るものが多く、厨房の世話さへ出来ぬ、女ばかりだ。舅姑の氣むづかしいのを、うまく撫でてゆく藝當は、とても、心得て居らぬ。御用聞きが運ぶのを待つて居るものはあつても、自分から、籠を提げて、市場へ、買出しに行ける女は、無いやうだ。

厳格な、武士の妻として、殆ど男性的に、なつて居る、壽子の機嫌を取結んで、家庭の主婦たる本能を、充分に現はし得る女は、容易にない、と見て、乃木は、殊更に、妻帯を避けて居たのである。その頃の乃木は、非常に酒を飲んで、暴れる事もあつた。けれども、女に馴染んで、淫慾を貪るやうな事は、絶えてしなかつた。交際なら何處へてもゆくが、夜は、時間を定めて、キチンと歸つて来る。それにしても、三十歳を越えて、無妻で通す、乃木の心は、多くの人に解らなかつた。従つて、種々の事を、いひ觸らすものもあつた位だ。妻を迎へる話になると、乃木は、毎時も言葉濁して、逃げるのが平生であつた。

一夜のこと、乃木は、非常に酔ふて、歸つて來た。

『只今、戻りました』

母の前に、手をつけて挨拶はしたが、アルコールの匂ひは、鼻を衝くほどであつた。

『希典ッ』

『ハイ』

『ちよいと、此處へ来て下さい』

『ハイ』

『よい御機嫌ぢやのう』

『少々飲みすぎしまして、今晚は、酔ふて居ります』

『少し相談し度い事があります』

『ハイ』

『どうぢやね、大概にして、妻を迎へては……』

常に母を恐れては居たが、此事を、いひ出されるほど、乃木の身に取つて、苦しい事はなかつた。

『未だ早いでせう』

『お前は、三十を越えて居るではないか』

『ハイ』

『中佐に進んで、聯隊長にもなつて居るのに、妻を迎へないのは、人の蔭口を、招く因ぢやよ』

『……』

『母が附いて居るのに、いつまでも獨身に置くと、世間の口が五月蠅いから、もう大概にして、妻を迎へなさい』

『恐れ入りました』

『どうか、頼む』

『ハイ』

『お前が面倒なら、妾が捜してもよい』

『イエ、私が捜します』

『それでは、早速捜して下さい』

『ハイ』

乃木は、這々の態で、母の前を退き、自分の部屋へ歸つてから、ほつと、息を吐いた。

『ア、困つた事になつた。妻のないのも不自由ではあるが、妻を迎へてから、苦勞の日を送るのも、厭である。けれども、今のやうにいはれては、どうしても、迎へねばなるまい。うまく思ふ通りの女を、捜し當ればよいが、萬一にも貰ひ外すと、それこそ、苦勞の因ぢや。併し、斯うなつては致方がないから、妻を迎へる事にしよう。失敗つたら、失敗つた時の事ぢや』

と、茲に始めて、妻を迎へる決心をした。けれども、その人選については、充分に注意をしないと、後で難儀を爲るに違ひないから、その點は、乃木も、深く考へて居たらしい。

聯隊の副官は、伊瀨地好成といふ人が爲て居た。その時分には大尉であつたが、後には中將に進んで、男爵を授けられ、貴族院議員にもなつた。

私が、偶々朝鮮の京城に居た時、東京の新聞に、伊瀨地男爵が、死亡された旨の記事が、出て居た。その際に、著者は、斯ういふ事を、思つた。

『斯ういふ人の、死を報ずる場合には、もう少し、其人柄を、判然書いて、特に其人に就ての特長か、何かを書添へて、讀む人の注意を引き起すやうにしたらば、どうであらうか。同じ死亡を報ずる、にしても、乃木夫妻の媒妁人であつた事を明かにしたら、簡単な死亡記事にも、一種の情味が、生じて來て、乃木將軍を、追憶する材料にも、なつたらうに、まことに惜い事である』

著者の此の感想は、伊瀨地を知る人のすべてが、同じであつたらう、と思ふ。

四

乃木は、例の通り、聯隊へ出て來た。退勤の時間が來ると、

『オイ、伊瀬地大尉ッ』

『ハイ』

『君に、少し相談があるから、残つて欲しいが、外のものは、遠慮なく歸るやうに、君からいふてくれ』

『ハイ』

伊瀬地は、外の將校へ、此事を申傳へて、自分は、乃木の前へ出た。

『皆歸るやうに申傳へました』

『それは、御苦勞ぢやツた』

『御用を、承はりませう』

『まア、それへ、かゝつてくれ』

卓子の前の、椅子に指して、乃木は、斯ういふた。

『御免蒙ります』

伊瀬地は、丁寧に會釋して、椅子にかゝり、乃木の、何かいはうとするのを、待つのであつた。

『外の事でもないが、一身上の事で、少し相談し度いのぢや』

『はア、あなたの一身上の事で、御座いますか』

と、伊瀬地は、不審の眉をよせた。乃木は、微笑を含みながら、

『わしは、急に妻を迎へる事に、なつたのぢや』

『それは、何よりの事で御座います。而て、何れから御迎へになりますのですか』

『其處までは進んで居らぬ。これから捜さうといふのぢや』

『これから、御捜しになるのですか』

「うむ、それを、君に頼み度いのぢやよ」

「小官に……」

「君に、是非たのみ度いと、思つて、相談をするのぢや」

「左様いふ事なら、小官なぞに仰せがなくても、御國元の御友人や、御親戚の間で、いくらも、其人があらませう」

「イヤ、わしは、長州の女が大嫌ひであるから、君に、たのもうといふのぢや」

「ははア」

「こんな事まで、長州のものに、世話をされるのは厭ぢやから、君を、煩はし度いと思ふ」

「成程」

「わしは、薩摩の女が好きなのぢや、どうせ、生涯一つにするのなら、好きな女の方がよいからな」

伊瀬地にも、乃木の平生は、よく判つて居る。同じ長州人でも、少し氣風の變つて居る、乃木は、何となく別物扱ひを、爲れて居る事もよく知つて居るので、つまりは、さうした感情の爲めに、他國人の自分へ、斯ういふ相談を、かけるのであらう、といふ事も、漸く覺れたのであつた。

「薩摩の婦人は、他國の方へは、不向きであります」

「それも、承知の上ぢや」

「御承知でも御座いませうが、薩摩は、昔から、婦人に對する躰が、全然、違つて居りまして、歴史の上にあります。スバルタのやうな道り方をして居りましたから、婦人の教育などは、餘り重んぜられないで、恰も男と同じやうに強い女を、勇ましい女を、といつた調子に、育て上げる所から、殆ど男が女が、區別のつかぬやうな女が、多く居りました、とても他國の人には、世話をする事の出来ないものと、小官は、思つて居るのであります」

「そ、それが、可いのぢや。男女の別の、判然しないのが可い。さういふのを、見付けてくれ」

斯ういふて頼まれると、伊瀬地も、頗る嬉しい感じがする。

『別に、むづかしい條件はない。つまり、相當したのでさへあれば、宜しいのぢや』

『ハイ、さういふ次第なら、探して見ませう』

『どうか、頼む』

『ハイ』

『成べく、早い方が、よいぞ』

『どうして、左様おいそぎに、なるのですか』

『迎へるとなつたら、矢張り早い方が、よいからな』

『承知いたしました』

其日の相談は、それですんだが、伊瀬地は、これから、奔走をはじめた。長州の軍將中で、最も見込みのある、乃木から、薩摩の女を望まれた事は、伊瀬地の身に取つて、どれほど、嬉しかつたか判らない。一生懸命になつて捜したが、容易に見附けなかつた。

乃木は、簡単に『相當なものでよい』と、いふて居るが、その『相當なもの』が、容易に見付からぬのだ。別々に生れて、別々に育つた人間に『相當のもの』といふのが、容易に在る可き筈はない。大概は『相當のもの』でないのを、強てゆづり會つて『相當のもの』として、迎へもすれば迎へられもして、夫婦なるものは、出来て居るのである。況して、乃木に、相當した女は、ちよつと、出来合ひには、ないのが當然だ。

五

鹿兒島の城下に、醫者を本業にして、傍、儒學を教へて居た人に、湯地定之と、いふものが居た。男の子供が、四

人なつて、娘が三人、長男の定基は、元老院議員から、貴族院議員になつた。次男の定康は、海軍大尉で早死したが、三男の定監は、海軍の機關中將から、是れも、貴族院の椅子を獲た。娘のうち四人目が、名を志知と謂ふ、お七と呼ばれて居た。安政六年の十一月十七日生れて、十四歳の時、東京へ移り、赤坂溜池の定基方で、女の教育を、一と通り仕込まれた。

その頃は、今のやうに、女の教育が、未だ進んで居なかつたから、麹町女學校を、卒業した丈けて、もう高等の教育は終つたものとされて居た。兄の定基は、却々やかましい人で、お七の教育については、嚴重な注意があつて、學校から歸つて來ると、家庭の事に當らせて、よく女の取る可き、道を教へた。負け嫌の氣性を有つた、お七は、妙齡の頃から、男らしい態度で、日本の婦人に、有り勝ちの、嫺々とした、やさし味は少く、すべてが男性的であつた。伊瀬地は、同國人といふ關係から、定基に、親しく交つて居た。一日、伊瀬地は、相談があるといふて、訪ねて來た。

『些と、立入つた話ではあるが、お七さんは、どこかへ、縁付ける御考へかな』

『どうせ、左様する事には、なつて居るが、未だ何處にも、約束はない』

『どうぢやらう、此上もない對手があるのぢやが、相談に應じてくれまいか』

定基は、しきりに考へて居たが、

『斯ういふ事は、對手次第であるが、併し、人の生涯に、關する事であるから、容易に定める事は出來ぬ。君から、對手の名を聞いて、それで直ぐ定めるか、どうか、ちよつと、わづかしい』

『それは、縁不縁で、いたし方はないが、兎に角、良縁なら出して、くれられるか』

『さ、未だ本人の心を、聞いて置かないから、さういふ話のあつた事は、申聞かせて、縁入る氣があるか、何うか、先づ其れを聞いてから、あとの話は、聞く事にしたい』

『成程、それも、道理ぢや』

『對手の名は聞かずともよいが、どういふ身分の人か、といふだけは、聞いて置き度い』

『陸軍中佐で、聯隊長をして居る人ぢや』

『歳は、どれほどか』

『三十一になる』

『無論、再婚ぢやらうな』

『イヤ、初婚ぢや』

『ははア、それは不思議ぢやな。中佐で聯隊長、而も、三十歳になつて、初婚といふのは、何ういふ理由か』

『老母が一人あつて、昔の武士氣質を、その儘の婦人であるから、普通の嫁を貰つても、容易に治まるまい、といふ懸念があつて、いろいろに勧められても、今迄堪へて居たので、斯う遅れたのであるが、その外に、何の理由もな

い』

此説明を聞いて、結婚の遅れた人である、といふ事だけは判つたが、それにしても、老母といふのが、よほどむづかしい人だ、といふ事は察せられた。併し、老母は、如何に氣むづかしい人でも、本人は、親孝行に違ひない。さうすれば、人に對して親切な、やさしい所のある、立派な人物であらう、との想像はされるのであつた。

『よく解りました』

『それでは、御本人とも御相談を願ひます』

『承知いたしました』

『御返事は、成る可く、急いで願ひ度い』

『兩三日のうちに、御返事を申し上げます』

『何分、よろしく』
之れで、相談は終つた。

丁度、食事時だ、といふので、御馳走が出た。お七は、杯盤の周旋をして居るので、伊瀬地は、今更の如く、その舉動に注意した。その一舉一動、テキパキして居て、普通の女に、よく見る、やさし味には乏しいが、何とかなく淡泊として居て、氣持がよい、といふ感じが起つた。

それから、伊瀬地は、返事の來るのが、待遠しく思はれた。自分が、嫁を貰ふやうな心になつて、しきりに湯地の方の相談が、どうなるかと、そればかりが氣になつて、勤めも手につかぬ、ほどであつた。三日ほどすると、定基から、手紙が届いた。それには『先日御來談について、猶一應會見し度い』と、書いてあつた。待ちかねて居たのだから、伊瀬地は、すぐ出かけて行つた。

六

『お七、ちよつと、おいて下さい』

『ハイ』

『少し相談がある』

『何て御座いますか』

『お前は、もう二十歳に、なつたのだが、身を堅める事を、考へなければいかん』

『ハイ』

『姉さんは、それ／＼に嫁づいて、身を堅めたが、お前も、いつまで斯うしては居られまいから、何とかせねばなるまい』

『さう急ぐにも及びますまい、と存じます』

『急ぐには及ばぬが、故意と遅らせるのも、感心の出来ぬ事ぢや』

『それも、左様で御座います』

『女も、廿歳となつたら、早い方ではない』

『……………』

『相當な對手があつたら、定めてもよいか』

『兄いさまの御見込みで、良いとなりますれば、妾に、異存は御座いませぬ』

『實は、伊瀬地さんからの話で、斯ういふ人が、あるのぢや』

と、定基は、伊瀬地から、聞いた儘の話を、一通り聞かせて、

『その本人は良いやうぢやが、母御といふのが、餘ほど、むづかしい御方のやうにも思はれる。お前は、どう思ふか
ね』

『どうせ、御年寄といふものは、やかましいに、極まつて居ります。ほどよく御事へ申しましたら、左迄の事も、あ
りますまい』

『お前の覺悟さへ、確かして居れば、よいのぢやから、もう少し聞糺して、また相談する事にしよう』

『ハイ』

その翌日は、定基の晝面に依つて、伊瀬地が来てくれたから、猶ほ本人の身上について、詳しい事を、聞いて見ると、意外にも、その本人といふのは、乃木中佐である、と聞いて、定基は、頗る喜んだ。安心して、お七を呼んで、更に此事を告げた。

更に此事を告げた。

大體の話は、之れで纏まつたから、此上は、乃木の方を定めれば、双方に、大した故障もない、といふ事に、なる

大體の話は、之れで纏まつたから、此上は、乃木の方を定めれば、双方に、大した故障もない、といふ事に、なる

更に此事を告げた。

大體の話は、之れで纏まつたから、此上は、乃木の方を定めれば、双方に、大した故障もない、といふ事に、なる

のである。

伊瀬地は、例に依つて、聯隊へ出た。一日の軍務も果て、もう退勤の時間に、なつた。

『かねて御話の一條、漸く御報告を致す迄の事に、なりました』

『うむ、どういふ事に、なつたか』

『是れならば、といふのが、漸く見付かりましたので、今日は、それを申上げ度いのです』

『それは、御骨折ぢやつた』

『親は、士籍ではありませんが、子供は、多く海軍の方へ出て、相當の地位を、得て居ります。元は、鹿兒島の醫者

であります、その娘と申しますのは、名は志知と申しまして、歳は……』

『可し、よく判つた。それを定めてくれ』

『未だ詳しい事は、申上げて御座いませぬ。歳は、既う廿になりました……』

『もう宜しい。その上の事は聞かずとも、君が可い、と思ふたら、それで可いのぢや。何を聞いた所で、己は知らぬ

ものぢやから、君を信ずる外はない。いづれ本人に逢へば、萬事は判る』

流石に、伊瀬地も驚いた。が併し、快く感じた。これほど信用されて、事を頼まれたら、骨折の甲斐はある、とい

ふものだ。

『先方には、一と通りの相談を、透けて來ましたから、此方から宜しい、と申してやれば、先づ纏まると思ひますが、

それからは見合ひの式を、どういふ風にしますか、その點について……』

『ちよつと、待てツ』

『ハイ』

『そんな事は止めたら、どうぢや』

『見合ひは止めるのですか』

『已れも一度、友人の爲めに、その式といふものに、立會つて見たが、まことにつまらぬものぢや。那アいふ事で、人間の生涯は、極め度くない。虚禮のやうなものぢやからな』

『御道理で御座います。併し、人間が、一生に一度の、大禮を擧げるので御座いますから、まア、昔からの習慣で、あまり害のない、と思ふ事丈は、矢張り一と通りは、行つて置く方が、可いと思ひます』

『君に、まかせてあるのぢやから、強て反對はせぬが、式を行るにしても、簡單にしてくれ』

『宜しい。それは、御一任下さい』

之れから、伊瀬地は、双方の間を、幾たびか往來して、話は纏まつた。乃木の母にも逢つて、之れまでに、運んだ事情を、一と通り話したので、母も喜んで、

『それは、いろ／＼と、御世話で御座りました。先方に異存がなく、希典が、よいと申しますなら、妾は、喜んで同意いたします』

と、いふたので、いよく話は、定まつた。

七

すべての相談も運んで、いよく、見合の一段に、なると、伊瀬地も、ちよいと困つた。絶対に止めよう、とは、いふて居ないが、しきりに嫌つて居るのは、よく眼にも見えて居るから、可成くは、都合のよい方法を考へて、簡單な事にして、すませたい、と、苦心の末、不圖、思ひ付いたのは、自分の新宅が出来たので、郷里の先輩や、親友を招いて、一夕の宴を張る事に、なつて居たから、之れを利用して、乃木を招き、同時に、お七の方も呼んで、それとなく、庭の散歩か、廊下の摺違ひに、見せ合へばよい、と考へたので、その支度に取りかゝつた。

麹町紀尾井町七番地に、伊瀬地の新宅は出来たのであつた。以前、高島鞆之助の居た、邸に沿ふて、左へ曲ると、しばらく、大島久直將軍の住んで居た、家があり、其處が、昔の伊瀬地の邸であつたが、今では、其一廓が、ドイツ人の所有に歸して、ホフマンとかいふ人の、上智大學なるものになつて居る。

新宅披露の來賓には、東京鎮臺司令、長官の、野津鎮雄が主席であつた。弟の道貫は大佐で、參謀長をして居たが、之れも列席した。川村純義、高島鞆之助、樺山資紀、西郷從道を始め、多くは薩摩の軍將、それに數名の、他國人も加はり、乃木は、そのうちの一人として、席に列なつたのである。

奥の女客としては、定基の妻と、お七が來て居る。斯うした方法で、ほんの申譯の見合ひをすませた。どちらとも、容貌好みを、するやうな人でないから、滞りなく、双方とも、及第した譯である。

酒盃が、一巡した時分に、伊瀬地は、野津少將の前へ出た。

『今日は、よくおいで下された』

『折角の招ぎぢやから、遠慮なくやつて來た』

『どうか、ゆつくり飲んで下さい』

『うむ、充分に飲む』

『いづれ明日は、正式に御願ひ致すつもりであります、乃木中佐に、妻の世話をいたしました』

『ふーむ、左様か、乃木は、未だ無妻ぢやつたのう』

『ハイ』

『どこから、迎へる事に、なつたか』

『國元の湯地の娘、お七どのを、世話しました』

『えッ、お七……』

鎮雄は、しきりに考へながら、

『お七には、今其處で逢ふたぞ』

と、いふた。

『今日は、見合ひの爲に、呼んで置いたのです』

『左様か、そりや知らなかつた』

『特に見合ひ、といふては、乃木中佐が嫌ひますので、今日の宴會を、利用したのであります』

『己ドン等は、それに立會つた譯ぢやな。ハツハ、、、』

『それに就いて、閣下に御願ひいたし度い事が、あります』

『どういふ事か』

『長州人ではありますが、彼れは全く別者で、殊に、將來のある軍將でありますから、此媒妁は、閣下に願ひ度い、

と思つて居りますが、どうでありますか』

之れを聞くと、鎮雄は、一も二もなく、首肯いた。

『可し。それは、己ドンが引受けた』

『詳細の事は、明日、申上げるとして、陛下への願ひも、閣下から宜しく御手續きを願ひます』

『可し』

『之れで、萬事定まりました』

『此處で、披露して置け』

『未だ、早いでせう』

『イヤ、さうでない。かういふ事は、早く披露して置く方が、よいのぢや。己ドンからいふてやる』

氣の早い鎮雄は、すぐ立上つて、

『オイ』

一同は、箸や盃を措いて、急に静かになつた。

『今日は、伊瀬地の新宅祝ひぢやが、それに加へて、もう一つ、目出度い事があるから、それを披露する。乃木中佐が、國元の湯地の娘を、貰ふ事になつたのぢや。その媒妁は、己下んが爲る。お七ツつアんが、乃木中佐の妻に、なるのぢやから、實に目出度か事ぢや。前祝ひのしるしに、胴揚でもしてやれ』

『わッ』

と、聲を上げるや、乃木を押へた。逃げ遅れた、乃木は、遂々擔き上げられて、二三度は、疊へ叩きつけられた。

『見合ひといふものは、痛い』

是れは、乃木が、いふたのだ。

八

結婚式は、明治十一年の八月廿七日に、芝櫻川町の乃木家に於て、極めて質素に、行はれた。参列した人も、親戚と親友二三に限られて、飽迄も虚飾を避け、贅澤に流れぬやうに、ほんの内輪丈けの、集まりであつた。

その晩に、斯ういふ事があつた。三々九度の式がすむと、それから打寛いで、飲みはじめたのであるが、主客とも何時か酔が廻つて来ると、今夜は、嫁入の宴である、といふ事を忘れて、飲むはく、さかんに鯨飲して、殆んど泥酔に近く、始めのうちは、箸拳なぞで、飲んで居たのが腕角力から、立角力になつた。

來て居る親友も、お開きの時間を忘れて、しきりに力比べを、やつて居る。酔ふて力盡くの騒ぎをするのであるから、とても、堪まつたものでない。乃木は、對手と引組んだ儘、ぐつすり寝込んでしまつた。如何に、起して見ても、

起きる様子がない。引き放さうとしても、しつかり組付いて居て、放れなかつた。

今、嫁に來たばかりの、お七も、之には驚いたらうが、男優りの負ぬ氣を出して、俄に衣物を改め、金盥に、水を汲んで來て、その枕元に坐つた。水に浸した手拭で、乃木と友人の頭を冷して、介抱をしてゐるうちに、夜が明けてしまつた。大概な娘なら、泣き出してしまふだらう。嫁入りした晩に、斯ういふ落ち付いた動作は、普通の女に、出来る事でない。

眼が覺めると、流石に客は、面目の悪いやうな容子で、すぐ出かけてしまつた。乃木も、四邊を見廻して、不圖、お七を見た。

『お目覺めて御座いますか』

『やア、失敬した』

お七は、ぱつと、顔が赤くなつた。

『わしは、之から聯隊へ行く』

『未だ、お早いで御座いませう』

『イヤ、早くても宜しい』

『左様で、御座いますか』

乃木は、立ち上つて、支度にかゝつた。母は、未だ寢てゐるらしい。

『母には、宜しく申上げてくれ。御挨拶せずに出勤するから、後は、宜しく頼む』

『ハイ』

斯うして、乃木は、ズン／＼出て行つた。後に残された、お七は、何から始めてよいか、少しも勝手が判らない。甲斐々々しく支度して、先づ座敷の掃除をはじめた。

老母の壽子は、漸く起きて来て、

『オヤ、もうお目ざめかね』

『ハイ』

『作は、どうしました』

『もう聯隊の方へ、御出勤になりました』

『大層はやかつたね』

『お母さまに、御挨拶をせずにゆくから、宜しく申上げてくれ、と、仰しやつて居られました』

『左様かへ』

『斯ういふ氣分の件ぢやから、お前も、骨が折れるだらうが、たのみますよ』

お七は、何となく涙が出て來た。生れてから、始めての良人には、昨夜のやうな仕向けをされて、ふいと、出てゆかれたが、むづかしい人だ、と聞いて居た、老母には、斯うしたやさしい事をいはれたので、嬉しいやうな氣がすると、急に涙が出て來て、どうしても、押へきれなかつた。

乃木が、聯隊へ出て來ると、伊瀬地は、すぐ前へ出て、

『昨夜は、失禮いたしました』

『やア、いろ／＼、御厄介になつた』

『とう／＼、あのまゝでしたか』

『うむ』

『奥さん、驚いたでせう』

『すつかり、介抱してくれた』

『那の調子では、宜いでせう』

『うむ』

親しくして居るものが、代るべく来ては、祝辭を述べた。

長州軍閥の連中は、之れを聞いて、多く憤慨して、

『乃木の奴、實に怪しからん事をする。人もあらうに、薩摩の女を迎へることは、如何にも面當がましい。殊に、媒

妁は、野津司令官だ、といふが、何といふ皮肉な奴だ』

此感情は、長く續いて、長州軍人のうちには、乃木に反感を有つものが、少なからず在つた。山縣も、心中甚だ不快には思つたが、流石に、口には出さなかつた。それを、露骨に現はしたものが、桂太郎であつた。乃木も、元來か、桂を、軽く見て、何の糞ツといふ氣があり、いつも、桂とは、睨み合ひであつた。

乃木が、長い間、不遇で居たのは、是等の事情が、原因であつた。

結 婚 の 後

一

乃木夫婦の事を語つて、その爲人を賞めるものも多くは、初めから、幸福であつたやうに、説いて居る。琴瑟和合、一家に春の風が吹いて、まことに楽しい、家庭である、と、いつたやうな事を、いふてゐるが、それは、全く御世辭をいふのであつて、實際は、左様な次第でなく、日を逐ふて、寂しい家庭になり、恰も冬の枯野を行くやうな、陰鬱にして、面白からぬ状態で、あつたのが、眞の事實である。

お七と、いふ名は、江戸時代から、東京の人は、嫌つてゐるのみならず、呼び難い、といふ點もあつて、静子と改めた。乃木の母は、男性的の勝氣であつた上に、酒も飲むから、それに侍いてゐる、静子は、一と通りの氣苦勞でなかつた。

すべて、人の家と、いふものは、居る人が、殖えるに従つて、賑やかになるものだ。殊に、婦人が殖えると、少しは賑やかになつて、左まで可笑しくない事にも、笑ひこけて、賑ふのが常例である。全體、人が笑ふ、といふのは、何時の世に、どういふものが、考へたのか知らぬが、まことに結構な事で、どんな家庭にも、此笑ひといふ事があるので、平和が保てるのである。若し、人間社會から、笑ふ事を除いたら、朝から晩まで、喧嘩で押通すだらう。その證據には、笑ひながら喧嘩するものはなく、喧嘩の仲裁する人も『まあ私にまかせて、笑つて下さい』と、いふては

ないか。兎に角、笑ひは、人の心を和けて、世界を、泰平に導くものだ。歐洲の大戦も、オーストリーや、セルピヤの主權者が、笑つて居たら、始まる筈は、なかつたのである。一方で、むづかしい面をして睨みつけるから、何だ貴様等が、といった調子で、すぐ衝突するやうにも、なるのである。それであるから、人は、成る可く笑つてゐるに、限る。笑門福來とは、昔からの格言、實に、うまい事を、いふたものだ。

朝はやくから、壽子は、火鉢の前に、むづかしい顔をして、坐つて居る。その前に、靜子は、すまして坐つてゐるのだから、睨み合ひをして居るやうなものだ。どちらも、笑ふと損する、といった容子である。

其處へ、乃木が、何時でも、むづかしい顔を、爲てゐるのであるから、どうにも、仕やうのない家庭に、なつてしまつた。されば、といふて、卑しい人達ではないから、罵るとか、騒ぐとか、いふやうな、下等な振舞は、絶えてしないが、何となく物足らぬ、といふ風で、日を経るに従ひ、寂しく陰氣な家になつてゆく。是れでは不可と、乃木は、疾くに氣が付いて居たのだが、外の人のやうに、自分から、先に立つて、面白い動作をして、母や妻を、笑はせる事などは、出来ぬ。靜子にしても、悪氣があつて、斯うした態度を、爲てゐるのではなく、故意との御世辭がいへず、生れつきの黙り者で、どことなく、不愛想な人で、あつたから、自然に、母と睨み合ひにも、なるのであつた。乃木は、心ひそかに考へた。

「斯ういふ風で、日を送つて居たら、そのうちに、母と妻の衝突は起る。絶えて笑ふ事のないものが、一度でも、何事が衝突したら、もう取返しつかぬ事になつて、一生の睨み合ひに、ならうから、是れは、何とか爲ねば、なるまい。」

と、人知れず、苦心の末、しばらく靜子を、別居させる事に、決めた。けれども、それは、乃木が、心のうちで、決めた丈けであるから、誰も知らなかつた。

母が、親戚へ行つた、留守を幸に、乃木は、かねての考へ通り、靜子を、別居させる事にした。

『オイ、静ッ』

『ハイ』

『ちよツと、此處へ……』

『御用で、御座いますか』

『お前は、之から引移るのぢやから、そのつもりで、支度をなさい』
餘りの突然に、静子は驚いた。

『妾は、他所へ移りますので……』

『左様ぢや。上野公園の裏手に當る、谷中といふ所ぢや』

『あなたも、御一しよで御座いますか』

『否、お前だけぢや』

『妾丈けが移るのは、どういふ理由で、御座いますか』

『それを聞いて、何うする氣か。己のいふ事が、氣に容らなかつたら、お前は、反抗する覺悟か』

『爾ういふ次第では御座いませぬ』

『それならば、強て聞くに及ばぬ。黙つて行け』

『ハイ』

静子は、澁々ながら、支度を始めた。

一一

突然、別居を命ぜられて、静子は、不平のない道理はなく、大に争つて、見度くは思つたが、それだけは、ちつと

堪へた。それにしても、良人の冷酷な仕打には、ひどく怨みを持つた。同時に、自分を顧みると、更に悪かつたと、思ふ事はないので、此別居は、何の爲めの別居か、その理由を、知る事が、出来なかつた。

賑かな、櫻川町から、寂しい、谷中へ移つて、而も、一人住ひの寂しさは、とても、堪へられたものでない。谷中は、寺院の多い所で、氣味の悪い墓地と、草の生え茂つて居る、空地には、晝間から、貉や狸が出る位で、日が暮れたら、ばツたり人通りが絶えて、恰て無人境の感があつた。晝でも、墓参りの人位で、土地のものは少いから、往來は寂しい、偶々賑かだ、と思ふ時は、葬式が通る位のものだ。

その頃には、今のやうな電燈はなく、瓦斯があつても、芝や京橋の一部位で、外の區に行渡つて、使はれては居ない。一般の商家では、未だランプを用ゐて居た。それも、僅に店頭丈の事で、奥の座敷は、多く舊式の行燈を用ゐて居たのである。

寂しい町の、狭い家に、朝から晩まで、不平と煩悶を抱いて、若い女が、ただ一人で、日を送つて居るのであるから、その苦痛は一通りでない。夜になると、一層の寂しさに、或は、生家に居た時の、樂しさを思ひ浮べ、慈愛をかき、父母の事や、兄弟の温かい、手に導かれて居た、處女の頃を、顧みる事もあり、或は、乃木といふ、良人を持つてから、今日に至るまでの事を、いろ／＼に追憶して、弱き女の身の前途を、氣遣ふ事もある。その思ひは、千々に亂れて、悶える事もあれば、焦れる事もあつて、今は、自分の生命を、どうして支へてゆかうか、といふ事さへ、判らなくなつた。

斯ういふ時に、多くの女は、ヒステリーに見舞はれて、その生涯を、病んで送るやうに、なるのであるが、静子の負ぬ氣は、動もすれば亂れんとする、精神を抑へ、侵し來らんとする、ヒステリーと闘つて、僅に一方の血路を、求め得たのである。

静座黙想、一切の煩悶から、免れる爲に、毎夜、おそくなると、行燈の前に坐しては、すべての妄執から脱し、魂

を鎮めて、無念無想の境に、入るべく、自然の工夫を積んで、終に其三昧に、入る事を得た。之れから、といふものは、幾分の安心を得て、漸く眠る事が、出来るやうになった。流石に、静子は、偉い女であつた。

一夜、いつもの通り、行燈の前に静座して、冥想に耽つて居ると、天井裏に、けたたましい、鼠の走る音がしたので、不圖、眼を開いて、四邊を見廻して居たが、思はず膝をうつつ、

『ア、妾が、間違つて居たのだ』

と、茲に大悟一番して、前途に、新しい光りを、見たのである。その夜は、今までになく、安眠が出来て、翌朝の心地は、闇い穴の中から、明るい世界へ出たやうに、何ともいへぬ、快さであつた。と一通りの用事を、すませてから、乃木へ宛た、手紙を書き、之れを車夫に持たせて、聯隊に届けた。乃木は、静子からの手紙であるから、とに角披いて讀むと、

『今迄は、妾しの心得違ひから、御心配をかけて、申譯がない、些と、妾しに、考へも御座いますから、お序の節で宜しいから、御立寄を願ひ度い』

との事が書いてあつた。元來、乃木は、静子を憎んで居たのでなく、深く愛して居たのである。若し憎んで居たら、離別してしまへば可いのだ。離別といふ事は、善くないかも知れないが、日本の人は、昔から、其れを軽く、取扱つて居る風があつて、之れが爲めに、離別國と、いふ名もつけられて、居る位だ。家風に合はぬといふ、一言で、女の大事たる、離別は、直に解決されてしまふ、男の眼から見れば、女の人格は、全く認めて居られないのであつて、その生命も、將た貞操もすべて男の思ふ通りに弄ばれて來たのである。

乃木が、静子を、愛して居なかつたら、寧ろ、事の面倒を厭ふて、或は離別の方法を、取つたかも知れないが、乃木は、左様した、冷たい人でなく、矯直す事が出来るなら、静子の氣性を直して、唯一の妻として、生涯を、共に送り度い、といふ考へであつたので、谷中の別居を、思ひ付いたのであつた。

年は、廿歳を越えて、人並み外れて、負けぬ氣を、持った静子に、理窟詰めの、叱言をいふて、頭から抑へても、それ、何の甲斐もない事であるから、静子が、自分から、悟り改めてゆくやうに、したいと、深く考へて、斯うした方法を、取つたのである。

二二

『お前の心得が、違つて居るから、しばらく獨居して、考へて見ろ』

と、口にはないで、黙つて寂しい所へ、移されたのであるから、静子には、何の爲めの仕置が、解らなかつた。それであるから、始めのうちには、怨みもすれば、悶えもしたのである。乃木の心が、漸く解つて見ると、自分の至らなかつた事が、はつきりと、頭惱に、浮んで來た。

乃木は、静子の手紙を見て、聯隊の歸りがけに、やつて來た。

『手紙を、見たから來た。用事は、何か』

『これは、恐れ入りました。何事も、皆な妾の、不心得からで御座います。妾は、生れ變りましたから、どうぞ御邸へ、おかへし下さるやう、願ひ上げます』

『えッ、生れ變つた、と申すのか』

『ハイ』

『左様か、それは喜ばしい。お前が解つてくれぬと、己れ一人が、苦しむのぢや』

『御心配をかけて、相済みませぬ』

乃木は、よほど嬉しかつたか、眼に露を浮べて居た。

『可し、すぐ歸つてくれ』

『有難う存じます』

『さ、支度をしろ、俵を、いふてやる。これから、己れは、家主へ行つて、話を、つけて来る』

家賃の日割勘定をすませ、俵屋に荷物を託して、二人連れて、歸つて来た。それから後の、乃木家には、春の暖かい風が吹いて、笑ひ聲が、賑やかに聞えるやうに、なつた。

人の家は、主婦の梶の取りやう一つで、どうにでも、なるものだ。静子は、決して悪い人でもなく、婦人としての勤めを、知らぬのでもなかつたが、愛想のない、強い氣性の生れてあつたから、つまり、同じやうな性質のものが、三人集まつて居たので、何となく窮屈な所があつたのだ。それが、さらりと除れて、やさし味が出て来たので、面白い話も出れば、笑ふ事も、あるやうになつた。そのうちに、子供が生れたので、壽子は、孫の世話にかゝつて、氣も和らいて来る。静子に對しても、當りがよくなつて、来たから、一家は、しつくり治まつてゆく。

(静子夫人の別居に關しては、事柄が事柄だけに、その事の真相は洵に調べ難く、同時に、臆説もまた紛々たるを免れない。例へば、別居の場所は、或は湯島と云ひ、或は根岸と云ひ、又谷中とも云ふし、其時期に就ても、明治十四年だとか、十五年だとか、或は結婚して一年目だと、云ふ。又、勝典を伴れて行つたと云ふ説もあれば、保典の妊娠中であつたといふ説もあるし、二兒共に伴れて行つた、とも云はれる。別居の事は、夫人の申出から、といふ人があるかと思へば、乃木の命令だと云ふ者もあり、一方には、又、母堂が之れを命じたと云ふ説もある。斯くの如く、種々雑多の説があつて、頗る判断に苦しむ次第であるが、要するに、母堂と、夫人との間が、暖かに行かなかつたのが、根本の原因であつた、といふ事は、實際であつた。それが爲めに別居となり、別居の結果として、夫人の心に、新しい天地が開けたのであるから、それだけの意義さへ現はして置けば、大體の効果は、收め得たものと考へるので、著者は、暫くやかましい、考證を離れて、主として心境を現はす事を目的として、別居問題を述べた事にしたのである。

尙此事件の真相に就ては、嘗て、乃木家の家庭教師をした事のある、芹澤登一といふ人の『母としての乃木夫人』なる書物の中に、書いてある事が、良き参考である、と思ふから、其大意を、紹介して置く。

『新舊思想の隔たりもあり、又姑は既に最初に於て此結婚に就て、意に滿たなかつた所があつたのではないかと、窺はれる。明治十二年八月廿八日に、長男保典が生れたが、家庭の圓滿は齎さなかつた。翌年に次男保典が生れたので、今度こそは必ず姑の心も和いて、幸福なる家庭を築しむ事が出来よう、と期待したのであつたけれど、此希望も亦裏切られてしまつた。斯くて、知らず／＼の間に、不愉快な月日を、互に過して来たが、或日、突如として、姑は、將軍に對して、自分は、淺草のいねの所へ別居したい、といふ事を申出た。いね子は、將軍の妹で、長谷川家に嫁し、淺草に居住してゐた。

之れを聞いた將軍は、頗る驚いて、母堂を宥めたのであるが、豫てから、母と妻との間にともすると、面白からぬ様子のある事は、心附いて居るのであり、斯うして母堂より別居の申出があつて見れば、之れに對して、何とか考慮を廻らさなければならなくなつた。

そこで或日、母堂に對して、勝典も大分大きくなつたに就て、幼稚園へ入れたいと思ひますが、東京には、本郷のお茶の水に一ヶ所しかありませんから、そこに入れるとすれば、赤坂からは、遠くて不便ですから、其附近に妻子共を住ませたく思ひます。何分お許しを願ひます、と申述べ、母堂にも異存がなかつたので、夫人にも、其旨を含ませて、早速、本郷區湯島天神附近の或粗末な裏家に、夫人と兩典、他に乳母の野村かねと、四人暮しの忙しき生活を營ませるやうになつたのである。其家は、將軍が自ら探して來たのである。

別居の時期と場所に就ては、夫人の父君、湯地定之翁が、明治十五年一月三日逝去の際、夜中、夫人は保典を抱き、將軍に伴はれて、赤坂新坂町の邸を出て辻俤に乗つて、芝區白金志田町の湯地家を弔問された事實があるから、夫人が兩典を伴ひて別居されたのは、毫も疑ふ餘地なく、而してそれは明治十五年の春頃で、場所は各資料に徴して、

湯島天神附近と信ぜられる。時に夫人は、二十四歳であつた。

夫人別居後數月、曩に米國より歸朝して、佐世保鎮守府に在勤中の兄定監が、偶々上京して、その假寓を訪ねると、如何にも質素な裏家住居なので、衛生にも子供の養育にも、宜敷くないとの意見から、芝區三田松坂町五十番地岩崎家の離れ座敷へ、移轉せしめた。

別居中、將軍は屢々訪ねて、子供等の發育状態を見て、悦びながらも、而も、同棲の時と同様、夫人に對しては、格別、慰撫の言葉もかけなかつた。けれども、將軍の胸中には、かうした佗住居をする妻の苦衷が憫れられた。現に其當時、離別問題の起つた時、靜を離縁する日は、あれの死んだ時である。苟も息のある中は、乃木家から出すやうな事はせぬ、と斷乎として答へられた。

これを洩れ聞いた夫人の感激は、どんなであつたらうか。固より聰明の夫人に、強く響かぬ筈はない。誤解や、氣のつかぬ爲に、一時眠つて居た夫人の魂がめざめ、夫君の無限の愛情に酬ゆるに、何を以てすべきかに、心を馳せた、即ち、身を以て乃木家に盡すべきであつて、姑の不機嫌と良人の不愉快も、自分の心から、努めやうで、全く消し去らねばならぬし、又、子供等を育てる事にも、大に働かねばならぬといふやうに、深い決心が出来たので、母上や、夫君に許しを乞ふて、それが容られ。本邸に歸る事になつた。それは明治十五年十二月の事である。

乃木の一身にも、幾多の浮沈があり、はやくも、明治卅一年になつて、乃木は、善通寺の師團長になつた。全體、乃木といふ人は、極めて氣むづかしい、物解りの悪い人のやうに、多く思はれて居るが、それは、間違つて居る。

當然、人の守る可き事、また人の爲す可き事を、確然、やつて行かうとするのが、乃木の性質であつて、それが少しでも間違ふと、決して赦さない、といった風があるので、どうかすると酷く叱りつける事がある。さういふ眼に、逢つた人が、如何にも、面倒な人のやうに傳へるから、それで、多くの人が誤解して、偏屈な人だと、いふ事にして、

しまつたのである。疥癩を起した時は、大きな聲で叱りつけるが、その後は、さりとてしまふ。恰も、夏の雷鳴に似て居る所から、軍人の方では、乃木を雷といつて居た。

人の立場を察して、よく同情もすれば、溫和味もあつた人だ。いはねばならぬ事である、と思つても、自分がいふて、悪い事は、本人の心情を、思ひ遣つていはぬやうにする。けれども、是れは、自分がいはずとも、誰かにいはせて置く、必要がある、と思へば、上手な方法を以て、戒める事がある。

日露の戦ひが終つて、一時は財界も振つたが忽ち其反動が來て、怪しい會社が、片端から破綻してゆくので、そのうちには、随分ひどいのがあつた。金澤の前田の舊臣で、陸軍中將になつて、居た人が、或ボロ會社に關係して、株主から訴へられると、詐欺横領、商法違犯等の罪名で、どうしても、入獄しなければならぬやうになつた。其處で、古い友人であるから、乃木の所へ來て、金を貸してくれ、といふて、事情を打明けて、

『君が、承知してくれたら、入獄の苦を免れる』

と、いふのであつた。乃木は、しばらく考へて居たが、

『已れは、そんな大金は、持つて居らぬが、友人の石黒は、それ位の金なら、立替へてくれるだらうから、已れから頼んでやらう』

と、いつて、添書を渡した。其人も、石黒とは、交はつては居ないが、顔位は知つて居るので、すぐに訪ねて、乃木の手紙を出した。其處で、忠慮は、

『どういふ事情か』

と、尋ねたので、詳しい話をした。

『宜しい。それ位の金はありませんから、御用立申しても可いが、その前に、承知して置き度い事がある』
といふて、忠慮は、膝を進めた。

四

監獄に、送られるか何うかといふ場合であるから、一生懸命であつたらう。頼むにも、熱誠を籠めて、話したに違ひない。それに動かされて、石黒が、貸してくれる、といふたのである、と思つたから、大概な條件は承知する、覺悟で、その人も、膝を進めた。

「あなたは、切腹するのでせうな」

忠惠の言は、やさしかつたが、態度は嚴として、侵し難い容子であつた。その人は吃驚して、急に答へは出なかつた。

「あなたは、苟も陸軍中將であります。是れ丈けの、過失を致した以上は、切腹の御覺悟があつての事とせう。金子を、御用立申す前に、それを、伺つて置き度い」

「……………」

「御答へは、伺へませんか」

「……………」

切腹の覺悟があれば、金を借る運動など、爲る筈がない、また、何うせ切る腹なら、疾くに切つて居る。

「陸軍中將とも、ある可き人が、營利會社に關係して、社長などになるから、斯ういふ事になるのです。無理に金を儲けよう、とするから、刑事上の罪も、構成するのです。訴へられたから、金を吐き出して、刑罰を免れよう、とする。心の、卑しい事は、實に驚き入りました。素町人でも、恥を知るものは、其んな考へは、持ちますまい。あなたも軍將として、世に知られた御方ちやから、切腹の御覺悟は、無論、有るに違ひない。私は、金を貸せと、仰しやるのは、死後に、株主へ迷惑をかけまいとの、美しい、御考へから、と思ひます。それならば、御貸申しても

宜しい。乃木も、そのつもりで、私へ紹介をしたのでせう。其處で、一應御念を押し、置き度いのです」

斯ういふ風に、チリ／＼責めつけられては、何と答へのしやうがない。中將先生は、モチ／＼して居たが、やがて、這々の體で、逃げ歸つた。その後、石黒は、乃木に逢つて、

『先達ては、えらいものを紹介して、寄越して、ちよつと、困つた』

『どうしました』

『私が、切腹するつもりか、といつてやつたら、驚いて、歸つて行つたよ』

『さうでしたか、多分は、さういはれる、と思つて、君の方へ、指向けたのぢや』

『左様か、私も、大概そんな事だらう、と思つて、みつちり、いふてやつた』

『それは結構でした。近來は、那アいふ人が、多くなつて來たので、まことに困つたものです』

『併し、よほど弱つたらしかつた。歸る時の容子は、君に見せたかつた』

『イヤ、それを見たくないから、君の方へ、廻したのでした』

『二度と、御免蒙る。ハツハ、、、』

自分がいへば、すぐにも腹を切らせねば、承知がならぬので、石黒の方へ送りつけて、それをいはせたのである。厳格な氣性ではあるが、そのうちに、斯うしたやさしい所もあつた花も實もある、武士とは、乃木のやうな人を、いふたのだ。

扱て、善通寺の師團では、若い將校が寄ると、觸ると、乃木の噂ばかりだ。

『オイ／＼、雷さんに定まつたと、いふぢやないか』

『左様か』

『何しろ、今度は、やかましいぞ』

『那の調子で、ピシ／＼やりつけられては、本當に堪まらんぞ』
『弱つたな』

副官の蘆原少佐は、東京から、やつて来て、若い連中を集めて、乃木の氣性や調子を、よく呑込めるやうに、ちよい／＼吹き込んで居た、贅澤な事は大嫌ひであるが、潔癖で、掃除好きであるから、營所の方は、手一ぱいに掃除をして悪い所は、修繕にかゝつた。

すつかり、手順がついてから、蘆原は電報をうつつ約束に、爲てあるので、大急ぎで、手入れは始めたが、思ふ通りに、早くは出来ない。もう二三日したら、手も抜けやうか、といふ時、乃木は、不意に、やつて來たので、一同の驚きは、一と通りでなかつた。門衛の兵士が、かけ込んで來て、

『只今、閣下が、御見えになりました』

『えッ、閣下が見えた』

『ハイ』

『そりや、大變ぢや』

『もう、其處へ、おいでになりました』

一同が、室を飛出すと、廊下に立つてゐるので、また面喰つた。

『もう二三日してから、來るつもりぢやツたが、都合で、はやく來た』

『はア』

皆弱つた顔を、爲て居る。

五

新設の師團であるから、師團長の官舎は、未だ出来て居ない。旅館の一室を選んで、乃木を、入れるやうにして在る。とに角、それへ案内をしよう、と、蘆原から、それを、いひ出すと、

「泊る所は、どこにもあるから、その心配には及ばぬが、取敢ず營所の檢分を、すませてしまひ度いから、案内してくれ」

「これから直に、と、仰しやるので御座いますか」

「左様ぢや」

「長途の御疲れも御座いませうから、一兩日、御休養の後になされては、いかゞで御座います」

「イヤ、その必要はない。汽車と船で、運ばれて來たので、少しも疲れては居らぬ」

「はッ」

斯ういはれては、如何ともしやうがない。今、すぐに檢分を、うけるのは、些と迷惑と思つても、それが爲めに、拒む事は出来ないから、叱言を、いはれる覺悟になつて、

「それでは、御案内を致しませう」

「御苦勞ぢやのう」

蘆原が、先きに立つて、二十人あまりの將校が、そろ／＼従いて、是れから巡檢が、はじめた。未だ不充分の所があつて、多少の叱言は出る、と思つたが、今日は、機嫌が好く、左迄の叱りもなく、ニコ／＼しながら、注意される位の事ですむから、一同も、胸を撫で、ほッとした。最後に、厩舎を檢分した。乃木は、非常に、馬を大切にするので、此處は、今迄と違つて、丁寧に居るから、主任の將校は、ビク／＼して居ると、

「オイ、蘆原少佐ッ」

「ハイ」

『厩舎の主任は、誰か』

蘆原は、背後に振向いて、

『平田少尉ッ』

『ハイ』

『前へッ』

平田は、叱られる覺悟で、姿勢正しく、乃木の方へ向いた。

『お前か』

『ハイ』

『大層綺麗ぢやのう』

『ハイ』

掃除が不行届きで、あまりに汚いから、その反對に、斯ういふ皮肉を、いはれたので、平田は、縮み上つて居る。

乃木は、蘆原に向つて、

『誰が、設計したか知らぬが、此厩舎は、建て方が悪いのぢや。併し、其れは致し方がない、としても、せめて掃除

丈は、届いて居らぬ、と、不可よ』

『ハイ』

『よく注意してやれ。今の學校出の若い人達には、その呼吸は、解らぬからな』

『大に注意して、今後は改善いたします』

『どうか、左様してくれ』

是れて叱言は、相すみになつたつもりで、一同は、やれ嬉しや、と、思つた。乃木は、改めて一同の方へ、向直つ

た。

『序にいふて置く。近頃は、軍人の氣風も、大分頽廢しかけて、悪い事を、屢々耳にするが、全體、陸軍の戦ひに、馬を要せぬ事があらうか。馬は、陸軍の主要なるものゝ一つである、といふ事を考へなければ、不可ぢやないか。それから、此サアベルは、軍人の魂ぢや。然るに、其手入が屈かす、どうかすると、鎧のついて居るのを、提げて居るものがある。左様いふ輩は、魂が、腐つて居るのぢや』

嚴乎たる態度で、辭もはげしかつた。其れを、いひ終ると、ずん／＼營所の方へ、急いでゆく。跡から續いて、一同は、互に顔を見合せては、腰のサアベルを、そつと見た。叱言は、簡單であつたが、その意味は深いものがあつて、急所に當つて居る。乃木のいふ叱言はいつも、此調子であつた。

此に改めて、いふて見たい事がある。大概な人は、他を責めても、己れは、其通り行つて居らぬものが多い。けれども、乃木に限つて、そんな虚偽はなかつた。私は、曾て信州松本の承教寺へ行つて、乃木の納めた、サアベルを見た事がある。此寺には、佐々木高綱の墓が在る。高綱は、乃木の祖先であるから、四ツ目の定紋を、用ゐて居た。

サアベルを見た時、平生の嗜みが、是れほどに、屈いて居たか、といふ事を感じた。それは、實に立派なものを、二振も納めてあつた。赤阪の邸は、木造のつまりらぬものであるが、馬小屋丈は、立派な煉瓦造りに、なつて居る。

六

那の馬小屋を建てる時、職人に向つて、乃木は、斯ういふ事を、いふた。

『馬は、口が利けぬから、満足の出来るやうに、人間が、氣をつけてやらねばならぬ。お前等も、大に注意して、やつてくれ』

凡て、動物に對して、愛護の心の深い人は、友人に對しても、信義の厚いものである。乃木が、馬を愛護する心は、

やがて、友人に對する信義となつて、現れて来る。

控室へ、はひると、蘆原が、

「御休憩の後ち、旅館の方へ御案内を、いたしませうか」

と、いふた。乃木は、首を振つて、

「イヤ、旅館の方は、斷つてくれ」

之れを聞いて、蘆原は、不審に思つた。

「前に申上げました通り、當師團は、閣下の官舎が、未だ御座いませんで、旅館の方へ、支度がいたして御座いま

すので……」

「折角ぢやが、旅館へは茶代でもやつて、斷りをいふてくれ」

「いづれへ、御泊りになりますのですか」

「今度は、少し書物を、読み度い、と思つて、喧しい旅館は、避ける事にする」

「併し、一應は、旅館へ、おいでの上、家を捜す事に、いたしては、いかゞで御座いますか」

「そりや、面倒ぢや。すぐ捜しに出かけよう」

「それでは、小官が、御案内をいたしませう」

「イヤ、それには、及ばぬ」

「初めての土地で、御案内をいたしませんと、不都合があつては、なりませんから……」

「此老年になつて、まさか迷兒にもなるまい。一人でゆくから、案内は要らぬ」

斯ういひ出したら、どうしても、承知する人でない、といふ事は、蘆原も、よく承知して居る。

「御案内は、差控へる事に、いたします」

『左様してくれ』

乃木は、馬に乗つて、出かけた。馬丁の藤次郎が、後からついてゆく。

弘法大師の父、善通を、祀つた寺があるので、それが、土地の名に、なつて居る。乃木は、先づ其寺に参詣して、それから、寺院さへあれば、乗付けて見るが、どうしても、氣に容つたのが、なかつた。それからそれと、やつて来るうちに、二里餘り離れた、金藏寺へ来てしまつた。

醍醐天皇の建立にかゝる、四國名刹の一つに、なつて居る。今では、停車場も出来て、相當に賑つて居るが、その頃は、未だ寂しい所であつた。善通寺と同じやうに、寺の名が、その儘、土地の名に、なつて居るのだ。

本堂へ上つて、キヨロくして居る所へ、和尚が、出て来て、見れば立派な、軍將であるから、

『誰た様で、御座いますか。拙僧は、當寺の住職で御座います』

『やツ、これは失禮した。私は、今度來た、乃木希典であります』

『是れは、初めて御目にかゝります。今日は、寶物でも御覽に、おいで下さいましたか』

『否、左様ではない。此隅から那の柱の所まで、繩を曳いて、輓でも張つて貰へばよい。荷物は、トランクの大きいのが二つと、小さいのが三つばかり、後は、寢具ばかりぢや』

和尚には、何が何だか、少しも判らない。

『全體、それは、何の事で御座いますか』

乃木は、初めて氣が付いた。

『や、これは失禮した。未だ借受けの相談は、爲てなかつたな』

『へー』

『當分のうち、借用したいのぢや』

「えッ、本堂を御使ひに、なりますのですか」

「うむ」

「それは、迷惑いたします」

「不可かな」

「本堂に、おいでなされては、双方で困りますから、庫裡の方の座敷を、御覽下さいませ」

「空いて居る座敷が、ありますか」

「御座います」

「然らば、それを見せて、貰ひ度い」

「併し、當寺では、魚や、牛肉の類を入れませぬが、宜しう御座いませうか」

「小官は、魚を好かんのぢや。牛肉は、齒が悪くて食はぬ」

「へー」

「麦飯と、豆腐の汁で、結構ぢや」

「それでは、御案内いたします」

和尚の案内で、空いて居る、座敷を見たが、すつかり氣に容つた。

「此一室を、借り受け度い」

「宜しう御座ります」

座敷代や、食事の費用については、蘆原といふものを寄越すから、相談して下さい」

「何時から、おいでなさるのでせうか」

「今、来て居るのぢや」

和尚は、ますます驚いた。

七

其日から、乃木は、金藏寺の一室に陣取つて、善通寺へ、通ふやうになつた。二里餘りある道を、往きか返りには、必ず歩く事にして、馬に樂をさせるのであつた。

粗衣粗食に安んじて、全くの書生々活、暇さへあれば、讀書に耽り、その間には、寺院詣てや、散策より外に、何の樂しみもない。本人は、それで満足して、愉快に、日を送つて居るのであるが、師團に居る連中は、用事の起る毎に、夜半でも、風雨のはげしい時でも、二里餘りの道を、金藏寺まで、駆つけなければならぬので、その迷惑は、一と通りでなく、表面に、苦情を列べるものはないが、蔭では彼是れ、いふものもあつた。

蘆原は、其れを耳にして、幾分の同情を、有つて居るので、夫人の静子へ、乃木の身について、便りをする時は、「閣下も、只一人で、金藏寺に居られるが、麥飯と豆腐の汁ばかりでは、御健康のほども思はれる。善通寺へ、御移り下されば、多少は、御世話も出来るから、是非、おいでを願ひ度い、と思ふが、どうしても、御出て下されぬ。それに、將校等も、用事の度毎に、二里餘りを通ふのでは、如何にも氣の毒であるから、御序の折には、閣下へ御勧めして、此方へ、御移り下さるやう御配慮を、願ひ度い」

といふ、意味の事を、書いて送るのであつた。静子は、左様した書面の來るのが、しばしであるから、幾分の心配も加はつて、一度は見舞旁、行つて見たい、との考へが起つた。丁度、學校も休みに、なつたので、次男の保典を連れて、乃木を、訪れる事になり、初めての四國下りを、企てた。

先づ、善通寺へ着いて、蘆原少佐にも逢ひ、いろいろの事情を聞いて、それから、金藏寺へ案内された。和尚は、乃木夫人と、聞いたので、早速、庫裡へ通し、挨拶もすんでから、乃木の座敷へ、案内した。静子は、和尚が立去る

と、次の座敷へ来て、保典と共に、しづかに乃木の歸るを、待ちうけた。

新しい婦人と違つて、静子は、舊式の躰を、うけた人であるから、その態度は、全く昔の婦人を、其儘であつた。乃木が、此座敷に起臥するやうになつてから、未だ一度も、挨拶がすんで居らぬので、その不在を侵さぬ、といふ憤みがあつた。

大概な婦人は、自分の良人が、居る座敷なら、他の案内も待たずに、ヅカ／＼ふみ込んで、駄差や、机の曳出を、かき廻して、手紙の詮索から始める。少しでも怪しい、と思ふ手紙が出れば、それから、問題を引起して、大騒ぎになるのが、通例である。凡そ、婦人の嫉妬ほど、馬鹿らしいものはない。瘦るほど心配して、金を使つたり、時間を費したりして、一生懸命になつた末、漸く良人の秘密を、捜し出すと、それから更に、苦勞をはじめのだから、實に阿呆の極である。少くも、静子のやうな憤みがあれば、左様した、苦勞はなくて、済むのであるから、婦人には、此憤みが、肝要である。

彼是れするうちに、乃木は、歸つて來た。静子の居る、座敷の前を、通り過ぎよう、とするから、静子は、聲をかけた。

『お歸り遊ばせ』

乃木は、足を停めて振り返つたが、むづかしい顔をして、丁寧に禮をすると、その儘、自分の座敷へ、はひつた。何ともいはずに、禮をして行つた容子が、少し變であるから、静子も『はてな』と思つた。

乃木の生活は、極めて簡単なものであつた。殊に、獨逸へ行つて、歸つた後は、一層、その生活振りは、簡単になつた。家へ、歸つて來ても、軍服は、脱がぬ事にして、書見でもして、夜遅くなる時は、その儘、寝てしまふ事が、多い。死んだ時、日本服の持合せが少かつたので、その質素を賞めるものは、あつたが、密に質素からばかりでなく、實は、其必要を、認めなかつたからである。

明治二十年の頃であつたが、川上操六が、乃木と、一しよに獨逸へ行つて、彼の國の軍人が、家でも、軍服を、脱がぬのを見て、

『是れは、善い事ぢやから、日本へ歸つたら、皆斯ういふ風に、爲てやらう』
 と、約束して歸り、先づ、自分等が、眞ツ先に、はじめた。然るに、さういふ事に定めると、不自由な事、一と通りでない。しばらくして、川上は、それを廢めてしまつた。けれども、乃木は、どうしても廢めないで、死ぬまで軍服のみで、押通した。

八

終日、營所に勤めて、家へ歸ると、和服に改め、打寛してから一ぱい飲るのが、誰も樂しみの、一つであつた。それが、軍服で、終始する事に、約束で取極めてしまふと、窮屈な感じのするもので、川上が、疾くに廢めてしまつたのも、それが爲めであつた。

『オイ、乃木ツ、川上は、疾くに廢めて、居るぞ』

『何か』

『軍服を脱いで、和服姿で、飲んで居るぞ』

『馬鹿な事をいふな。川上は、矢張り約束通り、行つて居る』

『イヤ、もう廢めた』

『併し、己には、何ともいふて來ぬ』

『そんな事、一々斷つてから、爲るものか』

『己とは、堅い約束がある』

『お前の方では、そんな事を、いふて居ても、川上は、廢めて居る』

『己の所へ斷りなく、そんな事をする、川上ではない』

『川上は、破約してしまつたのぢや』

『川上は、どうあらうと、己は、約束ぢやから廢めぬ』

『一人で、窮屈な思ひをして居ても、つまらんぢやないか』

『己は約束ぢやから、川上から、斷りのないうちには、廢めぬ』

斯ういふ譯で、乃木は、どうしても、軍服を脱がなかつた。川上は、之を聞いて、甚だ恥かしく思つたらう。

帽子と劍を、折釘へ引つかけて、廊下へ、簾椅子を出して、それへ倚かつた、乃木は、すまして安い煙草を、吹か

して居る。乃木の煙草についても、面白い話がある。何でも、種類は構はず、一番に安い煙草を、買はせるのが常で

あつた。つまりは、煙さへ出ればよいのだから、石炭を、嚼ちつて居ても、すむ譯だ。どこまでも、簡易生活で、押

通した人である。

『お久しう御座りました。別に、お變りも御座いませぬか』

静子が、挨拶をすると、乃木は、振返つて、

『あなたは、どなたでしたか』

と、尋ねた。之れには、静子も驚いた。

『静でございます』

『ははア、お静さん……』

乃木は、少し考へて、

『わしの妻も、静といふが、あなたは、どちらの静さんか』

「えッ」

『わしの妻の静は、寔に感心な女子で、わしに、只の一度も、心配をかけた事はなく、能く留守をしてくれる。わしは、多く不在勝ちやが、安心して居るのぢや。任地先へ、無断で来るやうな、女子でないが、あなたは、どちらの静さんか』

さア失敗つた。取急いで来たので、前以て断りを、いふてなかつたのだ。前後の容子が、何となく可怪しかつたのも、之れが爲めだな、と、初めて氣の付いた、静子は、今更に、如何ともしやうがないので、丁寧、會釋して立上り、悄々として次の座敷へ、退つた。之れを聞いて居た、蘆原少佐は、一層に驚いた。

『妾が、悪かつたのですから、一たん歸京いたしましたして、更に御許しを受ける事にいたしましたませう』
『それでは、小官が困ります』

『御氣性を、能く知つて居りながら、斯ういふ手落を、いたしましたして、お叱りを、うけました上は、歸京する外は御座いませぬ』

『左様な事に、なりますと、小官が勤まりませぬ。是れは、斯ういふ事に、願ひ度い。此處から近い、多度津といふ所があります。其處には、小官の親戚が、花菱といふ名で旅館を、いたして居りますから、しばらく、其れへ御泊りを願ひまして、閣下へ、御詫の上、御迎ひに出る事に、いたしますから、どうぞ左様して、戴き度いものです』
『宜しう御座います。それでは、左様に願ひませう』

静子にしても、此處にして、歸り度くはないから、蘆原が、いふ通り、多度津へ行つて、吉報を、待つ事にした。蘆原は二、三日の間、乃木の容子を、見て居たが、今日は、頗る機嫌がよいので、

『實は、奥様から、御機嫌伺ひに出たい、といふ趣で、御書面を戴きましたが、御都合は、如何で御座いませう』
『うむ、それは、御手数をかけた。許してやつてくれ』

『ハイ』

「彼女は、毎時も留守番で、可哀さうぢや、と思つて戻たのぢや」
 之で蘆原も、大に安心して、すぐ多度津へ、迎ひに行つた。

九

自分の妻が、無断で、押かけて来た、といふので、他人扱ひにして、追歸さう、としたのは、ちよつと聞くと、無情のやうにも思はれるが、決して左様でない。世間の事は、その人の、立場に依つて、皆見やうがちがふもので、乃木には、乃木の立場があつて、さうした態度に、出たのであるから、一概に、之れを見る事は、出来ないのである。静子は、斯うした、良人の取扱ひには、よく馴れて居て、毫も無理だ、といふ考は、持つて居なかつた。自分が、無断で来たのは、良人の機嫌を、損ふ因で、自分が、悪かつたのである、と、悟つてしまふ所に、静子の偉いところは、あつたのだ。妻が、良人に絶對服従を、爲る事は、新しい女の理想から、いへば、或は間違つて居る事かも知れない。また、舊道徳の、奴隷主義である、といふて、頭から排斥して、しまふものもあるに、違ひないが、それは、今の新しい女の事であつて、昔の教へから出た女は、静子の如く、従順であるのを可し、としたのである。帯を、一筋、買ふのにも、良人の許しを得、前垂を一枚求めるにも良人の耳に、入れてから爲る。それを、三十年の間、確と守り通した所に、静子の價値は、有つたのだ。

蘆原少佐が訪ねて来て、

『只今、閣下の御許しが出ましたから、すぐ金藏寺の方へ、おいで下さるやうに、願ひます』
 と、聞いて、静子は、非常に喜んだ。

『それは、いろ／＼有難う存じました』

つて来た。
 つぐに、支度を整へ、保典を連れて、金蔵寺へ、やつて来て、乃木の歸りを、まち受けた。間もなく、乃木は、歸

「お歸り遊ばせ」

先づ、静子は、聲をかけた。

「おう、静か」

「ハイ」

「保典も、来たのう」

「ハイ」

「大層早く着いたな」

東京からでは早過ぎるが、多度津からなら、當前だ。

「どうぢや、留守中に、別状はないか」

「書面で、申上げました外、是れといふて、お話いたす事は、御座いませぬ」

「左様か」

「學校が休みに、なりましたので、保典も連れて、まゐりました」

「それは、可かつた。保典どうぢや、旅行は、樂みなものぢやらう」

「ハイ」

「まア、悠々して行け。明日にも、金毘羅さんへ、詣つて見ろ。石段が長くて、驚くぞ」

「左様ですか」

話は、それからそれ、と移つて、容易に盡きない。そのうちに、食事の用意が出来て、久し振で、親子三人が、樂

しく夕食をすませ、茶を斃りながら、

『お前は、此間の事を、何う思ふか』

と、不意に尋ねられた。

『前以て、御許しを受けずに、お訪いたしまして、申譯が御座いませぬ』

『本當に、左様、思つて居るか』

『ハイ』

『左様思つてくれぬ、と困る。わしは、若い元氣者を、預かつて居るのぢやから、若し手綱を緩めたら、どこ迄、飛んでゆくか判らぬ。それを取締るには、自分の身から、窮屈にしてゆく外は、ないのぢや。斯うして勤めて居る間は昔の事にしていふと、陣屋に居るのと、同じ事ぢやから、たとへ妻にもせよ、無斷で、履み込まれては、ちよつと困るのぢや。これからもある事ぢやから、よく考へてくれ』

『まことに、御心配をかけて、相すみませぬ』

その日は、それで、すんだ。静子は、しばらく滞在して、名所舊蹟の、見物に忙しく、保典は、喜んで毎日のやうに、母に附いて歩いた。此保典は、旅順の戦ひに二〇三高地の大逆襲戦で、立派な最期を遂げ、今では、一基の記念碑に、なつて居る。

他を取締るには、自分を苦しめて、かゝらねばならぬ、といふ、乃木の辭は、すべての人の服膺すべき、格言である。乃木の生涯は、此一言に基いて、少しも氣樂な日は、なかつた。それに伴つて、静子の苦勞も、一通りでなかつたらう。

金州の南山に、長男の勝典を亡なひ、更に二〇三高地で、次男の保典を殺し、心に、どれほどの悲しみはあつてもそれを、面に現さず、國民の子を、多く殺した事は、申譯がない、とのみ思ひ詰め、二人の子供を亡ふて、猶ほ己れ

の死をも期して居る。その心のうちを察すると、實に涙のたねである。前の一言は、乃木をして、斯ういふ働きを、爲せて居るのである、と思へば、ますます、其人格が、惚ばれる譯だ。

桂と反目

一

明治廿二三年の頃には、名古屋の旅團長であつたが、此時に、桂太郎が、師團長になつて、赴任した。乃木は、桂が大嫌ひで、その折合は、何となく悪かつた。桂の方でも、乃木を、煙たがつて居たから、兩者の間は、常に疎隔して居たのである。同じ長州人でも、その氣質に依つて、交情の善いものもあれば、また悪いものもある。一概に、同國人であるから、交情が善いものとは、いへぬが、それにしても、乃木と桂のやうに、折合の悪いのも少かつた。

生一本に、昔の武士道を、その儘、襲ふてゆくものと、時世の推移りに従いて、上手に潜つてゆかうとするものと、此二つの派は、維新前の長州人に、ちやんと別れて居て、それが、明治になつても、斬り合つて居た傾きがあり、事毎に其氣分で、反抗して行くから、衝突といふほどの、事はなくとも、自然に別れて、二派となつて、睨合つて居たのである。

明治政府の、成立した頃にも、木戸孝允の派と、廣澤兵介の派との軋轢は、相應に酷くあつて、伊藤、井上、山縣等は、木戸派に屬し、前原一誠は、廣澤派に傾いて、何となく、折合が悪かつた。そのうちに、廣澤が殺され、前原は兵を起して斃れたので、長州人の軋轢は、漸く薄らいだが、それは只、非木戸派に、代表的人物が無かつた爲めで、残つて居るもの、うちには、猶ほ木戸派に、屈服せぬものもあつた。

木戸が死んでから、薩派の大久保に對抗上、止むを得ず、一つに纏まつてしまった。西南戦争の翌年、大久保が殺されて、薩派の頭目が、無くなつたので、いよく、長州人の結束は堅くなつて、山縣、伊藤、井上が、力を併せて薩派に當つた所から、純粹の長州閥なるものが、強い力を以て、薩派を壓しつけ、長州の天下にしてしまつたのである。

軍閥の勢力家としては、矢張り山縣であつて、薩派の黒田清隆は、智に於て、遠く山縣に及ばず、松方正義は、菅に後輩であるばかりでなく、すべてが、伊藤、井上に、及ばなかつた。

長州の軍人で、山縣に睨まれたものは、頭が揚がらない事に、なつて居た。三浦梧樓の如き人でも、山縣と衝突したらすぐ休職になつて、長い間、苦しんで居た。乃木は、山縣に、睨まれるほどではないが、それにしても、餘り好かれては居なかつた。その進級の、割合に遅かつたのは、事實である。其點になると、桂は、利巧な人であるから、山縣の氣に合ふやうに持ちかけるので、いつも可愛がられて居た。桂は、初めからの軍人で、維新の際には、相當に軍功も擧げて、明治の初めには、賞典祿の四百石も與へられて居た位で、意外に早く認められて居たのである。

性格の上からも、立場の上からも、すべて折合の善くなかつた桂が、師團長として來たのであるから、乃木の身に取つては、何となく不愉快であつたに違ひない。

名古屋城の、天主閣の窓へ、師團長の許可を経ずに、ガラス障子を入れた、といふやうな、些細な事で、乃木は、譴責を、うけて居る。桂の仕向けも、餘りに良くなかつたので、それからといふものは、一層の不仲になつて、負氣の乃木には、何の桂がといつた調子もあつた。けれども、旅團長は、師團長の前へ出れば、閣下といふて頭を下げねばならぬ。それが、乃木の爲めに、どれほどの苦痛であつたか判らぬ。

副官の石田清が、その間へ挟まつて、幾たびか困らせられた事もある。乃木の副官である以上、乃木の味方をす可きであるが、師團長に對しては、矢張り相當の敬意を表さねばならず、其處で、兩人の間に、何等か意見の衝突があ

れば石田が、一番に困るのは、當然である。

『オイ、石田』

『ハイ』

『徴兵管區の巡視が、あるやうぢやが、今度は、わしも出かけるから、濱松方面は外のものへ割付けずに、置いてくれ』

『誰にいたしませうか』

『わしが、行く事にしよう』

『閣下が、おいてなさるまでの事でなく、外のもので、宜しいでせう』

『イヤ、一日でも、名古屋を離れて居るのが、わしの、楽しみぢやよ』

斯ういはれては、どうも仕やうがない。石田は、能く事情を知つて居るから、強て止めさせる事もならず、それぞれに手續きをして濱松方面は、乃木の受持として、自分が従いてゆく事になつた。

一一

『遠州濱松ア、廣いやうで狭い、廓焼ければ、二度建たぬ』

昔から、評判の俚語であるが、それに依つて、よく人に知られて居る、濱松も、近年の發展は、實に驚く可きものがある。一般の人氣も、縣廳の在る、静岡よりは、遙かに良く、納豆の外に之れといふほどの名物はないが、那の邊に於ての工場地として、今は其れが爲めに、人の出入も、はげしくなり、貨物の集散も、日に殖えてゆくの有様である。未だ、明治二十年頃には、天龍川に近く、大きい宿驛だ、といふ丈けの事で、幾分か認められて居た、といふ位に過ぎなかつた。

乃木と、石田は、驛前の大木屋支店に来て、それから、郡役所へ出かけた。徴兵の事務に就ては、石田が一切を扱つて、乃木は、それに眼を通す迄の事で、すぐ済んでしまつたから、大木屋へ歸つて、休息する事にした。翌日は、氣賀へ、行く豫定であつた。その日は、既う用事が、ないのであるから、石田を對手に、種々の話に、時間を移し、夕方になつて、食事をはじめた。

今では、東海道筋の、大きい町には、立派な旅館が、澤山に出来て、大木屋の家は、別に珍しくもないが、昔から汽車全通する頃までの大木屋は、家の大きいのと、萬事の設備が、行届いて居るので、評判の旅館であつた。二階に庭がある、といふので、昔の人は、それだけでも、ひどく感心して、道中するものは、宿驛の一つや二つ、通り抜けても此家に泊る事を楽しみにしたのだ。大木屋と、大きく染抜いた手拭を、友達の前に廣げて、自慢話をする事が江戸ツ子の誇りの一つに、なつて居た。

今では、花屋といふ旅館も、宏壯な建物ではないが、氣の利いた家として旅客の足を、引いて居る。古くから在つた家ではあるが、大木屋ほどに、廣く知られて居ない。

汽車の客を、主として扱ふのは、驛前の支店で、廣い道路を挟んで、此二軒が、今でも威張つて居る。

『此際、ちよつと申上げて置きますが、明日の氣賀は、評判の土地にも拘らず、好い旅館がないといふて、郡長は非常に心配いたしましたして、相當の家を、見立てるつもりではありますが、右の事情で、充分に行届きますまい、と存じますから、その點は、豫め御含みを願ひ度い、と申して居りますので、萬事を、郡長に一任して置きました。御含みを願ひ度いのであります』

之れを聞いて、乃木は、頗る不快に感じたらしく、

『何故、左様な事を爲る。泊る家など、何うでもよいぢやないか。いよく無い、となつたら、毛布を被つて、草原へ寝ても、それ迄の事ぢや。自分の泊る家を、他に搜して貰ふなぞ、わしは、大嫌ひぢや』

何の心もなく、郡長のいふ儘に、任かせたのが、乃木の氣に觸つて、甚だ不機嫌なのを見て、石田は、よほど困つた。

『深い考へもなく、郡長のいふ通りに、まかせましたのは、小官が無念で御座いました。今後は注意いたしますから此度丈は、御許しを願ひます』

『頼んだ事は、もう取返しがつかぬけれど、郡長なぞは、却々に忙しい職務で、軍人の泊る家を、捜し廻る暇は、ない筈ぢや。それを引受けるのは、先方の禮義で、我々へ、好意を盡してくれるのであるから、すぐ辭退す可きものである。今頃は、そんな事で、証け歩いて居るのぢやらうが、まことに氣の毒なものぢや』

『恐れ入りました』

之れが爲めに、食事の運びは速かつた。しばらくすると、旅宿の番頭がやつて来て、

『石田様へ、ちよつと申上げます』

『何ぢや』

『只今、郡役所の書記で、大森とか申しますものが、御眼にかゝり度い、といふて、控へて居りますが、こちらへ、お通しいたしましても、宜しう御座いますか』

石田は、乃木に向つて、

『お聞きの通りであります、如何いたしませう』

『それ見なさい。郡長丈けてなく、書記までが、夜中にかけて歩いて居る。氣の毒な事ぢや』

『小官が、逢つてまゐりませう』

『イヤ、わしが、逢ふ事にする』

『小官でも、判りますから……』

『つまり、わしが、泊る、家にいつての事ぢや。わしから、挨拶をする』
番頭は、石田にいはれて、すぐ立つて行つた。

二二

郡長の代りに来た、書記は、石田に逢つて、歸るつもりであつたが、旅團長が、逢ふてくれる、と聞いて、大喜びであつた。案内されて、乃木の前へ出ると、モヂ／＼して居て容易に口が利けない。

『わしが、乃木ぢや』

『へー』

『此度は、いろ／＼と、厄介をかけて相すまぬ。斯ういふ事を、頼む筈ではなかつたのぢやが、嗚ぞ御迷惑で、あつたらう』

『どういたしまして、まことに不行届きて、恐れ入ります。實は、閣下を、御泊め申すやうな、相當の旅館がありませんので、恐れ入つた次第では御座いますが、氣賀半十郎と、申しますも、家で、御辛抱を願ひ度いのであります』

『それは、御手数であつた』

『それが、旅館では御座いませんで、従つて、充分に行届いて、お世話を申上げる事も、なりませんまいが、兎に角土地では屈指の富豪で御座いまして、財産の上では、可成りに、威張れる方の家で御座います。同家へ、依頼いたしましたる處、半十郎も大喜び、外ならぬ閣下の御泊を願へる事は、家の名譽である、と申しまして、座敷の掃除をするやう大騒ぎをやつて居る位で、漸く安心いたしましたして早速その旨を、申上げにまゐりましたので御座います』

『ははア、旅館では、ないのか』

『ハイ、土地の富豪で、財産の點に於ては、兎に角、氣賀の……』

「まア、ちよツと、待つてくれ」

「ハイ」

乃木は、石田の顔を觀て、

「わしは、悪い事をした。氣賀といふ所には、古い知人の居る事を、忘れて居た。今、書記さんの話で、漸く思ひ出したから、今度は、其知人の家へ、泊る事にしよう」

「左様なさいますか」

「うむ、左様する」

其處で、石田は、書記の方へ、向直つた。

「君が聞いて居る通りぢやから、折角の御盡力ではあつたが、その方は、御斷りしたい」

「へへ——」

何だか、變な容子なので、書記は、氣拔けのした人のやうになつて、ポカンとして居る」

「いづれ、明日着いてから、その人へは、わしから挨拶をする事にしよう。郡長さんへ、宜しくいふてくれ」

「ハイ」

乃木の辭を機會に、書記は、座敷を出て、這々の體で歸つた。

「石田ツ」

「ハイ」

「どうぢや、今の話を、何と聞た」

「……………」

「わしは、金を借りにゆくぢやない。財産家が、何うしたといふのか。實に怪しからぬ事を、聞かせられる。自分

の泊る家を、人に捜させるやうな事をする、斯ういふ恥を、與へられるのぢや」
 心なき書記が、幾度か、財産家といふ事を、くり返していふたのを、乃木は不快に感じたのであつた。石田は、頗る恐縮の體で、

『懲りくいたしました』

『近頃は、地方の財産家へ泊る事を、無上の名譽の如く、心得て居る、不都合のものが大分ふえて來たやうぢや。それといふのも畢竟は、桂のやうな奴が、増長し居るからぢや。君は、さう思はないか』

『……………』

斯ういふ事を、いはれては、石田は實に困る。乃木のいふ所に、裏書をするやうな事はいへず、されば、とて、反對も出來ぬので、毎時も桂の名が出る、と、石田は、その返辭を曖昧にして、お茶を濁して居るのであつた。

その晩は、頗る不機嫌で、何となく、堅くなつてしまつたので、格別に、面白い話もなく、遅くなつて寝た。翌朝は何時もよりも、はやく起きて、乃木は、既う座敷に、坐つて居る。石田は少し遅れて起きた。

『昨夜は、大失敗をいたしました』

『うむ』

『那れから、寢床へはひつてから、不圖、思ひ出しましたのは、奥山の半僧坊であります、氣賀よりは、更に奥へ三四里はありませう。けれども、俵は通じますから、之れへ今晩は、お泊になつては、如何で御座いますか』

『左様ぢやツたのう。奥山の半僧坊といふては、全國へ響いて居る。わしは、元來が寺院を好きなのぢやから、それへ泊れるやうになれば、此上もない事ぢや』

『それでは、氣賀へ着きましたから、すぐ其運びにいたさせう』

四

「併し、先方へ、使を出す時に、信者並みの、取扱ひで頼む、といふ事を、はつきり申込んで、おいてくれ」

「ハイ、その邊の事は、然る可く、念を入れて置きます」

俵の用意が出来た、といふから、兩人は、氣質を、指して急いだ。濱松からは、味方ヶ原を通つて、四里近くある。濱名湖を控へて、唯一の船着場であるのと、奥へ深く、村落との聯絡が、取れて居るので、氣質の町は、相當に繁昌して、那の附近の町としては、屈指の土地である。

先づ、郡役所へ来て、それ／＼に、用務は果した。半十郎の家へは、石田が出かけて、丁寧に挨拶をしたので、少しの不平はなく、却つて其行届いた仕方に、感心された位であつた。

「さア、行かうか」

「ハイ」

郡長が、道案内をする、といふのを、堅く斷つて、只だ兩人で、俵を走らせた。半僧坊までは、三里餘り、道幅も、相當に廣く、坂道は多いが、酷い凸凹もなく、存外に、俵の動揺もないから、體は樂であつた。

臨濟の名刹、方廣寺といふのが、本坊で、何時も、住職には、名僧が坐るやうである。日清戦争の時分に、釋元恭といふ、男が居て、支那の内地を、隅から隅まで、歩いて來た、とかいふのが、評判になつて、一と頃は、講談師の高座にもかけられ、小説家の筆にも載つて、新聞の雜報を、賑した事がある。その元恭は、方廣寺で、學んだものだ、といふ事が、傳へられた所から、其寺も弘まつて、それ迄、半僧坊の名に、かくれて居たのが、漸く一般に知られた。その後の元恭は、あまりに、調子に乗り過ぎて、終に尻尾を出してしまつたが、一時は、飛ぶ鳥を落す、勢であつた。山門前で、俵を棄捨てた、兩人は、急勾配の坂道を登り、宿坊の大支關へ着いた。然るに、乃木が、折角の樂しみ

であつた、住職は、旅行して居て、今は不在である、といふ事は、玄關へ着くまで、知らなかつた。番僧が二三人、玄關に控へて、乃木の来るのを、待つて居た。

『これは、能うこそ御出で下さいました』

先づ番僧から、聲をかけた。乃木は、丁寧に敬禮して、

『豫て申入れて置いた通り、今晚は、御世話になります』

と、いひ乍ら、番僧の容子を、ちつと見つめた。

『どうぞ、御上り下さいませ、住職は、生憎、不在で御座いますが、萬事の用意は、整ふて御座います。さア、何うぞ、此方へ……』

『はア、住職は、御不在でありますか』

『ハイ』

乃木は、此一事に失望しながら、番僧の後から、従いて通つた。大廣間に、金屏風を立廻し、毛氈を敷いて、大きな座布團が、二枚並べてある。その様子から見るに、自分等を、迎へる爲めの、支度である、といふ事は、すぐ判つた。

『石田ツ』

『ハイ』

『少し様子が、變だぞ』

『左様ですか』

『君は、何といふて、申込んだのぢや』

『閣下の仰せの通り、信者並の取扱ひにしてくれ、と申して置きました』

「併し、これは、信者並ではないぞ」

「どうも、左様らしく思はれます」

「困つた事を、爲る人達ぢや」

兩人が、立つて居るのを視て、番僧等は、變な顔をしながら、

「さア、どうぞ是れへ」

と、座布團を、指さした。

「わしは、斯ういふ取扱ひを、受けるつもりではなく、信者並に願ひ度い、と申込んだ管ぢやが、是れては困る」

「別に、是れと申して、特別の御取扱ひも出来ませぬ。何分にも、山の事で御座いまして、是れが精一ばいの事で、

へへ、、、、、」

「イヤ、斯んな歡待を、うけるのなら、來るではなかつた」

「御立腹では、恐れ入ります。是れ以上には、如何とも致し方が御座いませので、どうぞ御不承を願ひます」

「勝手な事を、申すやうぢやが、信者並にして、貰ひ度い」

「どういたしまして、閣下に對して、左様な事が、出来るものでは御座いませぬ。何事も、住職の不在で、手廻りかねまするが、御勘辨を願ひ上げまする」

「それは、困つた」

「さア、御席へ……………」

乃木の考へと、番僧の考へとが、全く違つて居るのだから、何をいふても、暖簾と腕押しだ。

五

乃木は、止むを得ず、席に着いた。二枚並べてある、座布團の間へ坐つたから、番僧は驚いて、

「粗末な物では御座いますか、それへ、どうぞお着き下さいませ」

座布團を、乃木の方へ、寄せやうとする。それを押退けて、窮屈さうにして、坐つた儘、

「わしは、是れが勝手ぢや」

「まア、どうぞ……」

「是れて、可い」

番僧も、少しテレた加減で、

「左様で御座いますか、それでは、御自由に願ひます」

是れは、乃木が、故意とするのではなく、平生からの流儀であつた。疊の上に、何んな敷物でもあれば、その上、座布團を、用ひる事は爲ぬ、乃木流とでも、いふ可きか、平生から、左様いふ事に、してあるのだ。

大演習なぞに出かけて、民家を、宿舎の代りに、する場合でも、その通りに、行つて居る。乃木ほどの人が、泊る家は、どうせ、其土地の富豪とか、名家とかに、限られて居るから、立派な客室に、出来るだけの裝飾をしてあるが、乃木は、左様した取扱ひを、されるのが大嫌ひで、家族と、同じ取扱ひを、望むのであつた。

それであるから、よく此失敗を、する事がある。時間が来て、演習地へ、出かける時、大きい握り飯に、梅干を入れて、竹の皮包を、腰にぶら下げるのが、例になつて居た。歸つて來ると、草臥た時は、床の間へ、新聞紙か、風呂敷をかけて、それを枕に、ゴロリと寝るのも、乃木流の一つであつた。

石田も、座布團を敷かずに、乃木と、同じやうにして、坐つて居る。主なき座布團は、其儘にしてあるから、視た眼には、變な工合だ。番僧は、やがて、銃を五六枚と、大きい硯に、筆を添へて、乃木の前へ運んだ。

「お疲れ中、まことに恐れ入りますが、當寺の爲に、一筆お残しを願ひたいもので、大額を一枚、あとは掛軸に、い

たしますつもりで、御座いますから、然る可きやう、願ひ上げます」
 乃木は、いよ／＼、澁い顔をした。

「これは、何ぢや」

「一筆、願ひたいので御座います」

「わしに、字を書けといはれるのか」

「ハイ」

「字を書かねば、泊めて貰へないのか」

「左様いふ次第では、御座いません」

「それならば、御免蒙らう」

「併し、當寺の記念として、願ひたいのであります」

「字を書く事は、嫌ひぢや」

「其處を、御無理でも、願ひたいのであります、ハイ」

「わしは、書かぬ」

「先程、附近の有志の者へは、それ／＼通知を、いたしましたから、そのうちには、皆やつて来る事と思ひますが、それまでに、是非、一筆願ひたく存じまして、實は、桂師團長閣下にも、先般、願ひ上げましたが、此頃、漸く出来あがりまして、彼方の座敷に、掲げて御座います。いづれ、御覽に入れますが、その額と、閣下の額と、二つを以て、當寺の誇りと、いたしたく存じますので、強て願ひ上げます」

番僧等は、遠慮もなく、ペラ／＼と、やつて退ける。石田は、可笑さを堪らへて、乃木の容子を、視て居た。乃木は、すつと、立ち上つて、サアベルを、腰に下げると、帽子を取つて、

『やア、失禮した。都合に依つて、出立します』

呆氣に取られた、番僧等を、尻眼にかけて、乃木は、ズン／＼出てゆく。石田も、跡からつゞいて、出かける。始めから、調子が悪い、と思つて居た通り、トウ／＼失敗てしまつた。番僧の馬鹿らしさが可笑しいけれど、石田は、堅く笑ひを堪へて、急ぎ足に、坂を下りてゆく乃木の後を逐ふた。山門の前に、乃木は、立つて居た。石田は、漸く逐ひついて、

『閣下』

『何ぢや』

『實に驚きました』

『わしも、呆れてしまつたよ』

『随分、禮を知らぬ輩であります』

『近頃の坊主は、大概、彼んなものぢや』

『それにしても、少しひどすぎました』

『わしの額と、桂の額を、並べてかけるのぢやさうだ』

『……………』

『桂の額と、並べられては堪まらんからな』

『……………』

石田は、桂の事を、いはれると、一番に困る。何とも返辭のしようがないので、毎時ものやうに、黙つて居るのであつた。

六

山門を離れて、少し来ると、兩側に、二三十軒の家が、列んで居る。その多くは、半僧坊の參詣者を、宛込んで、旅宿をして居るのであつた。右側の角に、小さい二階家であつて、軒下に、大きい行燈が、下つて居る、見るからに、汚い宿屋で、その行燈には、筆太に『御とまり宿』と、書いてあり、側面には『御一人金十錢』特別金三十錢』と割書にしてある。屋號は、小松屋と、いふのであつた。

乃木は、その家の前に、足を停めて、しばらく見て居たが、

『濱松までは、道程も大分にあるから、駄足で行つても、夜にならうと思ふ。それよりか、此宿へ泊つて、明朝はやく出かける事にしよう』

木賃宿にひとしい、此家へ、泊られては堪まらぬから、石田は、慌てゝ反對した。

『是れは、閣下の御泊になれる、家ではありませぬ。信者が、組をつくつて泊る、木賃宿の如きものでありますから、とても、いけません』

『はア、信者は、人間でないのか』

石田は、失敗つた、と思つたが、もう取返しはつかなかつた。

『わしは、此家へ、泊る事にする』

と、いつて、すぐ門口にはひつたから、石田も、止むを得ず、従いて行つた。

『モシ、誰か居らんかな』

『ハイ』

奥から出て来たのは、可愛らしい子供であつた。

『お座敷は、空いて居るかね』

『ハイ、表の二階が、空いて居ります』

『それでは、泊めて貰ひ度い』

『お父さまに、聞いてまゐります』

子供は、奥へ、かけ込んだ。

『オイ、石田ッ』

『はッ』

『はやく・上らう』

乃木は、靴を脱いで、ズン／＼二階へ、上つて行く。石田も、續いて上つた。

屋外で見たよりは、汚い座敷で、壁は、ポロ／＼して居て、疊は、ブク／＼だ。乃木は、平然して生るから、石田も、不承無性に、坐つた。間もなく、楮子を、昇つて来たのは、當家の主人であつた。

『私は、野澤清夫と申しまして、當家の主人で御座いますが、今日は、何か御用でも御座いまして、お居て下さいましたか、御用の筋を、伺ひ度う存じます』

『イヤ、別に用事と、いふ譯ではない。泊めて貰ひ度いのぢや』

『エツ、御泊りで、御座いますか』

『左様ぢやよ。同行二人、何分たのむ』

『御冗談で、御座いませう』

『イヤ、眞剣にたのむ』

『それは、お斷り申します』

「怪しいものではない」

「御身分は、よく存じて居りますから、御断り申し上げます」

「我々を、泊めてはならぬ、といふ、申合せがあるのか」

「左様な事は、御座いませぬ」

「何ういふ理由で、泊めてくれぬのか」

「閣下のような、立派な御方を、お泊めいたします旅館では、御座いませぬ」

「併し、困るから泊めてくれ、といふたら、どうするつもりか」

「實は、迷惑を、いたしますから、御勘辨を、願ひ度いのであります」

「ふふう、迷惑ぢやと、いふのか」

「ハイ」

「可し。宿賃は、前拂ひにいたさう」

「さういふ次第で、迷惑ぢやと申すのでは、ありませぬ」

「然らば、どういふ理由か」

「御身分の高い御方が、お泊り下さいましても、その準備が御座いませぬから、御辭退申上げ度いので、御座います」

「特別の扱ひをするには、及ばぬ。宿賃丈けの、取扱ひをいたしたら、それで、可い譯ぢや」

「ハイ」

「特等の三十錢で、たのむ」

主人は、しばらく考へて居たが、石田の方へ向いて、

「如何いたしたもので御座いませう」

と、いはれて、石田は、今迄の押問答に、興味を有つて、聞いて居たが、今度は、自分が、何とかいはねばならぬ、立場になつた。

「閣下は、お前の家が、お氣に召して、泊めて貰ひ度い、と仰せあるのぢやから、御請いたしたら何うちや」

「御請いたしても、宜しう御座いますか」

「御断りしては、却て失禮ぢやらう」

「さういふ次第ならば、御請はいたしますが、念の爲め、申上げて置きます」

「何ぢや」

「お膳部や、寢具の類も、一般の御客様と、同じで御座いますが、それでも、宜しう御座いますか」

乃木は、すぐ答へた。

「それが、望みぢや」

これで、主人は、階下へ行つた。乃木は、石田を顧みて、ニコ／＼笑つて居る。

七

やがて、食膳が、運ばれて来た。高足の膳ではあるが、餘り上等の物ではなく、茶碗にしても、塗碗にしても、縁が缺けたり、塗の剥げたものばかりで、噛んだ跡の、ついて居る、長い塗箸が、添へて在る。石田は、只見た丈で胸の悪くなるほどで、恐れ入つて居るが、乃木は、獨り悦に入つて、すぐに、徳利を取上げた。

「オイ、飲らうぢやないか」

「ハイ」

「献酬は不可から勝手に飲る事にしよう」

『ハイ』

先づ、一ぱい飲んで、乃木は、頻りに考へて居たが、

『これは、一本に限る。多く飲むと、頭へ来るから、あツさり、飲つて置くが、可い』

と、いはれて、石田も、一ぱい飲んで見たが、とても、二はいとは飲めぬ、地酒のひどいものであつた。椀を取上げて、味噌汁を試みたが、乃木は、相格を崩して、

『これは美味しい、岡崎の赤味噌ぢや、此味は、又格別ぢや』

石田も、止むを得ず、同じやうに椀を取つて、吸ふて見たが、これは酒より、遙に善かつた。

『成程、これは却々よろしいですな』

『鑑節を使はずに、此位の味を利かせるには、火加減に依るのぢや。亭主の手料理らしい』

次ぎには、小芋の煮付けたのであるが、之れも新しい丈けに、持味が出て居る。

『うむ、これは益々、よいぞ。さア、是れを食つて見る。眞に芋の味が爲る。土から離れて、すぐに煮たのは、とても、都會の地では味はれぬ。田舎は、これぢやから、好きにもなる』

石田も促されて、食つて見たけれど、乃木が、いふほどに美味くは、なかつた。食事のすんだ所へ、主人は、膳を引きに来た。年齢は、既に五十歳を、出て居るらしく、どことなく、品格のある人で、斯ういふ商賣には、未だ馴れて居ぬらしい。

『まことに、御粗末の物で、とても、御口には合ひますまいが、御勘辨を願ひます』

『どうして、却々うまかつた』

『恐れ入ります』

『あんたは、古くから此商賣を、やつて居られるのか』

『イエ、ほんの最近に、はじめましたので御座いまして、萬事に、不馴の所から、御客様の御叱りをうける事は、度度で御座います』

『ふふーむ、わしも、左様思つたが、何時頃から、始めたのか』

『未だ半歳あまりにしか、なりませぬ』

『而て、前の商賣は、何であつたか』

『神職で御座いました』

『えッ、神職であつた、といふのか』

『ハイ』

『さうであらう。何でも、普通の人とは、見えなかつた』

『此附近の神社に、長く務めて居りました』

『神職をして居た人が、斯ういふ商賣になるのも、甚だ不思議の事ぢやが、どういふ次第からか、聞かせて下さらぬか』

『維新前後の事で、有栖川宮様が、關東へ、征討總督として、御下りの時分には、遠州一圓の、神職に在りますものが、韓国隊と申しますものを、組織いたしましたして、宮様の御警護を勤め、江戸城にも、半歳あまり居りましたれど、追々に、若い入達が、學問を修めて、後からくと、押してまゐりますのに、年老つたものが、長く席を空いて居るのでもないと思ひまして、自分から、辭退をいたしましたして、此家を引受ける事に、相成りましたので御座います』

『左様でしたか。年老つたものが、後進の爲めに、道を開いてやる事は、何の事につけても、當然ぢやが、さて其れは、容易に出來ぬ事で、まことに恥かしい氣が爲る』

『不行届きの點は、御許しを願ひます』

『少しも、不満足の事はない。あんたの姓名は、何といはれるか』

『野澤清夫と申します』

『さうく、最前、一度聞いたのぢやツた。これは、失禮した』

主人は、膳を、持つて退る。乃木は、石田に向つて、

『どうも、普通の人でない、と思つた。わしが、君と話して居る時、そつと来て、那れを置いて行つたのぢやが、是れが、心からの御馳走ぢやらう』

と、いひながら、背後へ指さした。石田が、その方を見ると、美しい一輪の花を、缺けた口の瓶に、挿し込んであるのが、置床の上に、載せて在つた。

八

『さア、寝やうか』

『左様いたしましたせう』

『明日の朝は、可成く早立にしよう』

『ハイ』

『わしは、便所へ、行つて来るから、その間に、支度をさせて置いてくれ』

『ハイ』

乃木は、便所へ行く、その後へ、宿の主人が、自分で、やつて来て、寢床の世話を爲る。本當の煎餅布團で、而も汚れて居る儘であるから、石田は、見て居るうちに、體がムヅクして来た。

『それでは、おやすみ遊ばせ』

『やア、お世話でした』

『明朝は、お早いので御座いますか』

『閣下は、早起きであるから、出立も、それに准じて、早いぢやらう』

『その覺悟で、用意を整へて置きます』

『宜しく、たのむ』

主人が、階下へ行くと、入れ違ひに、乃木が、はひつて來た。

『支度は可いかな』

『ハイ』

『此家の主人は、やかまし屋らしいから、氣を付けぬと、叱られるぞ』

『左様ですか』

『わしは、元來が、長尻の方ぢやが、此家に相當した、便所ではあるが、掃除の行届いて居る事は、實に感心なものぢや。汚い所が、綺麗になつて居る家の、主人といふものは、必ず疳癩の強いに、極まつて居るから、下手な事を、して、叱られてはならぬ。御互に、注意をしよう』

『掃除好きなのでせう』

『ちよつと、行つて見なさい』

『後に、まゐつて見ませう』

『まア、行つて見るが、よい』

未だ出たくないが、斯ういられると、石田も、聞流しにされぬから、便所へ行く事にした。そのうちに、乃木は

寢所へはひる。石田は、便所から、歸つて來た。

「成る程、綺麗に、なつて居ります」

「左様ぢやらう」

「ハイ」

「さ、寢たら何うちや」

「御免蒙る事に、いたします」

石田は、次の部屋へ寢るのだが、何となく、薄氣味悪くて、眠る事が出来ない。右に左に、枕を代へて居るうちに乃木は、もう熟睡に入つて、雷のやうな鼾を、かいて居る。それが氣になつて、少しも眠れないので、石田の辛さはひと通りでない。曉方近くなつて、疲れた儘に、一と寢入りしたか、と思ふと、早起の乃木は、もう寢床を離れて、軍服を着けると、頻りに石田を、起しはじめた。

「オイ、起んか」

と、二三次度も、聲をかけたので、石田は、驚いて飛起きた。

「はッ、御目覚めでしたか」

「うむ、もう起きたのぢや。よく眠るな」

今寢たばかりで、未だ祿に眠らないのだから、石田も、少し恐れ入つた。まさか、其れともいへず、顔を洗ひに行つて、ほッとした。食事がすむと、すぐ勘定書を、持つて來た。

「勘定をするなら、茶代を、少し奮發してやつてくれ」

「ハイ、どの位遣はしませうか」

「二十圓やつてくれ」

『えッ、二十圓遣はしますか』

『うむ』

『斯ういふ家に泊つて、茶代を置くものは、殆ど無い位であります。併し、五圓も遣はしましたら、空前絶後の事で御座いませう』

『イヤ、二十圓やつてくれ。わしは、人の眞似をするのぢやない。氣に容つた家ぢやから、奮發してやり度いのぢやよ』

『はッ』

斯ういはれては、石田も、強て拒めぬので、澁々ながら、二十圓を包んだ。

前夜の子供が、出て來たから、

『さア、勘定をする』

『有難う存じます』

『これは、別に茶代ぢや』

『有難う存じます』

子供は、勘定の金と、茶代の包みを、盆に載せて、階下へ行つた。

『出かけようか』

『ハイ』

兩人は、二階から降りて、すぐ靴を穿いた。奥へ行つた、子供の出で來ないうちに、急ぎ足で、濱松へ向つた。

一里餘りも來た、と思ふ頃、後の方から、追かけて來るものがある。それは、宿の主人と、その後から、巡查が、尾いて來るのであつた。

九

小松屋の主人は、裏の畑へ出て居たので、乃木の出立を知らなかつた。早立とは、聞いて居たが、食事がすんで、すぐ飛び出すとは思はないから、うつかりして居るうちに、乃木は、出かけてしまつたのである。

『お父さん』

『何ぢや』

『軍人の御客さんは、今歸りましたよ』

『えッ、乃木閣下は、御出立になつたのか』

『エー』

『何故、知らせなかつたのか』

『わたしが、階下へ来て居るうちに、歸つてしまつたのですよ』

『左様か、それは失禮をした』

『お茶代を買ひましたから、机の上へ、載せて置きました』

『それは、御丁寧な事で、有難い』

『お父さん、那の軍人は、偉いのですか』

『旅團長乃木閣下ぢや』

『へー』

『現在の軍人のうちでは、屈折の御方で、戦さの強いのも、評判の人ぢや』

『さうですか、やさしい人ですね』

『本當に強い人は、みなやさしいものぢやが、那の御方は、また別ぢやよ』
 『偉いのですね』

『さうぢや』

此子供が、立派な紳士になつて、今では濱松へ出て、國民新聞の特派員として、また、濱松新聞の主筆として、野澤十寸穂といへば、相當に名を、知られて居る。

著者は、地方講演に行くので、種々の記念を、有つて居るが、殊に、強い印象を、與へられたのは、十年ばかり前の事、濱松歌舞伎座で、講演をして居た時、乃木が、明治天皇に、御信任を辱うした、事情を述べると、臨監して居た、一人の若い憲兵が、直立不動の姿勢を取つて、傾聴して居た事である。苟も、陛下といへば、直に起立して、敬意を表したのであるから、著者も、非常に感心した。今迄に、明治大帝の御聖徳を、物語つた場合に、役人や教育者も、さうした、態度を以て、謹聴したものは、一人もない。著者は、講演を終つて、その人の氏名を聞かう、と思つて、臨監席へ行つたら、すでに歸つてしまつて判らなかつた。

其翌朝、私の泊つて居た、花屋といふ旅館へ、野澤十寸穂といふ、名刺を出して、面會を求めた人があつた。すくに、會ふて見ると、その人が、小松屋の作で、乃木の泊つた時、取次ぎをした、子供である、といふので、私は、實に驚いた。

『昨夜は、乃木將軍の奥山行について、先生の話を聞きまして、思はず落涙いたしました。その取次ぎをした、當時の事を、思ひ出すと、追憶の情が追つて、席に堪へられず、私は、そつと、外へ出てしまひました。今朝は、先生に對して、當時の思ひ出を申上げ、將軍の徳風を、詳しく申述べたい、と思つて、お尋ねいたしました』
 斯ういふ、挨拶から始まつて、當時の追憶談に、時を移して歸られたが、數年前には私の講演を基礎として、これを小冊子に綴り、無代頒布されたが、實に篤志の企てである、と、私は、深く感心して居る。

却説、主人は、机の上の包を、開いて見ると、驚いた。僅に六十錢の、宿料に對して、金二十圓の茶代は、餘りに法外であるから、

『斯ういふ物を、お客様から頂戴した時は、すぐ私に、いはなければいけない。机の上へ載せて、黙つて居るやうな事を、爲てはなりませんぞ』

と、叱られたので、子供は、ベソを、かいて居る。その金包を持つて、小松屋は、すぐに、巡査の駐在所へ、やつて來た。

『やア、野澤さん』

『お早う御座います』

『大層はやく、何事ですか』

『實に困つた事が出来まして、御相談に、まゐりました』

『ははア、どういふ事ですか』

『昨夜は、乃木閣下が、お泊り下さいましたのです』

『宿泊人届を見て、今、驚いて居た所だが、君の家も、大に名譽を得た譯ぢや』

『それについて、御相談があるのです』

『ふむ』

『御茶代を戴いたのですが、その包みに、二十圓はひつて居たのです』

『えッ、二十圓はひつて居た』

『ハイ』

『そりや、間違ひぢや』

『私も、左様思ふのです』

『君は、どうする覺悟かい』

『其處で、御相談があるのです』

一〇

小松屋の主人は、巡查に向ひ、椅子を進めて、語る。

『一圓の御茶代でも、未だ戴いた事のない、木賃宿も同様な、私の家へ、御泊りになつたのさへ、不思議と思ふ位で、御茶代なぞを、戴ける譯がないのです。況して、二十圓なんて大金は、立派な宿屋でも、一晩位の御泊では、決して有るものではない。其處で、私の考へにしますと、御出立を、御急ぎなされたので、御附きの方が、取違へたのでありませうと思つて、貴官に、御相談を、する次第なのですが、如何でせう。貴官の方で、何とか、御取扱ひ下さる事は、出来ませうまいか』

『さうぢやな。是は、何ういふ風に取扱つたものか、ちよつと、判らない』

『郵便爲替にして送るのは、失禮でありませうし、外に、之れといふて、方法も考へつきませんが、何とか御取扱ひを、輝ひ度いものが……』

『巡查は、急に思ひついた、といった態度で、』

『是れは、君、閣下が、間違へて渡された、といふ事なのだね』

『いえ、未だ其れは、判らないのです』

『ははア、それでは、何ういふ事を、相談するのかね』

『斯んなに、澤山の茶代を、頂戴する譯がないので、どう考へて見ても、間違ひらしく思はれるものですから、それで、御相談に來つたのです』

『そりや、君、不可わ』

『何故ですか』

『何故かといつて、未だ間違ひであつたか、どうか、といふ事が、判らない以上は、どうする、といふ方法も、考へ付く筈がない』

『成程……』

『だから、閣下へ、間違ひではないか、どうか、といふ事を、御尋ねいたしてからの事ぢや』

『それが、私には、困るのです』

『はゝア、どうして、困るかね』

『外の事なら、宜しいが、金銭の事について、さういふ事を、伺ふのは、まことに失禮ですからな』

『それも、左様ぢやな』

『私の御相談は、其處に在るのです。是れは何うしても、貴官から、御尋ねして貰ふ外は、ありません』

『そりや、困る』

『まア、左様いはずに、一しよに行つて、伺つて頂き度い』

『巡查も、しばらく、考へて居たが、

『宜しい。我輩も、一しよに行かう』

と、いつて、立上つた。

『御面倒をかけて、相すみませんが、どうか、左様いふ事に、願ひ度い』

『うむ、引受けた』

それから、兩人は、大急ぎで、乃木の後から、追ひかけて来た。一里餘りも、やつて来て、漸く其姿を見付けたので、聲をかぎりに、呼んだ。早足の人を、追ひかけるので、兩人は、へト／＼に、なつて居る。聲をかけずに、追ひつけばいゝのだが、それが、至難しいので、失禮と知りながら、聲をかけて、呼び留たのである。

『オイ、石田』

『ハイ』

『旅館の主人ぢや』

『左様ですな、巡査が、附いて来ます』

『うむ、左様ぢやのう』

『巡査が、附いて来るのは、ちと變ですな』

乃木と、石田が、立停まつて、話して居る所へ、兩人は、セイ／＼息を切りながら、

『お呼留め申しまして、失禮で御座いますが、些と伺ひ度い事がありました、お後を、逐ふて参りました』

と、いはれて、乃木は、

『どういふ、用事かね』

『ハイ、只今申上げます』

小松屋は、そつと、巡査の顔を見た。巡査は、一と足進んで、丁寧に禮をした。

『小官は、馳在所語の巡査であります、閣下に、伺ひ度い事が御座いまして、小松屋の老人と、共に参りましたのです』

『その用事は……』

「閣下が、御出立の際、是れなる老人の子供へ、御遣はしになりました、金二十圓は、何ういふ性質の、金子で御座りますか、それを、伺ひ度いので御座います」

「わしの金ぢや」

「巡査は、此答へを聞いて、變な顔をして居る。」

「それが、何うした、といふのか」

「ハイ」

「茶代を、遣はしては悪い、といふ規則でも、あるのか」

一 一

同じ人間ではあるが、巡査と旅團長では、其處に非常な懸隔があつて、顔を附合はしての話になると、ツイ氣遅れが、爲るものと見えて、巡査の態度は、只堅くなつて、いふことも、後や先である。

「エー、小松屋の主人が、只今、訴へ出ました趣意は、閣下が、御出立の後、子供からの話で、御茶代を、戴いてある事が、判りまして、それを開いて見ますと、莫大な金子が、はひつて居りましたので、是れは、確に御附の御方が、御取違ひに、なつたものであらう、とは思ひますが、金銭上の事を、閣下へ、直接申上げるのは、失禮であるに依つて、之れを、駐在所の方で、取扱つて欲しい、との事でありましたから、取敢ず御後を、逐ふてまゐつたやうな、譯であります、あれは、御間違ひではありませぬか、ちよつと、其れを、御伺ひ致します」

「ははア、その事か」

「ハイ」

「包みのうちには、幾何はひつて居たか」

『只今申上げました通り、金二十圓はひつて居りました』

石田を顧みて、乃木は尋ねた。

『二十圓、入れておいたのか』

『左様であります』

『間違ひないか』

『相違ありません』

乃木は、巡査に向つて、

『今、聞いて見たら、二十圓入れておいた、といふが、それに、不都合があるのか』

巡査の顔は、妙に筋張つて、

『イエ、不都合といふ、次第では御座りませぬが、それでは、皆頂戴いたしても、宜しいので御座いますか』

『茶代を出して、釣銭を呉れともいへまい。ワツハ、、、』

之を聞くと、小松屋の主人は、眼に、一ばいの涙を浮べて、その包みを押戴いた。

『野澤さん』

『はツ……』

『あなたは、實に立派な、心を持つた、御方ぢや。どうか、其心は、長く忘れずに下さい。あなたのやうな人が、一郷一村に一人あると、やがて其れが、一郷一村の感化になる。其心は、人間の最も美しい所て、天下の寶とも、いふ可きぢや』

『御辭で、恐れ入ります』

巡査の方へ向直つて、

『君が、平生からの監督よろしきを得て、斯ういふ立派な人が、君の管轄内から、出たのぢや。今後も猶其心を以て、人民に接して、貰ひ度い』

『ハイ』

『君の名刺を貰ひ度い』

巡査は、何が何だか判らないが、無性に賞められたので、只恥かしいやうな、氣がするばかり、顫へる手で、名刺を渡した。

『ヤ、これ失禮する。名古屋の方へ出たら、是非、たづねて下さい』

『いづれ、御禮に伺ひます』

巡査と、小松屋が、丁寧に禮をして居るうちに、乃木と石田は、前の峠を、越えてしまつた。

『オイ、石田』

『ハイ』

『實に愉快ぢやつた』

『立派な老人でした』

『わしは、昨夜はひつた時に、品格のある人ぢや、と思つたが、矢張り見た通りであつた』

『全く感心いたしました』

『田舎へはひると、未だ那アいふ人が居る。都會の人の氣分が、追々に頹廢してゆくのを見ると、厭な氣が爲るけれど、また、那アいふ人に逢ふと、いくらか氣強い感じも爲る』

『全く左様です』

『さア、急がうか』

「ハイ」

これから急いで、濱松へ出た。

例の大米屋支店で、休息の後、晝飯をすませて、汽車に乗った。豊橋へ来たのが、もう日の暮であつた。驛前の小島屋へ、はひらうとして、軒先まで来ると、小島屋の主人が、はやくも、乃木の姿を見付けて、上り口の土間へ、手をついた。それを見ると、乃木は、ふいと、向きを變へて、

「向ふの岡田屋にしよう」

と、いふた。小島屋の主人が、ぼんやり、乃木の後姿を、見送るうちに、乃木は、岡田屋の奥座敷へ通つて、

「石田、あれには、驚いたよ」

石田は、何やら判らないが、程よく合槌を、うつて居た。

一一一

「小島屋の主人といふのは、もう少し物事の、解つて居るやうに、思つて居たが、存外であつた」

「左様ですか」

「禮は過ぎれば詔ひになる。人の前で、餘り空々しい事を、するものは、蔭で、何をいふか判らぬから、成る可く、近付かぬがよい」

「商賈柄で、あれを、よいと思ふて居るのでせう」

「それならば、猶ほ宜しくない。旅團長に土下座したら、師團長には、何を爲るつもりか。馬鹿々々しい」

此事があつてから、小島屋へ泊る事は、可成く、避けるやうにした。ただ聞くと、如何にも、窮屈な人のやうであるが、實は左様でない。乃木は、生地を好むのであつて、少しでも、虚偽を加へると、それを、許さなかつたの

であるから、その氣分さへ呑込めば、此位に、扱ひ易い人はない。之れを以て、窮屈である、とするのは、その人の間違ひである。何の職業に、従つて居る人でも、みな左様いふ風にしろ、といふたら、無理であるかも知れないが、少くも、軍職に在る人丈は、此心を持つて居て、くれねば困る。

翌日は、豊橋に居て、その翌日、名古屋へ、歸つて來た。また、嫌ひな桂と、顔を見合はなければ、ならぬのだ。旅團長の會議があるので、東京へ、出る事になつた。少しの間でも、名古屋を離れるのが、乃木の樂しみであつた。

折柄の齒痛で、その惱みが酷く、痛いとか苦しいとか、いふのは、恰も恥辱のやうに、心得て居た人でも、齒の痛みに堪へられなかつた。汽車に乗つてからも、兩手で、頬の邊りを、しツかり押へて、青い顔をして居る。

汽車が、普通に、走つて居る時は、どうか堪へても居るが、線路の交叉して居る所へ來て、ガタン／＼やられると、頭腦の芯へ響いて、とても、堪へ切れぬので、乃木は、ウム／＼いつて呻喚る。それを見かねて、石田は、

『よほど、御苦しいやうですが、未だ會議には、五六日の餘裕もありますから、静岡で、二三日の間、御療治をなされては、如何で御座いますか』

と、慰めながらいふた。

『さうぢやな。二三日でも手當をしたら、少しは樂になるぢやらうから、さうしようか』

『左様なすつた方が、よろしう御座いませう』

『齒の痛み位で、恐れ入るのは、ちと恥かしい氣もするが、さうしよう』

乃木の剛情は、病氣の場合でも、平生でも變りはなく、普通の人の、堪へられぬ所を、ぢつと、堪へ通すので、誰も、其剛情には、呆れるほどであつた。體格は、極めて強壯であつたが、病氣は、二つあつた。一つは、齒の質がよくないので、何時も、其れに悩むのと、もう一つは、痔疾がひどいので、之れには、随分苦しんだものである。

けれども、それを無理にも押通して、苦しくないやうな、顔をして居る。獨逸に居た頃、例の通り、痔疾が起つて

ひどく惱んで居た所へ、川上操六から、斯ういふて来た。

『何日の夕方から、陸軍の將官が集まつて、招宴を開く、といふ通知が来た。殊に、此席へは、皇帝陛下も臨御に相成るが、君は、出席するか何うか』

と、いふのであつた。

痔疾の惱みは酷いが、斯ういふ席へ、それが爲めに出ない、といふのは、如何にも残念であるから、推しても出席しよう、と決心して、

『必ず出席するから、手續は、宜しく頼む』

と、いふ返辭をした。少しでも病氣を軽くして、置き度い、と思つて、醫師にも、この旨を語つて、荒療治を頼んだが、醫師は、頻りに出席を斷れ、といふて、それ迄は、療治の届かぬ事を語つた。

『馬鹿なツ、一度承知して置いて、今更に斷りがいへるか、療治が届かぬといふなら、それでもよい、俺にも、考へがある』

醫師も、その剛情に呆れて、療治を斷つた。いよく當日になると、乃木は、肛門へ、澤山の綿を宛がつて、その上へ、數枚のガーゼと、油紙を重ね、兩肩から十文字に、股へかけて釣をした。痛いのは、何れほどでも堪へるが、出血を押へる、工夫をせねばならぬので、左様いふ事までして、出席したのであるが、宴會中の苦しさは、實に一通りでなかつた。

歸宿の後、しらべて見たら、出血は、足を傳はり、靴の中へ、ペト／＼に、沁みて居た、といふ事である。普通の人には、珍らしい事ともいへるが、乃木には、これが通例なのであつた。

静岡で、汽車を降りると、大東館の番頭が見付けて、

『お久しう御座いました』

乃木は、手を振りながら、

『し、しづかにしてくれ。頭へ、ひびくぞ』

『お齒が痛みますので……』

『うむ、齒醫者へ、連れて行つてくれ』

『それでは、俾を申付けませう』

『イヤ、歩いてゆく。俾て、ガタビシやられては、堪まらぬ』

『成程、お歩きなさる方が、却てよいかも知れませぬ』

石田を顧みて、

『君は、先に宿へ、行つて居てくれ』

『ハイ』

是れから、乃木は、齒醫者へ行つて、一と通りの手當をして貰つた。齒の痛みが、強い時は、どうしても、直ぐ癒るものではない。けれども、藥の力で、幾分か樂になつた。

『先生』

『ハイ』

『斯う痛んでは、實に困るのぢやが、どうか、根本の療治はないものかな』

『閣下の齒は、元來、質がよくないのでありますから、一時の療治は、いたしましても、すぐ痛みはじめませう』

『それが、困るのぢや』

- 「先づ抜く外は、ありませんまい」
- 「左様か、抜けばよいかな」
- 「抜いてしまへば、痛む恐れのない代りに、御不自由でせう」
- 「義齒が、出来るぢやらう」
- 「それは、出来ません」
- 「然らば、不自由な事は、ない譯ぢや」
- 乃木は、考へて居たが、
- 「先生、抜いてくれ」
- 「今ま直ぐ、抜く事は、出来ません」
- 「何故か」
- 「未だ本當に、痛みが去らないのですから、もう一日は、容子を見なければ、抜く事は出来ませぬ」
- 「抜けば、痛まぬのぢやないか」
- 「併し、萬一にも、脳へ故障を起すといけませぬから、今日は、抜く事は出来ませぬ」
- 「左様いふものか」
- 「ハイ」
- 乃木が、どれほど剛情でも、之れだけは、醫者のいふ所に、従ふ外はなかつた。その日は、止むを得ず、大東館へ歸つて来たが、痛みは追々、薄くなつて来た。翌日は、又やつて来て、
- 「さア、先生、今日は抜いてくれ」
- 「一應、拜見の上にしたしませう」

「醫者が、診察の上、いよく抜く事になった。

さて、抜いて見れば、頗る樂になつて、今迄の苦痛は、拭いて取つたやうになつた。

「先生、後の歯も、抜いてくれ」

「えつ、後の歯ですつて」

「みな抜いて、しまつてくれ」

「痛むので、御座いますか」

「イヤ、未だ痛まぬが、やがては痛むのぢやから、はやく、抜いてしまはう」

之れには、醫者も驚いて、容易に承知しない。押問答をして居る所へ、石田副官が、やつて來たので、乃木は笑ひながら、

「オイ、此先生は、變な事をいふのぢやよ」

「ははア、どんな事を……」

「わしの歯を抜いたくれ、といふのに、苦情をいふて應じないのぢやが、變な先生ぢやないか」

「先生には、其道の人として、相當の意見があるのでせう」

「それにしても、わしの歯を、わしが抜いてくれ、といふのに、他人の先生が、苦情をいふのは變ぢやないか」

石田は、乃木に代つて、

「抜いては、悪いのですか」

「悪いといふ次第はないのですが、痛まぬのに抜くと、仰しやるので、私も、困つて居るのです」

「醫者としての立場から、抜いて悪いものなら、拒まれても致し方はないが、もし、差支ないとしたら、御本人の希

望通りにしたらどうですか」

應援を得て、乃木は、ますます強く強くなつた。

『さア、先生、みな抜いてくれ』

醫者は、終に承知して、悪いと思ふ齒は、みな抜いてしまつたので、バク／＼の老爺になつた。

『ア、これは、榮になつた』

と、大喜びで引上げた。東京へ出てから、更に専門醫の手にかけて、残る齒も抜いて、上下ともすべて義齒にしてしまつた。されば、晩年の乃木は、一本も生齒はなく、すべて義齒であつた。

一四

滯京中も、寺内には、辭職の意を洩らした事があつて、仲善しの寺内はひどく、心配して、深く慰めて、其決意を鈍らした、といふ事である。

『軍隊に在るものは、文官と異り、其進退には、深い注意を、拂はねばならぬ。殊に、將官は、固より永久職のものではないが、各自に、特長を、持つて居て、その特長は最も大切なものであり、一たび失ふ時は、容易に、補充の出来ないものであるから、一人の進退にも、充分の考慮を、要する次第で、君の性質としては、現在の境遇にある事は、或は苦痛であるかも知れないが、我輩にも、少しく考へて居る事があるから、もう少焉の間、辛抱して居て、貰ひ度い』

寺内の言ふ所にも、相當の理由はある。乃木としては、明けて言はれぬ、桂との感情があるのだから、斯ういふ風に、いはれると、強て寺内の言に、背く事は、ならなかつたのである。

名古屋へ、歸つて來ても、一日として、快く勤めた事はない、乃木ほどの人格者でも、一般の人と同じやうに、愛憎の情は有る。此一事は、人間を齟めな限り、どんな人にも、有る事で、それが有るからといふて、その人格を

疑ふ事は出来ぬ。西郷が、彼れ丈けの、偉人であつたにも不拘、死ぬ迄、島津久光と、相容れなかつた。好きとか、嫌ひとか、いふ事は、誰にもある感情で、是れ丈けはどうも、致方がない。

桂は、元來が、乃木の後輩と、いふばかりでなく、軍事の上で就ては、とても、乃木に比す可くもないが、世渡りの巧い點と、俗才に長じて居る點とは、乃木の、遠く及ばざる所で、殊に、桂は、乃木と違つて、長州人の間に、多くの味方を、有つて居り、井上に善く、山縣に近く、それ／＼急所の人には、手落ちなく、交際つて居たから、大體に於て、先輩には、氣受けのよい人であつた。

左様した性格の人であるから、乃木との折合がよくなかつたのも、實は、當然の事といふ可く、乃木が、桂を嫌ふ事は、一と通りでなかつた。斯ういふ事情がある、上に、桂は、師團長として、乃木の上官であるから、ます／＼面白くない事にもなつて、元來が、精勤家の乃木も、その頃は、病氣引きの多かつたのも、止むを得ぬ事であつたらう。何事にも、如才なく立廻るのが、桂の長所であつたが、乃木には、そのニコボンも、利目がなかつたので、果は、皮肉に、厭がらせを、やるやうになつた。恰も、天長節の佳辰に當つて、病氣引をして居る、乃木に對して、分列式の役目を授けたのも、要らざる悪戯であつたが、乃木は此大切な日の、分列式に、假病で休む事は、御上への畏れ、と考へて、すぐ全快届を出すと、同時に、その指揮について、責任を果す事になつた。

事馴れて居る、乃木には、それ位の役目は、何でもない事であるから、分列式は、滞なく、終つた。が、それから先は、桂の前に立つて、敬意を表する事に、なるのだ。桂は、乃木の顔を見ながら、例のニコ／＼した顔で、左右の人を顧みだ。

『乃木旅團長は、病氣ぢやといふが、たとへ病氣でも、此位の元氣があれば、大丈夫ぢや。ハツハ、、、』

假病なぞ申立てゝも、それは駄目だ、といはぬばかりの一言、乃木の顔には、不快の色が漲つた。

桂の前を退くと、急ぎ足で、厩舎の方へゆくから、石田は、後から尾いて行つたが、乃木は、疾くも、繋いである

馬へ、ヒラリと飛乗つて、一鞭加へた。馬は逸物、騎手は乃木、營門の外へ、疾風の如く駆け出した。石田も、後から馬を急がせ、一生懸命に、追ひかけたけれど、廣小路へ出た頃は、三四町の隔たりがあつて、どうしても逐ひつくな事は、出来なかつた。

乃木は、停車場へ着くと、馬を入口の柱へ繋いで、改札口へ來た。丁度、東京行の汽車が、今出やうとする所であつた。切符を買ふ暇もなく驛長へ頼んで、すぐ汽車へ乗込んだ。

後れ走せに、石田がプラツトホームへはひつた時は、もう飛び乗る事は、出来ぬ所まで、汽車は、走り出して居た。汽車の窓から、半身露はした、乃木は、帽子を振つて、

『オーイ、石田ッ。己れは罷めてしまふから、後は頼むぞ』

石田は、思はず兩手を舉げた。

東京へ着くと、病氣辭職を申出た。寺内が、何といふて宥めても、乃木は、首を振るばかりで、どうしても、思ひ留まりさうもなかつた。

それから少焉して、乃木は、終に休職になつた。是れが第一の休職事情で、乃木は那須野へ引籠る事になつた。

日清戦争

一

日清戦争は、どうして起つたか、といふ事は、その當時でさへ、之れを知る人は、多く居なかつたのであるから、三十年も経つた今日では、猶更、知る人は少からう。

乃木の休職は、前回にいふた通り、其職務に堪へぬ、といふ次第ではなく、また、歳を老つて居るので、役に立たぬ、といふのではなく、別に之れといふ、過失もなかつたのであるから、只一時の處置として、且は、本人の希望でもあり、止むを得ず、此手續きを取つたのだ。當局者としては、其儘に、朽ち果させる事の、如何にも残念である、と考へたのは、一人や二人でなかつた。

殊に、寺内は、之れに就て、相當の心配もすれば、先輩や、同僚の間を、説き廻つて、漸く乃木を、復活させる事にした。剛情な乃木は、容易に、其勸告に従はなかつたが、其うちに、親友の勸告もあつて、幾分か、氣も和らいて來た。左様した事情から、終に復職する事になつて、休職九ヶ月の後、即ち明治廿五年の十二月、再び陸軍に入り、歩兵第一旅團長になつた。

その前後に、獨逸留學の事や、その外にも、多少の物語りはあるが、それは、省略する事にして、日清戦争に就て、先づ其概略を、述べる事にしよう。

朝鮮は、表面に於て、獨立王國と、いふ事になつて居たが、其實際は、支那政府の爲めにすべての指揮をされて、唯々、少しも獨立國たるの體面は、保たれて居なかつたのである。明治十七年に起つた、金玉均と、朴泳孝の亂も、それが爲めてあつた。此二人が、獨立黨なるものをつくり、同志を集めて、さかんに、支那黨に反抗し、政府の頭上に、ふりかゝる、支那政府の干渉を排斥しよう、として、頻りに努めたのであるが、その背後には、後藤象二郎や、福澤諭吉が、附いて居て、日に増し、勢力は振つて來た。井上角五郎は、福澤の門下生で、其内意をうけて、京城へ渡り、漢城旬報なる新聞を起して、頻りに鮮民を煽り、反支那の氣勢をつくつたものである。

十一月の上旬、郵便局の開所式に、金、朴の率ゆる、獨立黨の壯士が、日本刀を携へて、斬り込み、大騒動を引起した。同時に、宮中に於ても、殺戮が行はれ、王妃の閔氏は、纒かに身を以て遁れ、宮中も、府中も、一時は、獨立黨の爲めに、占領された。

此の際に、袁世凱は、統理交渉通商事宜と、いふ役で、京城に留まつて居たが、此事變を見ると、支那兵四百餘名を率ゐ、巧に鮮人を動かし、夜明けを待つて、獨立黨を撃退した。その手際の、鮮かなる事、實に驚く可きものがあつた。そのうちに、日本公使館は、鮮人の爲めは包圍されて、擣打やら、襲撃やら、散々な目に逢つて、竹添公使等は負傷して逃げ出し、陸軍の將校は、大概殺されてしまつた。

此事件が、日本へ傳はつて來ると、朝野の間に、はげしい議論が起つた。殊に、自由黨は、開戦論を主張して、上野公園に、示威運動を爲る、といふやうな譯で、大井憲太郎が、壯士を率ゐて、政府に迫り、恐ろしい騒ぎになつたが、結局は、翌十八年の四月、天津條約を結んで、支那政府との關係は、それで打ち切り、となつたが、殘る問題は、京城に在留した、日本人の損害と、公使館の再建に關する費用等で、朝鮮政府からは、相當の償金を取る事になつて一段落となつた。

その後、朝鮮には、幾度か内訌が起り、随分、面倒な事もあつたが、辛うじて、十年を過ぎ、明治廿五六年に

なつて、陸奥宗光が、外務大臣の椅子に、着いた時、全羅道の古阜と、いふ所に、東學黨の亂が起つて、支那政府が、多くの兵士を派遣して、其討伐に努めた。事變は、それで、鎮定し得たが、日本政府の、了解を得ずに、出兵したといふ事が、天津條約に、背いて居る、といふので、又々支那政府との間に、面倒な掛合がはじまつて、大島圭介が、當時の公使として、北京から、京城へ馳せつけ、袁世凱と、朝鮮政府へ、談判を開く事になつた。

天津條約には、

『自今、朝鮮の内地に、事が起つた場合、出兵する時は、一方の國の承諾を求むべし』

と、いふ意味の、簡條があつた。陸奥は、それを以て、故障を申入れたのである。いろ／＼と、押合ひの末が、談判破裂となつて、日本も、出兵する事になつた。陸軍少將大島義昌が、混成旅團長として、朝鮮へ乗込んだのは、即ち此時の事であつた。福島安正と、一戸兵衛が、先乘のやうな役目で、京城へ着いてから、いよ／＼兵端を、開く事に決し、大島旅團の兵は、直ちに京城へ乗込んで來た。

一一

朝鮮が、獨立國の體面を保つて、國際的にも、將た、精神的にも、他國の侵害を、うけざる時に於て、我國の安全も、また保障されるが、もし、朝鮮にして、獨立の實なく、いづれかの國から、支配をうけるやうな事になれば、それこそ、我國に對する、一大脅威であつて、容易ならぬ事は、起るのである。其處で、朝鮮の獨立に就ては、長い間の悩みとなつて、我國と、支那の間に、何時も／＼、紛紜の絶えなかつたのも、實は、其れが爲めであつた。

陸奥は、外務大臣の椅子に着くと、すぐに、此問題の解決に、急いだのである。代々の外相も、みな其れは、考へて居たらうが、何分にも、支那といふ強國が、その背後に附いて居る爲、その考へも、齟齬するのが常で、いつも失敗に終つた。

すべて、斯うしたことは、當局者の手腕も要するが、第一には、時運に際會しなければ、思ふやうにはならぬものだ。その時運を、うまく捉へ得たものは、問題の解決をして、大成者になるのである。陸奥は、即ち其の人であつた。

明けても、暮れても、朝鮮の問題に惱んで居た、我國の人は、朝野ともに、深い注意は、拂つて居たのだ。政府の大官ばかりではなく、一介の浪人も、猶且、此問題については、毎に憂慮して、頼まれぬものに、朝鮮へ渡つて、陰に陽に、運動はしてゐたのである。識者といはれる、階級の人も、之れについては、不斷の論議を、つゞけて居た。長崎の東洋日出新聞へ、三十年來の病軀を以て、論説を書いて居た、鈴木天眼といふ人が、内田良平や、武田範之と謀つて、朝鮮へ、押し渡り、東學黨の内亂を幸に、天祐侠の旗を翻し、全俸準の參謀となつたのも、此時の事であつた。

内外、さまざまの事情が、終に支那政府をして、朝鮮へ出兵させたのである。その尻尾を捉まへて、ギューとまゐらせたのが、陸奥外相であつた。

陸奥も亦、表面からゆく、外交のみでなく、裏面からも、種々の手段は、用ゐて居た。岡本柳之助と林有造が、機密費五千金を懐裡にして、京城へ乗込み、大院君を擁して、巧に國王を勵かし、王妃閔氏を退けて、政府の實權を握り、大島公使の、活躍を容易ならしめた、といふ事もあつた。佛蘭西の公使代理、フランダンと、いふ人が、英露に對する、一種の反感から、我國の味方をして、陰然、その助力をした、といふやうな事もあつた。七月十九日の夜、袁世凱が、ひそかに、京城を遁れて、漢江を下り、仁川から、揚威號といふ、軍艦に乗つて、天津へ立去つたのは、フランダンの、皮肉な仕事が、うまく當つた、結果である。

討手の袁が、居なくなつて見れば、大島の獨舞臺であるから、どうしても、負ける氣遣はない。大島は、朝鮮政府から、支那兵撤退に關する、委任狀を受取る、運びになつた。之れを、正面にふりかざして『さア、速に歸國しろ』

と、いふのであるから、支那兵の方でも、まさかに其儘、指を咬へて、引上げる事も出来ない。衝突の機會は、追々に、迫つて来た。

支那政府は、初めから我國を、馬鹿にしてかゝつたので、どこまでも、其調子で、やつて来る。我政府は、固より眞劍の覺悟で、立ち向つて行く。その氣込みに於て、すでに宵壤の差があつた。

朝鮮内地に、兵を置く事が、善いとか、悪いとかいふ、簡單の問題でなく、之れを材料に使つて、根本的の解決を爲ようとするのであるから、つまり、撤兵問題は、ほんの口實であつて、實は、獨立保障が目的に、なつて居たのである。

支那兵は、數ヶ月前から、はひり込んで居て、我兵は、それに迎れて行つたのではあるが、先づ、京城へ、はひつてしまつたので、其立場は、頗る都合がよかつたのである。

それに就ては、小村壽太郎の働きを、認めなければならぬ。小村は、夙く外務省へ、はひつて居たけれど、甚だ不遇で、長く翻譯局長の椅子から、離れる事が、出来ずに居た。それを引上げて、北京の代理公使としたのが、陸奥の骨折であつた。小村は、日向の沃肥から、出た人で、十六歳の時、大學南校に入り、明治八年に、米國へ、留學を命ぜられ、十四年に歸朝して、大阪の上等裁判所に、判事を、勤めて居たが、其處での成績は、甚だ不良であつた。それは、適材を適所に、用ひたのでなく、全く法律に、縁の遠い人に、而も、本人の希望でない、役を當がつたのでその成績の擧がらなかつたのは、固より當然の事であつた。其後、外務省へ轉任したが、矢張り不遇で、日を送つて居たのだ。

二二

翻譯局長になる迄は、可成り、骨も折れて、其間の苦勞は、並大抵の事ではなかつた。夫人の町子を迎へてから、

一層の窮苦に迫つて、一時は、其日の事にさへ、差問へるほどであつた。只だ見れば、弱々しい體の人であつたが、その氣性には、一種の負じ魂が有つて、頗る剛健な、理想家であつた。大概なものは、其日に差問へるほどの、窮苦に陥入ると、膝を屈して、上官の前に、頭を下げるものであるが、小村には、そんな所が、少しもなかつた。

初め、小倉處平といふ、親分があつて、此人に、連れられて上京したので、南校へ、はひる事を得たのであるが、亞米利加へ、渡つた後、明治十年の西南戦争が起り、小倉は、西郷の味方をして、延岡で切腹してしまつた。それから後の小村は、復び親分を持たずに、獨力で、進んで行つた。外國の事は別として、我國の悪い習慣の一つは、良い親分を持つて居ないと、役人は、どうしても、出世が出来ぬ。充分に、實力が有つても、親分が悪いと、その人の値打に、用ゐられない。

すべての方面に、さうした事情は、あるやうだが、殊に、役人社會には、その弊が、表だしいやうである。之れが爲めに、争ふて親分を求めるやうになり、上級の人も、好んで自分を集める。其處に、所謂閥なるものが起つて、政弊の原因にもなるのである。

小村も、その位の事は、よく知つて居たが、生れつきの強情は、更にさうした、卑しい事をせず、己れは、親分を、一度持つたから、もう其れで澤山だ。男子生れて、親分を、二度持つものでない」と、傲語して居た。

陸奥は、小倉と舊交があつて、殊に、自分の陰謀を、企てた際には、小倉も、その黨與の一人であつて、陸奥とは、最も深い交はりがあつた人である。陰謀が露見して、陸奥は、入獄の身となり、小倉は、延岡で死んでしまつた。それから、幾多の浮沈を徑て、陸奥は、外務大臣の椅子を得た。長い間の、望みを果して、外相の椅子に着いてから當年の事を追想すると、立立つた、亡友の事が、思ひ出される。小倉も、その追憶に上る、一人であつた。斯うした事情から、小村の事は、陸奥も、よく知つて居たのだ。それと、打明けては云はれぬが、小村に就ては、多少の注意を拂つて居たのである。

朝鮮に、風雲が起つて、大鳥が、京城へ馳せつけた。その頃は、支那と朝鮮の公使を、大鳥が兼任して居たので、京城へ、大鳥の行つた後は、北京の公使館に、然る可き人物が無かつた。事は、朝鮮に起つて、談判は、京城で、はじまつたのであるが、その結局は、矢張り、北京で、決まるのである。茲に於て、北京へ、誰か送る必要がある、といふ事になつた。俄に、大鳥を罷めて、公使を、新に任命する、といふ事にもならず、といふて、新に朝鮮公使を、搜した所で、此場合に、役立つ可き人もない。とに角、北京の公使館へ、代理公使を送つて、一時を間に會はさう、となつたが、さて相當した人物がないので、政府も頗る苦しんだ。

陸奥は、此機會に、小村を推舉した。けれども、總理大臣の伊藤博文を始め、閣臣の多くは、小村を、重く見てないから、同意するものが少かつた。それを、無理に押付けて、小村といふ事に決めたのは、全く陸奥の力であつた。單に、小倉の子分であるから、といふ丈けでなく、小村の爲人も、よく知つて居たし、その力量も、充分に見込んで、小村を、推舉したのであつた。

『小倉が死んで、すでに十六年、其墓掃除は、汝への役目であるぞ』と、任命を受けた時、陸奥は、斯ういふて、小村を激勵した。之れを聞いた、小村の奮發は、北京へ、行つてから現れた。

風采の揚がらぬ、見た目に、見すばらしい、小村は、北京の外交團に於て、笑ひ草になつた一人で、ラストミニストルの綽名は、どこへ行つても、人の知る所であつた。體の小さい、頬のやせこけた、見るからに、廿日鼠に、酷似て居たので、小村を、人の卑しむのも、無理はなかつた。然し、人が、他を卑しむのは、一種の油斷であつて、その油斷に乗じて、奇功に奏したのが、小村であつた。

小村から打つた、一通の電報が、腰の弱い伊藤に、一大決心を促し、混成旅團の出征とまで、漕ぎつけさせたのである。陸奥は、小村を推舉した責任上、殊に、其慧敏な働きを喜んだ。それであるから、小村は、戰爭中に、朝鮮公

しに、榮轉したのであつた。

四

兵は凶器であるが、之れを用ひなければ、どうしても、決せざる問題の起つた時は、凶器であるから、といふて、之れに依らぬ事は出来ぬ。左様した場合には、凶器が、却て利器となるものである。只だ、妄りに人を殺傷し、徒に物を破壊する事は、人道にも悖り、經濟の上から考へても、感心すべき事柄ではないから、成るべく戦争は、避けるのが可い。けれども、人間に、慾のある限り、絶対に、之れを避る事は、不可能である。

世界戦争の結果、國際聯盟なるものが出来て、先づ之れからは、戦争の無くなるものと、思つて居たら、その調印のすむか、すまぬうちに、バルカン半島には、すぐ戦争が起つて、やうやく治まつたが、その危機は、猶孕んで居る。聯盟の發頭人たる、アメリカでさへ、その仲間には入らぬ、といふて、聯盟に反對したのだから、何が何やら、さつぱり解らない。軍艦の數を減らしたのは、戦争を小さくする、といふ丈の事で、軍艦の在る限り、戦争は、廢める事にはならぬ。實をいへば、人間の在る限り、また、國境の在る限り、もう一つは、人種に差別の在る限りは、國争の止む時はない、と、見る可きである。

軍備縮小は、戦争を爲ぬから、といふのでなく、縮小した剩餘金を以て、優良な國民をつくる、といふに過ぎぬ。全部の兵員を、多く養つて置く事を、之からは止めよう、といふのである。國家の形體が在つて、對手國のある以上は戦争の無くなるものでない。

我國が、支那と、戦ひを開いたのは、徒に戦ひを好むから、之れをはじめたのではなく、實に止むを得ぬ事情が、あつての事である。長い間、支那政府は、我國を、凌辱して居た。殊に、朝鮮の問題については、我政府の主張は、毎時も、通つた例なく、獨立國である可き、朝鮮は、全く支那の屬國と、同一の取扱ひを、うけて居たのである。そ

れが爲めに、我國の立場までが、危くなる場合が、多くあつたのであるから、之れを解決す可く、茲に戦争は、始められたのであつた。

明治十五年と、十七年の二度に起つた、京城の騒動には、常に支那政府の手が、延びて居て、雷同性の多くして、思慮の浅い、鮮人を煽動して、我公使館の焼打をなさしめ、多数の我國民を殺傷して居る。一事が、萬事の譬で、何事にも、支那政府が、勝手な振舞ひのみをして居た。

天津條約に、規定しある、出兵條件に背き、我政府の諒解を得ずに、多くの兵士を、朝鮮へ、くり出した事は、日支兩國間の問題としては、實に容易ならぬ事であるから、大島公使は、極めて穩當なる、掛合を以て、撤兵させようとしたけれど、袁世凱は、どうしても、承知しなかつた。その理由は、「朝鮮政府の依頼に應じて、内亂鎮定の爲めに止むなく出兵したのであつて、支那政府が、隨意にしたものではない」と、いふて、頑張るから、大島は、之れに對して「内亂は、既に鎮定して居るのに、猶ほ兵を停めて置くのは、可くない。日本政府へ、行文知照せずして、出兵した事が、すでに天津條約違反であるのに、猶ほ且つ、内亂鎮定後に、兵を停むるは、愈以て怪しからぬ」といふて、頻りに撤兵を促がすけれど、袁世凱は、言を左右にして、その請求に、應じなかつた。

於此、我政府は、特に小村を、北京へ送つて、支那政府へ談判させたが、是れも、袁世凱と、同じやうな事を、いふて居て、容易に解決しさうもない。そのうちに、第二回の出兵に着手したので、小村は、疾くも其事を知つて、陸奥外相に、打電した。前回に、いふてある通り、伊藤の決心は、此電報に依つたのである。此際に於ける、小村の働きは、實に目覚ましいほどであつた。

大島旅團は、迅雷疾風の勢ひで、京城へ、はひつた。之れには支那政府も驚いて、小村へ、抗議を申込んだ。小村は笑ひながら其抗議を退けた。支那政府が、撤兵を拒んだのと、同じ事を、くり返して、支那の代表者を、蹴弄し去つた、その皮肉振りは、實に面白い事であつた。

今にして想ふ。小村といふ人は、體こそ小さかつたが、膽の太い所があつて、八月一日の宣戰布告に先立ち、未だ政府から、何等の命令も出て居ないのに、北京在留の日本人に對して、立退きを命じ、自分は、獨斷を以て、公使館を引拂ひ、ズン／＼歸つて來てしまつた。此時の態度は、實に堂々たるものであつて、内外の人は、皆驚いた、といふ事である。英公使のマクドナルドから「支那人には、排外的思想があつて、戰爭についての理解もないから、萬一の場合が、思はれるに依つて、英國々旗を、貸す事にしよう」といふ事を、親切に申込んで來た。それを斷つて、日本の國旗を掲げ、白河を下つた時の意氣は、眞に敬服に價するものがあつた。

五

當時、北京に在留の日本人、殊に、知識階級の人ほど、小村の引揚げを以て、輕率なる事として非難し、兩國間に、戰端の開ける筈がない、といふた位で、英公使の親切な肩入をさへ、拒絶した事については、一層の惡評であつた。然るに、此事のあつてから、小村は、其將來も囑望され、且つは力量も、認められたのである。といふ理由は、すべてが、小村の見込み通りに、なつたのみならず、立退きに際して、國威を損ずる如き事をしなかつた、との事で、體は小さいが、却々、偉い所のある人だ、といふ評は、此時から、起つたのである。

露國のニコラス皇帝が、モスコに於て、戴冠式を、行はれた時、世界各國の主權者、又は其代表者が、皆祝意を表して、集まつて來た。我國からは、有栖川宮殿下が、陛下の御名代であつたが、山縣有朋は、隨行員の一人であつた。以前の支那公使であつた、マクドナルドが、英大使として、モスコに居て、一日、山縣等を招んで、宴會を開いてくれた。

『山縣さん、小村さんは、何うしました』
と、不意の質問に、山縣は、ぐつと行詰つた。小村といふものが、どんな人物か、山縣は、よく知らなかつた。

『あなたには、小村を、御承知ですか』
 『小村さんは、實に偉い人であります』
 『さうですか』

『前年、支那と貴國の間に、戦争の起る時、小村さんは、北京に居られました。政府の命令を待たず、開戦を見越して、自國の居留民に、立退きを命じ、自らその監督をして、之から北京を去らう、とした際に、私は、英國の旗を貸てあげるから、それに依つて、危険を過れたら可からう、といふたのに、小村さんは、それを拒絶されたのであります。私は、しきりに其危険を説いたけれど、小村さんは、私に向つて、萬一の場合には、自分の生命を、差出すまでの事である、といはれました。而して、總ての事は、小村さんの、見込み通りでありました。貴國には、那アいふ人が居るので、政府も、仕事も、爲し易いでせう』

『はア、その事ですか、日本のサムライの心は、みな其れであります』
 『小村さん、今、どういたされました』

『……………』
 山縣は、終に答へが、出来なかつた。それから、山縣の頭腦に、小村といふ名が、深く刻まれた。桂内閣の成立した時、外相の椅子に、小村を据たしたのは、桂の爲した事てなく、山縣の指金であつた。

乃木に因縁のない、小村の事を、あまりに、長く語りすぎたが、併し、此事は、國民が、すべて知らねばならぬ事である、多し知られて居ないから、特に述べたのである。昨今の、外交の状態を見て、國民は、何と思ふて居るか、それは、私の知る所でないが、斯うした場合に、小村の昔を語るのも、敢て徒事ではなからう。

私は、是れから更に、山路將軍の事を、語らねばならぬ。是れは、乃木に、直接の關係があるから、先づ、山路の爲人を、一と通り述べて見よう。

士州高知の山内豊信に事へて、長く小姓を勤め、初めの名は、忠七と謂ふた。豊信は、別に容堂と稱して、隠居してからは、多く容堂の號を、用ひて居た。大名に、不似合な學者で、詩文に、巧な人であつた。書は、山陽を學んで、殆ど其壘を、摩して居る。

六

山路が、十二三歳の頃は、評判の悪戯者で、樹登りが好きであつた。一日、例の樹登りに、興じて居た所を、遊び仲間の子供が、石を投げつけて逃げた。山路は、非常に怒つて、その子供を、逐ひかけるつもりで、急いで樹を降りようとした時、小枝に、右の眼を、引つかけた。はずみは、恐ろしいもので、眼玉が、ブラリと下がつて、血は、頬へ傳はつた。大概な子供なら、氣でも失ふであらうが、山路は、却々の剛氣で、樹から降りると、その眼玉を、右の手に握つて、歸つて來た。

『お母さん、斯んなものが出たよ』

と、いつて血の附いて居る、眼玉を見せた。山路の母は、實に氣丈な婦人で、それを見ても、更に驚かなかつた。

『そんなものを、持つて居るものではありません。はやく捨ておしまひなさい』

『ハイ』

山路は、その眼玉を、ボンと、投げてしまつた。之を聞く人、みな感心して、その將來に、深い望みをかけた。彼の剛氣は、漸次に、鍛錬されてからの剛氣でなく、生れついでにの剛氣でつた。恰で、昔の豪傑譚にでも、ありさうな話である。

此事が、何時か、容堂の耳に入つて、小姓に召出された。大名の小姓と、いふものは、すべて、容貌の美しいのを選び、それに、長袖の美服を着せて、自慢にして居たものだ。片目の小姓などは、決して抱へたものでなく、容堂の偉

い所は、左様いふ點にも、現れて居た。

丁度、江戸詰の時に、山路は、他の小姓と共に、次の部屋に、控へて居た。

『ガンチ、ガンチ』

と、容堂が、呼んで居る。ガンチとは、土佐で、片目の事をいふ。されば、ガンチといふのは、山路を、呼んで居るのであるが、山路は、知らぬ顔をして、返事をしなかつた。

『ガンチ、忠七、忠七は居らぬか』

『ハイ』

と、いつて、次の部屋から、出て來た。容堂は、少し怒氣を含んで居る。

『最前から、呼んで居るに、何故答へをせぬ』

『……………』

『今、聞えたのか』

『ハイ』

『ガンチく、と、再三呼んで居るに、其方には、聞えなかつたか』

『ガンチと、仰せありました事は、よく聞えて居ります』

『然らば、何故、答へをせぬ』

『私の名は、忠七と申します。ガンチとは、申しませぬ』

容堂は、之で閉口した。それから後は、一層の鼻屑で、忠七は、愛臣の隨一と、なつた。

その後、容堂が、或事で、立腹の餘り、外出しようとした際に、老臣も、重役も、いろく々と、諫止て見たが、どうしても聞かれず、すでに、馬に乗つて出かけよう、としたのを、山路が、その馬に、縋つて放れない。

『忠七、放せ』

『……………』

『何故、放さぬ』

『……………』

忠七が、しつかり馬に、縋つた儘、どうしても放さないから、馬は動けぬ。容堂は、ますます怒つて、鞭を振上げた。

『打つぞ、其處、放せツ』

『放しませぬ』

『うぬツ、不埒な奴……………』

振上げた、鞭は、風を生じて、忠七の頭を、ピンリツと打つ。一と振り、二た振り、振つては打ち、打つては振つたが、忠七は、どうしても、放さなかつた。流石の容堂も、終に我を折つて、馬から下りた。老臣の諫止も聞かぬ、容堂が、終に忠七の剛情で、外出を思ひ止まつて、事無きを得た。

後年の鬼將軍は、矢張り、子供の時から、斯うした心を持つて居た。併し、其半面には、涙脆い所もあつて、人情に、厚い人であつた。先輩に對して、尊敬の禮を缺かぬ事も、平生の強い所のみを、見て居るものには、不思議に、思はれる位であつた。坂垣退助は、乾亥之助の昔から、山路の先牽であつて、維新の際には、坂垣の配下に屬して、戰爭に従事したのであるが、それからといふものは、死ぬまで、坂垣に對しては、先輩としての、禮を盡した。日清戰爭の時、旅順が陥落すると、すぐ板垣へ、電報をうつて、

『先生、多年の御教養をうけた甲斐あつて、旅順を、陥落せしめ得たから、謹んで御禮を申す』
と、いふ意味の事を、いふて來た。普通の人には、出來ぬ事である。

七

乃木が、不遇の地位に立つて、同じ長州から出た、軍人のうちにも、少からぬ敵があつて、重く用ひられず、殊に、山縣の爲めに睨まれて、其後輩の桂にさへ、疎外される、といふやうな、境遇に立ちながら、頑強に、自分の立場を改めぬのは、有鑒に偉い、といふて、乃木の味方するものも、多く在つたが、そのうちで、最も力瘤を入れたのが、山路將軍であつた。

山路の爲人は、その一斑を述べて置いたが、昔流の軍將で、ハイカラ連からは、あまり喜ばれなかつたが、義理を重んじて、能く人の爲めに盡し、戰陣に臨んでは、鬼將軍の名を得、その武勇は、よく知られて居た、人である。

乃木の性格が、山路に、似て居る所があつて、山路よりも、學問が深く、西洋に行つても、悪くハイカラにならず、何處までも、古武士の風のあつた所は、敬服に値する。本筋からいへば、長州軍閥の人でもあり、山縣の系統ではないが、山縣と共に、進んで來たのであるから、乃木の方から、折れて出れば、山縣の方でも、決して疎外するやうな事は、ない筈であるが、乃木の氣性としては、それが、出来なかつたのである。桂との折合の、よくなかつたほど、山縣と、交情の悪い譯ではなく、多少の諒解は、あつたのだが、理義の伴はぬ、威力に屈服する事は、乃木の、堪へ得ざる所であつたから、純然山縣系の人に、なる事が出来なかつた。それであるから、山縣系の人が、乃木を、忌む代りに、その以外の軍將からは、却て尊重されて居た。

休職にはなつて居るが、敢て老朽した、といふのでもなく、また重大の過失があつた、といふ次第でもないから、猶ほ用ひるに足る、軍將を、空しく田園の間に、置く事は、乃木を、能く知るものが、どれほど、惜しい事だ、と思つたか知れぬ。けれども、山縣系に、善くないものに、うつかり、手を附けて、山縣から睨まれたら、それこそ、自分の進退にも關するので、容易に、乃木を、救ひ出すものがなかつた。

山路も、乃木に、同情して居る、一人であつた。山縣系の人、乃木を、重く用ひず、動もすれば、疎外するの風があるのを、平生から、快よく思つて居なかつた。殊に、休職となつて、遠く奥州へ行つてからは、何かの機会に、乃木を引出さう、として、考へて居た。自分が、東京の第一師團長で、あつたのを幸ひ、乃木を引上げようとして、手を盡して見たが、肝腎の本人が、容易に、折れて出ないから、どうする事も、出来なかつた。山縣を、先づ説きつけて、それから、本人へ、陸詰の談判をしよう、と、山路は、腹の底を極めて、山縣を、尋ねる事になつた。

毛利の家來と、いふても、山縣は、輕輩の出身で、士分の肩書さへ無かつた。身分の卑い爲めに、同藩士から、酷い蔑りをうけた。それが、口惜しいので、どうかして、武士の嗜み丈けても、人に負けぬやうに、なりたいたい、と、奮奮して、文武の修業にかゝつた。人の一心は、岩に矢の立つ例もあり、その奮發次第で、どうにでもなれる。山縣の修業は、全く一心不乱であつた。

その頃の武士は、多く學問に離れて、武事にのみ、力を入れて居たから、相當の人物と、いはれるものでも、大抵は、文字に乏しかつたものだ。然るに、山縣は、先づ學問から始めて、武藝の方へ、移つて行つた。父の三郎は、身分の卑いに似合はず、和歌も詠み、文字もあつた人で、その關係から、山縣も、武士に似合はぬ、詞藻に、富んだ人であつた。

維新の際には、奇兵隊の隊長にまでなつた。奇兵隊は、一種の義勇兵で、その中堅は、藩の武士であるが、其の外は、町人でも、百姓でも、何でも構はず、入隊を許して、是の一組の軍隊が、出來た譯で、昔から在る、藩の隊は、正兵であるから、之に對して、『奇兵』と呼ぶやうになつた。之れを考へたものは、久坂玄瑞であるが、實際に組織したものは、高杉晋作であつた。山縣は、此二人と同じく、吉田松陰の門人で、その關係から、奇兵隊に入り、三度目の隊長になつたのである。

山縣は、實に好運の人であつた。三度目に隊長となり、漸く其實力を、示し得る位地になると、維新の大變革に當

つたので、すぐ奇兵隊長として、江戸へ乗込み、それから、越後口の戦ひに、功を収めて、新政府に、はひる事になつた。大村益二郎の死んだ後は、チリ／＼進んで、陸軍唯一の人になつた。その後の事は略して、とに角、山路との會見に、うつる事にしよう。

八

陸軍は、日本の陸軍であつて、山縣の陸軍でない、といふ事は、誰も左様思つて居るが、實際に於ては、山縣の陸軍だから、その系統以外のものには、指もさゝせなかつた。

初めは、薩派の勢力が強く、流石の山縣も、退けもの扱ひにされた、時代はあつた。が併し、それは僅の東の間で、大西郷が去つてからは、日増しに、山縣の力が、延びてゆき、薩派の人は、手も足も、出せないやうになつた。黒田清隆は居たが、昔流の豪傑肌で、時代の事は、餘り解らなかつた人だ。山縣の對手には、少し智慧が足りない、野津鎮雄の居る間は、山縣にも、多少の遠慮はあつたが、鎮雄の死んだ後は、ムク／＼と、頭を持上げて來て、忽ちに陸軍の、全權を握つてしまつた。

若し、西郷従道に、陸軍を、何うかして見よう、といふ、野心があつたら、必ず山縣に、對抗し得たに違ひないが、従道には、そんな考へは、少しも無かつた。また、其性格の上から見ても、人を押退けて、何事かを爲さう、といふやうな風はなく、従つて、山縣に對抗しても、勢力争ひを、するが如き事は、絶對に、望み得ない。

斯うした事情から、山縣系の勢力は、思ふまゝに陸軍部内に、はびこつてゆく。たとへ、同國人といへども、山縣の氣に容れぬものは、頭の上の時がない。況して、長州以外の人にして、山縣と、對等の地位を、有するものはなく、少しでも出世をしたい、と思ふものは、山縣の前に、叩頭百拜するの外はなかつたのである。

けれども、多數の人のうちには、それが、癢に觸つて、故意に反對するものもあり、さうした意味でなく、山縣を、

對等の人と見て、格別に、尊卑の念を、持つてもなく、平氣で、對應つてゆく、人もあつた。

山路は、絶えて山縣を、その自邸に、訪ねた事もなく、只、維新前後からの戰友として、一と通りの交際が、あつただけの事で、敢て深交のある間柄では、なかつた。左様した關係の、山路が、不意に、訪ねて来て、何か相談がある、といふので、山縣も、實は不思議に、思つた位である。

『君が、態々訪ねて來るとは、珍しい事ぢや』

『少し相談があつて、お訪ねいたした』

『全體、どういふ事かな』

『他の事ではないが、乃木の身についてぢや』

山縣は、意外に思つた。

『ふふーむ、乃木の事に、ついてか』

『那れ丈けの人物を、空しく遊ばせて置くのは、實に愚の至りぢや。何とかしてもう一度、引出す事は、なるまいか』

『さ、それは……』

何事にも、用懐深い人で、容易に口は開かぬ。殊には、山路が、乃木の爲めに來た、といふ事に、何となく疑ひもあるから、猶更、可否の返事は、うつかり出來ぬので、山縣は、眉を八字にして、ふかい考へに沈んだ。

『簡單にいへば、我輩が、乃木を預かりたい、といふのぢやが、それには、君の承諾もうけ、助言も、充分に無ければ、出來ぬ事で、是非、ウムと、いふて貰ひたい』

『乃木を預つて、何うしようといふのか』

『つまりをいへば、普通のものゝ下には附くまいが、我輩とは、多少の諒解もあつて、何とか折合もつかう、と思ふから、兎に角、乃木を呼んで、相談して貰ひ度い』

『乃木の奴、却々に、むづかしい事を、いふので困る』

『それも、能く知つては居るが、君から話さへあれば、我輩の方で、何とか折合をつけよう』

『左様か』

『一應は、君から話して貰つて、後は、我輩に任せてくれたら、何とか抑へつけるつもりぢや』

『宜しい、さういふ次第なら、乃木を呼んで、一應、話して見る事にしよう』

『何分、たのむ』

それで、話はすんだ。かねて、用意の酒肴が出る。昔話に、時を移した。山路の豪快と、山縣の質實と、その對照が、如何にも面白い事で、あつたらう。

それから、數日の後、乃木は、山縣から迎へられて、いろ／＼と懇談をうけたが、容易に承知しなかつた。山路も、山縣と共に、大骨折で説きつけ、漸く承知させた。

山路は、東京の第一師團長であるから、その下へ、歩兵第一旅團長として、就任する事になつた。

その頃は、既に日支の間、何となく物騒がしく、いつか一度は、平和の破裂するらしく思はれて、海陸ともに、開戦の準備にかゝつた、と、いふ噂は、専ら傳へられた。

九

日支間の、平和が破裂して、いよいよ軍を進める事になつた。第一に、乗込んだのは、大島義昌の率ゐた、混成旅團であるが、是れは、未だ平和の破れる前の事で、豫め開戦を見越して、先づ出かける事になつたのである。開戦と決して、宣戦の布告を出してから、眞ッ先に乗出したのは、第一師團の兵であつた。山路が、之れを率ゐてゆく。その下に、歩兵旅團長であつた、乃木は、無論のこと、同時に出征した。

此時、山路に從いて、行つた人に、大寺安純といふ、參謀長があつた。薩摩出身であるから、早く進んで、將官になるべき筈であるのに、未だ大佐で居たのは、乃木と同じやうに、同郷の先輩と、多く相容れず、長い間の不遇に、ますます氣を腐らして、誰でも構はず、議論で押付けるから、何となく煙たがられて、それが、昇進の妨げになつて居た。

山路が、それを知り乍ら、重く用ひて、參謀長の位地を興へた。乃木と、大寺を抱へて、山路が、何うする氣か、といつて、人が噂をした位であつた。けれども、山路は、よく此二人を使ひこなして、實際の役に立てた。それが、日清戦争の時に、初めて人に知られ、流石に、山路は偉い、と、いはれた。

上陸地點は、金州灣の花園河口であつた。俗にいふ所の、敵前上陸で、實に危険な方法を、取つたのであるが、無事に、上陸し得たのは、偏に天佑である、といはれたけれど、實は、山路、乃木、大寺の實力が、此に至らしめたのであつた。

先づ、金州城を陥れて、足溜りをつくり、それから急に、旅順の背面に迫つた。十年後の日露戦争に比べたら、物の數にも、ならぬほどであつたが、それにしても、日本國としては、斯ういふ大がりの戦ひは、初めてであつたから、那ア容易く、成功し得ると、思つたものは、多く居なかつた。

旅順陥落の後、乃木は、更に滿洲方面に向つた。蓋平まで、進んだ時、敵の大將、宋慶といふものが、一萬の大兵を率ゐて来る、といふ偵察の、報告があつた。折しも、極寒の時で、見渡す限り、白皚々、その風の寒さ、といふたら、實にすばらしいものであつた。乃木は、有名な宋慶が、自ら大兵を率ゐて来る、との事であるから、雪中に、馬を立たせて、一と晩は眠らずに、敵の来る方を、睨んで居たが、終に宋慶の兵は、その影も見せなかつた。

斯くて、野津、奥、西、小川、立見等の驍將も、追々に、くり出して、支那兵を、散々に打破つた。殆ど連戦連勝の勢ひで、山海關の邊にまで、軍を進めた。同時に、威海衛の方面へも、兵を分つて、はげしく攻め込んだ。これは

海軍と、協同の戦争で、どちらも、策戦通りに進み、敵の海軍は、遂に全滅してしまつた。北洋水師提督の丁汝昌は毒を飲んで死んだ。それが爲めに、劉公島は、我軍の占領する所となつて、威海衛の敵も追拂ひ、此方面は、全く我軍の、勢力に歸した。

其處で、講和談判の幕は、開かれる事になり、李鴻章は、下之關へ來た。伊藤博文、陸奥宗光の、兩大使を相手に休戰條約にかゝつた。それを始めてから、三日目に、李大使は、小山六之助の狙撃をうけて、重傷を負ふた。折角の談判は、之れで中止となつたが、治療の経過が良く、談判は、再び開かれて、一億の償金と、遼東半島を得、外に、臺灣を、我領土に加へて、假條約は、調印済みになつた。然るに、露、佛、獨、三國の干渉が起つて、遼東半島は、取戻されたが、他の箇條は、少しも動かす事が、出来なかつた。

於此、戦争は止めになり、乃木も、歸つて來た。如何に、乃木を嫌ひでも、その戦功を、没却する事は出来ぬ。幾何もなく、仙臺の第二師團長になつた。明治十八年以來、陸軍少將の儘であつたが、此時に中將となり、更に男爵を授けられた。

日清戦後

一

旅順口の要塞と、乃木將軍の間には、奇しき因縁が、絡んで居たのである。それは、何ういふ譯であるか、といへば、日清戦争の際に、旅順攻撃の爲めに、出征した乃木が、日露戦争の際に、再び旅順攻撃で、苦心をしたといふ、其處に、不思議な因縁が、絡んで居たのだ。

日清戦争の際、旅順攻撃の總指揮官は、例の鬼將軍、山路元治で、その山路と乃木が、非常に、深い交りがあつた。恐らく、乃木の生前に於いて、心を許して、交つた者がある、とすれば、山路は、その第一人であつた、といふ事が言へるのだ。山路は、土州の出身で、長州人とは、折合の善い方では、なかつたが、山路の人格と、その實力は、長州全盛の陸軍をして、遂に山路を、重く用ひるの、止むを得ざるに、至らしめたのである。長州出身の軍人として、乃木が、少しも藩閥の臭氣なく、何人と雖も、高潔にして、武人の魂を、有つて居るものならば、自ら進んで、深く交つた、といふ、その乃木の氣象と、山路の氣象が、二人を結付けて、深い交りを、爲さしめたのである。

山路は、舊、山内容堂の愛臣であつて、維新の際には、板垣退助に従いて、東征北伐に、幾多の功名を樹てた。後には、陸軍中將となり、第一師團長として、征清の役には、旅順口へ、向つたのであつた。黒木將軍が強い、乃木將軍が剛情であつたの、といふても、山路の強味と、剛情には、逆も及ばなかつた。土州人は、動もすると、才を弄

んで、その爲す所が、技巧に流れ、自然に、輕跳浮華の風があつて、それが爲めに、どうかすると、土州人は、僞りが多くていかぬ、なぞと、いふ事を、言はれることもある位のだが、山路には、絶えて、其性癖がなかつた。たゞ一本調子に、グン／＼進んで行く、といふ風であつたから、世間の人は、敢て土州人として、見なかつた位に、一般の土州人とは、異つた所があつた。

乃木は、その山路の下に従いて、第一旅團長として、旅順口に、向つたのであつたが、其時は、支那人を、相手の戦ひとて、さまでの苦心もなく、旅順口は、たゞ一掃きの中に、陥落してしまつた。凱旋の後、拔擢されて、仙臺の第二師團長といふ事になつた。世間から見ると、一時に、出世したやうに思はれたが、實は、ずつと前に、師團長には、成つて居なければならぬ筈であつた。それは、前年、一度、職を退いたことさへあつた位に、地位や一身の事は、少しも頓着しない氣風の人であつたから、出世が、遅れて居たのだ。従つて、乃木としては、日清戦後に、仙臺の師團長になつたのは、さう早い出世とは、言へないのである。

いよ／＼、仙臺へ赴任した時に、面白い話があつた。當時の宮城縣知事が、例の勝間田稔で、曾て愛知縣の知事をやつて居た事もあつて、風流知事の名は、大分世間に聞えて居た。詩も作れば、歌も詠む、殊に、俗諺が巧かつた。それに、もう一つの隱藝が、不思議に女の出来る事であつた。一地方の長官として、權威と金力とを以て、押付けるのでなく、一度、關係した女が、不思議に、勝間田には、惚れ込んだものだ。名古屋邊りには、近年迄、勝間田のお情に、與つて、惚けて居た姥櫻が、澤山にあつた。

何しろ、斯ういふ風の知事であるから、乃木が、愈々、師團長として赴任する、といふに就いても、その歡迎會を、開くに當つて、盛んに閑遊會を開いて、歡待する事は、人一倍に、熱心であつた。歡待の眼目と、なつて居たのが、仙臺中の藝者を、残らず集めて、餘興は勿論、模擬居の取持から、それらの事は、一切、此の藝者を以て、當てる事になつて居た。

乃木は、いよ／＼當日となつて、豫て寄越してあつた、案内状を披いて見た。當日のプログラムが、入つて居るから、段々、それを讀んで見ると、意外にも、藝者の接待を以て、第一の歡待方法と、してあるので、苦い顔をして、暫く考へて居たが、總て書生を呼んだ。

『何か御用で、ございますか』

『ウム、一寸知事さんと、市長さんの所へ、使ひに行つてくれ』

『ハイ、何ういふ使ひで、ございますか』

『今日、御招き下されて辱けないが、乃木は、都合に依つて、缺席を致すから、諸君に、宜しく申上げて下さいと斯様に言ふて来るのぢや』

書生は、妙な顔をして、

『へ、御出席にならないのでございますか』

『さう言ふて、斷つて来い』

『ハイ、承知いたしました』

何ういふ譯か判らないが、言付けられたので、書生は、すぐに出て行つた。

二

仙臺の市中に居る藝者を、二三百人總揚げにして、豪奢な園遊會を開く可く、その準備をして居る所へ、肝腎の乃木師團長から、斷りの使ひが來たので、之れには、頗る面喰つた。

今日の園遊會へ、招んである賓客は、師團長の外にも澤山あるが、それは、ほんの附りであつて、乃木將軍が來なければ、此の園遊會を開く、必要はなかつたのである。而も、今始まる、といふ間際になつて、斷つて來たのは、何

ういふ事情か、兎に角、もう一度押掛けて、無理にも、引張り出さう、といふので、市長と、發起人の中から、幾人かの委員が出来て、乃木の邸へやつて来た。再三断つたけれど、何でも會ひたい、と言ふから、據所なく、應接所へ通して、すぐに、乃木も出て来た。

「ヤア、何か御用ですか」

今日、招ばれて居て、今、断つて来た人のやうでもなく、園遊會の事は、もう忘れて居るやうな顔付で、何か用ですかとは、随分、厳しい聞きやうだ。相手が相手だけに、一同謹んで、ちつと、態度を見て居ると、市長は、席を進んで、

「一寸、お伺ひ致したいのですが、今日の園遊會へ、御出席が無い、といふ御知らせを承つて、一同、驚きの餘り斯く打揃ふて参つたのでありますが、全體、何ういふ御都合で、御缺席に、なるので御座いますか、それを承りたいと、存じまする」

「イヤ、さう深い仔細は無いが、何となく、行くのが厭になつたから、それで、御断りするのぢや」
 豈もなければ、飾りもない。思つた儘の答へには違ひないが、厭になつたから断る、とは、益々猛烈な断りやうだ。尚ほ、市長は、言葉を繼いで、

「併し、その御厭に、御成り遊はした、といふに就いては、何か、仔細が無ければなるまい、と考へます。どうせ、我々の計畫した事で御座いますから、御氣に召さぬ事は、澤山に御座いませうが、發起人一同の苦衷は、御諒察を願ひたく、又、縣の有力者が、殆んど十里二十里の遠きを、厭はずに集まつて来る、といふ、是等の者に對しても、此儘、將軍が、御缺席になる、といふ事があつては、來會者の失望は勿論、發起人の顔も立ちませぬので、何とか御心を直して、御出席を、願ひたいので御座いますが、それに就ては、どういふ點が、御氣に召さなかつたのか、それを御明し下さいますれば、悪い點は改めて、御出席を、願ふ事に致しませう」

『さう心配を掛けては、洵に相濟まぬが、何となく、厭になつたものぢやから、それで、斷りを言ふたのぢや。集まられた一同へ對しては、更に我輩から、御挨拶の書面は、出しても差支へないから、どうか、堪辦して貰ひたい』
 『それまでに仰せられるほど、御厭とありましては、猶ほ更ら、どういふ點が悪い、といふ事を、仰せを願ひたいの
 後す』

『イヤ、別に悪い、といふ事はない。世間一般、さういふ事に、なつて居るのぢやから、俺が一人で、嫌ひぢやから、言ふた所で、致方もないのぢや。寧ろ、參らぬのが一番よい、と考へて、斷つたのぢやから、其處は、よく察して貰ひたい。併し、諸君の御好意に對しては、飽迄も感謝する次第である』

『へー、さう致しますると、何か、今日の計畫の中に、御氣に召さぬ所があつて、それが爲めに、御缺席といふやうに聴取られますが、左様で御座りますか』

『ウム、實は、その通りぢや』

『それを、承りたいのです。何ういふ點が、御氣に召さなかつたのですか』

『我輩も、さう言はれると、言はなけりやならぬが……』

と言ひ乍ら、乃木は、暫く考へて居たが、獨り首肯いて、

『可し、それぢや、寧ろ言ふてしまはう』

『ハイ、どうぞ、御聽かせ下さいませ』

『斯ういふ譯ぢや。今朝、案内狀を披いて見ると、催し事のプログラムが、出て來た。それを、讀んで見ると、今日の歡待は、實に至れり盡せりて、我々如き者が、偶々、赴任して來たから、といふて、是れまでの事をなさらずとも、と思ふ程に、立派な園遊會の仕組に、なつて居るやうぢやが、併し、その歡待の眼目が、藝者の接待に、在るやうに思はれた。さうして見ると、俺としては、一寸行けぬ事になる』

『ハハ、それが、何て悪いので御座いますか』

『さア、さういふ風に、考へが違ふのぢやから、ツイ行けぬ事にもなるのぢや。俺は、山口縣人の、乃木希典として行くのではない。又それならば、君方も、是れ迄に我等を、歡待して呉れる次第もなからう。我輩が、招かれて行くのは、第二師團長として行くのであるから、軍人を迎へるには、軍人を迎へるやうな方法がいくらもあらうと思ふ。藝者の御馳走が、唯一の眼目に、なつて居る會では、どうも軍人として、一寸行く事が出来ぬぢやないか。尤も、是れは、俺一人の考へであつて、折角、世間で流行つて居るのに、俺一人が嫌ひぢやから、といふて、他人までも、俺と同じやうな、意見になれ、とは言はぬが、自分だけは、さういふ意味の會合には、出ぬ事に極めて居るのぢやから、それで據所なく、御斷りをしたのぢや』

一一一

儼然として、乃木が、缺席の理由を語つたから、それを聞いた、發起人一同は、顔を見合せて、暫くは、何と答へる仕様も無かつた。

薄暗い座敷で、藝者の接待をすると、いふのではなく、公けに開く、園遊會に於て、仙臺にあるだけの、藝者を集めて、それに酒の酌をさせたり、色々な餘興をやらしたりして、之れを、第一の御馳走として、乃木に、喜んで貰はう、としたのであるが、それが、乃木の氣に容れない、といふのだから、さうなつて見ると、園遊會の組織を、根本から改めなければならぬ事になるのだ。それにしても、今、これから開會しようと、いふ場合に、臨んで居るのだから、どうする事も出来ない。そこで、一同は、暫く別室へ下つて、相談する事になつた。

乃木が、園遊會へ、藝者を出る事を拒んだ、といふ丈けでは、甚だ偏屈な人で、浮世の情味といふものを、解せざる如く思はれるだらうが、決して、さういふ次第ではない。

それは、どういふ譯であるか、といふに、摸擬店の、飲食物を扱ふ、といふ丈けに、藝者が来て居る、といふ意味のものならば、決して、乃木は、それをも扱むものではない。ところが、此園遊會の仕組といふものが、そのプログラムの上から考へると、澤山の藝者を、呼上げて見せる、といふ事が、第一の御馳走に、なつて居たのであるから、それに對して、乃木は、斯ういふ方法を以て、師團長が、新たに赴任して來たのを、歡迎するといふ事は、甚だ宜しくないとして、寧ろ拒絶した方がよい、と考へたから、それで、斷つたものに違ひない。其處に、乃木の正しい精神が、籠つて居るものとして見るのが、相當であらう、と思ふ。

發起人は、段々、相談の上で、乃木の前へ、再び出て來た。

『エー、甚だ恐れ入りますが、唯今になりまして、閣下が、御缺席といふ事になりますと發起人一同が、世間に會す顔も、無いやうな譯で、洵に困りますから、是非、御列席を、願ひたいので御座いますして、それに就ては、唯今までの方法を、悉く改めまして、必ず閣下の思召に、適ふやうに致しまするゆゑ、是非、御出席を願ひたいもので御座いまするが、如何なものでございませうか』

『イヤ、今に至つて、さういふ事をされては、却て、俺の方が困る。園遊會は、最初の計畫通り、やつて宜しいから、乃木は、病氣で出ない、と言ふて呉れよば、貴下等にも、不都合な事は無からう、と思ふ故、此儘、會の方はやつて貰ひたいものだ』

『それでは、我々の心が許しませぬから、是非、御出席を願ひたいものです』

乃木は、様々に言ふて斷つたけれど、なか／＼一同が、承知をしない。言ふだけの事を、いふて了へば、將來の戒めにもなるのであるから、もう是れ位でよからう、と考へて、乃木も、遂に出席を諾したのであつたが、會場へ行つて見ると、摸擬店に、至て藝者の跡を絶つた、といふ譯ではないが、一切の趣向が一變して、大概は、縣廳又は市役所の役人が、接待係りとなつて、來賓を接待して居る、といふやうな有様であつたから、乃木は、非常に喜んで、截

會を告げるまで、緩りして居て呉れたので、發起人も、これで皆な満足して、閑遊會は、無事に終る事が出来た。

まだ、名古屋鎮臺に、參謀をして居た時分に、藝者の情婦があつた、といふ事は、前に述べて置いたが、一度、自分の職分が、國家の干城である、といふ事に、思ひ及んで、是れは償むべきことである、と、自ら考へ、自ら戒めてその關係を絶つてから、後の、乃木は、恰で生れ更つた人のやうになつて、さういふ事は、再び爲なかつたのである。それから、殆んど二十年も經つて、仙臺に於いて、斯ういふ事があつた、といふ事を對照して、考へて見ると、其處に、乃木の精神が、極めて正しかつた、といふ點が、現はれて居るではないか。

四

或日、軍營から、歸つて來ると、一人の青年が、是非面會したい、と言ふて、訪ねて來た。その名刺を見ると、小笠原善平と、書いてある。暫く之れを見て、考へて居た、乃木は、獨り首肯して、

「宜しい。これへ通しなさい」

取次の書生は、間もなく、その青年を、案内して來た。應接室のテーブルに向つて、乃木は、直立不動の姿勢で、癡乎と、その青年を見て居る。

「私は、善平でございます」

「ふゝむ、お前であつたか、此頃、俺の所へ、手紙を寄越したのは……」

「ハイ、左様でございます」

「何ういふ譯で、あゝいふ書面を寄越したのか」

青年は、顔を赤くして、下を向いた切り、何とも答へない。乃木は、青年を見詰めて、黙つて居る。

此の善平と、いふ青年が、不意に、乃木の所へ、書面を寄越して、

『自分は、岩手縣閉伊郡山口村の出生で、父を喜代助といひ、一度は村長まで勤め、土地に於ては、相應の資産を、有つて居た、舊家であつたが、父は、極めて頑固で、一度、思ひ込むと、人の言ふ事を用ひない、といふ風があつた。それが、村民の一部と、折合の悪くなつた原因で、殊に、一族同様にして居た者の中から、村長の位置を、親ふ者が出て来て、遂には、それ等の者から、父が陥れられて、今は獄中のひと、なつて居る。』

併し、自分は、其子なるが故に、敢て父を庇ふ次第ではないが、自分の眼から見れば、必ず父は、無罪になる、と思つて居る、けれども、兎に角、第一審の裁判は、既に有罪と決して、今は、宮城縣の裁判所へ、控訴して来て居る次第である。

それにつては、父の有罪無罪に拘らず、自分は、小笠原家の爲めに、汚名を雪ぐ、第一の方法として、軍人になつて、名譽ある働きをして見たい、又、それに依つて、此小さい一身を、國家に捧げて、御國の爲めにも盡したい、と考へるに依つて、是非、軍人に仕立て、貰ひたい。併し、長い間の裁判事件で、家財は、蕩盡して了ふし、村内には誰れ一人として、同情して呉れる者は無く、今や、自分は、おいたる祖母と、唯だ二人のみになり、天地の間に、是れといふて、頼るべき人も無いのである。

閣下は、極めて仁慈の心、深い御方である、といふ事を、承つて居るので、まだ一回の面識も無く、何等の縁故も、無い身でありながら、偏へに閣下の、御手に絶つて、自分の一身を、救ひ上げて戴きたい、とお願ひする次第であるが、如何で御座いませうか』

と、いふ意味の事を、訴へて來たのであつた。不思議の事を、言ふて來る奴だ、と思ふて、乃木は、其儘、手紙を納めて居たのであつたが、今、訪ねて來た青年が、即ちその善平である、と知つて、面會を許したのである。

『是非、御引立を願ひたい、と存じますが、如何でございませうか』

「ウム、手紙で、委細は解つて居るが、併し、俺は、お前を、よく知らぬのぢやから、輕率に、承知したとも言ひ兼ねる。まア、暫くの間、俺の方から返辭するまで、待つがよからう。」

これから、乃木は、頻りに、手紙に書いてある、事實を基として、善平に質問をする。一々、その答へるのを聞いて、其日は、善平を慰めて、歸してやつた。青年の話が、如何にも、可哀想に感じたので、乃木は、小笠原憲兵大佐を呼び付けて、善平の手紙と、その物語つた所に基づいて、充分の調査を、爲る事を頼んだ。そこで、小笠原大佐は、すぐに部下の憲兵を使つて、すつかり調査を、仕上げて見ると、成程、善平の物語つた通り、少しも違ひはない、のみならず、父の喜代助といふ者は、全く反對の者から、陥いられれた爲めに、罪を得たらしく見える。それのみならず、却て村治の事に就ては相當に金も使つて居る、といふやうな事實が、追々に、判つて来るし、又、伴の善平は、少年ながらも長い獄に引掛つて、苦しんで居る父に對する、孝行の事情も、判つて来たから、その顛末を具して、乃木に、報告して来た。

それから、幾日かの後に、善平の泊つて居る、宿屋へ、わざ／＼使ひをやつて、乃木は、善平を、邸に呼んで、さらに色々、事情も聞いて見て、遂に、自分の家へ引取つて、世話をしやる事にした。乃木といふ人は、極めて嚴格な性質で、或場合には、却て偏狹なる人の如く、思はれる程に、物堅い人であつたから、容易に、自分の家に、生を置く、といふやうな事は、爲なかつた。けれどこの善平に對しては、餘程、可哀想に思つた、ものと見えて潔よく引取つてやつたのである。

かくて、善平は、優秀の成績で、幼年學校に入り、更に士官學校も卒業して、少尉から進んで、日露戦争の際には、中尉にまでなつて、相當の戦功は立てたが、遂に肺病に罹つて、明治四十一年の秋、さびしい東北の郷里で、此世を逝つた。この善平が、自分の一家の、浮沈の事情や、又志を立て、乃木將軍の袖の下に、庇護を受けるやうになつてからの事柄、それから又、その一生を、終るに至る迄の事を、詳しく認めて、徳富蘆花に送つたのが、即ち、蘆

花の潤色して、世に出した、寄生木といふ、有名な小説である。

五

尙ほ一つ、著者が、直接に關係した事であるが、一寸した場合であつた、にも拘らず、味ひ深き、乃木將軍の、性格が現れて、その風味に、觸れる事の出来た經驗であるから、茲に、その事情を、語る事にしよう。

たしか、明治二十九年かと記憶するが、大倉組の仙臺支店の支配人で、千葉子之吉と、いふ人から、是非、師團の聯隊旗祭に來て、一場の講演をして貰ひたい、といふて、迎ひが來た。其使者に會つて、聞いて見ると、それは、乃木將軍が、著者を招くやうに、との希望であつて、若し都合が出来なければ、寧ろ、講演は無しにする、とまで、言ふて居られた、との事であつたから、著者も、特に都合して、仙臺へ行く事になつた。

上野から、汽車に乗つて、其日の晝頃に、西那須の停車場へ來ると、汽車は、動かなくなつてしまつて、乗合せた人々は、大騒ぎを始めた。これは、機關車に故障があつて、斯ういふ事に、なつたのでなく、殆んど、十四五日前から、降り續いた雨が、一層ひどくなつて來て、それが爲めに、黒磯へ行くまでの間に在る蛇尾川の水が氾濫して、線路の上に、三尺も溢れて居るから、危険で、進行が出来ない、といふのであつた。

そこで、著者は、すぐに、東京へ引返さう、として、驛長に會ふて、汽車の都合を、聞いて見ると、今渡つて來たばかりの、鬼怒川の鐵橋が、もう渡れない、といふ。成る程、さう言はれて見ると、先刻、その鐵橋を渡る時分に、汽車の動搖が、普通でないとは思つたが、無頓着に、乗つて來てしまつたのだ。思へば、危険な事であつた。此事情が、解つて來たから、四五百人の乗客が、一時に騒ぎ出したので、停車場の混雑は、殆んど名狀の出来ない程であつた。

折柄、同じ車に乗合したのが、長晴登といふ男であつた。後には、代議士になつたが、其頃は、山形縣の縣會議議長

をして居た。長い間の、自由黨の關係から、著者は、親しく交際して居た。其時に、長が云ふには、何でも、斯ういふ時には、早く宿屋へ、入つてしまはないと、野宿を、するやうな事になる、とて、頻りに著者を促すから、著者も、其氣になつて、停車場前の、小さい宿屋へ入つて、二階の八疊の間を、占領した。

彼是れして居る中に、汽車から降された、四五百人が、一時に、下ツと押寄せて来る。宿屋といへば、外にもう一軒、猶ほ小さいのが、ある丈けて、それ以上は、どうにもならぬ。その爲めに、此宿屋に向つて、四五百の人が、押寄せて来たのであるから、その混雑は、一段と激しく、六疊の座敷に、六十五人も入つて居る、といふ騒ぎで、どんな手狭な、監獄署へ行つても、こんな取扱ひは受けまい、と、思ふ程であつた。

著者は、幸ひに、長の云ふ事を聽いて、早く引揚げて来たので、八疊の間を、二人で占領して居たのである。併し、外の混雑を見れば、まさか二人だけで、樂々と、脚を伸ばして居る事も出来ないの、仙臺の集治監の、典獄をして居た、小泉といふ人の細君が、獄の急病で、東京から駈付ける、といふ、その事情を聽いて、氣の毒でもあつたし、また、小泉とは、一面の識もあつたから、其人を、部屋に入れてやつた。すると、その婦人の懇意にして居た、寫眞屋の何某が、是非、入れて呉れ、といふので、これも承知する、といふ事になつて、到頭、十幾人の者が、八疊の部屋に寝る事になつた。それでも、下の六疊の間の、六十五人に比ぶれば、樂なものである。何でも、斯ういふ出来事があつて、汽車を、下された時には、逸早く、宿屋へ、陣取つてしまふのが、最も名策である、といふ事を、此時に、つく／＼經驗した。

宿屋の混雑が、斯ういふ次第であるから、迎も眠る事などは出来ない。電報だ、手紙だ、といふて、各々、その通信を、するのに忙しく、或は明日の事を、宿屋の雇人と相談するやら、その騒ぎは、一と通りでなかつたが、夜半の二時頃になると、此處から六七里ばかり、離れて居る、鹽原の温泉に、泊つて居た連中も、更に二百人ばかり、ドツと押寄せて来た。どういふ譯か、といふて、聞いて見ると、鹽原は、今、山水が、押寄せて来て、宿屋が流される、

といふやうな騒ぎで、避暑に来て居た客が、一時に、逃出して来たのだ、といふ。

これが爲めに、宿屋の混雑は、一層ひどくなつて来た。そんな斯んなで、一夜を明して、翌朝になると、拭いて取つたやうな、上天氣であつた。煌々した熱い日が、照り込んで来る。その暑さといふたら、一と通りでなかつた。

六

其時に、長が、

『どうだい、伊藤君、これから黒磯まで、歩いて行かうぢやないか。斯ういふ風に、長降がして、山水が、押して来る、といふ事になると、何時、出立が出来るか判らぬぞ。汽車の通じないのは、勿論の事だから、寧ろそのこと、蛇尾川の水を渡つて、黒磯まで歩けば、あれから汽車が通ずる、といふ事だから、仙臺まで、行つてしまつたら、どうだ』

斯ういふ相談を、掛けられて見ると、その方が、宜いやうな氣もするが、實の所を言ふと、著者は、水に入つたら徳利で、少しも泳ぐ事は出来ないのだから、餘り好い氣持はしない。従つて、愚圖々いして居ると、長は、

『君が、後へ残るならば、僕は、先へ行くが、どうするか』

と、いふのであつたから、據所なく、

『實は、泳ぎが出来ないから、水を渡る、といふのは甚だ危険で、僕も、躊躇して居るんだ』

長は、呵々と笑つて、

『馬鹿な事を言つちや、不可い。レールの上を越して居る位な水で、死んで堪るものか、君も、随分、意氣地がないな』

と、言はれて見れば、小竊に障るから、

『それぢや、行かう』

といふので、著者は、大奮發で、出掛ける事にした。人夫を雇つて、鞆を背負はせるやら、道案内を頼むやら、不相應な賃金を取られて、長と、著者は、愈々、西那須を出て、黒磯に向つた。

成る程、蛇尾川へ、来て見ると、軌道の上、三尺以上も、水は出て居るので、流石に、案内者として、雇つた人夫も、少し危険だ、といふて、躊躇した位であるから、著者も、甚だ氣味が悪かつたけれど、長が、頻りに力むので、怖々ながら、四人が、棒を纏いて、それへ捉まりながら、漸くの事で、川を渡り終つて、ホツと息を吐いて、それから大急ぎで、黒磯へ着いたのが、其晩の六時頃であつた。幸に、直に出る、汽車がある、といふから、それに乗つて、仙臺へ着いたのが、夜の二時頃であつた。

途中で、斯ういふ障礙のあつた爲めに、肝腎の聯隊旗祭には、一日遅れて、間に合はなかつたのだが、免に角、到着の事だけは、屈けて置かうと、翌朝になつて、其旨を、師團長へ屈けると、早速来て呉れ、といふ事であつたから、著者は、支度を整へて、取敢ず師團へ、行つて見ると、副官が、待つて居て、應接所へ通された。

昨日、西那須で、汽車が止つた時に、もう迎も、聯隊旗祭には、間に合はない、といふ事が解つたから、すぐに電報を打つて置いたのだが、今、師團へ着いて、聞いて見ると、電報は、まだ届かない、といふ。これは變だな、と思つて、段々調べて貰ふと、途中の電柱が、倒れたりして居る爲めに、電報は、大廻りに廻つて来る事になり、殊に、それが輻輳して居るから、非常に遅れて居る、といふ事情が判つた。彼是れして居るうちに、漸く電報が着いた。早い事を、專一とする電報も、本人が、一晩泊りて、やつて来た、その後から、ノコノコと屈くやうな事では、殆んど、その効用を、爲さないのだ。が、天災では致方がない。

副官から、乃木師團長に、此事情を報告した、と見えて、暫くすると、此方へ通れ、といふて、師團長の前へ通された。著者は、遠くから見たのは、度々であるけれど、乃木と、差向ひになつて、話をしたのは、此時が、初めてで

あつた。

『君が、伊藤君か』

『さうです』

『昨日は、大分迷惑をした由であるが、それでも、能く来てくれた』

と言ひながら、立つて、乃木將軍は、著者の手を、しつかり握つた。

『君が、非常な出水に遭ふて、困難して居るにも拘らず、敢て危険を冒して、此處までやつて来て、その約束の時間に遅れた、といふ事情を、話してくれたのは、實に喜ばしい。男子は須らく、最れ迄に、責任を重んじて呉れなければ、不可ぬのぢや』

と言ふて、限りなき喜びの色を、顔に現はして、頻りに著者を、稱讚するのであつた。實を云へば、著者は、據所なく、行つただけれど、乃木は、却て勇敢なる行爲となし、又非常に、責任を重んずる者として、大に著者を、以て待して呉れたのだ。

『折角、来てくれたのであるから、講演をやつて貰ひたい』

と言ふ。著者の方では、固よりそれが爲めに、仙臺まで、やつて來たのであるから、躊躇なく、

『やりました』

と答へて、委細承知した。

七

そこで、午後になつてから、將校を召集して、講演を始める事になつた。其時に、何か講演の題目について、註文があるか、と聞いたたら、乃木は、答へて言ふのに、

「別に、註文は無いが、男の聞くべき話をして呉れ」

と、いふのであつた。茲に於て、著者は、色々考へた末、江藤新平が、長州薩間の政治家と衝突して、遂に叛旗を繚したが、事成らずして、空しく死刑に、處せらるゝ時の事を、最も細かに講演した。

乃木師團長と、山口旅團長とが、相並んで、演壇の脇に、控へて居た、前には、澤山の將校が、行儀よく列んで、聞いて居た。その席上で、此話をしたのであるが、江藤が、愈々、首を落される、といふ時の心事について、著者は、當時の江藤の胸中を想像して、斯くもあらうか、と思ふ一節を、話しかけると、今まで、振仰いで居た、乃木の顔は、だん／＼下を向いて来て、遂には頬の邊りに、涙の傳はるのを見た。其時に、著者は、講演をして居りながら、乃木といふ人は、餘程、人情の深い人である、といふ事を、感じたのである。長州人が残らず、江藤を、憎んで居る、といふ次第ではなからうが、兎に角、井上や伊藤と喧嘩して、あのやうな末路になつた、江藤であるから、長州出身の乃木が、之れを聞いて泣く、といふのは、全く人情の深い點が無ければ、泣けないのである。

講演は、無事に終つて、更に一席を、と、所望されたので、今度は、日清戦争に就て、乃木將軍が旅團長として、花園河口から上陸して、金州城を攻落す時の話をした。是れには、流石の乃木も、破顔一笑、如何にも、嬉しうな様子が見えた。著者も、随分、圖々／＼譯で、軍隊の講演を、本職の軍人に聞かせ、而も、乃木を、前に置いて、乃木の話をしたのだから、今から考へて見ても、冷汗の出るやうな次第である。けれども、その講演は、非常に感服されて、一般の素人に、話すべき、軍隊の話は、さういふ風にやつて貰へば、頗る好都合である。是非、今後にも到る處で、さういふ話は、傳へて欲しい、といふ、註文を受けた。其日、は非常に優待されて、乃木や、山口は、先に歸つたけれど、副官は、後に残つて居て、夜に入るまで、御馳走して呉れた。

所が、著者の泊つて居たのが、大泉といふ、宿屋であつたが、歸つて来て、湯に入つて居る間に、泥棒が入つて、著者の所持品は、残らず持つて行かれた。金入れは勿論、着物まで持つて行つたので、宿屋で浴衣一杖で、震へて居

るやうな、始末であつた。大泉の主人も、非常に氣の毒がつて、殊に、自分の家の名前にも障るからと、いふので、警察へ届けたから、すぐに巡査が来て、その騒ぎは大きかつたが、後の祭りて、何うにも仕様が無かつた。著者は、政黨の關係から、仙臺にも、友人が、澤山居るので、其事が、早くも評判になり、新聞にも出るといふやうな、譯で大分、人が知るやうになつた。

翌日の夕方になると、乃木は、大泉の門口へ、騎馬で、やつて来て、著者の在宿か否かを、尋ねて居る、といふ事を、宿の主人が、注進に及んだので、それでは出迎へよう、とするうちに、乃木は、座敷へ、はひつて来た。

『泥棒に遭つたさうぢやが、氣の毒な事をされた。俺の方から聘ばなければ、水に出會つたり、泥棒に見舞はれたりしなかつたらう。然し、是れも、人生の旅には、有りがちな事だから、諦めるが可い』

などと言つて、笑つて、歸つて行つたが、著者は、此時に、非常に嬉しかつた。師團長ぐらゐの資格になると、却却、かういふ事は、爲てくれないものだ。出水の爲めに、時が遅れても、態々、來たといふ事を喜んで、著者を以て責任を重んずる者として、優待してくれたり、又、泥棒に遭ふたから、といふて、直ぐ訪ねて来てくれる、といふやうな親切は、思ふて居ても、容易に出来る事でない。殊に、位地のある人に於ては、尙ほ然りである。然るに、乃木は、斯様に、懇篤な扱ひを、爲てくれた。尙ほ、前日の事であるが、恰度、講演を終つて歸らうと、すると、副官が著者を呼止めて言ふには、

『君の今日、講演した場所は、將校會議の場所て、君の立つて居た席は、即ち會議の際に、師團長閣下が、着かれる所である。今日まで、あゝいふ場合に、あの場所を使つた事は無いが、閣下の言はれるには、伊藤が、危きを目して、責任を重んじて來たのであるから、之れを遇するには、普通の講談師を以てしては悪い。立派な國士として見なければ、いかぬ。従つて、講演の場所も、あの席にしると、斯う命ぜられたので、殊更に、將校會議の席を、使つた譯である』

と、其次第の説明であつた。さう言はれて見ると、軍隊の餘興場としては、甚だ立派であるといふ感じがしたのも、成る程と、思ひ當つた。

斯ういふ事は、極く小さい事柄のやうだが、人を動かす力は、非常にあるもので、著者が、乃木といふ人に對して普通の軍將でない、といふ感じを深くしたのは、云ふ迄もない。

八

泥棒に遭つた、翌日の朝、師團副官の所から、使ひが来て、是非、今朝の十時頃から、一席の講演を、私宅に於て聞かせて貰ひたいと、いふのであつた。所が、著者は、着物も何も無いのだから、大泉の主人から借着をして、直に出掛けて行つた、案内されて、座敷へ通つて見ると、成る程、將校の家族らしいもので、四五十人集まつて居て、既に講演の席を設けてある。挨拶は匆々にして、前後二席の講演を終つて、晝食を馳走になつて、歸つて來た。

暫くすると、副官の使ひが、やつて來て、是れは、甚だ些少であるが、ホンの御禮の、しるしである、と言ふて、金包を出された。此時の著者の嬉しさは、一と通りではない、泥棒に遭つて、一文無しで、東京へ電報を、打つては置いたが、其金が、何時來るか判らないで、困つて居た時の金であるから、實に嬉しかった。

一息して居ると、今度は、旅團副官の家から、迎ひに來た。矢張り、同じやうな形式で、講演をやらせられたのであるが、歸つて來ると、間もなく、金の包みを持つて、又禮に來た。朝夕で二回づつ、こんな事が、三日續いた。是れが爲めに、東京から、金が來る間の凌ぎがついた。

著者は、どうも、不思議に思つたが、自惚があるから、是れは、自分の講演が巧かつたから、それで、頼みに來たのである、といふやうな、考へを、有つて居て、汽車が、無事に通ずるまでの十五日間を、仙臺に過して、愈々、汽車が通ずるといふ知らせを得たから、東京へ歸らうとして、師團長や、旅團長の所へ、挨拶に行つた、其時に、山日

に、話に移ると、

旅團長が『まあ上れ』といふので、上へ引上げられて、話をして居る中に、副官の家から、迎ひの來た、講演の一條

『あれは、乃木師團長からの申付けて、仕たのである。君が、此師團に、聘れた爲めに、泥棒に遭つて、困つて居るといふので何とか仕なければならぬ、といふ相談が、起つた時、乃木將軍が、言はれるには、人は漫りに、人から金を受くべきものでなく、又あゝいふ男に、理由なく金を出す、といふ事は、却て辱かしめる意味にもなるのであるから、寧ろ講演をやらせて、それに對する、報酬を出したら、宜からう。さうすれば、出す方でも、威張つて出せるし、受取る方では、猶更らの事であるから、さうしなさい、と言付けられたから、それで、やつたのである』

と、いふ事を聞いて、著者は、實に乃木といふ人は、立派な人格を、有つた人だ、といふ事を感じた。人は、漫りに、人から物を、受くべきものではないが、乍併、働いて得るものならば、當然である、といふ、此簡單な言葉が極めて深い意味を、有つて居るので、乃木將軍の、平生の志といふものが、判るだらうと思ふ。

事は、著者の一身に、關する事であつたけれど、長々と話したのは、偶ま以て、乃木將軍の人格を、傳ふるに足る逸話にもならう、と思つて、物語つた次第である。

それから後、間もなく、乃木は、政府の命に依つて、東京へ出て來た。其晩に、兒玉源太郎が、訪ねて來て、

『臺灣總督として、君を推舉する積りであるから、是非、承知して呉れ』

といふ、相談を持掛けた。乃木は、頻りに辭退して、

『さういふ事は、俺の適任でないから、平に斷る。俺は、一生を、單純な軍人生活で、終る積りである』

と、堅く斷つた。けれども、兒玉は、色々に説付けて、

『臺灣の前途は、なか／＼重大で、その經營の上に就ても、苦心があるのに、殊に、土匪の征討が、容易な事でない。

君のやうな者に、行つて貰はなければ、之れを成し遂げる事は難かしいのだから、是非、行つて呉れ。新領土としての、經營の上には、民政、長官といふものが、別に在るのだから、さうひどく、君に、心配を掛ける譯もなからう、と思ふから、兎に角承知して貰ひたい。」

と、いふのであつた。斯ういふ押問答が、屢々重ねられ、又、各方面からも、頻りに勧められるので、遂に、乃木も承知して、臺灣へ行く事になつた。

九

極く公平に言へば、乃木が、臺灣總督として、兼任したのは、確かに失敗であつた。

尤も、此人は、自分が、役を受ける上に於て、豫め成敗を、考へて受けるといふやうな、事は爲ぬ洗儀で、たゞ申付けられて、自分が受けてしまへば、誠實に、それを勤めて、己れの力の續く限り、眞面目に、やつて見て、それ及ばなければ、己れの罪である、といふやうに、考へて居るのであるから、總督を、引受ける迄には、大分むづかしかつたが、愈々決心して、引受けたとなれば、成敗などは、考へて居る人ではなかつた。

やれるだけやつて、それで、いけなければ職を罷めるなり、腹を切るなりすれば、済むのである、といふやうに、極めて眞面目な考へを以て、役に就くのであるから、さういふ氣風の人々が、臺灣のやうな、新領土へ行つて、泥棒や詐欺師の變形たる、怪しい役人の、仲間入りをした所で、うまく行く可き筈はなく、失敗は初めから定つて居たのだ。戰爭に、勝つた結果として、新たなる領土を得た場合に、その土地の人民を、心服させた上に、新領土としての經營を、完全に成し遂げるには、どうしても、三十年以上の歳月を要する、といふのが、今迄の例の如くなつて居る。然るに、臺灣は、僅に十年餘りにして、收支相償ふまでに漕付けて、その財政は、本國政府の財政から、獨立してやつて行けるやうに、なつたのは、其局に當るものゝ手腕も、確に在つたのであるが、兎に角、臺灣といふ土地の、天

産物が豊富であつて、是れから得る所の利益が、支出と、經費と償ふて、餘りあつた爲めである、といふ事は、言へるのである。

殊に、二度目の民政長官として行つたのが、例の後藤新平であつて、これも、兒玉の推薦に依つたものであるが、臺灣の如き、新領土の民政長官としては、當に適任であつた。同時に、色々の悪い種も、大分播いて来たやうである。民政長官としての俸給は、雀の涙ほどのものであるが、僅か十年にして、後藤が、百萬の富を成したと、いふのだから、偉いものだ。尤も、それは評判であつて、著者が、算盤を執つて、一々調べた譯ではないから、ハツキリ判らないが、兎に角、話半分としても、五十萬の富は、有つた譯だ。また、晩年の豪奢な、生活振りから見れば、その位の事がなければ、あゝいゝ風に、やつて行けるものではないのだから、其點から考へて見ると、百萬の富を成して居る、といふ事も、或は本當であつたかも知れない。それにしても、あの僅かばかりの俸給に依つて、どうして、是れだけの富が、出来たらうか。それを考へて来れば、頗る不思議にも思はれる。

臺灣といふ土地が、非常に富源があつて、到る所に、遺利が多く、其處へ、集まつて来る奴が、皆な儲けたいくで、死にかゝつて居る、亡者のやうな奴ばかりであるから、其上に立つて、之れを取締つて行く役人は、餘程、廉潔な者でも、多少は、臭味が附いて来るものだ。況んや、後藤が、あの氣象を以て、切つて廻して行つたのだから、自然と、その臭味が、濃厚になつて行つた、といふ事は、無理のない次第であらう。縦令、自分が、直接儲けなくても、そのお蔭を以て、法外の利得をした連中が、今時でも、後藤の爲めには、御沙汰次第で、金を出さなければならぬやうな、悪縁の繋がつて居たのは、世間でも、既に知つて居る通りである。

文官に、種々の弊害があつたばかりでなく、武官も亦、その悪風に感染れて、追々、欲張つて来る、と同時に、武士道の如きは、何時しか忘れて、芳しくない事をする軍人が、多くなつて来た。それに、對手が、幾ら恐ろしい、といふても、要するに、土匪ぐらゐのものであるから、大した事はなく、而も、其地は、廣いやうでも、絶海の離れ島

であり、其處へ行つて、獨り天下を、極めて居る軍人としては、自然、悪い方に、足を踏込んで行くのは、止む事を得ないかも知れぬ。

乃木が、總督になつて、行つた時分には、未だ水野邁が、民政長官の時代であつて、後藤は、其後に行つたものである。後藤に比べて、水野は、さまで世の中の問題には、ならなかつたが、是れも相當に、金溜主義を、やつて居たのだ。さういふ者が、集まつて居る所へ、乃木のやうな、金を欲しがらず、職務を誠實にする、正直者が、行つたところで、納まりのつくべき筈がない。本人も、全くそれを、知らぬ譯ではなかつたらうが、いづれにしても、乃木の臺灣行きが、失敗に歸する、といふ事は、行かぬ前から、極まつて居たのである。

一〇

日露戦争後に、腦溢血で死んでしまつたが、兒玉といふ人は、洵に立派な人物であつた。軍人として、常識にも、富んで居り、存外に、話の融通もついた。それで、文武の二道にかけて、どちらにも向いた、といふのだから、實に調法な男で、さういふ者は、兒玉の外に、多く無かつた。初め、乃木に、臺灣總督を勧めると、乃木は、頻りに、兒玉が自ら、其任に當れ、といふ事を、促したのであつた。けれど兒玉は、陸軍の大擴張を、爲なければならぬ、責任を持つて居るから、自分は、其方について、大いに努力する積りで、今暫く、東京を離れる事が出来ぬ。それに就て、是非とも、君に頼みたい、といふやうな意味で、乃木を、説いたのであつた。

兩者は、その性格も、餘程異ふし、仕事の遣口も、全く別であつたが、その交情は、極めて親密であつたので、乃木も、遂に兒玉の、切なる勸告に動かされて、臺灣行を、承知したのであつた。その任官されたのは、二十九年十月十四日で、翌月上旬、任地に着いた。此時に、母の壽子は、七十餘歳の老齡であり乍ら、健氣にも強て同行したけれども、間もなく、病氣に罹つて、其年の暮に、此世を逝つて、臺灣の土になつた。

乃木の在職中に、二つの出来事があつて、それが遂に、乃木をして、總督を辭任するの、止むなきに至らしめた。先づ、第一の事件から、語つてみよう。

雲林といふ所の支廳長に、松村雄之進といふ者があつた。早くから、浪人組の一人として、重きを爲して居た人物で、生れは、筑後の久留米であるが、子供の時分から、却々好い氣象を、持つて居た。

明治の初年に、長州の大樂源太郎が、叛亂を起して、それが、中途で破れた爲めに、久留米へ、走つた事がある。其際、久留米藩が、大樂の爲めに、便宜を與へてやつた、といふ事が、段々、問題になりかゝつた。藩士の中には、非常に之れを、心配するものが出来て来て、どうしても、大樂を殺して了はなければ、藩主の有馬侯に、その累が及ぶといふので、十數名の者が相談して、大樂を斃す事にした。

其時の下手人の一人が、此の松村であつた。時に、年僅かに十七歳、今から思へば、實に元氣旺んなものであつた。之れを、今日の青年の有様から考へて、どうであらうか。藩主への累を、除かんが爲めに、兎に角、當時評判の、大樂ほどの人物を、殺しに出掛ける、といふ意氣が、なか／＼今日の、十七歳位の青年に、見られるものではない。それを、雄之進は、進んで行つたのである。

(但し、カフエーヤ、人混の中で、短刀を、振廻す奴は、今でも在るが、これは人間の爲す事でなく、狂犬にひとしい奴だ。之を以て、青年の壯なる、意氣とはいひ得ぬ)

然るに、大樂を殺した後に、愈々問題は、大きくなつて来て、藩の方でも、その下手人を捕へて、政府へ、引渡さなければならぬ事になつた。其際に、松村も、亦押へられて、訊問を受けたが、一切、知らぬ存ぜぬで、立て通してしまつた。

政府の方から見れば、相當に證據が、擧つて居るのであるが、たゞ本人の自白がなければ、思ふやうに、罰する事が出来ないから、どうしても、雄之進に、白状させよう、としたが、彼は頑として、知らぬ／＼の一點張りであつ

た。茲に於て、止む事を得ず、拷問に掛ける事にして、様々に、責め虐んだけれども、雄之進は、少しも屈しない。そこで、調べ係りの方でも、萬策盡きて、拷問の中で、最も残酷な、釘付けの板の上を歩かせる、といふ、思ひ切つた事をやつた。

それは、何ういふ風にするか、といふに、板に五寸釘を打抜いて、釘の尖りの出て居る方を、上に向けて置き、その上を歩かせるのだ。體を載せたばかりでも、釘はブツリと、足裏に刺さつて、甲にまで、尖が出て来る。それ程の酷い拷問に、かけられたのだが、それでも、剛情で、事實の白状はしなかつた。調べ係りが、その釘の上を歩け、と命じた時に、黙つて、其上に乗つた。ブツリと、足に刺さつた時の痛さは、一と通りでなかつたらうが、知らぬ顔をして、二歩三歩、ブツリくと、釘の突き刺さるのを歩いた。嘗て、本人から、其話を聞いたが、なんでも、三歩までは、覺えがあつたけれど、それから先は、覺えがなかつた、といふ事である。何しろ、餘程、剛氣な青年であつたには、違ひない。松村は、足が不自由で、思ふやうに歩けなかつたが、全く是れが爲めであつた。

(今日、故人になつて、世間からは忘れられてしまつた)

一一一

かうした履歴を、持つた松村が、雲林支廳長として、威張つて居たのだが、其下に、使はれて居る役人が、亦、實に面白い、連中の集まりであつた。後には、東京の電報通信社に、取締役として、相當に名を知られた、權藤震二、今でも社長をして居る、光永星郎、それに、詩人として有名な、宮崎來城が居り、尙一人は、佐々木照山といふやうな、顔觸れであるから、その痛快振りも、思ひ遣られる。いづれを見ても、普通の役人としては、受取り難い人達で、几帳面な官廳の、事務が執れる筈はない。どうしても、その役所は、浪人の合宿所と、いふやうな傾きがあつた。それでも、當時の臺灣の事であるから、これで治まつて行つたのみならず、或は、斯うした連中の、集まつて居た方

が、仕事の運びは、却てよかつたかも知れない。兎に角、口も八丁、手も八丁、何も彼も、人並越えて居た、連中が寄り合つて、而も、その頭に、なつて居たのが、松村権之進といふのだから、その名前づけを、見た丈けても、さぞ面白かつたらう、といふ感じが起る。

さて、或時、土匪の襲撃を受けて、雲林市街が、非常に混亂を、極めた事があつた。然るに、土匪に備へる爲めに來て居た所の、軍隊の隊長をして居た、佐藤某と、中隊長をして居た、石塚某といふ、二人の將校が、極めて弱虫であつて、土匪の來襲を聞いて、一戦も交へずに、退却しよう、といふのであつた。

全體、進んで行つてさへも、土匪を討滅しなければならぬ筈のものが、却て土匪の方から、出掛けて來た、といふ場合に、すぐ退却しよう、といふのは、随分、間違つた話で、サーベルを下げた、軍人の口から、斯うした弱音が、吐き出されたのだから、可笑しなものだ。相當に戰つて、力が及ばなければ、斬死をしたつて、差支へがない筈である。實は、それ迄にするのが、本務であるにも拘らず、逸早く逃げよう、といふ相談を、始めるに至つては、言語道斷である。軍隊が、斯う弱虫になつてしまへば、文官の集まりである所の、支廳の方では、猶更ら、慄へ上つて、戰さの役に立たないのが、當然であらう。所が、此時の支廳の役人は、なか／＼退却なぞを、考へて居るものは、只の一人もなかつた。支廳長の松村は、

『どげんにも、こげんにも、こぎやア事に、なつた以上は、退く事は出来申さぬ』

と言ふて、威張つて居るのだ。その秘書役をして居る、照山などは、意氣、天を衝くの勢ひである。六尺ゆたかの大男が、三尺もある刀を提げて、

『軍隊の奴等が、意氣地がなくて、逃げ腰になつて居るなら、そんな者は、當にするには及ばぬ。俺達で、土匪を征伐してしまへば、差支へないのだから、少しも構はぬ。その代り、明日からは、軍隊の奴等は一人たりとも、此の雲林支廳の管轄内に、足踏みをさせぬから、その積りで居ろ』

といふやうな、豪い氣焰を吐いて、騒ぎ廻る。權藤や、光永も、後年には、大人しやかな紳士になつたが、その時分には、なかく元氣は旺んであつたから、同じやうに、刀を振廻して、騒いで居た。斯うなつては、文官と武官が、全く入れ替りに、なつてしまつて、どうにも、折合ひが付かない。そこで、松村の方から、逆振に、佐藤少佐の方へ談判に行くといふ、事になつた。文官の方が、踏止まつて戦ふ、といふのに、武官の方が、早くも退却しよう、といふのだから、冠履顛倒で、而も、その踏止まつて戦はう、といふ事を、松村の方から、申込まれた佐藤は、全く顔色なしと、謂ふべきで、軍人の面目は、總て蹂躪されて、しまつた譯である。けれども、逃げようといふ事を、考へる位の軍人だから、口の先は、なかく巧い。

『到底、勝算のない戦ひと見て、強ひて命を棄てるには及ばぬ。殊に、土匪を相手に、そんな無謀な、戦さは出来な
いから、一時引揚げて、充分の計畫を、立てた上、土匪の巢窟を襲ふ、といふ事には爲るかも、知れないが、今の
場合には、先づ、自分等は、引揚げるのであるから、君等が、其後に於いて戦ふのは、勝手である。けれども
敢て君等から指圖をされて、我々が、進退を決すべき筈はない』

と言ふて、拒んでしまつた。そこで、松村等は、
『宜し、然らば、貴官等は逃げなさい。我々は、どげんにも、どげんにもして、防戦を仕る』
と言ふて、歸つて來た。それからは、土匪の攻め込んで、來るのを待つて、一戦を開く、といふ事に決して、一同は、
刀の柄を叩いて、待つて居た。

一一一

臺灣の土匪は、舊式の鐵砲、殊に、火繩銃なんぞを携へて、襲來するのだけれど、その狙撃の巧い事は、一と通り
でない。日本の軍隊が、何時でも、それに惱ませられる。

それと、もう一つ、持て餘す事は、土匪といふものが、生れ落ちると、直ぐからの山住みて、如何に、險阻な岩角でも、鹿の駆けるやうに、どんく／＼駆けて歩く、それが爲めには足の裏などは、象の皮のやうになつて居て、駆脚の早いことは、一と通りでなく、縦横無盡に、森林や叢の中を、或は潜伏し、或は駆け廻つて、出没自在、逆も、日本内地で育つた、兵隊などが、重い靴を穿いて、ボカ／＼歩くのとは、比較にならない。それが、里へ出て来て、ひを始めると、眞に命を惜しまず、どんな場所へでも、猛進して来るのだから、土匪とはいふものゝ、却々、馬鹿に出来ないのだ。

今、雲林支應へ、夜を冒して、攻込んで来た、土匪の一團も、なか／＼強い奴等ばかりで、流石の松村等も、頗る持餘したが、曩に、佐藤少佐等に對して、誓つた言葉もあるので、今更に、退却する事は出来ぬ。そこで、松村の一黨は、佐々木、權藤、光永を首め、一同必死になつて、奮闘した。その甲斐があつて、一度は撃退したけれども、再度の襲來に對しては、最早や防禦の見込がないので、止むなく一同は、支應を明けて、退却しなければならぬ事になつた。

軍隊の方は、最初から、退却の方針を執つて居ただけに、此等の退き方は、實に素晴らしいものであつた。縦令、意見は違つたにもせよ、筆を持つて、机に向つて居る、文官が、此奮闘をして居るのを見棄て、軍人たる者が、逸早く逃出す、なぞといふのは、甚だ怪しからぬ譯で、こんな弱い軍人が、日本にも在るかと、思ふと、心細くなる。

照山等が、松村支應長を擁し、萬死を冒して、雲林支應を、立退いた時の事を、よく照山自身が、物語つて聴かせたが、それを聞いて居るだけでも、實に恐ろしいやうな、面白いやうな、不思議な氣持になる。人は、一度でも、斯うした境を出入して、稍や世の中に名を成すると、大概弱くなるものであるが、照山は、後に至るまで、其當時の態度と心を改めずに、匍匐も戰鬥的の、強い意氣を以て、進んで来たのは、慥かに敬服すべきである。人は好々があるから照山の遺方について、悪い批評をする者もあらうが著者は、あゝいふ風に、絶えず戰鬥的態度で、進んで行く事

を好むものであるから、照山は、矢張り快男子である、と思つて居たが、近年に至つて、病の爲に、往年の元氣と、力の無くなつたのは、惜む可き事である。

さて、此戦ひで、部下の者も、多少は傷ついたし、又死んだものもあるけれど、松村等が引揚げて来た時の態度は實に堂々たるものであつた。それだけの奮闘をしただけに、この連中が、佐藤少佐等に對する不満は、また一と通りでなかつた。

どうしても、之れを其儘に済ます事は出来ないから、飽迄も、その理非を明かにして、佐藤少佐と、進退を争はなければならぬ、といふ事になつて、先づ、民政長官の、水野に面會した。一同から以上の顛末を、報告すると同時に兩者に對する處置をいづれとも、決して貰ふやうに、總督府へ、交渉する事を迫ると、水野は、逡巡して、遂に其説を容れなかつた。松村等は、民政長官も、弱腰で居る以上は、最早や頼みにならないから、我々は、自ら進んで、その談判の衝に當らう、といふ事に決して、乃木總督に、面會する事になつた。

一一一

松村等が、談判に行かないうちから、佐藤少佐等の行動は、實は、總督府の一問題に、なつて居たのであつた。乃木は、あゝいふ氣風の軍人であるから、洵に苦しい事に思つて、佐藤等の報告には、殆ど眼を通さないうで、その退却の時が、甚だ宜しくない、といふ事を、認めて居たのだ。所へ、松村等が、面會したいと言ふて来たから、早速面會する事になつた。松村は、例の調子で、佐藤少佐と、交渉の事情から、遂に自分等が、後へ残つて、奮闘する事になつた次第を詳しく物語つて、乃木に決裁を求めた。

「コギヤン事情であります、閣下は、之れを何う御覽になりますか。苟も、土匪に備へる爲めの軍隊でありながら土匪の姿を見ない中に退却したのである。我々は、文官ではあるけれども、男子の本領として、是れ迄の奮闘をし

て来たのですが、何れを是とし、何れを非とするのでありますか。御意見を伺ひたい、と思ふ。若し、佐藤少佐等が軍人の面目を汚して、退却した事を、是とすれば、我々が、文官でありながら、土匪と戦ふた、といふ事は、非となる。若し、さういふ事になる場合には、自然、我々は、職を退かなければならないのである。閣下は、それを何う御覧になりますか」

全體、松村といふ人は、極めて率直な、武士氣質の人であつて、少しも、物を飾つて話す、といふやうな事は出来ない。有つたことを、有の儘に話して、善いか悪いかを、極めよう、とする風であつた。さうした調子で、言葉は極めて簡單であつたが、事の急所を指して、乃木の返辭を求めたのである。

乃木は、澁い顔をして、黙つて、考へて居るばかりで、更に答へをしない。そこで、照山等も側から口を容れて、交々、事の經過を述べて、乃木の答へを得ようとしたのである。乃木は、徐ろに口を開いて、

『宜しい、よく分つた。佐藤等の執つた、處置に就いての善悪は、今此處で、明かに言ふ事は出来ぬが、若し、佐藤等の退却が、卑怯な心から致したもので、軍隊の面目を、傷けるやうな點がある、と認むれば、必ず嚴罰に處するから、それだけは、含んで居て貰ひたい』

松村は、隙かさず、席を進めて、

『然らば、おい、どんが、戦ふた事に就ては、どう御考へになりますか』

『イヤ、それは、此の方から、善悪を言ふ事は出来ぬ。いづれ、民政長官とも會ふて、よく話をする事にする。併し君方が、文官でありながら、筆を擲ち、劍を執つて、毅然として土匪に向つて、あれだけの奮闘をした、といふ事は軍人としても、多く得られざる、勇敢な働きである、といふ事は認める』

問答は、これで終つて、松村等は、引揚げて来た。

その前から、總督府と、民政府の間は、平生にも確執があつたのだ。所へ、此問題が持上つたのであるから、その

軋轢は、益々ひどくなつて来て、日一日と、問題は、大きくなるばかりであつた。

此顛末を、詳しく述べると、餘り長くなるから、それは略す事にして、その結末だけを、話して置くが、兎に角、佐藤少佐等の行動は、軍隊として、甚だ不面目な事をしたものである、といふ事になつて、到頭、懲戒免官になつた上、牢へ打込まれた、といふ事である。それと同時に、松村等も、同じく懲戒處分を受ける事になつた。それは、どういふ理由か、といふに、苟も文官でありながら、軍隊の爲すべき事に立入つて、恣に戦ひを開いたのが、宜しくない、といふ事であつた。縱令、文官でも、武官が逃尻をした程に、土匪が、激しく押寄せて來たのに對して、充分の奮闘をしたのであるから、本來から云へば、褒められ、ばとて、罰せられる筈はないのだ。然るに、松村等が、免官になつたのは、甚だ可怪しい事ではあるが、其處が、役人の窮屈な所て、どうも致し方がない。それで、命がけの働きをした連中も、悉く懲戒處分に、附せられる事になつた。それでなくてさへ、此連中が、民政長官の下に、長く安んじて居る筈はないのだ。斯ういふことで、免官になつてしまつたから、愈々、支應から去る事になつた。

松村は、内地へ歸つて來たが、照山は、其後に残つて、新聞を發行して居た。其間に、後藤新平が、乗込んで來て、民政長官になつてから、民政廳の方針と、意見の衝突をしたので、照山は、盛んに後藤の攻撃を始めた。それが爲めに、照山は、非常な壓迫を加へられて、到頭、臺灣に居る事が出来なくなり、去つて、支那に入り、それから蒙古に遊んだ。その王様を連れて、日本へ歸つて來た時から、照山の事を、世間の人が、蒙古王と、戲稱するやうになつた。

雲林支應の一條は、かういふ始末であつたが、乃木は、それに就いて、多くを語らなかつた。併し、佐藤少佐等を、嚴罰に處した所から、考へて見れば、たしかに佐藤等の所爲を、憤慨して居たには、違ひない。

乃木の在職中に於ける、第二の事件といふのは、それから後に起つた、高野孟矩の事件である。臺灣の高等法院へ、院長となつて赴任した、高野が、先づ官場の空氣を見ると、上下を通じて、一般の役人が、盛んに悪い事をして居る。高野は、深くそれを慨して、是非とも、その弊風を矯正しよう、といふ考へから、猛烈に、檢舉を行はせて、片端から處罰して行つた。密に文官ばかりでなく、遂には武官にまでも及ぼう、として來たので、軍人の大反抗が、起つて來た。

何處の國へ行つても、軍隊は、一種特別の世界を、形作つて居て、恰も、治外法權の範圍のやうに、なつて居る。容易に、普通の裁判所から、手を入れる事は、許さなかつたものだ。それを、高野が、手を着けに掛かつたので、非常な反抗が、起つて來た。それに乘じて、文官の方でも、頻りに高野の攻撃を始めたから、茲に於て、高野は、殆んど重圍の中に、陥つた形になつて、頗る苦んだ。その位な事は、初めから覺悟の上で掛かつたのだから、高野は、一向に頓着なく、どん／＼斷行して行つた。その遣口で、押して行けば、遂には、臺灣總督府の役人の大半は、赤い仕着せを、着なければならぬやうな事にも立至るので、役人共の迷惑は、一と通りでない。そこで、民政長官の方から、盛んに高野排斥の、運動が始まつて、軍人側の、反抗運動と呼應して、その火の手は、益々はげしくなつて來た。乃木總督は、かゝる場合にも、誠に冷然として、更に取合はない。高野が、裁判官であり、又、高等法院院長として、不都合な役人を、押へるといふ事は、固より當然の仕事であるから、強ひて、それを抑制する、必要はない、といふやうな態度で、臨んで居たのである。或は、乃木としては、却て、それを喜んで居たかも知れない。彼是れする中に、突然、高野は、内地へ轉任を、命ぜられる事になつた。そこで、高野が承知せず、

『司法官は、憲法の保障に依つて、己れの意志に背いて、みだりに轉任を、命ぜらるべきものでない。自分は、臺灣の地を、去る事は出来ぬ』

と言ふて、司法大臣の命令に従はないので、これからの争ひは、高野と、司法省との關係に、移つて來た。それから

後の高野は、政府に向つて、實に猛烈な、攻撃をするのみならず、果は、中央政府の命を奉じて、總督府から、その轉任の辭令を、渡すべく出掛けて行つた、役人などに抵抗する、といふやうな譯で、事は、頗る面倒になつて來たが、遂に、免官といふ事に決した。轉任すら、肯せざる者が、免官を、承知する譯もなく、高野は、

『斯くの如く、憲法に違反した、手續に依つて免官された、自分は、その命令に、應ずる義務はない』

と言ふて、頭張つて居るところから、遂にサーベルを下げた、奴等が押掛けて行つて、高野を、裁判所から、引張り出さうとする。高野と同時に、處分された二三の者は、各々、日本刀の柄に、手を掛けて、斬死も辭せぬ、といふ態度を示す。まるで、書生芝居の立廻りのやうな事になつて、極端な争ひまでしたが、とどの詰りが、政府の權威を以て、高野を、臺灣から、追拂つてしまつた。

それから、高野は、屢々、行政訴訟を起したり、様々な事をして、政府と争ひ、硬骨判事の名は、愈々高くなつた。遂には、議會の問題にまでなつて、一時は、高野の免官事件が、世間を賑はしたほどであつた。所が、政府は、何處までも、高野に向つて、壓迫を加へ、裁判の上に於ても、高野を負かす、といふ事になつた。又、議會でも、問題になつたが、それが爲めに、當時の松方内閣が動かされる、といふまでの程度には、ならなかつたのである。併し乍ら、高野の名は、是れに依つて、非常に高くなつた。高野は、其争ひの間に、辯護士を開業した。その後、宮城縣から、代議士に選ばれて、大分評判は良かったが、惜い哉、つまらぬ事で失脚してしまつた。つまり、貧乏をした爲めでもあらうが、性の悪い會社の事などに關係して、破廉恥罪の處分を受けて、懲役に行つたのである。

此事に就いて、尙ほ立入つて話せば、随分長くなるが、それは、乃木の物語りと、縁が遠くなるから、これだけにして置く。

兎に角、乃木が、臺灣總督として、どういふ事をしたか、といへば、結局、大した成績は、擧がらなかつたのである。それは、最初から不適任である、といふ事は、極まつて居たので、乃木自身も、その理由を以て、再三、固辭し

た位であつた。兒玉から説付けられて、據所なく出掛けて行つたのであるから、迎も、世間で、期待したやうな、治績を擧げさせる事は、無理な譯であつた。

けれども、あの腐つた空氣の中に、儼然と構へて居つて、少しも、その汚れに染みなかつか、といふ事は、即ち乃木の本領であつて、一種の清涼劑になつた事は、慥かであらう。要するに、正直な中にも、幾分か、狡氣を加味して居なければ、臺灣の役人などは、長く勤まるものでない。前後二つの事件が、置土産となつて、乃木は、遂に臺灣を去つた。

即ち、明治三十一年の二月二十六日、臺灣總督を解かれると同時に休職となつて、暫く閑地に就く事になつた。

馬蹄銀事件

一

乃木は、臺灣總督を辭すると同時に、休職の身となつたが、それから十箇月経つて、明治三十一年十月三日、善通寺の第十一師團長を仰付つた。その在任中に、馬蹄銀事件なるものが起つて、一時、天下の問題になつた。其際に於ける、乃木の態度、進退といふものが、洵に潔よく且つ純なるばかりでなく、眞に責任感の嚴肅強烈な、乃木的人格を、如實に發揮して居るのであるから、一應、その事件の真相を、明らかにして置きたい。

簡単に言へば、馬蹄銀事件とは、明治三十三年の北清事變、即ち義和團の騷擾に際して、我出征軍の高毅將校が、壇まに馬蹄銀を掠奪して、之れを私した、といふ事件である。

凡そ、世界の軍隊に於て、斯ういふ事を、一番やかましく言ふのは、我が日本である。分捕功名武士の習ひと、一口には言ふけれども、その分捕を、妄りに爲ない、といふ所に、我が軍隊の値打はあるのだ。然るに、義和團事件の時に、斯うした汚ない出来事があつて、それが後になつてから、世間の問題になつたのは、如何にも嘆かましい事であるが、併し、當時の状況から言ふてみれば、必ずしも、日本の軍隊ばかりが、汚なかつたのではなく、同じ悪い事はしながらも、比較して見ると、矢張り、日本の軍隊が、一番に潔白であつたが、偶々、此一事件があつた爲めに、他の潔白な點までも打消された、といふやうな傾きがあつた。

義和團は一に、又、拳匪とも稱へて、北清地方には、却々勢力のあつたもので、有名な端郡王が、隠然、之れを援けて居た、といふやうな譯であつたが、一種の迷信に驅られて、集まつて居る連中であつたから、自然、耶蘇教を嫌ひ、外國のものを忌む、といふやうな、氣風があつた。苟も、義和團の一人となつて、或る信仰をすれば、鐵砲の丸は、身體に中らない、間違つて中つたとしても、命に別條はない、といふのが、義和團の信條の、一つになつて居たのである。かうした、迷信の間に、固く纏まつて居る、義和團が、不圖した事から蹶起して、外國人に向つて、迫害を加へるに至つたのだ。

所が、端郡王はじめ、清國政府の内部には、なか／＼義和團を、推奨して居た、連中があつた爲めに、幾分か、其勢ひを助けるやうな傾きがあり、且つ、義和團が一度ひびつたとなると北清の各地に同じやうな騒ぎが起きて、段々、それが大きくなつて来て、北京城は、その頑民に包圍され、光緒皇帝や西太后は、一時、熱河へ蒙塵する、といふ迄の騒ぎに、なつて來たのだ。

重圍の中に陥つた、北京城内には、各國の公使や、其他、澤山の居留民が、避難して居たのである。併しこれとて、僅かの義勇兵を組織して、防禦して居たのであるから、義和團の勢力が、日に益々蔓つて、その襲撃が、ひどくなつて來る程、籠城して居た連中は、非常な苦しみに、陥つて行く。萬一にも北京城が、陥るやうな事があれば、それこそ、由々敷き大事になる、といふので、その騒ぎは、非常なものであつた。

日本は、一番に、支那へ、接近して居るのと、各條約國の中で、最も支那に、親善の國として、見られて居た關係から、各國政府から、頻りに出兵の請求がある。又、その請求が無くとも、日本政府としては、速に出兵して、騒亂の鎮撫に、努めなければならぬのである。其時に、今の東郷元帥が、未だ其頃は、中將であつて、常艦監へ乗込み、數隻の軍艦を率ゐて、太沽へ乗込んで行つた。それから、陸戦隊を組織して、義和團の圍みを、突く事になつた。此時に、白石葎江といふ、中尉があつて、部下の陸戦隊を率ゐて、太沽の砲臺に、突貫して行つた。

義和團は、如何に、勇敢に働いた所で、元々、一地方の一擧に過ぎぬのであるから、正式の軍隊が、乗込んで行けば一掃りもなく、敗戦するのは、當然である。それであるから、我れこそは、太沽の砲臺へ、一番乗の旗を掲げよう、といふので、各國の將校は、非常に焦つたものであつた。白石も亦、其中の一人で、第一番に、乗込んだ積りで、砲臺へ上つて見ると、二人の外國將校が、頻に争ふて居るから、不圖、その傍らを見ると、長い竿と、國旗が棄て、あつた。

これは、佛蘭西と、獨逸の海軍士官で、今、此處の砲臺へ、乗込んだに就て、竿の先に、國旗を掲げて、一番乗の標を示さう、としたのであるが、竿が、一本しか無くて、乗込んだのが二人であるから、其一本の竿を争ふて、喧嘩して居る事が、直に解つたから、白石は、兩人の争ひを見ながら、その棄てゝある竿を取つて、日本の國旗を結びつけ、太沽の砲臺に樹てた。そこで、各國の陸戰隊から、一時に、鬨の聲が起つて、日本軍の名譽を、喝采した。怒つたのは、二人の將校である。自分等が、先に乗込んで居るのに、後から來た、日本の將校に、そんな事をされては、甚だ不面目である、といふので、二人の將校が、白石に突掛つて來た。

白石は、なか／＼、柔術に強かつた男で、腕力は、豫ての自慢であつたから、忽ちにして二人を、一丈以上もある高い壘壁の上から、取つて投げた。たゞ突飛ばしてさへも、一丈もある高い所から、突落されると、遠くから見居れば、随分、美事なものであるのに、柔術の手が、巧み入つて、二人を投げたのであるから、之れを見て居た、各國の兵隊は、一齊に聲を揚げて、喝采した。その喝采した者の中には、獨逸、佛蘭西の水兵も居たのだから、可笑しいぢやないか。是れが爲めに、白石は、遂に名を成して、各國の軍人から、勇猛なる日本の士官と、いふ綽名を附けられてしまつた。其名を言はないでも、勇猛なる士官といへば、即ち白石の事である、といふ程になつた。

此時の功に依つて、金鷄勳章を授けられ、忽ち大尉に進んだ。日露戰爭の際には、閉塞船へ乗込んで、無事に、其事を了へた後、黄金山の砲臺へ、小舟を漕付けて、遂に斬死をしてしまつた。

一一

由來、日本の外交は、軟弱に過ぎて、蕪蕪のお化のやうに、腰がフラついて居る、といふ攻撃をされるが、全く、それに相違ないやうに、思はれる。何時の對支問題に、就て見ても、事件の經過に従つて、外交上の働きの拙劣なる事が、明々と判つて来る。尤も、働きたらしい働きのあれば、即ち、それが外交政策の發動であるけれど、我外交には、さうした意味の働きの、といふものが滅多に無かつた。

例へば、袁世凱を、何かの機會で、一度偉いと、信じてしまふと、何處までも、偉いものとして、奉り通さう、といふのが、我外交官の遺口であつて、總てが其調子で行くのだから、此方で、親切にする程向ふの方では、附け上るのみで、少しも此方の親切は、感じないのが常であつた。その上、幾ら向ふが、勝手な事をして、此方では、何處までも、其尻に附いて行かう、とするのだから、實に馬鹿らしいものであつた。

嘗て、張勳の軍隊が、暴虐を働いて、南京事件が、起つた時、外務省の遣方が好かつた、と思ふ者はあるまい。當局者自身と雖も、後から考へて、如何にも、拙い遣方であつた、と思つたに、違ひない。けれども、自分等の遣つた事を、豈夫に、悪く言ふ譯にも行かないから、あの外に、遣り様は、なかつたやうに、言ふて、誤魔化して居たのである。

外務省が、斯ういふ風に、ブマを働いて居る。一面に於ては、軍人側の方でも、甚だ手緩い遣方をして居たのだから、どちらも揃つて、ブマであつた、と言へよう。南京事件の起つた時に、なぜ軍艦を以て、長江の封鎖をしてはなかつたのか。さういふ命令は、海軍省から、受けて居ないから、といふやうな、弱い考へて居るから、あゝいふ事件が、突發した場合に、目覺しい事が、出来ないのだ。

兎に角、我國旗を辱められ、國民は虐殺されたのである。而かも、中華民國といふものは、未だ承認されて、居な

かつた時であるから、支那は、無政府同様に扱はれても、仕方ない場合であつた。さうした折柄に、あれ程の事件が起つたのであるから、軍艦や水雷艇で、一気に長江を、封鎖して了つて、臨機の處置は、その上で講ずるといふ位の、英断を下しても、よかつたらう、と思ふ。若し、その行動が、外交の上に、悪い影響を與へた、となつたならば、指揮官は、自分だけ辭職するとも、腹を切るともすれば、よいではないか。その位の事が出来ないならば、初めから、サーベルを佩けないが、よいのだ。慙じハイカラの學問をして、妙に文明がつた事を、言つて居ると、さういふ決断は、容易に出来ないもので、軍人であり乍ら、軍人の元氣といふものを、失つて了ふ。

(茲に述べた南京事件は、弊原外交の時ではなく、その前に、張勳の軍隊が、起した事件の事であるが、之れを弊原外交へ、共通して見ても、同じ事は言へよう)

要するに、國民が目覺めて、外交官や、軍隊の後方から、常に鞭撻を加へて行くと、同時に、實質に於て、能く國民政交の強味を、發揮する事が、最も必要である。義和團事件の際にしても、あれだけに、大きな騒動にせずとも、はやく軍隊を派遣して、片端から、ピシ／＼遣付けてしまへば、何でもなかつた事だ。それに就ては、支那政府としても、故障は言へないし、列國の在留民は、手を拍つて、喜んでに違ひない。それを、愚圖々々して居た爲めに、たかが一地方に起きた一揆に過ぎない、義和團の騒ぎが、あれ程までに蔓延して、慙々、決心をつけて、出兵した場合には、最早や、簡単な手段では、どうにも始末が、つかなくなつて、本式の戦さを、爲るやうな事に、なつてしまつたのだ。

支那の兵隊は、存外に弱いけれども、流石に、義和團の連中は、一揆でも起すだけあつて、多少の氣概も、あつたと見えて、却々、侮るべからざる強味があつた。けれども、日本から一箇師團の兵を、戦時編成にして繰出し、列國聯合軍の主力となつて、奮戦するやうになつては、到底支へ切れるものでなく、さしも猖獗を極めた、義和團も、遂に勢ひ谷まつてしまつた。

行く、沿道の團徒を平定して、北京城の圍みを撃破り、聯合軍が、城内に入った時は、北京の混亂は、非常なものであつた。その混亂に乗じて、各國の軍隊が、盛んに掠奪を行つた。北京城内の財寶にして、永く國寶として、保存すべき物も、多く此時に持ち去られてしまつた。英、米、獨、佛を初め、各國の軍隊が、その平生に於てこそ、文明國の軍隊である、といふて、誇つて居たのに、此際の掠奪振りは、實に亂暴なものであつた。尤も、北清事變中、各國の軍隊が、到る處で、あらゆる狼藉非行を、恣にした事は、置れもない實事であるが、これに反して、日本軍が、正しい行動を執つて居たので、支那の良民から、尊敬と信頼を、受けた事も、非常であつた。

二一

北京に於ける、外國兵の掠奪は、頗る亂暴であつたが、最初のうちは、日本の軍隊は、手を空しくして、それを傍觀して居た。ところが、その掠奪が、餘りに激しくなつて來るので、つい羨ましくなつて、少し位はよからうといふので、そろ／＼掠奪を始めたのだ。其際に、二十萬兩餘りの馬蹄銀を掠奪して、密に日本へ、持歸つた者があつた。それが後に、廣島師團に起きた、馬蹄銀事件の原因である。金高の多少に拘らず、斯ういふ事をするのは、我軍隊に於ては、最も厳しく戒められて居たのであるから、これが問題になつたのも、無理はない。

(當時の報道に依れば、北京に於ける、我軍の分捕品は、クルツ砲五門、舊式砲百門、鎗銃彈藥等無數、馬蹄銀二百五十萬兩、支米二萬石等であるが、細密の掠奪は此以外である)

序だから、述べて置くが、この義和團の事件が、端なくも、日露戰爭の原因になつたのだ。それは、此事變に就て、各國から出兵する事になつた。その機會に乗じて、露西亞は、豫ての希望であつた、滿洲の占領を企てたので、それから、日露の係争を、惹起したのであつた。義和團の事件が、落着を告げた時には、既に滿洲の要所々々に、露西亞の兵が、殆んど五萬人も、入つて居た。各國の兵隊は、事變が片付くと、同時に、本國へ引揚げたのであるが、露西

亞は、引揚げさうな様子のないばかりでなく、猶ほ其上に、本國からは、ドン／＼軍隊を、増遣して居る、といふ状態であつたから、日本では、例の七博士が颯起して、外務省に迫り、一面には、國論の喚起に、努める事になつた。七博士とは、戸水寛人、寺尾亨、中村進平、高橋作衛、建部運吾、金井延、富井政章の七人である。その中でも、戸水博士は、滿洲問題に就て、却々熱心に調査して、居たので、能く滿洲に對する、露西亞の政策を見抜いて居た。従つて、義和團の事が起きて、露國が、滿洲へ出兵した當時から、深い注意を拂つて、見て居たのである。果して、露西亞は、數多の大兵を、各所に駐屯させて、事件の落着後も、平氣で、其儘にして置く、といふやうな事情が判つたので、戸水は、他の博士を説いて、茲に七人が結束して、立つた次第である。

外務省では、七博士の運動が起きると、例に依つて、例の如く、狼狽を始めて、頻に七博士に向つて、壓迫を加へて來た。けれども、其位の事は、初めから、覺悟して掛かつたのだから、政府の壓迫くらゐには恐れず、場合によつては、大學教授の職を辭しても、此問題のために盡さなければならぬ、といふ意氣込みで、騒ぎ廻つたので、漸く世間の人も、此問題に、注意を向けるやうになつて來た。段々、調べて見ると、成る程、七博士の言ふ通りで、露西亞が、此機會に乗じて滿洲に於て、事實上の占領を、試みて居る、といふ事が判つたから、民間の論客も、一時に立つて、外務省に向ひ、その對策を、迫るやうになつた。

そこで、暢氣な、外務省も、流石に、黙つて居る事も出来ないのので、露國政府へ向つて、滿洲撤兵の要求を、始める事になつた。けれども、一度や二度の談判で、それに應ずる位なら、初めから滿洲に、手を着ける筈もなく、露西亞政府は、言を左右にして、我外務省の申込みには、更に應じなかつた。

此問題が、明治三十三年に起つて、それから、毎日のやうに相談しては、露國政府へ、掛合つて居ただが、月日は、遠慮なく経つけれども、問題は、少しも變化もなく、同じ事を、毎日のやうに、繰返して居ただ。その終局が、明治三十七年の二月になつて、平和破裂となつたのだから、其間、殆んど五年の歲月を、要した事になる。外交も

の談判といふものは、斯ういふ風に、氣の長いものであらうか。さりとて餘りに、焦れたい話ではないか。

露西亞が、滿洲へ、妄りに軍隊を、駐屯させる事の悪いのは、争ふべからざる事柄であつて、之れに對して、日本政府が、撤兵を要求するのは、當然であらう。従つて、露國としては、それを拒むべき、理由はない。さういふ事態で、あるにも拘らず、我が外務省は、五年の間、繰返し、樹合つて居たのだ。凡そ、世界に、氣の長い人も多くあらうが、我が外務省の役人ぐらゐ、氣の長い者は無からう。猿の毛が、人間の毛より、三本足りない、といふ俚諺があるが、さういふ事は、此役人のやうな者が、集まつて數へた事だらう。さうした手合ひが集まつて、何時も、對支問題などに就ても、愚圖々々、やつて居るのだから、堪まらない。

義和團の事變に就て、軍隊を繰出して、あれ丈の働きはしたのであるが、此事變に關聯して、一面に於ては、上述のやうな、對露問題が、起つて來たのだ。それも、外交官が、間抜け揃ひの爲めに、いつ迄も、愚圖々々して居た、擧句に、あんなに大きい戦争まで背負ひ込む事に、なつたのであるから、國民は、常に、外交の問題には、注意を拂つて、當局者に、ブマをさせないやうに、監視する必要がある。

さて、義和團の騒動が鎮まつて、廣島師團の兵は、歸つて來た。實際の廣島師團長は、山口素臣中將であつたが、此人は、その後、癌腫に罹つて、多く缺勤勝であつたが、翌年になつて起きたのが、即ち馬蹄銀の問題である。

四

出征軍が、まだ引揚げて、來ない前から、馬蹄銀不正分捕の話は、チラ／＼聞えて居たが、餘程、上手に押へたものか、其後は、何の噂も無かつた。それが、一年も経つてから、萬朝報に、素ッ破抜かれて、急に一般の問題となつた。實は、其前にも、地方の新聞で、大分立入つて、秘密を暴露した、といふ事であるが、新聞の勢力が、甚だ微弱であつた爲めに、一般の人の注意を、更に惹かなかつたのだ。流石に、當時の萬朝報が、續き物として、此事件を、

暴露するやうになつて、怒ち世人の視聽を、惹くやうになつたのみならず、大阪の二大新聞が、競争的に書きはじめたので、問題は、頗る大きくなつてしまつた。

名前は忘れたが、二三の日本人で、此事件に就て、検事局へ、密告した者があつた。然るに、段々、調べられた上に、彼等は、多く嘘を言ふたものとして、却て誣告罪に問はれて、牢に入れられた。そこで、彼等は、自暴自棄になつて、今まで知つて居た秘密を、すべて許したので、それが逐次萬朝報の記事になつた、といふやうな、面白い事情もあつた。

かくて、問題は、廣島を中心として、頗る大きくなつて来たので、今は、陸軍部内の一小秘密として、これを葬つてしまふ事は、とても出来ない迄になつて来た。此時に、善通寺師團長として、其椅子に着いて居た、乃木は、之れを聞いて、如何にも怪しからぬ事と思ひ、段々、調べて見ると、世間で言ふ程の事はないけれども、自分の部下から、出征した者にも、馬蹄銀を、私に掠奪した、といふ事實は、あつたので、乃木が、那の氣性から考へて、非常に慨嘆したのも、無理はない。

北清事件に際して、日本の派遣軍は、廣島の第五師團が、主となつて行つたのであるが、善通寺師團の管下からも丸龜第十二聯隊の一箇大隊が、廣島の真鍋旅團長の指揮下に、編入されて、出征したのであつた。出征軍の、多くの將校が、不正掠奪をして、其隅に、丸龜から行つた將校も、仲間入りを爲て居た、といふ丈の事であつた。然し乍ら、苟も、自分の部下の中から、かゝる濫職者を出した上は、自分も、其職に晏然として居る事が出来ぬ、といふので、乃木は、辭表を差出したのであつた。それは、明治三十四年の四月上旬の事であつた。

乃木の考へからすれば、事件は假令、自分に全然、關係がないにもせよ、少數ながら、自分の師團からも、兵隊を出して、しかも、其中には、不正分捕をした者があるのだから、其點は、自分が、是迄に部下に對する、教導の力が足りなかつた、といふ責任を、負はねばならぬ。殊に、事件後、一年も経つ間、それを知らずに過した、といふ事は、

重ねん、の不行届きて、いづれにしても、自分には、責任があるのだから、其職に安んずる事は、出来ない、といふのが、乃木の辭職を、申出た精神であらう。

(尙ほ、此の當時の事情に就て、内山散木樓といふ人の著した『乃木將軍高説百話』の中には、左の如く記してある。

『明治三十三年の北清事變には、我國にても、各師團下より兵を出さしめて之を派遣したるが、乃木大將の師團長たりし、普通寺師團よりも、同じく若干の將卒を派遣したり。然るに、變亂相果て、軍隊の凱旋したる後、帝國の面目上、誠に忌はしき問題は起り來り。それは派遣將士中、戦地に於て、金銀財寶の分捕をなして、私腹を肥したるもの、少からずとの事にて、世論囂々として沸騰し、折から開かれたる、各師團長會議の大問題ともなりて、日本國の體面を汚す、かゝる不埒者は、嚴重に取調べて、宜しく秋毫假借せざる、嚴罰を加ふべきものなりと決議し、各々歸任の上は、此方針にて調査を行ふこととなりぬ。

大將の大將たる乃木式は、此際に於ても、遺憾なく發揮せられたり。大將は、師團長會議より歸るや、時を移さず、直ちに腹心の參謀副官等を率ゐ、疾風迅雷の勢ひ以て、丸龜第十二聯隊に臨めり。かくて同聯隊より出征せる第三大隊を、嚴重取調べたるに、驚く可し、全隊の將校一同共謀して、戦地より馬蹄銀六萬兩を分捕來り、丸龜の向ふなる鹽飽島の古寺の床下に、隠匿せられあること分明しぬ。

嗚呼、此事分明したる時の、大將の胸中は、如何なりしぞ、大將、丸龜に赴任以來、正に二年、此間、あらん限りの心を盡して、部下將士の精神的訓育につとめ、其の嚴格に過ぐるとまで評されたる統御法も、偏に之れが爲めなりしに、然もあゝ、大將の苦心は、今や其の部下將士のために、此の如き非行を以て酬ひられぬ。是れ常人の常情を以てするも、能く忍ぶを得る處にあらず、況んや清廉皓潔、苟くも他の不正を働くらざるを憎むこと、蛇蝎よりも甚だしき大將に取りては、かくの如きは、正に其身を斬られ、劈かれ、八つ裂きにせらるゝよりも、尙

ほ甚だしき苦痛なりき。大將は、事の顛末を聞くや、滿面朱を濺いで赫怒し、卽座に當該將校全部の位階官職を褫奪して、それ〴〵嚴重なる處分をなしたり。

然も醜つて、他の師團を見るに、如何なればか、更に出征隊を取調ぶる様子のあらざるのみならず、殊に師團長會議に於て、最も強硬なる意見を吐きたる人が、武將として有るまじくも、前言を食みて、平氣の模様なるに大將は益々以て憤慨し、かゝる腐敗せる帝國陸軍の軍職に止まるは、潔しとせざる所なり、殊に我が統率する師團下より、斯くも多數の潰職軍人を出したるは、畢竟、自己曠職の結果にして、上、陛下に對し奉り、申譯なき次第なりとて、休職を出願し、許されて又那須野ヶ原隱遁の人となりぬ。

然も、大將の此の斷決は、決して空しく行はれたるものにあらずき。大將の隱退は、時の軍人社會に、大反響を及ぼして、遂に法官の手は、各師團の上に加はり、中にも廣島第五師團に於ては、師團長山口素臣、旅團長眞鍋斌等、家宅搜索を受け、其他多數の將士、軍法會議に附せらるゝ等、明治陸軍ありて以來、未だ曾て有らざる不祥事件、即ち當時新聞紙上に名高かりし、所謂馬蹄銀分捕事件なるものを惹起するに至れり。世人は、大將の隱退を以て、一に陸軍當局と、意見衝突の結果なりとなせるが、然も、其の衝突の原因に溯れば、實に此の如き理由存在したるなりき。

尙ほ又、乃木の部下處分に關する一説としては、丸龜から出征した軍隊の指揮者たる杉浦少佐が此事件で嫌疑を受けたので、聯隊長の齋藤徳明大佐が、屢々、乃木に向つて、杉浦の爲めに取敢したが、乃木は、肯かなかつたのである、といふ事も傳へられてある。

義を重んずる事、斯の如く嚴肅に、而も、如何なる場合にも、必ず自分が責任を負ふ事を、根本義として居る、軍人が、昇して幾人あらうか。乃木は、實に當時に於ても、軍人社會の一清涼劑であつた。尤も、乃木といふ人は、部下の一將校が、乃木の命令に背いて、それから醜した過失として、聯隊旗を失つた事さへ、一生涯、自分の責任と！

て、背負つて居た程に、立派な魂を持つた、人であるから、馬蹄銀事件に就ても、自ら責任を負ふのは、乃木としては、或は當然であつたかも知れないが、通常人としては、却々出来る事ではない。

五

全體、乃木の氣風といふものが、さうした嚴格なもので、あつた爲めに、陸軍部内には、存外に、乃木を、喜ばない人が、多かつた。昔からの諺にも『水清ければ魚棲まず』といふ、事もある通り、餘り清廉硬直の人は、却て、其時代には容れられないで、後世になつてから、光りを放つものである。

乃木は、年金廢止論者であつた。軍人が、俸給を貰つて、國家から養はれて居るのは、要するに、戦争が始まつた時に死んでくれ、といふ意味であるから、愈々、戦争になつて働いたから、といふて、それが爲めに、特別の年金を貰ふのは、餘計な事である。又、武士といふものは、貧乏して居てこそ、値打があるので、生活が豊て、贅澤を覺えるやうになつては、武士の本領、といふものは無くなつて了ふ。軍人は、軍人らしい一生を送れば、よいのであるから、餘分の金を、貰ふには及ばない。斯う言ふて、頻りに主張した。けれども乃木一人の主張では、年金を廢する譯にも行かず、又乃木だけには、それを與へない、といふ事も出来ないから、その主張は乃木の思ふやうには、ならなかつた。

且又、乃木の此議論には、何時も、賛成者が少なかつた、といふて、表面で、反對論を、唱へる者もなく、有耶無耶のうちに、葬られてしまつて、陰になると、乃木の悪口を、言ふ者がある、といふやうな譯で、結局、問題にならなかつた。

それならば、乃木は、口でばかり、潔白な事を唱へて、實際に於ては、金を欲しがつたか、といふと、決してそんな事はなかつた。その證據には、殉死の後を、整理した時に、家には、一文の餘財もなかつた。若し、年金の廢止論

は唱へたが、調べて見たら、銀行の預金帳が、二冊も三冊もあつた、といふやうな事では、平生の潔白な議論は、世を欺く、手段であつたとも、言へるが、乃木の死後に於いては生前に、澤山貰つた金が、一文も無かつたのだから、その高潔は、察するに餘りあるのではないか。而かも、其金は、平生、多くの人の爲めに、費して居た、といふ事實から、考へて見れば、乃木の精神は、どこ迄も、高明であつたに違ひない。

此心を以て、馬蹄銀事件を見るから、乃木としては、どうしても、自分が、晏然として居る事は、出来なかつたのであらう。そこで、陸軍省でも、遂に乃木の辭意を容れ、五月二十二日を以て、第十一師團長の職を解き、休職の身分となつたのである。これが、三度目の辭職で、それから後は、那須野が原に行つて、一個の老農として、田園の生活に、安んずる事になつた。

(馬蹄銀不正分捕事件の中心人物たる、眞鍋少將は、三十五年六月二十一日に休職となつた)

日 露 開 戦

日露の平和が破れたのは、明治三十七年の一月三十日であるが、その問題の起つたのは、三十三年の義和團事件の當時からであつた。

明治二十七八年の日清戦争が、和睦になつて、日本は、支那から、遼東半島を、割譲させる事にした、との假條約が交換されて、李鴻章は、國へ歸つた。此上は、批准の交換が濟みさへすれば遼東半島と、臺灣が、日本の領有に、歸する譯であつた。所が、露國の策動から、突然、意外な問題が起つて、遼東半島は、支那へ、還附する事になつた。抑も、露西亞政府は其以前から、旅順口を、目がけて居たのだ。露國は、あれだけの大きい領土を、持つて居りながら、北方の寒い所に、支關口は在つても、南の暖かい方面には、自由に出入し得る、良港を有つて居ないので、多年、之れに苦んで居た。その結果として、到頭、滿洲の一部を、支那から、割いて取つて、西比利亞を、南へ、一直線に下つて、あの浦蘆斯德へ、出るやうにしたのだ。

されば、浦蘆斯德は、露西亞のためには、唯一の支關口である。けれども、此一つ位では、亞細亞の東に向つて、その野心を逞しくすることは、出来ないのだ。一年のうち三分の二は、氷の爲に、鎖されて居る港であるから、東洋艦隊の根據地としても、甚だ不充分を、感じて居た。そこで、東洋に、然るべき良港を得たい、といふ希望を、有つ

て居たのである。

然るに、日清戦争の後に、遼東半島が、日本の領土になる、といふ事を聞いて、是は、容易ならぬ一大事である。遼東半島の一角には、旅順口があるのだから、是さへ、支那政府のものにして置けば、何時か、一度は誤魔化して、自分のものに爲る事は出来るが、日本に入つては、到底、自分のものにはならぬ。さうして見れば、永久に、露西亞は、亞細亞の東に、海軍の根據地を、有つ事は出来ない、といふので、それから、支那政府を煽て、遼東半島を日本へ渡さぬやうに、策を講じたのだ。即ち、獨逸、佛蘭西の二國を説いて、三國同盟なるものを作り、三國政府から、日本政府へ忠告すると、稱して、一種の脅迫を、加へて來た。

東洋の平和の爲に、支那政府と戦つて、朝鮮の獨立を、保障する事は、當然であるにしても、遼東半島を、支那から奪ふ事は、長く支那の恨みを遺す原因となつて、それが爲に、將來、日支の間が、穩かに行かぬに、極まつて居る。従つて、東洋の平和を破る、禍根を残す事にも、なるのであるから、日本政府にして、眞に、東洋の平和を希望するならば、宜しく遼東半島は、好意を以て、支那政府へ、還してやるが可からう。若し、それを肯じない場合には、三國政府としても、決心する所がある、といふやうな事を、言ひ込んで來た。それと同時に、十數隻の軍艦を、佐世保方面に出動せしめて、盛んに大砲を向けて、威嚇を始めた。

日本政府も、清國と戦ふて、疲れて居る矢先ではあり、三國同盟の海軍に對して、充分の戦鬪力を、持つて居なかつたのであるから、口惜しい事ではあるが、遼東半島は、支那政府へ還付する、といふ事にしたのである。

然るに、露西亞は、明治二十九年に、突然、支那政府を威嚇して、旅順口を、二十五年間の約束で、租借してしまつた。其事が發表されると、第一に、抗議を申込んだのは、英吉利政府であつたが、是れとても、強て露西亞の旅順租借を、妨げようとはしないで、それを口實に、何か、自分の方でも、利權を得よう、として、八釜しい事を、言ひ込んだのであるから、遂に、威海衛を租借し、大連も、自由港にする、といふ條件を以て、旅順の租借は、承認して

しまつた。

そこで、露西亞からは、ベルナンデ將軍が、やつて来て、二億萬留の豫算で、十年計畫の下に、世界無比の要塞を、築く事になつた。それが、懸て、滿洲問題から、日露の間の、平和が破れて、戦ひとなつた時に、我軍が一番苦んだ、旅順の要塞となつたのである。

一一

日清戦争が済んでから、軍備擴張の案が、議會へ提出された。其時には、自由黨をはじめ、民黨が聯合して、盛んに擴張案に反對したのであるが、或は、此問題の爲に、議會は解散をされるだらう、といふ迄に、競詰た争ひになつて来た時、其頃の自由黨に、總務委員をして居た、河野廣中が、何かの要件で、川上參謀本部長を、訪ねて行つたが、其際に、川上が、河野に向つて、斯ういふ事を説いた。

『自由黨は、軍備擴張に、反對して居るが、十年の將來を推測して、深く考慮を、拂つて貰ひたい。今後、十年經つて、此擴張案が、どれ丈け、我國の利益になるか、といふ事は、今俄かに、説明は致し難いが、自分の見込を以てすれば、今に於て、是れを爲して置かなければ、十年後に至つて、臍を噛むも、及ばざるの悔があらう、と思ふ。露西亞政府が、滿洲に、涎を流して居る事は、随分、長い事であつて、今後、西比利亞鐵道の開通と、同時に、その野心は、益々甚だしくなつて来て、遂には、我國に取つて、大なる脅威とも、なるであらう。又、滿洲の利權に、露西亞が、手を伸して來れば、すぐに我國の利害に、關係を及ぼすのであるから、彼れが、餘りに甚だしい事を爲て來れば、我國は、それに向つて、抗議を申込まなければならず、其結果として、或は、開戦する場合に、なるかも知れぬ。』

其時になつて、今日の陸軍の有様では、到底、問題にならないのであるから、どうしても、今の中に、充實させて

置かなければならぬ。就ては、世間へ、廣く傳へるのは、慎まねばならぬ事柄であるが、陸軍省の計畫の、秘密を打明けて、君に相談する次第であるから、どうか、自由黨の纏まりをつけて、此議會に於て、擴張案が、無事に通過するやうに、盡力して貰ひたい。」

と、段々、話込まれて居るうちに、河野は、幾分か、川上の請を容れて、擴張案の一部だけは、承認しようか、といふやうな、考にもなつた。其容子が見えたので、川上は、更に、露西亞が、西比利亚に對する、軍備の有様から、我陸軍の之れに對する、擴張計畫の秘密まで、悉く打明けて、証據書類なども示し、充分に説明をしたので、河野は、

『どういふ譯ならば、本部へ歸つて、一應、相談して見よう』

と、答へて、歸つて來た。その翌日は、總務委員の臨時會を開いて、河野が、川上から、聽いて來た事を傳へた。そこで、總務委員が、更に川上を訪ふて、陸軍擴張に關する、内面の事情を、聽取する事になつた。その結果、自由黨は、能く諒解したので、遂に軍備擴張案は、議會を通過する事が出來た。當時、自由黨は、政府の爲に、買収されて變節した、なぞと、噂を立てられたが、實は、斯うした経緯が、あつたのだ。

擴張案に關して、もう一つ、是に似た、面白い話があつた。郵船會社の近藤廉平が、實業家を代表して、川上を訪ね、軍備擴張の中止を、陳情した。此際に於て、軍備の擴張なぞをされて、増稅案が、出て來るやうな事になると、國民の困難は、非常な譯であるから、是非共、これは中止して貰ひたい、と、いふ事を申込んだのである。其時に、川上は、ニツコリ笑つて、

『近藤さん、君は、金があるのだから、我輩は、一切に勸告する次第であるが、これから直ぐ、莫斯科へ行つて、それから西比利亚鐵道に乗つて、浦羅斯德へ出て、日本へ歸つて、來給へ。それだけの旅行をして、歸られてから、君の議論を、聞いた上、我輩も、或は此案を、撤回するかも知れないから、兎に角、先づ行つて來る事にしては、何

うか』

『ハ、ア、どういふ譯で、そんな事を、仰言るのですか』

『まア、宜いから、行つて來給へ。さうすれば、君の議論が良いか、我輩の擴張案が悪いか、それが直に、極めるのぢや』

近藤は、熟々考へたが、どうしても、その理由が解らない。斯ういふ場合になると、金のある者は、自由が利くので、直に旅装を整へて、露西亞へ出掛けた。一通りの視察を終つて、歸りに、西比利亞鐵道に乗つて、浦鹽斯德へ出て來た。それから、日本へ歸つて來ると、何と思つたか、近藤は、直に、川上の邸を訪ね、

『今、歸つて來た所ですから、支關先で、御免蒙る』

と、言ふて、川上に、出て貰つた。川上は、悠然と、支關へ現れて、

『ヤア、近藤さん、歸つて來られたか』

『只今、歸りました』

『ウム、解つたかね』

『何とも申しませぬ。恐れ入りました』

『それぢや、擴張案に、賛成ですか』

『え、賛成は出來ないが、異存は申しませぬ』

露西亞から、歸つて來てからの近藤は、實業家の不平を、宥める役目に、替つたのだから、面白い。

川上が、何故、近藤に向つて、西比利亞へ、行つて來い、といふ事を勧めたか、といふと、一目見れば、西比利亞鐵道が、既に軍事上の設備に、なつて居り、他日、滿洲に、大兵を送つて、大に其野心を逞しくしようとする、用意である事は、すぐ解るのだから、百聞は一見に如かずの諺通り、本人に、それを見せるのが、一番早く、問題を理

解させる所以である、と、考へたからであつた。

三

近藤は、露西亞から、歸つて來ると、何しろ、實地を見て來ただけに、斯ういふ譯なら仕方がないから、軍備擴張は、或程度までは、爲なければならぬ、といふ考へになつて、今迄の反對論を棄て、しまつた。斯ういふ風に、追々、國民の中にも、理解する者が、殖えて來るし、また、議會では、前にも云ふた様に、自由黨が諒解したので、川上將軍の計畫に係る、陸軍擴張案は、單に一箇師團を減せられた丈けて、議會を通過する事が出來た。

今日になつてから、思へば、那の際に、此擴張が、出來て居なかつたなら、或は日露戰爭は、起し得なかつたかも知れぬ。又、厭でも、戦はねばならぬ、といふ場合になつたら、懸々となつて、敗戦したかも知れない。それを思ふと、川上將軍の擴張案は、先見の明があつて、爲したものと云へる譯だ。

扱、露西亞の野心が、漸く眼に餘るやうになつて來て、滿洲問題は、我國民の間に、八釜しくなつて來た。戸水博士は、兎に角、滿洲問題では、立派な先覺者として、政府を勵かし、また時の人に、警告を與へてくれた第一の功勞者であつた。

滿洲問題は、盛んに沸騰して來ても、當時の外務省は、例に依つて、例の如く、一向、目先も見えなければ、膽玉も無いやうな、頼りない態度であつた。全體、如何なる問題に對しても、確固たる方針が、一度、國際上の大問題が、起きた時には、右に、左に、首を振つて居るばかりで、少しも、足を進める事は、出來ない。その中に、時機を失つて、どうにも仕様がないうやうな、破目に陥つてから、國民が、憤慨して騒ぐ、といふのが、毎もの例であつた。さうした状態を、常に繰返して居た、外務省も偉いが、問題の起る毎に憤慨して、外務省を罵る國民が、問題は無くなる、と水を掛けられた消炭のやうになつて、外務省の外の字も言はなくなる。何方が偉いのか、ちつとも分らない。それ

が、外務省と、國民の從來の對照であつた。

外務省が、幾ら愚圖々々して居ても、露西亞が、滿洲に對する兵備は、ドン／＼進んで行く。如何に秘密にすればとて、隠し了せないのは、軍備擴張である。大砲なんぞを、ズル／＼引張つて歩いたり、砲臺なんぞを、他の國內に築造する。それが、秘密に出来れば、世間に表面のものは、殆ど無い位のものである。露西亞は、そんな事を、平氣でやつて居るのだ。そこで優柔不斷の、外務省も堪らなくなつて、嚴重な談判に及ぶと、幾分の要求を容れて、滿洲の兵が減るから、それで、安心の胸を、撫で下して居ると、他の方面に向つて、今、退けた倍數の兵隊が、這入つて居る、といふやうな、事實もあつて、何うにも仕様が無い。彼是する中に、國民が承知しなくなつて、段々志士論客が、嚴しい議論を、爲るやうに、なつて來た。明治三十六年頃には、大分問題が難しくなつて、今にも、破裂しやうな噂が、あつたけれども、何時しか消えて、滿洲問題は、永久に解決の出来ないものであるやうに、一般の人から、思はれるやうになつて、しまつた。

所が、各黨派の人が集つて、對露同志會と、いふものを造り、非常な硬論を唱へて、輿論を喚起しよう、と圖つた。國民にも、滿洲問題の内容が、解つて來た時であるから、民心は、對露同志會に向つて、傾いて來る、といふやうな譯で、其代表者が、屢々、當路の大臣を訪問して、嚴しい理窟を言ふ。それ等の刺戟も、確に効能があつたらうが、又、露西亞が、高を括つて、日本政府を、馬鹿にして居た、といふ遣方も、幾らか神經の鈍い、我が外交官を、刺戟する事になつて、滿洲問題は、切迫して來た。三十六年の秋頃になると、もう平和の見込は無い、といふまでに、セツバ詰つて來た。小石川の砲兵工廠が、盛に兵器の鑄造を始め。海軍の方では、軍艦の下調べをする。其の他軍需品の註文が、續々出て來る。さういふ事が、一般の人心を、刺戟して、何處へ行つても、開戦論より外に、耳を貸す者は、無い様な狀況に、成つて來た。

四

明治三十七年の一月三十日に、日露の平和は、破裂した。其前後に、御前會議は、幾度か開かれ、又、軍事參議官の組織も成り、海軍に對しては、自由行動を執つて差支なし、といふ御沙汰が、下る事になつた。何時か、佐世保の軍港には、聯合艦隊の組織も成つて、東郷平八郎が、總司令の任を承つた。二月三日には、露國公使のローゼンが東京を引拂ひ、同時に、露都に居た、栗野公使も、引揚げて来る。公使館が、國旗を捲いて、公使が、引揚げる以上は、宣戰の布告は無くとも、開戰状態になつたのと、同じ事である。

扱、馬蹄銀問題で、自ら進んで、責任を負ふた、乃木將軍は、那須野ヶ原に引籠つて、一個の老農として、野人の生活に、安んじて居たのであるが、日露の風雲が、漸く急を告げて、遠からず、開戰に決する、と、知つた時は、流石に、焦慮せずには居られなかつた。

『失策つた。こりや、辭職をするのぢやなかつた。一生の失策を、やつた哩』
と言ふて、嘆じたといふ事であるが、げに然もあらう、と察せられる。那須野から、親友の石黒忠應に送つた、乃木の和歌を見れば、其邊の心持は、よく解る。

埋れ木の 花さく身には あらねとも 高麗もろこしの 春そ待たるゝ

といふのであるが、これに對して、石黒からは、

埋れ木に 咲くはさくらの 花ならて 高麗もろこしの 雪にそあるらむ

と、返歌を送つた。すると、乃木は、更に、

雪ふれは 枯木も花は さくものを うもれ木のみそ あはれなりける

と、返して居る。其位であるから、千載一遇とも言ふべき、日露の開戰を、眼の前に控へて、乃木が、其身の休職に

なつて居た事を、残念に思つたのは、無理もない所である。殊に、明治十年に、聯隊旗を、失ふた責任を、一身に擔つて、爾來、己れの死所を、求めて居た、乃木が、世界第一の強國と稱せられる、露西亞と開戦する、といふ場合に休職となつて居たのだから、本人としては、どれ程、遺憾であつたか、解らない。

尤も、二月五日、勳員令の下つた日に、乃木も、本職を復されて、留守近衛師團長を仰付けられたから、現役の身にはなつたけれども、要するに、留守居仕事を言付けられたのだから、悶々の思ひは、同じ事だ。そのうちに、愈々、戦端が開かれて、仁川、旅順の第一回海戦は、非常なる奇捷を博し、世界の各國を驚かす、と同時に、東郷大將の令名は、中外に、轟き渡つた。其結果、木越安綱は、旅團長として、豊前小倉の兵を率ゐ、仁川から、上陸して、忽ち鴨綠江の架橋工事を了り、五月一日には、黒木大將の率ゐる、第一軍が、此橋を渡つて、九連、鳳凰の二城に、敵を粉碎し、陸軍も亦、海軍に劣らざる、大捷を博する事になつた。引續いて奥將軍は、旅順方面へ、又、野津將軍は、中央軍を率ゐて、滿洲へ直行するのであつた。

戦機、一たび動いて國民は愈々熱狂するばかり、征露の歌は、津々浦々の果までも、吟誦されるやうになつた。初めは強て、平靜を裝ふて、那須野ヶ原に、鋤鋌を執つて居た、乃木も、風雲の急を聞いては、忍耐を、爲る事が出来ず、東京へ、出掛けて來たのであつた。那須野ヶ原の眞中に、百姓をして居てさへも、忍耐の出来ないものが、赤阪の邸へ來て、喇叭の音を、聞くやうになつては、尙更ら、忍耐の出来る筈はなく、況んや、留守師團にもせよ、生きた兵隊の統率をする事になつて見れば、愈々以て、實戦に行きたくなる。乃木が、毎日、入齒を噛んでは、武運の拙きを、口惜しがつて居たのも、無理はない。其頃、岡澤侍從武官長を訪ねて、二首の和歌を示した事があるが、乃木の胸中は、それに訴へられて居るやうに、感ぜられる。

花をまつ 身にあらねと 高麗の海に 春風吹けと 禱るものかな
 埋れ木の 花咲時は なき身にも 高麗唐土の 春そまたるゝ

第二の歌は、石黒に送つたのと、大體同じであるが、第三句が異つて居る。いづれにしても、其意は同様であつて、當時の乃木の精神を察するには、絶好の資料である。

我陸軍からすれば、實戦に於て、あれだけの力を、有つて居る、乃木のやうな勇將を、空しく遊ばして置くなど、といふ事は、出来るものでない。況んや、大元帥陛下が、深く、乃木の忠勇を、御承知なされて居る。果然、五月に至つて、乃木に對して、參内すべき御沙汰が下つた。晴の參内は、二日の事であつたが、その前晩に、兒玉源太郎が訪ねて來て、

『オイ、乃木、喜べ。明日の參内は、有難き御沙汰が、あるらしいぞ』

『フ、ム、さうかな。併し、留守居を仰付かつた俺ぢやから、外に人が、多い限り、出征する事は、出来まいよ。大方、留守向の事で、何か授けられるのぢやらう。それでは、腕の振ひやうも無いからな』

『イヤ、さうでない。意外な、大命が下るやうに、仄に承つて居る。己も、明日は、御前へ出るのぢやが、御互に、今夜は、樂みて寝られぬ哩』

『さうぢやな』

兒玉の元氣に對して、普通の應答はして居るが、乃木は、何となく、氣乗がして居ない。それは、今の言葉の中にも、あつた通り、自分は、どうせ、内地守備から、離れる事にはなるまい、といふやうな、考へがあつたから、それで、氣がはずまないのであつた。

『併し、乃木、今すぐ戦地へ、廻されずとも、追々、その場合が、來るのぢやから、今の内は、それを樂みにして居られるといふものぢや』

『イヤ、さうでない。俺なぞへ、番の廻つて來るまで、露西亞が保つまい、と思ふからな』

『豈夫、それ程弱くもなからうから、今度は恐らく、戦さらしい戦さになるだらう。まア、御互に、しつかりやら』

うよ」

『ウム』

それから、色々面白い話をして、兒玉は、歸つて行つた。

五

今日は、陛下の御前へ、罷出る當日である。平生は、極めて質素な、乃木も、今日ばかりは、正装して、宮中へ伺候する事になった。色々、御前へ罷出ると、意外千萬なんと、留守師團長の職を解かれて、出征第三軍の司令官に任ずる、といふ御沙汰が下つた。即ち旅順包圍軍の、總指揮官たるの役目は、これで乃木の双肩に落ちた譯である。乃木は、固よりは是れ程に、重大な任命とは、豫期して居なかつたにも拘らず、斯ういふ有難い、御沙汰が下つたのであるから、たゞ感涙の外はなく、何と御答への言葉も、出なかつた位である。

引續き現役の中將が、數多くあるにも拘らず、休職から復して、幾程もなき、乃木を抜擢して、斯の如き、大切な御役を授けられた、といふのは、全く乃木の人格が、夙に、陛下の御胸にも、止つて居たからに違ひない。それから、もう一つ有難い事は、總て斯くの如き、任命については、奏請の事があつてから、後に行はれるのであるが、此時の任命に限つては、陛下より、御沙汰が出て、行はれたのであるから、斯やうな事は、殆ど例の少い事であつて、乃木としては、唯此一事に於ても、其譽は、一通りてなかつた。滿腔の感激を抱いて、六月一日に、宇品を出發した乃木が、征途に就いて六日目には、陸軍大將に進められた。重ねくの歡喜、察するに餘りあらう。

明治天皇が、聰明に渡らせられた事は、今更言ふまでもないが、平生に於ても、臣下の賢不肖に就いて、御留意遊ばした事は、又一通りでない。何んなものでも、能く區別を遊ばして、御心に止めさせられたものである。されば、乃木に對する、御信任の厚いのも、全く其人格が、觀慮に副ふて得た、といふ事になるのだ。

大山巖は、滿洲軍の總指揮官、兒玉源太郎は、總參謀長といふ、榮譽ある御沙汰を、拜承した。三人の喜びは、固よりの事であるが、乃木の喜びは、更に一段と深かつたらう。那須野ヶ原の一老農として、朽る外なく、今度の戦争でも、出征は覺えないもの、と殆んど諦めて居たものが、此大命を拜する事に、なつたのであるから、乃木の喜びの深かつたのも、無理はないのである。

其歸りに、參謀本部へ廻つて、それから、赤坂新坂町の邸へ、歸つて來た。今では、乃木坂と、稱へは變つたが、其頃には、未だ幽靈坂といふて、何となく不氣味な坂であつた。登り切つて、右の方へ廻はると、乃木の邸がある。明治三十五年に新築した家屋であるが、極めて質素な一構へで、門柱は立てゝあるが、扉が無い。晝夜開放しの、不思議な屋敷であつた。自分の住むべき建物は、燒家の極く粗末なものだが、馬小屋は煉瓦造で、極めてハイカラなものである。斯ういふ點は、人の氣の付かぬ所で、乃木の軍將として、優れて居た所であらう。

未だ、開戦とならぬ前に、乃木は、那須野ヶ原を出で、此邸に歸つて來た。愈々戦争となつて、長男の勝典は、第一聯隊の小隊長として、早く出征したのであるが、程なく、負傷した、といふ通知を得た。幾ら氣丈でも、靜子は、女性のものであるから、稍々心配の色を浮べて、

『勝典が、負傷をしたさうでございますが、生命に別條は、ありますまいか』

暫く黙つて居た、乃木は、靜子を、ぢつと見て、

『若し生命に、別條があつたら、何と致すつもりか』

流石に、靜子は、答へが出なかつた。その後、勝典は、死んだといふ通知が來た。

『靜子』

『ハイ』

『勝典は、死に居つた、さうぢや』

『何と仰やいます。勝典が、死にましたか』

静子の眼には、涙の露が宿つて居た。

『マア、喜べ、勝典が南山の激戦で死んだ、といふのぢやから、是で、伴も御役に立つた、といふものぢや』
如何にも、安心が出来た、といふやうな態度で、更に愛子を失ふた、といふ哀みは、見えなかつた。如何に、剛氣な乃木でも、愛子を失ふた悲みは、固より深かつたに違ひないが、それを堪へて、國家の御爲になつた、といふ事を喜んで、涙を隠して居る、其心のうちの辛さは、想像するに餘りがある。

金州半島へ乗込んでから、旅順の背面に向ふべく、南山を、通過する時に、計らずも勝典等の墓標が、立つて居る所を、横切る事になつた。其際に、老將軍が、夕陽を浴びて、墓標の前に立つた光景は、當時、隨行した者が、何時も涙と共に物語る所であるが、流石の乃木も、感慨に打たれたものと見えて、手帖の端へ、鉛筆を以て、走り書に、一詩を認めた。

山川草木轉荒涼

十里風腥新戰場

征馬不前人不語

金州城外立斜陽

此二十八字の中に、愛子を失ふて、涙こそ出さなかつたが、悲哀の情は、溢れて居るではないか。

六

今から考へると、あの戦争の始まつた、當時の騒ぎ、といふたら、實に素破らしいもので、戦死者の葬式なぞは、お祭のやうな騒ぎであつた。尤も、戦局が段々、擴大されるに就て、出征者も多くなるのであるから、其位にして、氣勢を揚げて置かなければ、ならなかつたかも知れないが、多くの中には、随分、氣恥しいやうな騒ぎをして、葬式か、祭禮か、別らないやうな事も、遣つたのである。軍人の後援をする會も、前から出来て居たが、此の開戦に就て、

新に様々の會が組織され、東京市内の十五區、到る處に、それ々の、事務所が出来て、町内の者は、交代に詰切るといふやうな譯で、平生ならば、差擔ひて人知れず葬式を出すやうな者までが、區長首め、區内の名譽職の者が見送をして、盛大なる葬儀を行つた。かういふ事で、幾分か、遺族も氣晴しが出来る、といふやうな、點もあつたのだ。然し、それが段々、激しくなつて來ると、一種の虚榮心に驅られて、金のある者は、なか／＼區内の人に、委せて置く事は出来ないで、有る限りの、力を盡して、華美な葬式を出して、それを一種の誇りと、するやうな事に、なつて來たので、果は、識者が、之を憂へて、戦後の事を考へて、餘り奢侈に、流れるやうな葬儀は、謹んだ方が宜からう、といふ議論も、出て來るやうになつた。

殊に、乃木は、さうした事が、大嫌ひな人であつて、伴の勝典が、愈々戦死した、といふ通知があつても、更に華美な、葬式を出す、と、いふやうな考へも無く、遺物が着いて、葬式を出すやうに、なつて居ても、そんな仕度を、する様子もなかつた。所が、乃木が、旅順包圍軍の總指揮官になつた、と、いふ事が、新聞の號外で、それからそれへ傳ると、區内の者が、騒ぎ出して、何うせ、將軍の出征も、間近いのであらうから、其の前に、勝典氏の葬式を、出してしまはうと、いふ事になつて、或日、乃木の邸へ、區長首め、有志の者が集つて、相談する事になつた。

乃木は、參謀本部から歸つて、座敷へ這入ると、静子が、
 『御歸り遊ばせ。今日は、宮中の御首尾も好いやうに、拜承いたしました。豫ての御望みが叶ひまして、出征の期も近づき、洵に結構でございます』

『ウム、喜んで呉れ。愈々出陣も決つて、旅順包圍軍の總指揮と、いふ事になるのぢや。それに付けても、聖恩の辱けなさを、忘れてはならぬぞ』

『ハイ、此上の有難い事はござりませぬ』
 乃木は、俄に氣の付いたやうに、頻りに周圍を、見廻して居たが、

「大分、支關に下駄の數もあつた、人の話聲も聞えるが、こりやア、何か始まつたのか」

「ハイ、唯今、區長さんを首め、有志の方々が、御都合でございまして、伴の葬式に就て、御相談がございませう」

「何ぢや、伴の葬式、……それを、何うしようと、いふのか」

「區内で、戦死いたしました者も、大分ございませうが、未だ葬式の出してないのは、勝典一人でございませう。此度、

郎君が、此大役を御受け遊ばした、といふ事が、新聞で判りましたので、御出征前に、葬儀を出さう、といふので、御相談が始まつたので、ございませう」

「誰が、頼んだのぢや」

「別に、誰も御頼みは致しませぬが、さういふ事に、區内の方が、御心配下さるので、ございませう」

「何故、御断り申さぬのか」

「折角の御心配で、ございませうから、まさか、御断りする譯にも参りませぬので、控へて居りました」

「馬鹿な事を言ふな、伴の葬式を、親が出さんで、誰が出すのか。勝典は死んでも、保典は、未だ生きて居る。保典

が死んでも、俺の生きて居る間は、葬儀を出す事は許さぬ。澤山の國民の子を、預つて行く、俺が、伴の葬儀を、

先に出しては相済まぬ位の事は、貴様にも、解らぬ事はなからう。何故、断りを言はぬ」

乃木の聲が、餘りに高かつたので、一同へ聞えた。集まつて居る者は驚いた。

「それだから、この家の事丈は、別にして置かう、といふのを、君達が背かないから、斯んな事になつてしまつた。

僕は、御先へ御免蒙むる」

「オイ、御談ぢやないぜ。俺達を、居残りにして行つちや困るぢやないか。歸るなら一緒に歸るから、マア、待

ち給へ」

と、先を争ふて、コソコソ逃げるやうに、歸つてしまつた。

(勝典は、三十七年の五月廿七日に、南山の戦ひで死んだのであつて、乃木が、其報知を得たのは、東京を出發して後の事であつた。従つて、本章中、之れに關聯した物語は、事實と矛盾して居るけれども、要するに、乃木の精神を、特に躍如たらしむるために、潤色を取つたものである。讀者幸ひに、之を諒せよ)

七

之を要するに、乃木は、意氣の人であつて、智の人ではなかつた。軍將としては、最も野戦に、長じて居て、要塞の如きは、餘り得意でなかつたが、一般の老將のやうに、現在の位地に甘んじて、新知識の仕込を怠る、といふやうな、迂濶な人ではなく、讀書力の強かつた人であるから、常に新しい、軍書を見て居て、最新の要塞戰に對する、知識の如きも、一通りはあつたのだ。併ながら、如何に、要塞戰の知識が、深い人であつても、旅順要塞の如き、恐るべきものを攻めに行く、軍隊としては、餘りに兵器の力が、微弱であつた。聞く所に依れば、攻城砲の如きも、あの要塞に、相當するものは無かつた、といふ。現に、南山の役に於て、敵が用ひた、重砲の如きは、我軍に、一門も無かつたのだ。僅に敵が、遺留して行つた、重砲が二三門、手に這入つたので、それが、遼陽戰の役に立つて、盛に撃出した爲に、敵は、日本にも、斯の如き重砲が、あつたのか、といふて、驚嘆したといふ事であるが、其實は、敵が置いて行つた、重砲を、一寸拜借して、間に合はせた、といふやうな譯で、なかく、要塞戰に、必要とする兵器は、満足に備はつては、居なかつたのである。殊に、要塞防禦の研究が、段々、進んで來て、昔は、セバストポールの要塞を以て、世界一として居たのであるが、旅順の要塞に比べては、逆も比較にならぬ位に、規模の小さいものである。茫々たる百里の原野に、大兵を率ゐて、其輸贏を争ふ、といふ場合にも、戰術上の知識は、必要であらうが、要塞戰に於ては、特別の攻撃準備と、知識を要するのである。獨逸の戰術家のポーベンと、いふ人の、要塞攻撃に就ての説に依ると、總て要塞に對する、攻撃軍は、之を防止する者に對して、歩兵が六倍、砲兵が十二倍、騎兵が二倍、

工兵が三十倍、それだけに、敵に倍加する實力を、有つて居なければ、要塞を、陥落させる事は、出来ないものである、といふて居る位だ。當時の旅順戦に就て、果して、それだけの兵力を有つて、我軍が進んだか何うか、といふ事は、敢て黒人の説明を待たずとも、明に判るのである。乃木は、即ち此原則に、副だけの兵力を以て、進んだのではないから、其陥落に、最も苦心した、といふのは、無理の無い事であつた。

日清戦争の後に、露國皇帝の戴冠式が行はれた。其際に、李鴻章は、清國皇帝の名代として、露國へ乗込んで行つたが、日本との競争で、一旦、條約の上で、失ふた旅順を、露西亞政府の力に依つて、取返して貰つたといふ關係から、露西亞政府が、李鴻章に、壓迫を加へて、此時に、二十五箇年の租借權を得たのである。清國政府では、豈夫に、之を承認しては、居なかつたが、李鴻章が、其處まで取極めて來た後に、正式の談判があつて、到頭、否認なしに、旅順港は、露國へ、二十五年間、貸渡すといふ事になつた。それから、露國で有名な、ベルナンデ將軍が、十年計畫で、二億留の金を要して、設備に掛かつたのが、旅順の要塞である。金力と、勞力と、學術の力と、此の三つを、惜氣もなく使ひ切つて、難攻不落の要塞が、出來上つたので、それを陥れるには、之れに相當する力を以て、當つて行かなければならない。其の實力を有たずして、此方面に向つたのであるから、如何に、我國民が、旅順陥落の祝捷をなすべく、お祭の仕度をして、待受けて居ても、なかく、陥落の號外は、出なかつたのだ。

之に反して、他の方面に於ては、毎日のやうに、大勝利の號外が出るので、果ては、乃木軍の實力を疑ふて、旅順は、遂に陥落せずに、戦ひは終るのでは、なからうか、といふ位にまで、疑ふ者も、出て來たのである。甚しきに至つては、乃木の戰術の知識が、既に舊式であつて、逆も、斯かる要塞戦には、役に立たないものである、といふやうな、惡聲まで放つ者が出るやうに、なつて來た。けれども、それは、全く包圍軍が、何れだけの力を、有つて行つたか、といふ事を、考へずに批評したのであつて、正當を得たる、批評とは言へないのだ。要するに、乃木の旅順要塞に向つたのは、貧乏籤を引いたのである、といふ一言を以て、批評し去るのが、至當であらう。

旅 順 攻 圍 軍

一

奥大將が、南山に激戦して、大勝別を博したのが、五月二十六日であつた。其戦ひに於て、乃木の長男、勝典は、戦死を遂げたのである。奥軍の組織は、東京の第一師團と、大阪の第四師團と、名古屋の第三師團、之を合せて、一軍團としてあつた。然るに、南山の役を終つてから、旅順攻圍軍と、いふものが、別に組織される事になつて、乃木が、其指揮官を命ぜられる、と同時に、奥は、第三第四の師團だけ率ゐて、滿洲の方面へ、進む事になつた。残る第一師團は、伏見宮殿下が召還されて、大本營附となつたので、第一旅團長であつた、松村務本が、中將に進んで、其師團長を襲ふ事に、なつたのである。それへ、金澤の第九師團、善通寺の第十一師團を加へて、一軍團を組織して、取敢ず旅順の背面攻撃に、着手する事になつた。戦ひの進むに従つて、旭川の第七師團と、弘前の第八師團が、増援隊として、之に加り、都合五個師團になつたから、殆ど十二万人以上の、大兵を以て、包圍戦を開く事に、なつたのである。

此場合に、各師團長が、如何なる人であるか、といふ事を、簡単に紹介して置く。

第一師團長の松村は、加賀の前田の舊臣で、父は、御膳番を勤めて居た。松村は、擊劍の達人で、人物も、極めて好かつた。南山の戦ひに、敵の聯隊長と、一騎討の勝負をした際に、覺えの業物を振擧げて、唯一刀に斬斃した、と

いふやうな事もあつた。機械の力を専門とする、文明の戦ひに、珍しい一騎討の勝負をやつて、人の視目を集めた事などは、實に面白いが、惜いかな、旅順陥落の後、強烈な酒を、餘り多量に飲んだのが原因となつて、腦充血で、斃れてしまつた。

金澤の第九師團長として、出掛けたのが、大島久直であつた。日清日露の二大戦役を通じて、不思議にも、此師團の長として、出たのは珍しい事だ。何時も、戰場に臨むと、軍服の胸腹へ、縮緬の兵士帯を締めて、朱鞘の日本刀を打込み、馬上で、悠々と乗出す、何處から見ても、其人だといふ事は、直ぐ判るやうに、なつて居たので、屢々、狙撃の難を受けたが、一度も、銃丸の中つた事が無く、左右に附いて居る者が、何時も犠牲となつて、本人の大島は、微傷も負はずに済んだ、といふやうな事が、十數回もあつた。本人が、狙撃の目標になるやうな服装をして、平然として居ると、銃丸の方でも、中つても詰らないから、遠慮して避けるものだらう、といふやうな噂も、あつた位だ。

第十一師團長の土屋光春は、舊幕臣で有名な、土屋家へ養子となつた人であるが、此人の倅を首め、一族の男は總て海陸に分れて、軍職を奉じて居るのは、實に珍しい事だ。柔術の達人であつて、此戦役に就ては、頭部を撃抜かれて、非常に重傷であつたが、醫者の手當が届いたので、纔に生命は、取止める事が出来た。

戊辰の戦ひに、越後口の一戦に於て、山縣有朋が強襲を受けて、流石の有朋も、周章狼狽の餘り、大切な刀を、忘れて逃出した、といふやうな、珍談があつた。其襲撃をした、幕兵を指揮して居たのが、立見鑑三郎といふ、未だ二十歳にしかならなかつた、一青年である。それが後の、尙文であつて、此時は、弘前の師團長であつた。

旭川の師團長は、大迫尙敏であつた。此人は、陸軍の方では、神様といふ綽名を、付けられて居て、洵に温厚な性質の上に、情深い所があつて、何んな難い失策でも、此人の所へ泣込めば、大概は、勘辨して貰へるやうに、骨を折つて呉れる、といふので、神様といふ名前が、付いて居たのだ。實戦の上に就てもなかく、評判の高かつた、人である。

此五人の師團長が、乃木將軍の下に附いて、包圍戰に参加したのであるから、旅順は、疾に陥落するものと、一般から見られて居たにも拘、なか／＼思つた程にも行かず、年一ぱいの苦みをした、といふのは、全く旅順の要塞が尋常一様の設備でなかつた、といふ事を、證據立てる、と同時に、我軍の武器が、不充分であつた、といふ事にもあるのだ。

二

旅順攻撃に就ては、戰術學上に於て、要塞戰に必要とする、方法だけは總て盡してしまつた。けれども、容易に陥落しなかつた、といふのは、何しろ金力と勞力とを惜まず、有らゆる新式の方法を以て、設備をして置いた、要塞であつたから、唯人間の力と、根氣だけでは、急に落ちなかつたのも、無理はない。是だけの要塞を攻めるのに、充分の攻城砲が無かつた、といふやうな事も、其一因であつたが、幸にして、旅順の海戰が、非常な勝利を得た爲に波羅の艦隊が、廻つて来るまでは、軍艦の力に、幾分の餘裕があつた。それが爲に、海軍の大砲を、應用する事が出来たので、非常に戦ひの助けになつた、といふ事である。

滿洲の原野に、戦ふて居る、我戰鬪力が、敵に對して、十二分でない、といふだけは、明なのであるから、一刻も早く、旅順を陥れて、滿洲軍に参加しなければ、或は不測の敗を、取るかも知れないのである。それだけに、攻圍軍の苦心も、甚かつたのだ。

第一回の總攻撃が、八月の十九日から、二十四日まで、六日間掛かつた。一萬五千の人を損ふて、纔に得る所は、中央縱隊になつて居た、第九師團が、盤龍山の舊東西の、砲臺の一部分を、占領したに過ぎないから、此總攻撃は、全く失敗に終つたのだ。

そこで、第二回の總攻撃を、開始する事になつた。其準備が出来て、九月十九日より、二十四日まで、是も六日間

の激戦をしたが、此時も矢張り、第九師團が、角面堡を占領して、右縱隊になつて居た、第一師團が、攻撃目的の一部を、占領したに過ぎなかつた。前後二回の總攻撃は、澤山の犠牲を拂つたけれども、是以上の結果は、收め得られなかつたのであるから、全く失敗に終つた、と言ふて然るべきか。

何うしても、要塞防禦の、本線に達しなければ、逆も戦さは、物にならないのであるから、各師團長も、躁つたであらうが、總指揮官の乃木が、躁つた事は、一通りでない。如何なる、方法を用ひても、今度こそは、各砲臺を粉碎して、本線に到達しなければならぬ、といふ意氣込を以て、愈々、第三回の總攻撃を、爲る事になつた。

斯うした、犠牲を拂つて、總攻撃を、爲る場合には、必ず大元帥陛下の勅裁を、待つてから行ふのである。詰り言へば、肉弾を以て、敵壘に突貫するのであるから、無論、其死傷は多いのだ、それだけの犠牲を拂ふ、といふ場合は指揮官だけの、一存を以て、攻撃を開始する、といふ事は、出来ない。必ず上奏の手續を執つて、御沙汰を待つてから、掛かなければならないのである。従つて、前後二回の總攻撃も、此手續を経て居たのであつた。然るに、損害は莫大であつたが、得る所は、更に無かつた、といふやうな譯で、陛下に於かせられても、非常に宸襟を惱ませられ、第三回の總攻撃を、上奏に及んだ折は、斯ういふ御沙汰が下つたのだ。

「餘りに、人を損する事が夥い故、今一應、熟考を致して、他に方法を求めて見よ。それの上で、愈々此外に策が無くなれば、止むを得ない。」

此御沙汰の爲に、第三回の總攻撃は、行ふ事が出来なかつた。實に、有難い思召であつて、一般の國民には、あの總攻撃に就て、大元帥陛下は、是までに、大御心を注がせられて、第三回目の總攻撃に對して、斯く有難き御沙汰の下つた、といふやうな事は、餘り廣く傳つて居らぬやうであるが、實は、斯ういふ事情も、あつたのである。

總指揮官の責任としても、乃木は、第三回の總攻撃を、御許が無い、といふに至つては、實に恐懼、身を置く所を知らず、殊に責任を重んずる事、常人に越えて居る、乃木としては、此時位、心を痛めた事は無かつたらう。陛下の

御沙汰と、あつては止むを得ないから、他に最良の方法を、求めなければならぬ事になつて、そこで段々、參謀や師團長を集めて、相談をした結果、一應、勸降使を送つて見る事になつた。最後の攻撃を行ふに就て、多くの犠牲を拂ふ、といふのは、互ひに無駄な事であるから、寧ろ降参したら何うか」といふ意味の、使命を齎して、ステツセルに降服を勧める事にしよう、といふ事になつたのであるが、思へば、虫の好いことを、極めたものだ。何うしても、攻め落す事が、出来ないで居て、今度、最後の攻撃をしよう、といふ場合に、早く降参しろ、といふ事を、申込むのだから、ステツセルの方でも、之には聊か驚いたらう。併し、當時の包圍軍として、執るべき最善の方法は、此外に無かつたのである。萬一、此勸降使の目的を、果す事が出来なかつた場合には、第三回の總攻撃に、着手する事も、陛下の御許しは必ず有るに違ひない、といふ事を考へて、兎に角、順序として、勸降使を送る事になつた。

二二

明治三十七年の十一月十六日、勸降使を送る可く、軍議は一決して、陸軍少佐山岡熊次が、其大任を申付かつた。此人は其後の戦ひに、到頭、盲目になつてしまつて、後年には、教育會だとか、或は在郷軍人會だとか、いふやうな會合に、よく杖に縋つて、當時の戰爭談をして居たのを、其頃の人々は、知つて居るだらう。曾て露西亞に、長く留學して居た關係から、露語にも精しく、參謀としては、極めて上乘の人で、あつた、と聞いて居る。

喇叭手が二人、先に立つて、其後から、白旗を掲げた、兵卒が一人、少し離れて、山岡少佐と、通譯官が相並んで水師營街道から、敵の方へ、進んで行く。已に水師營から、五百米突ばかりの、手前まで行くと、一發の空砲が轟いた。即ち敵の方から、進行を中止しろ、といふ報知である。暫く山岡は、控へて居たが、更に又進むと、再び空砲が轟く。そこで、暫時、休んで居ると、繼て激しい、馬の足音が聞えた。見れば、騎兵が四人、其後から、續いて一臺の馬車が来る。其中には、二人の將校が、乗つて居た。無論、日本の軍使を、迎ふべくやつて來たものに違ひない。

馬車が止まると、二人の將校は、山岡の前へ、ずつと進んだ。然るに、其中の一人は、山岡が、曾て彼得斯堡に、居た時分、同じ學校に、机を並べて居た人であるから、意外の邂逅に、思はず山岡から、聲を掛けた。

『ヤア、君は、旅順へ来て居たのか』

其將校も、碧い眼球を光らせながら、

『オー、山岡さん、貴下、私達、攻に來ましたか』

『さうです』

『酷いことしますな、ハツハ、、、』

斯かる間にも、友人の情は、又別なものとして見えて、山岡の肩を、叩いて笑つた。

是から、山岡は、降伏を勧める爲に來た、軍使である、といふ旨を通じた。そこで、兩人の將校も、自分等の計ひにはいかぬし、又、山岡の方の請求が、高級の將校に會ひたい、といふのであるから、一時、兩人は引取つて、齧齧すると、參謀長のレース大佐が、出て來て、山岡に、會見する事になつた。茲に於いて、山岡は、乃木將軍より、渡された書面を、レースに渡して、

『今日の場合に於て、速に旅順を開渡して、多くの人を、損傷せぬやうに、するのが最も適當の處置であらう、と思ふ。若し、之を貴軍に於て、容れざる限りは、止むを得ないから、最後の一戦に於て、旅順を陥れるの外はない。就ては、旅順には、尙ほ澤山の非戦闘員が居ると思ふから、それ等の人々にまで、危害を及ぼす事は、我々に於て爲すに忍びざる所であるに依つて、願くは二十時間内に、戦闘線外に、立退かせるか、又我軍に、引渡して下さるか、何れ共、此御返辭を、併て願ひたい』

と、いふ意味の事を通じたので、レース大佐は、

『よく解りました。其事に就ては、自分一人の考へを以て、答へはなり兼ねる。二十四時間の後に、確答を致すから、

今日は、引取つて呉れ」

と、いふのであつた。そこで、山岡等は、一時、歸つて来て、乃木將軍に、其復命をした。翌十七日の午後になると、リース大佐の方から、通告が来た。其の書面を見ると、

「我は、露國陸軍の、威信を保つ上に於て、全滅するも投降する能はず。又、非戦闘員は、到底二十時間以内、引渡しを了すること能はず」

と、いふのであつたから、茲に於て、全然、勸降の談判は不調となつて、慫々、第三回の總攻撃を、行はなければならぬ事になつた。

此時分から、乃木に對する、色々の中傷説が、陸軍部内に、起つて来た。元來、乃木といふ人は、自から持する事極めて謹嚴な人であつて、同時に、人に對しても、なか／＼嚴格であつたから、ハイカラ風の軍人には、喜ばれなかつたのである。或は、年金を全廢しろとか、或は指揮刀を、昔の日本刀に直せ、とかいふやうな事を、強く唱へるの、自然、若い連中には、餘り喜ばれなかつた。同じ年輩の軍將でも、何うかすると、乃木の嚴格な、態度を嫌つて、蔭口を利く者が、あつたのである。旅順の戦場が、存外に、激しくなつて来たが、犠牲を拂ふ事の、多い割合に、其効果を收めて來ない、といふ所から、平生に、乃木に對する、反感を有つて居る者が、様々に、悪い評判を立て、其動もすれば、乃木を排斥して、自分等が、其位地に代らう、とする者も、出て來たのだ。

四

軍人の中に、却て乃木を、嫌ふ者があつた、といふのは、甚だ其意を得ない事ではあるが、事實は、全くさうであつたのだ。乃木の死後は皆、口を噤んで、沈黙を守つて居るやうではあるが、幾年かの後には、或は乃木に對する、反感が、何處かへ、現れて來て、悪評を、する者も、出るかも知れぬ。現に、乃木の後に臺灣總督になつた、佐久間

左馬太と、いふ男が、同じ大將であつて、乃木と同じやうに、進んで来たのであるが、何ういふ譯か、頻に乃木に對して、悪い感情を有つて居て、乃木の殉死に就いても怪しめな批評を、加へたといふので、當時の新聞には、盛んに攻撃を、された位である。併ながら、是は全く、乃木と、性格の違つて居る男であつて、其性格の違ひが、乃木に對する、悪評をさせるやうな事に、なつたのであらう。

けれども、佐久間が、乃木を、悪様に言ふたのは、己を知らざるの、甚しきものだ。乃木は、先帝の御後を慕ふて、殉死するといふ位に、忠誠の志に、厚かつた者であるが、佐久間は、御大葬に參列する時に、臺灣から態々、愛妾を連れて來て、舞子邊に、彷徨いて居た、といふやうな事が、當時の新聞に出て居た。若し果して、さうであるとなれば、甚だ怪しからぬ事だ、苟も陸軍大將として、臺灣總督とも、あるべき人が、御大葬の當時に、左様な品行な事をする、といふのは、不謹慎も、甚しい事ではないか。盛に大阪邊の新聞は、その事に就いて攻撃の筆法を向けたが、佐久間は、一言半句の辯駁を、する事も出来なかつた。乃木は、先帝の御後を、慕ふて殉死したが、佐久間は、御大葬に、參列する場合に、愛妾を連れて來た、といふ、此二つの事實を對照して、何方の人が、偉いからといふ事は、直に判るのであるから、今後、乃木に向つて、悪い批評を、するやうな者があつたら、其者が、平生、果して何んな行ひをして居るか、といふ事を探つて、それから其説を、聞く事にすれば、間違ひはあるまい。乃木は、兎に角、人の爲し難い事を、忍んで爲し遂げた、といふ立派な人物であつたから、俗氣滿々たる、平凡の軍人には、嫌はれたかも知れない。

旅順の戦鬪が、愈々難しくなつて來て、第三回の總攻撃までも、行はなければならぬ、といふ場合になつた。而も、其事は、陛下の思召を以て、一時中止して、勸降使を送つたが、それも遂に、不調に終つて、攻撃を繼續しなればならぬ、といふ事になつた。其前から頻に、乃木の策戦上に就て、批難を試みる者が、陸軍部内にも、起きて來て、遂に一日のこと、參謀總長の山縣有朋が、陛下の御前に罷出て、戦況の詳細を、奏聞に及んだ序に、乃木の旅

順攻撃に關する、戰術上の批評までもして、暗に、乃木を交迭して、誰かを其後役に、据ゑた方が、旅順の陥落が、早くなるであらう、といふ様な意味の事を、申上げると、陛下は、肅然たる御容で、

『汝達は、左様に致して、乃木を憤死させる積りであるか』

と、いふやうな、御言葉が下つたので、流石の山縣も、何と御答の申上げやうもなく、冷汗を流して、御前を下つた、といふやうな事が、傳はつて居る。若し斯ういふ事實があつた、とすれば、山縣の不面目は言ふまでもないが、陛下の、臣下に對する、御仁慈の厚い事は、是までであつたか、といふことが思はれて、我々は唯、感泣するの外はないのだ。

其後、間もなく、兒玉參謀長を、滿洲軍から引離して、旅順へ急行させた事がある。それは、前に述べた、乃木排斥の一件があつてから、幾何もなく、行はれた事であるから、或は有難き御説の下に、斯ういふ事に、なつたのではないか、とも思はれる。兎に角、兒玉が、滿洲から、駆付けた所て、敵の要塞は、金城鐵壁にも等しい、堅固なものであつて、味方の方の、攻道具が充分でないのだから、何うにも、方法の付くものでない。堅忍持久、此要塞を打破らなければ、生きて歸らぬ、といふ覺悟の攻圍軍は、上から下まで、一人として其決心でない者は無く、殆ど肉弾を以て、敵の砲壘に、突撃をするといふやうな、激しい戦ひをした結果、到頭、最後の總攻撃で、二百三高地を陥れる事が出来たので、聊か攻圍軍も、面目を施したのであつた。

五

山縣が、乃木の交迭を、暗に奏請した時分に、陛下の御沙汰が、前回に述べたやうな、有難い御言葉であつた。單に此一事から、考へて見ても、乃木が、先帝の御後を慕ふて、殉死したといふのは、乃木としては、當然の處置を、取つたのであつて、其間、一點の誹疑を、挿むべき餘地は無からう。明治十年の聯隊旗を、失ふた當時にも、敢て其

過失を問はれず、却て西南の役後には、東京鎮臺の、第一聯隊長に榮轉する、といふやうな、無上の光榮を得て居る。而して、旅順の戰鬪に就ては、斯ういふ御沙汰を、下されて居る。又、出征の當時には、思ひ掛けなくも、包圍軍の總指揮官と、いふやうな、破格の拔擢までも、蒙つて居る。是等の事實を、綜合して來て、乃木の殉死に、思ひ及べば、乃木が、あの最期を遂げた、といふのは、全く人情の極致であつて、此殉死に對しては、決して理窟を以て、彼是、可否を論ずべき、限りのものではないのだ。上は、下を憐み、下は、上を敬ひ、而して、上下の情愛が、其極にまで達して、而して、乃木は、殉死を遂げた、といふのであるから、唯其最後の立派な事に感激して、何も言はずに居れば、宜いのだ。それを慍ひに、少しばかりの學問を、鼻の先に掛けて、殉死の解釋をしよう、とした者があるから、飛でもない閑違つた議論も、するやうになつたのである。乃木が、陛下の御信任を、斯くまで蒙つた、といふのは、全く其人格の平生が、大御心に、通じて居たからである。

二百三高地の陥落したのは、其年の十二月五日であつたが、乃木の次男、保典が、戦死を遂げたのは、此一戦である。それに就て、一つの物語がある。南山の戦ひに於て、勝典を失ふた、乃木は、餘す所、唯保典が一人、有るばかりであつた。それは、各軍將の間にも知られて居たので、參謀長の伊地知少將と、第一師團長の松村中將が、相談の上で、保典を、比較的安全的な位地に置いて、成べくは命を保たせよう、といふ考へて、師團の司令部附の將校にしたが、乃木は、更に此事を、知らなかつたのである。

所が、或日のこと、保典が、師團長の使者として、軍司令部へ、やつて來た。伊地知少將が、頼に使者の用向を、聽いて居る所へ、戦況の視察から歸つて來たのが、乃木將軍であつた。保典の顔を見ると、其儘、自分の控所へ行つて、間もなく、伊地知少將を、呼んだ。

『今、來て居つたのは、保典のやうぢやが、何うして、保典が、此處へ來たのですか』
伊地知は、困つたやうな顔をして、悪い所を、見付けられたとは思つたが、今更に、仕方が無い。

「師團司令部の使者として、参りました」

「ハ、一、司令部の使者と、云ふのですか」

「ハイ」

「保典は、何時、司令部附に、成つたのですか」

「ツイ、此頃でございます」

「そりやア、不可な、直ぐ松村へ、使者をやつて、保典は、是非、第一の戦線に立たせるやうに、言つて下さい」

斯う言はれるだらうとは、思つて居たが、今更のやうに、伊地知も困つて、

「折角の仰せては、ございますが、既に御息は、一名失ふて、残る所は、保典氏のみでございますから、却て此儘

にして置いた方が、宜しうございませう」

「怪しからぬ。さういふ事はいかん。速に松村の所へ、言ふてやつて下さい。澤山に、國民の子を、預つて来て、之

を殺さなければならぬ、といふ戦さをして居る、俺が、己の子供を、安全の位地に置いては、多数の兵士の、親に

對しても、相済まぬ。速に第一の戦線に、立たせるやうにして下さい」

斯う言はれて見れば、仕様がなから、そこで、保典は、遂に再び戦線に、立つ事になつた。尤も、保典も、後方

勤務になる事は、潔よしとせず、固く辭して居た。師團の命令、止むを得ず、一時は其任に就いたが、尙ほ第一線に

立つ事を、願つて止まなかつたのだ。

既に一子を、亡ふて居る、乃木は、更に残る一子までも、戦線に立たしめて、二百三高地の激戦に、殺して居るの

だ。同僚や部下の將校が苦心して、保典丈は残さうとした、その厚意さへ、乃木は、受けなかつたのである。是迄

にして、自分が、此戦鬨に於て、多くの國民の子を、殺す事を、國民に謝さう、と、爲すのである。その志や、實

に感ず可きではないか。上に立つ軍將が、此心を有つて、兵士を率ゐたならば、國民は満足して、愛子の骨を拾ふの

であらう。

それにしても、乃木が、些も哀愁の情を、人に見せず、平然として、愛子を殺した、その心事を、察して來ると、何ともいへぬ感にうたれて、筆も舌を澁つて、是れ以上に、此物語をつゞける、勇氣もなくなる。乃木といふ人は、那邊まで偉いか解らない。人耶、神耶、その區別さへ、判らぬ人である。

六

日獨戰爭の際、旅團長として出征し、青島を攻めて、功を樹てた堀内文次郎は、今では、現役を退いて居るが、乃木大將とはなかく、深い交りが、あつて、今も猶ほ、堀内の手に、乃木の書いたものが、色々遣つて居る、といふ事である。乃木が、曾て那須野ヶ原に、引籠つて居た時分に、稲の苗を編んで拵へた、圓座があつた。それを、堀内が、貰つて來て、大切にして居たが、愈々、乃木が、旅順へ、出征した後で、堀内の夫人は、之を床の間に置いて、乃木の武運長久を、祈つて居た。其後、乃木が凱旋してから、堀内に會ふたら、此圓座の話が出て、其裏面には紅色の縞子を張り、其上に銃の菱型を置いてあるのを示して、堀内が、是非、何か書いて呉れと、言ふて、頼んだのに應じて、乃木は、筆を執ると、自問自答の狂歌を、書記した。それは、斯ういふのである。

客あり難して曰く

世の中に爲すへき事もおほかるに

こんなところて何を那須野か

答

爲す事もなくて那須野に住む我は

茄子唐茄子を食ふて屁をこく

乃木を、非常に氣難しい、嚴格な、人であるとのみ、一毅の人は、思ふて居るが、其胸中には、此洒落の點も、あつたのだ。

矢張り堀内に、書いて與へたものであるが、

爲レ何武運祈ニ長久

短急本來適ニ武人一

武運於レ吾宜ニ短急

奉祈八百萬軍神

といふ詩がある。又『途上即目』と題して

夕立に ぬれつゝ急ぐ旅人は ゆく手の小川かちわたるらん

といふ歌もある。更に『滿洲雜吟』として、

東西南北幾山河

春夏秋冬月又花

征戰歲餘人馬老

壯心尙是不思家

といふ詩もある。

此堀内が、日露戰爭の時、參謀本部の、高級副官をして居た。折しも旅順の戰鬪が、酷で、前後二度の、總攻撃も、効を奏さず、三度目の總攻撃に就て、漸く勅許があつて、之に着手する時であつた。山縣參謀總長から、何か用事がある、といふて、呼ばれたから、堀内は、山縣の前に出た。

『何か御用でございますか』

『ウム、旅順の乃木に、電報を打て呉れ』

『ハイ、それは、何と打ちますか』

『之を打つてやつて、呉れ』

と言ひながら、山縣が出したのは、色紙型の紙に、山縣の自筆で、

百彈激雷天亦驚

精神到處堅於鐵

包圍半歲萬屍橫

一學終屠旅順城

昨夜夢寐陷旅順城遙寄供乃木將軍一察

含雪

と書いたものであつた。是は、三十七年の十一月二十四日のこと、堀内は、それを受取つて、直に手讀をしたのが丁度、正午十二時であつた。其電報の原紙が、堀内の手に残つて、居たので、此詩を一讀して、堀内が、何とも言へぬ、感慨に打たれ、深く記念すべき、電報であるといふやうな、考へが起つたので、其末の方に、斯ういふ事を、書いて置いた。

「旅順總攻撃成功期待、勅語の下りたる翌日、此詩を、乃木將軍に打電せられたり。短詩は、將軍に對する、最後の九寸五分なり。記して以て、他日の記念とす、堀内」

此詩を見た時、直に堀内の胸に感じたのは、旅順の戦鬪が、長引いて、其損害は莫大であり、大元帥陛下の宸襟を惱ませられる事も、實に一と通りでなく、國民全體には、旅順は何うなるであらう、といふ、紀憂の流れて居る場合であるから、特に、山縣が、激勵の意味を以て、此詩を送るのであらうが、これは乃木に、戦死を促すものであるといふ事であつた。堀内は、深くそれを感じたので、斯ういふ添書したのであらう。然るに、此電報の紙片が、乃木の戦死の記念とならずして、却て殉死の記念となつたのだから、堀内も、今昔の感に堪へず、其紙片を披いては、坐に當時を追憶して、感慨の涙に暮れた事であらう。

此電報の詩が、乃木の手に、這入つた時には、流石の乃木も、無限の感に、胸も迫つて、暫くは沈黙黙想して居たといふ事である。旅順の戦鬪に就いては斯ういふ事柄も、あつたのだ。

旅順要塞が、未だ支那政府の、手にあつた時分には、其實質は、極めて詰らない者であつた。日露戦争の前、僅に十年、日清戦争に際しては、山路將軍が、此方面の總指揮官になつて、乃木は旅團長として、従いて行つたのであるが、金州城の戦ひに、多少の抵抗があつた位のもので、直に旅順背面の防禦線に、安々と進んで行つて、山路は、一番高い山の上から、旅順の市街を、遙に睨んで、唯一笑の中に陥落させてしまつたのである。其時山路が、笑ひながら立つて居た、高い山といふのが、日露の戦ひに於て、最も骨の折れた、二百三高地である、といふに至つては、一段と、興味の深いものがある。同じ旅順でも、持主が違ふと、是程迄に相違がある、かと思ふ程だ。

二百三高地は、十二月の五日に、漸く陥落して、全く我軍の占領する所と、なつたのであるが、此地の激戦に、乃木保典は、討死したのであつた。それが十一月三十日の事だ。

其戦死は、總て軍司令部の方へ、報告があつたから、取敢ず乃木に、知らせなければならぬ。然し、誰一人として其役に當らうとする者が無い。參謀や副官が、互に譲り合つて、

「僕は、さういふ事は、拙であるから、君、やつて呉れ給へ」

「戯談言つちやいかぬ。誰にしても、そんな報告が、上手だといふ者はありはせぬ。先づ君、やり給へ」

「イヤ、我輩よりは、君の方が宜からう」

と、いふやうな譯で、互に押合つて居た。結局、伊地知參謀長から、乃木に、之を告げる事になつた。

長い間、攻め惱んで居た、二百三高地が、やうやく占領する事が出来たといふ報告を得たので、流石に、剛情な乃木も、今までの心勞が、一時に出たものか、頭から毛布を被つて、轉寢をして居た。所へ伊地知參謀長が來て、

「閣下へ、一寸申上げます」

乃木は、クルリと、頭を擧げて、

「伊地知か、何ぢやな」

直に其事を、言ふ積りで来た、伊地知も、乃木の顔を見ると、胸が一ぱいになつて、何うしても、保典が死んだ、といふ事は、言ひ得なかつた。

『何か、用事かな』

『ハイ、二百三高地が、漸く陥落つて、此先は、僅に望臺があるばかりですから、もう一息でございます』

『さうぢや。マア、君方の骨折で、茲まで来たのぢやから……』

何う心を、鬼に取直して、言はうとしても、伊地知には、それを言ふ事が出来ないから、話を、他に外らせて居ると、乃木は、そんな事情を知らずに、何ういふ用事か、と言ふて、頻に尋ねる。茲に於て、伊地知は、止むことを得ず、

『實は、令息の保典氏が、去る三十日の戦闘で、勇敢なる戦死を……』

と、言ひ掛けると、乃木は、手を振つて、

『アー、其話が、そりやア、知つてる』

と、言ふて、伊地知の言葉を、止めたかと思ふと、頭から、毛布を被つて、横になつてしまつた。僅に残る、唯一人の愛子を見失ふた其悲みは、一通りでなかつたらうが、眼に一滴の涙を漉へず、其事は知つて居るといふ、一言で、横に倒れてしまふた、乃木の心の、辛かつた事は、言ふまでもないが、それよりは、更に之を報告した、伊地知の胸の苦しかつた事は、想像するに餘りがある。

翌日は、何處へ行つても、乃木保典の戦死を話しては、乃木の爲に、同情の涙を、灑ぐ者ばかりであつた。所へ乃木は、宛も愉快さうに、やつて来て、

『ヤア、皆居るのう』

一同は敬禮して、ちツと、控へて居る。

『到頭保典も、死に居つたさうだ。是で先づ、國民へ對する、申譯も済んだ。此上は、俺が死ねば、それで、もう宜いのおやから、大分、荷物は、軽くなつたよ。ハツハ、、、』

如何に、其情を、矯めて居ればとて、是まで、愉快さうに、言ひ得る、といふのは、乃木の覺悟の、何れまでに強かつたか、といふ事が、想像されて、之を聽いて居る者の方が、却て暗涙に、咽ぶやうな譯であつた。

縦令、乃木の心事は、自分等、親子の生命を擧げて、國家の爲に、犠牲にするの考へてあつたにしても、併ながら苟も人間の情として、二人まで、愛子を失ふて、自分までが、死なう、といふ覺悟をするには、唯一通りの愛國心だけでは、出来るものではない。

旅順の戦鬪が、非常に、壯烈を極めた、半面には、乃木に就て、斯ういふ悲惨な、物語もあつた。

八

旅順包圍の、各師團の將卒が、實によく激戦を續けた、といふ事は、末長く感謝す可き事柄である。殊に、一介の兵卒にして、昔の武者物語にても、あるやうな、勇敢な働きをした者も擧げて數へ難きほどであつた。一將功成つて萬骨枯る、といふ諺の、ある通りに、旅順陥落の、戦功の多くは、位地の高い、將校の胸に輝く、勳章の光に隠れて、一兵卒の殊勳は、左までに、世間の人に、知られて居ないが、其將校の功勞なるものが、即ち一兵卒の功勞であつて、萬骨枯れて、一將の功の成る、といふ意味は、即ち其邊にあるのだ。或は、電氣の通ふて居る、鐵條網に飛付いたり、或は地雷火へ通じてある、電線を噛み切つたり、或は、松樹山の砲臺に、三十日も、噛り付いた切り、離れなかつたとか。或は、白い襪の目標を付けて、松樹山砲臺の傍を駈脱けたとか、一々、それ等の事實を、擧げて行けば、大部の書物も、出来る位であつて、是等の働きがあればこそ、難攻不落の旅順をして、遂に開城しなければならぬといふまでに、敵を苦しめる事が出来たのである。

第三回の總攻撃が、存外に效力があつたのは、我軍に於ても、是が最後の攻撃であつて、之を誤れば、攻圍軍の力なき事を、天下に謳はれるのである、といふ點から、前二回の、攻撃に比べては、一層に勇敢の働きを爲るし、又包圍されて居る、旅順の敵軍に於ては、是までの戦ひに、悪戦苦闘して、實は、疲れ切つて居たから、といふ點もあつたらう。遂に二百三高地は、陥れる事が出来た。其結果として、旅順の背面防禦は、困難になつて、最早や、我軍の爲に、其死命を制せられた事になつてしまつたのである。

明治三十七年が暮れて、茲に三十八年の春を迎へた。今日は、正月元旦の事であるから、自然、休戦の形になつて、各士卒へも、特別の支給は、勿論あつたらうが、高級の將校も、それ／＼、一ぱいの酒に酔ふて、陶然として、煙硝臭い、元日を迎へて居たのだ。縱令、戰場であつても、元日を迎へた祝儀として、皇禮砲百一發を、發たなければならぬのであつた。其準備に掛かつた時、乃木は、伊地知參謀長を呼んで、

『皇禮砲の用意は、出来たかな』

『ハイ、もう整ひました』

『よし、それぢや、實弾を入れて射つたら、何うぢや』

伊地知も、妙な顔をして、

『皇禮砲に、實弾を使用するのですか』

『ウム、何うせ近日、射つのがちやから、寧ろその事、實弾發射の皇禮砲も、面白からうよ』

『成程、こりやア、頗る奇抜でございます。早速、さういふ事に、致しませう』

そこで、此日の皇禮砲は、實弾を込めて、射ち出したのだ。凡そ如何なる禮砲にも、實弾を入れて射つ、といふ事は無からう。此時ばかりで、恐らく空前絶後であらう。如何に戰場でも、餘りに奇抜過ぎる、と思つたが、併し、此皇禮砲に、實弾を込めた、といふ事が、紛れ當りの天祐で、旅順開城の上に、偉い響きを持つて来る、といふ事は

誰一人として、考へては居なかつた。

旅順に、籠城して居た、敵軍は、斯ういふ要塞を、守る策戦として、攻寄せて来る、敵を打破つて、飽返も城を保つて居なければならぬ。乗出して行く、といふ事は、出来ないのだ。旅順の要塞は、波羅的艦隊、若くは浦鹽艦隊の應援を得て、海面から、旅順の聯絡を、取るより外に、之れを保守する方法は無いのだ。然るに、旅順艦隊は、殆ど全滅の姿になり、浦鹽艦隊も、今は、何等の働きを、なす事も出来ない。加ふるに、波羅的艦隊は、何時まで待つても出て来ない。

九

然るに、包圍軍の攻撃は、實に猛烈を極めて、殆ど肉弾を以て、鐵よりも堅い胸壁に當つて来る。一戦を経る毎に死傷者は、山の如く出来るが、それにも挫かずして、襲撃又襲撃、息をも吐かせず、迫つて来る。殊に、三回までの總攻撃を受けて、遂に二百三高地までも、占領される事になつたから、要塞兵の運命は、もう旦夕に、迫つて來たのだ。此以上、戦闘を續けて、尙ほ頑強に抵抗する、といふのは、何の爲に戦ふのであるか其意味が判らない、といふまでに、なつてしまつた。

今、白玉山の下にある、ステツセルの幕營に於て、高級將校の、重要な會議は、開かれて居る。集つて来る者は海陸を通じて、少將以上ばかりで、參謀長のレース大佐が、其席に加はつて、書記の代りを、勤めて居るのである。次の部屋には、赤十字總監のバラシヨツと、いふ人が、控へて居る。今日までの、戦闘の狀況に付いて、色々の談話は、交換された。それから、更に今後の策戦に付いて、新しい説が追々に唱へられるやうになつた。時に、ステツセルは、立上つて、

『是より、會議を開く事に致します』

と言ひながら、靜に跪いて、壁間に、高く掲げられてあるニコラス皇帝陛下の、肖像の前に、最敬禮をした。各將軍も、それ／＼に、敬禮する。繼て、ステツセルは、白い美しい布を以て、其肖像を、上から包んで、叮嚀に下してしまつた。之を見ると、或る一人の將軍が、ツト立上つて、

『司令官閣下、何故に、此場合に於いて、ザアーの肖像を、下されたのであるか』

此質問を受けると、ステツセルは悄然として、

『其疑ひは、御尤もであるが、併し、今日の會議は、極めて重要な會議であつて、ザアーの御前に於て、なすべき會議ではないのである』

茲に於て、召集された將軍も、皆顔を見合せた。簡單なる、此一語に依つて、是より開かるゝ、會議の主題と、なすべきものは、旅順開城の事であると、悟つたのだ。

苟も、皇帝陛下の肖像の前で、其家來たるべき者が、敵軍に、要塞を引渡す、相談をする事は出来ない。ステツセルが、ザアーの肖像を下したのは、固より當然の處置であつた。併ながら、強い議論を、有つて居る將軍の中にはステツセルの、此舉動を以て、甚だ怪しからぬものであると、心竊に、憤慨して居た者もあつた。従つて、愈々會議になると、強い議論が出て、ゴルバトフスキーとか、コステレンプとか、いふやうな人達は、猛烈な反對を唱へて盛んに戰爭繼續論を、主張したのである。其時に、ステツセルは、

『各將軍の、言はれる所は、一應道理である。併ながら、今日までの戰鬥に於て、我等は、有らゆる力を盡して、此要塞を守つたのであるが、今や外より來たるべき、救ひの途も絶えて、此要塞は、孤城落日の有様である。尙ほ此以上に、戰鬥を續けるのは、徒に多くの人を、損ふのみである。而も、それに依つて、何等の光明を認め得る譯ではない。敵味方ともに、死傷の山を積んで、此要塞の運命を、一日長く致した所で、空線の戰鬥に、何等の效果も、認めることは出来ないのであるから、我等は、今に於て、此旅順を明渡すべく、相談を開く事を以て、少し

も恥辱とは心得ては居らぬのである。尙ほ各將軍は、冷靜なる考へを以て、審議を盡れさんことを望む』

ステツセルの辯明が終ると、レース大佐は、大きな帳面を持出して、

『是より、開戦以來の状況について、一應報告いたします』

と、斷つて置いて、毎日の戦鬪に於て、何れだけの死傷者があり、既に、どれだけの弾丸を失つたとか、又兵器は、現在に於て、何れだけしか無い、といふやうな、段々と、人數が減り、兵器が損じ、彈丸や兵糧の、少くなつて來るといふ、洵に心細い事ばかりを報告し始めたのだ。開城の相談を、爲て居る場合に、味方の戦鬪力が追々に減じて行く、報告をするなぞは、甚だ以て、不景氣千萬の沙汰である。

一〇

次の室に、會議の始終を、聞いて居た、パラシヨツプは、此時、卒然として、立上つた。

『司令官閣下、並に各將軍各位、慎んで自分は、此際に於て、一言いたしたいので、あります』

ステツセルは、輕く首肯して、其發言を許した。パラシヨツプは、言葉を續けて、

『自分は、赤十字總監として、最初より此要塞に在る、一人であります。戦鬪員でありませぬから、今後の策戦に付いての意見も無ければ、今までの事に付いての、意見もあるのではありませぬ。唯、我々が預つて居る、所の、赤十字の力が、現在に於いて何れだけあるか、といふことを、各位に報告いたせば、それで足りるのであります。實は、我々が御引受けして居る、死傷者の數は、唯今レース大佐より、報告された通りでありますから、再び之を繰返す事は致しませぬが、免に角、今日に於ては、最早や、一人の死傷者と、雖、預るべき力を、有つて居らぬのであります。即ち我が赤十字は、既に力のある限り、死傷者を、收容して居るのでありますから、今後の死傷者に對する、手當の如きは、到底出來ぬ、といふ事を、申上げて置きます。尙ほ一言最後に申述べたい事は、我が祖國

の爲に、戦鬪を續ける、といふ事は、大切であるかも知れぬが、其外に尙ほ人道の貴ぶべきことも、各位に於いて考慮せられん事を、希望いたすのであります。既に、保守不可能の豫想が立ち乍ら、此要塞を、一日も長く保ちたい、といふだけの覺悟の爲に、多くの人を、損傷するといふのは、人道の上に於て、大いに顧みなければならぬ事であらう、と思ふのであります。謹んで、赤十字總監として、此一言を呈して置く、次第であります。」

レース大佐の報告に次いで、赤十字總監の報告は、斯うであつたが、何方も、甚だ陰氣にして、人の心を、沈まするやうな事のみであつた。

折柄、堅牢な石造で、二重窓になつて居る、此の幕營の一室が、動くかと思ふばかりの響がして、轟然たる大砲の音と共に、人の騒ぐ聲が聞えた。各將軍も思はず、眼を見張つて、四方を見廻した。レース大佐は、早くも立上つて廊下へ出て、窓を開いて見ると、濃々たる黒煙は、土煙と共に立籠つて、一寸先も、見えない位である。尙ほ盛に落下して来る、砲丸は、耳も襲するばかりの状況だ。

「コレ、一寸、待ちなさい」

窓の下を、走つて居る、士官の一人は、足を止めた。

「オー、レース參謀長でありますか」

「全體、何を騒いで居るのか」

「參謀長閣下、御覽の如く、敵の砲丸が、今、盛に落下しつゝあるのであります。敵は已に、最後の總攻撃をなすべく、斯の如く進んで、參つたのであります」

「ウム、左様か」

と言ふて、直にレースは、窓を閉ぢて、舊の席に復して、其儘を報告した。左なきだに、元氣の阻喪して、最早再び戦鬪をする、氣の無くなつて居る、矢先に、此事があつたので、一層、一同の氣が、減入つてしまつた。戦争繼續論

一 一

を唱へた。將軍連も、沈黙してしまつた。此大砲が、即ち乃木の命令で、實彈を込めて射つた、我皇體砲なのである。

慙々、開城と決したので、ステツセルは、レースに命じて攻圍軍の總指揮官、乃木將軍に對する、通告書を、書かせるのであつたが、兩人の間には、疾に開城の意見が、決して居たのであるから、前の晩位に、書面の腹案は、出來て居たのだらう。レースは、筆を執ると、立所に、其通告書は、出來上つた。各將軍に示して、字句の訂正は、二三あつたが、大體に於て、宜しいといふ事になつたので、今度は、其使者となるべきものを、選ばなければならぬ。レースは、ステツセルの意を受けて、室外へ出た。間もなく、一人の將校を、連つて來たが、それは、マルテンコ、といふ中尉であつた。ステツセルの前に來て、敬禮すると、ステツセルは、マルテンコに向つて、

『お前に、此名譽ある、軍使を命ずる。攻圍軍の高級將校に面會して、此書面を手渡致し、其返辭を受取つて、歸つて來るやうに致せ』

『ハイ、承知いたしました』

是から、マルテンコは、開城の通告書を携へて、出て行つた。

敵軍に、降參を申込む、軍使になつて行く者に對して、『此名譽ある、使者を命ずる』と、言ふたのは、頗る面白い。降參にも、名譽があるのだから、實に變なものだ。尤も、我軍隊の事にしても、總て軍人は、負惜みの強いもので、陸軍の教科書を見ると、逃げるとか、遁れるとか、いふやうな文字は、更に使つてない。戰鬪中の報告にも、一切さうした、卑怯な文字は、使はないのである。陸軍では、總て退却と稱して居る。滿洲の大會戰に就て、クロバトキンが、本國への電報として、公文書に載つて居る中に、屢々斯ういふ事が書いてある。

『我軍は、秩序整然として、今や退却中にあり』

何と面白いではないか。退却にも、秩序整然が、あるのだから、妙なものだとは思ふが、併し、退却をする場合に秩序整然として、退却が出来れば、實に立派なものであるが、退却の場合には、大抵秩序は整然として、居ないらしい。溝へ落ちたり、石に躓いたり、倒けつ、轉びつ、退却するものであらうが、報告書には、斯ういふ風に書く、又海軍の方に見ても、敵艦に追はれて、逃出しました、なぞとは言はない。それには、巧い熟語が考へてある。即ち背進といふのだ。我々が、學校へ行く時分には、進むといふ詞は、前の方へ、行く外に使はなかつたのだが、海軍の方には、背の中の方へ進む、といふ事があるのだ。即ち背進といふ文字の意義が、實に面白い、して見ると、猫が紙袋を、被つた時分には、矢張り背進する、といふ事も言へるだらう。此位に、軍人の方では、弱い事を言はずに、何處までも、強く／＼とばかり、教へてある。然れば、ステツセルが、マルテニコ中尉に、名譽ある軍使と、言ふたのは、別に不思議でもないのだ。

マルテニコ中尉は、戦線に向つて、進んで来た、勿論、危険の虞があるから、白旗を、掲げて来たので、我軍の方でも、さういふ場合には、決して射撃などはないから、極めて安全に、水師營まで、乗出して来た。そこで、戦線の第一線に居る、將校に對して、旅順要塞の司令官たる、ステツセル將軍の、手書を齎して、攻圍軍の總指揮官たる乃木將軍閣下、若くは最高級の將校に會ひたい、といふのであるから、暫く待たせて置いて、其旨を、軍司令部へ取次いだ。茲に於て、伊地知參謀長が、面會する事になつて、マルテニコを、引見したのである。

『我輩は、攻圍軍の參謀長、陸軍少將伊地知幸介である。貴下は、何の爲に、軍使として來られたのであるか』
『小官は、ステツセル將軍の命に依つて、此書面を齎して、來たのでありますから、乃木將軍閣下に、御手渡を願ひます』

伊地知は、不思議な面色で、其書面を受取つて見れば、正に、ステツセルの書面であるから、
『正に受取りました』

『御返辭を戴きたく存じまする』

『宜しい、暫く御待ち下さい』

そこで、伊地知は、マルテンヨから受取つた、書面を持つて、歸つて來た。

『閣下』

『オー、地地知參謀長か、敵の軍使は、何ういふ事を、言ふて來たかね』

『何か知りませんが、ステツセル將軍の書面を、持つて參つたのです』

『フ、ム、どれ』

是から、書面を開いて、露語に通じて居る、將校に繙譯させると、思ひも寄らぬ、開城の通告書であるから、流石

の乃木も、案外の感に打たれて、暫くは言葉も無かつた。

『旅順は、愈々開城する、さうぢやよ』

伊地知も驚いて、

『ハツ、愈々開城の通告で、ございますか』

『さうぢや』

『は、ア、流石のステツセル將軍も、愈々閉口した、と見えますな』

『如何に、剛情な敵將でも、此猛烈な攻撃には堪へられまいさ。併し、今日まで頑強に防守したのは、流石に豪い

所があるよ』

茲に於いて、其返書を、認める事になつた。

ステツセルの書面には、唯だ、

「開城致したいに付ては、其交渉委員として、相當の人を、選任して呉れる」

といふ意味が認めてあつたが、乃木の返辭は、

「開城に關する、交渉委員を選ぶ事は、委細承知いたしました。參謀長、伊地知少將、外、參謀並に、文官數名を、從がはせる。それに就ては、貴軍に於ても、其代表者としては、交渉の上で、取極めた事が、直に協約として、實行し得るだけの權力を、有つて居る者を、遣して貰ひたい」

といふ、意味の事を認めた。之れをマルテノ中尉に渡したから、マルテノは、それを携へて、歸つて行つた。

十一月の中旬に、山岡中佐を、勸降使として、遣した時分は、ステツセルの答が、餘りに強かつたから、まさか二百三高地の陥落位で、降服するとは思はなかつた。無論、三ヶ日が過ぎて、兵士の休養も濟んだならば、直に大攻撃を、加へる積りであつた。所へ、先方から、降服を申込んで來たのであるから、之には、聊か氣脱けの加減ではあつたが、併し戦はずして、開城するといふならば、此上もない事で、案外な思ひはしながらも、攻圍軍の將校は、非常な喜びであつた。

敵の軍使と會見して、尙ほ交渉して見た上でなければ、其開城の申込が、實行されるか何うかは、判らないのだが、兎に角、敵軍の方から、開城を、申込む位であるから、無論、此談判は纏まるものとして、取敢へず、大元帥陛下にも、其趣を上奏する必要がある。乃木の名を以て、直に山縣參謀總長まで、急報する事にした。

山縣は、此電報を受取ると、直に御前に罷出て、旅順開城の申込が、敵將ステツセルよりあつた。趣を、上奏に及んだ。陛下に於かせられても、非常な御喜びで、其時に下つた、勅語が、

「敵將ステツセルが、半歳に互つて、よく此要塞を、防守し得たのは、敵ながらも天晴な者である。今回、開城を申込んだに就ては、武士の面目を全うさせるやうな、取計をして遣はせ」

と、いふ意味であつた。

滿洲の原野に、百萬の大兵を集めて、非常な激戦は、續けて居たのであるが、旅順要塞戦程に、慘憺たる戦ひは、他の方面には無かつた。殊に、世界へ鳴響いて居た、旅順要塞を陥れた、といふ事になれば、其響が、滿洲全局の戦争にまで及んで、何れ程に、我が軍の元氣を、引立てる事になるか、判らない。従つて、敵に與へる打撃は一通りでないのだ。それにしても、半歳餘りを、頑強に抵抗して、それが爲に、我軍の死傷は、實に幾萬といふ、多數に上つたのであるから、今に至つて、ステツセルが、降服を中込んだのに對しても、之を憎むの情が、起るのは、當然であるに拘らず、我陛下に於かせられては、斯ういふ有難い、勅語を下し賜はつたのである。是れに依つて、ステツセル首め、要塞に在る所の將卒は、一般の捕虜とは違つて、全く武士としての、名譽を保ちつゝ、降伏する事が出来るのであるから、若し敵將が、之を聞いたならば、必ず我陛下の大御心に對しては、感謝したに違ひない。

マルテンコ中尉は、旅順の要塞に、歸つて來て、ステツセル將軍に復命した。乃木將軍の書面を、披いて見ると、前に述べた通りの事が、書いてあるから、評議の上、レース大佐を以て、一切の事を代表させ、開城の手續に關する交渉をさせる事にして、愈々、正月三日の正午十二時を以て、水師營で、會見をする事に決したのである。

併て、其當日になると、伊地知少將は、二三の參謀と、法學博士の有賀長雄及び、浦鹽斯徳の領事をして居た、川上俊彦の兩人を伴うて、水師營へ、やつて來た。有賀は、後に袁世凱の忠臣となつて、袁の爲に、憲法其他の國法を制定する手傳ひをした。如何に學者でも、金が欲しい爲に、袁の涎を拭くやうな、役を甘んじてするとは、實に厭な奴だ。

伊地知少將と、レース大佐が、談判を始めやうとした時に、レースが、
『此交渉を、開始するに先立つて、御願ひを致して置きたい事があるが、御聞取り下さるか』
と言はれて、伊地知は、

「何ういふ、事柄に就てか」

「無論、此開城に就て、取極を結ぶ前に、御願ひして置きたい事があるのです」

「イヤ、それならば、承るまでの事はない」

「御聽取り下さらぬのか」

「左様」

「そりやア、何ういふ譯で、ありますか」

「縱令、如何なる小さい事でも、貴軍の方から、註文付きの開城ならば、此交渉を開くまでの、必要は無いのです。無條件の開城で、我軍の命ずり通りに従ふ、といふのでなければ、此交渉は、之にて打切りと、致して宜しい。此上は、唯兵力を以て、雌雄を決するの一事があるばかりです」

一一一

斯う言はれては、流石のレースも、何と言ふべき言葉も無かつた。相撲と、喧嘩と、博奕、それに競争のやうな、勝負の伴いて居る事は、何といふても、勝つて居なければ、いかんものである。何んなに、立派な理窟があつても、負けて居たのでは、それが通らない。苦情は通るにしても、負けてから通した苦情では、勝敗の上には、關係を有たないのだから、何の役も爲さない。レースが、何ういふ事を言ふか、それを聞いてから、斷つても宜いのであらうが、更に口を開かせずして、伊地知が、之を斷つた所に、斯かる談判の、妙味はあるのだ。

開城の交渉とは、いふやうなものゝ、百戦力盡きて、降伏を請ふたのであるから、レースに於ても、自分の方の、利益の爲に主張すべき條件は、格別無いのである。總て伊地知の、提供した通りの條件で、開城の事は決して、其取極に、レースは署名した。然るに、本規約の外に、附則が十二ヶ條ある。其うちに、斯ういふ事が、書いてあつた。

「旅順要塞に在る所の、將校は、總て帶劍の儘、立退く事を許す。又再び戰鬪に参加せぬ、といふ誓をするならば、直に歸國する事も許してやる。且つ、名自の私有品は、隨意に持去つて、差支ない」

といふやうな、簡條であつたので、レースも、これには案外の思ひをした。實は、レースが、最初に、伊地知に對して此交渉を聞くに先立つて一應御願ひしたいと、言ふたのは、即ち之を頼む積りて、あつたのだ。如何に、防禦の力が盡きて、降服するにもせよ、細目の耻辱を、受けたくない、といふ考へから、帶劍の儘、體の自由を得て開城したい、といふ事を頼まうと、思つて、發言しかけたのを、伊地知に、押へられた爲に、黙してしまつたのである。所が、伊地知から、出した規約の附則を見れば、斯ういふ事が書いてあるのだから、是ならば、別に頼むには及ばない事で、此自由を興へられれば、此上もないのであるから、大喜びで約定書に、署名する事になつた。

我軍が、敵軍に對して、是だけの寛大な、取扱ひをするやうにしたのは、何ういふ譯か、といへば、即ち大元帥陛下よりの、勅命があつた爲に、敵將に對して、帶劍の儘、退く、事を許したので、さうした内情のある事は知らないから、レースが、頼まうとして斷られて、泣くく、談判に掛かれば、附則の中に、是が書いてあつたので、坐に我軍の寛大な取扱ひには、感謝したのである。ステツセル以下の將士が引揚げて、我日本に、渡つて來る時、部下の者の中には、バケツなぞを、ブラ下げて來た、奴がある。殆ど一年に互る戰をして、愈々開城した場合に、假令、私用品の携帶を許されたにしても、バケツを、ブラ下げて來る、といふのは、何ういふ了簡か、露西亞兵には、存外、氣樂な奴等の多い、といふ半面も窺はれて、面白い感がした。

旅順、受渡の時日も極まつて、もう其手續を、するばかりになつた。所へ、ステツセル將軍から、乃木將軍へ對して、照會があつた。

「今日までの戰ひに、貴名は、承知して居つたが、未だ一回も、面會した事がないから、此機會を利用して、是非一度、會見したい、と思ふが、如何であらうか」

と、いふ事を、申込んで来たのだ。乃木は、喜んで之に應じて、正月五日を以て、水師營に於いて會見する事になつた。

洵に興味ある會見である。世界無比の要塞を、防守した將軍と、それを打破るべく、半歳に亘る奮闘を續けた將軍と、それが今、會見するといふのであるから、従って行く將校も、非常な興味を以て此會見を樂みにした。ステツセルは、レース其他、二三の將校を伴ふて、約束の時間に、水師營へ、やつて來ると、乃木の方でも、時を違へず、之れを迎へた、そこで、初て兩將軍が握手した。互に携へて來た雑語を聞いたり、酒を飲み合ふて、昨日までは砲煙彈雨の間に、命を賭て、攻めつ、防ぎつして居た事は、一切忘れて談笑の中に、今までの戰爭思出などを、物語つて居るのだから、無限の感慨も、湧いて來る譯だ。ステツセルは乃木に向つて、

「貴下の御息は、貴上と共に、此戰園に参加して居られた、といふ事であるが、御無事で從軍して居られますか」

「件は、戦死いたしました」

「エツ、何と言はれます。戦死したのですか」

「さうです」

「さういふ噂も、聞いて居りましたが、果してさうであつたのですか」

「兩人とも、戦死いたしました」

ステツセルは眼を丸くして、

「兩人とも戦死いたしました」

「左様」

「オー、それは、何とも申上げやうの無い、不幸の事でした。併し、令息は、幾人居りますか」

「私の子供は、其兩人の外に、一人も無いのです」

一四

「何と、戦死せられた、令息の外に、子供は無いのですか」

「さうです」

「それでは、此戦ひで、貴下は子供の總てを、失うたのですか」

「左様」

「フ、ム……」

ステツセルは、如何にも、感慨に堪へぬ、といふやうな風で、幾度か、太息を漏した。

「それは何とも申上げやうの無い事でありませぬ。私も、國許には、澤山の子供を遺して來て居る。此長い戦國中に、動もすれば子供の事を思出された位でありますから、貴下に於いてもたつた二人の御子さんを亡くされたといふ事は、何れ程の苦痛であるか、御心の中は御察し致します」

「いや、ステツセル將軍よ、私は、此兩人の伴を、失ふた爲に、我日本帝國の爲に、幾分の務めを盡した、といふ事を考へて、洵に喜びに堪へませぬ」

心の中には、何れ程の悲みがあらうとも、目には、一滴の涙も湛へず、乃木が、平然として居る様子を見た、ステツセルは、如何にも感に堪へなくなつて、思はず乃木の手を握つた。

「貴國の兵士が、勇敢に、是までの戦ひを繼續し得たのは、全く貴下のやうな、將軍があつて、よく其士卒を勵ましたから、茲に至つたのであります。私は、唯貴下の御心を察して、何とす申上げる言葉がありません。端なくも、ステツセルが、乃木の子供の事を言出した爲に、何となく話が寂しくなつて、列んで居る將校も、皆頭を下げて、兩將軍の對話を、聞いて居るばかりであつた。

兩將軍の對話の中には、非常に人の心を、引締めるやうな、悲しい話も、交換されたが、又極めて、滑稽な話もあつた。戰鬪中の手違ひや、巧く行つたことや、様々の話をして居る中、ステツセルは、

『貴軍の戰鬪振には、如何にも驚きました。海軍の大砲を、陸軍の戦さに用ひる、といふのはチト見當違ぢやありませんか』

と言はれて、乃木は、ニコ／＼笑ひながら、

『併ながらステツセル將軍、閣下の率ゐた軍隊も随分無理な戦をして居ります』

『それは、何ういふ事ですか』

『二百三高地の、一番高い所から、水雷を發射したのは、可笑しいぢやありませんか、陸軍の戦さには、水雷は使ひませぬよ、ハツハ、、、』

是で、ステツセルは、ギユツと參つてしまつた。何でもない事のやうだが、斯ういふ話をして居る間に、何とも言へぬ面白味はある。

斯くて、旅順は、遂に我軍の、占領する所となり、僅かの守備兵を駐めて、乃木は、直に滿洲軍に参加して、鐵嶺の側面を突くべく、非常な勢で、進軍したのであつた。

滿洲對陣中の逸話も、精しく話せば、随分長くなるが、唯一つ、乃木が、如何にも美しい心を、有つた人であるといふ事だけを、話して置かう。

時しも嚴寒の頃であつて、長い間の對陣は、寒くて堪へられない。そこで、乃木の幕營に、大地を掘つて、盛に火を熾しかけた。それを見ると、乃木は、副官を呼んで、

『其火は、何の爲に熾すのか』

と聞かれたから、

『非常な寒氣でありますから、火を熾したのであります』

『フ、ム、そりやア、暖いな』

『ハイ』

『併し、念の爲に、聞いて置くが、一般の兵士も、矢張り斯ういふ風に、火を熾して、當つて居るのか』

『イエ、左様な譯には、參りませぬ』

『さうすると、兵士は、何なつて居るのか』

『兵士には、斯やうな事は致させませぬ』

『そりやア、不都合ぢやないか』

『ハイ』

『此戦さは、我々ばかりで、やつて居るのぢやない。澤山の兵士が無ければ、出来ない戦さである。然るに、我々だけ、火に當つて、兵士には火を興へず、寒い思ひをさせて置く、といふのは、甚だ宜しくないから、何うせ火を熾すものなら、全體の兵にも、さうしてやるが宜い。それが出来ぬなら、我々の幕營にも、火を熾さぬ事にしたら宜からう』

此一言で、側に附いて居る者は、早速、火を消してしまつた。一寸した話だが、乃木の性格が現れて居る。大概な場合には、外套を着ないで、雨や雪の降る中を、平氣で馬を乗廻した、といふ事も聞いて居るが、昔の武士教育を受けた人は、自然と、體の鍛へも、違つて居るのだらうが、何れにしても、斯うした我慢強い事とは、乃木にして初めてやり通すことが出来るのだ。

戦争の事は、總て略して、是から凱旋後に、話を移さう。宇品へ、上陸した時分に、非常な騒ぎで、多くの人が、乃木軍の凱旋を歓迎した。然るに、上陸するまでは、乃木の姿を見たが、萬歳を叫んだ時には、もう乃木の姿は見え

なかつた。一般の群集にも、判らなかつたが、側に附いて居る將校にも、乃木が、何處へ行つたか列らなくなつた。

一五

混雑に紛れて、見失ふた事とのみ思ふて、引揚げて來たが、矢張り將軍の姿は見えない。そこで、何れも心配を始めて、捜したが、到頭、一日の間、何處へ行つたか判らなかつた。夕方につなて、漸く或る所に、隠れて居るのが判つたので、副官首め、其他の人が迎ひに行くと、乃木は、小さな聲で、

『靜にしろ』

『閣下は、何ういふ譯で、斯んな所に、御居てになるので、ございますか』

『どうだ、萬歳屋は、もう居なくなつたか』

之を聞いて迎ひに行つた者も、可笑しくなつた。『萬歳屋』とは、實に面白い。

『もう一同、退散いたしましたして、出迎ひの人は、一人も居りませぬ』

『さうか、それぢや、出掛けよう』

『閣下は、萬歳が御嫌ひで、ございますか』

『イヤ、萬歳は、嫌ひな事はないが、併し、あれだけに、國民の子を、多く殺した、俺が、眼の前で、萬歳を言はれるのは、骨に浸みる程苦しいよ』

斯う言はれたので、皆黙つてしまつた。其時、乃木の眼底には、無量の感慨を湛へた涙が、光つて居た。乃木は、旅順の戦鬪に於いて、固より、萬全の策を盡して、戦ふたのだけれど、戦さの成行で、免に角、多數の死傷者を出した。それを、非常に憾みとして、凱旋して來た際にも、國民へ對して、是だけの遠慮を、爲て居たのである。自分一人で、戦さをして勝つたやうな、顔をして歩く、將校の多い中に、乃木は、斯うして、國民に遠慮して居たのである。

が、此事を聞いたら、戰死者の遺族も、諦めが付く譯だ。斯ういふ將校が一人でもあれば、多くの戰死者の遺族は、誰を恨むこともなく、その子弟が、國民の本分を盡して、祖先の國を守る爲に、死んだから、といふ諦めは、付くだらう。

王師百萬征驕虜

攻城野戰屍作山

愧我何顏看父老

凱歌今日幾人還

此詩が、乃木の腸を絞つて進る、血涙の聲でなくて、何であらうか。

乃木は、東京へ來ると、速かに參内して、陛下の御前へ、旅順戰圍の顛末を伏奏したのであるが、其報告が終ると

乃木は、一層、嚴肅の態度になつて、

『旅順攻圍戰の顛末は、斯やうの次第でござりますが、僅に此要塞を陥るゝが爲に、陛下の士卒を損ふこと數萬の

多きに及びました事は、全く臣が、策戰其宜しきを得ざりしものでありまして、恐懼、身を置く所を知りませぬ。

此上は、唯一死以て、御託びを致すの外は、ござりませぬ』

と、決心の色を、面に現して、申上げた時、陛下の御言葉は、斯うであつた。

『汝が、旅順攻圍戰に就て、一方ならぬ苦心を致した事は、よく知つて居る。此上ともに、汝が、隨意に死す事は許

さぬから、左様心得ろ』

此有難き御言葉を、拜承した時には、乃木は、感涙に咽ぶのみであつて、何と御答を申上げる事もならず、其儘御

前を下つた、といふ事である。

乃木は、旅順の戦ひに於いて、多くの兵士を失ふたといふ事を痛嘆して、頻にそれを自分の責任として、耻ぢて居

たのである。若し、此際上の御言葉が無かつたならば、或は其時に死んで居たかも知れない。然るに此有難き御

沙汰に接しては、乃木も恣に死ぬ事は出来なかつたのである。

一六

其後、學習院長を拜命したのであるが、其時にも、陛下より、

『汝は、兩人の愛兒を失ふて、さぞ寂しからう、と思ふから、これからは、學習院の生徒達を、自分の子供と心得て、その訓育に任ずる事にせよ』

といふ御言葉が下つたので、慙々以て、乃木は、死ぬ事が出来なくなつた。兎に角、乃木の就任は、洵に其人を得たのであつて、誰しも其適任たる事を、疑はなかつたのである。當時は、華族の風儀が、頗る紊れて居た。學習院の生徒は、大部分が、華族の子弟である關係から、その悪弊に染みて、學生の氣風も、極めて柔弱であつた。此儘に過ぎたならば、世に出る時分には一層、困つたものになるに、違ひなかつた。其事は、豫て宿題にも、なつて居たのである。乃木のやうな、嚴格にして勤勉な、武將を校長として、矯め直したならば、之れを救ふ事も出来るだらう、と考へられて居た所へ、乃木の任命であるから、非常に一般の人から、喜ばれたのであつた。學習院長に任命されたのは、明治四十年の一月三十日であつたが、既に、軍事參議官や、宮内省御用掛等を、仰付けられて居たのだから、院長就任は、それらとの兼任であつた。

果せるかな、乃木は、學習院に入ると、同時に、其女子部に對して、一大鐵槌を下した。例の下田歌子と言へる、妖婦を罷免した一事は、可成り、世間一般へ對しても、大きい衝動を與へた。女子でこそあるが、歌子の官邊に於ける、潛勢力は容易ならぬものがあつて、大概な者には、其位地を動かす、といふやうな事は、出来なかつたのだ。所が、乃木は、下田流の教育を、極く嫌つて居たので、第一の改革として、歌子を追出してしまつた。當時、其事を聞いた者は、誰一人として、痛快を叫ばざる者は、無かつた程である。

乃木が、院長となつて後の、學習院は、生徒の風儀に、非常な變化があつて、今までの柔弱な氣風が、全く一掃さ

れた。是からは、極めて剛健な、氣象を有つ少年が、多くなるだらう、といふて、誰も樂みにして居たのであるが、數年ならずして、乃木は殉死したから、其點は、非常に失望された。

學習院長を、勤めて居る間にも、旅順の戰鬪に討死した、兵士の遺族を訪問しては、類に之を慰めて、出来る限りの扶助を與へた、といふやうな、美談も少くなかつた。現に、斯ういふ事があつた。長野縣の松本に、乃木の祖先、佐々木氏を、祀つた寺がある。それへ密に、參詣に行つて、線香や花を賣つて居る、門前の家に憩んだ時、盲目の老婆が、唯一人で、淋しい暮しをして居るから、其事情を聞くと、天にも地にも、たつた一人の孫が、旅順の戰鬪で討死した、歩兵二等卒の笹沼袈裟松と、いふ者だ、といふ事が判つて、乃木は、深く其老婆の心を慰めた上に、幾何かの金を與へて、尙ほ袈裟松の石碑を、建てるまでの世話をしてやつた。墓碑の文字の如きも、乃木が、自から筆を執つて認めた、といふ事である。斯やうな事は、殆ど擧げて數へ難きほどある。いづれにしても、乃木の人格は、當代に珍らしいものであつて、その履歴を、くり返して居る丈けでも、形式的な學校教育以上の値打は、充分にある。

明治天皇の崩御と乃木の死

一

明治天皇陛下が、稀有の英主にて在せしことは、既に宇内各國の人までが、深く信じて居る位で、今更に、事新しく、述べるまでの事はない。御歴代の天皇の中に於て、殊に俊れさせ給ひし事は、御在位五十年間の御事蹟に就て、見ても明である。

多くの例を擧げて、申すまでもなく、我領土を、僅の御在位中に、二倍大のものにせられて、世界列強の間に立つて、優に一等國の班に、列する事を得た、といふ事を、以て見ても、開闢以來、前例の無き事、今後の我國が、世界各國と、交際するに就ても、何れ程の強味か判らない。然るに、意外の病魔は、冒し來たつて、斯かる英主の御壽を縮め奉つたのは、痛恨に堪へなかつた。

當時の事情に遡つて、彼是言ふた所で、何の甲斐も、無い事ではあるが、一應は、物語つて置く事にする。

何時も、例になつて居た、帝國大學の卒業式に、臨御せられた時分から、左右の者が、拜し奉つたどけても、玉體に恙あらせられた事が、仄見えた、といふ事である。非常に嚴格な御氣質とて、何時も、斯やうな席に、御臨み遊しては、決して椅子に着いて、樂々として御居て遊ばした事はなく、必ず式の始めから終まで、起立遊ばした儘で、過させられる、といふのが、常であつた。然るに、此際に限つて、椅子に掛けさせられたのみならず、何となく物憂げ

なる御有様は、侍臣の眼にも映つたのであるが、如何に平生は、剛健に渡らせられても、既に耳順を過ぎせられた御身の、幾分か倦退の氣味もあらせられて、斯ういふ次第であらう位に、考へて居たのだ。今から思へば、其時既に病魔の冒す所となつて、幾分の苦惱を感じて、御居て遊ばしたに違ひない。幾日かの後に、愈々臥床遊ばす、といふ事になつた。まだ世間には、それと知れて居らないが、宮中では、幾分か不安の念を、懷いた者もあつた、といふ事に傳へ聞く。

時の總理大臣、西園寺公望は、遙に此様子を承つて、御見舞の爲に、參内した。陛下の御在世中に、恩寵の最も厚かつたのは、伊藤博文と西園寺の兩人であつた、と謂はれる。尤も、此兩人の恩寵を蒙つた、といふ事に就ても、自から事情に相違はあつた。西園寺は、陛下が、尙ほ御幼中に在せられし時より、御學友として、常に御對手を申上げた、といふ關係から、親しくせられた。殊には、徳大寺家の出生で、皇室とは、深い因縁の有る、家に生れて、御親戚の御取扱を、受けて居るのだ。従つて、西園寺に對しては、親しく御對話あらせられた、といふ事が、傳へられて居る。伊藤の場合とは、自から其間に、違ひがあつた。

恐るべきは、人の情の働きである。西園寺が、御前に罷出て、御惱の御見舞を、申上げた時分に、直に感じたのは、此御惱は、容易ならぬ、といふ事が、直覺的に、西園寺の頭に、ピンと響いた。けれども、病理の事に、精しからぬ西園寺としては、唯何となく、御重態である、といふ感じを有つたにすぎなかつた。西園寺は、別室に移つて、岡玄卿を呼んだ。

『陛下の御病名は、どういふのであらう』
と、尋ねた。岡は、モジ／＼して、

『未だ確と申上げる事は出来ませぬが、前年來の痼疾に、なつて居られた、糖尿病が、著しく起つて來たものであると、診定し奉つるが、尙ほ進んで、拜診せざる中は、其以上の事は、判り兼ねます』

と、いふので、あつたから、

『然らば、糖尿病と心得て、差支ないのか』

『イエ、それは、従來の痼疾であつて、此度の御病臥に就ては、何とも診定し得ないのでございます』

『それは、怪しからぬ事ではないか。我々の如き、素人の目から見ても、容易ならぬ御容態と、拜し奉つたのに、侍醫頭とも言はるべき、貴下が、左様な曖昧な事を言はるゝとは、甚だ奇怪千萬である』

『何と仰せられましても、それ以上を、唯今の場合には、診定し得ないのでございますから、止むを得ませぬ』
そこで、西園寺も、聊か言葉が暴くなつて、

『然らば、何故に、民間の名醫を招いて、一應拜診致さしめるだけの、手續を取らなかつたのであるか』

『左様に仰せられましたも、御承知の通り、宮中には、それ／＼の法式がございまして、容易に、資格なき町醫を呼上げる、といふ譯にも、参りませぬのでござりますから、止むを得ませぬ』

『それは、平生の場合ぢや。斯かる場合に、平生の法式などに捉はれて、萬一過でも惹起したら、何とするか』
岡は、それに對して、何とも答へなかつた。西園寺は、直に其席を下つて、徳大寺卿を訪ねた。

一一一

長く侍従として、何時も、御外出の際には、御供を致して居り、見るからに、謹嚴な老人、西園寺には、異母兄に當るのだ。此卿の偉いのは、如何なる寒い時でも、又暑い時でも、決して避暑避寒の、旅行をした事が無い點であつた。畏れ多くも、陛下が、政務を鑒せられて、避暑避寒を遊ばさぬのに、臣下たる自分が、贅澤沙汰をしては相濟まぬ、といふて、一番町の邸に、謹慎して居た。唯此一事を以て見ても、此卿が、如何に、忠誠の御勤め振であつたか、といふ事が判る。陛下の御惱を承つて、毎日のやうに、御見舞は申上げて居るのだが、侍醫の報告を得て、深

くそれを信じて居たから、西園寺の驚いた程には、驚かなかつた。所へ、西園寺が来て、自分の見込を話した上、是非共、民間の名醫を呼上げて、拜診させるやうに、しなければならぬ、といふ、何時も優しい人であるのに、此時ばかりは、餘程焦つての相談であつたから、徳大寺も、遂に其誠意に動かされて、それから、段々、宮中の諸役人を説き、又、皇后陛下にも拜謁して、御許しを受け、茲に初て、民間の名醫を招いて、侍醫と共に、立會診察を致させる事になつたのである。

徳川十三代の將軍 家定が病んで、其容態が重つて来た、といふ時に、時の大老井伊直弼が、御見舞に行つて、上様の御病症は尋常でない、と見て取つたから、そこで、御典醫の頭をして居た、岡樫仙院を招いて、

『上様の御病氣は、餘程の御重態と、拜し奉つたが、全體、御病名は何ういふのであらうか』
と尋ねたのに對して、岡の答は、

『右様でございます。未だ確と御病氣が解りませぬ爲に、何とも申上げやうが、ございませぬ』
と、いふのであつた。流石の井伊も、案外の思ひをして、

『あれ程の御重態に、御成り遊ばしても、尚ほ御病名が解らぬとは、訝しい極みである。御手當は、何ういふ事をし居るのか』

『其儀に付きましては、力の及ぶ限り、御手當は、申上げて居る積りで御座いますが、何しろ、御病名が、確と相解りませぬから、根本の療法といふ迄には、まだ届きませぬが、いづれ……』
岡の答が、まだ終らざる中に、井伊は大喝して、

『何を言はつしやるか、貴い御體の御脈を拜して居る、御典醫の頭ともあらう者が、左様な不束な事で、御勤めがなると、思ふて居るか』

『如何に、御叱りでございますしても、一口に、四百四病と、さへ申しまして、數限りなき病を、診るのでございます

から、時としては、病症の相解らぬ事も、ございます」と答へて、濟して居るので、

「然らば、何故に、町の名醫を、招かぬのか」

といふて、詰問すると、

「大奥には、それ／＼の掟が、ございまして、町醫を呼上げる譯には、參らぬのでございます」

「併ながら、それは平生の事であつて、斯やうな場合には、苟も御典醫たる、お手前等から御勧めしても、町醫を呼上げて、拜診さす可きであるにも拘らず、左様な氣樂な事を、言ふて居るとは怪しからん」と、叱り付けて置いて、是から井伊が、入釜しく言ひ出して、遂に伊東玄朴と、戸塚静海の兩人を呼んで、拜診させたのであつた。

然るに、此兩醫が診察すると、脚氣衝心の徴があつて、最早手遅である、といふのであつた。それから、城内の騒ぎになつて、直に日本第一の、脚氣病の専門醫として、有名な遠田澄庵まで、聘んで拜診させたが、流石の遠田も、匙を投げてしまつた。斯て十三代の家定は、遂に轟去せられたのである。

餘りに、よく似た話であるから、例に引いたが、主治醫になつて居る者が、ボンヤリして居る中に、素人の宰相が重體と氣が付いて、騒ぎ出した事や、醫者の名前までが、同じ岡といふ事なぞを、思ひ合はせると、何となく、舊幕時代の話のやうには思へない。岡といふ名前の醫者は、昔から敏に、極まつて居たものか、といふやうな、感も起る。俗て、西園寺の注意から、三浦、青山の兩博士が、拜診する事になつた。所が、其拜診の結果が、意外にも激烈なる尿毒症であつて、今は、何れとも申上げる事の出来ぬ程の、御重態である、といふやうな診斷であつたから、宮中の騒ぎは一通りでなく、岡は、面目玉を踏潰して、唯ウロ／＼するばかりであつた。一日二日と經つ中に、益々御惱は重らせられるやうな次第であつたから、段々、協議の上で、遂に御病狀を發表する事になつた。それが、七月十八

日の事であつた。

此事が、一度擴まると、六千萬国民の、心配は一方ならず、全國の津々浦々の果に至るまで、或は神に、或は佛に、それ〴〵祈願を籠めて、中には、自分の壽命を縮めても、陛下の御惱を平癒なさしめたまへと、至誠を籠めて、祈願をした誠忠の民もあつた。

二二

宮城の二重橋附近には、殆ど晝夜の別なく、幾萬の國民が集つて、遙に皇居の方を伏拜んで、偏に御惱平癒を祈つたけれど、遂に其甲斐は無く、月の三十日には、主上崩御の報に、接する事になつた。

百官有司の人々は、申すまでもなく、何んな下賤な人民までも、崩御の事を、承ると等しく、慟哭して、天に恨み、地に俯して、或は病を得る者あり、或は卒倒する者さへあつた。さしも、繁華を以て、誇として居る東京の人も、此時ばかりは、何れも門戸を鎖し、幕を張つて、哀悼の意を表した。況して、表通の町家は、悉く業を廢し、大戸を閉めて、高聲で、話をする者も無い、といふ有様になつた。斯かる場合に、臣民たる者は、此憤みがあるのは、固より當然な事ではあるが、當時の事を追憶すると、今尙ほ心に、一種の寂さを、感ずる位である。忠誠の念、特に厚き乃木が、此際の悲みは、果して、どれ程であつたらうか。それを語る前に、明治天皇御聖徳の一斑を、語る事にしよう。

如何なる、問題に就ても、臣下の奏請に對しては、必ず御下問があつて、それが爲に、奏請者が苦んだ、といふ事は、屢々耳にした所であるが、苟も盲判といふが如き事は、決して遊ばさなかつた。九重の雲深き邊りに終始せられた、貴い御身柄で、あるにも拘らず、下々の人情の機微に涉つて、よく盡されておいて遊ばした、といふ一點に於

ては、我々はただ崇敬の念を以て、大御心の有難さを、感佩せなければならぬ。それ等の事情を傳へるには、様々の逸話があるが、二三、申述べることにしよう。

明治二十三年頃までは、新聞の記事の中で、見苦しい點を、切抜いて差上げる事にしてあつたが、或時、侍従に向つて、

『この新聞には、所々に窓が穿いて居るが、何ういふ次第か』

と、いふやうな御尋ねであつたから、侍従も、ハツと思つたが、既に御下問がありし上は、申上げぬ譯にならぬ。

『恐れながら申上げます。下々の醜態の、御目に觸れるのも、畏れ多い儀と考へまして、見苦しき記事は、一々切抜いて差上げるので、ごさいます』

『それは、要らざる心配である。明るい所ばかり見て、暗い所を知らなければ、政治の中庸を、得る事は出来ぬものぢや。如何に、見苦しき記事と雖、見る人の心に依つて、それは、美しくも讀まれるのであるから、今後は、新聞に窓を穿ける事は、ならぬぞ』

との仰せが、あつた爲に、其後は一切、切抜かずに差上げる事になつた。一寸した事であるが、新聞に、穴が穿いて居ると、仰せられないで、窓が穿いて居ると、仰せられたのは、頗る面白い。同じ事ではあるが、穴と仰せられずして、窓と仰せられたので、如何にも床しく聞える。

斯ういふ譯で、新聞は、よく精讀遊ばされたから、下々の事情に、精通せられた譯である。或る時の議會が、内閣と衝突したので、何うしても、解散の奏請を、爲なければならぬ事になつて、首相の伊藤博文は、御前へ罷出た。

然るに、何ういふ譯か、陛下は、傍の新聞を御取りになつて、ちツと御覽になる。博文は、御言葉が下らぬから、何とも申上げることが出来ないで、慎んで控へて居るが、何時まで経つても、御言葉が下らないので、ちよつと、下

から見上げると、陛下が、御手にして御居での新聞は、其頃、政府反對の、急先鋒であつた、自由黨の機關たる、自由新聞であつた。而もそれを四折にして、御持遊ばして居られるから、伊藤の方へ、向いて居るのは、論說の一欄であつて、『伊藤博文に與ふるの書』と、いふ題で、圈點を、無暗に付けた、非常な攻撃文であつた。して見ると、陛下は、新聞を四折にして、伊藤の方へ、其箇所を示されて居つたので、陛下御自身には、新聞を、逆に讀んで居られた事になる。之を見ると、流石に、恩寵に馴れて居た、伊藤も、何と申上げる、言葉も出でず、冷汗、肌を濡して、御前を下つてしまつた。之れが爲に、其時の議會は、解散を免れた、といふやうな、美談がある。

貴様は悪いぞと、御小言を仰せになれば、博文は、忽ち總理大臣を、辭さなければならぬ。のみならず、博文の一生は、それで終つてしまふのである。斯の如き場合には、決して陛下は、御小言を仰せられないで、何かの方法を以て、臣下を御戒めになるのが、常例であつた。博文に、新聞を突付けて『汝は、何事か申しに來たのであらうが、汝の方も悪いぞ、其證據には、此通り新聞の評判が、宜しくないではないか』と、言葉で、仰せられずして、それと解るやうに新聞を示し、博文に、一言も奏請を、なさしめなかつた。其處に、陛下の有難い思召が、含まれて居るのだ。これで議會も解散されず、博文にも、瑕が付かずして、無事に、一議會を終る事が出來た。洵に畏き聖慮の現れであつた。

四

新聞に就て、もう一つ、面白い話がある。板垣助退が、大坪本流の馬術が自慢で、陛下も、亦、大坪本流の馬術が、御上手であつた。板垣が、内務大臣になつて居た時、馬の御話の御對手を、いくたびか、致した事があつた。所が、板垣は例の通り、話好きであるが、武術や馬術に就ては、自慢の方であるから、何時も、馬術の話が出ると、大坪本流の起源から、説起して來るのが、例になつて居た。抑も足利二代の將軍と、それから始めるので、聞かされる方は、

可成り弱るのであつた。御前に於ても、同じやうに諄く申上げるが、陛下は、何時も、龍顔麗しく、其諄い馬術論を、御聞き遊ばすが、例であつた。或る時、板垣は、例の如く、御前に於て、又々、馬術に就て、申上げて居ると、陛下は、板垣に向はせられて、

「其方の大坪本流は、餘程、堪能のやうに心得るが、それに就て、一應尋ねて置く次第がある」

「ハツ、何ういふ事で、ございますか」

「外でもないが、其方の大坪本流には、馬から落るといふ術があるのか」

と仰せられたので、板垣は、グツと息詰り、其儘、御前を下つて、爾來は、如何に馬術の御話が出て、「抑も大坪本流は、足利二代將軍の」と、言はなくなつてしまつた。それは、何ういふ譯で、さうした御尋があつたか、といふに、其二三日前に、自由黨本部の前庭で、板垣が、輪乗を掛けて居た時、不圖した機で、落馬した事があつた。それが新聞に、麗々しく出て居たのを、陛下は、御覽遊ばして、板垣の大坪本流の話を、封じてしまふのは、此時だと思召されて「其方の大坪本流には、落馬するといふ術があるのか」と、御尋ねになつたのだ。何でもない事のやうであるが洵に面白い話と思ふ。

時々催される、宮中の御陪食なるものが、何時も、左右の者を、御試験遊ばす機会に、使れて居たのだ。無禮講の御沙汰が下つて、御酒下されとなれば、誰にしても幾分の、安心が出て、油斷はある。従つて、様々な失策や、無邪氣な逸話を、遺す事が多くあつた。其間に、陛下は、其人の賢不肖から、性質の何ういふものか、といふ事まで、御覽遊ばして、深く観慮に、止めさせられるのであつた。

或る時、松方正義が、其試験臺に上つた。陛下は、松方の申上げて居ることを、御聞き遊ばして後、「其方は、なか／＼の、子福者である、といふ事を、承いて居るが、何うぢや」

と、不意に御尋ねがあつた。松方は、面を赤くして、

『ハツ』

と言つた切り、答が出来ない。誰か申上げたか、松方の子澤山が、何時か知れて居たのだ。松方は、三十幾人といふ澤山の子供を、持つて居るのだ。陛下より、御尋ねになつた時分は、それまでには、なつて居なかつたのであらうが突然の御尋ねであるし、また場所柄とて、松方も、聊か答に、躊躇して居ると、尙ほ陛下は、

『凡そ幾人程あるか』

と、重ねての御尋ねに、御答をせぬ譯にいかぬから、松方は指を折つて、段々に、勘定を始めたが、何うしても、其數が折合はない。松方は閉口して、脂汗を流して、勘定すれば、する程、判らなくなつてしまふ。二十人からの子供であるから、一腹で出来たのでも、不意の質問に遭へば判らないが、殊に、腹が幾つにも、なつて居るのだから、尙更判らない。松方の性質として、苟も陛下の御尋ねに對して、偽は申上げられぬ。間違つた事は、尙更言へぬ、といふ考へて、數へて來るから、何うしても、數が判らなくなつてしまふのだ。其時、陛下は、御笑ひ遊ばして、

『其方の子供が、幾人あるか、と尋ねて居るのぢや。他人の子を、尋ねて居るのでないから、答が出来さうなものぢやのう』

と仰せられた。斯うなると、愈々下ギマギしてしまつて、答が出来ない。そこで、松方は、

『誠に恐入つた事で、ござりまするが、御即答も、なり兼ねますから、何れ取調べの上、御答へ申上げまする』

と言ふて、匆遑、御前を下つた、といふ珍談がある。

幾ら何でも、自分の子供だから、其時に數へて、幾人と、申上げられさうなものだが、一人でも曖昧な事を、申上げてはならぬといふ、正直な考へから、松方が、取調べの上、更に申上げまする、と答へた。其處に、松方の値打はある。此時には、陛下も、頻に御笑ひ遊ばして、

『松方は、正直な奴ぢや』
と、仰せられた。

誠に松方の正直な點が、現れて居て、恐らく、陛下の御信任も、其時分から、一層深くなつた事と、想像される。

五

斯うした、面白い話があるか、と、思ふと、又非常に、皮肉な事を仰せられて、臣下を困らさせる、といふやうな事もあつた。御陪食の時分に、天盃下され、といふので、御盃が、席順で廻つて来る。勿論、金の御盃で、立派なものだが、或時の事、願を以て、蜂須賀侯爵まで、廻つて来ると、蜂須賀は、御酒を戴いた後、綺麗に、其盃を拭つて、包み始めた。周圍の者が、不思議に思つて、

『蜂須賀侯、それは、何となさるか』

と尋ねると、蜂須賀は、濟した顔で、

『天盃下され、といふのであるから、是は頂戴して參る積りぢや、ハツハ、、、』
尋ねた者も笑つて、後を言はなかつたが、蜂須賀は、イヨ／＼之を、懐へ入れかけた。無禮講の席上で、且つ御前であるから、斯ういふ戯れをして、興を添へる積りであつたに、違ひない。昔の阿波の御殿様が、思切つての洒落だから、此位の事をするのにも、智慧囊を絞つたのだらう。

遙に、陛下が、之を御覽遊ばして、侍従を、御招きになつた。

『ハツ、御用でござりますか』

『ウム、外の事ではないが、あれを見よ。蜂須賀が、妙な事を致し居る』

侍従が、仲上がつて見ると、成程、蜂須賀が、金盃を懐へ入れかけて居る。併し、何か仔細ある洒落だな、と思つ

て、ちツと見て居ると、陛下は、

『流石、御家柄ぢやのう』

と仰せられた。侍従も『ハツ』と言つて、頭を下げたが、御答の仕様が無い。それが段々、傳へられて、大笑ひになつた。流石の蜂須賀も懐へ入れかけた盃の處置に困つて、それから後は、御前に於いては決して悪戯を、爲なくなつたといふ事である。

中井弘は、京都府の知事で、此世を逝つたけれど、薩州出身の志士として、維新の前後には、非常に活躍したものだ。學問もあれば、膽力もある、腕力も、衆に勝れて居た。何分にも、有つて生れた、悪戯好で、人を人臭しとも思はぬ氣象が、役人に適せず、あれだけの手腕を、有つて居乍ら、地方の長官位で、一生を終つた、といふのは、如何にも惜しい事であつた。原敬の、先妻の父であり、又、井上侯爵夫人の、先夫であり、それ等の事に就ても、なかなか逸話を、有つて居る人であるが、兎に角、皮肉で、口の悪い上に、人の厭がる悪戯ばかりして、一生を送つた所に、中井の面白味はあつた。

或る時、宮中の御宴に出て、待合せの接待に、出て居た、葉巻煙草を、喫ふて見ると、口に合ふて、美味かつた。全體、中井は、何んなに貧乏しても、葉巻は放さなかつた、といふほど、煙草好きな人であつた。少し離れて居ても、是はハバナである、とか、或は、馬尼拉である、とか、いふやうに、直ぐ嗅分ける位に、葉巻通の方であつた。今喫んで見た煙草が頗る氣に叶つたので、周圍を、キョロ／＼見廻しながら、五六本摘んで、衣囊へ入れた。

其日の宴會は、無事に終つて、翌日になると、意外千萬にも、前觸なしの勅使が、急に見えたので、之には、中井も面喰つて、大急ぎに仕度をして、勅使受をする

『陛下の御沙汰に依つて、之を下賜はる事に相成つた。有難く御受けをせられよ』

と、いふ事であるから、何か知らぬが、謹んで頂戴した。勅使が、歸つてから、其包みを開けて見ると、流石の中井も「ヤツ」と、言つて、頭を押へた切り、暫くは身動きもしなかつた。昨日の御宴で、密にポケットへ入れた、例の葉巻が、五箱ばかり包んで、あつたのだ。察するに、陛下が、何方よりか御覧になつて、中井は、悪い癖がある、と思召したに違ひない。そこで、之れを戒める爲に、態々、煙草を下賜はつたのであらう。餘り物怖を爲ぬ、中井も、此一度の諷刺に凝りて、其後は、宮中へ出て、決して悪戯を、爲なくなつたといふ事である。

(中井の事は、快傑傳に、くばしく出て居る)

山本權兵衛に、斯ういふ面白い話があつた。まだ海軍大佐で、官房主事を、勤めて居た時代に、海軍大臣が、西郷從道であつた。從道は、山本を、深く信頼して、何事も委せた切りで、一切、自分は、山本の爲る事に、指圖をしなかつた。學校時代の山本は、甚だ成績が悪かつた、といふ事であるが、官房主事としての山本は、非常によく、働いて、大臣のなすべき仕事は、大概、山本の手で、切盛してしまつた位である。それで、此時に、權兵衛大臣の綽名が附いた位だ。

或時、西郷と共に、御前勤めをして居ると、陛下は、黙々、山本の顔を、御覧になつて、

『其方は、此世の中に、恐しいとか、怖いとかいふものを、見た事は、あるまいのう』

と仰せられた。山本は、唯恐懼して、頭を下げて居るばかりであつた。西郷は、例の調子で、

『恐れながら、申上げます。山本が、斯ういふ顔はして居りましても、恐しいものは、唯一つてござります』

『それは、何ういふものか』

『馬が恐いさうで、ござります』

山本が、平生、馬を嫌つて居る事を、知つて居たから、西郷が、素破拔きをやつたのだ。

六

其日は、それで済んだが、暫く経つと、山本に對して、

『房州海岸の遠乗を、致すに就て、御供を申付ける』

といふ、御沙汰が下つた。之には、流石の山本も、一時は驚いたが、例の負けぬ氣象で、宮中へ罷出て、侍従の御取次を以て、

『折角の御沙汰ではございますが、權兵衛、不肖にして、馬に乗る事を、能く致しませぬ故、此御供は、成兼ねまする』

と、御答へ申上げた。然るに、陛下は、山本を呼べ、といふ御沙汰であつて、山本は、侍従に連れられて、御前へ出ると、

『海軍、陸軍と、相違はあつても、苟も軍職に、身を奉ずる者が、馬に乗れぬでは済むまいが、何うぢや』

といふ、御問ひが下つた。山本は、即座に御答を申上げて、

『海軍に於て馬を使ふて、戦をする時代が、参りませうか』

と、奇抜な事を申上げた。陛下は御笑ひ遊ばして、

『評判に違はぬ、剛情なものぢや』

と仰しやつて、却て御喜びがあつた、といふ事であるが、此事から、山本の爲人も、大凡判つて、恩寵は、日、一日と、深くなつて來た。

陛下の御英斷として、最も有名な事は、例の湖南事件に對する、御處置であつた。

露國皇帝ニコラス陛下が、尙天皇太子であつた時分に、西比利亞鐵道完成の式に臨んで、序を以て、日本へ來遊せられた。其當時、滋賀縣の大津に於いて津田三藏といふ巡查が、何う考へたか、ニコラス殿下に斬付けた、といふ、大事件が起つた。山縣内閣が倒れて、松方内閣が、成立してから、五日目の事であつた。初めての内閣會議を、開いて居る所へ、此電報が來たので、總理大臣の松方はじめ、外務大臣の青木周藏、内務大臣の西郷從道等は、膽を冷すほどに驚いた。元老、大臣、總出席で、會議を開いた結果、津田三藏を、強ひて死刑にして、露國皇帝に、御詫びをするといふ、事に決した。死刑論に反對したのは、農商務大臣の陸奥宗光一人であつた。内閣の議が、斯ういふ風に極まつたのであるから、陸奥は、病氣届をして、引籠つてしまつた。若し此時に、閣議が決した通りに、津田を死刑にしたならば、司法權の獨立は、毀損される事になつたのであるが、幸にして、大審院長の兒島惟謙が、非常に強硬な、意見を有つて居て、内閣の壓迫があつたにも拘らず、兒島は、裁判官の監督として、自から大津に出張して、津田三藏を、無期徒刑にしてつた爲に、日本の法律の獨立、裁判官の威信を、保つ事が出來たのである。

初めの元老大臣の會議では、何事の決定も見ず、唯議論に時を移し、憂愁の色に包まれて居るのであつた。

陛下は、直に京都へ行く可き旨、御沙汰があり、其夜、直に御西下遊ばされて、翌日は、ニコラス皇太子を、病床に、御見舞遊ばされたので、此事件は、大きな問題にならず、平和に解決し去る事を得たのであつた。此時に、伊東巳代治の機智が、大いに働いた事も、詳しく語れば、頗る面白いが、茲には略して置く。

日清戰爭の時分に、媾和談判が、下關に於て開始された。清國の全權大使としては、李鴻章が、やつて來る。我國の全權大使としては、伊藤博文と、陸奥宗光が、其衝に當つた。第一回の會見が終つて、李鴻章が、引接寺へ、引揚げる途中、小山六之助の爲に狙撃された。重傷ではなかつたが、兎に角、敵國の全權大使を、國內に於いて狙撃したと、いふのだから、事は、随分面倒であつた。其際に、土方久元から、其旨を奏上に及ぶと、大臣や元老が狼狽して、

まだ何とも、意見を定めて、申上げざる中に、陛下は、直に御沙汰を下して、二億兩の償金を、一億兩に減じ、休戦條約は、一切無條件といふ、御説を、下賜はつた。是が爲に、李鴻章は、言ふべき苦情も言はずに其儘、事が小さく済んでしまつた、といふやうな事もあつた。斯やうな事は、御英斷の實例として、後世に傳ふべき、大切な事であらう。

日清間の、講和談判も成つて、陛下は、東京へ御還幸と、いふ事が内定して、供奉の手順なぞも、略々付いた時に、土方宮内大臣から、病氣届が出て、供奉の中に、加はる事は出来ないといふ、申出であつた。

其時に、陛下の御沙汰に依つて、直に侍醫が、土方の宿舎へ行つて、診察してから、復命に及んだ。それに依つて見れば、土方の病氣は、左までに重くもないが、多少の熱氣がある爲に、御遠慮申上げて、供奉の中に加はらないのだ、といふ事が判つた。

七

すると、陛下の御沙汰として、御發輦の日を、一日御延し遊ばす、といふ事であつたから、左右の者から、其次第を、御伺ひ申すと、

『戦争を始める時分に、附いて來た土方が、僅の熱の爲に、供奉の中に加はる事が出来ぬ、といふのは、不感であるから、一日位の事ならば、延ばして、遣はせ』
といふ仰せであつた。

御發輦の日時が、公然、發表された時ならば、さういふ事もなるまいが、兎に角、御内定の時であるから、是も出來たのである。それにしても、斯やうな御情厚き事が、幾度か左右の者に對して、行はれたといふ事は實に有難い事

である。

一方に於ては非常に、御英斷の優れさせて居つた、半面には、斯ういふ風に、臣下に對しての御仁慈の御心が厚かつた。是等の事は、深く國民が記憶して、御聖徳を偲ぶ可きである。

陛下が、臣下に對して、御仁慈の深かつた、といふ事は、既に其一斑を述べたけれど、殊に、乃木大將に對して、有難い思召は、幾度か、重なつて居たので、乃木も愈々、御登遐に接した場合には、人知れず、袖を濡して、居たのである。

『既に分身も、老骨ではあるし、自から省るに、今後の餘生は幾何も無い。生き甲斐なき残骸を、徒ら抱いて居た所で、詮の無い事だ。殊に、陛下の恩寵の深かりしにも拘らず、自分が、今日までに犯した、過失は少くないのに、それに對する御咎めも無く、却つて是までの恩寵を、辱うした。その有難き大御心に對して、御報恩の道も、今は絶えてしまつた。御上に、お別れ申しては、生残る甲斐もないのであるから、自分も、御後を慕ふて、世を去るの外はない』

と、疾くも決心したのであつた。

乃木の死は、全く情の死で、決して、理窟を以て、之を解釋すべき限りのものではない。然るに、少しばかりの舶來の本を讀んで、倫理が何うの、道徳が斯うの、と、詰らない屁理窟を、覺えて居る、平凡學者が、理窟一點から、此死の真相を、割出して行かう、としたから、飛でもない、間違つた批評を、爲るやうになつたのである。縦令、君臣の別はあつても、苟も人である以上は、其情愛といふものに、相違のあるべき譯は無い。上が、下を思ふ事の厚ければ、下も亦、上を慕ふの情が厚くなる。其情の厚り詰めた所が、即ち乃木の殉死、といふ事になつたのである。

副島種臣は、非常に謹嚴な人で、其人格も、極めて高かつた。一生を通じて、厭な噂の、少しも起らなかつたのは、恐らく此人位なものであらう。明治十一年の當時には、侍講の職を、勤めて居た。鍋島藩に於ても、代々、學者の家柄であつて、漢學の造詣の深かつた、といふ事も、一般の人は、よく知つて居る。けれども、唯學問が深いから、といふて、其人格が低ければ、陛下の侍講に、なる事は出来ないのだ。其點から言へば、副島の如きは、確に侍講として、適任の人であつた。

然るに、副島は、宮中の弊に堪ずして、それと明に言へないから、病氣を申立て、辭表を奉呈して、御沙汰の下るまで、自邸に、謹慎する事になつた。副島が、辭職を申出た、といふ事が、陛下の御耳に這入ると、早速、其次第を御下問になつたので、侍従の者から、病氣の申立てに依つて、辭表を奉呈した、といふ旨を申上げると、翌日、侍補の職を、勤めて居る、土方久元を、御招きになつて、

『其方、是より副島種臣の邸に參つて、此書面を、渡し參れ』

と、いふの、御沙汰であつた。事は、固より唐突に起きたので、土方も、意外の感に打たれたが、陛下の御説であるから、其儘に、仕度を整へて、越前堀の副島邸へ駈付けたのが、夜半に、近い頃であつた。

此日は、非常に風雨が激しかつたので、土方は、雨具の用意を整へて、馬上で乗り付けた。所が、副島は、親友、大木喬任の、邸へ行つて、頻に話し込んで居た。其處へ、使者が來て、今、勅使が御出でに、なつたといふ、通知を受けたから、意外の思ひをして、早速、邸へ歸つて來ると、禮服を着して、勅使の前へ出た。其時に、土方は、

「陛下の仰せに依つて、勅書を御渡し申す、謹んで御受取なされ」

と、嚴に言ひ渡したので、副島は、ハツと平伏して、それから、靜に陳行して、勅書を拜受した。土方が、歸つた後で、副島は、勅書を披いて見ると、

卿ハ復古ノ功臣ナルヲ以テ、朕今ニ至ツテ猶其功ヲ忘レズ、故ニ卿ヲ侍講ノ職ニ登庸シ、以テ朕ノ德義ヲ磨クコト

アラントス、然ルニ卿ガ道ヲ講ズル日猶淺クシテ、朕未ダ其道ヲ學ブト能ハズ、比日来、卿病瘳ニ在テ久ク漸講ノ職ヲ辭シ、去テ山林ニ入ラントス、朕之ヲ聽テ愕然ニ堪ヘズ、卿何ヲ以テ此ニ至ルヤ、朕道ヲ聞キ學ブ勉ム豈一二年ニ止ランヤ、將ニ畢生ノ力ヲ竭サントス、卿亦宜ク朕ヲ誨ヘテ倦ムコト勿ル可シ、職ヲ辭シ山ニ入ルガ如キハ、朕肯テ許サル所ナリ、更ニ望ム、時々講説、朕ヲ贊ケテ晩成ヲ遂ゲシメヨ

實ニ有難イ思召で、副島は、唯感泣するの外は無かつた。

副島が、今俄に去つても、侍講には、元田永孚が居り、又侍講補には土方久元、佐々木高行、吉井友實、杉孫七郎等の人々が居るのだ。副島一人を失ふ、といふ事が、それ程に、差支を生ずる、といふのではないが、副島程の人格の高い、學殖の深い者を、側より去らせるといふ事は、如何にも惜しい、といふ、思召を以て、此御沙汰を下賜つたのであるから、副島としては、此以上の面目は無いだ。茲に於て、早速、御前へ罷出て、今日までの不心得を、御詫び申上げて、相變らず、侍講の職を、勤める事になつた。

式部長官の、鍋島直大の扇面に、副島が、認めた詩がある。

日々抱經朝建章 衣裳常惹御爐香 君王恩澤元深重 未敢放臣煙水鄉

此詩に、依つて見ても、副島が、陛下の恩澤に感ずるの情は、明に判つて居る。

此勅書に關聯して、副島の氣質を、よく現せる事實がある。副島はあゝいふ人物であるから、此勅書を公にする事は、自からを誇るやうに、なるからといふので、明治三十八年の一月三十一日に、死する時も、我が死後三年の後にあらざれば、決して披く事はならぬ、と、言ひ置いた位である。其處に、副島の人格は、現れて居るのではないか。

八

先帝の崩御に就いては、様々の物語があるけれど、著者自身の思出として、斯ういふ物語がある。

日蓮宗の、宗務總監をして居た、佐野前觸と、いふ人があつた。著者は、不圖した事から悪意になつて、爾來、非常に深く、交際を結んで居た。兎に角、現代の日蓮宗の坊さんとして、非常に注意された、怪付であつて、筑前博多の東公園に、建つてある、日本第一の大きな銅像、即ち日蓮上人の銅像を、建立し得たのは、此人の力であつた。蒙古の兵が、筑紫の沖へ、攻込んで來た時に、北條時宗が、其對手になつて、非常な戦ひをした、當時の古文書に依つて、其戦鬪の状況を、油繪に畫かせて、其銅像の建てられてある、直前に、パノラマ館を造つて、公衆の觀覽に、供して居るが、是も、佐野が考へて、爲した事である。大した學者では、なかつたやうだが、日蓮宗の坊さんとしては、關西に於いて第一の勢力ある人といへば、即ち此人を、推す外は、なかつたのだ。

管長選挙のある度毎に、此人が乗出して來ては、一騒動持上げたものである。到頭、管長にはなれなかつたが、宗務總監になつて、或は静岡の某寺を潰して、之を朝鮮に移したり、或は財團法人を造つて、五十萬圓の基本金を募集して、之を宗門擴張の資に充てる、といふやうな、計畫も立てたり、なか／＼、日蓮宗に對しては、仕事をやる方の、人であつた。

先帝の崩御せられた後、八月二十七日に、著者の宅へ、突然やつて來て、二十九日に、池上の木門寺に於て、先帝陛下の御法會を営みたいから、是非、出席してくれといふ話であつた。尙二三の要件を、著者に托して、歸つて行つたが、其時に、佐野の顔色が悪く、總ての様子が、平生の快活な調子と、違つて居たから、

『何處か、體でも悪いのですか』

と、言ふて尋ねると、佐野は、悄然として、

『實に伊藤さん、私は申譯の無い事があつて、それが氣掛りて、ならないのぢや』

『ハ、ー、そりや、何ういふ事ですか』

『外のこともないが、陛下の御惱が重らせられた、といふ時分に、私は、丁度、博多に居つたのぢや。其報を得る

と、同時に、御崩平癒の祈禱をすると、必ず一度は御平癒になる、といふ、暗示を得たから、そこで、床次内務次官へ其旨を、電報で知らせた。床次次官は喜ばれて、宮中の方へも、其旨を傳へられた、といふ事、宮中の役人も、大層喜んで居られた、といふ事であつたが、私は、甚御祈禱が濟むと、直に上京の途に就いて、途中まで來ると、意外にも、先帝崩御の號外を見て、非常に驚いたのであるが、私が偽でも言ふたやうに、思はれはしまいかと、そればかり考へて、今日に至るまで、楽しい日は、一日も無かつたのぢや。私が、今日まで祈禱をして、何かの暗示を得ると、それが間違つた事は無いのに、此大切な一つだけが、間違つたといふのは、もう、私の壽命も、盡きかゝつて居るのではなからうかと、それや、これやを、思合はせて、何となく、氣が洗んでならぬ」と、佐野の語るを聞いて、著者が、不思議に思つたのは、此坊さんが、決して斯んな、弱い音を吐いた事の、無い人で、生死の問題なぞは、殆ど眼中に、置かなかつた人であるのに、獨り此事に就てばかり、斯ういふ事を氣にして、悄然として居る。それを、何とも言へず、不安の感じを以て聴いたので、頻に之を慰めて歸した。佐野は、本門寺の法會を終つて、直に身延山へ行き、それから、鹹澤を下つて、東海道へ出て、東京へ歸る途中、俄に發熱して、品川の停車場へ、着いた時には、もう身動きがならない、といふほどであつた。直に高輪病院へ入院せると、意外千萬にも、病氣は、糠尿病であつた。殊に、尿毒症の、最も猛烈いのである、といふので、入院の後には、全く人事不省になつてしまつた。宗務局から、著者の所へ、電報が掛つたから、面會に行つたが、既に面會は、許されなかつた。そして、三四日経つと、死亡の報知が來た、といふやうな譯であつた。

先帝の崩御に關聯して、斯ういふ不思議な事も、あつた。佐野が、前に來て、悄然として、話をして行つたのは、著者の所へ、遺言にでも來たやうな心持ちがして、未だに佐野の顔が、眼の前に、チラついて居る。著者の家人なぞは、佐野の平生を知らないから、著者が、佐野の呆然して、居る事を語つても、

『それでも、あんな威勢の好い、坊さんは、初てゝある』

と、言つて居たほどに、未だ元氣に見えたのであつた。佐野の病氣が、陛下と、更に異らなかつた、といふやうな事を、思合はせると、人間の死といふものは、或る點までは、前知する事が出来はしまいか、といふやうな感も、起つたのである。

(此時に、佐野が手土産に持つて來た、寛明の雀の一軸は、今も猶ほ、同人の遺物として、保存して在る)

乃木は、陛下の御惱が、重らせられた日から、御大葬の濟む日まで、一日として、宮中へ伺候する事を、廢めなかつたのである。百官有司は、總て左様にしたのであるが、ひとり、乃木の伺候した態度は、平生の赤心が、現れて居て、如何にも謹嚴なものであつた。宮内省に勤めて居る、消防夫の乃木觀が、頗る面白から、それを例に引いて、乃木の謹直な、勤め振を、披露する事にしよう。

乃木は、最初、御見舞に伺候した時間と、最終の日まで、其時間が少しも違はなかつた。是が、他の人と、異つて居た所である。又御門を這へつてから、御玄關へ掛かるまでの態度が、少しも亂れず、何人に會ふても、挨拶さへせず、伏日になつた儘、御玄關へ、かゝつたのが、長い間、一日も變りがなかつた。

九

そんな事は、極めて小さいことであるが、普通の人には、一寸出來ない事である。御大葬の當夜なぞも、參列した者の中には、随分、不行跡な事をして居た者のあつたのを見たが、乃木は、實に謹嚴の態度を、少しも崩さなかつた。されば、宮中の消防夫が、乃木の偉い事を語つて、御見舞に伺候する時間の違はなかつたのと、其態度に、少しも崩れた所が無いのと、不謹慎の體が、現れなかつたのと、それ等の點を推して、今日でも乃木さんは、偉い者だ、と言つて、敬服して居る。人の眞情は、斯ういふ場合に、現れて來るものであるから、大いに注意しなければならぬ。

九月十日は、裕仁殿下に、拜謁の願ひを、出してあつた、當日である。學習院以來、御馴染のある事として早速御許しがあつたので、御指圖の時間に、東宮御所へ参内した。乃木は、自から訂正の勞を取つて、版木まで新にして、作らせて置いた中朝事實の一本を、御前に捧げて、心からの御別れを、申上げに行つたのである。其際に、殿下に申上げた言葉の中に、

是は、山鹿甚五左衛門と、申す者の著しました、中朝事實と、いふ書物でござりますが、此中には、苟も人の君たるべき、御方の心得となるべき事が、澤山に認めてございますから、御卒御覽を願ひたい。文字が難しいとか意味の不明の點があるといふやうな、場合には、必ず左右の者に、御尋ね遊ばして、不明の點を、其儘に過ごさせられる事は相成りませぬ。臣、希典が、特に今日、拜謁を願ひましたのは、此事を申上げたくて、罷出ましたのでござりまするから、臣の微衷は、深く御汲取を願ひます」と、申上げて居る中にも、乃木の眼には、涙の露を帯びて、如何にも、其様子が悲愴であつた、といふことだ。

それから、更に去つて、皇居へ罷出た。是も前日から、願ひ出してあつて、新帝陛下に、拜謁の榮が、叶ふ事になつて、居たから、それで、やつて來たのだ。

此時に、陛下に捧げたのが、白紙の封書である。其中には、勿論、國政に關する事が認めてあつた、といふ事だが、それは、大正天皇陛下の御手文庫の中に、深く秘められて、何人も窺ふ事は、出來ないのだから、何ういふ事が、認められてあつたか、それは判らない。

翌十一日には、珍しくも、山縣有朋を訪ねた。山縣も、意外の來訪に驚いて、快く迎へた。

「やア、暫くぢやつたね」

乃木は、姿勢正しく、山縣に向つて、

「此度は、何とも申上げやうの無い事が起つて、御互に、此以上の悲みは無い」

と、言ふて居る中に、もう、乃木は、潜然として、涙を流して居るのだ。山縣も、共に涙を抑へて、

「イヤ、其事を思ふと、悲みに堪へない。まア、椅子へ掛かつたら、宜からう」

それから、暫く椅子に倚つて、色々な話をした。別れに臨んで、

「斯ういふものが出来たが、一寸、見て置いて呉れ」

と、言つて、差出したのを、山縣が、受けて見ると、

うつし世を 神さりまし、大君の みあとほるかに おろかみまつる

山縣は、軍將でこそあつたが、和學の造詣が深く、歌の道に掛けては、なか／＼に、長じて居たのであるから、一見して、是は辭世の歌である、といふ事が、解つたのである。

「ヤツ、是は」

と、聲を出す、乃木は、

「イヤ、素人の作つたものだから、天爾遠波も合ふまい。よく直して置いて貰ひたいものぢや、ハツハ、、、」

笑ひに紛らして、去つて了つた。山縣は、怪訝な顔をして、乃木の後を、見送つて居た、といふ事である。

一〇

此事が、世間へ漏れて、乃木の死後に、山縣は、識者の非難を受けた。

苟も山縣のやうな、歌の上手な人が、此歌を讀んで見て、直に乃木が死ぬ、といふ事の、感じが起きなかつた、

といふのは、甚だ不思議な譯で、若し、之を知つて居つて、其儘に棄て置いた、とすれば、山縣は、甚だ情誼の薄
い人である。

と、いふやうな、非難であつたが、此間の消息は、山縣に非ざれば、知る事は出来ないのであるから、何とも批評
の仕様が無い。

翌十二日には、軍務局長の田中義一を訪ねた。此人は、軍制上の事に就ては、意見を有つて居て、陸軍の中でも、
屈指の人物であつた。

乃木は、田中を訪ねて、軍制上の話をして居たが、

『時に、田中、俺は、お前に、今日は頼みがあつて、來たのぢや』

『は、ムア、何ういふ事ですか』

『外の事でもないが、我陸軍は、日清、日露と、二つの大戦役を、經て來て、俄に世界に、名を成したのであるが、
今や、我陸軍は、日本の陸軍でなくして、世界の陸軍である、といふやうな重要な關係に、なつて來たのであるか
ら、今後は、餘程の考へを以て、經營して行かぬと、一大事にならう、と思ふ。俺は、我軍制上に就て、容易なら
ぬ危機が含まれて居る、といふ憂を、有つて居るのぢや。其意見は、豫て屢々話してあるが、今後ともに、君
のやうな、少壯の軍將に依つて、大いに改革をして、貰はなければ困るのぢや。それに就て、茲に意見書を、認め
て來たから、見て置いて呉れ』

『ハッ、豫て閣下の御意見は、屢々、伺ふて居りまするし、此御書面は、確に拜見いたしまする』

『併し、田中、他人に見せては、いかぬぞ。君が、他人に見せる時は、已に其議論を、實行して居る時で、なければ
ならぬ。何うか秘密に附して、置いて貰ひたい』

『委細、承知いたしました』

乃木は、ズツと立上つて、

『それぢや、是で別れる』

『ハイ』

田中も、等しく立上ると、乃木が、手を出したから、田中も、手を出した。それを、乃木は、グツと握つて、

『確り頼むぞ、宜いか』

と、ギユツと、締めた時には、握られた田中の手は、非常に痛かつた。それから、乃木は、歸りかけた。田中が、後から送つて、玄關へ出ると、又、引返して来て、田中の手を、グツと握つて、

『宜いか、頼むぞ』

と、言ふて歸つた。

御大葬の當時、靈柩が、宮城を離れると、それを合圖に、號砲を放つ事になつて居た。其砲聲を合圖に、乃木は切腹する事に極めて居たのだ。靈柩が、宮城を離れるのを合圖に、腹を切る、といふ事は、何ういふ故實から來たか、知らないが、兎に角、聞く所に依れば、長州藩に於て、藩主が死なれて、家臣が殉死する、といふ時には、藩主の靈柩が、城を離れるのを合圖に、腹を切るのが慣例になつて居た、といふ事であるから、乃木は、矢張り其例を追ふて、斯ういふ事に、極めたのであらう。

九月十三日の當日になると、豫てコンノート殿下の、接伴役を、申付られて居たが、それは、前晚に、辭表を捧呈して、此日は、自邸に引籠る事になつた。平生から、早起の人が、此朝は、四時頃から起きて、水浴を済ませ、夫婦等しく盛裝して、自動車に乗つて、参内した。是が、我皇居の見納め、といふ心持で、あつたのだらう。珍らしい事

には、夫人の静子が、薄化粧をして、而かも盛装して、乃木と、合乗で参内したのであるから、實に珍らしい事であった。恐らく、静子が、乃木家に嫁いでから、化粧をしたといふのは、此日が、初であつたらう。良人と合乗で、出掛けたといふことも、是が終り初物であつたらう、と思ふ。それから、邸へ、歸つて来て、寫眞屋を呼んで、夫婦列んで居る所の、寫眞を撮つたのは、最後の記念としたものに、違ひない。

一一

御大葬の當日、東京市中の商家は、悉く大戸を閉して、哀悼の意を表した。幾十萬の市民は、宮城の附近より、青山の霊場へ掛けて、押合ひへ合ひ、集つて来た。平生、此位の人が集れば、極めて混雑をするのであるが、此日は、安樂警視總監の、警戒の方針も、宜かつたか知れないが、市民、自から慚んだ、といふ點もあつて、唯一つの事故も起きずに、御大葬の事を終つた、といふのは、何よりの事であつた。

其晩の九時頃になつて、誰言ふとなく、乃木將軍夫妻が、殉死を遂げた、といふやうな風説が、傳つて来た。御大葬の式は、まだ終らないのであるが、此報を傳へ聞いた、市民は、悲愴の感に打たれて、高い聲を出して、話し合ふ者も無く、夜の更け行くに従つて、東京市内には、陰慘の氣が満ちて、風は死して、草も、木も、ソヨとの音を立てず、著者は、未だ嘗て、是程に壯嚴にして、且淋しい、一夜を過した事は無い。夜が明けると、乃木夫妻の殉死は、事實となつて現はれた。それからの市中、到る處の騒ぎは、實に一通りでなかつた。乃木邸の附近は、人の山を成す有様であつた。

當時の状況は、新聞に依て、詳しく傳へられ、又、書物となつて、著れても居るから、今は、之を贅することは無いが、兎に角、自殺の状況は、傳へて置く、必要がある。

乃木の死は、殉死といふ美しい名を以て、一切を片付けてしまつたが、若し、腹の切方が、粗末であつたならば、死其ものは美しくとも、切腹の作法の上から、矢張り、人の物笑ひは免れなかつたらう。然るに、乃木夫妻の、最期の状況は、實に堂々たるもので、悠揚として、少しも迫らず、今死ぬといふ場合に於て、生死の念が無く、從容として、死を見る歸するが如し、といふやうな、最期であつた。

乃木は、腹一文字に切つて、返す刀で、喉を貫いて、斃れて居たが、更に苦悶の體が無く、恰も眠れるが如き、死状であつた。武人の切腹としては、實に立派なものであつた。又夫人は、乃木の死の状を見て、然る後に、自刃したのであらうが、二度までも、突き損じて、三度目に、心臓を貫いて、斃れて居たのである。是も其間に、何等、苦痛の體が無く、要するに、夫婦共揃ふて、眠るやうに死んで居たのであるから、ただ畏敬するの外はない。如何に殉死でも、臟腑をさらけ出して、汚い死方して、居たのでは、崇敬の念も起きないが、今言ふやうな、眠れる如き、穩な最期であつた、といふに至つて、實に、其死は崇美を極めて居る。同時に、其覺悟の程も、思はれるのではないか。自刃した室の、東側の壁に添へて、小机を置き、其上に、明治天皇の御眞影を、奉安して、額の表面は、白布にて掩はれて居た。其前には、コツプに葡萄酒を献じ、其脇に、三葉の半紙に淨書した歌が載せてあつた。

うつし世を 神去りましゝ大君の みあと慕ひて 我はゆくなり

臣希典上

神あかり あかりましぬる 大君の みあととはるかに おろかみまつる

臣希典上

いでまして かへります日 の なしときく 今日のみゆきに あふそかなしき

希典妻静子 上

切實、純眞、而も人間を超越する清淨無垢の氣分が、此三首の歌に現れて居て、一誦、たゞ敬虔の念に打たれる。御眞影の前に献ぜられた葡萄酒は、當日の午後七時頃、夫人が、わざく階下から持行かれたものであつた、といふ事だ。

之を要するに、乃木の最期は、遺言狀に、書いてあつた、趣旨に基く最期である、と言ふの外は無いのであるが、

明治天皇陛下が、乃木の人格を、深く御信任遊ばされて、或は聯隊旗を失ふた、罪を咎めず、或は、殊更に拔擢して旅順攻圍軍の、指揮官を命ずるとか、其他、乃木に對する、御信任の厚かつた、といふ事が、事毎に現れて乃木は、感泣して居たのである。然るに、陛下の崩御に接したので、乃木は、身も世もあらず、悲痛の想ひに沈んだのである。殊には、自分の年齢も、既に老いて居るし、此先、長生をした所で、國家に御奉公する事が、充分に出来ない、といふ觀念もあつて、寧ろ、其御恩寵に、報い奉る爲に、此際、殉死を遂げよう、といふやうな考へになつて、此最期は遂げたのであらう。併し、遺言狀の中に、其事は一言も言ふてなく、唯聯隊旗を失ふた時から、死所を求めて居たが、今は其時であるから死ぬ、と過失の申譯のみ述べて、殉死を誇るやうな事が、書いてなかつた、といふところに乃木の美しい心が、現はれて居るのだ。

然るに、少しばかりの、本を讀んで、學問のある、といふのを、鼻の先に掛けた、二三の人が、理窟一片から、乃木の殉死に對して、彼是の批評を試みた、といふのは、甚だ無禮の至りであつて、斯やうな最期に就ては、假に議論がある、にしても深く慎んで、唯崇敬の念を以て、其死を迎へなければならぬものである。それが人の禮である。當時、世を擧げて、乃木の死に感激し、遂に神に迄祠られる事になつたのは、洵に美しい國民性の現れであつた。兎に角、乃木が、一代に與へた、感化の力は、非常なものであつた。其死が、平生の人格と伴つて、立派なものであつた、といふ丈けに、一種言ふべからざる印象を國民の胸の底に遺した事は確かである。

餘錄

著者が、昭和二年九月九日より、十三日まで、東京の放送局に於て、乃木將軍の傳を放送した際、故將軍の義甥にして、乃木家には、明治四十年以來、極めて親しく常に出入して居られた野瀬秀彦氏から、有益な御書狀を寄せられた。大將の墓石に關する事柄と、自刃の模様にも關する事に就て、詳細の御教示を賜れるものであるから非常に參考になる資料と信じ、茲に發表する事にした。

同じ放送の際に、石黒子爵よりも、懇切な御書面を送られたから、併せて掲げる事にする。子爵と、故將軍との關係は、普く知られて居るから、贅する迄もない。

明治天皇の侍從武官長たりし岡澤子爵令息、岡澤精一氏よりも、親切なる御書面に接したから、是れも紹介して置く。

此外にも、各方面から、澤山の書面を、寄せられてあるが、茲には、以上の三種だけ、掲げる事にした。これも有益な資料であつて、深く感謝の意を表する次第である。

野瀬秀彦氏の書面

拜啓、秋冷凌ぎ良く相成りました折柄、益々御元氣に御活動、殊に、御講演により、志氣を鼓舞し、國民思想を善導致されます段、邦家の爲誠に慶賀の至りに存じ上げます。

扱、未だ拜姿の榮を得て居りませんが、昨夜ラヂオの豫告により、本日から、故乃木大將に關する、放送御講演遊ばす事を承知いたしました。就ては、豫てより、何誰かのお力によりまして、大將の墓石に關する事情を、世に明かにして頂き、世間一部の誤解やら、思惑やらを一掃する事と、又『神靈の威徳』とでも申すべき事柄に就きまして、

講述して頂きたいと思つて居りましたので、其心情の切なる餘り、失禮を顧る暇も無く、茲に一書を差上げます。何卒御諒恕を願ひ上げます。

そこで先づ、私の身分柄を申上げます事が、禮でもあり、また本記述御取捨の御判断上、必要でもあると存じますので、大要を申述べます。私は、大將が第十一師團長時代（明治三十三年、四年）工兵少尉として、同師團長の隷下部隊たる工兵第十一大隊附として、其訓化に浴し、日露の役には、工兵第十一大隊の中隊長として、旅順攻圍軍に屬し陣中、其指揮に従ひ、明治三十九年春凱旋後、陸軍士官學校教官に轉じ、上京。翌年、媒介者がありまして、當時大將邸に世話を受けて居りました大將の姪（大將の實妹、小笠原きねの三女）を妻とする事に成り、乃木家と縁族關係を結び、爾後、日夜大將邸に出入し、大將夫妻の死後、其整理に任じましたやうな立場の者であります。工兵第十一大隊長として在勤中、病軀となり、大正十一年辭職、翌十二年四月、待命となり、引續き豫備役に編入せられたものです。在職中は凡そ生を我國に享くる者、誰れも我が國に報ゆるの心なかるべき』の勅語を信條として、部下を指導し、自らを律して來ました身が、病氣とは申しながら、全く何事も爲し得ず、徒食して居ります事、誠に恐懼慚愧の念に堪へず、閉居門を出でず、日々臥床したり、椅子に腰掛けたりして居る落武者で御座います。

さて本題に入りますが、青山のあの墓石は、大將が、明治四十四年の渡英前に、自ら青山北町一町目の石勝に命じて、造らせて置かれたものである事は、御承知の事と存じますが、大將の死後、石勝から、墓石の件に付、申出がありましたので、葬儀委員は固より、親族の者共も、初めて其事を知り、墓石を調べました所、裏面に『明治 年

月 日死』と刻んでありますので、之を大正の文字に改める事になり、大將が手記せられました種々の書き物から『大正元年九月十三日死』の十文字を探し、大體似寄つた文字を集め、寫眞術に依り、各文字の大きさを揃へて、右の『明治 年 月 日死』の左側へ、更に彫刻致させた次第であります。

世間では、あの墓石の形が普通でない爲め、大將が例の奇行からであると、或は、人の意表に出づるやうにした

ものであるとか、又は、例の質素を發揮したものであるとか申して居る様で、私も、屢々質問を受けますが、右様な解釋は、私としては、如何にも遺憾に思ふ事でありませう。又此問題に就て、大將に關する諸著述にも、説明してある事を聞きませんのが、残念でなりませんから、此度、御講演の御力を藉りたいと考へました次第であります。さり乍ら以下申上げます事も、私の考へてあつて、必ずしも、大將の心事に一致して居るとは、申上げませんが、若し、御共鳴下さいます點が御座いましたならば、何卒、世間の思惑を解くやう、御盡力下さいます事を懇願致します。

一、大將が、渡英前に、墓石を造る氣になられました事に就き、種々考へて見ますと、大將は、往年伊藤博文公がハルピンで横死せられた折、大變に、其死所を得られたといふ事を、羨ましがつて、くどく話された事を、思ひ起しまして、私は、大將が、遺英の歸途、露國に立寄り、ステツセル將軍を訪問せらるゝ筈なれば、『旅順の征服者』として、かの國人の敵愾心から、或は萬々一二も……と考へ付かれた點もあり、又、老體に長旅をする事なれば、或は途中にて……といふ様にも、考へられ、結果でもあらうか、と思ふので御座います。

二、さて、自分が途中で死にてもした場合には、遺族が、墓標を建てる事になるであらうが、さうなると、相當立派な墓石に、位階勳功爵等を、刻み込む事になるであらうと、考へ付かれたでせう。所が、左様な事を、仰々しく書き立てる事は、全く大將の素志でなく、又あの勳功や爵位は、大將の所謂『旅順で、陛下の赤子を、澤山に殺した結果』であつて、『凱歌今日幾人還』とまでに慚ぢられた大將としては、到底、之れを墓石に刻むに堪へなかつたらう、と思はれるのです。そこで遺族が、そんな事を刻まぬやうに、自分で『陸軍大將乃木希典之墓』とのみ刻んだものを作つて置かれた事と考へられます。

三、然らば、『陸軍大將』の肩書を何故刻まれたか、といふに、これは武人として、軍人の最高官なる大將といふ事は、當然望むべき事であつて、又大將となられたのは、旅順戦の最初であるから、必ずしも、勳功爵の如く、戦功によつて進められたものとも限らない譯でありますから、此『陸軍大將』だけは、大將も寧ろ喜んで刻まれた事て

あらう、と思ひます。

四、裏面の、月日の下に『死』といふ字を用ひられたのも、餘程、意の在る所と思ひます。即ち、遺族などが、勳功爵位を刻むと共に、『薨去』とても刻むやうな事があつてはならぬ、と思はれた故と想像されます。

五、更に、自然石を用ゐられた、といふに就ては、私も、種々に考究して居りましたが、古來、長州藩では、藩侯及び御一門の墓石には、立派な石を用ゆれども、士分の者は、自然石を用ふるのが、例になつて居るさうですから、大將も、祖先以來の例に従はれて、昔の藩士としての分際を守られたものと察せられます。敢て奇を好むとか、特に質素を旨とした譯でもないやうに、考へられます。青年時代に、藩主の御聲掛りて、明倫館に學びなど致された大將は、矢張り藩の士分として、死後にまで、其立場を明かにされたものと思ひます。現に、自分で、同じ墓地内に建てられた、二令息の墓石は、普通の花崗石を用ゐて居られますから、私は、大將が自然石を用ゐられた心持を考へます時、現代の思潮に對して、つくづく考へさせられる事があります。此點に就きましては、充分、お力入れ下さいます事をお願ひ致します。

次に、『神靈の威徳』とても、申すべき事柄を、申上げます。

一、大正十一年春、長府の乃木神社へ參拜致しました時、成瀬宮司から、聞いた事ですが、同社務所に備付けてあります芳名録に、或人(關東方面の某役場の吏員)が記名した上の欄外に『清き心を以て記す』と、特記してあつたさうです。そこで其理由を調査した所、其人は、役場の公金を使込んだ結果、朝鮮に高飛びをするため、下關まで來たのであるが、聯絡船の出帆までに時間があつたので、自動車で長府見物に廻つて、乃木神社に參拜し、その禮拜中に、反省悔悟したものと見え、芳名録には、右様に記し、其足ですぐ下關から汽車で引返して、自首して出た者である、といふ事です。

二、他の一つは、市外千駄谷町字千駄谷に在住の高橋虎太なる人の友人から、聞いた話ですが、或時、高橋氏方

に賊が入つたのですが、盗み行かんとした衣類其他の貴重品を、一包みにした儘、床の前に置き、床の上に、乃木大將の像を安置して、賊は何も持たずに去つたといふ事です。翌朝になつて、家人がそれを知り、賊の入つた事には驚いたが、大將の感化の偉大なるに、今更乍ら感じ入つたといふ事であります。其像といふのは、長谷川榮作(大將の甥で、帝展審査員)が彫刻したものを、前に申ししたる友人が、高橋氏へ世話をしたもので、高橋氏方では、立派な箱に入れ、打紐を掛け、違棚の上に置いてあつたものださうです。所で、賊は、巧く奥の間まで忍び込み、すつかり荷ごしらへをして、出掛けようとした時に、違棚を見ると、立派な箱が在るので、中を開けて見たら、乃木大將の像であつて、賊はその威徳に打たれ、良心に立歸つた結果、其像を床の間に備へ、品物も全部残して、出て行つたものらしい、といふ事でした。

以上二つの事柄を、申上げたいと存じ、此書面を差上ぐる次第であります。高橋氏に關して、尙、詳しき事は、同氏宅が、代々木驛の近くに在りますから、直接にお聞き質し下さいますれば好都合に存じます。

本日からの御講演が、如何なる仕組みであるやら、又如何なる意圖に基づけるかも知らずして、身勝手な思付の儘を申上げまして、甚だ恐入る次第で御座いますが、私は、大將死後の事に就きましても、それ／＼御講話下さいます事を希ひ居ります中にも、墓石の誤解に關しては、幾分なりとも、釋明を與へて下さる事を切望の餘りに、前後の考へもなく、右の通り、お聴きに入れた次第で御座います。甚だ無禮な致し方でもあり、又僭越な事でもありますが、何卒、私の存意を、お汲取りの程、幾重にも、お願ひ申上げます。尙、今回の御講演には限らず、何れの時でも宜敷う御座いますから、右の事柄に就きまして、御同感に思召す節が、御座いましたならば、お取上げ下さいますやう、切に／＼お願ひ申上げます。貴下が、御講演によりまして、正しく而も確かなる大將夫妻を、世間に御紹介下さいまする事に信頼して、右様のお願ひを申上ぐる次第で御座います。

誠に失禮な致し方である上、既に御承知である事かも知れませんが、管々しく愚見を申上げました僭越至極の點

は、くれぐれもお詫び申上げます。尙ほ本書は、口授代筆致させました上に、發送を急ぎまして、訂正等を致しませんので、定めしお讀みにくき事と存じますが、萬事御寛恕のほど、切に／＼お願ひ申上げます。思へば色々申上げたき事も、又お願ひ致したい事も御座いますが、今日は是れにて失禮致します。幸ひに、これが御縁となりまして、拜姿を得るやうな機會が御座いましたならば、有難く存する次第で御在います。時下、折角御自愛の程、祈り上げます。不備。

昭和二年九月九日

野瀬秀彦

伊藤痴遊殿

同 前

(前半略) 御講演に、蛇足を加へますやうで、恐入りますのみならず、充分御承知の事と存じますが、本日の御講演中、大将の切腹の模様就ての御切言、誠に有難く存じましたので、一應、私の實見を申上げまして、参考に供したいと思ひます。

一、御説明の通り、如何にも見事な切り方で、左脇腹から、右脇腹まで、眞一文字に、臍の下方を通つて、まるで赤い絹糸を引張つたやうに、細く浅く、切り込まれてありまして、右端で、上の方に掻き上げてありました。即ち、腹十文字といふ切り方で、お説の通り、如何にもする／＼と、落付いてやられたもので、切傷の上方下方には、ちよつちよつと、血が毛細管に滲み出して居るやうな様ですから、下手に切つて、腹がふくれたり杯するやうな、醜さは無く、少しも平生の腹部と、形は變つて居りませんでした。

尙申上げたい事は、左脇腹の、切初めの上方、一寸ばかりの所に、長さ一二寸ほど、切傷がしてあつた事です。これは、切り損つた杯と、云ふ人もあつたやうでしたが、私は、左様考へません。昔の切腹に就て聞いた話のうちに、刀

を腹に當る前に、切先を股で試すなどといふ事を、聞いて居りましたが、そんな意味で爲されたものではあるまいか。即ち、當日は、正装のズボンを穿つて居られました爲め、股で試す譯に行かず、腹部に於て試したものだと思はれます。兎に角、單に刀の切先を試す爲めにやつたものか、或は、斯くする事が、切腹の作法であるのか、私は、故實の事はよく存じませんが、いづれにせよ、大將の腹の切り方は、誠に美事であると、つくづく感じました。

頸動脈を切られる時には、カラーの前を外して居られました。後の中央ボタンは、ワイシャツに附いた儘でした爲め、切先がカラーの後を、美事に其中の約三分の二を、斜に切り割いて居るのを親しく實見致しまして、如何に確實に頸部を貫通してから、左右に刎ねられたかと、いふ事を、まざ／＼と感知した次第で御座いました。

二、夫人の方は、お説通り、三刀目を突入れられましたのですが、身體の重みを手傳はされたものと見え、端座して、前俯伏しとなり、刀の上に、のし掛かつて居られました。而も兩膝を、白木綿でくくり合せてありました。如何にも沈着に爲された事が判ります。又、疊の上の血が、くつきりと膝の形を印して居るのを見ましても、少しの悶え身動き等をせられなかつた事が、察せられました。只々感嘆するばかりで御座いました。

右、全く事實上に現はれたる儀に有之候。尙ほ發送を急ぎ候爲め、夜中の代筆、誤字訂正も仕らず、其邊切に御寛恕下され度候。

昭和二年九月十二日夜

伊藤 仁太郎 様

石黒忠恵子の書面

野瀬 秀彦

暑冷不恒候處、益御健全大賀候。さて先夜來、ラヂオにて、乃木將軍夫妻之事、御演述と相成候間、謹聽候處、いかによく御取調、年來親交有る老生さへ不知事まゝ有之、感佩いたし候。然る處、今宵御演相成候『埋木の花さく

身にはあらねともこまもろこしの春を待たるゝは、小生方へ差越候手紙に認置候うたに候。其返事に「埋木にさくは櫻の花ならて高麗もろこしの雪にそあるらむ」は、小生が遣しゝ手紙に書き遣しゝうたなる事は、別冊演述にて、御了知被下度候。是は、今宵之御演中に、少も相違之事等有之候は、爲知矣れ度しとの事故に、申進候。唯御参考之一にも相成候得ば仕合に候。此二首は、千家尊福君に爲見候處、乃木之分はよきうたなれども、貴君之分は、うたになり不甲と被甲、甚だ閉口いたし、笑候事に候。老生は、乃木將軍よりは兄き扱にされ居候事故に、貴君が斯調査され廣く世人に、眞相を傳へ被下るゝ厚情に對しては、親友之一人として、厚く敬意を表候。敬具。

昭和二年九月十三日夜

石 黒 忠 應

伊 藤 痴 遊 様

二白、別冊小包郵便にて差進候。其他乃木將軍に付ては、御話すべき事も多少有之候。

岡澤精一氏よりの書面

拜啓、殘暑まぎしく候處、愈御健祥、慶賀致し候。昨夜ラヂオにて、乃木將軍出征前後の御話拜聽仕り候。誠に感慨無量にて、往事を追懐し、夜半まで寢入らず、今朝離床後、直に一書を呈する次第に御座候。

亡父と將軍との歌の事に關し、精細的確なるに驚きと敬服に打たれ申し候。幸右將軍の歌の原本、手許に所持致しあり、御暇の節、一度御覽如何に御座候哉、御案内申上げ候。多少文句も有之、將軍の性格を能く顯し居り、幾分御參考に相成るべく哉と存せられ候。相成るべくは早き方宜しく、都合により他へ保管相頼み候やも圖られず、取敢ず右申上候。邦家のため、幸ひ御自愛祈上げ候。

九月十三日朝

岡 澤 精 一

伊 藤 痴 遊 殿